

FAIRY TAIL ~Those called clowns~

桜大好き野郎

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

前までフォレストで連載していたものをリメイクしていきたいと思えます。

相変わらずの駄作駄文、ぶっちゃけ何が書きたいんだ、と自問自答したい作品です。

それでも妄想がやめられない、書いていたいと思っている作品でもあります。

12/16

アンケート終了

沢山の投票ありがとうございました

結果に伴い、タグを変更

ヒロインはウエンディ↓ダブルヒロイン、ウエンディ、ミラジエーン

目次

イラスト集	1
序幕く楽園の塔編	
その男の名は	4
緋色の戦乙女	11
鉄の森	23
子守唄	38
悪魔	56
幽鬼の支配者	64
V S ジョゼ	76
終戦	85
チーム結成	96
束の間のバカンス	103
楽園の塔	110
V S 三羽鴉	119
v s . エルザ	127
終幕・楽園の塔	136
オリジナル編	
霧の谷	143
無貌	152
不思議の国	160
過去	181
現在	200
v s . フクロウ	215

エドラス	495
別世界	477
エドラス編	
別れ	454
混沌魔槍	443
マスターゼロ	431
影ノ都	417
蟲王	405
祈って願って	393
ジエラール	381
ニルヴァーナ	368
連合	354
ニルヴァーナ編	
ファンタジア	344
V.S. ラクサス	328
BOF	314
収穫祭	301
BOFT編	
終幕	290
吸血鬼	281
道化	271
戦血	264
肉食兎	248
死人花	235
v.s. グレイ	225

大魔闘演武 ⑧
大魔闘演武 ⑦
大魔闘演武 ⑥
大魔闘演武 ⑤
大魔闘演武 ④
大魔闘演武 ③
大魔闘演武 ②
大魔闘演武 ①

755 746 737 724 713 700 691 681

大魔闘演武編

天狼島 ⑩
天狼島 ⑨
天狼島 ⑧
天狼島 ⑦
天狼島 ⑥
天狼島 ⑤
天狼島 ④
天狼島 ③
天狼島 ②
天狼島 ①

665 657 644 632 621 609 599 587 576 569

天狼島編

姉弟妹
姉弟
大義
竜鎖砲
救出

561 550 538 523 511

イラスト集

AIイラストにて作成した主人公およびオリキャラです
文章と違ったり、違和感があったりしますが、そこはご容赦くださ
い

今後、増え次第追加していこうかなあと思っております

●主人公

本来黒目なのですが、何度試しても赤目に……………

けれど、雰囲気は似ているので採用しました

怪しい雰囲気は個人的にはお気に入り

●主人公道化師 ver.

何度試してもマスクを被ってくれない

けれど、軽薄な雰囲気がグッド

●オリジナル章のオリキャラ

何度か試行して一番まともだったのがこれ。

もう少し加虐的な笑みを浮かべて欲しかったのですが、可愛いし採
用！

●ニルヴァーナ編のオリキャラ

背景にムカデを置こうとしても認識してくれない……………

でも、想像とほぼ一緒なので採用！

●エドラスの主人公

なぜ……なぜスレンダー体型にならないっ!!? 何度やっても盛られる!!?

数ある中で一番スマートだったのがこれ
厳格なタイプがかわいくなつてしまった

●天狼島編でのオリキャラ

壮年を作ろうとするとなぜかおじいちゃんばかり。

これが一番想像に近かつたんです……っ!!?

もう少し皺が欲しい……っ!!?

イケおじが癖なんだ……っ!!

以下、文字数埋めの文書。読まなくても結構です

初めてA Iイラスト使用してみました。思いの外面白い。おすすめ
のサイトやアプリがあれば教えていただけると幸いです！

また、下の方にアンケートを用意しました。今年いっぱい試験的に
掲載して、不評であれば消してしまいます！

小説などの想像は人それぞれ好みがあると思いますので、消すこと
となつても構いません。個人的には楽しめましたので！

本作を見てくださる方々、お気に入りしてくださる方々、評価して
くださる方々

この場を借りてお礼を申し上げます。

初めは息抜き半分、止まらない妄想の勢い半分で始めた今作です

が、思いの外沢山の方々に見て頂けて嬉しいです。

未だ拙いところや誤字脱字、不明な文書とご迷惑多々かけるかと思
いますが、温かい目で御手くださると幸いです。

そのうち本編を進めながら短編などにも挑戦していきたいと思
います。その時はまたアンケートを取ろうかなあ……。リクエスト
でも構いません！是非ともお願いします！

長々と書きましたが、皆様のご期待に添える様、精進してまいりま
すので、これからもよろしくお願いいたします

序幕く楽園の塔編

その男の名は

誰かが言った

――奴は危険だ

――あいつは悪魔だ、化け物だ

――視線が合えば殺される

――対面すれば逃げられない

別の誰かが言った

――彼は優しい心の持ち主だ

――怪我の手当てをしてくれた

――畑仕事を手伝ってくれた

――少し変わっているがいい奴だ

ひとりの男に飛び交う噂。

両極端な意見の数々。

真偽不確かな憶測と推測。

総じて人は彼のことをこう呼ぶ。

道化

愉快犯であり、心優しき隣人であり、楽観者であり、どこか抜けたところのある彼を、人はそう呼んだ。

「カカツ！　なんで酷い字名あざななんだろう。　親しみと侮蔑が込められた、とても俺好みの字名だ」

「ああ、この作品をご覧の皆さん、どうもこんにちは。　ご紹介に預かり光栄、噂の道化さ。　さっそくだが、誤解しないでほしい点は2つ。　ひとつは俺は噂にあるほど大それた人間でもないし、悪人でもない。

この世界のどこにでもいる、ごく普通の魔導士ギルドの、ただのしが
ない魔導士さ」

「ふたつめだけど、なに、難しい話じゃないさ。少しばかりメタな発言
をしている俺だが、安心してほしい。こんなものは今回だけさ」

「これは作者の力量不足でね、こうでもしないと物語が始められない
らしいんだ。 やれやれ、困ったものだよ」

「まあ、今回ばかりの特別篇とでもとらえてくれ。 今後はない事を願
うしか、俺はできないけどね」

「さあ、長々と話してしまったが、物語を始めよう」

「これは悲劇でもあり、喜劇でもある。 ……なんて陳腐な言葉は並
べないさ」

「悲劇や喜劇なんて誰もが体験するものだし、特別視することでもな
い。 だからこれは君たちの世界とは違う、少し変わった世界でのお
話っただけさ」

「え？俺の名前はなんだって？ ……あー、そういえば名乗ってな
かったね」

「それでは舞台役者の如く、声高々に名乗らせてもらおう。俺の名
は――」



「オイ、酒だー！酒持ってこいー！」

とある村の酒場のひとつ。

個人経営にしては小さくもなく、また大して広くもない空間で数十
人の男たちがひしめき合いながら乱暴に酒を食らっていた。

彼らの風貌からは暴力の匂いが漂い、そしてそれは事実でもあつ
た。

彼らは近場の山を根城とする山賊の一味である。その山の周囲で
商人や旅人を襲い、それを日頃の糧としていた。

山から近いこの村は山賊たちが占領しており、生かされた戦う術を
持たない村人たちは山賊たちの横暴に耐えるしかない。

少ない金を集めて討伐依頼を出したものの、山賊の規模も大きくな
く、それも街から離れた場所にあるためか三ヶ月経った今でも依頼が
受理された様子はない。

村唯一の酒場から聞こえる山賊たちの笑い声に、村の人々はため息
を零す。

「オイ！酒が足んねーぞ！」

「は、はいいい！ただいま！」

「ガハハ！そーういやこの間の商人、覚えてるか？」

「覚えてるとも！ ションベン撒き散らしながら逃げ出したあいつだ
ろ！あれは笑えた！」

「無理もねーだろ！ 俺たちは最強の山賊だからな！」

口々に叫ぶ男たち。誰もが力を誇示し、そして血生臭い思い出を肴
にし、意気揚々と酒を飲む。

この村の酒は知る人ぞ知る特産物らしく、味も喉越しも最高だ。

山賊が村を占領した理由のひとつである。

その様子を満足気に眺める男。 他と比べて一回り大きい彼はこ
の山賊たちの頭領だ。 山賊稼業に手を染めて数年、はじめと比べれば
規模は大きくなった。

それに感慨深さはあるが、さらに規模を大きくするべきだと彼は考
える。 そしていずれはこの地域一帯を占めるほどの勢力を持ち、欲望
のままに生活する暮らしを夢見ている。

しかし、規模を大きくすればするほど、反乱が起きやすくなるのも
事実だ。 風体の割に慎重な彼はどうするべきか考え、そして思考を
放棄する。

今は楽しい宴会だ。 難しい事は明日に回そうと思い、酒瓶を煽
る。

上手い酒だ。 村を占領した甲斐があつたというものだ。 これで部
下たちも今まで以上に働いてくれるなら、尚良いものだ。

「カツカツカ！ いやあ、美味しいお酒だねえ。 これで肴も美味しけ
れば最高なんだけど、高望みしすぎかな」

楽しく、そして騒がしい空気の中、聞きなれない声が聞こえた。

喧騒の中だと言うのにはつきりと聞こえたその声に全員がそちらを向き、度肝を抜かす。

自分たちの輪の中に、突然知らない人間がいれば驚くものだ。声の主を中心に輪になるように周囲の人々が飛ばのく。

「だ、誰だ、てめえは！」

山賊の1人がそう問いかけるが、当の本人は知らん顔。気にする事なく酒を煽り、つまみに手を伸ばす。

それを咀嚼し終えると、ようやく口を開いた。

「ゴクン。………なに、名乗るほどの者じゃないさ。俺はただ道に迷って、楽しそうな雰囲気につられたしがない一般人だよ」

「嘘つけー！」

山賊だと知らないとはいえ、ガタイのいい男たちに囲まれて平然としている一般人などいるはずもない。

山賊たちから総ツツコミを受けるのも当たり前だ。

「そう言われてもねえ。………あー、つかぬ事を聞きたいんだけど、ここはなんて名前の村だい？」

「は？ー………ってとこだが」

「おや、律儀にありがとう。良かった、目的地に到着できたみたいだね」

それだけ言うとまた食事を再開する。

山賊たちが襲いかからないのは理解が追い付かないのもあるが、一番はその男から発せられる得体の知れない雰囲気だ。

暴力に身を置くからこそわかる、手を出したらヤバイという本能の警鐘。

しかし、ここで好き勝手されてはメンツが丸つぶれだ。緊張から唾を飲み込む頭領はゆっくりと男に近づいて観察する。

自身よりも低いとはいえ、一般的に見れば高身長にはいる背丈。黒髪は襟足をうなじで一括りにし、前髪の左を書き上げ右を垂らすという奇抜ともいえる髪型。年齢は十代後半か二十代前半といった辺りだろう。若くも見えるが、実年齢よりも老けているようにも見える。

黒い双眸は食事に向けられており、こちらを気にもしていない。

んん、と喉を鳴らしてみるが無反応。 それでも諦めずに喉を数回ならせばようやくやくこちらを向いた。

「何かな?」

「アンタ、ここが目的地だと言ったが、もしかして俺たちの仲間になるのが目的か?」

頭領の言葉にしばらく考える男。そして合点がいったかのようにああ!と声を漏らした。

「もしかして、俺がこの空気に動じてないからそう思ったのかい? 違う違う。むしろ俺は君たちの敵さ」

その言葉に全員が一斉に得物を構えようとする。

だが、身動きが取れないことがわかると驚愕の声を上げる。見れば足元から伸びた黒い縄が男たちを拘束していた。

一見細く、力づくでもがけば引きちぎれそうな縄だが、見た目に反していくらかがこうと千切れる様子も、解ける様子も見えない。

「なんだこりや!?!」

「魔法!?!」

「魔導士か!?!」

「その通り♪」

パチパチと手を鳴らしながら笑う男は満足したのか、そこらにあつたチラシの裏に何かを書く、近場にいた男の額に貼り付ける。

見れば「――村を占領した山賊たち」と書かれ、その下にはその魔導士が所属しているギルドの紋章が描かれていた。

「そのマーク……! フエアリーテイルか!?!」

「嘘だろ!?! あの問題児だらけのイカレギルド!?!」

「街のあちこちを破壊して回るっていう、あの頭おかしいところか!?!」

「カツカ!!? 否定できないのが辛いよねえ」

それはさておき、と戦々恐々とする山賊たちを他所に、男は床に手を添える。瞬間、床に魔法陣が展開され、それを覆い隠すように遅れて男の足元から闇が広がった。

「な、なんだこりや!?!」

「やべえ、殺される!!?」

「失礼な。殺しやしないよ。ただの転送魔法だつて。……誰も聞いてくれないのね」

男の声は山賊たちの悲鳴にかき消され、誰一人として聞いてはいない。

まあ、いいかと半ば諦め適当な椅子に座る。次第にずぶずぶと、まるで沼に飲み込まれていくかのように山賊たちの身体が沈み始めた。

転送先は男のギルドのある街の牢屋の中だ。そこならばスムーズに事を進めてくれるだろう。後は村長に話をつけて帰るだけである。

「オイ」

これからの算段を立てていると、山賊の頭領から呼び止められる。

「アンタ、名は？」

「言ったでしょ、名乗るほどの者じゃない」

「後生だ」

縄に縛られているとはいえ、そこは山賊たちを統べる頭領と言うべきか、威厳のようなものがある。

真つ直ぐな目で見つめる事数秒、諦めた男が仕方なしとばかりに名を名乗る。

「カイト。カイト・オールベルグ。道化なんて呼ばれてるよ」

「そうか……。いずれ脱獄したとき、真つ先に復讐してやる。覚えていろ」

ほうら、やっぱりこうなつたとため息を零す。この先自分はどれだけの人間に復讐されるのだろうか。

山賊たちが完全に飲み込まれると闇は瞬時にカイトの足元に消えていく。

静まり返つた酒場の中で、ギルドまでどうやって帰るか考える。

「……徒歩だね」

馬車で移動するよりも景色を見ながら歩く方が好みであるカイトはすぐさまその答えを出す。

カイトのギルドからこの村までの距離は徒歩1週間強といったと

ころ。本人からすれば苦ではない距離だ。

ちなみに、この依頼自体は三ヶ月前に受理しており、急がなくても大丈夫だろうと言った理由で同じように徒歩で移動している。

はつきり言えば依頼の受理から三ヶ月間、カイトは迷っていたのだ。ドのつくほどの方向音痴である。だが、本人は一切それを認めようとはせず、そしてまた同じように迷うと言う悪循環が出来上がっていた。

同じギルドのメンバーは「いい加減、馬車でもなんでも使え。頼むから徒歩での移動は考えるな」と毎度のこと釘を刺されているが、今回は大丈夫だという謎の自信が徒歩を優先させている。

その後、村長に報告を終えたカイトだが、案の定道に迷い、ギルドにたどり着いたのはそれからひと月後だったという。

彼の名はカイト。

フェアリーテイルの道化。

これは彼を主に置いた、ひとつの物語である。

緋色の戦乙女

ふと、目を覚ます。

寝ぼけ眼であたりを見回せば森の中。少し外れたところに整地されていない街道が見える。

上を見上げれば暖かな木漏れ日が、俺を優しく照らしてくれる。そこから覗く太陽が、昼を過ぎたことを教えてくれる。

どうやら寝ていたようだ。

凝り固まった身体をほぐすように背筋を伸ばすと、小気味のいい音がなつて全身に血が巡るのを感じる。そこでようやくよくなぜ寝ていたのかを思い出した。

道に迷い疲れ、天気もいいから昼寝でもしようと、そんなありふれた理由で眠つたのだった。

景色はいいとはいえ、歩き詰めはさすがに疲れた。一体いつになつたらギルドにつくのだろうか。久々に一杯やりたいものだ。

そんな事を考えていると、不意に街道のほうからガタガタと、重い荷物を運ぶ荷馬車の音が聞こえた。

見れば二頭の馬が巨大なツノのようなものを牽引している。業者の格好を見る限り、どうやら配達員のようなのだ。

巨大なツノには模様のようなものが彫られており、なんとも言えない悪趣味なアンティーク感を醸し出している。

質量を考えれば馬二頭で引けるはずもないが、軽量化の魔法でもかけられているのだろう。軽量できる限界はあれど、それであれば馬二頭で十分な重さなはず。

まあ、ツノの事などどうでもいい。問題はあの荷馬車に乗せてもらえるか、だ。といっても馬車は俺の目の前をすでに通りすぎているし、別に業者に断りを入れるつもりはない。無賃乗車するつもり満々である。

世の中バレなければ犯罪ではない、ではないが、少しばかり街へ連れて行ってもらっても罰は与えられまい。……まあ、バレたらつい

でとばかりに荷台に乗っている顔なじみに殺されるかもしれないが。しかし、これは僥倖。彼女についていけばギルドまで運んでくれるだろう。街の中でまで迷子にはなりたくないからね。それに、登場の演出にもなる。やはりここは派手にいこう。楽しさはなによりも優先されてしかるべきだ。

そうと決めた俺は足を数回ふみ鳴らすと、ドブンと音を立てて身体が影の中に沈み込む。後はこれで追いついて、影の中で待機しておけばいい。

シャドー・ドライブ
「影移動」

森の木々の影を転々として、馬車と影が重なった瞬間に潜り込む。さて、このまま運んでもらうとしよう。ついたら起こしてね、と聞こえるはずのない声を出して、俺はまた眠りにつくのであった。



フィオーレ王国の街のひとつであるマグノリア。

その街の一角に構えてある、ほかの家よりも一回り大きなギルドこそマグノリアを代表する魔導士ギルド、フェアリーテイルだ。

街の酒場としても知られているこのギルドは昼夜構わずどんちゃん騒ぎが繰り広げられており、その喧騒が止むことは少ない。

街の住人からは呆れ半分、慣れが半分といった感じで認められており、もはや苦情を出すことすらバカバカしいとまで言われている。

そんな愛され方をしているギルドだが、この日は珍しく喧騒が止んだ。

そのかわり、ずしいん、ずしいんと重たい足音だけが聞こえている。

その正体は身の丈を優に超えるツノを携えた、甲冑に身を包んだ女性だった。その細腕のどこにそんな力があるのか、手荷物を重たそうにするそぶりすら見せない。

彼女の名はエルザ・スカーレット。ギルドの上位実力者であり、フェアリーテイルの風紀員。一部では緋色の悪魔などとも言われている。

規律に反するものは鉄拳制裁、殴られたら10倍にして殴り返す、

ある意味暴力装置である。

「今戻った。マスターはおられるか？」

凜とした態度に相応しく、良く通る声だ。

ギルドの受付嬢、ミラジエーンからその不在を聴くと、問題を起こすギルドメンバーたちに注意を促す。

先日ギルドに加入したルーシイも、いつもの自由奔放さはどこにいったのかと戸惑うばかりだ。

「ところでナツとグレイはいるか？」

「あい」

エルザの質問に羽根の生えた青い猫、ハッピーが指を指す。

ギルドの仲の悪いランキングトップのナツとグレイ。些細なことで殴り合いの喧嘩に発展する2人だが、エルザの前では借りてきた猫に等しい。

「や……やあ、エルザ……。オ、オレたち今日も仲良し……よく……

や、やってるぜい」

「あゝい」

ガッツリと肩を組んで握手を交わす2人。表情が強張り、恐怖から身体が震え、身体中から冷や汗が流れているが、エルザの目には仲良くしているように見えるのだろう。よしよし、とばかりに頷く。

「そうか。親友なら時には喧嘩もするだろう。しかし私は、そうやって仲良くしてるところを見るのが好きだぞ」

「あ、いや……いつも言っただけ、親友って訳じゃ……」

「あい」

「こんなナツ見たことないわっ!!?!!?」

多少なりとも付き合いのあるルーシイだ。自由奔放、大胆不敵といったイメージの強いナツだったが、この日を境にイメージが変わったことは言うまでもない。

「カッカッカ!!? いやはや、毎度毎度のことだけど笑えるねえ」

不意にパチパチと、この場に不釣り合いな拍手と笑い声がギルドに響く。音の発生源を辿れば、エルザの持ってきたツノの上に誰かが座っている。初対面のルーシイはそれが誰なのか知らないが、他の

面々が笑顔で迎え入れてくれた。

「おお！カイトじゃねえか！」

「いつの間に帰ってきたんだよ！」

「今度はどこまで迷ったんだ!？」

「カッカツカ、歓迎ありがとう♪」

「カイトオオオオ!!？」

次の瞬間、グレイと肩を組んでいたはずのナツが拳に炎をまとい突っ込んでいた。

「勝負だあ!!？」

「元気だねえ、ナツ。けど、やくだよ♪」

そのままナツの拳が直撃するかと思いきや、瞬きの間にカイトの姿が消える。大きく空振ったナツはバランスを崩し、机や椅子を巻き込んで派手に倒れた。当然、巻き込まれた人は多々おり、何をしてんだ、やんのかこらとばかりに喧嘩に発展しているが、当の本人は知らぬ存ぜぬ。

消えたはずのカイトはいつの間にかカウンターに座っており、ミラジエーンと談笑を交わしている。

「ただいま、ミラちゃん♪」

「おかえり。今回はどこまで行っただの？」

「さあ？ 気づけば山の上だったり湖のほとりだったりで場所はわからないよ」

「相変わらずの方向音痴ね」

「ああ、でも王都には行っただよ。あそこはやっぱ賑やかだね♪」

「目的地と反対方向よ、それ」

「それ、方向音痴で済むんですか？てかミラさん、この人は？」

ルーシイに指摘されて紹介がまだだった事を思い出す。

「そういえばルーシイは初めてだったわね。この人はカイト、基本迷ってるか、厨房で料理してるわ」

「ミラちゃん、もう少しまともな紹介はなかったのかい？ まあ、よろしく。一応このギルドの魔導士のカイトだよ♪」

「こちらはルーシイ。この間加入したばかりだけど、すごいだよ。

傭兵ギルド南の狼の2人とゴリラメイドを片手で倒しちゃうんだから」

「わお、見た目によらずパワフルだね♪」

「それ全部ナツだし……事実と異なってるし……」

そんなルーシイの反論も、ギルドの喧騒の中に消えていく。

見ればナツに巻き込まれていない、関係のない人たちまで巻き込んだの大騒ぎにまで発展していた。

どうしたものかため息を吐くエルザが、責めるような目でカイトを見た。

「お前のせいだぞ、カイト」

「相変わらず手厳しいね、エルザ。元凶はナツだよ？」

「ハッピー」

「あい！カイトが悪いと思います」

「即答は悲しいよ、ハッピー。いや、わかるけどさ。絶対殴ってでも俺が悪いって言わす気満々だったもんね。……あー、わかったわかった。ちゃんと止めるから。止めるから拳を握るのはやめようね。

甲冑で殴られるのは痛いんだよ、知ってた？」

まったく怖い怖い、とぼやくと喉を鳴らす。そして、喧騒の中でも響くように声を張り上げた。

「みんなー、それ以上暴れるとエルザの制裁が始まるよー！」

たった一言。何の変哲もない一言。しかし、その効果は凄まじかった。

喧嘩していた連中はバツが悪いとばかりに手を止め、それぞれいつも通りの日常に戻る。

魔法でも使ったのか、と疑いたくなるような光景だが、これも日常茶飯事である。どうだ、とばかりに自慢げな表情のカイトに鉄拳が落とされるのも、これまた同じく日常である。

「痛いよエルザ」

「人をダシに使うな」

「だって事実……オツケー、黙っておくよ。だから殴らなくい、拳は引っ込めよ」

降参降参と零しながら両手をあげるカイト。あいも変わらない様子にため息を零し、そう言えばと用事を思い出す。

「カイト、明日は暇か？」

「ん？ 厨房でお仕事しようと思ってたけど」

「ならちようどいい。それに 그레이 にナツ、お前たちに頼みたいことがある。仕事先でやつかいな話を耳にしてな。本来ならマスターの判断を仰ぐトコなんだが、早期解決が望ましいと私は判断した。力を貸してくれるな？」

「え!?？」

「はい!?？」

「わお。大変だね、2人とも。あ、ミラちゃん、手伝うよ」

1人鉄拳制裁を食らうも、ギルドの中は驚きに満ちる。今までほとんどソロで活動していたエルザが人手を募るのだ。本人の実力を以ってしてもこなせない、難易度の高い任務であることが予想される。

「これってフェアリーテイル最強チームかも……」

と零すミラ。

毎回、必ずと言っていいほど町の一部を破壊するナツ。すぐに服を脱ぐ 그레이。怒ると見境ないエルザ。それを煽るカイト。

間違いなく最強だろう。被害額的な意味で、だが。

ナツと 그레이 は嫌だ嫌だと嘆いているが、行かなければ後が怖い。渋々とそれを承諾していた。

そして明朝。

マグノリア駅の一角ではナツと 그레이 が早速とばかりに喧嘩していた。

「なんでエルザみてーなバケモンがオレたちの力借りてえんだよ」

「知らねえよ。つーか、助けならオレ一人で十分なんだよ」

「じゃあオマエ行けよっ!!? オレは行きたくねえ!!?」

「じゃあ来んなよ!!? 後でエルザに殺されちまえ!!?」

「迷惑だからやめなさいっ!!?!!?」

周囲を巻き込む喧嘩にいてもたってもいられず2人の間に割って

入るルーシイ。

ミラに仲を取り持つてくれと頼まれたのはいいが、とんだ貧乏くじだと思ってしまう。仲を取り持つならカイトがいいのではないかと提案してみたが、むしろそれを煽ると言われ納得してしまったのは内緒である。

意識を少し外に向けているとまた喧嘩を始めようとするナツとグレイ。

「あ!!? エルザさん!!?」

「今日も仲良くいつてみよー」

「あいさー」

にらみ合いから瞬時に肩を組んで誤魔化す2人。

2人にとつてエルザはどんな存在なんだ、と思いつつもあまりの変わりように腹を抱えて笑った。

そうこうしているうちに件のエルザが姿を現した。

「待たせたな」

「荷物多っ!!?」

開口一番、ルーシイのツツコミが飛ぶ。

エルザが引つ張る台車の上にはこれでもかとはかりに山積みにしたバツグの山。人よりも頭一つ分高いバツグの山を軽々しく引いているところを見ると、あながち化け物という評価は外れてないんじゃないかと思ってしまう。

「これで全員だな」

「いや、カイトがいねえぞ」

「つーか、あいつ来れるのか?」

「安心しろ。荷物に括り付けてある」

エルザが指差す先、荷物の後ろを見るとカイトがいた。それも縄で縛られた状態で。

この状態のまま引きずられたのか、身体中既に傷だらけだが、当の本人は呑気なものでぐっすりと眠っている。

「扱い雑すぎない!?」 ちよつと、大丈夫なの!?」

「んあ…………。おや、おはよう、ルーシイ」

「呑気すぎない!!?今解いてあげるから!!?」

「カツカツカ、優しいねえ。ギルドじゃ恒例だからスルーされてるのにねえ。…………ぐえ!!?」

縄を解こうとするルーシイだが、あろうかとか縄は余計に絡まりカイトの首を締めていた。それもかなりキツめに。

これは予想外だったらしく、手足をばたつかせて助けを求めるカイト。

「エグいな、ルーシイ。流石にオレたちもそこまでしねえぞ」

「ほぼ初対面の相手の首を締めるとか……」

「ルーシイ、こわーい」

「見てないで助けなさいよ!!?」

ナツ、グレイ、ハッピーが引いている間にも顔色が青から白へと変わっていくカイト。ただ一人、エルザは「カイトをあそこまで追い詰めるとは…………」などと呑気なことを考えながら一人戦慄していた。

閑話休題

「改めてはじめまして。ルーシイです。ミラさんに言われてお手伝いに来ました」

駅で一悶着あったが、列車に乗った一同は改めて自己紹介をする。特にエルザは初見なので、礼儀正しく頭を伏せる。

ちなみに席順は右にカイト、エルザ。左にナツ、グレイ、ルーシイが対面する形である。ハッピーはルーシイの膝の上だ。

「エルザだ。君のことは噂で聞いている。なんでも傭兵ゴリラを片手で2人も倒したとか」

「尾ひれつきすぎ……………」

「カツカツカ! 噂なんてそんなものだよ♪ それより、ナツ。大丈夫かい?」

「お…………おおう」

普段やかましい程に元気なナツだが、乗り物になると喋れなくなる

ほど酔うという体質を持っている。列車もダメなら馬車もダメ、とにかく乗り物は全てアウトだ。

グレイがうぜー、と喧嘩を売っているがそれを買おう気力さえない。見兼ねたエルザがナツを隣に座らせて窓際に座らせる。手のかかるおとうとを見るような、そんな慈愛に満ちた視線から刹那、容赦なく腹を殴って気絶させた。

痛みを感じさせないだけ慈悲があるとは本人談。やられた本人はたまったものではないが。

その姿を見てルーシイはもちろん、グレイまでエルザの恐ろしさを再認識したのはいうまでもない。

「そ、それより、エルザさんの魔法ってどんな魔法なんですか？」

「そう畏まらなくていい。エルザと呼んでくれ」

「エルザの魔法はキレイなんだよ！血がいつぱい舞って！」

話題を切り替えようとしたが、どうやら失敗したらしい。ハッピーのお陰で血生臭くなってしまった。

「私はグレイの方がキレイだと思うが」

「そうかあ？」

渋々、といった感じで左手を右手の上で握るグレイ。拳を開けばそこには氷でできた妖精の尻尾の紋章が浮かんでいた。

「わあっ!!?」

「顔に似合わずキザだよねえ」

「るせえ」

「じゃあ、カイトさんは？」

「こそばゆいからさん付はやめて、ルーシイ。俺の魔法はねえ………んー」

「カイトの魔法か……」

「あー……」

途端に口をふさぐ3人。

もしかして触れてはいけなかったのか、とルーシイが慌て始めたところでしょうか。3人が口を開いた。

「説明が難しいね♪」

「基本、影を使うな」

「トラウマに残るな」

「どんな魔法なの!?!?」

「まあ、なんつーか………戦ったらひたすらアウトレンジで攻められて、こっちの攻撃は当たらねえ」

「その前に距離を詰めればいいだろう?」

「それができるのはエルザだけだ」

「いや、アレは恐怖だよ。あんな悪魔も裸足で逃げるような怖い顔で迫られたら誰だつて戦意喪失するよ」

余計な一言でカイトが殴られる。それも顔面を。

本人は痛いの一言で済ましているが、普通は鎧で殴られればそれだけで済むはずがない。それも魔法なのか、とルーシイが訝しんだところでグレイが今回の依頼内容の説明を求める。

今回の依頼はどうやら闇ギルドロー非公認、又は解散命令を無視して活動するギルドローが起因しているらしい。

エルザがギルドに帰宅する途中、立ち寄った酒場で聞こえた「ララバイ」、そして「封印」、アイゼンヴァルト「エリゴール」という3つの単語。

エリゴールといえば闇ギルド「鉄の森」のエースであり、暗殺系の依頼を好んで遂行することから死神の異名で呼ばれている者だ。

そんな単語が出て何も起こらないわけがない。

その場で話をしていた連中を捉えて仕舞えばよかったが、エリゴールという名に気づいたのはかなり後。下手をすれば一ギルド丸々相手にしなければならぬ。

今回はその応援が依頼、というわけだ。

「で、最後に見たこのオニバスで聞き込み、か」

「そうだ」

「帰りたい……」

駅を降りた一同。ルーシイが未練がましく列車を眺めているが、それはさておき、依頼の開始だというところで何かを思い出したようにルーシイがあっ!と声を上げた。

「ナツ、列車の中に忘れて来ちゃった……」

「なに!?!?」

「つーか、カイトもいねえぞ!?!?」

「あい。カイトなら列車の中でトイレに行ってくるって言ってそれっきりだよ」

「また迷子かよ!!?!?」

「列車の中で!?!?」

「そういう訳だ!!?!? 列車を止める!!?!?」

「どういう訳!?!?」

エルザの無茶ぶりに困惑する駅員。頭をかかえるグレイに突然の事についていけないルーシィ。なかなか混沌とした状況である。

唯一の頼みの綱もハッピーだけである。青い喋るネコは珍しいとはいえ、この場では役に立たない。

結局、魔導四輪ローラー使用者の魔力をエネルギーに運転する車のようなものローラーをレンタルし列車を追う事となるという、出だしから波乱に揉まれる一同であった。



「ふう、間に合った間に合った」

便座に座りながら一息ついて用を済ますカイト。

その外では今まさに鉄の森による列車の乗っ取りが行われているが、本人の知るよしもない。

今の今までトイレトイレと列車の中を彷徨っていた身としては些細な事だ。

用を足し、奇跡的に元の席に戻るとあらまびつくり。

壁に大穴が開いているやら、知らない人間が周囲を占拠しているやら、両耳を抑えて悶絶する人がいるやら。どうやら席を間違えたらしいと踵を返そうにも、その場にいた全員の視線はカイトに注がれていた。

「ああん? 誰だ、テメエ」

「カツカツカ。いやあ、席を間違えちゃった、ただの一般人さ。さあ、俺は俺の席に戻らせてもらおうよ」

「エリゴールさん！こいつ、妖精の尻尾の一匹だ！」

誤魔化そうにも、どうやら紋章を見られてしまったらしい。

エリゴールと呼ばれた男性がニヤリと笑うと周囲の部下にカイトを拘束するように命じる。ホールドアップしていたカイトは無抵抗のまま周囲の人間に押しつぶされるように捕らえられた。

「どうします、エリゴールさん」

「決まってる。オレたちの計画を邪魔しようとするハエ共は駆除しなけりやならねえ」

邪悪な笑みを深め、先端に髑髏が貼られた木製の笛を肩に置きながら命令する。

「罨れ。殺しはするなよ」

待ってました、とばかりに取り押さえられたカイトへ暴力が振るわれる。

殴り、蹴り、魔法、刃物なんでもござれの暴力の嵐。

数分後には小さなうめき声を漏らす、赤黒い肉塊一步手前の物体がそこに転がっていた。

「うう……エリ、ゴール……ぎ」

「気安くオレの名を呼ぶな。ハエが」

エリゴールの蹴りがとどめとなり、うめき声が止む。死んだか？と疑ったが、浅く呼吸しているようだ。

これはメッセンジャーだ。この先にあるクローバー駅で見せしめとして殺さなければならぬ。それまで生きて欲しいものだ。

まあ、死んだら死んだで構わないが。

冷徹なことを考えながらこれから行われる自らの計画の成功を夢見て、エリゴールは手の中で笛を転がすのであった。

鉄の森

ナツ置いてけぼり事件からややあつて、無事合流を果たした一同は鉄の森に占領されたオシバナ駅へと急ぐ。

交通の分岐点となつているオシバナの街は大きく、そして人も多い。もちろんトラブルもその分多々あり、他の街と比べると警備隊やテロ対策による王国兵隊の数も多い。

無論、駅が占領されたとなればこの痴れ者どもめと言わんばかりの勢いで鎮圧を図つた。

しかし、兵隊に所属するほとんどの人間は魔法を使えない者ばかりだ。

魔法相手に槍や剣などは意味をなさず、突入した全員が返り討ちにあつていた。

死んではいけない、だが動けないほどの重傷を負わされ、痛みにうめく声が廊下内に響く様は見ている気分がいいものではない。

見張りの兵を説得という名の肉体言語で通過した一同は怒りに身を震わせる。

そして駅のホームに出た瞬間、元凶である鉄の森の全員がそこで出迎えてくれた。広いホームの一角を埋めつくさんばかりの人数は圧巻であり、彼我の差は大きい。

ちなみに問題のナツは列車、魔導四輪車、人酔いの3コンボでグロッキーとなつており、見つからないカイトは時間がないと捨て置かれていた。

「やはり来たな、妖精の尻尾。待ってたぜえ」

「貴様がエリゴールだな」

巨大な鎌を肩に、エルザからの視線をものともしないエリゴール。その余裕の中には紛れもない自信が裏付けられていた。

「貴様らの目的は何だ？ 返答次第ではただでは済まさんぞ」

「遊びてえんだよ。仕事も無エし、ヒマなモンですよ」

茶化すような返答に、鉄の森の面々が高笑いする。

真面目なエルザには不快だったらしく、奥歯を噛み締めてエリゴールを睨む。早く話せ、と。

「まだわかんねえのか？ 駅には何がある？」

ふわりと、足元から風を発生させたエリゴールが飛ぶ。

エリゴールからすれば最大限のヒントだが、何を言いたいのかピンと来た様子はない。

痺れを切らしたエリゴールがコツンと、駅の中の放送機を小突いた。

「ララバイを放送するつもりか!!?!?!」

「ええ?!?!」

「なんだと?!?!」

「ふははははははっ!!?!?!」

ララバイとはエリゴールの持つ髑髏の掘られた笛の事だ。

笛の音を聞けばそのものに死を齎らす、禁止とされている魔法。

それをエリゴールは手に入れていた。

「この駅の周辺には何百、何千もの野次馬どもが集まっている。いや、音量を上げれば町中に響くかな」

「大量無差別殺人だ?!?!」

「これは粛清なのだ。権利を奪われた者の存在を知らずに、権利を掲げ生活を保全している愚かな者どもへのな。この不公平な世界を知らずに生きるのは罪だ。よって死神が罰を与えに来た。死という名の罰をな!!?!」

「そんなことしたって、権利は戻ってこないのよっ!!?!」

「ここまで来たら欲しいのは権利じゃない、権力だ。権力があれば全ての過去を流し、未来を支配することだってできる」

「アンタバツカじゃないのっ!!?!」

「残念だったな、ハエども。闇の時代を見ることなく死んじまうとは!!?!?!?!」

鉄の森でカゲヤマと呼ばれている男が地面に手をつくすと、足元の影が伸び、前に出ていたエルザとグレイの間を抜けてルーシイの手前で

立体的な腕となる。

人の身よりも大きなその腕は、やすやすと人一人を殺める殺傷能力を秘めている。

「きやあ!!？」

「やつぱりオマエかああああ!!？」

間一髪、復活を果たしたナツが炎を纏った拳でその腕を両断する。

列車の中では気分が悪かったために一方的に殴られたが、今度は地上戦だ。先程の借りは倍にして返すつもりである。

「おっと、邪魔するんならこつちにも考えがあるぜ」

エリゴールの指示に従い、鉄の森の一部が縦に割れる。その先にいたのはカイトだ。全身を拘束され、これでもかという程に痛めつけられた、痛々しい姿をしたカイトである。

あまりの出来事に息を飲む一同。

人質作戦は効果あり、とエリゴールは笑みを深める。

「こいつを無事返してほしけりや、その場でじっとしておくことだ。さもねえと、こいつの首が飛ぶぞ？」

両サイドから構えられた剣。指示に従わなければ間違いなくその刃は振り下ろされるだろう。

動揺のためか互いの顔を見ながら動こうとしないエルザたち。抵抗の意思はないようだ。

「はっ、いい判断だ。おい、テメエら。そいつらやつちまえ」

「いいんですか、エリゴールさん？」

「へへ、女2人は美人だな」

「やつちまう前に楽しむか？」

「男はいらん」

「ああ、いらん」

口々に下卑た会話が繰り広げられ、1人、また1人とエルザたちに徐々に近づいていく。

そして互いの距離が当初の半分になったあたりでエルザが待ったをかけた。

「待て、ひとつ聴きたい」

「ああ？　なんだ、命乞いか？」

「違う。その人質は誰だ？」

何を言っているかと鼻で笑おうとした。

これはブラフだと切り捨てようとした。

しかし、エルザの本気で心当たりがないという顔に動揺し、1人が人質を確認する。そして、驚愕のあまり叫んだ。

「なっ？？　なあっ？？？」

つられるように全員がそちらを向いて確認すれば、そこにカイトの姿はなかった。

代わりに、ボコボコにされ拘束されたギルドの下っ端と身代わりとばかりに入れ替わっている。

「な、なにが……」

これにはエリゴールも動揺を隠せない。

先程まではたしかにハエの一匹を捉えていたはずだ。

しかし、暴行を受け縛られているのは間違いなく下っ端の1人だ。誰もそれを疑わず、誰もが本物だと認識していたはずだ。

騒動の原因がわかったのか、エルザはため息を零すと手の中に木刀をひとつ呼び出す。

そのまま大きく振りかぶって投擲すると、一団の中にいた1人へと直撃した。フードを目深に被った男は「うげっ」と間抜けな声を上げると痛みにも悶絶する。

「いつまで遊んでいる。暇はないぞ」

「カッカッカ。やだなあ、俺は鉄の森の一員のー」

「次は剣でいくぞ？」

「はいはい。わかったからそれはやめてね」

やれやれ、とばかりにフードを取れば、そこに拘束していたはずのカイトがいた。

周りにいた鉄の森は突然のこととあまりの不気味さに距離を置き、味方であるはずのルーシィも拘束された男とカイトを交互に見て驚きを隠せないでいる。

そんな事は関係ないとばかりにまるでモーゼの海渡りのように左

右に割れる人波を抜け、悠々とエルザたちと合流を果たすカイト。

その性格を知っているメンバーからすれば呆れてため息しか出てこない。

「また遊んでたのか？ エルフマンじゃねーけど、男なら正々堂々戦えよ」

「手厳しいね、グレイ。 適材適所って言葉があるでしょ？」

「間違っても遊びの免罪符にはならんがな」

「オツケー。 今度からは控えるよ。 だからその剣は仕舞おうか。 斬られると痛いんだよ、知ってた？」

「次は俺と勝負しろよ!!？」

「君はほんとそればかりだねえ」

「ちよ、なんでそんなのんびりなの!?!? アレみなさいよ!!?!」

ルーシイに指摘されて見てみれば、唾然としていた鉄の森も状況を理解できたのか、口々にカイトに罵声を浴びせる。

中指を立てるのは当たり前、放送禁止用語待った無しの言葉も当然、業火のように燃え上がる怒りも必然的である。

しかし、そんなものは気にしないと笑い、更に煽るような仕草をする当の本人である。 まったくもって救いようがない。

「カッカッカ。 さてきて、みんなに問題を出そう。 彼らの目的は一体なんでしようか？」

満足したのか、ひとしきり笑いながら煽った後、話題を切り替えるかのようにカイトがそう切り出す。

「聞いてなかったのか？ ここではラバイを放送するつもりなんだろう？」

「それは彼らの言だろう、グレイ。 まあ、彼らが権力を欲しがっているのは間違いないだろうけどね。 でも、尚更、こんな事して本当に権力が手に入るのかな？」

そう言われて確かに、と頭を悩ます一同。 ちなみに寝起きのナツはついていけないようで質問の冒頭から頭を悩ませていた。

チツ、と舌打ちを漏らすエリゴール。

ふわり、と浮かび上がると「てめえら、そいつら始末しておけ」と

だけ残してその場から飛び去ってしまった。

「笛を吹きに行く気か!!? ナツ!!? グレイ!!? 2人で奴を追うんだ!!?」

「むむ」

「おまえたち2人が力を合わせれば、エリゴールにだって負けるはずがない」

「むむ……………」

「ここは私とルーシイでなんとかする」

「なんとかって、あの数を女子2人で!!?」

「あれ、俺頭数に入れられてないの?」

「エリゴールにララバイを使わせるわけにはいかない……………聴いているのか???!!?!!?」

「も、もちろん!!?」

「行け!!?」

「あいさー!!?」

納得がいかないと睨み合っていた2人だが、エルザには逆らえない。仲良く肩を組むとエリゴールが逃げた方向へと走っていった。

「二人逃げた」

「エリゴールさんを追う気か?」

「任せな、オレが仕留めてくる!!?」

「こつちも!!?あの桜頭だけは許せねえ!!?!!?」

一人は5指につけた指輪から伸びる帯を駆使して、一人は影に潜って2人を追う。

それを差し引いても鉄の森の数の有利は動かない。

普通であれば袋にされるのがオチだろう。しかし、エルザたちに怯えはない。この程度の山場はいくつも超えてきた。

「先陣は私が切る。カイト、残りは任せたぞ」

「ああ、よかった。忘れられてなかったんだね。オーライオーライ、いつも通りやればいいんだね」

「いくぞ」

それだけ言うと手の中に剣を呼び出して敵陣へと前進する。魔法

で武器を呼び出すことは珍しくもなく、探せばごまんというオーソドックスな魔法だ。

現に鉄の森の中にも魔法剣士はいるらしく、自信満々に応戦しようと次々に武器を取り出している。

しかし、エルザには遠く及ばない。敵陣に突っ込むエルザはまるで弾丸。驚異的なスピードで突っ込むと縦横無尽に的を切りつける。

敵が距離を置こうとも、その手に持つ剣をしまい槍に持ち替えることだ対応してしまう。

槍を持ったかと思えば次は双剣、気づけば斧へと次々に状況に応じた武器へと変化していった。

「カッカッカ、相変わらずエゲツない換装の速さだねえ」

「換装？」

「おや、ルーシイは魔法剣の原理を知らないのかい？ ハッピーでも知ってるのにな？」

「ウソ!?？」

「あい！ 魔法剣はルーシイの星霊の似てて、別空間にストックされてる武器を呼び出すっていう原理なんだ。その武器を持ち換えることを換装っていうんだ」

「説明ありがとう、ハッピー。いい子にはお魚をあげよう」

「サカナー!!？」

戦闘中だというのにどこかのんびりとした2人。どこからか取り出した魚を嬉しそうに頬張るハッピー。間違いなく場違いである。

ルーシイは知識でネコハッピーに負けていたのがショックらしく、ツツコむ余裕がないようだ。

「まあ、でも、エルザの凄いとこはここからだよ♪」

カイトの言葉通り、数の多さに戯れたエルザの鎧がひとりでに剥がれたいく。

「魔法剣士は通常、武器を換装しながら戦うけど、エルザは自分の能力を高める魔法の鎧にも換装しながら戦うんだよ。それがエルザの魔

法ザ・ナイト 騎士」

新たに現れたエルザの鎧は背中に2対の羽を生やした白銀の鎧。

背後にはいくつかの魔法剣が指示を待つように浮かんでいる。

「舞え、剣たちよ。『循環の剣』?」

サークルソード

瞬きの間に剣が煌めき、周囲を回転しながら敵を斬りつける。エルザに見惚れていた者たちは例外なく床へと伏すこととなった。

「ま、間違いねえっ!!? コイツあ妖精の尻尾最強の女、妖精女王のエルザだっ!!?」

テイターニア

「マジか、アレが妖精のバケモン女か!!?」

「ひとりで山みてえなバケモン倒したっていう、あの!!?」

「ちくしょう、だったらあっちだ!!?」

エルザには敵わないと見たのか、ルーシイたちへと標的を変えた残りはすぐさま行動に移す。

迫り来るエルザの猛攻をくぐり抜け、人質を取らんとルーシイへと飛びかかった。敵と同じくエルザに見惚れていたルーシイは突然のことで動けない。

「ひっ!!?」

「おやおや、やっぱり俺のこと忘れられてるよねえ」

お気楽そうな、飽きたようなカイトの声が聞こえたかと思うと、刹那飛びかかった男が文字通り足元から伸びる影に殴られた。

拳を象った影。それもひとつではない。

気がつけば殴られ、気づかなくても殴られ、啞然とするうちに殴られ、呆然とするうちに殴られる。

「気をつけろー！ 奴の魔法だー！」

「もう遅いよ。影 絵 ー ー 影 拳」

シャドー・ビクチャー

シャドー・ナックル

パチン、と指が鳴らされるのを合図に、カイトの足元から影が広がりそこから伸びる影が次々と鉄の森を攻撃する。

あつという間に半数に減った鉄の森を牽制するかの如く、伸びた影の拳がゆらゆらと揺れている。その中心で佇むカイトははつきり言えば不気味だ。本人が加虐的に笑みを深めていることが尚更それを色濃く写す。

「さあ、幕は開かれた。悲劇の幕を開こう。無様に踊ってくれ。豚のような悲鳴を上げろ。輝く栄光を夢見て膝から崩れて落ちてしまえ。

山場を迎えるために、せいぜい前座で盛り上げてくれたまえ!!？」
カッカツカ、と笑うカイトはどこからどう見ても悪役にしか見えな
い。というよりか悪役だ。 哀れな市民を甚振る悪魔にしか見えな
い。

そんな突然の豹変に思わずルーシイが震える。

「な、なにあれ……。あんな怖い人だっけ？」

「無駄に脅してるだけだよ」

「あれのどこが!?!？」

いまだ魚を頬張るハッピーの言葉に思わずツッコむ。

しかし、言われてみれば言葉の割に敵を追おうとはせず、一定の距
離を保ったまま牽制しているだけだ。

「ああやって牽制して抵抗する気力をなくさせるんだって」

「言葉にするとエグいわね、それ」

改めてカイトを見る。

列車の中で語ってくれたように、確かに相手側からすればトラウマ
に残るような戦法だ。だが、これだけなのだろうか？

影を操る魔法ならば珍しくはあるが探せばいる程度の数はあるし、
何より説明は容易い。カイトの魔法の全貌がこれだけとはどうして
も思えなかった。

「どけっ!!? オレがやる!!?」

「ビアードさん!!?」

ビアードと呼ばれた鉄の森の中でも指折りの実力者は剣を握ると
揺蕩う影の中へと飛びかかった。

その自信は本物のようで、伸びる影拳を時に掻い潜り、時に切り
払ってカイトとの距離を詰めていく。 だんだんと距離を詰めるビ
アードに焦ったのか、カイトの表情から笑みが消え、真剣な目つきと
なっていくつもの影絵が襲いかかる。

「ウオおおお!!?」

気合い一閃。

いくつもの拳を切り抜けたビアードの剣がカイトの首を切り裂く。
鮮血を待って宙を舞うカイトの首。

鉄の森からは歓声が上がり、ルーシイはあまりの光景に悲鳴をあげた。

だが、その異変にビアードが気づく。

おかしい、と。

手から伝わったのは空を切るような感触。肉や骨を断った感触がどこにもないと。

はじめ疑ったのは幻覚だ。仲間を袋にしたときのように幻覚を

使ったのかと。しかし、手に持つ剣の感触も、拳が当たった脇腹の痛みも全て本物だ。

だとしたらコレはなんだ？ 本物そっくりのハリボテか？

「意外と鋭いねえ、君」

すぐそばで聞こえた声にぞくり、と皮膚が粟立つ。

後ろを振り返る。――仲間たちが歓声を上げている。

前を見る。――ルーシイが口元を押さえて泣き声を漏らさないようにしている。

左右を見渡す。――エルザにやられる仲間たちが見える。

では、声はどこから聞こえた？

「こっちだよ、こっち」

今度こそ声の発生源を捉えたビアードが下を見る。――いた。

影に潜って顔の半分だけを出したカイトがそこにいた。

反射的に剣を突き立てようとするが、それよりも早く影から飛び出したカイトのアップパーカットがビアードの顎を突き上げた。

「あ、よいしょお!!?」

「ガツ!!?」

そのまま脳を揺らされ暗闇へと落ちるビアード。

最後に見たのは変質した――まるで悪魔からもぎ取ったかのような禍々しいカイトの右腕だった。

「え?生きて……うええ!!?何よあれ!!?」

「泣いたり驚いたり、ルーシイは騒がしいね」

「うるさい!!? それよりなによ、あれ!!?」

「カイトの魔法だよ。カイトの魔法は失われた魔法ロスト・マジックの一種、混沌魔法。

2種類の属性を宿す魔法なんだ」

「混沌魔法？ それも2種類？」

「うん。それも相反するはずの光魔法と闇魔法。普段は分解して使ってるけど、あれが本来の使い方なんだよ」

聞いたこともない、見たこともない魔法だ。それも相反する属性を宿すことなど不可能だ。 ナツとグレイがいい例だろう。

炎と水あの2人が仲良く手を繋ぐことなど、あり得るはずもない。

しかし現実には事は起こっている。

ハッピー曰く、カイトの右腕は混沌魔法を纏った形だと説明を受けたが、あれ程禍々しいと思える魔法など初めて見る。

悪魔や化け物の腕を取り付けた、と言った方が正しい気がする。

鋭い鉤爪や側面から生える棘、赤と黒でグラデーションされた色彩。そのどれもが見るものを不安にさせ、恐怖で身体を震え上がらせていた。

「カイト？ それにあの魔法……………」

集団の後ろで観察に徹していた太めの男、カラツカが呟く。 人一倍臆病な彼だが、その分人一倍の知識を蓄えてきた。

それにより幹部の位置に座する彼が脳みそをフル回転させて、敵の正体を暴こうとするが、時すでに遅し。 例えその答えが出ようと結末は変わらない。

カオス・メイル「混沌ノ鎧……………。 さて、前座の終わりは少しばかり派手に行こうか！！？」

カイトの腕に魔法陣が展開され、その腕に白と黒の光が宿る。 炎のようにのたうつ光は次第に収縮していき、その爪先へと集まる。 大きく払った腕の軌道にはまるで空間を引き裂いたかのような跡が残り、それが鉄の森へと容赦なく飛来していく。

カオス・クロウ「混沌ノ爪！！？」

一撃。

たった一撃で残る敵は全て吹き飛ばされ、床へと伏す。 残されたのは後方で遠距離魔法を飛ばしていた数人とカラツカだけ。

残った数人もエルザの剣の一振りです倒されると、「ひいつ」と悲鳴を

上げたカラツカが通路の奥へと逃げ出す。

「エリゴールの所に向かうかもしれん。ルーシイ、追うんだ!!？」

「えーっ！っ!!??!!??あたしがっ!!??!!??」

「頼む!!？」

「はいいつ!!??」

最初は難を示していたルーシイだが、エルザのお願いと言う名の脅迫には敵わない。ハツピーを連れて駆け出してしまった。

残された2人は魔法を解くと、ため息を零す。エルザは疲れから、カイトは区切りをつけるためだ。

「それでエルザ、どうするの？ エリゴールの目的はこの駅とは限らないけど」

「わかってはいる。だが、例え嘘だろうと真実である可能性が限り無視はできん」

大量虐殺＝権力の会得に結びつく何かが思い浮かび上がらない限り、例えブラフだろうと、それに乗るしかない。エルザは考えていた。

もしかすれば大量虐殺で権力を会得できると本気で考えている可能性もある。無視できないのは当然だ。

「とりあえずは外の野次馬を避難させようと思う。できるか？」

「10人とかならまだしも、あんまり多いと難しいよ。それより警告して自分たちの脚で逃げてもらった方が速い」

肩をすくめるカイトにそれもそうかと零し、この場で待機しておくように命じる。走り出したエルザが向かうのは駅の出入口だ。そこで集まる野次馬に警告を出すつもりらしい。

残ったカイトは足元に転がる鉄の森の団員を見る。

一人一人顔を覗き、起きているのはいないのかと確かめていると、小声で何かを指示する音が聞こえた。

見てみれば脳震盪で倒れたはずのビアドだ。相手はすでに逃げ出したのかどこにもいない。感じ慣れない魔力を追えば、どうやら壁の中を進んでいるようだ。

追いかけるものか、と考えたがやめた。どうせ1人しかいないのだ。なにができるわけでもあるまい。

それよりも、と考えて起きているビアードを影で拘束する。

「なっ、てめっ!!?」

「やあやあ、おはよう。よく眠れたかな? さて、君たちの目的がはっきりとわからない以上、吐いてもらうしかないんだけど……:……:まず聞いておこう。素直に話してくれるかな?」

「へっ、誰が」

「そう言ってくれると思ったよ。まあ、ある程度の仮説は立ててるんだけどね」

そんな筈はない、とビアードは鼻で笑う。

念には念を入れてカイトの前でさえ目的を話していないのだ。

誰もエリゴールの描いた絵図に気付くはずがない、と。

「この先のクローバーにいるギルドマスター達の暗殺……:……:つてところでしょう?」

「なっ!!?」

計画の核心部を言われて思わず声が漏れる。慌てて口を紡ぐが目の前のカイトは狙い通りとばかりに笑みを深める。

クローバーにはこの地域周辺のギルドマスター達が定例会を開いてる、極力邪魔が入らないよう渓谷の向こう側に作られた町だから交通手段はこの列車だけだ。列車を抑えて仕舞えば追手など気にせず、不意打ちで笛の音色を聴かせるだけだ。

強力な魔力を持つギルドマスター達と言えど、聴覚を完全に遮断することなど不可能である。

ここオシバナ駅で妖精の尻尾を待ち構えていたのは邪魔をされないうえに閉じ込めるためだ。今頃はエリゴールの魔風壁により駅周辺を風の壁が覆っている筈だ。外から中には入れるが、中から外には出られない一方通行の壁を無理に通ろうとすれば風に切り刻まれる。

エリゴールは飛べるため、渓谷など気にせずクローバーへと向かい、復讐を果たすという筋書きである。

聞いた時は誰もが完璧だと思った。誰もオレたちの復讐を邪魔できない、と。

だが目の前の男の笑みを見ると、どうしようもなく不安になる。もしかすれば、という気持ち湧き上がる。

第一印象はヘラヘラしている、バカ丸出しのハエだと思っていた。だが違う。笑顔の奥でこいつはこちらの作戦を見通していたのだ。

ふと、思い出した。

誰かが言っていたはずだ。妖精ハエの中にやばいのがいると。

曰く、闇ギルドを潰して周る者

曰く、総てを嘲笑う悪魔

曰く、どこからともなく現れる悪魔

「ど、道化……………」

「おや、知られてたみたいだね。抑止力として名を売ったかいがあるよ」

まあ、表では売れてないけどね、と笑うカイトの瞳は全く笑っていない。

仮面でもつけているのか、と疑いたくなるほどの温度差だ。

「さて、君たちの目的はわかった。けど、だからといって俺たちの親をマスター狙った君たちを許すつもりはない。だからといって殺しはしないよ。

私刑は禁じられてるからね」

パチン、と指が鳴らされるとそれが合図のようにカイトの足元から影が広がる。それは駅のホームいっぱいになると、その場に横たわる鉄の森のメンバーはもちろん、モニUMENTや時刻表、範囲内にあるものを総て呑み込むように沈めていく。

「殺しはしない。けど、君たちには恐怖を刻んであげよう。夜を迎える度に思い起こすような、日陰を見るたびに逃げ出すような、闇に怯える心トラウマを刻んであげよう」

ぞくり、と背筋が凍る。これは誇張でも比喩でもない、あるがままの事実を話してただけだと直感で理解する。

やめろ、と叫ぼうとした。

助けてくれ、と懇願しようとした。

けれどすでに口元まで影の中に仕舞われており、声を上げることさえできない。

「良い旅を、諸君。 君たちの旅に不幸があらんことを」

ようやく心から楽しそうに笑うカイト。

それがまるで悪魔のようで、慈悲の欠片も籠ってないことがわかって、この先に起こることを本能的に理解するのであった。

子守唄

「よかった、まだいたか!!?」

鉄の森の面々を影にしまい込んだ後、さてどうしたものかと悩んでいればグレイと遭遇した。

その表情は切羽詰まっており、余裕がないことがうかがえる。

「おや、グレイ。エリゴールは捕まえた?」

「いや。あのヤロウ、オレたちをここに閉じ込めやがった。あいつの目的はクロローバーの定例会だ。そこでマスター^{じいさん}たちにララバイを聞かせるつもりらしい」

「なるほどなるほど。それで?俺はどうすればいいのかな?」

「鉄の森のカゲってやつが解除の魔法を使えるみてえだが………クソツ!!?仲間が口封じに怪我を負わせやがった!!?」

このままではマスターを見殺しにしてしまう焦り半分、仲間に手をあげる怒りが半分、といった調子のグレイ。

だが、相対するカイトは違う。へえ、と他人事のように呑気な返事を返すだけだ。

カイトにとってはフェアリーテイルの仲間と、その他少し合流がある面々が全てである。それ以外がどこで野垂れ死のうと、仲間割れで殺し合おうと知ったことではない。

闇ギルドの仲間など、その程度だろう、と考えるだけだ。

しかし、このままでは脱出できないことは確かだ。

カゲがいなくとも脱出できる手段はあるといえはあるが、それはカイトのみだ。周りの仲間を連れて行くことはできない。

そう考えればそのカゲを救うしか方法はないだろう。

仕方ないと吐きたいため息を抑え、いつものような飄々とした笑みを浮かべるとグレイに道を案内させる。

到着した先は駅の入出口。

本来であればオシバナの町を俯瞰できるはずだが、視界の先は周囲

を渦巻く風で遮られている。これこそ魔風壁。

外から中への一方通行しか受け付けない壁だ。

その手前では力づくで抜け出そうとするナツとそれを制止しようとするルーシイ、刺された腹部を圧迫するエルザの姿があった。

「エルザ、待たせた!!?」

「お待たせ、エルザ。お待ちかねのカイトだよ♪」

「遅い!!?」

ふざけた調子のカイトに鉄拳が飛ぶ。理不尽だ、八つ当たりだと

カイトは叫ぶが自業自得である。

「ふざけている場合じゃない!!? カイト、治せるか!!?」

「ん?ん?……このくらいならなんとか。でも、すぐに意識は戻ら

ないと思よ、これ」

「治せるならいい。目の前で死なれては寝覚めが悪い」

全く、わがままなんだから、という言葉はさすがに飲み込んで、カ

イトはひとつの魔法を発動させる。

白い魔法陣が手のひらに展開されると、その中から包帯が伸びる。

それは意思を持つようにうねると、そのまま獲物に飛びかかる蛇の

如くカゲの傷に巻きつく。

ホワイト・ローブ「白衣。けどエルザ、何度も言うけどこれは傷だけしか回復できな

いよ? 頼みの解除の魔法もすぐには使えないだろうし………本当

にいいの?」

「構わない。救えるのなら救うべきだ」

「ふくん………」

そう言いながら魔法の発動をやめる。

これは魔力を送り続ける限り持続的に発動するタイプの魔法だ。

魔力の供給を止めれば消えるし、破り捨てれば消える。

幾分か顔色の良くなったカゲを尻目に、行く手を遮る魔法を見やる。

ナツのように突進するだけでは破ることはまず不可能だろう。

ではどうするべきかと考えるが、やはり一番はカゲの解除頼みしかないだろう。

あるいは——

(地面を掘って移動する?)

そう考えて、鼻で笑う。

確かに影の中を移動して抜けることは考えていたが、それはあまりにも荒唐無稽すぎる。

誰も穴を掘るような魔法を使えないし、穴を掘ったとしてもその作業に多大な時間を割くことになるだろう。それでは間に合わない。行った先でマスターたちの死体を見るのがオチだ。

その時、ルーシイの持つ魔法「星霊魔法」による転移ができないかどうか、と言い合いをしていたナツとルーシイを見て、突然ハッピーが何かを思い出したように「あ————!!?」と声を上げる。

「ルーシイ!!? 思い出したよっ!!?」

「な、何が?」

「来る時言ってた事だよお!!?」

言うなりハッピーが背中の中のバッグから取り出したのは金色の鍵。

ルーシイの使う星霊魔法とは、別次元に存在する星霊を呼び出す魔法だ。その媒体となるのがハッピーが取り出した鍵である。

一般的に銀色の鍵が普通なのだが、これはレア中のレア。黄道十二門と呼ばれる、星霊の中でも強力な存在を呼び出す鍵だ。

「それは………バルゴの鍵!!? ダメじゃないっ!!? 勝手に持つてきちゃ——!!?!!?!!?」

「違うよ。バルゴ本人がルーシイへって」

「ええ!!?」

「なんの話だ?」

「俺に聞かれてもねえ。………けど、星霊バルゴか」

バルゴとはどんな星霊だったか、埋もれている知識の中から呼び起こす。

処女宮のバルゴ。黄道十二門のうちのひとつであり、その姿は契約者の望む姿に変えるという。

攻撃型、というよりはサポートがメインであり、どちらかと言えば戦闘向きではない、私生活で活躍する星霊だ。

使える魔法は――土潜^{ダイバー}。

その名の通り、地面を自在に潜る魔法。

「いい子だね、ハッピー♪」

「いや、泥棒したのよ!?」

「違うよ!!? エバルーが逮捕されたから契約が解除になったんだって。それで今度はルーシイと契約したいって」

「ルーシイ、早く契約して。バルゴなら穴掘ってここから出られるよ♪」

「それを早く言え!!?」

「肘打ちっ!?」

予想だにしないエルザからの肘打ちが、カイトの鳩尾を襲う。扱いの酷さにしくしくと泣くカイトだが、今はそれどころではない。

ルーシイが鍵を受け取るとバルゴを呼び出す。

「我、星霊界との道を繋ぐもの。汝、その呼びかけに応え門をくぐれ。――開け!!? 処女宮の扉!!? バルゴ!!?」

「お呼びでしょうか?」主人様

展開された魔法陣が一層の輝きを放つと、そこにメイド服を着た桃色の髪の少女が現れた。

少女と呼ぶには大人びた印象、女性と呼ぶには幼く見える外見の、ちやうど良い中間を保ったような星霊。それが処女宮のバルゴだ。

ルーシイ曰く、前回エバルー契約時はゴリラのような外見だったらしいが、見た目を弄れるバルゴにとっては造作もない。

「時間がないのっ!!? 契約後回しにでいい!?」

「かしこまりました、ご主人様」

「てかご主人様はやめてよ!!?」

そう言われてルーシイの腰にある鞭を見るバルゴ。

「では、嬢王様と」

「却下!!?」

「では、姫と」

「そんなトコかしらね」

「どうでもいいから急げよ!!?」

「では、いきます!!?」

グレイに言われ、まるで水面に飛び込むかのように地面に潜るバルゴ。掻き分けた土はどこへ行ったのかわからないが、通った場所には道ができる。

我先にとナツとハッピーが穴に乗り込み、続くようにルーシイ、グレイ、エルザも進む。後に残されたカイトはカゲを背負っていた。

その場に置いていく気満々だったのだが、エルザに命令されては仕方がない。不服ながらも表に出さず、それを承諾した。

抜けた先は駅からそう離れていない地点。突風で身体が飛ばされそうになるが、進むことを阻害するほどではない。

「やれやれ、どうしたものかと思っただけ……………案外すごいねえ、ルーシイ」

「うう……………ここは……………」

「おや、起きたかい? 見ての通り、オシバナの町だよ」

気がついたのかカイトの背中であたりを見渡すカゲ。

それが嘘ではないとわかると、馬鹿めとばかりに笑う。

「くつ……………無理、だ。い、今からじゃ追いつけるはずがねえ

……………オ、オレたちの勝ち……………だな」

「カッカッカ♪ もう一回寝ときな♪」

「がふつ!!?」

後頭部による頭突きでカゲをまた気絶させる。視線の先ではナツとハッピーがおらず、どうやら先にエリゴールの元へと向かったようだ。

ハッピーのMAXスピードならば並大抵の魔導士は振り切れないだろう。そのかわり、長時間は飛べないのでそこは祈るばかりだが。

「ウソツ!!? 魔導四輪が壊されてる!!?」

「他のもだ。近くにレンタル屋があればいいが……………」

「何をもちもたしている、行くぞ!!?」

「カッカッカ♪ 躊躇いもなくレンタルする所は素直に尊敬するよ、エルザ」

レンタルではなく「借りてくぞ」の一言で強奪してきたのだが、そ

ここには触れない。

ルーシイが呆れていたが、これがフェアリーテイルの日常である。悪名紛いの評判は伊達ではないのだ。

かくして脚を手に入れた一行は急ぎ、エリゴールを追うのであった。



ガツガツガツガ、と。

ぎりぎりな幅の線路を無理やりロー半ば線路にぶつかるとローながらも、一行はエリゴールの後を追う。

現在地はクローバーとオシバナの境にある溪谷。底の見えない谷底は覗く者の不安を掻き立てる。

「う……………こ、こは……………」

「目エ覚めたか」

荒い道のりの中、再びカゲが目を覚ます。オシバナ駅から脱出したのはうろ覚えながらも、しかしなぜまた気絶していたのかは思い出せない。

思い出そうとすれば顔全体に痛みが走るのでやめておく。傷は完治しているようだが、血を流しすぎたのか思考が上手くまとまらない。

だが、辺りを見渡せば大溪谷。同乗者は妖精^{ハエ}ども。鈍い頭でもエリゴールを追っていることは理解できた。

「……………なぜ僕を連れて行く?」

「しようがないじゃん。町に誰にも人がいないんだから。クローバーのお医者さんにつれてってあげるって言ってんのよ。感謝しなさい」「違う!!? なんて助ける!!? 敵だぞ!!?……………そうか、わかったぞ。僕を人質にエリゴールさんと交渉しよう……………。無駄だよ。あの人は冷血そのものさ。僕なんかの……………」

「うわー、暗ーい」

「死にてえなら殺してやろうか?」

「ちよつとグレイ!!?」

「生き死にだけが決着の全てじゃねえだろ。もう少し、前を向いて生きろよ。オマエ等全員さ……」

「……………」

グレイの言葉を思わず聞き入ってしまうカゲ。だが、これまでの恨みが、エリゴールを支持する心からそれを思考の外に追い出す。

オレたちは間違っていない。これは正当な復讐なのだ。

「まあまあ、難しい話は後にして、とりあえずは腹ごしらえ腹ごしらえ♪」

広くない荷台のどこにいたのか、いつのまにかそこにいたカイトが影の中からバケツトを取り出す。

中をひらけばサンドイッチがそこに並べられていた。採れたてをそのまま使ったのだろう、みずみずしい色とりどりの野菜に、黄色のチーズが食欲をそそる。

「おっ、美味そうだな。もらうぞ」

「もう、そんな場合じゃないのに……………」

そう言いながらサンドイッチを受け取るルーシイも腹がへつていたのでろう。頬張ってしまうと目の色を変えた。

今まで食べたサンドイッチの中でも一番と言っているほど美味しかったのだ。

まるでたった今作りましたとばかりにしやしきしやしきとした葉野菜の歯ごたえ、それにトマトの酸味、チーズの甘みが丁度良くマツチングしている。

パンもふわふわで、葉野菜の水分など吸っていないようだ。

まるで魔法のようだ、と思っていればいつのまにか完食していた。

「カッカッカ、喜んでもらえて何より♪ さ、君も食べな」

「ちよ、やめっ……………」

「さあさあ、遠慮せず♪」

「やめっ、やめろ!!?」

頬に押し付けるサンドイッチを払って抵抗するカゲ。谷底へと落ちて行くサンドイッチを見つめるカイト。してやった、と少し自

慢げなカゲだが、その後ろでやつちまった、と驚愕のあまり声さえ出ないグレイに気づけていない。

刹那、ノータイムでカゲの顔面に拳が入れられた。

余談だが、フェアリーテイルの中で破つてはいけない暗黙の了解がいくつかある。

例えば、ミラジエーンに不用意なボディタッチはしない

例えば、酒が大好きなカナと飲み比べをしない

例えば、両思いながらも互いにドギマギするアルザックとビスカの仲を取り持たない

などである。

だが、その中でも禁忌とされているのが、カイトの前で食べ物を粗末にしない、である。

粗末にすれば最後、滅多にキレないカイトが鬼の形相で、それはもう言葉では言い表せない仕置を受けるとされているのだ。

あのナツとグレイでさえ喧嘩する時カイトがそこにいれば、食べ物が周囲にないか気にするレベルである。

つまりはエルザと同じくらい怖いのだ。暴力を使う事に抵抗がない状態なのだ。

マウントを取りながらも殴る事をやめないカイトを、さすがにグレイが後ろから羽交い締めにする形で止めた。

「お、落ち着け!!? オレの名言チャラにする気か!!?」

「離して、グレイ。クローバーに着く前に息の根止める」

「頼むから落ち着け!!?」

いつもの飄々とした物腰はどこへやら。食べ物を粗末にするなど万死に当たるとばかりの勢いである。

駅の時とは違う、素の表情を見せるカイトにドン引きするルーシイだったが、突然魔導四輪が大きく揺れバランスを崩してしまう。

倒れた先にはカゲ。意識をなんとか保っていたのだが、揺れと共に降ってきたルーシイのケツに襲われ、今度こそダウンと相成った。

「ルーシイ、オマエ……………」

「わ、わざとじゃないの!!? てか、カイトもその人を捨てようとし

「ないで!!?」

どさくさに紛れてカゲを谷底に放り投げようとしていたカイトは、ちえくつと不満そうに呟き、渋々カゲを床に寝かせる。

回復させるつもりはなく、それよりもと運転するエルザの方に近づいた。

「エルザー、大丈夫? 変わろうか?」

「大丈夫だ。お前たちはもしもの時に備えていてくれ」

そう返事を返すエルザだが、見るからに呼吸が荒く、大丈夫なようには見えない。

魔導四輪は魔力を糧に乗る乗り物だ。当然スピードを出せば出すほど魔力は持つていかれる。だというのにここまでエルザはスピードを緩めることなく進んでいる。体内に残る魔力はほとんど尽きかけていた。

魔法を使う人間にとって、魔力とは生命の源に等しい。魔力が溢れば活力がみなぎるし、底を尽けば死に至る。

現にエルザの視界は既にくらみ、手先に力が入らない。それでも、と気力でハンドルを握る背中にカイトがそつと手を添える。

次の瞬間、まるで鈍くなっていた血液が回りだすように、エルザの身体の隅々まで魔力が行き渡る。

これは魔法ではなく、カイトの特技だ。

相手の魔力の質を真似し、器に水を注ぐように魔力を送るだけだとは本人の言だが、普通は魔力の質を変えることはできるがそれを他人に送ることなど不可能である。

「カイト……………」

「ここで倒れられても困るからね。このくらいはいいでしょ♪」

ヘラヘラと笑うカイト。

つられるようにエルザも笑みを浮かべ、前を向いて向く。

「後で覚悟しておけ」

「あれ? ここは感謝されるどころじゃないの!?!? しばかれるの!?!?」

「命令違反には違わないだろう?」

「カッカッカ………わー、理不尽」

力なく笑うカイトを尻目に、エルザは魔導四輪の速度を上げる。
一刻も早くエリゴールに追いつくべく。

そして数分後………。

「お！遅かったじゃねえか。もう終わったぞ」

「あい」

追いついた頃には既に戦闘は終わり、ナツの足元で大の字になってのびるエリゴールの姿がそこにあった。

途中で意識を取り戻したカゲが信じられないとばかりに声を上げていたが、ヨロヨロと力なく座席に座ったきり黙ってしまった。

「ケツ。こんなの相手に苦戦しやがって、フェアリーテイルの格が下がるぜ」

「苦戦？どこが!?？圧勝だよ。な？ハッピー」

「微妙なトコです」

「おまえ……裸にマフラーって変態みてーだぞ」

「おまえに言われたらおしまいだ」

「はいはい、ケンカしない。とりあえずナツ、お疲れ様♪ お陰でマスターたちは守られたよ♪」

「ついでだ。定例会の会場へ行き、事件の報告と笛の処分についてマスターに指示を仰ごう」

「クローバーはすぐそこだもんね」

和気藹々と、脅威は去ったとばかりにそれぞれ緊張感を解きほぐし、肩の力を抜く。

しかし、停車させたはずの魔導四輪からエンジン音が鳴ったかと思うと、突如として発信する。

道幅のない、狭い線路上だ。落ちそうになりながらも魔導四輪をかわす。

「ハッハア!!？ ララバイはもらった!!？ ざまあみろー!!？」
歡喜の声をあげるのは運転手のカゲ。その手には魔法で回収さ

れたララバイが握られている。

「カゲ!!?」

「あんのやるオオオ!!?!!?」

「何なのよ!!?!!? 助けてあげたのにー!!?!!?」

「追うぞ!!?!!?」

「カツカツカ!!? もちろん!!?」

走って追いかける一同だが、それで追いつけるはずもなく、魔導四輪は次第にその姿を小さくしていくのであった。



クローバーの町の定例会会場。

定例会といってもそこまで堅苦しくなく、どちらかといえばマスターたちの飲み会に近い会議が行われているそこにカゲは辿り着いた。

その手に持つのはララバイ。音色を聴いただけで対象を呪い殺す魔法道具。

会場全体に聞こえる位置を定めると、そこで笛に口をつける。だが、その瞬間後ろから肩を叩かれた。驚きのあまり笛から口を離すと恐る恐る振り返るー頬をつつかれた。

「ふひやひやひやひや!!?ーゲホツゲホツ。いかんいかん。こんな事してる場合じゃなかった。急いであの4人の行き先を調べねば」

振り返った先にいたのは小柄なおじいちゃん。笑ったり咳き込んだりと忙しいこの人物こそフェアリーテイルのマスター、マカロフである。

つくづく妖精ハエに縁がある一日だ、と嫌気が刺しつつも、カゲの中で最初の犠牲者は決まった。

包帯で巻かれたカゲを病人として見たのか、早く病院に戻れとだけ言い残して去ろうとするマカロフを呼び止める。

「あ、あの……………。一曲、聴いていきませんか？病院は楽器が禁止されているもので……………」

あからさまに訝しむマカロフに演技が足りなかったかと内心舌打ちしつつも、決して焦らない。

困ったような笑みを浮かべて「誰かに聞いてほしいんです」と告げると、ようやく相手が折れた。

「急いどるんじゃ。一曲だけじゃぞ」

「ええ」

勝った、と思わず叫びそうになる言葉を飲み込む。

これでようやく悲願が叶うと、魔法界への復讐が果たされると、全てを変えることができると期待に胸を膨らませて笛を口に近づける。

「よおく聞いててくださいいね」

あと一吹き。

それだけで笛は音楽を奏で、辺りの命を奪う音色を歌う。

だと言うのに。

あと少しだというのに、カゲの脳裏にはハエと嘲笑し、見下してきたはずのフェアリーテイルの顔が浮かぶ。

ナツのように、誰かのためにあれだけ怒りをあらわにしたことがあっただろうか。

グレイのように、前を向いて生きていただろうか。

エルザのように、あれだけ他人の心配をしたことがあっただろうか。

ドクン、ドクンと心音が耳元に響く。

「いた!!?」

「じっちゃん!!?」

「マスター!!?」

「しっ。今イイトコなんだから見てなさい♡」

木々を抜けてようやく追いついた一同を止めたのは、女性服を着てあご髭を生やす男性。

右腕には正規ギルドである青い天馬の紋章。ブルーベガサス彼はマスターであるボブ(♂)である。

「おやおや、マスターボブ。久しぶりだね♪」

「あら、カイトちゃん。相変わらずかわいいわね♡ そっちの子たちも……………ウフフ♡」

「ふざけてる場合ないでしょ!!?」

「落ち着きな、嬢ちゃん。おもしれエトコなんだからよ」

ボブの隣に立つのは黒い帽子に黒い服、サングラスに棘の生えた首輪というなかなかパンクな格好をした男。

顔のシワが目立つが服装は若い頃から変わらない四つ首クワットロケルペロスの猟犬のマスター、ゴールドマインである。

ゴールドマインの言う通り、カゲは笛を吹く様子はない。何かに怯えるように震え、固まっているだけだ。

「……………何も変わらんよ」

ぞくり、と悪寒が襲った。

その一言で理解してしまったのだ。全てマカロフに筒抜けだったのだと。少ない会話の中で目論見を見抜かれたのだと。

「弱い人間はいつまでたっても弱いまま。しかし弱さの全てが悪ではない。弱い人間なると人間なんて弱い生き物じゃ。一人じゃ不安だからギルドがある。弱い仲間がいる」

「強く生きる為に寄り添いあって歩いていく。不器用なものには人より多くの壁にぶつかるし、遠回りをするかもしれない。しかし、明日を信じて踏み出せば必ずと力は湧いてくる。弱い強く生きようと笑っていける。そんな笛に頼らなくても、な」

コト、とララバイが地に落ちる。そして敗北を表すように五体を地につけたカゲが「参りました」と口にした。

「マスター!!?」

「じっちゃん!!?」

「じーさん!!?」

安堵の表情で飛び出す一同。その登場に度肝を抜かれたマカロフにエルザが抱きつく。

しかし、エルザが身に纏うのは鎧だ。抱き寄せる者を痛めつける、カイト命名「悪魔の抱擁」。その鎧の下には豊満な胸があるのだが、

そんなものは望むべくもない。

「さすがです!!?今の言葉、目頭が熱くなりました!!?」

「痛っ!!?」

「じつちやんスゲエなア!!?」

「一件落着だな」

「ホラ、アンタ医者行くわよ」

「よくわからないけどアンタもかわいいわ〜♡」

「しかし、デカくなつたな。オマエは」

「カッカツカ♪ ゴールドマインさんは老けたねえ♪」

和やかなムード。

事件がひと段落したのだという弛緩した空気。

それぞれが笑い合う空気の中、それを裂くような低い声が一同の足元から聞こえた。

「カカカ………どいつもこいつも、根性のねエ魔導士どもだ」

ぎよっ、とする一同が振り返ると、ララバイの先端、3つ眼の髑髏の口から黒い霧が立ち上っている。

声の発生源は間違いなくララバイからだ。

「もう我慢できん。ワシ自ら喰ってやろう」

煙の量は見ると見るうちに増え、ララバイ本来の姿を形作っていく。

「貴様等の魂をな………」

数秒後、現れたのは樹木のような肌を持つ怪物。

身体の内くつかに空洞が広がり笛だった時の名残が残っているが、

誰がどう見ても怪物。 定例会会場よりも巨大な身体は見る者を圧倒させる迫力がある。

こればかりはカゲも知らなかったらしく、何が起こったのだと慌てていた。

「ちよ、何よこれ!!? どうなってるの!!?」

「あの怪物がララバイそのものなのさ。つまり生きた魔法……それがゼレフの魔法だ」

「ゼレフ!!? ゼレフってあの大昔の!!?」

「黒魔導士ゼレフ。魔法界の歴史上最も凶悪だった魔導士……。何

百年も前の負の遺産がこんな時代に姿を表すなんてね……………」

おとぎ話にも登場する魔導士、ゼレフ。

その名は恐れられ、その魔導は禁忌とされ、その姿は誰も知らない、もはや架空とされている人物である。

だが、その存在を示すように禁忌とされた魔法は数多く存在し、多重に封印されたものまである。そしてそのうちの1つが一同の目の前に存在しているのだ。

いち早く構えたのはナツだ。

雄叫びをあげてララバイへと突っ込む。

「オオオオオオオオ!!?」

「ナツ!!?」

最初の登場から動きのないララバイ。

ルーシイの心配を背に足元から駆け上ろうとするナツ。

だが突如、ポスツ、と大きく張った布に突撃したときのような、ふわり軽く空気に抵抗されたような感触がナツを襲い――

「んあ!!?」

勢いそのままナツが突っ込むと、布を引き裂くような音が辺りに響いた。

「はっ!!?」

「んのヤロオ……………」

「えっ!!?えっ!!?」

ルーシイが困惑するのも無理はない。

何せナツの動きに合わせるように周囲の景色ごとララバイが引き裂かれたかと思うと、その向こうに何も変わらない景色が広がっているのだから。

まるでハリボテに騙されたような、そんな感覚。

ふわりと残骸がはためくと、役目は果たしたとばかりに空気に溶けて消えた。

呆気にとられるルーシイの背後から、微かに何か巨大なものが倒れるような音がする。釣られてみれば遠くにララバイがいた。なにかと戦っているらしく激しい動きを繰り返しているが、ララバイで

さえ小さく見える距離だ。相手が何なのかなど見えるはずもない。

「えっ!!? さ、さつきまでここにいたはずなのに……………」

「ん? ルーシイは初めてだったな」

落ち着いた様子で応えるのはエルザだ。

「今のはカイトの魔法だ。 私たちや会場にいたマスターたちを移動させたのだろう」

ほら、と言われて周囲を見れば、たしかに。

先ほどまでいなかった人々がルーシイと同じように困惑した様子で右往左往している。

しかし、当の元凶の姿はどこにもない。つまりあの場で戦っているということだ。

「まったく……………いつも一言告げろと……………」

「落ち着いてる場合なの!!? それより早く助けに行かなくちや……………!!?」

「安心せい。モンスター退治はあやつの十八番じゃ」

そう答えたのはマカロフだ。

自分たちはゆつくりと迎えにいけばいいと告げるマカロフに、続くようにエルザも頷く。

しかし、そう言われて安心できるはずがない。

ならばと思いいナツたちを連れて行こうと振り返るが、そこではグレイと殴り合うナツの姿があった。

ハッピー曰く、騙されたナツをグレイが煽り、そこからはいつもの流れだとのこと。

ああなつては動こうとしないだろう。 がくり、と肩を落とすルーシイ。

「そう心配するな。 あいつは信用はならないが、信頼はできる」

慰めるようなエルザの言葉も、今のルーシイには届かず夜闇に溶けていくのであった。



「キサマ、何をした……………」

困惑していたのはルーシイだけではない。同じようにララバイも突然の出来事に状況を把握できていなかった。

数百年ぶりに外へと出て、腹一杯に魂エサを食らおうと思っていた矢先、その姿が掻き消えたのだ。

後に残るはカイトだけ。建物の中からも人の気配はしない。

食物を奪われたことに苛立つララバイだが、相対するカイトはどこ吹く風。

「奇怪な窓掛トリツキ・カーテン。なあに、範囲内の人を移動させるだけの、つまらない魔法さ」

なんでもないとばかりにカラカラと笑うカイトだが、そんなことはありえない、バカにしているのかとララバイは舌打ちする。

空間移動の魔法はたしかにあるが、それは術者しか移動できない。術者にくつついて移動することもできるが、せいぜい5、6人。それ以上は不可能、人が行使する魔法の限界だからだ。

「戯言を……………」

「嘘じゃないんだけどねえ。まあ、いいか。俺がやることは変わらないいからね♪」

パチン、と指を鳴らすとその腕を展開された魔法陣が通過し、その腕に魔法を纏わせる。

「俺は怒ってるんだよ、ララバイ。せつかく舞台はめでたしめでたしで終わろうとしてるのに、君の登場は蛇足だ。強制的なハッピーエンドにさえ劣るよ」

まったく、と怒っていると公言する割に呑気な様子なカイトが再度指を鳴らす。その瞬間、赤黒い化け物を思わせるような腕に変化が生じた。

まるで卵がひび割れるかのように指先から亀裂が入り、徐々にその中身が姿をあらわす。

そこにあつたのは白

純白であることをしめすような

黒を拒絶するような

純真無垢を体現するかのような

悪魔のような腕から神々しさを思わせる白へ

腕の形状こそ変わらないが、色が変わるだけで印象がガラリと変わる。

気がつけば腕は全て白色のものへと変わり、カイト自身もいつのまにか袖口に飾りのついた白いコートを羽織り、顔にはベネチアンマスク、髪の色も黒から白へと変色していた。

「混沌ノ鎧カオス・クラウンバージョン、混沌ノ道化師。さてさて、お客さんがいない劇場で、いつまでも幕を開いているわけにはいかない。降って湧いた悪役にはご退場を願おうか」

仮面の奥底で悪魔が笑うような、そんな姿をララバイは幻視した。

悪魔

ふわりと、月夜に白いコートが舞う。

月の光を反射して、自ら輝くような白さを誇るその光景は、側から見ても美しい。

だが、それと対峙しているのはバケモノであり、負の遺産とも言われる悪魔だ。物の価値観など人のそれと同じではないし、なによりその悪魔はそんなものは持ち合わせていない。

人の魂を喰らう

それだけが悪魔の存在理由であり、存在目的だ。それを考えれば目の前の白いコートに身を包むカイトは食事を邪魔する闖入者である。

鬱陶しいハエを追い払うようにその巨腕を振るうがまるで効果なし。風に揺蕩う木の葉のように足場のない空中でふわりと舞うだけだ。

「小癩な……!!？」

物理攻撃は薄いと判断し、樹木の虚のような口から魔力の塊を発射する。しかし、振るった腕の軌跡に魔力が迸り、魔力の塊と衝突した。

小規模の爆発が起こるが、カイトにダメージを与えた様子はない。最初と同じようにカラカラと笑っているだけだ。

「カッカッカ♪ どうしたんだい、悪魔^{ララバイ}。負の遺産とまで言われたゼレフ書の悪魔の実力は、こんなものではないだろう？」

かかって来い、とばかりの挑発に少なからずイラつくララバイ。

切り札である呪歌を放とうと考えるが、しかし1人のために大量殺戮魔法を使うのも躊躇われる。なにより負けた気になってしまうのが嫌だ。

だからこそララバイは当初の予定通り巨躰を活かした、質量任せの

攻撃を行う。腕を振るい、脚を蹴り上げ、口で噛み砕こうとする。しかし、やはりのらりくらりとそれらの攻撃はかわされる。そうしてラライの拳を後退してかわした瞬間、ここにきて初めてラライがほくそ笑む。

「かかったな！」

握った拳を開くと、大樹のような指が枝分かれするように伸びる。さすがに予想だにしていなかったのか、呆気なく捕らえられたカイト。身体中に巻きついた枝は成人男性の腕の太さほどはあり、簡単に引きちぎれるはずもない。

「このまま捻り潰してやるわ！」

ぎゅっ、と拘束を強めるラライ。数秒後にバラバラに引き裂かれるカイトの姿を幻視して笑った。

だが不意に、指先から伝わる肉を締め付ける感覚が消えた。もっ

と言えば指先の感覚さえも。

シャドロー・ピクチャ

「影 絵 ー ー 偽・仏斬大鋏」

「ガアツ!!?」

カイトの影から伸びる巨大な二本の刃が交差。何の抵抗もなくラライの指先は切断されていた。

それを認識した瞬間に走る痛み。大きく仰け反って二歩三歩とカイトから距離を取る。

切断された指先を確認し、忌々しくカイトを睨む。影から浮き出た魔法はいつのまにか元に戻っており、まるで幻覚でも見たかのようにも思えるが、カイトの体に力なく巻きつく己の指先がそれを否定していた。

「やれやれ、今のはちよつと驚いたよ。さて、受けてばっかりも飽きた事だし、反撃するでしょうか」

「ぬかせ！」

反撃の機会は与えない。

切られたのとは反対側の腕を上から振り下ろす。今度こそは確実にその身体を捉えた感触が腕を伝い、そして地面に叩きつけられた。油断することなく口から魔力の塊を撃ち、続けざまに何度も拳

を振り下ろす。

すつかりと辺り一帯の地形が陥没するほどの攻撃を加え、ようやく
ララバイは攻撃の手を止める。

これだけすれば大丈夫だろうと。

これだけすれば死ぬだろうと。

「やあ、気は晴れたかな？」

だが、その陽気な声を聞いた瞬間、背筋がぞわりと震える。背骨
を直接撫でられたかのような不快感が生まれる。

そんなララバイの姿を楽しむかのように、肩に乗っていたカイトは
口を大きく開けてその首筋へと牙を突き立てる。

「魔力吸収」
エナジードレイン

「ガッ!!? き、貴様!!?」

刹那、ララバイの身体が足元から崩れ落ちる。なんとか片腕で伏す
ことは回避するが、それでも少しでも気を抜けば倒れてしまいそうな
虚脱感。

「オ、オ、オオオ」

抵抗らしき抵抗もできず、大樹のような肌が端の方から枯れてい
く。その態勢からもはや微塵も動けないほどの体力や精神力、魔力
が吸われたのを確認するとようやくやくカイトは口を離し、ララバイの目
の前へと降り立つ。

「ご馳走さま。食事としてはまずまずだったよ」

「き、きさま……」

「おや、まだ話せるとは予想外。カツカツカ、意外としぶといんだ
ねえ」

目の前でカラカラと笑う、嗤う、嘲笑う、悪魔のような道化師。

違う、とララバイは思考する。こいつは ゼレフ書の悪魔 我々とは違う、別種の悪

魔だと。

造られた悪魔ではない、元より存在する悪魔なのだ。

知っている。

ララバイは知っている。

この存在を。

この存在の危険性を。

経験ではなく知識として知っている。

「……………どうやら、なにか知ってるみたいだね」

まあ、これだけヒントを出せば当たり前かとまた笑い、ひとつ指を鳴らす。展開された足元の魔法陣。そこから伸びる影の大きさはこれまでの比ではない。ララバイよりも一回り小さいとはいえ、それでも恐るべき巨大さ。

「さて、色々と聞きたいかもしれないが、そろそろお客さんが帰ってくる頃合いだ。新たな幕を開く前に、舞台を綺麗にしないとね」

巨大な影は拳を握る。そしてカイトの動きに合わせてるように、ララバイへと標準を向けた。

「きさま……………貴様は……………つ!!?!!?」

シャドー・ビクチャ

「影 絵 ……偽・魔王ノ御手!!?」

ふり抜かれた拳は周囲の土塊や木々を巻き込み、有象無象と変わらないとばかりにララバイを宙へと吹き飛ばした。

役目を終えて姿を消すカイトの魔法。後に残るは荒れ果てた土地。遅れて中心からへし折られた笛状態のララバイがカイトの足元に落ちる。

やり過ぎちやった、と内心で反省しつつ、反対側の林から現れたギルドマスターたちに舞台役者さながらに深々とお辞儀をするのであった。



大丈夫大丈夫と、どこか他人事である面々に発破をかけ、林を駆け抜けたルーシイは目の前の光景に絶句する。

地形が変わるほど荒らされた大地を見たからではない。

悉くなぎ倒された木々を見たからではない。

巨大なララバイの姿がどこにもないからではない。

もっと単純に、目の前の白い服に身を包んだ人物に見惚れていたのだ。

その装飾と仮面が特徴的で、姿だけで言えば道化師とも言えるだろ

う。だが、月に反射して輝くその人はどこか幻想的で、混じり気の無い白は高貴的でありながらも袖にあしらわれたカーテン状の装飾が高圧さを感じさせない。

見た目と印象のギャップが大きいその人に目を奪われ、言葉を失っていたのだ。

「まったく、だから大丈夫だったろ？」

グレイの恨み言のような愚痴に意識を取り戻し、詰めかけるようにして彼を指差す。

「そ、それより、あれ！あれ！！？」

「あ？ あいつがどうかしたのか？」

「知らないの？？ 道化さんだよ、道化さん！！？」

興奮するルーシイを鬱陶しそうにしながら目の前の人物を見る。

たしかに道化と言われそうな資格好だ。しかし、中身を知っているグレイからすれば驚きはない。

その正体を言おうとするが、「ほら、これ！！？」とルーシイから雑誌の記事の切り取りを渡される。

読めば読むほど誰だこれ、と言いたくなるような美談ばかり。写真真は目の前の人物と同じものが載っているが、絶対に村人を憂いたり、義憤に燃えたりなどの理由でいくつかの闇ギルドを潰した訳ではないだろう。厄介ごとに巻き込まれた結果であると当たりをつけるグレイ。

隣にいたナツに手渡すと同じような反応を示していた。見せて見せて、と興味津々なハッピーに手渡すと、思わずうわあと声を漏らしていた。

「すごいでしょ！！？ もうあたし大ファンで！！？ サインもらえるかな！！？」

「あー……どうすんだ、これ？」

「ハッピー、頼んだ」

「オイラ人の夢壊したくないよ」

1人テンションの上がるルーシイを他所に、グレイ、ナツ、ハッピーの3人はお前がいけ、いやお前が、と現実を突きつける役を押し付け

合っていた。

我慢の限界とばかりにサインをねだろうとするルーシイの脇をエルザが通り過ぎる。その手に持つのは一本の劔。鎧を着ているとは思えない速さで接近すると、劔を正中線上に振り下ろした。

「成敗!!?」

「きゃああああ!!?」

突然のエルザの行動にルーシイは大慌て。腰に抱きつく形で止めようとするが、いかんせん力量差が激しい。ほぼ引きずられるような形になっていた。

「ちよつ、エルザ、落ち着いて!!?」

「ええい、避けるな!!? じつとしている!!?」

「カッカッカ♪ 無茶言うねえ」

カラカラと笑う道化。その特徴的な笑い声にルーシイの動きが止まる。

「えっ………も、もも、もしかして………カ、カイト?」

「カッカッカ♪ そうだよ、カイトだよ♪ ちよ、エルザ? マジで切ろうとしてない? やめて、切られると痛いからやめて。ルーシイもエルザを止めてくれると嬉しいなあ!!?」

上段からの斬撃を白刃どりで受け止めながらも、徐々に劔先はカイトに近づいていた。

信じられないとばかりにシヨックを受けるルーシイ。

素性を明かささないミステリアスな雰囲気、雑誌の取材にも応じない徹底ぶり。写真でさえ取れたらラッキーほどの目撃談の低さ。

そんな彼に憧れを抱き、羨望の眼差しを向けていた。

だがその正体は楽天家でいつもヘラヘラと笑っている、とても好印象とは言えないカイトだったのだ。

ルーシイの抱いていた理想は崩れ去り、辛い現実が突きつけられる。シヨックのあまり両手で顔を覆うと解放されたエルザの斬撃がカイトを襲った。

「きゃああ!!?」と断末魔をあげるカイトにさえ注意がいかず、またナツたちも止めない。ララバイを横取りされたのもあるが、日常的な光

景に過ぎないからだ。

数秒後には傷を回復させたカイトが復活していたが、それは無視されルーシーを慰める面々。

一方で、ほかのギルドマスターたちから持ち上げられているのはマカロフだ。経緯はわからないが、間違いなく命の危機を救ってもらったのだ。周りからあがる感謝の言葉にマカロフは喜びを隠そうともしない。

「フェアリーテイルには借りができたな」

「なんのなんの、ふひゃひゃひゃひゃひゃひゃ!!?」

普段から問題の絶えないギルドのマスターだ。気持ちの悪い笑い声を上げて笑いたくもなるし、気持ちも有頂天になる。

「ふひゃひゃ……ひゃひゃ……ひゃ……ひゃ……」

しかし、ある一点に気がつくとその笑い声は徐々になりを潜める。その変化に不信を抱いたギルドマスターたちがそちらを振り向いた。

「なあつ?!? 定例会会場が!!?」

「コナゴナじゃあ!!?!!?」

戦闘の余波を受けたであろう会場。ギルドマスターたちが少ない資金で建てた会場は見るも無残に瓦礫の山へと変わっていた。責任追及をしようとマカロフの方を振り返るが、すでにほかのメンバーと一緒に逃げ出した後である。

「逃げた!!?」

「追えー!!?」

「……カイトはどこにいった?」

「あい。もう逃げてます」

1人逃げ足の速いカイト。見つけ次第処罰することがエルザの中で決まった瞬間である。

「そう落ち込むな、ルーシー。良いことあるって、な?」

「……うん。でもサインはもらう」

「意外とメンタル強エのな……」

なんとか気持ちを持ち直したらしく、ナツに手を引かれながらもそ

う硬く決意していた。その決意に後ろを走るグレイは少々引いていたが。

やいのやいのと騒ぐ集団は街の方へと消えていき、誰もいなくなった会場跡を静寂が支配する。

それを確認したのか草葉の影が文字通り浮き上がり、泡のように弾けると中からカイトが姿をあらわす。

姿勢好は私服に戻っているが、その手に持つのは今回の騒動の中心とも言えるララバイ。しかし、中央から真つ二つに折られたそれ人を呪い殺すことなどできるはずもない。

ここまで破壊してしまえば封印などせずとも、復活は不可能と判断していいだろう。もはやガラクタ以下の価値となったララバイをどうしたものかと考え、影の中に収納する。

使い道はないが、取っておいて損はないだろうという、謎の勿体ない精神からだ。

「さてさて、どうしたものやら………」

前後左右を見渡し人がいない事を確認する。逃げ出したはいいが、帰り道のわからないカイトにとってそれは非常事態に等しい。

しかし、それもしょうがないと諦めをつけると本能の赴くまま明後日の方向に歩き出す。

それからギルドへたどり着いたのは実に3週間もの時間を要したのだった。

幽鬼の支配者

「痛て……」

「あー、くそつ!!?」

「ギルドやレヴィたちの仇もとれてねえのに撤退なんて!!?」

「ちくしょオ!!?」

この日、フェアリーテイル内は大いに荒れていた。

負傷者多数だというのに皆の瞳は憎しみや怒りに燃え、まるで戦争でも仕掛けるかの様に準備を進めていた。

きっかけはフェアリーテイルと長年睨み合っているギルド、ファントム・ロード幽鬼の支配者の仕打ち。犬猿の仲とはいえど、ギルド間抗争が禁止されているため小さな小競り合いで済んでいたはずだったが、数日前ファントムはフェアリーテイルのギルドを半壊させ、さらにはレヴィ、ジエツト、ドロイの3人に大怪我を負わせるという、あからさまな敵対行動に出た。

報復に出たはいいが結果は惨敗。マカロフを瀕死の状態に追い込まれてしまったのだ。

ファントムの狙いはルーシー。本名ルーシー・ハートフィリアの身柄の確保。これは正式な依頼であり、依頼主は父である。国を代表する資産家であるハートフィリア家のご令嬢、それかルーシーの本当の身分であった。

しかし、家族のことには目もくれず、事業や仕事のことにはか目がなない父に嫌気が指しルーシーは家出。本人としては今更連れ戻すのなら何か裏があるとさえ思っていた。

「ダメ!!? ミストガンの居場所はわからない!!?」

カナの得意のカード占いを使ってもその居場所を掴めないフェアリーテイル最強候補の1人、ミストガン。強力な睡眠魔法を振りまき、ギルドのメンバーにもその素顔を知られていない。だが、難易度の高いS級クエストを悉く達成していくことでその実力を知らしめている1人だ。

「そう……残念ね。ラクサスにも連絡したけど……」

「言わなくてもいい。来ないんだろ」

もう1人の最強候補、マカロフの実孫であるラクサスに連絡を入れたミラジエーンだが、こちらも不参加。最強を目指し豪語するラクサスにとつて弱いギルドメンバーはいらない、ということらしい。

「あいつ……カイトは？」

「ダメ。そっちも連絡がつかないわ」

「ったく、うちの男連中は!!？」

ラクバイの一件以降、姿が見えないカイト。当然のごとく道に迷っているのだ。いつもならしやうがないで済ませるが、今回ばかりは許せない。

奥歯を噛み締めるカナに、ひとつの決意を胸にするミラジエーン。それを口にするより早く、喧騒に包まれるギルド内にひとつの音が響き渡る。

「おやおや、どうしたのこれ？ 新手的改装、にしてはちよつと奇抜すぎやしない？」

決して大きくはない、喧騒に紛れそうな独り言。だがその声は殺気立つ声を沈ませ、多くの注目を浴びるのに十分だった。

視線の先にはカイト。道化の字名を持つ、最強候補のひとり。

戦力が足りないこの状況でその帰還はありがたい。普段ならいつも通り帰ってこられたんだとそっぽを向くメンバーも、この時ばかりは歓迎した。

「カイト、お前つ!!？ 今までどこに!!？」

「なんでもいい!!？ 作戦練り直すぞ!!？」

「カッカッカ♪ うわあ、何この疎外感。置いてけぼりだよ……つと」

周りの熱が上がる中、ひとり状況がうまく飲み込めていないカイトが仲間外れをくらっているとその胸の中にミラジエーンが飛び込む。突然のことにより一層困惑するカイトだが、その頬を伝う涙を見た瞬間、何やら尋常ではないことが起こっているのだと把握した。

「ありがとう……帰って、来てくれて……」

実力者が軒並み参戦しない中、そのうちの1人が帰ってきたのは大きい。自然とミラジエーンの口から感謝の言葉が漏れていた。

「……………帰ってくるさ。俺の家だもん」^{ギルド}

「おい、あいつもう困役でいいんじゃないか？ 具体的には蜂の巣になっても無視で」

「「異議なし」」

「カツカ、ヘイト値すんごーい。んで、何があつたの？ 退つ引きない状況みたいだけどさ」

ギルドの看板娘といい雰囲気なのが気に入らないのか、主に野郎連中からのヘイトが大きくなった。それでも笑顔であつたカイトだが、涙を拭ったミラジエーンから説明を聞くとその笑みがなりを潜める。

やはり此度のファントムの行動は面白くないようだ。特にチームシャドウギアに加えマスターへの暴行は看破できない。思わず治療すると言い出すが、その身柄は街外れの森の中に住む治癒魔導士ポーリシユカのところにあると聞くと安堵のため息を零した。

「カイト………!!?!!?!!?」

ギルドの奥から聞こえた怒鳴り声に反射的にカイトの背筋が伸びる。フェアリーテイルの一員なら誰もが知っている、^{カイト}道化を殺す^{エルザ}鬼の登場に他のメンバーの背筋も伸びた。

振り向いた先はシャワーでも浴びていたのか大胆にもバスタオル1枚を巻いただけのエルザ。その豊満な胸や濡れた髪が魅力的に見えるものの、その形相は鬼に近い。周りが思わずヒッ、と声を漏らしてしまうくらいには怖い。

「や、やあ、エルザ。どうしたんだい、そんな怖い形相で………うげっ!!?」

肩で風を切るエルザの流れるようなリアットがカイトの首に入る。そのまま仰向けに倒れるカイトのマウントを取ると胸倉を掴み上げた。

「貴様が不在のせいで私は………！ 私はい！ 評議会に召喚されたんだぞ！ わかっているのか!!?」

「お、落ち着けよエルザ」

「今はそれどころじゃねえって!」

周りのメンバーが必死にだめようとするが焼け石に水、エルザのひと睨みで黙ってしまふ。カイトに至ってはいつも通り軽口を叩こうにもラリアットで喉が潰され、軽く呼吸困難に陥っていた。エルザの腕を何度かタツプするが、本人も周囲も気づいているようすはない。

「それだけじゃない! こうしてファントムに攻め入られ、マスターを瀕死においやつて! 貴様がいれば、こうはならなかったはずだ!!? なぜ今更戻ってきた!!?」

がくがくと頭を揺さぶられながらエルザがなぜ怒っているのかを悟るカイト。八つ当たりだと人は嗤うだろう。責任転嫁だと飽きれるだろう。

だが、そうでもしないと発散できない悲哀を静かに受け止める。それで彼女がすつきりするのなら喜んで受け入れよう。それが道化としてできる償いなのだから。

「ケホケホ……お、オーケー、エルザ。わかったわかった、わかったから。一旦落ち着こ?」

まともに呼吸ができるようになり、掴まれる胸ぐらに手を添えて落ち着かせる。拳が飛んで来なかったのは不幸中の幸いだな、と思いつつ状況を把握する。

「それでどうする? 殴り込みは確定だとして、速攻で決めないと評議会の横槍が入るよ?」

法律によりギルド間の抗争は禁止されており、いま起こしていることは間違いなく犯罪だろう。だからと言って泣き寝入りを決め込むほど腑抜けではないし、ギルドの一員が狙われているのだ。殲滅、もしくはギルドの解体に持ち込まない限りこのようなことは続くだろう。

それは周囲もわかっており、あれだこれだと案を出すが良いものはでない。マスターが離脱した今、ただでさえ負けている数に加え戦略としても大幅に下回っている状態。せめてラクサスカミスト

ガン、どちらかが戻ってきてくれればと頭を悩ましていたその時、遠くから音が聞こえた。

ズシン、ズシンとなにか巨大な質量のあるを持つものが移動するような、そんな音。地面もかすかに震え、次第に大きくなっていく。何事かと全員が表に出た瞬間、目を疑った。

城が歩いていった。

言葉にすれば間抜けだが、想像以上に衝撃は大きい。掲げられるは幽鬼の支配者の紋章。間違いなくファントムだろう。それは湖を渡り、一定の距離まで来ると正面の門を開く。そこから現れたのは同じく巨大な砲門。

その砲門は誰もが知識として知っている、ひと昔前の戦争などに使われた兵器、魔導収束砲ジュピター。

「ッ!!?・カイトツ!!?」
「消せ」

エルザの声とファントムのマスター、ジョゼの声が重なった。

砲門に魔力が収束され、眩い光と共に放たれる。

「あいよ、エルザ」

絶体絶命かと思われた刹那、ギルドの周囲に薄く光る膜が張られた。一見頼りなさげに見えるそれは微かな神々しさを放っており、そして対ショック体制を取る一同を差し置いてジュピターの一撃を防ぎきったのだった。

「な……………なにが……………」

「こいつア……………カイトか!!?」

「よくやった!!? たまにやあ役に立つじゃねえか!!?」

「カツカツカカカ もう守ってあげないよ?」

聖域セイクリットーそれが先ほどの魔法の名前だ。悪意ある全ての攻撃を防ぐ、とっておきの魔法である。

呆気にとられるファントム。その隙を狙うかのようにギルドの足元から影が盛り上がった。

「偽・仏斬大鋏!!？」
ぶつぎりおおぼさみ

不意を突いたギルド本体への一撃。これで力の差を見せつけると思いきや、交差した二本の刃は砕け、ファントムのギルドには傷一つついていない。思わずチツと舌打ちを漏らしてしまう。

「どうした？」

「対魔力障壁だね。多分、あのギルド全体に張り巡らされてるよ。外部からの破壊は不可能だね」

どうしたものか、と頭を悩ませていたその時、ジョゼの声が拡声器を通して一同の耳に届いた。

「いくら抵抗しようが無駄だ。貴様らに凱歌はあがらねえ。ルーシィ・ハートフィリアを渡せ。今すぐにだ」

「ふざけんな!!？」

「仲間を敵に差し出すギルドがどこにある!!？」

「ルーシィは仲間なんだ!!？」

そうだそうだ、帰れと罵詈雑言を浴びせるが聞くに値せず。

ファントム側はルーシィを渡せと繰り返すばかりである。

仲間から守られるルーシィ。だが、みんなが傷つく姿を見たくはない。自分の犠牲でみんなが救われるのなら、と声を出そうとするがそれはカイトに防がれた。

「あたし……………!!？」

「おっと、ルーシィ。それ以上はダメだ。君のそれは、みんなに対する明確な裏切りだよ」

「でもっ!!？」

「まあ、安心しなつて。ジュピターなんていくらでも防いでやるからさっ♪」

さき、向こうに隠れてな、と無理やりルーシィを向こうの方に追いやるとため息を吐く。

「カイト、どうだ？」

「どうだもこうだもないよ、エルザ。結構魔力持ってかれたよ、あれ。防げて一発、しかもさつきより出力が上がるとキツイ」

付き合いが長いエルザには見抜かれていた。聖域はたしかに

強力だが、その分展開するたびに大量の魔力を消費する。さらに相手の威力が大きければ大きいほど消費魔力を大きいのだ。

「後どのくらいかわかるか？」

「魔力の流れからして10分15分程度。威力はさっきの倍は出るかもね」

「ならば破壊するしかないか」

「その対策は取ると思うよ。ほら」

カイトの指差す先、ファントムのギルドからは黒いフードを被った面々がこちらに押し寄せてくる。ジョゼの魔法、幽兵ジエイトによって作られた兵士だ。

「一体一体は強くはないけど、足止めには充分。ギルド捨てて逃げ出すなら今がチャンスだよ」

「馬鹿を言うな。お前はどうか？」

「同じだよ」

肩を竦め戯ける様子を見せるカイト。そのいつも通りの様子に少し安堵すると、肩を並べて状況を確認する。

先ほどナツがハッピーとともにギルドに乗り込む姿が見えた。続くようにグレイ、エルフマンもだ。ならば己がやることは一つ。

「カイト、私はここで指揮をする。お前はファントムのギルドに乗り込め」

「あいよ。女王様の言う通り」

ニヤリ、と不敵に笑うと影に潜り込むカイト。

戦略を考えれば残していた方がいいのかもしれないが、カイトの戦闘方法では乱戦は向いていない。敵味方巻き込んでしまうだけだ。ならば敵の本拠地にて暴れさせる方が理に適っている。

ジュピターの発射もあるので時間との勝負ではあるが、そこは先に潜入した3人に期待する他ない。

「リーダー、ルーシィを連れて隠れ家に!!？」 他は迎撃準備!!？ 接近次第叩け!!？」

オオオオオ!!？ と声を上げる面々の声。だが、エルザはひとつ作戦ミスを犯している。それはカイトの絶望的なまでの方向音痴

性。もはや呪われているときえされているカイトの方向音痴は案の定発揮され、ファントムのギルド内で迷子になるのであった。



「さて、どうしよつか……………」

ファントムのギルド内部。先ほどナツの働きによりジュピターは破壊されたが、ファントムは次なる手としてギルドを變形。人型となったギルドは空中に魔法陣を描いている。その魔法の名は煉獄破壊^{アビスブレイク}、直線上の物体を悉く破壊する禁忌とされる魔法のひとつだ。

止めるとしてもギルドには対魔力障壁が張ってあり外部からの破壊は出来ず、内部からちまちまと破壊していてもキリがない。動力源を壊せばいいのかもしれないが、その場所はわからず、手当たり次第に探しても時間の無駄だ。

「む…手っ取り早くジョゼを倒した方が早いかな？」

少なくとも相手の抗戦意欲は衰えるだろうし、撤退するかもしれない。問題はたどり着けるか、だが…………。と考えたところで脚が止まる。前方の部屋に感じ慣れた魔力反応を察知したからだ。

この魔力反応はナツ。相手は知らないが、魔力量だけでいえばかなりのもの。勝負は見えているといっても過言ではない開きだ。

「やあやあ、ナツ。苦戦中かい？」

「どこがだよ!!? てかカイト、どこ行ってたんだ!!?」

部屋に侵入してみれば勝負はまだ始まっていないようだ。目の前には目を布で覆い隠した太めの男性——容姿からして噂に聞くファントムの実力者、エレメント4がひとり大空のエリアだろう。

他にも鉄の滅龍魔導士がいると聞いているが、それはさておき。

「ああ、悲しいかな。フェアリーテイルの道化。人数が増えようと、貴方達は私に勝てない」

「カツカツカカカ。言ってくれるねえ。ナツ、ここは俺に任せて先行きな」

「後から出てきて何言ってたんだ!!? こいつはオレがやる!!?」

「カッカッ……ホント、人望のなさに涙が出るよ」

聞き分けのない子だなあ、とため息を零すとふと妙案が浮かぶ。

「しようがない。じゃあここは任せるよ。代わりに上の階にいる鉄の滅龍魔導士は俺がもろうよ」

「なに!?! あいつ上にいるのか!?!」

「そうだねえ。まあ、ナツがどうしても戦いたいっていうならここは譲るよ。はあ、仕方がない仕方がない」

「うおおおおお、ガジルー……ツ!!?!」

わざとらしく肩を竦めてため息を零すカイトを尻目に、ナツが部屋を抜けて最上階へとめがけ走っていく。ナツを追いかけるハッピーが去り際に、「カイトってホント性格悪いよね」と言われたが、最早言われ慣れていているレベルだ。目くじらをたてるほどでもない。

「よく通してくれたね。優しいところあるじゃん」

「知れたこと。貴方を倒し、追いかければ済む話ですから」

「カッカッカ♪ 随分な自信家だねえ」

じゃあー

「やつちやうか♪」

刹那、展開された魔法陣がカイトの腕を包み、その形状を変質させる。流れるように腕を振るえばその軌道上を5本の斬撃が飛ぶ。

カイトの十八番ともいえる混沌ノ鎧カオス・メイルからの混沌ノ爪カオス・クローのコンボがアリアに炸裂した。

だが、カイトの早技もさることながらアリアも伊達にフアントムの実力者として君臨していない。カイトの攻撃が当たる直前、その姿が空中に溶けるように消えてゆく。

反射的にその場を飛びのくと、一瞬にして床が吹き飛んだ。

「なるほど、見えない魔法ねえ」

「空域、それが私の魔法。悲しいかな、貴方の魔法は私には届かない」

「カッカッカ♪ やってみなきゃわからないよ」

今度は足元に魔法陣が展開され、そこから飛び出すいくつもの影の拳が柱を足場にしていたアリアへと殺到。だが、アリアの空域

絶”より放たれる空気の塊がそれらを相殺。どころか、数はあちらが優っているようでカイトの方が攻撃を食らう。

たった二発、それも掠めた程度だが、思わず舌打ちを零す。やはりエレメント4の名は伊達ではないと改めて実感させられた。

「ああ、悲しい。道化と謳われた貴方でも、私に攻撃を当てることさえできない」

「ふむふむ……なるほどなるほど……風魔法、それに風魔法系譜の枯渇……もしかして、君がうちのマスターをやったのかな？」

話で聞いていたマカロフの容体。それは体内の魔力を空中へと逃す枯渇という魔法に侵されているということ。魔導士にとつて魔力とは生命線であり、急激に減ればそれこそ命に関わるものだ。

風魔法、ということと同じ魔法を使うアリアに尋ねてみれば、予想通りというべきか目元を隠した顔でニヤリと笑う。

「そうだと。マカロフにとどめを刺したのは私。悲しいことに、マスタージョゼの前ではマカロフも赤子も同然」

ふわり、とその場から姿を消しカイトの背後へと立つ。その手に展開される魔法はマカロフに重傷を負わせた魔法。

「空域『滅』。さあ、マカロフと同じ場所へと送ってやろう」

アリアの巨体に見合った常人より大きな手が、カイトの顔を包みこむ。この魔法は魔力量が多ければ多いほど苦痛を見舞う魔法だ。カイトの魔力量の底は知らないが、最強候補と呼ばれるほどだ。その苦痛も長引くに違いない。

殺った。そんな思考がアリアの頭の片隅によぎった瞬間、地面から飛び出した拳がアリアの顔を貫く。それもひとつだけではない。天井から、離れた床から、壁から、いくつもの拳が全てアリアの顔に命中していた。

「ガッ!？」

「そう。よかった。人違いだったら悪いもんねえ。これでようやく本気を出せるよ」

静かにそう言うカイトに呼応するように、混乱するアリアに二度目の拳の雨が襲った。今度は全てボディに当たり、強制的に距離を

取らされる。

混乱する頭でアリアは有り得ないと断言する。通常、影魔法は自らの足元の影を使うものだ。周囲の影を使い魔法を行使するなど、聞いたこともない。

「不思議かい？ タネは簡単だよ。自分の影を周囲に潜りこませたんだ。この場はすでに俺の支配下。逃げ切れるとは思わないことだね」

有り得ない、と断言できる一言。影を操れたとしても、それはその姿だけであり、分割することなどは不可能だ。まじめに話す気はないと悟ったアリアの頭に血がのぼる。ファントムに所属して、ここまで虚仮にされたのは初めてだ。

「くっ！ ならば、その自信ごとへし折ってあげましょう！」

目元を隠していた布を剥ぎ取り、その両目を開く。魔力量が高いアリアは瞳を閉じてそれを抑えていた。そうしなければ辺りに被害を与えるからだ。だが、今はそうも言ってられない。これはギルド間の戦争であり、負けてはならない戦い。

魔力を解放したアリアに応えるよう、周囲が振動する。待機も床も、ギルド全体が恐怖するかのよう地震えていた。

「死の空域 〃零〃 発動！ この空域は全ての命を喰らい尽くす！」

その言葉に嘘はないようで、アリアの両手に周囲の空気が飲み込まれ、身体の中の大事なものさえ引っ張られるような不思議な感覚がカイトを襲う。

けれど、焦りはなかった。あくまでもいつも通り、だが燃えたぎる怒りを込めてカイトは魔法を発動させる。

「滑稽劇は終い。これよりは復讐劇にして恐怖の幕。グランギニョール怒りの代弁、復讐の代行」

「さあ、来い。道化！」

「デーモン・ファイスト偽・魔王百裂拳」

瞬間、周囲に展開された魔法陣から出てきたのは人の身の丈を優に超える拳の数々。文字通り、空間を埋め尽くす巨拳の全てが呆気に取られるアリアへと殺到。

命を喰らう魔法も、元より生命などない影には効かず、まるでそんなもの存在しないとばかりにアリアを襲った。

一撃で壁まで押され、身体中を駆け巡る痛みで顔を顰めながらも反撃のチャンス伺おうとする。だが、我先にとばかりに向かってくる拳の数を見て悟る。もはや反撃のチャンスなどないことを。

二撃目で壁が蜘蛛の巣状にひび割れ、三撃目には壁を破壊する。それでも攻撃は止まることを知らず、次から次へとアリアへと殺到する拳はまるで異形の塔。

外から見れば突如として奇妙な黒い塔が生えたファントムのギルドは、動力源として存在していた大火の兎兎丸、大地のソル、大海のジユビア、そして大空のアリアからなるエレメント4最期の1人の敗退を確認すると人型を保てずひとりでに崩れ落ちる。

「カツカツ♪ 手エ出す相手、選ぶべきだったねえ」

復讐を果たしたカイトは上機嫌に笑い、自らが守ったギルドを見て一安心するのであった。

V S ジョゼ

目の前で繰り広げられる闘いを見て、ジョゼは欠伸が出るのを堪える。

ファントムのギルドの最上階。魔導士モードのギルドのコントロールルームでもあったそこは、もはや機能しておらず、また再起動する様子も見られなかった。

目の前にいるのはファントムの誇る鉄の滅竜魔導士ドラゴンスレイヤーガジルと、フェアリーテイルの滅竜魔導士ナツ。

異常な速度でここにたどり着いた彼は初め、事もあろうにジョゼへと突撃したのだ。それを止めたのはガジル。同じ滅竜魔導士として、どちらが上か決着をつけたいらしく、こちらに手を出すなどだけ伝えると闘いを始めてしまった。

周囲の被害を鑑みない戦闘ははつきり言って迷惑であり邪魔でもある。たしかに滅竜魔法とだけあってそんじよそこの魔導士とは比べ物にならない実力を持っているが、ジョゼのように聖十の称号を持つ者にとって彼らの闘いは酷く拙く見える。

殴り殴られが性に合わないというのもあるが、それを差し引いてもだ。

ジョゼの戦闘に置いて自身が血を流すなどあり得ない。得意魔法である幽鬼ジエイドの魔法は、魔力の続く限り兵を召喚できる魔法。それを使えば相手を近づけることなく圧倒でき、今回のようなギルド戦においても有効な魔法だ。

質はたしかに一般の魔導士よりも劣るが、それでも数の力というのは偉大であり、脅威だ。

一体がダメなら二体で。それがダメなら三、四と死を恐れない兵が後から後へと襲いかかるのだ。相手からすれば悪夢であろう。

今回はナツというイレギュラーもあったが、外の状況はこちらが僅かに優勢。エルザの指揮や奮闘が目立つものの、流石に何百と相手をしていれば疲労も溜まる。エルザを倒せば後は烏合の集、殲滅は

容易い。その後ゆっくりと目当てのルーシイを探し当てれば良いのだ。

「エレメント4が全員破れたとは言え、まだ負けてない。その余裕がジョゼにはあった。」

「ハツハアー！」

「ぐあつー！」

鉄を食べパワーアップしたガジルの攻撃がナツにクリーンヒットする。対するナツは傷を受けすぎたせいで力が出ないようだ。

同じ属性の物を食べることで一時的にパワーアップする滅竜魔導士だが、自身の魔法が起因となったものは食べられないらしい。故に自身で起こした火を食べることはできず、ただこうしてやられるしかないのだ。

(しかし、時間がかかりすぎですね)

ギルドマスターであるマカロフは瀕死とはいえ、評議会の横槍も考慮すれば時間は持つて今日の夕刻だろう。それまでにルーシイを捉えるとなると、いささか時間が足りないように思える。

「ガジルさん。そろそろトドメを刺しなさい」

「あいよ。 ってなわけだ。 あばよ、サラマンダー火竜!!?」

口内に魔力を貯め、一気に放出する。滅竜魔導士の十八番とも言えるブレスだ。属性によってその性質は違うが、鉄竜のブレスには鉄の刃が含まれており対象を切り刻むものだ。

直撃すれば死さえ免れない一撃。更には鉄を食べたことにより通常よりも威力の上がった鉄竜の咆哮がナツを包んだ。

「オ、オオオオオオ!!?」

「ナツー!!?」

側で見えていたハツピーの声虚しく、ナツの姿が隠されて、徐々にその声小さくなっていく。ニヤリ、と不敵に口角を上げるガジル。だが、ブレスによって巻き上げられた埃が晴れると目を疑った。

確実にナツを捉えたはずのブレスは、しかしどこからともなくナツの目の前に現れたカイトがそれを防いでいたのだ。

どうやって防いだのかはわからない。だが、カイトの背後にいるナ

ツが死んだ様子はなく、荒く肩で呼吸をしながらもこちらを睨んでいた。

「デメエ……!!?」

「はあ、はあ……カイト……邪魔、すんな」

「カツカツ♪ 減らず口叩けるなら上等。 元気だねえ、ナツ」

ヘラヘラと笑うカイト。 その笑みが無性に腹立たしく、勝負を邪魔されたこともあり怒りに顔を歪ませたガジルが魔法を振るう。

「鉄竜棍!!?」

ガジルの腕が鋼鉄の棍棒のようになりカイトへと迫る。 鉄の滅竜魔法は攻守ともに優れた魔法だ。 鋼鉄の鱗は相手の攻撃を受け付けず、その硬さはそのまま攻撃力になる。

風を突き切り、暴風さえ巻き起こすそれは、しかし突如として現れた白い炎の壁に遮られた。

「チツ!!?」

例え壁に防がれようと関係ない。 そんな自信を持って炎の壁をつきぬけようとするが触れた刹那、猛烈な痛みに襲われた。

反射的に後退し、壁に触れた手元を見る。 傷はどこにもない。 だが痛みは本物であったことを示すように、右手からは所々から煙が燻っていた。

「ファイヤーボール浄化の炎壁。 壁というよりは触れた相手に浄化という名の呪いを付与する、まあ名前負けの魔法だね」

壁の向こうから聞こえる声に歯噛みするガジルを他所に、炎の壁が段々と小さくなっていく。 まるで何かに吸われているように小さくなる壁の向こうに見えた人物を見てガジルは笑う。

桜色の髪を揺らし、炎の壁を食べきったナツは大きく息を零し、胸の前で両拳をぶつける。

「ふう、ぐちそうさん」

「お粗末様♪ そいつは任せたよ♪」

「ああ。 任せとけ」

「ギヒッ! やってみろ!!?」

滅竜魔導士同士の再度のぶつかり合いが始まる中、カイトがジヨゼ

の前に立つ。あからさまにつまらないという顔をするジョゼに対し、カイトは笑顔である。まるで長年の友達であるかのように声をかけるカイトに、ジョゼは頬づえをつきながら答えた。

「やあやあ、マスタージョゼ。先程は手を出さないでいてくれてありがとう」

「なに、このまま終わってもつまらないですからね。多少のサービスも必要でしょう」

「カッカッカ♪　まるで勝機があるみたいない方だねえ」

「そう言ってるのですよ、道化。マカロフは瀕死、エルザも奮闘しているが時間の問題、そして私の目の前には戯けることしかできない愚者。むしろ貴様らに負ける余地などありはしないのですよ」

「カッカッカ♪　自信家もそこまでいけば戯言だねえ」

瞬間、カイトの腕に混沌ノ鎧が展開された。

「その戯言、どこまで続くか楽しみだよ♪」

横一閃に薙ぎ払われる混沌ノ爪。軌道上にあるものを全て破壊していくが、しかし肝心のジョゼの姿が見当たらない。

「戯言ではなく、事実なのですよ」

上から声がして反射的にそちらを振り向くとジョゼの後方に展開された魔法陣から稲妻がほとばしる。耳をつんざく轟音を立ててカイトに直撃する。

勝利を確信して笑みを浮かべるジョゼだが、煙が晴れた先にいたのは白い服に身を包んだカイトの姿。混沌ノ鎧、バージョンカオス・クラウン混沌ノ道化師だ。

全能力を向上させるその魔法は、しかしそれでも完全には防ぎきれなかったようで、口の端から少量の血液が溢れる。

「ほう。それが噂の……」

そう口にした瞬間、突如としてジョゼの腹部に激痛が走り、身体がくの字のまま宙に浮く。目の前には先ほどまで距離が開いてたはずのカイトの姿。室内とはいえ、決して狭くはない距離を一足飛びで超えたらしく、床にはクツキリと靴の形がついていた。

「この……っ!!??」

反撃の魔法を放とうとするが右側からカイトの回し蹴りが飛んでくる。今度はなんとか腕でガードに成功するが踏ん張りの効かない空中では容易く吹き飛ばされてしまう。

転がって衝撃をいなそうとした直後、眼前にカイトの拳が広がる。

「カオス・インパクト
混沌ノ一撃！」

振り下ろされた拳はジョゼの顔面を捉え、その下の床さえも粉碎して二人共々下の階へと落とした。

瓦礫に埋まらないよう空中で身を捻り後退するカイト。ジョゼの姿は瓦礫の山と砂塵に阻まれてよく見えないが手応えはあった。しかしギルドマスター、それも大陸で優れた魔導士に送られる称号聖十大魔導の称号を持つジョゼがこのまま終わるはずがないと気を緩めることはしない。

「本当に滑稽ですね」

そんな声が聞こえた瞬間、反応するより速く背後からの電撃がカイトを強襲。鎧のお陰で軽減できたとはいえ決して無視できるダメージ量ではない。続け様に放たれた地面からの爆発をかわし、ジョゼと対峙する。

不思議なことに対峙したジョゼに先ほど受けた傷は見当たらず、服に汚れすらついていない。ちらりと横目で瓦礫の山を盗み見る。恐らくだが魔法で生み出した幽鬼と入れ替わったのだろうとあたりをつける。

「私の掌の上で踊る貴様は実に滑稽でしたよ。道化の面目躍如といったところですねえ」

瞬間、足元に魔法陣が展開されたかと思うと刹那のタイミングで地面から雷撃が昇る。

自然界ではまずない、魔法ならではの光景に動揺しつつも身体を捻ってかわすカイト。だが、退避した先にも同じような魔法陣。

「ぐっ……いー」

直撃し飛びそうになる意識をなんとか保たせるが、かなりのダメージを負った。それに、魔力量も心許ないのが気がかりだ。

カイトの混沌ノ鎧はエルザの換装とは違い、異空間から呼び寄せて

いるわけではない。魔力を身にまとっている形だ。エルザが呼び出し、魔法を使うたびに魔力を消費するのと比べ、カイトはただ装着しているだけで魔力を消費する。その分能力の向上率は高いのだが。それに、ギルドを守るための防御魔法、マカロフに直接手を下したアリアに頭が血が上っていたせいで必要以上に魔力を消費。短期決戦、それも苦手であろう近距離戦でジョゼを倒そうとしたがそれも徒労に終わってしまった。

エナジードレイン 魔力吸収を行おうにも、これは対象に牙を突き立てなければならぬ技だ。距離を縮めなければ意味がない。そして相手は中、遠距離の戦闘を得意としており、簡単に近寄らせてもらえないはずがない。

はっ、とした瞬間には幽鬼兵がカイトへと殺到。四の五の言っている場合ではない。いまはそんな事を考えている場合ではないのだ。

「混沌ノ爪！」

回転する形で幽鬼兵をなぎ払うカイト。だが、その影に隠れて伸びていた雷撃をみた瞬間、失策だったことを思い知らされる。

カイトの腹を貫く電撃。焼かれたせいで出血はないが、言いようのない激痛がカイトを襲った。

「どうしたのですか、道化？ 痛みさえ嘘にして演じなければならぬいでしょう？ 他でもない、私を笑わせるために」

「カッ、カッカッ……言われ、なくても」

傷を治療するために白ホワイト・ローブ衣を巻き、腕の力で立ち上がろうとする。だが、途中で力が抜けてべしやりと床に倒れてしまった。

面白くないとカイトの姿を鼻で笑い、やる気を出せるためにひとつのことをジョゼは伝える。

「そういえば、貴方はなぜこの戦争が始まったか知っていますか？」

「カッカッ……ルーシイの、お父さんからの依頼……だっけ？」

「それもあります……違う。前から目障りだったんだよ、貴様らは！」

それまで温厚だったジョゼが、不意にブチ切れる。優越感に浸っていた心が、過去を思い出してどこかへと消えてしまった。

「ファントムロードは常にトップにいた。この国で一番の魔力と、一

番の人材と、一番の金があった。……が、ここ数年で貴様らは急激に力をつけてきた。気にいらんのだよ。元々クソみてーに弱つちいギルドだったくせにイ!!?」

「ゲホっ……カッカツ、くだらないねえ」

「黙れ。我々は物事の優劣をはつきりさせたいだけだ。それに加えハートフィリア財閥の娘をギルドに迎えただど？ハートフィリアの金を貴様らが自由に使えたとしたら間違いなく我々よりも強大な力を手に入れる！それだけは……それだけは許してはおけんのだア!!?」

会話の中、ゆつくりと近づいていったジヨゼがカイトの腹を蹴り上げる。ちょうど傷口にヒットしたそれは耐え難く、思わず口から血を吐き出した。

けれど、洗い呼吸をしながらもカイトは笑う。滑稽だと、バカにするように。

「カ、カカ、カカカツ！」

「何がおかしい？」

「いやいや。君たちの情報収集能力のなさに、呆れてねえ」

ジヨゼの足元で今度こそ立ち上がろうと両腕に力を入れる。

「ルーシイはねえ、家出してきたんだよ。家出して俺たちと同じ様な生活して、さ。同じ釜の飯を食べて、笑って、泣いて……立派なフェアリーテイルの一員だよ。家の金なんて使えるはずもない」

ぶしゅ、と音を立てて白衣が血に染まる。もはや回復に回すだけの魔力さえ残っていない。それでも何とか立ち上がり、膝が崩れない様に抑えながらもその目はジヨゼを貫く。

「戦争の引き金も、ハートフィリア財閥も関係ない。お前らは俺の大切な家族に、くだらない理由で手エ出したんだ。滅ぶ覚悟、出来てるだろうね？」

その瞳は瀕死の重傷者の目ではない。俺はまだ戦える、貴様らを滅ぼす、と雄弁に物語っていた。だが、ジヨゼはそれを一蹴する。所詮は死にかけの悪あがきだと決めつけて。

「ふん。事が終われば彼女は我々の一員だ。ただで引き出すと思うか

？ 金がなくなるまで飼いつけてやる。ハートファイリアの財産は全て私の手に渡るのだ」

「カツカツ………凶に乗るなよ、人間」

瞬間、ジョゼの身体が吹き飛ばされる。攻撃を受けたからではない。圧倒的な魔力の余波だ。それも聖十に勝るとも劣らない魔力量。感情の爆発で身体の奥から魔力が湧き上がる現象は確かにあるが、それにしても多すぎる。死に損ないのどこにこんな魔力が、と考えたところでは言葉を失う。

目の前にいるのは道化として言われたカイトではない。それは偽りだったことを鎧を脱いで思い知らされたのだ。

側頭部から生えた一對の雄牛の角に尾

腰から生えた蝙蝠の羽

縦に割れた瞳孔

爪と牙は攻撃的に鋭くなり、牙に至っては口には収まりきらずその先端が端から覗いていた。

これも魔法か、と疑うが本能が告げる。これは自分たちとは違う化け物だと。

「不死ノ王………なんて言っても、こっちが本当の姿なんだけどね」

今までは人であると偽っていた。

醜い過去が人であることを強要した。

故に、人の真似をして生きていた。

だが、今だけは違う。

目の前の人間は必ず潰さなければならぬと実感した。

圧倒的暴力をもって

圧倒的脅威をもって

例え人の身を捨てようとも

例え指を刺されようとも

例えギルドに居られなくなろうとも

故に、今だけは道化の名を捨てよう。

故に、今一度化け物と呼ばれよう。

「さあ、これよりは滑稽劇。舞台役者は総じて笑われる、愉快な劇の始

終戦

「くっ！」

この日、久方ぶりにジョゼは苦悶の声を漏らした。

上体を右にそらせば次の瞬間には鋭利な爪がその空間をなぎ払う。

反撃を繰り出そうにも瞬きの内に悪魔は体勢を整えている。

カオス・クロウ
「混沌ノ爪」

「ちいっ！」

横薙ぎに払われた魔法に両腕を交差してガードするが、いかんせん勢いが強すぎる。身体が浮いた直後、両サイドから伸びた影の拳が

ジョゼを挟み込む。

シャドー・プレス
「影圧迫」

「っ！幽鬼兵！」

押し潰される寸前、後方に召喚した幽鬼兵とジョゼの立ち位置が入れ替わる。これで距離は取れたが油断はできない。相手は人間ではないのだから。

この場で頼るのは自身が最も得意とする幽鬼兵の魔法。魔力の続くかぎり召喚し、相手の視界を覆い尽くさんばかりの数が一斉に飛びかかる。

殺った、と言う思いを嘲笑うかのように、次の瞬間には幽鬼兵の大半が串刺しにされた。槍よりも短く、かと言って短剣よりも長い黒い杭のようなものが弾丸のように打ち出されたのだ。

クロスファイクシオン
「磔刑」

「くそっ！バケモノが！」

やけくそ気味に放たれた雷撃。しかし、その雷撃が届くよりも早く移動し、瞬く間にジョゼの後頭部を掴んで地面に押しつけた。

カイトの異常なパワーアップには秘密があった。それは本来の姿を取り戻したこと。

通常、カイトはこの姿にならないために自身に幾重にも封印魔法を

かけており、それを隠すよう魔力で作った殻に閉じこもるようにして
過ごしていた。そうすることで人として生活はできるが、封印や擬
態に回す魔力でその実力は本来とかけ離れていた。

しかし、今は違う。封印に回す魔力もいらず、自身を閉じ込めてい
た檻はない。枷が解かれたカイトは湧き上がる力を思いのままに振
るう。

「滑稽劇はこれにて終い。幕引きの時間だよ」

口を大きく開け、その牙をジョゼに突き立てんと動くカイト。
魔力吸収による回復、そしてジョゼの戦闘不能を目論んでのことだ。

しかし、カイトは侮っていた。

人の真似をしていても化け物は化け物。人の感情による動きを予
想していなかった。

「な、め、る、なあああ!!?!!?」

ただでさえ屈辱的な構図に加え、上に乗っているのは忌々しいフェ
アリーテイルの一員。ジョゼの感情に火がつき、自損覚悟の攻撃が放
たれる。

地面に展開された魔法陣。刹那、ジョゼ諸共雷撃が天へと昇る。
虚を突かれたカイトが一瞬怯み手を離れた。そして、自損を覚悟し
ていたジョゼに怯みはない。痛む体に鞭を打ち、展開された魔法陣
から飛び出す人の怨念のような魔法がカイトの心臓を貫いた。

例え化け物であろうと、生物である以上心臓を突き刺せばひとたま
りもない。

勝利を確信し、ニヤリとほくそ笑むジョゼだが、その目を疑う。

確かに致命傷を負ったはずのカイト。しかし、傷口を抑えながらも
立ち上がったのだ。

「そんな、バカな!!?」

「カッカツ……俺を殺したきや、銀の杭でも用意することだ、ね！」
みるみる内に傷が塞がったかと思えば、次の瞬間にはジョゼの頬に
拳を入れる。流れるような動きでもう片方の腕でジョゼの胴体を
薙ぎ払った。

皮膚を切り裂かれた嫌な感触に初めてジョゼがヒツ、と声を上げ

た。熱くなる傷跡とは逆に感じる寒気。まるで氷塊の中に閉じ込められたかのような全身から感じる悪寒。

(死!!?)

死への恐れがジョゼの頭の中を支配する。

「カッカッカ!!?」

笑う。

微笑う。

破顔う。

嗤う。

目の前の化け物悪魔はジョゼの姿を見て嘲笑する。

後悔した——これは手を出してはいけなかったのだと。

悔った——道化だと呼ばれる者を。

恐怖した——自分とは違う、目の前の存在に。

「混沌カオス・クロノ爪!!?」

恐怖から髪が一気に白髪へと変わったジョゼへとお構いなしに払われた魔法。抵抗する力もなく、ジョゼは壁へと叩きつけられ泡を吹いて気絶した。

ガラガラと、ファントムのギルド全体が震え、上の階が崩壊する。ナツの方も決着がついたのだろう。完全に崩壊してしまいう前に用事は済ませておこうと足早にジョゼに近づく。

ジョゼの頭を少し傾けると無防備な首が晒される。ゴクリ、と思わず唾を飲んで口を開けた。

「待たんか!」

その牙がジョゼに触れるか否かのところで聞き慣れた声が聞こえた。

思わずそちらを振り向けば、そこにマカロフがいた。

「マス、タ……」

「……もうよい、カイト。戦争は終わりじや」

子供をなだめるような、そんな優しい声。異形の姿のカイトを見ても、マカロフの対応は変わらなかった。

でも、と抗議しようとするカイトだったが、マカロフの優しい瞳を

見て言葉を飲んだ。親が矛を収めろというのだ。子である自分がこれ以上異議を申し立てる必要はないと感じて。

そのまま羽やツノを仕舞い込むと途端に溢れ出す虚無感と疲労。倒れ込むカイトを、マカロフが優しく支える。

「お主の怒りはわかる。じゃが、無理まではするな。そのためのギルドなのじゃから」

「……うん。ごめん」

「しばし休むがよい。目を覚ますころには、全て終わっておる」

その言葉に促されるように瞳を閉じると、安らかな寝息を立てるカイト。

ふう、とマカロフがため息を零す。それは安堵からのものだ。

「近寄るな、人間」

初めてカイトと出会ったときに言われたその言葉。

当時はボロボロの状態で人を憎悪していたカイト。いや、今もなのだろう。

ギルドではヘラヘラと戯けているが、心の奥底では自分たち人間を憎んでいるのだろう。

だからこそ本来の姿をひた隠し、悟られないよう仮面をつけて誤魔化している。

悟られないために。

距離をあけるために。

難儀なものだとまたため息を溢し、マカロフはその場を後にするのであった。



ふと、目を覚ます。朝日を感じての気持ちの良い目覚めではなく、並々ならぬ危険を感じて。

反射的に横に転がると、数秒前までいた空間に剣が突き立てられた。

「いい加減、目を覚ませー」

「おう!?？」

一体何がなんだかわけがわからない。寝起きの頭を必死に働かせ、状況を確認する。

崩壊したフェアリーテイルのギルド、それ以上に形を失ったファントム
のギルド。ギルドメンバーの面々に、それを取り囲む白い服を着た部隊。みつともなく大泣きするマカロフ、そして件の下手人は緋色の悪魔。

「…………エルザ、モーニングコールにしては激しすぎじゃないかな？」
ふあ、と大欠伸をかますカイトに向けてもう一度剣を振り上げる。その凶刃は周囲の手によって抑えられてことなきを得た。

しかし、これはどういうことかと改めて周囲を見渡す。

周りを取り囲んでいるのは紋章から魔法評議員傘下のルーンナイト。強行拘束部隊として名高い彼らの捕縛術は感嘆するものがあり、現に逃げようとしたナツが拘束されていた。

評議員が介入してくることなど予想できる。ギルド間抗争への対処だろう。だが、事は既に終わっており、彼らの仕事といえは事情聴取と捜査ぐらいだろう。なんともまあ仕事が早い、と心の中で毒つき両手をあげる。

こう言った場合、下手に抵抗しない方が身のためだと知っているからだ。

「カツカツカ♪ ファントムに喧嘩は売られるわ、評議員に睨まれるわ、踏んだり蹴ったりだねえ」

「このっ！人ごとのようにっ！」

「お、落ち着け、エルザ！今更だろ！」

「だ、誰か手エ貸せ！これ以上評議員からの印象下げたらまずい！」
視界の隅でエルザが今にでも襲い掛からんとしているが黙殺する。疲労感も勝り、これ以上考え事をしたくないのだ。

「それではこれより、事情聴取を行う。呼ばれた者はあちらの仮設テントに向かえ」

それから次々と名前を呼ばれ、建てられた仮設テントの中に案内されるフェアリーテイルの面々。さて、今日の夕食はどうしようか、

と考えていたところでカイトの名が呼ばれた。

特段抵抗する様子を見せず、命令に従い案内されたのは他のテントより少し離れた場所にあるテント。先にマカロフやルーシイが案内されていたところを見るに、今回の戦争の重要人物、及び責任者、もしくは特にやらかした人物への特別措置だろう。

ジョゼ戦とアリア戦
心当たりがある身としては受け入れねばならないだろう。

「……………いいか？失礼のないようにしろ」

「カツカツカ♪ 流星に暴れたりしないよ♪」

恐らく部隊でも隊長クラスの責任者が相手なのだろう。

まあ、今回は殴られたから殴り返したようなものだ。法律を見てもこちらの落度は少ない。さすがに無罪放免とまでは行かないまでも減刑はされるだろう。

失礼しまゝす、と軽い調子で中に入るとピクリ、と一瞬身体が強張る。

「やあ、待っていたよ」

目の前にいるのは青髪のイケメン。左頬に謎の模様の刺青があるが、それさえもその美貌を引き立てる要因のひとつとなっていた。

彼の名はジークレイン。若くして評議員の席に座る、いわゆるエリートである。

「……………おやおや、評議員の1人がこんな小さな小競り合いに顔を出すなんてね♪ これは予想外♪」

「小さなイザゴザでも全力で取り組む。それが俺の評議員としての指針だね。全ては魔法界の秩序のためさ」

にこり、と。

周囲に花が舞いそうな笑みでそう答えるジークレイン。

嘘くさい、と思いつつもそれは言葉に出さないようにする。相手は間違いなく評議員のひとり。ここで心象を悪くすればフェアリーテイルの解体など簡単に提案できる立場だ。

さすがにそんな暴挙は犯さないとはいえ、それでも警戒すべきだと本能のままに従う。

何かをされた訳ではない。だが、こいつは危険だと本能が告げる

のだ。だからカイトはジーククレインが苦手だ。もつとも、カイトにとって殆どの人間が苦手ではあるのだが。

「それでそれで？ 評議員様がなんでこんなところに？ デスクワークするには不向きだと思いませんか？」

「そう警戒しなくていい。事情聴取といつても形だけのものだ。大まかな事は先の2人に聞いてるよ」

「なら、俺が話すことはないね♪ どうする？ ジャグリングでも見せた方がいいかな？」

「いや、是非とも君の話聞かせてもらいたい。道化^{ドラクル}ーいや、悪魔の話ね」

瞬間、テントの中を濃厚な殺気と魔力が支配する。まるでその場だけ重力が何倍にでもなったかのような重圧。ミシリ、と備え付けの机が軋む。

それらを向けられているジーククレインは涼しい顔をしてそれらを受け止めていた。

「……………どこでそれを？」

普段とは似ても似つかない、ちの底から響くようなカイトの声。

それに対しジーククレインはさも当然とばかりに答えた。

「内緒だよ」

「……………そう」

暫く思案したカイトは殺気を引っ込める。

ここで事を起こしても意味がないと判断したからだ。

パチパチ、とジーククレインが手を叩く音が木霊した。

「素晴らしい魔力だ。是非とも俺の部下に欲しいよ」

「生憎、フェアリーテイルの方が性に合ってるよ。それに、勧誘するにしても思念体を遣すような人の部下には間違ってもならないさ」

カイトにそう指摘されると、ジーククレインがニヤリと笑いその姿にノイズが走る。

思念体とは言わば分身を作り出す魔法だ。例え距離があろうともその場所を知っていればいつでも分身を作り出すことのできる便利な魔法。

思考や視界が術者とリンクしているが、そのかわり思念体で魔法を操る事はできず、また視界が2つという異常な光景を脳が処理しきれないため発動中は身動きが取れない、主に情報収集に使われる魔法だ。

バレると分かっていたのか、ジークレインは特段驚いた様子は見せず席を立つ。

「安心してくれ。別に君の正体をばら撒くわけじゃない。悪魔としての君はもちろん、道化としての君にも助かっている部分はあるからね」

「ホント、暇人だねえ」

やれやれ、とばかりにため息を吐くともう戻っていいかと聞く。構わないよ、とジークレインが告げるとそそくさとテントから出てしまおうカイト。その後ろ姿を見ながらジークレインはほくそ笑む。

「残念だよ、ドラクエル悪魔。君がいれば計画を大幅に進める事ができるのに」
そう言い残してジークレインの思念体は姿を消す。

最後の言葉はカイトに聞こえる事なく、テントの静寂の中へと消えていくのであった。



事情聴取から1週間後。

ようやく事情聴取から解放されたとはいえ、肝心のギルドは破壊されたままだ。業者に頼もうにも、ギルドの台所事情は火の車。依頼する余裕もない。

ならば、とマカロフが提案したのは自分たちの手でギルドを立て直すことである。

ギルドのトップがそう提案したのならと反対意見も特に出ず、むしろ楽しそうだとばかりに意気揚々とギルド再建に取り組むフェアリーテイルの姿がそこにあった。

ナツとグレイの喧嘩する声が聞こえる。どうせまた些細なことだろうと特に注意を向けることもなく、案の定すぐにエルザの制裁が

入った。

彼女も彼女で土木作業用のつなぎに換装してやる気である。カイトからすればよくよく理解できないことだ。人間はよく働くなあ、とどこか他人事だ。

「んっ……」

作業現場の裏手、人の目が届かない場所でミラジエーンの甘美な声が漏れる。さすがにやり過ぎか、と口を止め首筋から顔を離す。

離れた首筋には2つの穴が残っており、それもミラジエーンの髪によつてすぐに隠された。

今回、カイトは自身の姿を解放した。

そこに問題はないのだが、解放してしばらくは高揚感と本来持っている吸血衝動に悩まされることとなる。人の真似をして生きていくためには隠していかなければならないもの。そこで協力してくれるのがミラジエーンだ。

フェアリーテイルでも数少ないカイトの正体を知る1人。

感謝はしているが、それは人が動物にかけるような感情。心の底から、というわけではない。

「はあ、はあ……もう、いいの?」

僅かに紅葉した頬、潤んだ瞳、熱を持つ呼吸。

人からすれば魅力的かもしれないが、カイトはそれを理解できない。人が動物の発情を見てもなにも感じないように、生物として違うカイトに人の魅力はわからない。

しかし、それを心の奥底に沈め笑顔の仮面を被る。人と同じように笑顔は相手に良い印象を与えるのは数少ない共通点だろう。

「カツカツ、あんまり吸い過ぎると歯止めが効かなくなるからね♪」

「あら、私は構わないわよ?」

「ミラちゃんを干物にしたら殺されるよ♪」

主に大陸中のファンからね、と付け加え口元の血を拭う。鼻のいいナツにはバレるかもだが、そこは上手く誤魔化すでしょう。

「毎度毎度ありがとね、ミラちゃん♪」

「いいのよ、カイトにはお世話になってるから。それより調子はどう

？」

「うーん。そうだねえ、この調子ならすぐに落ち着くね♪」

やはり動物の血よりも人の血の方が早い、と言葉を口の中で転がしながら髪の中に残っていたツノを収納する。この時ばかりは頭部に違和感があるが、もう慣れたものだ。少しばかりすれば違和感も消えてしまう。

「カイトー！」

ちょうど違和感に慣れてきたころ、突然ナツが顔を出す。場所の通達をしていなかったにも関わらず見つけ出したのは二オイで探し出したからだろう。

「やあ、ナツ。元気そうだなにより「行くぞー！」ぐえっ」

挨拶もなしにカイトの姿を見るや否や襟を掴み引きずりながら何処かへと連れて行く。一部始終を見ていたミラジエーンだが、何を言っても無駄だろうと悟り手を振りながらそれを見送る。

ちなみにカイトだが首元が締めまり、軽い酸欠に陥っていたがそれを心配する者はどこにもいなかった。

そのままエルザ、グレイ、ハッピーと合流。なんでも実家に帰ると書き置きしたルーシイを迎えにいくらしい。しかし、誰もハートフィリア財閥の本拠など知らず、知っているであろうカイトを拉致したとのことだ。

無論、カイトを先頭に歩かせても着くはずがないので移動は魔道四輪で。幸いにもマグノリアからここまで離れておらず、夕方になる頃には建物の影が見える距離にいた。

「ルーシイーーー!!？」

道すがら、目的の人物を見つけると大喜び。ハッピーなどは泣いてその胸に飛び込んでいた。

てつきり責任を取ってやめると思いきや、本人曰くただの墓参り。フェアリーテイルを抜ける気はそうそうないようだ。それを聞いた一同一安心、夕焼けの中帰路につく。

そうしてふと、誰かが思いついたように、何気なく言った。

「それにしても大きい街だ」と。

「あ、ううん。ここは庭だよ。あの山の向こうまでがあたしん家」

ルーシイが指差すのは遙か先の山。ちなみに庭と呼ばれた場所ですえ十分な広さであり、マグノリアの三分の1の面積はあるだろう。

「お嬢様キターーーー！」

「さりげ自慢キターーーー！」

「カツカツカつかツカツカツ！」

「ナツとグレイ、カイトもやられました！エルザ隊長、一言お願いします」

「空が……青いな………」

「エルザ隊長が故障したぞーーー！」

そんな小芝居をひとつとして、ルーシイとともに歩き出す。

きつと、この先に続くであろう未来を信じて。

チーム結成

「みんなー！今日から仕事の受注再開するわよー。仮説の受付カウンターだけどガンガン仕事やろーね！」

ミラジエーンの一言をきっかけに、担いでいた木材を投げ捨てて男たちが待つてましたとばかりに受付ボードへと駆け寄る。

ここはフェアリーテイル。少し前に吹き曝しにされたギルドでもいつも通り元気すぎる、素敵なギルド。

「うおおおおおっ !!？」

「仕事だ仕事ー !!？」

我先にと受付ボードに駆け寄れば、始まる始まるクエストの取り合
い。

俺が先だ、いや俺だ。と気がつけば殴り合いに発展していた。普通誰かしら止めに入るかもしれないが、ここではこの光景こそ普通。むしろもつとやれと野次を飛ばす者さえいる。

「なにアレ」

そんな光景を見て零すのはルーシイである。

先のギルド間戦争の元凶とも言うべき人物だが、そんなことを気にする者はフェアリーテイルにいない。むしろ、よく帰ってきてくれたと歓迎されていたほどだ。

それはさておき。

「普段はお酒飲んでダラダラしてるだけなのにイ」

「あはは」

ルーシイの軽口にそれもそうだとばかりにミラジエーンが応える。確かに普段は仕事なんてしない、酒と飯にありつければいいとばかりにだらけ切っているが、しかしだからといってここ数日仕事ができず、変わりにあるのは慣れない力仕事ばかり。

この場からの逃走もでき、さらには金が手に入るとするのは救いであつた。

「そーいやロキいないのかなあ」

「あーあ……ルーシイもとうとうロキの魔手にかかっちゃったのね」
「違いますー！」

ロキとは女性購読者の多い週刊ソーサラと言う雑誌で、彼氏にしたい魔導士ランキング”に毎週上位に食い込むフェアリーテイルの男看板。

しかし、それゆえにというべきか、その女癖はかなり悪く一つの街にロキの彼女（自称）は最低10人はいると言われるほどだ。本人曰く一線は超えてないと言っているが、そんなものが信用されるわけはない。

「なんか、鍵見つけてくれたみたいで。一言お礼したいな、って」

「うーん……カイト、ロキ見かけた？」

「……あー、見てないねえ……」

「てか、なんでカイトはそんなに落ち込んでるの？」

ミラジエーンの隣、ガスコンロに鍋を置きぐつぐつとシチューを煮込むカイトにいつもの笑顔はなく、珍しく哀愁漂う表情をしていた。

こんな姿をルーシイは見たこともなく、何事かと心配しているとミラジエーンがそれに答える。

「なんでもギルドのキッチンが修復不可能なまで壊れてたのが、シヨックみたいなの」

「そんなことで!!?!!?!!?」

「そんなこととはなんだい、ルーシイ。いいかい？壊れた中にはそれは見事なシステムキッチンがあつてだね。火加減の調整も抜群、備えつきのオーブンだつて食材の旨味を逃さないように火の当たり方を計算されて作られた、それはもう見事なものがー」

「ごめん。あたしが悪かったから、それ以上はやめて」

これは話が長くなるやつだ。

直感的にそう捉えたルーシイはいち早く話題を切り上げる。まだ語り足りなかったのか、若干不服そうにしながらも口をつぐんでシチューの味見をする。

「そういえばルーシイ。星霊は鍵の管理にうるさいって聞いたことが

あるけど、怒られなかったの?」

黒胡椒を少々足して再び味見をしながらも、カイトがそんなことを問う。それを聞いてあー、と答えたルーシイはその時のことを思い出したのかカウンターにうつ伏せる。

「そりゃあ、もう……怒られるなんて騒ぎじゃなかったワヨ……。思い出しただけで尻が痛く……」

「カツカツカ、そりゃ災難だね。さすってあげようか?」

「セクハラよ、それ」

「カイト?」

「ミラちゃん、こわーい♪包丁は人に向けるものじゃないからね?」

「冷やしてやろうか?」

「それもセクハラだから、グレイ」

「ルーシイ、赤いお尻見せてー」

「堂々としたセクハラだから、ハッピー!」

「もっとヒリヒリさせたらどんな顔すっかな、ルーシイ」

「鬼か、おまえは!!?!!?」

どこで話を聞いていたのか、いつの間にやらグレイ、ハッピー、ナツの3人が集まっていた。ナツとハッピーに至っては好奇心といわずら心が合わさったようにワクワクと、ニヤニヤとしている。

その時だった。

「もういつぺん言ってみろ!!?!!?」

エルザの怒号が聞こえたや否や、飛んできたテーブルがナツに直撃する。しかし、周囲の視線はナツではなくエルザ、ひいてはその対面に座る人物へと集まる。

「この際だ、ハッキリ言っやるよ。弱エ奴はこのギルドに必要なエ」
エルザの怒号を受けても尚怯む事なく、それどころか煽るかなようなセリフを吐く青年。彼の名はラクサス。フェアリーテイル最強候補に挙げられる1人である。

性格は大胆不敵、豪胆無比といった言葉が似合い、最強を豪語する。故に、今回のファントムの件には我慢ならないようだ。

「オメーだよ、オメー」

ラクサスに指差されて矢面に立たされたのはチームシヤドウギア。今回の戦争の引き金ともいえる3人を見て、ラクサスは傲慢に笑う。「元はと言えばオメーらがガジルにやられたんだって？つーかオメーら名前知らねえや、誰だよ？ 情けなえなア、オイイ」

レビイたちを罵倒しながら高笑いするラクサス。言い返そうにも言われていることが全て事実であり、反論することもできないチームシヤドウギアの3人。

「ひどいことを……………」

「これはこれは、さらに元凶のねーちゃんじゃねーか」

仲のいいレビイがやられているのを見て思わず口から不満を零すルーシイ。それが聞こえたのかラクサスが噛みつくが、それを後ろにいたミラジエーンが止める。

「ラクサス！ もう全部終わったのよ。誰のせいとかそういう話だつて初めからないの。戦闘に参加しなかったラクサスにもお咎めなし、マスターはそう言ってるのよ」

「そりやそうだろ、オレには関係ねえ事だ。ま、オレがいたらこんな無様な目には合わなかったがな」

仲間を仲間とも思わない発言。然しものミラジエーンも怒りを隠そうとせず、エルザに至っては剣を換装しようとしていた。

しかし、それよりも早く動いたのはナツだった。

「ラクサス、てめえ!!?!!?」

「ナツ!!?」

怒りを露わに、拳を振るナツを見てもラクサスは笑みを崩さない。ナツの愚直なまでの素直さは好ましくもあるが、だが所詮はその程度。実力も足りなければ、その拳さえこの身に届きはしない。

余裕綽々とした笑みを浮かべ、身体を雷に変えて移動する魔法を使うおうとするが、謎の違和感がラクサスを襲う。

(魔法が発動しねえ?)

いや、発動しないというよりは何か引つ張られて足止めを食らっているような感覚。違和感の元を辿り足元を覗けば影から出た手がラクサスの脚を掴んでいる。

それを振り払うよりも早くナツの拳がラクサスの頬を叩いた。

衝撃により飛ぶ、ラクサスのつけていたヘッドフォン。しかし、ラクサス本人は下半身だけでその衝撃を受け止めてナツを睨む。

「てめえ……」

お返しとばかりにナツを視界の隅に殴り飛ばすと、下手人をにらみつけた。

「何のつもりだ、カイト!!?」

「カッカッカ」

ラクサスの睨みもなんのその。陽気に笑うカイトは肩を竦めて答える。

「何のつもりも何も、流石に言い過ぎだよ。今回はナツの一発で手打ち、そんな物語ストーリーでいかがかな?」

カラカラと笑うカイトを見て忌々しげに舌打ちをする。

この場でやり合ってもいいが、昔からこいつとの戦闘で決着がついた試しはない。必ず引き分けに持ち込まれるのだ。

面倒な戦闘を起こすくらいならばと、ラクサスはその場から背を向ける。

「俺がギルドを継いだら最強のギルドを作る!てめえら雑魚どもを削除した、最強のギルドだ!」

「そう、それは素敵な夢だね♪けど、妄想も過ぎれば痛いだけだよ」

「黙れ!カイト、てめえは真っ先に消してやる。首を洗って待ってる!」

それだけ言い残すとラクサスの身体が雷となり、その場から立ち去る。緊張の糸が解けたように、その場にいた全員がため息をこぼした。

「継ぐって……何ぶっ飛んだこと言ってるのよ」

あんな男にマカロフがマスターの座を譲るはずがない、そんな確信めいたことを呟くルーシィ。だが、それがそうでもないのだとミラジエーンがため息混じりに口を挟む。

「それがそうでもないのよ。ラクサスはマスターの実の孫だからね」

「えーーーーーー!!??!!??」

「だからマスターが引退したら、次のマスターはラクサスの可能性が
すごく高いの」

「そ、そんな……………」

「まあ、マスターは世襲制じゃなくて指名制だから希望はあるけど
ねえ」

含みのある言い方をしながらシチューを味見するカイト。

確かに世襲制ではないが、不慮の事故又は指名せずに天寿を全うし
た場合その親族にマスターの権限が与えられることは法律にある。
滅多にないとはいえ、前例がないわけでもない。

早く次のマスターを決めればいいのに、と他人事のようなセリフを
零しながらコンロの火を止めた。

「だー！ー！！？まだ勝負はついてねエぞ、ラクサス！！？」

「もう行っちゃったよ、ナツ」

「なに！！？あんのヤロオ……………！！？」

「もういい。あいつに関わると疲れる」

遅い復活を果たしたナツにそう声をかけるハッピー。未だ怒りが
収まらないナツをエルザが制し、そうだと思いついたように提案し
た。

「それよりどうだろう、仕事にでも行かないか？」

「え？」

「もちろん、グレイとルーシイも一緒だ」

「え！！？！！？」

「はい！！？」

「鉄アイゼンヴァルトの森の件から一緒にいる気がするしな。この際チームを組まな
いか？ 私たち5人で……………ハッピーを入れて6人か」

エルザの提案。それはラクサスショックを覆すには十分なニュー
スだった。周囲の者たちはそれに賛成。お前らが最強チームだ、と
口々に囁立てる。

いがみ合うナツとグレイもエルザの一声で承諾。それと、と付け加
えてカウンターの裏に手を伸ばす。

「当然、お前も頭数に入っているぞ。カイト」

「カツカツカ……お聞きしても？」

「今回のことで目を離せないことがよくわかった。不服だが、私自らお目付役を買ってやろう」

「拒否権は？」

「新型のキッチン機材でどうだ？」

「喜んでついてくよ♪」

現金な反応に、思わずそれでいいのかとツツコむ一同。エルザが怖いので心の中でだが。

「早速仕事だ。ルピナス城下町で暗躍している魔法教団をたたく。いくぞぞ」

「「おおおおおおっ!!」」

掛け声高らかに目的地を目指す5人と1匹。

ここにフェアリーテイル最凶チームが結成されたのだった。

余談であるが、その後案の定やりすぎた面々が街を半壊させ、引退を考えていたマカロフが引退なんかしていられるかと躍起になったとのことである。

束の間のバカンス

「海だー!!?!!?」

「カッカッカ♪……………なんで?」

チーム結成していくばくか、フェアリーテイル最強^{最凶}チームの面々はリゾート地として名高いアカネビーチに来ていた。白い砂浜、青い海、太陽に照らされる美しい肌。

なるほど、人はこういったものも好きなのかと現実逃避しながらもカイトはなぜこうなったかを思い出す。

事の発端は先日、週刊ソーサラで上位人気を誇るイケメン、ロキが突然フェアリーテイルを辞めるとだけ言い残して失踪。

ギルド総出で探し出す中、ルーシイがそれを発見。その際、ロキの正体が星霊であることが発覚。昔、間接的にとはいえ契約者を殺めたロキは星霊界を追われ人間界へ。本来、未契約の星霊が人間界に滞在することはできず、現界するだけで魔力を奪われる。

今まで持ち前の魔力で耐えてきたロキだが、それも限界。そのまま消滅しそうなロキを救ったのがルーシイだ。

ルーシイはその場に現れた星霊王に打診して、ロキの身を星霊界へと送り返し、その際契約を交わした。後日、彼女たちと行く予定だったというアカネビーチの招待券をお礼として渡してきたらしい。

ちなみに、ロキは偽名であり、本来の名は獅子宮のレオ。なんともまあ、女性関係の噂が絶えない人物の名前とは思えないカッコよさである。女性関係の厄介事を何度か持ち込まれた身としては腑に落ちないものだ。

具体的にはダブルブックングしてしまったので助けに来てくれや、貴族の娘に手を出して面倒ごとを賜ったので助けてくれなど、どれを思い出しても苦いものしかない。

以上が移動中に聞いた事の顛末であり、その末の現状である。

私用で街を出ており、帰ってきた瞬間縄で簀巻きにされた経緯でもある。

なるほど、どうやらエルザはまたも大事な場面にいなかった自身にお怒りのようだ、とどこか他人事のように当たりをつける。諦めている、ともいえるが。

助けを求めようにも男連中はすでに海の中ではしゃいでいる。救いの手など望むべくもない。

「さて、覚悟はできたか？」

「唐突だね、エルザ」

悪戯を目論む悪戯っ子のような、ともいうべきか、実に生き生きとした表情のエルザがカイトの前に立つ。このような表情を見るのはいつ以来だろうか。……いや、よくよく考えてれば頻繁にしていた。主にカイトへの制裁のときや甘いものを食べている時などである。

「なに？このままスイカ割りのスイカ役でもさせられるの？それとも砂の中に埋めて放置？」

「私をなんだと思ってる」

「悪魔も裸足で逃げ去るような暴君女王様♪」

思わず、といった調子でそう告げ、次の瞬間にはカイトの身体は宙を舞っていた。確認するまでもなくエルザの仕業である。

あの細腕のどこにこんな力があるのやら、と達観した表情を見せながら着水。ドボン、と一際大きな水飛沫があがる。当然だが、簀巻きにされた状態で泳げるはずもなく、そのままカイトは沈んでいく。

「ちよ、エルザ!?..?」

「安心しろ、ルーシイ。引き揚げられるように縄は手元にある。10分もすれば仕置きにはいいだろう」

「呼吸の限界って知ってる?」

さすがにやり過ぎだろうと側にいたルーシイが慌てて縄を引っ張るが、いくら手繰り寄せてもカイトがあがってくる様子はない。それどころか引き揚げられたのは縄の先だけ。どこかで切れた様子もな

く、どうやら縛り方が甘かったようだ。しかし、拘束が解かれたはずの本人の姿はどこにもない。

「……………ああ、そう言えばカナツチだったな」

「グレイツ！ナツウ！！？」

「ああ？」

「んん？」

ふと、思い出したようなエルザの呟き。大急ぎで海の中で喧嘩する2人に呼びかけて回収を頼むルーシイ。なんとか回収されたカイトの呼吸が一時的に止まっていたが、腹に溜まった水を押し出してなんとか事なきを得た。

泣いているのは塩水のせいだとは本人の言である。

さて、そんなこんなで太陽も沈み、一行はホテルへと。

部屋で一休みするのもいいが地下にカジノがあるということで、それぞれテーブルで賭け事に励んでいた。

戦績で表すなら一位は圧倒的な運でポーカーを勝ち上がるエルザ、二位は負けることもなくかと言って大勝ちするほど稼ぎがないグレイ、次点でルーレットテーブルで騒ぐナツとハッピーだろう。ちなみにルーシイは賭け事に興味はなくエルザの戦績にはしゃいでいた。

「おや、ここにいたんだ」

「あ、カイト。……………真っ黒ね」

ふと、声をかけられてそちらを向けばカイトがいた。いるにはいるが、その肌は真っ黒に焼けている。グレイとナツも小麦色に焼けているがそれ以上だ。沈められて以降、ずっと日陰でのんびりしていたのである。

肌が弱くてね、とは本人の言であるが、実際は種族的な弱点である。本来の姿であれば陽の下に出れば燃え上がるのだが、封印している現在には肌が焼ける程度で済んでいる。

その焼けた肌も魔法で治癒すればすぐに治るのだが。

「む、カイト。お前の方はどうだ？」

「カッカッカ♪ やっぱ俺には賭け事は向いてないね♪」

ひらひらと両手を振って何も持っていないことをアピール。開始10分、ブラックジャックで負け越したカイトはその後ずつとブラブラしていただけだ。間違いなく今回の最下位だろう。

「そうか。運気が下がるからあまり近寄るなよ」

「さすがに酷いよ、エルザ」

「ほら、カイト。このチップあげるから、向こうで遊んでて」

「ルーシイ、悪ノリはやめようね♪……え、マジなの？」

真ん中に10と書かれたチップをいくつか握らされ、その場を離れるカイト。なんだろう、最近扱いが酷すぎて腑に落ちない。世界が優しくないと申すのかもしれないが。

嫌われるような事をした覚えはないのだが……。やはり、チーム結成後たびたび私用で抜けているのが悪いのだろうか？私用といっても主に目的地に着くまで迷っているだけなのだが。

顎に手を当ててどうしたものかと考えていればふと、ひとつのテーブルが目についた。

テーブルに座っているのは1組の男女。片方はグレイだが、首からフェアリーテイルの紋章を下げた彼女は誰だろうか、と頭を悩ませる。少なくともギルドメンバーの誰でもないのだが。

「にやっ!?」

よそ見をしながら歩いていたせいか、人とぶつかってしまった。体格差のせいか、倒れたのは少女の方。ネコミミのようなキャップを被り、頬に髭のペイントをした少女は痛そうに腰をさす。

「おっと、ごめんね♪よそ見してたよ♪」

「にやあ。大丈夫、こっちも人探ししてたから」

差し出した手を掴んで立ち上がる少女。

「ありがと、おにーさん。元気最強？」

「うん？そうだね、最強だね♪」

「にやあ、元気最強！」

そんな身のない会話をしていると、不意に少女がなにかにぴくりと反応する。

「……………うん、わかった。そっちに向かうね」

念話の魔法だろうか。少女が小声で会話し、邪魔になるだろうと
その場を去ろうとした瞬間、突如として会場が闇に覆われる。

「なんっ!??ぐえっ!!?」

突然の暗闇に反応できず驚愕するだけのカイトの首に何かが巻きつく。反射的にそれを掴めば弾力のある紐状のものー恐らくはチューブだろう。それが首にきつく巻きつき、カイトの首を締め上げていた。

「ごめんね、おにーさん。これもエルちゃんのためだから」

呼吸困難でパニックになるなか、少女の声が嫌によく聞こえた。

首を締め上げられて少しして。

会場に灯りが戻ったところ、カイトはバタつかせていた手足の動きを止める。死んだわけではなく、ただ行動の無意味さを悟った故にだ。

(こういう時、この身体であることに感謝するねえ……)

種族的に呼吸を必要とせず、大気中の魔力を吸うことで活動する生物として呼吸器を潰されることは脅威ではない。せいぜい、声帯が潰れて声が出ないくらいの弊害しか持たないのだ。

封印しているお陰で人に近い肉体とはいえ、所詮は人外。所詮は人もどきの身体だ。そういった細かいところまでは真似ることはできない。

それを幸運と取るべきか不安と取るべきかはさておき、チューブの影響だろう、チューブを外そうにも魔法が発動できずにいた。

幸いにも封印魔法の方に影響は見られず、突如として本来の姿を晒すことはない。しかし、どうしたものかと目を瞑って考えていれば聴き慣れた声がする。

「おい、大丈夫か!?」

声の正体はグレイだ。

無事を示すように手を挙げて応え、ジエスチャーで首のチューブを外してくれと頼む。瞬間、チューブが凍ったかと思えばパキンと音がして自壊する。

「あゝー……喉痛い。助かったよ、グレイ」

「まさかカイトまでやられてるとはな。あとはナツの野郎か」

「おや、ナツまで。そうなるとグレイも？」

「ああ。俺は大柄の男にやられかけた。ルーシイはチューブを操る女だ」

「俺もルーシイと同じやつにやられたよ。こりやエルザに大目玉だ」

カラカラと笑うカイト。しかし、妙に深刻な表情のグレイを見て何かエルザの身にあったことを察する。殺された線はないだろう。もしそうだとしたらもつと場も人も荒れているはずだ。

残る線は誘拐。なるほど、エルちゃんとはエルザのことだったかと当たりをつける。

「エルザが拐われるとはねえ。不意でも突かれたかな？」

「らしいな。ルーシイ曰く、エルザの昔の顔馴染みらしい」

「それはそれは」

情に厚いエルザのことだ。それはもう効果的面であろう。その情を少しでもいいからこちらに回してほしいものだと思わしなながらも、どうせ無理だろうと諦める。言葉で言って待遇が改善されるのなら、既に実行しているところだ。

「あんの四角野郎ー!!?!!?」

「ちよ、ナツ！待ちなさいよー！」

事の経緯のすり合わせをしていた2人の横をナツが脇目も振らずに駆けていき、その後ろをルーシイが追う。

四角野郎はともかく、ナツもやられたらしい。大方、相手を追いにいったのだろう。こういうとき滅竜魔導士の鼻は役に立つと感心しながら重たい腰を上げた。

「さて、相手がどこの誰だかまだよくわかんないけど、囚われの女王様を救いにいきますか」

「言い忘れたんだが、ハッピーも捕まってるみたいだぞ」

「え、なんで？」

「もちろん、ジュビアもついていきます、グレイ様」

「え、誰？てか、どこから来たの？」

エルザと比べ締まらない指揮であるが、チームの方針は決まった。ナツ曰く匂いがする方向は海。一行は船を借り出し、下手人一行を追うのであった。

楽園の塔

さて、ということでもエルザを追うため小船ローロー借りるといふ名の篡奪に近い形で受け取ったものだがローローを出した一行だが、ここで一つの問題に直面した。

「うぷっ……」

追跡の頼みの綱であるナツが早々にリタイアしたのだ。

乗り物に酔うナツに頼ることはできず、他に追跡手段もないためとありあえずの措置として船を前に進ませる。陸地があればそこでナツを回復させ、方角を示してもらおうつもりだ。

その船上は静けさが支配しており、重い空気が蔓延っている。

原因はなにかと問われればエルザに関してだ。

グレイは仲間が拐われたことに苛立っており、ルーシイはエルザのことをよく知らなかったと後悔しており、グレイにくつついてくる形で同乗した元幽鬼の支配者のジュビアはグレイに八つ当たりされてしゅんとしていた。

「つてかよオ、てめえまで何してんだヨ!!?」

グレイが怒鳴る先にはカイトの姿。

常ならばこのような空気を読まずにヘラヘラとしていそうだが、現在は身体を丸めてコロロンと転がっている。影の魔法でオールを漕いでいるのでふざけては居ないのだろうが、人からすれば苛立ちの原因になりかねない。

「元気だねえ、グレイ。その元気で早く陸地を見つけてね」

「ふざけんな!!? 状況わかってんのか!!?」

「エルザとハッピーが拐われて、行き先もわからない。そんな中、居心地の悪い海の上で必死でオールを漕いでるよ。実に献身的だとは思わないかい?」

「てめえっ!!?」

「ちよつと、グレイ!!?」

ふざけた調子のカイトの胸ぐらを掴み上げ、船が大きく揺れる。制

そうと立ち上がったルーシイがバランスを崩して倒れ込む。あわや海にダイブを決め込みそうになったが、カイトが影の手を伸ばして引き戻す。

「カッカッカ、グレイ。目先の仲間危険に晒しておいて、言葉のひとつもないのかい？……だとしたら君には失望するよ」

「っ!!？」

いつものカイトとは違う、温度の消えた瞳に怯みその手を離す。そしてバツが悪そうにルーシイに謝罪した。

「……すまねえ」

「ううん、大丈夫だから。カイトもありがとう」

「カッカッカ♪ どういたしまして♪……あ、ごめん。やっぱ立つとつらい」

「あ！見えました！」

そのまままた膝を抱えて丸くなるカイト。ジュビアが何かを見ていて声を上げるのはほぼ同時だった。

「何アレ……。塔？」

しばらく進み、ようやくその全貌を捉えることのできる距離まで近づいて見えたのは塔。海の真ん中、それもかなり大きめのソレはどう考えても怪しい。

船着場はあるがそこに止める様なことをせず、近場の岩場に隠れるようにして上陸。回復したナツ曰く、匂いはこの塔の中からすることから潜入することを選んだ。

岩肌から塔へと続く階段を覗いてみるが、警備の人間が複数人、等間隔で並んでいる。塔へと続く道のりは長く、呑気にわたればバレるのは間違いないだろう。

「見張りが多いな」

「気にする事アねえ!!？突破だ!!？」

「カッカッカ。元気なのはいいけどダメだよ♪」

「そうよ。下手なことしたらエルザたちが危険になるのよ」

さて、どうしたものかと考えていると、海の方からジュビアが顔を出す。水の魔法を使いこなすジュビアは身体を水にすることができ、

水中の活動を得意とすることから索敵をさせていたのだ。

「ジュビアは水中から塔の地下への抜け道を見つけました」

「マジか！でかした」

「褒められました。あなたではなくジュビアが、です」

「はいはい」

グレイに気があるジュビアは恋敵ーと勘違いしてるールー
シィに自慢げだ。

「水中を10分ほど進みますが、息は大丈夫でしょうか？」

「10分くらいなんともねーよ」

「だな」

「無理に決まってんでしょ!!？」

「海かぁ。俺は泳げないから陸の方から侵入するよ♪……………あれ？縄が」

いつの間だろうか、カイトの足首に縄がくりつけてあり、その先はグレイとナツが握っている。解こうにも結び目は難解にしてあり、短時間では無理なことが伺える。

「こちらを。水の中に酸素を閉じ込めたものです」

「ねえ、ちよつと?」

「よし、行くぞ!」

「待つて待つて」

「てめえ、声落とせ。バレたらどうすんだ、クソ炎」

「お願い聞いて?」

「はいはい、ケンカしないで行くわよ」

「ちよつ待つ!!?ガボツ!!?」

ザブン、と。

懇願など知ったことか、とばかりに一同海の中に潜る。当然、縄をくりつけられたカイトも共に。それもジュビアの作った酸素を閉じ込めた水をかぶることなく。

呼吸は必要ないとはいえ、この仕打ちはいあんまりではないだろうか。そんなことを思いながらカイトの身体は海の中に沈んで行く。

10分後

「ガフツ!!??ゲホツゲホツ……!!??」

「お、目エ覚ましたか」

ジュビアの案内通り、水中深くにあった横穴は塔の地下へと繋がっており、無事全員がその場にたどり着くことができた。

呼吸の必要ないカイトだが、真似事としての器官は相応にあり、当然口を開けば水も溜まる。それも唐突だったことも災いしてかなりの量を飲み込んでいた。ただでさえ苦手な海、その水を大量に飲み込んだことでコンデイションは最悪である。

「し、死ぬかと思った……。君たち、なんで人の話を聞いてくれないのかな?」

「だって、目エ離したら迷うだろ」

グレイとナツ、悪怖れることもなくそう返す2人に返す言葉もない。実際、塔の中で迷子になるのは確実だろう。

それでも胸に残るもやもやを口の中で転がしていると、唐突に声が地下空間に響く。

「なんだ貴様らは!!??」

声がしたのは頭上。

この空間内を張り巡らされた橋の一部に何人もの兵隊がこちらを見ている。

「やば」

「カツカツカ♪ さて、どうする?」

「ここまで来たらやるさかねえだろ」

「はい!!??」

「なんだ貴様らはア、だと!!??上等くれた相手もしらねえのかヨ!!??」

いち早く動いたのは苛立ちを募らせていたナツ。拳に炎を纏い、近場にあった柱の支柱を殴りつけ橋を破壊。幾人かの兵隊ともども橋が落ちる。

「妖精の尻尾だ、バカヤロウ!!??」

それを皮切りに、兵隊たちも攻撃を開始する。いち早く狙われたの

は女性であり弱そうに見えるルーシィ。だが、侮る事なかれ。フェアリーテイルでは新人の部類とはいえ彼女も最強チームの一角。その柔軟な身体を駆使しながら後退しながら魔法を発動する。

「開け、巨蟹宮の扉!!? キャンサー!!?」

「久しぶりエビ!!?」

出てきたのは背中に蟹の脚を生やし、両手に散髪用のハサミを持つサングラスの男性。襲ってくる兵隊の髪を悉く根こそぎ刈ってしまった。

次に狙われるのは同じく女性のジユビア。しかし、彼女の身体は水でできており、ただの攻撃では傷一つつかない。

「え?」

「なんだこいつ!!?」

ウォータースライサー

「水流斬破!!?」

そうして呆気にとられる敵を高圧水流でなぎ倒す。

受けに甘んじているわけにもいかず、グレイは軽い身のこなしで柱に登るとそこにいた兵士を蹴り倒しそのまま空中に躍り出る。

「アイスメイク、大槌兵!!?」

橋の上にいる数人に加え、その下にいた兵士ごと氷のハンマーが叩き潰し、氷塊の中へと閉じ込める。

シャドービクチャ
「影 絵」

一瞬、カイトの影が揺らめくと、影が四方に飛び散り周囲の影と混ざり合う。道化の手により支配された空間^{劇場}、その声に応えるように影^{観客}が拳を突き出す。

サウザント・ナックル

「千影万雷!!?」

文字通り、幾千にも及ぶ拳の数々は味方を攻撃する事なく、全て兵隊へと突き刺さる。しかし、脇の通路からは今までの倍の人数が顔を出す。望むところだ、とばかりに一同は声を上げるのであった。

しばらくして、ようやく敵の増援が収まると上へと続く扉が1人で開く。

「四角ー！ー!!?どこだー！ー!!?」

登るや否やナツが怒り心頭をあらわにして辺りを見渡す。

通じていた先は出入り口の先にある広間らしく、周囲はしんとしていた。あれほどの数がいたのだ、おそらく見張りの兵も総動員したのだろう。

「ちよつと!!?ここは敵の本陣なんだから大声出さないの!!?」

「下であれだけ派手にやったんだ。今さらこそこそしても仕方ねえだろ」

「それにこの扉、誰かがここから開けたものじゃありませんよ。魔法の力で遠隔操作されています」

「ようするに、既に侵入はバレてるってことだね♪」

敵さんはよつぼどの自信家だねえ、と笑い周囲を見渡す。石造りの塔の内部に変わった様子は見られない。しかし、嫌な雰囲気をカイトは感じていた。

「……………できればさっさと終わらせたいねえ」

「ん?なんか言ったか?」

「なんでもないよグレイ♪それよりルーシイ、その服どうしたの?」

「星霊界の服よ。キャンサーに持ってきてもらったの。水になれるジュービアはさておき、濡れた服をいつまでも着てるのも嫌でしょ?」

乾燥機
「ナツがあるのに」

「あら、ホント!?!?」

星霊界の服に着替えたルーシイを他所に、男メンツはナツの炎を頼りに服を乾かす。そうしていると、長いしすぎたのだろう、廊下の向こうから兵士の一団が駆けつけてくる。

「いたぞー!!?侵入者だー!!?」

「こりねえ奴らだな」

兵士を見るや否や、臨戦態勢を整える一同。だが、その背後から現れた人物が瞬く間に兵士たちを全滅させた。

双剣を持ち、スカートと鎧というどこかミスマッチ感を出しながらも本人の凜とした雰囲気や寧ろ引き立てている、緋色の髪を携えた女性。

「エルザ!!?」

「よかった!!?無事だったんだね!!?」

「カツカツカカ♪ これで一安心だねえ」

「か、かつこいい……………」

一団の向こうから現れたエルザはこちらを確認すると驚愕に打ち震える。

「お、おまえたちがなぜ、ここに……………」

「なぜもくそもねてんだよ!!? 舐められたまま引つ込んだらフェアリーテイルの名折れだろ!!?」

あんの四角だけは許しておけねー!!?と騒ぐナツ。すると見慣れない顔、そして誰なのかに気づいたエルザが少し反応するとジユビアが怯える。

「あの、ジユビアは、その……………」

「帰れ」

簡潔に、ただ一言。

拒絶を表したその言葉は、一同の動きを止める。

「ここはおまえたちの来る場所ではない」

「でもね、エルザ……………」

「ハッピーまで捕まってるんだ!!? このまま戻るわけにはいかねー!!?」

「ハッピーが? まさかミリアーナ……………」

「そいつどこだ!!?」

「さ、さあな」

「よし!!? わかった!!?」

「何がわかったんだよ!!?」

「ハッピーが待つてるって事だ!!?」

今いくぞ、ハッピー!!?とだけ言い残し、ナツはその場を去る。

「あのバカ…………!!?」

「カツカツカカ♪ 元気なのはいい事だよ♪」

「言ってる場合じゃないでしょ! あたしたちも後を追いかけよっ!!?」

「ダメだ、帰れ」

ナツを追いかけようと駆け出す3人を、剣で制止させるエルザ。

「ミリアーナは無類の愛猫家だ。ハッピーに危害を加えるとは思えん。ナツとハッピーは私が責任を持って連れ帰る。おまえたちはすぐにここから離れろ」

「そんなのできるわけない!!? エルザも一緒じゃなきゃイヤだよ!!」

「これは私の問題だ。おまえたちを巻き込みたくない」

「もう十分巻き込まれてんだよ。あのナツを見ただろ」

「……………カイト」

「カツカツ、残念ながら承服しかねるよ。それに俺も知りたいたんだ。この場所舞台でどんなこと劇が繰り広げられたのか。仲間、でしょ?」

「……………」

「らしくねーな、エルザさんよオ。いつもみてーに四の五の言わずついて来いって言えばいいじゃんヨ」

おし黙るエルザに痺れを切らしたのか、グレイが挑発的にものを言う。

「オレたちは力を貸す。お前だつてたまには怖えと思う時があつてもいいじゃねーか」

それがきつかけだったのだろう。こちらを振り返ったエルザの両目に溢れんばかりの涙が溜まる。その、らしからぬ表情に一言言葉を失い、涙を拭ったエルザが言葉を紡いだ。

「…………この戦い、勝とうが負けようが私は表の世界から姿を消すことになる」

「カツカツ、エルザでも冗談を言うことが……わかった。茶化さな

いからその目はやめて2人とも」
場を和ませようとするカイトの軽口を視線で黙らせ、そして決意を決めたエルザが続けた。

「これは抗うことのできない未来。だから、私が存在しているうちに全てを話しておこう」

そして、エルザの口から語られるこの塔の過去。

塔の名は楽園の塔、別名 Review R システム。10年以上前に黒魔術を信仰する魔法教団が各地から攫った人々を奴隷として築き上げた、悲

劇の塔。

幼かったエルザも奴隷の一人として扱われており、同じ房にいた同世代の仲間が今回エルザを攫ったメンツ。

好奇心旺盛な最年少のシヨウ、ネコが大好きなミリアーナ、普段は煩いがミリアーナにベタ惚れのウォーリー、身体は大きい引つ込み思案のシモン、そしてみんなのリーダーとして立ち振る舞うジェラル。

エルザを含めた6人はかつて脱走を企て、それがバレた末にエルザを拘束。見せしめとして拷問を受けていたがジェラルがそれを救出。しかし、逆に捕らえられてしまいエルザの代わりに拷問を受けることとなった。

房に戻されたエルザ。このままではダメだと同じ奴隷を鼓舞してジェラルの救出と脱走を決意。行き当たりばつたりの作戦とはいえ、魔法教団よりも遥かに多い奴隷の数。数の暴力に加え、途中でエルザの魔法が覚醒。それにより更に指揮を上げた奴隷たちの手を借りてジェラルを救うことも、脱出に使う船を奪うこともできた。

しかし――

「もし、人を悪と呼べるなら、私はジェラルをそう呼ぶだろう」

救出されたジェラルは以前と打って変わり、この塔から離れないことを決意。それどころか塔を完成させ、黒魔術の祖とも呼ばれるゼレフを復活させようとしていた。

当然、エルザはそれに反対するがエルザと同じく魔法に目覚めたジェラルに抗う術なく、脱出船を破壊した罪を被せられ追放された。

その後、エルザは楽園の塔に足を運んだことも政府に密告したことはない。近づけば奴隷を殺され、密告しても同じようにされる。

仲間の命を背負い、エルザは仮初の自由を手に入れたのだ。

同じ独房にいた元フェアリーテイルのメンバーのおかげでギルドの存在を知り、その場に足を運べたのは幸運といえよう。

「私は……ジェラルと戦うんだ……」

その頬に複雑な感情が混じった涙が伝っていた。

V S 三羽鴉

「ふむふむ……」

辺りを見渡す。

石、石、石、と、当然ながら石造りの塔の内部は差異はあれどほとんどが石で作られている。どれもこれもが微力ながら魔力を浴びており、普通の石材ではないことを物語っていた。

死者復活の魔法のために作られた塔だ、その材質も一般のものではないのは納得するところである。

どのような術式で、どのように行うのか。

それがわからないこの状況では無闇矢鱈に手は出さない方がいいだろう。

「それにしても死者復活、ねえ……」

そこに愉快不愉快はないが、ただでさえ死ぬために生きる人の生。死者に思いを寄せる暇があるのだろうかと思議に思うカイト。

生きながら死んでいるような身になってこそ、その余裕が生まれるのではないかと頭の隅で考えながらも、それも人の性さがというものだろうと完結させる。

それはともかくとして、目の前にあつた階段を登る。登りながらも別のことを思考する。ここはどこなのだろうと。

このような状態に陥つたのは少し前。

エルザが己の過去を語り終えるとそんなものは嘘だ、と物陰から現れたショウ。本当は正しく魔法を会得できなかったエルザはその力に溺れ、過去を清算するために船を爆発させたのだ、と宣っていた。その裏切りにジェラルが気づかなければ今頃死んでいたとも。

しかし、それを同じ独房仲間のシモンが否定。

ジェラルの語ったことに真実はないのだと、そう告げた。

悔しがるショウを他所に、突如として壁や天井に無数の口が現れる。口から紡がれる声はジェラルのもの。

そうして告げたのは楽園ゲームの開催。

ルールは簡単。ジエラール側はエルザを生贄とし、ゼレフ復活の儀を行えば勝ち。逆に阻止できたのならフェアリーテイル側の勝ち。

ジエラール側は新たに加えたという3人の戦士、フェアリーテイル側は8人（ウォーリーとミリアーナはナツが倒したため参加不可）という単純なバトルロワイアル。

普通と違うのは唯一、時間制限が決められており、この場所に気づいた評議員の攻撃——即ち、衛星魔法陣からの破壊魔法を喰らえばノーゲーム。勝者のいない試合終了である。

騙されていたことに腹がだったのだろう。シヨウがエルザを魔法でトランプの中に封じ込めたと思いきや、ジエラールを倒してやると言い残し去ってしまったのだ。

これはこれで面白いのでカイト的にはよかったのだが、このまま放置してエルザ諸共殺されてしまうのは面白くない。もう少し早く気がつけばよかったと後悔しつつも、シヨウの搜索兼ナツの搜索兼脱出経路の確保にあたっていたのだ。

無論、楽園ゲームなどに付き合つてやるつもりはない。こちらは脱走できれば後はエーテリオンが片をつけてくれるのだ。

「んん？」

ふと、階段を登りきったところで疑問に頭をひねる。

このゲーム、主催側にまったく旨味がないのだ。

逃亡されたら負け、儀式を達成できなければ負け。それに加え儀式を達成できたとしてもエーテリオンが落ちれば元も子もない。

ゼレフの力がどれほどかはわからないが、復活早々エーテリオンを防ぐことはできないだろう。それは最早人の身には収まらないことだ。

「何かを狙ってる？この塔の破壊——にしては、歲月かけて作り上げた意味はないだろうし……」

間違いなく何かを狙ってはいるのだろう。

しかし、それが分からず頭を悩ませながら歩いていると前方に人がいた。

桃色の髪を天辺で結っており、髑髏の書かれた着物を羽織る女性。

腰に横にした刀を背負い、高下駄を履いているのに足音ひとつ立てない女性。

「カツカツ、迷い込んだ観光客……なんてことはないよねえ」

両手に混沌ノ鎧を纏い臨戦態勢を整える。

纏っている雰囲気は強者の者。それに血生臭い、後ろ暗い事を生業としている者特有の匂い。

油断すればただではすまない、と本能的に理解していた。

「道化はんとお見受けしますう。うちは斑鳩イカルガ、暗殺ギルド髑髏会特別遊撃部隊の隊長を務めてはります。よしなに」

「カツカツ。ご丁寧にも♪ご存知の通りフェアリーテイルの道化、カイトだよ♪さて、挨拶も済んだし、素直に通してくれるとありがたいねえ」

「そう釣れんこと言わんどいてーな。うちと少し遊んだって文句は言われんよ?」

「そりゃ、死んだら文句も何もないだろうねえ」

「ふふ、そう言わはれたら困かなんなく」

瞬間、同時に走り出した2人の拳と刀が宙空でぶつかる。

「知ってはりました? あんさんの首にはなんぼか懸賞金がかけられるんよ。その首、もろおてよろしゅうおすな?」

「カツカツカ、怖い怖い。闇ギルドつてのは、やっぱり物騒だねえ」

言葉をかわす間にも刃と拳の応酬は続いており、ぶつかるたびに衝撃波が通路に響く。

刃を振るう斑鳩に対して、カイトは防戦に徹する。元々、ナツやグレイのように魔法主体の戦い方をする相手よりも、エルザや斑鳩のように己の技術で戦うタイプは苦手だ。搦手が通用し辛い。

今も背後から伸ばした影の手がそちらを見ずとも切り裂かれ、隙がでない。

(カツ、厄介な相手に出会ったねえ)

3人、と言っていたが、他のメンツは大丈夫だろうか? と思考をそちらに一瞬流れる。

「無月流、夜叉閃空」

一瞬の隙を突き、斑鳩の刀がぶれる。刹那、カイトの身体に無数の斬撃が襲った。

「あきまへんへ、道化はん。考え事しよはりよつたら、勝負なんて一瞬や」

まずい。

そう直感したカイトは目の前に影の壁を作り出し、即座に回復魔法^白を纏わせる。幸い、どれも深くはないがそれは相手が情けをかけたからだ。油断すれば首と胴体が泣き別れしてもおかしくはない。

「準備はよろしゅうおすか？」

その声と共に一閃。影の壁を切り崩すと再び斬りかかる。

「混沌ノ道化」

カオス・クラウン

全身に魔法を纏い、白く輝く道化衣装に包まれたカイトは腕を交差させ上段から振り下ろされた刃を受け止めた。

ギチギチと、鋼と鋼が擦り合わさる音が嫌に耳に残る。

「その格好、ようやく本気出したみたいどすなあ」

「カッカッカ、手加減してくれたら嬉しいんだけど、ねえ!!？」

剣を弾き上げ両手を振るう。その軌跡に沿うように現れた魔法を斑鳩目掛けて飛ばすが、彼女はすでに空中。弾かれた勢いそのまま逃げていたのだ。

「無月流、迦楼羅炎」

空気と刃の摩擦によって生まれた炎。魔力を一切浴びていないソレはカイト^{悪魔}にとって忌避すべきもの。混沌ノ爪で相殺して事なきを得たが、内心は肝を冷やす。そうでなくても炎にはあまりいい思い出はない。魔力を浴びたものならまだしも、天然物の炎は苦手だ。

「あれ。もしかして炎がお嫌いどすか？」

過剰に反応したせいだろう、おまけに弱点がバレてしまった。閉口するカイトを見て確信を得た斑鳩は勝機を見出す。

裏の世界では名の売れている道化の首だ。その首を取れば今後の依頼も増えるだろうし、何より地位が盤石になる。皮算用にふけり下唇を舐める。

「そいじゃ、そろそろ」

不可視の速度で放たれた炎を纏った斬撃。それはカイトの背後と左右を燃やし退路をなくす。

周囲で燃え盛る炎。ふと、昔の出来事がカイトの脳裏に浮かぶ。

燃える洋風の屋敷。

燃える同族。

それを嗤う人、人、人。

屋敷の屋根が落ちる。

罵声が飛ぶ。

当然の報いだと

ざまあみろと

悲鳴が聞こえる。

助けてと

苦しいと

怨嗟の声、声、声が――

「終わりぞす」

一閃。

物思いにふけたカイトの首に炎を纏う刃が通る。肉と骨を断つ感触が斑鳩の手に伝わり、確実に当たったことを実感させた。宙を舞う首、遅れて倒れる胴体。その首が斑鳩の手に落ちようとした瞬間、どろりと溶ける。

「なっ!?」

罠に嵌められた。

そう思った瞬間構えを取るがすでに遅い。鎧を纏った姿そのまま、カイトは悠々と斑鳩の背後を歩く。

「ああ、もう。君のせいだよ。嫌な事思い出させて」

ぱん、と音を立てて両手を合わせる。瞬間、足元で溶けていたカイトの身体が突如として湧き上がり斑鳩を襲う。しかし、その体積は元のサイズではなく、高波のように迫っていた。

危険、と判断した斑鳩が剣を振るう。しかし、それらは全て効果なし。まるで霞を切っているかのように手応えがない。

「ど、うけええええええ!!」

切断は不可能と判断。ならばと術者であるカイトを斬ろうと背後に振りかぶるが、その剣よりも早く黒い高波は斑鳩を飲み込み、そして何事もなかったかのように斑鳩諸共その姿を消した。

「千影^{せんえいばんか}万化。恨むなら、人のトラウマ刺激した君自身を恨むんだね」

今回はカイト自身と高波に変化させたが、本来であれば如何様にも影を変化させることのできるこの魔法。当然、影の範囲を広げれば広げるほど魔力を消費するのであり使わない。普段のように各所影を混ぜるよりは威力は出るのだが、と考えたところで階段から誰かが登ってくる。

「はあ、はあ………っ!!?」

肩で息をしながら登ってきたのはシヨウだ。ようやく目的の人物に会えたと一安心するカイトを他所に、シヨウは己の武器であるカードを構える。

「誰だ、てめえは!!?」

「誰だつて………酷いなあ」

少しだけとはいえ顔を合わせたというのに既に忘れられたらしい。悲しむフリをしながら、そういえばまだ魔法を纏ったままだったことを思い出す。それを解除すると、目に見えてシヨウの戦意が落ちた。

「あんたは、姉さんの………」

「そうだよ♪さて、ちゃんと思いついてもらえたことだし、素直にエルザを渡してくれるとありがたいんだけどねえ」

「それはできねえ！姉さんはオレが守るんだ」

「だよねえ。ご立派な決意表明をどうも。でも、だからこそ足元を拗られることをお忘れなく」

「なっ!!?」

右手を上げて見せたのは一枚のカード。見覚えのあるカードを見て慌てて胸ポケットを探る。探していたものは、ある。

「そこだね」

カードを捨てたカイトがぱちんと指を鳴らすと足元から伸びた影がシヨウを殴る。的確に顎にヒットしたシヨウの脳は揺れ、そのまま受け身も取れずに大の字になって気絶した。

然して気にすることもなく、カイトは気絶したシヨウの胸ポケットを探り目的のカードを——即ち、エルザが閉じ込められたカードを抜き取った。

カードを破いた瞬間、魔法が解けてその場にエルザが現れる。シヨウを気絶させたことに文句を言いたいエルザだが、助けてもらったのは事実だ。ただ素直に「助かった」とだけ伝えて奥の通路に向かおうとする。

しかし、その直前、通路いっぱい広がる影の壁がエルザの行先を塞いでしまった。

「……………なんのつもりだ、カイト」

「なんのつもりも何も、見ての通り足止めだよ♪」

「ふざけている場合か!!？」

「カツカツカ♪……………そりゃこっちのセリフだよ、エルザ」

瞬間、影から迫り出すのは7つの蛇の頭。そのどれもがエルザに牙を剥き、その肌を傷付けんとする。

しかし、それらの首を全て切り落とすエルザ。そうして切っ先をカイトに向けようとした時、先程の蛇の首よりも大きなモノがエルザを襲った。

「ほうら、前しか向いてないからそうなるんだよ」

壁に押し付けられたエルザの周囲に影が集い、その形を幾千もの刃へと変える。

「武影百般。ぶえいひゃっばん さあ、エルザ。大人しく帰ろう。再開果たせずとも、この幕はデウス・エクス・マキナエー テー オによって終演。幕としては……………まあ、褒められたモノじゃないけど、それでみんな助かるならそれでいいでしょ?。」

そう問いかけたカイトはげんなりとした感情を隠さず、肩でため息をする。瞬間、構えた刃と同等の刃がそれらを砕き、その中心にいた天輪の鎧へと換装したエルザの姿が現れる。

「……………なにが目的だ?」

「いつだってフェアリーフェアリーテイルテイルのために、だよ」

「これは私の個人的問題だ。手を出すな」

「ここまで来てそれで済ますのは無理でしょ」

「どうしてもか？」

「どうしても、だね」

「そうか………」

会話による懐柔は不可能。そう判断したエルザは今度こそ刃をカイトへと向ける。

「ならば、押し通らせてもらう」

対するカイトは牽制として足元から影の拳を何本か伸ばし、加えて両手に混沌ノ鎧を纏ってそれをエルザに向けた。

「君の強情には、わかってたつもりなんだけどねえ」

刹那、2人の拳と剣が宙空でぶつかる。

かくして、エルザvsカイトの戦いの火蓋は切って落とされた。

V S. エルザ

どちやり、と。

エルザとカイト、2人の拳と剣がぶつかった瞬間、音を立ててカイトの姿が泥のように崩れる。

ハツと次に来る攻撃を察したエルザが後退した同じタイミングで泥が意思を持つかのように鋭く尖り、四方八方へとそのトゲを伸ばした。そのうち迫りくる何本かを難なく切り落とし、本体はどこにいったのかと周囲を見渡すエルザ。そして、着地した刹那床が盛り上がる。

「くっ!!?」

盛り上がったのは床ではなく影。その形は拳を握っており、攻撃というよりは足場を崩すために作られたもの。意図的ならばまだしも、突然空中に浮いたエルザに硬直が生まれる。

「君と正面切って戦えるわけないでしょ、エルザ」

どこからともなく聞こえるカイトの声。その声に反応して壁や天井、床から生えた影の拳がエルザへと殺到する。

「千影万雷」

「循環の剣!!?」
サークルソード

エルザが手持ちの剣を振るうと、それに追従するかのよう展開された剣が全ての影を切り落とし、なんとか無傷で着地。

しかし、油断はできない。ギリツと奥歯を噛み締めて次に来るカイトの攻撃に備える。

力対力の勝負では、間違いなくエルザが勝利するだろう。しかし、手札の多さではカイトには及ばない。カイトの戦法は搦手による奇策が主体だ。時間をかければかけるほど、勝利への道は閉ざされる。

だからといって正面突破ができるかと言われれば不可能だ。闇雲に戦えば相手の思う壺。まな板の上の魚ばりに簡単に調理されるだ

ろう。

しかし、勝機はある。

姿の見えないカイトだが、必ずこの空間にいることは確かだ。影の中に潜んで攻撃、というのは理想だが、魔法はそこまで万能ではない。影の中の魔法は影の中でしか行えず、干渉することは不可能だからだ。例外があるとすれば影を中継しての攻撃。だが、こちらも身体を外に出さなければ発動しないのだ。

(攻撃の瞬間、必ず外にいるはず。そこを叩くしかない)

対処法を絞ったエルザが構え、それをまっていたカイトの次の攻撃が始まった。

「さっすがエルザ。ではでは、序章は終了、第二幕の開演だ♪」

ぱちん、と鳴らした指の音を合図に通路の奥から2つの刃が伸びる。左右に広がるソレは偽・ぶつぎりおおぼさみ仏斬大鋏。ゼレフ者の悪魔であるララバイの腕を易々と切った実績を持つ魔法。

「換装、黒羽の鎧!!?」

一撃の威力を上げる魔法に切り替え、刃を叩き壊す。切断能力の高い魔法だが、それは刃が交差した時の話。出現した瞬間を叩くことなどエルザには簡単なことだ。しかし、それがいけなかった。

「一撃の威力が上がる鎧だけど、反面、隙が大きくなるのは弱点だよねえ」

エルザの隣に現れたカイト。反応して斬りかかるよりも早くカイトの回し蹴りが横腹を叩く。

普段ならば軽く流せる一撃。しかし、今回の回し蹴りはエルザを吹き飛ばし壁へと激突させた。

「混沌ノ一撃。カオス・インパクト俺にしては珍しい近接型の魔法さ♪……………まあ、効いてないみたいだね」

砂煙が晴れ、両肩に身を覆うような盾を装備した鎧に身を包まれたエルザが姿を表す。防御面を重視した金剛の鎧だ。その重さ故に素早い動きはできないが、その分防御性能は高く生半可な攻撃では傷一つつくことはない。

「換装、飛翔の鎧!!?」

姿を見せた今が好機と見たのか、素早さを上昇させる鎧へと換装する。壁や床、天井を利用し速度で翻弄した動きを見せ、両手に換装した双剣を振るう。

「飛翔・音速の爪!!？」
ソニックククロウ
カオス・クローウ

「混沌ノ爪!!？」

それに合わせるかのようにカイトの魔法がエルザの双剣とぶつかり、生まれた衝撃波が2人の距離を離す。

互いに傷は少ないとはいえ、エルザは体力を、カイトは魔力を消耗している。しかし、疲弊を見せないようにカイトは笑みを浮かべエルザを見据える。肩で大きく息をするエルザ。このままいけばギリギリ勝てるだろう、そう目安をつけたカイトは攻撃を開始しようとしてその瞳に気がつく。

疲弊しているにも関わらず、死ぬことのない真っ直ぐな瞳。退くことを知らない負けず嫌いともいえる瞳。

カイトの好きな人間の表情だ。

「ねえ、エルザ。まだやるの?」

「貴様が邪魔をするなら、いくらでもやるつもりだ」

わかつてはいたが、こうも即答されると面白くない。つい、人間風情が、と思ってしまうがその思考を追い払うように頭を振り、再度警告する。

「別に君がやらなくてもいいでしょ?後始末はエーテリオン、それでみんな生きて帰れるなら万々歳。ジエラールとか言うやつにこだわる必要はないはずだよ?」

「ダメだ。ジエラールと私は決着をつけなければならない」

「……………はあ、意固地だなあ」

「貴様こそ、なぜ私の邪魔をする。こういった時、折れるのは貴様のはずだろう」

「カッカッカ♪ そりやどうでもいいことならね♪……………けど、流石に覚悟もなにも決まってる仲間を死地に追いやるほど、薄情でもないよ」

「覚悟、だと?何をいう!!? 私はどうに覚悟などー」

「ああ、決まってるだろうさ。けどエルザ、今の君を上によってもジェラールに利用されるだけだ」

心外だ、と激怒するエルザに動じず、カイトは冷静に言葉を下す。「君の決めてる覚悟はジェラールを救おうとする覚悟だけだ。そこに自分の安否なんて入っちゃいない。そんなことされるくらいなら、俺は君を止めるよ」

「そのどこが悪い!!? 私はジェラールを野放しにした責任を取らなければいけないんだ!!?」

「傲慢だね、エルザ。別にジェラールも血乳飲み子ってわけじゃないんでしょ? 責任くらいそいつ自身にとらせなよ」

「っ!!? なぜ、わかってくれないんだ!!?」

「俺たちが君を心配してることをわかってくれないからだよ」

指を鳴らせば通路いっぱい広がる影の数々。拳を握り、武器を握り、狙いをエルザへ向けて放たれる。

「タイムリミットだ。エーテリオンまで残り10分。死に体になっても引きずって帰るからね」

迫りくる魔法の数々。エルザは本気で相手せねばならないと苦悶の声を上げながら鎧を換装する。

瞬間、通路全体を破壊するような爆風。実際に床が抉れ、壁の一部が崩壊し、危険を感じたカイトが後退した。

現れたエルザが見に纏うは黒く禍々しい鎧。この姿を見て立っていた者はいないと言わしめる最強の鎧。

「煉獄の鎧、初めて見るよ。まさか剣の一振りでもここまでなるとはね」
エルザの持つ大剣の一振りでもカイトの魔法は消滅し、強制的に開かれた距離は十数メートル。床も壁もここまで破壊されれば修復は不可能だろう。おかげで仕込んでいた罠がいくつか潰れたと内心ため息を吐く。

「貴様を倒して、私は進む」

それははつきりとした敵対の表明。砕かれた足元をさらに踏み砕き、跳躍して大剣を振り下ろそうと構える。

脳裏に浮かぶのはこれまでカイトと過ごした日々。うざい、と思う

時もあったが、カイトはずっと仲間のために動いていた。信用できないが、信頼はできる仲間。

思えば、ギルドに入って最初に声をかけてきたのはカイトだった。今よりもずっと下手くそな笑みでこちらを笑わせようとしていた姿。すぐさまグレイが引きずり離れたのと鮮明に覚えている。

そんな仲間を倒そうとしていることに良心が叫ぶ。それをかき消すくらいの大声をあげながらエルザは大剣を振り下ろした。

「だからいったでしょ。閉幕の時間だつて」

刹那、床を打ち抜く勢いで身の丈を超える巨大な拳がエルザを打ち上げる。そのまま天井をいくつか貫き、そうして下からの圧力がなくなる。今度は上から同じ圧力が加わる。今度は下に急降下、そしてカイトのいるフロアまでたどり着くと圧力は消え、床に叩きつけられる。最強の鎧は破壊され、叩きつけられた衝撃で口から血を吐く。

「デーモン・ハンド偽・魔王ノ御手。俺もここまでしたくはなかったよ」

少し先で床に投げ出されたエルザを見て、そう呟くカイト。この魔法はあくまで保険。それまでに決着をつけようとしていたのだ。さすがにフェアリーテイル最強の女を相手取るには難しいか、と自嘲しながらエルザに近づく。

「聞こえてるかわからないけど、エルザ。俺はこれでも本当に心配してるんだ。人の親切は素直に受け取るものだよ」

足元に転がるエルザに手をかけようとして、一閃。カイトの頬に一筋の血が流れる。反射的に後退すると、息も絶え絶えの様子でエルザは換装した刀を杖代わりにしてまで立ち上がる。そうしてしつかりと二本足で立つと刀の鋒をカイトに向けた。

「言った、はずだ……………。私は……………進む……………」

「まだ、やる気か……………」

混沌ノ鎧を両腕に纏い、体勢を整える。頬を流れる血が一向に止まらず、エルザの持つ刀が只者ではないと当たりをつける。しかし、反面、サラシを巻いたその姿からはなにも魔力を感じない。刀の換装に魔力を使いすぎたのだろう。

確かに、刀は厄介だが、それを持つエルザはすでに満身創痍。すれ

違いざまに攻撃すれば倒れるだろう。遠距離が確實だが、散らした影を回収するのに手間取っている上、これ以上の魔法の酷使は封印の方に影響を及ぼす。

そうして2人が互いを睨み、そして息を合わせたように交差する。

刀が煌めき、爪が薙ぎ、着地した2人のしばしの静寂。

「くっ!!？」

ぶしゅっ、と音を立ててエルザの右肩から血が吹き出し、苦痛に顔をしかめる。

それを視界の端で確認したカイトは魔法を解き、心底仕方がないといった調子で言葉を紡いだ。

「……………はあ。ちゃんと帰ってきなよ」

その言葉を最後に、逆袈裟に斬られたカイトの傷が開き、大量の血潮を床にぶちまける。

どさり、と大の字になって倒れるカイト。

「……………わかつている」

それを視界の端で確認したエルザは砕かれた天井を足がかりに上の階へと登っていく。

「カッカッカ……………嘘つきめ」

戻って来る気のないエルザに悪態を吐き、出血から来る脱力感に身を任せるのであった。



鼻につく匂いに釣られて、沈んだ意識が覚醒する。

目を開けば辺り一帯水晶のような鉱物に覆われた空間。その水晶ひとつひとつから香る濃厚な魔力に、反射的にかぶりつき、いくつかの水晶を咀嚼する。

ごりごりと、咀嚼する内に理性を取り戻し、口内に残っていたモノを飲み込んで辺りを見渡す。

気絶する前とは全く違う空間。寝ている間に移動した、という線を除けば楽園の塔が様変わりしたということだろう。

魔力の籠った水晶を再び咀嚼しながら、なるほどと理解する。いくつもの魔力が込められたコレの正体はエーテリオンなのだろうと。

衛星上からの超破壊魔法をひとつの場所に留めて置けるか、と問われれば不可能だと言える。しかし、自然界でここまで濃密な魔力は発生せず、尚且ついくつもの魔力が込められているものの方があり得ない。現に目の前に存在する限り、前者の考えを否定する他あるまい。(まあ、そんなに長くはないだろうけどねえ)

エーテリオンをひとつの場所に留めたのは確かだろう。しかし、それを維持できるかと言われれば話は別だ。この塔はガラスの瓶、エーテリオンは爆竹と考えればいいだろうか。ガラス瓶に入った爆竹は器を壊し、そして被害を外に向ける。これほどの魔力が暴発すれば少なくともアカネビーチは無事ではすむまい。この場にいる者など影も形も残らないだろう。

「できれば脱出したいところだねえ。……………ん？」

ふといつもよりも身体が楽になっていくことに気がつき、側頭部を触る。手に返ってくるのは硬質な感触。濃密な魔力を摂取したことにより身体が活性化したようだ。

傷を見れば傷跡が残るくらいで、既に出血は止まっている。吸血鬼の身体に傷を残す時点で異例であり、それだけエルザの刀の威力が思い知らされる。銀製の祝福されたものでなかったことが幸いである。

しかし、本来の姿ならば僥倖。影を広げて下のフロアを飲み込み、生き残りがいないか確認する。微かに息をしている2名を確保、しかしどちらも見知らぬ人だ。それ以外に反応はなく、まあいいかとそのまま影の中へと収納。どうやら上に登ったエルザ、ジェラール、そしてなぜかナツの3人を除き他は逃げたか死んだのだろう。グレイとジুবリアはともかくルーシーは死んでそうだとぼやきながら周囲の水晶を喰らう。

混じり気のない純粋な魔力は悪魔にとってご馳走だ。一番は人の血であるが、これもなかなかと喰らい、注意を上フロアへと向ける。

この不安定な魔力の中、上の2人を避難させるにはどうすればいいか考えて、不可能だと諦めをつける。エルザは言わずもがな、ナツも相当の頑固者だ。実力行使しようにもさすがにこの姿で人前に出ることは出来ず、また封印した状態で2人を引きずって帰れるかと言われればNOである。

バゴン、一際大きな破壊音と衝撃が塔全体を揺るがしたかと思うと、続くように音を立てて周囲が崩れ、固体のはずの水晶が流動体になったかのように唸り出す。

タイムリミットだ。この場はすぐさま崩壊する。

「2人とも無事だといんだけどねえ」

さすがにこれほどの魔力が爆発すればカイト自身も無事ではすまない。どころか、崩壊の余波は周囲一帯を飲み込むだろう。しかし、それを抑える術を持たないカイトは既に諦めムード。どうにかしてやろう、という気持ちは湧き上がらず、最初からそのような感情を持ち合わせたいない身は散り際くらい人の姿でいたいと、本来の姿を封じる。

そうして、爆発。

上も下もわからなくなるような衝撃がカイトを襲い、空中に投げ出される。ふわり、と感じる浮遊感。そしてすぐに重力に引かれて下へと落ちる。

(ヒトはこういう時、走馬灯を見るのだろうか)

びゅうびゅうと風が身体を叩き、にべにもなくそんなことを考える。いくら頭を捻つてもそのようなモノは見えず、やはりヒトは不思議なものだと諦めをつける。

そして地面にぶつけられる衝撃。四肢が弾け、内臓が内からまろび出る。しかし、悪魔であるカイトがこのくらいで死ぬはずもなく、体内に存在する魔力が瞬時に再生させる。

1箇所ならばまだしも、ほぼほぼ蘇生に近い再生はかなりの魔力を喰らい、急激な魔力の消費に目眩がする。次いで死ななかつた事に対する落胆。思っていたよりも爆発の威力が少なく、こうして無様にも生き残ってしまった。

「うおっ!? カイト、生きてたか!!?」

唐突に声がして、ゆつくりと身体を起こせばグレイ。その少し向こうではエルザに抱きつくルーシィにハッピー、その奥で照れ臭そうにするナツ。どうやら生き残っていたようだ。

安堵のため息を溢し、グレイの手を借りて起き上がる。

なぜ生き延びたのか、どうやって脱出したのか、ジエラールはどうなったのか、など聞きたいことは山ほどあるが、ひとまずは全員生還の喜びを分かち合うのであった。

終幕・楽園の塔

「いったたたたたたたた!!?」

楽園の塔崩壊から3日。エーテリオンを含んだ魔水晶^{ラクリマ}を喰らうことでパワーアップを果たしジェラルを降したナツは、ずっと寝込んでいた。寝苦しそうな雰囲気もなく、呑気にいびきをかいていることから皆のあせりはなく、仕方がないと呆れるばかり。

毒を食べたようなもんだから仕方がない、とは念のためと回復を行ったカイトの言である。寝込むだけで済むのは異常だけど、とも付け加えてはいるが。

同じようにジェラルと対決し、一度は粒子レベルまで分解されたエルザは身体中に傷を負ったが、カイトの治療も受けずに普通に歩いている。ナツはナツで異常だけど、エルザはそれ以上だよね。と思わず口に出したカイトへの制裁が今現在。右腕を4の字固めされ、悶えるカイト。インパクトのある一撃より継続的なこちらのほうが折檻に向いているとの判断だ。

そういえばと、楽園の塔で邪魔されたことを思い出し、技の精度がさらに上がる。

「え、エルザ！待って！腕はそつちにまがらないいいいい!!?」

「このっ！お前は邪魔ばかりっ！」

「まあまあ、エルザ。カイトも心配してたからやってのことだろうし」
事の端末を聞いたルーシイが何度か止めに入るが、どこ吹く風。敵などに鎧を破壊されたならばいざしらず、仲間内で破壊されたのだ。恨みは相当に深い。

あれでホントに怪我人かよ、とはグレイの言である。

そんなこともありつつ、少ししたのちナツも復活。亡くなったシモンを抜いたウオーリー、ミリアーナ、シヨウの3人をフェアリーティルに呼ぶことをエルザは希望。本人たちも満更ではない様子で、少し早い歓迎会が開かれた。

病み上がりのナツは今まで食い損ねた分を補うように喰らい、グレイが酔った勢いでシヨウに絡んだり、ハッピーとミリアーナが仲良く

なったり、野菜を拒むウオーリーの口にサラダをねじ込むカイトがいたり、日も高いうちからどんちゃん騒ぎ。

それをエルザは嬉しそうに眺めていた。



ポン、と鼓の音が響けば、暗闇の中で目を覚ます。

一体何が？と現状を把握する間もなく胸部に熱と衝撃が走る。釣られて見れば剣先が胸から生えていた。確認することで現場が把握され、口の端から血が流れる。続け様に生えた剣先が下に振り下ろされ、振り切った先から臓物がまろび出る。

一眼でわかる致命傷。せめて下手人を一目見ようと身体を崩しながらも振り向き、そして鼓の音。

ポン、と音が響けば先ほどと同じような暗闇の中。呆気に取られ、次いで傷跡を確認するが、何もない。しかし、走った痛みは本物だ。死んだことを思い出して、胃から液がせり上がる。手で口を押さえ、堪えようとすれば手先がずるりとずれ落ちる。

「はっ。」

落ちた手先に釣られて首を下に向ければ、頭がずれた。そのまま落下しながら、また鼓の音がする。

ポン。ポン。ポン。

鼓の音がするたび暗闇の中で目を覚まし、そして殺される。

ポン。ポン。ポン。ポン。ポン。

逃げ出そうと脚を出せば脚が落ち、剣を握ろうとすれば腕が宙を舞う。

ポン。ポン。ポン。ポン。ポン。ポン。ポン。

腕が飛んだ。首が落ちた。胴が泣き別れた。幹竹割りにされた。

ポン。ポン。ポン。ポン。ポン。ポン。ポン。ポン。

ポン。ポン。ポン。ポン。ポン。

ポン。

鼓の音が鳴って幾度目か、ようやく剣を握ることに成功する。度重なる死で磨耗した精神は身体に現れ、血走った両の眼で周囲を警戒。そうして暗闇の中で動く影を見た。

発見、そして音もなく接敵。そして剣を突き刺し、これでは足りぬとばかりに剣先に体重を乗せて振り下ろす。

やってやった、と笑みを浮かべ、殺した相手を見遣る。

——自分がいた。

天辺で結んだ桃色の髪、血で汚れて見えづらいが髑髏の描かれた着物、臓物に濡れた高下駄、突然のことで呆気にとられた表情で事切れた顔、どれもこれも自分のものだ。

「あ、ああ……」

自分を殺した。

比喩的な表現ではなく、現実としてそれを行えばどうなるか。少なくともほとんどの人間は混乱するだろう。

髪を掻きむしり、叫び声を上げて逃げるようにその場を後にする。三步目を踏んだ瞬間、胴が飛ぶ。宙を舞いながら下手人を見れば、それも間違いなく自分。吐き気と共に空中で血を吹き出し、そしてまたポン、と鼓の音が鳴る。



「おい!!? 斑鳩!!?」

自分の名を呼ぶ声がして、斑鳩は目を覚ます。目に映ったのは満点の星空と、それを遮るように鬱蒼と生える木々。同じギルドのヴィダルサス・タカとフクロウ。一瞬のことで頭が困惑し、そして現場が理

解できた瞬間に脳裏に浮かぶ殺された出来事。

声にならない叫び声を上げて2人から離れる。そして木を背にし
てうづくまる。

「ひいつ、ひいつ！」

「おい、どうしたんだよ!!?」

「ホーウ。お主が取り乱すとは、ただ事ではない。悪にしてやられた
か?」

仲間の心配する声が聞こえる。しかし、ふと顔を上げればまたあの
地獄の中にいるような、そんな不安が斑鳩の心を蝕み、拒絶する。

どうすればいいのかわからず、2人が頭を悩ませていれば、そんな
空気もお構いなしにとばかりにカラカラと声を上げながらカイトが
近づいた。

「おやおや、カッカッカ♪ どうやら幻術が強すぎたみたいだねえ」

「っ!てめえ!!?」

「貴様、悪人の1人、道化か?」

「そういう君は有翼人?バードマンまさか人外がこんなところにいるとはね、驚
きだよ♪」

パチパチと手を鳴らすカイトに、2人の神経は逆撫でされる。会話
の中で斑鳩がこのような状態になったのはわかった。しかし、楽園の
塔でヴィダルサス・タカはルーシイとジュビアに、フクロウはグレイ
にやられており装備が手元がない。手が出せない状態だ。

ヒュウーと、音がした方思えば突如として夜空に煌々と花火が上が
る。続くように氷でできた花火に光輝く花火。

フェアリーテイルの加入を辞退したシヨウたちを見送る花火だ。
今頃現場では別れを惜んでいるころだろう。なぜ来なかったのだ
と後ほど怒られそうだ、とぼやきながら相手を見る。

「さてさて、君たち3人を助けたのは俺さ。恩義を感じてくれたら嬉
しいんだけど?」

「感じるワケねーだろ!頭沸いてンのか!!?」

「悪の助力を認めるなど、正義戦士ジャスティスの名折れ!貴様はここで倒す!
「カッカッカ♪ あー、やっぱりかあ。なーんでこうなるんだろ?」

無論、仲間の1人を廃人の一歩手前にまで追い込んだせいである。だが、カイトはそれに気がつかない。気がつかない。

人との価値観の違う悪魔に人の感情を知れ、というのが土台無理な話ではあるのだが。

まあ、いいか、と気持ちを切り替え、拳を振り上げ迫るフクロウの攻撃をかわすと足元から伸び出た影がフクロウを拘束。それに抗うフクロウだが、抵抗虚しく後ろ手で拘束されて膝を折る。頭には拷問具である頭蓋骨粉碎器の形をした影が。

「ホ、ホウ……！」

「フクロウ！」

「おっと、動かない方が身のためだよ？」

刹那、タカ的首筋に当てられる二振りの影の刃。途中で交差したそれは薄くタカの首の皮を切り、たらりと細い血を流していた。今まで暗殺を生業としてきたからわかる、少しでも動けば殺されるという感覚。冷や汗ひとつ、生唾ひとつさえ飲み込めない状況。

仲間の姿に悲鳴ひとつあげて蹲る斑鳩。それさえも嗤いながら、ゆっくりとした步調で近づくカイト。

「さてさて、チェックメイトだよ。合図一つでチェックは決まるけど、そんな君にひとつ問いたい」

蹲る斑鳩の顔を覗き込み、実に最初と変わらぬ笑みを浮かべて問いかける。恐怖に震えていても、答えなければ我が身の安全はないと悟り、一言一言を聞き逃すまいと全神経を耳に集中させる。

「霧の谷に、俺を連れて行って欲しいんだ♪」

「は………」

それは斑鳩からすれば訳の分からない質問。御伽噺でも語られる、誰でも知ってる実在する場所。

年中深い霧が立ち込み、調査しようと王都から人を派遣しても誰も帰ってこなかった魔の谷。いつしかあそこは魔界に繋がっている、悪い子にしていると霧の谷に連れて行かれるぞ、とまことしやかに囁かれる日付きの場所。

現在は立入禁止区域とされてはいるが好き好んで行くような輩は

そうはおおらず、だいたい自殺志望者。行こうと思えばいつだって行ける場所だ。だからこそ質問の意図がわからず斑鳩は間拔けな声をあげる。

「い、いかはればええやろ」

「残念なことに、俺はあの場所を見つけられないんだ。それに言うでしよ、旅は道連れだど。ああ、断つても殺しはしないから安心してね」
殺しは、ね。と含みのある言葉を付け加え、恐怖に震えた斑鳩が首を激しく縦に振る。

満足したようにニコリと笑うと指を鳴らし、タカとフクロウの拘束を解除。それでも尚向かってくるようであれば対処していたが、残念なことに向かってくる様子は無い。久方ぶりに食事^吸にありつけると思っていただけに残念さも一入。

まあ、案内人ができただけマシだろうと区切りをつけて一先ず3人に必要なものを買に行かせる。出発は明日の朝だ。

駆けるようにして去る3人の後ろ姿を眺めて、胸元から依頼書を取り出す。何年も前に受注した、擦り切れた依頼書。

(エルザもルーシイも、聞いた話じゃグレイも自分の過去にケリをつけたんだよね)

ならば、次は自分の番だろう。

別に順番などないが、斑鳩が思い出させたのだ。ならば動くしかあるまい。いつまでも見て見ぬ振りはできないのだから。

「おーい、カイトー。どこいったー?」

「また迷子になったのー?」

木々の向こうから自身を呼ぶ声に気がついて依頼書を懐にしまう。
ナツとハッピーが搜索に来たようだ。

いつものように笑顔の仮面を貼り付けて、ここにいるよ、と返事を返す。

何事もなかったかのように。

何事も起きなかったように。

合流後、案の定エルザから制裁を喰らい、いつものように平謝りを繰り返し、そうして翌日の朝、用事があると他のメンバーと別行動。

斑鳩たちと合流し、目的の場所を目指すのであった。

オリジナル編 霧の谷

ざわざわ、と木々が騒ぐ。

まるで歓喜するかのように。

バタバタ、と複数の人が走る。

まるで逃げるかのように。

ピチャピチャ、と水音が聞こえる。

まるで逃げ惑う人を追いかけるように。

「ぎゃあー」

深い霧の中、誰かの断末魔が聞こえ、そして何かを啜る音が聞こえる。

周囲の人々はそれに恐怖を煽られて、逃げる足をさらに早める。

我先に、我先にと進んで、そして背後から迫る影に捕まった。

「いやや……」

着物を崩し、裸足が傷つくことも省みず斑鳩は走る。

アカネビーチからここまでカイトを案内した斑鳩。その入口で待ち受けていたのは髑髏会のメンバーたち。ひっそりと連絡していたタカが集めていたのだ。

斑鳩は反対したが、他のメンバーの勢いに負けてなすがままに逃げるカイトを追っていた。暫くすれば誰かの断末魔。それに怯えて逃げ出したのが功を奏したのか、次々と襲われるメンバーたち。

仲間意識など持ち合わせていない、見捨てることに後悔はない。

息を乱し、髪を乱し、なりふり構わず走っても未だ見えない出口。

絶望を覚えながらも走り続けていれば、誰かの呼ぶ声。

「ホウ、こっちだ」

ふと、声を頼りにそちらへ進路を変えれば見えてきたのはフクロウの姿。同じように逃げてきたのかタカの姿もそこにあった。

アカネビーチから帰ってきたルーシイは新しくなったギルドのカウンターで頭を悩ませる。

「あら、どうしたの？」

「ミラさん」

見かねたミラジエーンがお皿を拭きながらそう尋ねてきた。

「いや、最近カイトの姿見えないなあって」

「あら、ルーシイはナツに気があるんじゃないの？」

「ないです!!?なんであんなやつと！」

悩みをぶつけてみれば返ってきたのはとんでもない発言。ちらりと後ろを見ればいつものようにグレイと喧嘩するナツの姿。周囲も止めようとせずに煽るばかり。

先日発売された週刊ソーサラで悪名が広がったというのに、呑気なものである。名誉回復する余地はなさそうだ。

「はあ……でも、不思議なんですよ。いつも勝手にふらくってどっかいっちやうし、何してるのかなあって。昔からあなんですか？」

「そうね。昔からあんな感じよ、あの人は」

「うええ……やっぱりカイトが道化ってイメージは結びつかないなあ」

ギルド加入前から尊敬の念を送っていた人があんなチャランポラなんだとは、と思い返してへこむルーシイ。

あの義憤に燃え、弱き人々を憂い、悪を許さない高潔な道化と人を煽り、いつもどこか軽薄に笑い、エルザにボコボコにされているカイト。どう頑張っても同一人物だとは思えない。

ちなみに、道化のことをフェアリーテイルのメンバーに告げればそれはないだろう、と満場一致の返答がきた。どうせ道すがら厄介ごとに巻き込まれたのだと、真実を突きつけた過去のルーシイにはあった。

「ねえねえ、ルーシイ。カイトが人気ってホントなの？」

「カイトがっていうより、道化がって感じだけだね。てか、ナツもそうだけど、アンタたちよく知らないわね」

カウンターに座ってナツたちの喧嘩を眺めながら魚を頬張るハツ

ピーにそう返せば、いつも通り「あい！」という返事が返ってきた。
ギルド自体、周りからなんと言われようが知るか、という風潮があるためルーシイもそこまでは言わないが、少しは名誉回復の機会を自ら作って欲しいものだと思の底から思う。

「でも、信じられないなあ。カイトが人気なんて」

「まあ、ギルドでの姿本当の事知っちゃったらね」

「あら、私は面白いから好きよ」

「ミラさんの感覚がよくわからない……」

その言葉でさえ、いつもと同じ微笑みを持ってすればどこまで本気なのやら。考えることに疲れたルーシイがだらつとカウンターでうつ伏せで倒れる。

「オイラもカイトのこと好きだよ。サカナくれるし」

「あんたのそれは餌付けでしょ」

「そーゆるルーシイはカイトのこと嫌いななの？」

「うーん……嫌い、じゃないんだけど……なんていうか、胡散臭い？」

「あー」

こればかりはハッピーもフォローはできない。あのいつものようにカラカラと笑う表情は確かに胡散臭い。本人は上手く笑えているつもりだから厄介だ。

「あれでも昔よりはマシになった方なのよ」

「昔はあれ以上に酷かったんですか？」

「酷い、というよりはぎこちなかったわね」

ふと、ミラジェーンは昔のことを思い出す。カイトと初めて出会ったときのことを。彼女たち兄弟姉妹に関わってきたことを。

思えばあの頃からいろいろと変わってしまった。自身はもちろん、ギルドも何もかも。変化は楽しい反面、後悔も少なからずある。そうして思い出していくうちに、一枚の依頼書のことを思い出す。珍しくマカロフに頼み込んで受注した、調査依頼書。それを思い出してミラジェーンの中に不安が溢れた。

「そういえば、別れるときカイトなんか変だったよね」

「そう？いつもと同じじゃなかった？」

「なんか、覚悟を決めてたっていうか」

「どうせ、エルザに怒られる覚悟でしょ」

現に別れる際、当然の如くエルザからのお叱りは受けている。本人曰く必要な制裁らしいが、さすがにチョークスリーパーはやりすぎだろうと少し同情する。

「でも、カイト笑ってなかったよ？」

「首しめられた後はさすがに笑えないでしょ」

「ハッピー、それ本当？」

嫌な予感。

言葉にしてしまえばその程度だが、ミラジーンはその予感に従って問い詰める。カイトがいつも手にしている依頼書の件が頭から離れない。

「あい。珍しかったからオイラ覚えてるよ！」

決まりである。

いつも笑ってばかりいるカイトだが、その件の時ばかりは笑顔がなりを潜める。貼り付けている笑顔の仮面を取り繕う余裕がなくなるのだ。

「マスター！」

慌てた様子で少し離れた場所で酒を飲むマカロウに相談するミラジーン。その様子があまりにも鬼気迫っていて、いつものミラさんはどこにいったのだ、と呆気にとられるルーシィ。

「…………ミラさん、あんな顔するんだ」

「あい！珍しいけどね」

そんなに大変なことなのだろうか、と他人事として考えていればふと、喧騒が止んでいることに気がつく。

振り返ってみれば、男女問わず暴れていたフェアリーテイルのメンバーたちは全員のされており、一人だけその中心で怒りに肩を震わせていた。

緋色の悪魔と名高いエルザである。足元には破られたお皿に、潰れたケーキ。喧騒に巻き込まれて落としてしまったのだろう。怒りに

震えていたかと思いきや、膝から崩れ落ち悲しみを堪えている。本日最後のケーキの恨みは恐ろしい。

「エルザあー！オレはまだ負けてー！ギヤぴつ！！？」

立ち上がって特攻をしかけるナツは哀れ床に突き刺さり、今度こそ完全にKO。修羅も真つ青になる表情で、静かに怒りを燃やすエルザははつきり言って怖い。今しばらくは触れない方がいいだろうと判断を下す。

「エルザ、ちと話がつてなんじゃこりやあ！！？！？」

「マスター、何かご用ですか？」

「う、うむ」

ミラジエーンとの話が終わったのか、エルザへと話しかけるマカロフ。その光景を見て驚愕するが、エルザの有無を言わせない表情に怯え、注意することなく咳払いひとつして要件を伝える。

「こほん。実は頼みがあつての。カイトを連れ戻してきて欲しいんじゃない」

「カイトを？しかし、あいつの居場所は掴めませんが」

「普段はそうなんじゃが、今回ばかりは心当たりがある」

「心当たり？」

普段は所在が掴めず、ふらふらとしているカイト。その所在を心当たりとはいえ掴めていることに素直に驚く。

「場所は霧ミストバレーの谷。そこにあやつがいなければそれで良い。確認だけでももらえるかの？」

「それは構いませんが……」

お使いのような頼み事。確かに、霧の谷といえは自殺の名所。不確定要素の高い任務にS級エ魔導師ルを派遣することは間違つてはいない。だが、エルザはマカロフが何かを隠していることを直感していた。

その懐疑の視線に気がついてか、マカロフは居心地の悪そうに咳払いをし、頼んだぞとだけ告げてギルドの奥へと引つ込んでしまった。

問いたださそうにも掛け合つてはくれそうにない。そう判断したエルザはため息を溢し、グレイとナツに視線をやる。

「話は聞いていたな。出発は明朝、今のうちに身支度を整えておけ」

「無茶すぎない!?」

ナツとグレイは目を回して話を聞いていたかどうかも怪しい。そんなことは知るかとばかりのエルザの言葉に思わず突っ込んでしまった。

身支度を整えるためにエルザは帰宅。残されたルーシイはナツとグレイを介抱した後事情を説明し、自身の準備を急ぐのであった。



「ここが霧の谷……」

ギルドを出て汽車や馬車を乗り継いで5日。ようやく目的地にいたルーシイは圧巻されるように眩く。

話に聞いていた通り、深い霧に囲まれた谷はまるでこの世とあの世の境目のようであり、見ているだけで恐怖心が煽られる。切り立った岩肌が恐ろしい怪物の牙のようで、これが自然の産物だというのが信じられない光景だ。

「つたく、なんでオレらがお使いなんか」

「あいつは放っておいても帰ってくるだろうに」

「なんだ? マスターからの使いが不満か?」

「いえ、全然!」

不満を零すナツとグレイはエルザの鶴の一声で前言撤回。しかし、ルーシイとしてはこの恐怖心に従うまま帰りたい気持ちでいっぱいだ。

「ね、ねえ! この辺りにカイトはいないみたいだし、もう任務は達成したんじゃない?」

「あら、ダメよ。依頼じゃなくても、ちゃんとお使いはこなさなくちゃ」

「そうだぞ、ルーシイ。ミラの言う通りだ」

「はあ、わかりました………ってミラさん!!?」

ルーシイの言葉によく周囲もそれを認識したのか、ミラジェーンを中心に輪を開く。当の本人は呑気なもので、いつものようにニコ

ニコと笑みを浮かべて手を振っていた。

「ミラちゃん、なんでここに!?!?」

「私だってカイトが心配なもの。ついてきちゃった♪」

「そんな軽いノリで!?!?」

危険度は少ないとは言え、何が起こるかわからない。そんな中、戦闘能力の低いミラジェーンの同行は正直に言えば足手まとい。そんなことはミラジェーン自身も理解しているが、それだけカイトのことを心配している証である。

「はあ、付いてきたものは仕方がない。ミラ、極力私たちから離れないように」

「わかってるわ。それよりナツ、カイトの匂いはする?」

「よくわかんねエ」

「どういうこと?」

「よくわかんねエんだよ。なんつーか、匂いが混ざりすぎ?」

地面に鼻をつけて匂いを嗅ぐナツの感想。犬よりも鋭い嗅覚を持つナツが追えないとなると手段が限られる。

人海戦術を使おうにも人手が足りず、個別に別れて探そうにも深い霧の中再び合流するのは難しい。取れる手段としては地道に歩き回るしかない。

「つたく、肝心な時に役に立たねエな」

「ああ!?!?ンだとオ!?!?」

「事実だろオが!!?!?」

「はいはい。喧嘩しないで行くわよ」

喧嘩に発展しそうな2人を抑え、一同は進む。

もし、この光景を見たカイトがいればこうだろうか。

幕は開かれた

復讐の幕が

悲劇の幕が

不条理の幕が

さあさ、諸人よ。集いて歌え

これは人外が送る、人外による、人外のための幕間劇。

タイトルをつけるのならば、そう。

V^死amp^をiro^願che^うdes^吸idera^血mor^鬼te

無貌

ふと、空を見上げる。

太陽の見えない、まるで牢獄の様な空。

子供の頃は息苦しさを覚えていたソレも、今は懐かしさを覚える。
(懐かしい?.....カカ)

悪魔である自身は人の感情はある程度理解できる。だが、理解できるだけだ。本心から同情することもないし、心の底から喜ぶようなこともしない。あつたとしてもそれは負の感情のみ。

憎しみ、恨み、怒り、など。到底人の社会に溶け込むには unnecessary なもの。

だからこそ笑顔の仮面を貼り付けて、その場に合わせた表情に付け替える。ここを出てからはそう生きてきた。

そんな自分にそんな感情があつたことに素直に驚きつつ、今更懐かしんだところで自嘲する。

ああ、今日も今日とて嫌な空だ。あの陽の下をもう一度歩けるのなら、どんなに喜ばしいことか。

そう考えて、またも自嘲。

今日の自分はどうかやら相当まいっているらしい。
腹に巻かれた包帯を盗み見る。

一部の隙間なく真っ赤に染まった包帯を見なければよかつたその後悔して、重たい腰をあげる。この場に長居しすぎても相手の思う壺。せめてもう少し時間を稼げるようにとふらつく脚を動かしたところで、霧の向こうで蠢く影を見てすぐに止まる。

「カッカッカ、あーもう」

悪態を吐きながら少ない魔力を腕に回す。

複数の影が地面を蹴り、低い草を突き切ってこちらに向かってくる姿を確認する。

数秒後、宙を舞う鮮血が霧の中に消えていく。



10メートル先の視界も確保できないほどの濃霧の中、フェアリーテイルの面々は離れないように気をつけながら先へと進む。

「おーい、カイトー」

「どこー？」

「今ならアレやられることはないぞー」

「いや、出てこようがアレはするぞ」

「そこは嘘でもしないって言っておきましょうよ」

「だからアレってなに??？」

そんなこの場には似つかわしくない愉快的な会話をしながら。

深い霧は平衡感覚を惑わし、少しでも逸れたら合流できない恐怖。なにより、陽の光が遮られた環境は心に影響を与え、進むにしても戻るにしても歩みを遅くするはずである。

だというのに彼らはそこが自身のホームグラウンドであるかの如く、迷いなく歩く。先頭をナツとエルザ、真ん中にミラジエーンとハッピー、後方にルーシイとグレイという布陣。さすがは依頼の場数を踏んでいるだけはある、何が起きてもすぐに対処できるような陣形である。

とはいえ、いくら陣形を整えてもそこは人というべきか、薄暗い霧囲気にルーシイが押され何度か歩みを止めており、進行速度はそこまで早くない。

「ひっ??？」

ばさばさと、茂みから飛び立つ鳥に驚きルーシイが身構える。それを見て笑うのはナツとハッピーだ。

「なんだよ、ルーシイ。びびってんのか？」

「ビビりのルーシイ。略してビリーだね」

「うっさい！アンタたちがガンガン進みすぎなのよ!!??ひやつ??？」

今度は風で揺れる木陰の音に驚き、ついにはその場に座り込む。

「もうやだあ。なんでカイトはこんなところにいるのよお」

「確かにな。こんな辛気臭エとこ、あいつが好んでくるか？」

「私に聞くな。マスターから可能性が高いと言われたまでだ」
軽く泣きが入るルーシィに賛同するグレイ。

迷い込んだ、と言われたらそこまでだが、あのカイトの行動を予測できるはずがない。何かしら理由があるのかもしれないが、その理由をエルザは知らない。

確認するようにミラジエーンにも視線を向けるが、首を横に振るだけだ。

「はあ……。しかし、これだけ探したのだ。ここにはいないと判断する他ないだろう」

「それもそうだな。オイ、クソ炎。帰り道はどっちだよ」

「ああん!??なんでオレが知ってるんだよ!??」

「てめえの鼻で探せばいいだろうが!!?」

「ンな事できるかア!!?」

「はいはい、ケンカはやめて」

メンチを切り合うナツとグレイの間にミラジエーンが割り込み、なんとか触発することを防ぐ。しかし、別の問題が上がったのは明らかだ。

「な、なな、なななナツ?もしかして、帰り道わかんないの?」

「オレはエルザについてきただけだぞ」

震える声でルーシィがそう問えば、返ってきたのはいつそ清々しいほどの絶望的な返事。

「は、ハッピー!空飛んで探すのよ!」

「オイラ、戻ってこれる自信ないよ」

深い霧の中、例えハッピーが上空から出口を探してもそれを案内できる保証はなく、また合流できる自信もない。

すがるようにエルザとグレイを見れば、頭を横に振る。ミラジエーンも困ったように苦笑いするだけだ。

「ど、どーすんのよ!??あたし達、完全に迷子じゃない!!?」

そう、ルーシィの言う通り完全に迷子である。

深い霧の中無闇矢鱈に歩き回ろうにも体力の無駄。帰り道を探そうにも方向感覚はとうに狂っている。

水も食料も少なく、ふとルーシイの頭によぎるよは「死」という一文字。

「ど、どど、どうしよう!??どうするの!??どうするべきなの!??!!」

「落ち着け、ルーシイ。こういう時は慌てず、助けが来ることを待てばいい」

「そんな悠長な!!?」

エルザにまで噛みつくあたり、相当のテンパリようである。エルザもまさか噛みつかれるとは思わず、たじろくばかり。

「つたく、てめえがちゃんと道覚えてりやア」

「ああ!??オレのせいだったのか!??」

「2人ともやめてよー」

ケンカをまた再開するナツとグレイを止めようとハッピーが奮闘するが焼け石に水。

その場にいる誰もが不安に押しつぶされそうで、恐怖を忘れようと苛立ち、抑える理性も怒りの中に消える。

そんな状況の中、平静を保っていたのはミラジエーンだった。

「みんな、静かに!!?」

ミラジエーンの珍しい一言に皆が一瞬にして静まり返り、そして耳に手を当てたミラジエーンが何かを捉える。

「……………やっぱり。人の声がするわ」

「え?」

言われて耳を澄ませば、確かに。

微かに霧の向こうから子供の笑い声が聞こえる。人がいることに喜びつつも、しかし疑問が残る。

「こんなところに、子供?」

「ミラ、この辺りに村はあったか?」

「ない、はずよ」

ミラジエーンの言葉に警戒を強める一同。

なにせここは人が寄り付かないはずの霧の谷。村があるとは到底考えられない。人の声を真似して巣穴に誘い込むモンスターもいる

ことから、その類ではないか、といつでも戦闘に入れるように態勢を整える。

そうしているうちにも声はどんどん近づき、そして霧の向こうに影が見える。影の数は3つ。いずれも小さい。

ごくり、と翼を飲み込み、ルーシイはフィジカルの高いタウロスを召喚できるように構える。

ナツは拳に炎を灯し、グレイは両手を合わせて造形の準備を整え、エルザは剣を換装し、ミラジエーンとハッピーは戦える4人の後ろに隠れる。

そして、目視できる距離まで近づいた瞬間――

「はははーこっちこっちー」

「ま、待ってよお」

「遅いわ遅いわ遅いわ！今日は、今日こそは霧の向こうに――あら？」

霧の向こうから現れたのは3人の子供。いずれも十代に差し掛かるかかからないかぐらいの見た目。先頭を走っていた少女がルーシイたちに気がつくつくと、残る2人の少年も気がついて立ち止まる。

突然のことに驚き言葉を失う少年少女に、警戒を強めていた一同は意表を突かれて言葉を発せない。

しばし互いに睨み合い、そして少女が口を開く。

「えっと……もしかして、霧の向こうからいらしたのかしら？」



渴く

喉が渴く

喉を掻き毟りたくなるような渴きが自身を襲う

ああ、水が欲しい

命の源となる水が

この渴きを潤すものが欲しい

ああ、渴く渴く渴く

自らの腕を引っ搔いて、そこから流れる水を飲むが所詮は一時凌ぎ

この渴きは未だ癒されない

ああ、水を

早く水を

この乾いた喉に癒しをおくれ

◆◆◆

少年少女とであつたフェアリーテイルの面々。

警戒しつつも話を聞けば、彼らはこの近くにある村から来たそう
だ。もしかすればカイトの情報、ないし帰り道がわかるかもしれない
と案内をお願いした。

3人のうち1人は大人達に旨を知らせてくると先に戻り、残りの2
人が案内してくれることに。

少年の方はこちらを警戒しているのか、少し離れた先を歩き、逆に
少女は外から来た人間が珍しいのか、一番話しやすいルーシーに懐い
ていた。

「まあ！お姉さんたちは魔導士なのね！」

「そうよ。あたしは星霊魔導士って言って、星霊たちと契約してるの
よ」

「すごい、すごいわ！」

きやつきやつと喜ぶ少女に警戒心は薄れ、ルーシイは己の魔法を得意げに語る。いい気になったルーシイはそのまま腰のホルダーから鍵をひとつ取り出し、実演してみせた。

「開け、子犬座の星霊！ニコラ！」

「ぷく」

現れたのは子犬とは名ばかりの、白い二足歩行するナニカ。鼻は二エンジンのように尖っており、耳もないつるつるの頭はどこからどうみても子犬ではない。ふるふるすると震える体は頼りなく戦闘すらできないが、星霊魔導士の間では愛玩用として人気の高い星霊ニコラ。

ルーシイは彼、もしくは彼女にブルーと名をつけ可愛がっていた。

「この子はブルー。れっきとした星霊よ！」

「まあ！可愛らしいわ！こんには、おちびさん」

「ぷーん」

「きゃー！抱きしめたいくらいにかわいいわ！お姉さん、どうしましょう!?？」

「もちろん、いいわよ」

「きゃー！」

「ぷぷーん!?？」

許可を得るや否や、少女はブルーを抱きしめて撫で回す。あまりの激しさにブルーが戸惑っているが、そんなことは少女の知ったことではない。今は己の感情に任せて愛でるだけだ。

「うわあ、ルーシイが調子に乗ってる」

「転ばねえよう見張ってるよ、ハッピー」

「迷子になるかもしれねえから手エつないでやれよ」

「何か失くしたりしてないか？」

「足元に気をつけてね」

「そんなに言われるほど!?？きやつ!?？」

メンバーのいいようにそう返したと思えば、足を滑らせて思い切り尻餅をつくルーシイ。

「言った通りじゃねえか」

「うっさい!!?もう、なんなのよ……………」

痛む尻を刺さりながら足元にあったものが目に入る。

ゴミのように見えるが、妙に生々しい感触のソレ。蛇の脱皮した皮のように思えるがそれにしては大きい。興味本位で手に取ろうとした瞬間、前方をあるく少年から声がかかる。

「見えたよ」

言われてそちらを振り向いて、少年が霧の向こうに消える。それを追いかけた瞬間、今までが嘘だったかのように霧が晴れた。

長い時間歩いていたのだろう、空はすでに茜色に染まり、しばらくすれば夜の帳が降りることが伺える。後ろを見ればすぐそこに霧が壁のように待ち構えているが、まるでこちら側には近づけないように周囲を取り囲んでいるだけ。ここだけが霧の影響を受けないようだ。

「ここが僕たちの村だよ」

「ようこそ、お姉さんたち」

少年少女は村だというが、村というよりは集落の方が近いだろう。見渡した限りでも家屋は数えても十数個に満たず、転々としているだけで他は畑。家屋も一般的な石やレンガではなく、木材で作られていた。

道の向こうでは住人であろう、幾人かの大人がこちらの様子を伺っていた。すぐそばには伝言を伝えてくると別れた少年の姿。

まさかこんなところに人が住んでおるとは思わず、また霧の中にこのような環境があるとは思わず唾然としていれば、大人たちの中から一人の老人が先頭に立つ。

「いらっしやいませ、お客人。ワシはこの長を務めさせていただいております。さて、長旅疲れたでしょう。今宵は宴、あなた方を歓迎いたしますよう」

フェアリーテイルの面々を置いて、村の面々はワツと盛り上がるのであった。

不思議の国

目を閉じる。

それだけで視界は暗闇に覆われて、保っていた意識が沈みゆく。ずるずると、まるで泥に嵌るかのように。

どつぷりと、足の先から頭の先まで。

沈んで、沈んで、沈んで。

波に揺られるかのような心地よさに身を委ね。

ゆらり、ゆらり、ゆらゆらり。

そうしている内に自身と暗闇の境が曖昧になって、溶けていく。

溶けて、蕩けて、暗闇そのものへ。

ああ、なんと心地よいことか。

眠り、とは擬似的な死だ。

眠れば何も感じず

眠れば何も見えず

眠れば何も聞こえない

終わりのない身には救いであり、生命体であることを思い出させてくれる貴重な機会。

このまま堕ちるとここまで堕ちてしまいたい気持ちに駆られるが、しかし終わりに達するにはまだ早い。

ゆつくりと瞼をこじ開けて、口を半月状に歪ませる。

さあ、宴の時間だ。

血と臓物が舞う狂宴を開こう。

思うがままに貪り、思うがままに呑み干してしまおう。

ツン、と香る血の匂いを纏いながら、ソレは重たい腰を上げた。



村人たちに村の中央に案内されたフェアリーテイルの面々はただただ困惑する。

村長を名乗る人物の宣言通り、宴は開催された。

村の中央に火を焚いて、その周囲に座って飲み食いする宴は一見すると楽しそうではあるが、いかんせん理解が追いつかない。

人がいないと思っていた場所には集落があり、たどり着くや否や宴に参加。今は魔導師が珍しいのか、各々村人たちに囲まれて質問攻めにあっている。

おかしい、とルーシイは頭をひねる。自分たちはカイトを探しに来ただけなのに、なぜこんな目にあっているのか。それ以前に、この村

に来た時から胸の中に渦巻くもやもやはなんなのか。

「さあさ、お嬢さん。これでも食べなさいな」

「なあなあ！ねーちゃんはどうなマホー使うんだ？」

「おねーさん、この子以外にも素敵な星霊さんはいるのかしら？」

「ぷくん」

「ちよ、ちよつと待って！」

流石に処理しきれなくなったのか、ルーシイが助けを求めて辺りを見渡すが、エルザは頬を赤くした村の女性たちに囲まれ、ミラージェンはだらしない顔をした男性たちと談笑、グレイは道中で腹が減ったのか食事につつき、ハッピーは辛そうにうづくまるナツの介抱をしていた。

「つて、ナツ!?？大丈夫なの!?？」

「うん(づ)ん(づ)ん(づ)ん……」

何かの異常かと近づいて見れば、何やら鼻を押さえている。

「あい。なんかスゴい臭いんだって」

「く、臭い？」

何か臭うのか、と試しに鼻を鳴らすが、香るのは火の焼ける匂いだけだ。しかし、滅竜魔導師であるナツの嗅覚は獣寄りだ。もしかすれば燃やしてある木材の匂いなのかもしれない。

「ナツ、大丈夫？」

「ふ、ふへエにほひだ……」

「あー、もう。あつちで休んでなさいよ」

愛用のマフラーで顔の下を覆い、その上から鼻をつまんでも尚臭いようだ。仕方なくナツを端っこの方に連れて行き、横に寝かせる。全く世話の焼ける、と愚痴をこぼしながら席に戻れば村人たちの生暖かい視線。

「できてるねえ」

「できてるよ」

「できてるわあ」

「できてません!!」

妙な勘繰りをする村人たちを全力否定し、なぜあたしがあいつと、

とその姿を横目で追う。確かに、フェアリーテイルに加入するきつかけをつくったのはナツだ。それに対しては恩もあるし、感謝もしている。しかし、それを差し引いても目に余る無遠慮さや、失礼さときたら。

例に出せば人の家に無断侵入してくるわ、周囲を巻き込んで喧嘩するわ、人の色気にダメ出しするわ。

バルカンに襲われそうなところを助けてくれるわ、フロントムの本拠地まで単身乗り込もうとするわ、なんだかんだ言いながらギルドの仲間を大切に思ってくれるわ、と考えたあたりでこれは違うと頭を張って霧散させる。しかし、周囲からの生暖かい視線は一層強くなり、心なしかブルーでさえもそのような視線を向けているように感じる。

頬が赤くなっていることが自身でも理解でき、弁明しようとするが言葉が上手く出てこない。

「ち、ちがつーこ、これはー」

「なにやつてんだ？」

「別に!!なんにも!!それよりどうしたの!!?!?!」

粗方食べ終えたのか、不意に絡んできたグレイにこれ幸いとばかりに乗っかり強引に話題を変える。なんのことだかわからないグレイは若干ルーシイに引いていたが、ぐつと堪えて話を続ける。

「あの村長からここに集まれて言われてよ」

「あら、そろそろなのね」

「え？」

ブルーを抱き抱えた少女の言葉にルーシイが反応する。それがどういう意味なのか尋ねる前に、続くようにして現れたエルザとミラジエーンに遮られた。

「ん?お前たちもここにいたのか」

「あら、エルザも呼ばれたの?」

「つーことはミラちゃんもか。けど、今からなにが始まるんだ?」

頭を悩ませる4人を他所に、宴会の中央に現れた瓶を持った村長の登場に、村人たちから歓声があがる。

「さあ、みなもの！今宵は新たな仲間がワシらに加わることとなった！これより歓迎の儀を行う！」

そう言つて瓶の中身をいくつかの杯に注ぎ、うづくまるナツを含めそれぞれに配られる。杯の中にはツンと鼻につく赤い液体。ワインのようではあるが、それにしても臭いがきつい。

「さあさ、お飲みください。これを飲めばこの住人として認めましょうぞ」

「すまない。気持ちはありがたいが、これは受け取れない」

飲むことを躊躇してれば、エルザがそう切り出して杯を返す。返された村長は困惑するばかりだ。

「はて？あなた方は現世から逃げてきたのでは？」

「いや。私たちは人を探しに来ただけだ」

「ああ、なるほど。迷い人^{アリス}だったのですな」

「アリス？」

「いえ、たまにいますのですよ。あなた方のように、彷徨い歩いた結果ここに辿り着いた人が。ワシらはそれをアリスと呼んでいるだけです。では、この村には何用で？」

「人探しだ」

「人探しの依頼ですか？しかし、この村の者は望んでここに住んでおるのです。栓なきことはおやめなされ」

「いや、どうもこの場にはいないようだ。他に村人はいるか？」

「ふむ……………ここに居るのは村人全員ですが……………」

「そうか。では、ここにはいないのだろう。折角の宴に水を刺して悪かった。私たちは退散させてもらおう」

「え!?」

エルザの言に意外だとルーシイは驚く。

夜の森を抜けようとするなど、普段のエルザからは考えられない強硬策だ。ただでさえ霧が深い上、夜に動き出す獣もいる。夜というのは別世界なのだ。

当然のことながら村長はそれを止めようとするが、エルザはそれを拒む。折衷案として離れの小屋を貸してもらえたが、これにはグレイ

も困惑しているようでエルザと村長を交互に見ている。

「では、私たちは休ませてもらいます。明朝出発しますので」

「え、ええ……。お力になれず申し訳ない」

一礼したエルザがその場を去ろうとして、ルーシイたちも追いかける。そして村人たちからある程度距離が開くとエルザを聞いただけだ。

「ちよつと、エルザ。さすがに失礼なんじゃ……」

「らしくねえぜ、エルザ。どうしたんだよ？」

「……ミラ、周りに村人はいるか？」

「いない、と思うわ」

「そうか」

先頭に行くエルザが足を止め、ルーシイたちに振り返る。

「私はこの村はおかしい、と考えている」

「おかしいって……。そりゃ、こんなところに村があるのは驚いたけど」

「そうではない。村人がおかしいのだ」

「村人が？どこにも違和感はなかったと思うが？」

「グレイは村の人とあんまり交流しなかったからわからないかもしれないけど、確かにおかしいわ」

「ミラさんまで？」

ルーシイも村人との交流はあるが、しかしおかしなところなど見当たらぬ。普通に食事をして、普通に笑い暮らしているようにしか見えないのだ。やがて、重い息を吐いてエルザが胸の内を話す。

「……この村人は、出会ったから1度もまばたきをしなかった」

小さいが、確かな違和感の正体。

人である以上、まばたきは誰しもある。いや、しなければ生きていけない。

絶句する2人に更に追い討ちをかけるようにミラジエーンがグレイに問う。

「グレイ、食事にお肉が出てたけど違和感はなかった？」

「は？いい、いや。ちよつと筋張ってたぐらいだった、はず……」

「ここに来るまでに一度でも動物を見た？」

見ていない。

森の中でも、そして村の中で家畜すらも見ていなかった。

「だとしたら、オレが食った肉は……………?」

「わからん。しかし、吐き出しておけ」

「お、おう」

背負っていたナツをエルザに預けて、グレイが木陰に隠れる。遅れて水をぶちまける音が聞こえてきた。

「ね、ねえ。じゃあこの村は何なの?」

「それもわからん。だが、少なくともこの村に人はいない」

そう切り捨て、しばらくして吐き終えたグレイと合流を果たすと目的の小屋に到着。

ナツは未だに気分が悪い為グレイ、ルーシイ、エルザ、ミラジエーンの4人、ローテーシオンを組んで寝ずの番を、そして機動力のあるハッピーに村の様子を窺ってもらう。何かあればすぐさま飛んで連絡が来るはずだ。

「……………ねえ、グレイ。大丈夫なの?」

「ああ……………」

今はルーシイとグレイの番になっており、入り口の外で2人して立っているが、どうにもグレイの様子がおかしい。

心ここにあらずというか、虚な目をしている。変な物を食べさせられたシヨックだろうか?気持ちはわからないでもないが、少なくとも今は真面目にやってもらいたいものだ。ルーシイは頬を膨らませる。

「ねえ、ちよつと、グレイ!」

「ああ……………」

「もうっ!!?」

反応の変わらないグレイにもう知るかとばかりにそっぽを向く。

双方黙れば辺りに広がる静寂。虫の声も、鳥の声さえ聞こえない薄気味の悪い世界。この場は村の中心から離れた場所にあり、霧の壁もより近くに見える。明朝またあそこを潜らねばならない不安に煽られ、顔を青くしたルーシイは空を見上げる。

「あれ?」

空を見上げたルーシイが、ふと違和感を覚える。

いつもならば燦然と輝く星々、それが見えないのだ。月ははつきりと見えることから空が曇っているわけではない。ではなぜ?と考えたところで小屋の扉が開いた。

「交代の時間だ。グレイ、お前は休め」

「ああ……………」

中から出てきたエルザに従い、グレイは小屋の中に入る。それを確認し、扉の向こうにいないことを確認するとルーシイはエルザに違和感を伝えた。

「ねえ、エルザ。なんだかグレイの様子がおかしいんだけど」

「わかっている。放心状態、とはまた違う。食事の影響……………だとしてもルーシイは影響を受けた様子はないな」

「あたしはお肉を食べてないからかな?」

「いや、食事に何かを仕込むにしても、それならば食事全般に何か仕込む筈だ」

「うーん……………あ、あと、今夜曇り空でもないのに星が見えないの」

「なに?……………確かに。月ははつきりと見えているな」

いつもならば気にはしない小さな違和感。ここは違和感だらけだ、とエルザは考えにふける。

あれほど広大な森の中、生き物の気配ひとつしないこと

村に住むモノたちの様子

そして星空

初めはガルナ島にいる悪魔たちと同じかと考えたが、アレは^{ムインドロップ}月の雫の弊害による違和感。今回は紫色の月は見えないし、なにより祭壇も見当たらない。

しかし、確かに感じる違和感が掴めず、さらに頭を悩ませる。

「ふむ……………。ルーシイ、霧の谷について知ってることはあるか?」
考えても答えの出ない事を放置して、今は霧の谷についての情報を集めるエルザ。たくさん書物を読むルーシイならば、と思い聞いてみる。

「うーん。せいぜい自殺の名所ってくらい。あとはよく童話なんかで

出てくるってくらい」

「童話？」

「あれ？知らないの？よく悪い魔法使いのお城があったり、悪い子を食べる怪物がいたり。あとは——」

「吸血鬼ヴァンパイアの住処だったり」

「吸血鬼？」

ルーシイの並べた情報の中にあまり聴き慣れない単語があり、思わず鸚鵡返しに聞き返す。

「そ。あくまでも物語の中だけだね」と半笑いしながらさらに続ける。

「闇に紛れて人を襲う、空想上の生き物よ。十字架とニンニク、それと聖水や教会が苦手だったりするけど、1番はやっぱり陽の光に弱いところが弱点なの。陽の光に晒されてると灰になっちゃうんだって」

童話をよく知らないエルザが少し興味を持ち、その先を聞こうと話を促そうとする。しかし、少し先の藪からガサリ、と何かが動く音を聞いて即座に剣を換装。その鋒を藪に向ける。

「誰だ？？」

エルザの凜とした声が闇夜に溶けて、10秒、20秒………そして1分が経過したころ、ようやく諦めたのか藪の中から人影が姿を現す。

一瞬警戒したエルザの剣を持つ手に力が入るが、その姿を見た瞬間力が抜ける。

「おまえは……………」

「やあやあ、皆さんお揃いで……………とは言えないねえ。元気にしてた？」

エルザとルーシイが驚愕の視線を向ける先、そこに腹部を赤く染めたカイトの姿があつた。



一方その頃、ハッピーはといえばエルザに命じられた通り村への侵入を果たしていた。

小さい身体を駆使して物陰に隠れ、耳を澄ます先は先ほど宴会が行われた会場。中心であるキャンプファイヤーの炎を中心に、村人たちが輪になって座っている。その中心に立つのは村長だ。

「さて、皆の衆。宴もたけなわであるが、今宵はこれにて終い。よく食べよく飲み、そしてアリスたちとよく語り合つたであろう。……………嫌われてしまったようではあるがな」

村長の言葉に違いない、と笑う村人たち。少しばかり良心の痛むハッピーだが、任務を放棄すれば後が怖い。ぐっと痛む心を抑えて話を続ける村長に耳を傾ける。

「まあ、仕方があるまい。所詮は迷い子^{アリス}、我らが同胞の資格足り得ん。……………若い女子は惜しいがのう」

それを笑う男性陣に、憤慨する女性陣。どこにでもあるような光景だ。しかし、村長の続く言葉に村の雰囲気が一転した。

「さて、では女王からのお言葉を伝えよう」

一瞬。

一瞬にして団欒とした空気が消え去り、その場にいた全員が息を潜める。まるで少しでも遮れば何かが起こることを理解しているよう

に。

それを確認した村長はコホン、と一つ咳払いをするとその場にいる全員を見据えて語る。

『アリスは私が出迎える。然るのち、貴様らにも恩情を与えよう』とおっしゃった」

瞬間、爆発するかのようにその場にいた全員が歓喜の声で笑い出す。しかし、先ほどまでの笑い声とは違う、嘲笑に満ちた笑い。

男女関係なく笑い、その声が闇夜に木霊する。口が半月上に裂け、歯を見せての大笑い。

(なんだ、コレ……………)

あまりの変貌にハッピーはエルザが警戒する意味を理解する。確かにこれは普通ではない、異常だ。異変だ。異質だ。

我知らずと注意は村の中心へと向かい、ハッピーはその光景を余さず伝えられるようにしっかりと観察する。

だからこそ気づかなかった。

ハッピーの背後に、無表情で見下ろす少女がいたことに。まるでルールを抱いていた時の歓喜がウソだったかのような、感情の抜け切った表情の少女の存在に。

「え?……………にぎやああああああああああああ!!?!?!!」

ハッピーの叫び声は村人の嘲笑に掻き消され、夜の暗闇に飲み込まれた。



腹部を赤く濡らして2人の前に現れたカイト。濡れて分かりづらいが、巻かれた包帯から零れる血潮が脚を伝って線を引き、その傷の深さを物語る。いつものように微笑を浮かべるが、それもどこか力ない。

「う、ウソ!??大丈夫なの!??」

慌てて近寄ろうとするルーシイ。だが、その襟首をエルザが掴み進行を阻む。ぐえっ、とカエルを潰したかのような悲鳴を上げたルーシイを尻目に、エルザはカイトを睨みつけ質問する。

「落ち着け、ルーシイ。……………おい、いままでどこにいた?」

「森の奥に隠れてたんだよ。そして、そこでバケモノに襲われた」

「バケモノ?」

「そ。詳しい話は中ですよ。中に入れてくれないかな?」

「……………わかった」

少し悩んだ素振りを見せ、小屋の中へと案内する。

小屋自体は簡素な作りであり、扉を潜った先に居間があるだけだ。その居間も土の上の後座を引いただけのもの。ルーシイたち5人が横になれない広さであり、現在は気分の悪いナツが横になり、グレイとミラジエーンが壁を背にして座りながら寝ていた。気配を感じたのかミラジエーンが眠りから目が覚め、目蓋を擦りながら現状を確認する。

「ん。……………あら、もう交代の時間?」

「いえ、その……………カイトが戻って来たんですよ」

「やあ。おやすみ中にごめんね」

ルーシイの後ろから顔を出すカイトに一瞬ミラジエーンが驚いた表情を見せるが、すぐさま笑顔で取り繕う。

「マスターの言う通り、ここにいたのね」

「うん。まあ、こんな状態だけど。実はこの森の中には——」

「待て。それより先にナツを診てもらえるか?体調が優れないらしい」

エルザの言にえ?と疑問の声を上げる。ナツの体調は確かに悪いが、怪我を負ってるカイトに任せていいものではない。さすがに理不尽にも程があるだろう、と抗議しようとするが、いつもより鋭いエルザの睨みに何も言えずにごすごすこと引き下がる。

カイトはやれやれ、とため息を吐くと横になるナツに近づき触診を始めた。

「で?どうしたの、彼?」

「何でも臭いで酔ったらしい。なんとかなるか?」

「うーん、まあ、このくらいなら」

カイトが手をかざして数秒。鼻を押さえて苦しそうにしていたナツが急にぱつと目を見開いたかと思うと、その場から飛び上がる。

「お?おお!?全然臭わねエ!!?」

「コラ、さすがにお礼いいなさいよ」

ようやく臭いから解放されたことに有頂天のナツにそう叱れば、悪い悪イと言つてカイトと向き合う。しかし、それも少しだけのこと。笑顔だったナツの表情が曇り、眉を引き寄せてガンを飛ばす。

「誰だ、テメエ」

「え?」

「やはりか」

話についていけないルーシーを他所に、エルザは剣を素早く換装させるとその剣筋をカイトの首に当てた。

だというのにカイトは不適な笑みを崩さず、黙って両腕を上げる。

「なあんで、バレたのかしらあ?」

口から紡がれたのはカイトとは似ても似つかない女性の声。

「オメーがカイトなわけねえだろ」

「ナツ、それじゃあたしがついていけないから」

「あ?見りやわかんだろうが」

「ナツの言う通り、見ればわかる」

腕に込める力が強いのか、剣筋がカイトの首を薄く切りつけ、そこから薄く血が流れる。

「あいつは確かに、人の気も知らないでおちよくったり、空気を読みながらぶち壊しに来たりとロクでもないやつだ」

「エルザ、普段からそう思ってたんだ……」

まあ、確かにと同意するしかないが。と内心で同情するルーシー。しかし、とエルザは続ける。

「あいつは私たちに迷惑はかけまいと、自身の傷を笑顔で隠すやつだ。確かにあいつの笑顔は下手だが、貴様よりは遥かにうまいぞ?」

信頼しているからこそそのエルザの言葉。仮に本物が怪我をしたとしても、それを治すまではエルザたちの前には姿を現さない。弱みを見せずに全て笑顔で誤魔化す、カイトの悪癖。そういうところがエルザは嫌いではあるが、だからこそ今回は分かりやすかつたともいえる。目の前の存在をカイトと呼ばなかったのはそのためだ。

「あなた、本物のカイトはどこにやったの？」

「隠してンなら早くいえよ？」

「殺した、などと言ってみろ？ 貴様を生かしておくつもりはない」

ミラジエーン、ナツ、エルザからの圧力。並みの人間ならば泣いて洗いざらいを吐き出すかもしれない。しかし、目の前の存在はそんなモノ我関せずとばかりにくつくつと笑う。

「やあねえ、必死になっちゃってえ。ほおんと人間って無粋」

「答えろ。生憎、私は気が長くはない」

首筋に剣を押しつけられながらも口の中で笑いを溢し、目の前でナツが拳に炎を灯していようと意に返さない。そんな不気味な姿を見てルーシイが思わず一步後ろに下がる。

ガサリも後座が音を立てたその瞬間、目の前の存在が笑いをやめて声を出す。

「やっちゃってえ」

「アイスメイクロー」

「[ice]」

瞬間、寝ていた筈のグレイが起きたかと思うと魔法を発動しようとして構える。問題はその先にいるのはエルザ、ナツ、ルーシイ。視線は明らかに3人を捉えていた。

「アイスゲイザー
氷欠泉」

抑揚のない声を合図に足元に魔法陣が展開されたかと思うと、水が噴き出すかのように氷の山がその場に顕現した。小屋の半分を破壊しても止まらない氷の山をエルザは剣で、ナツは炎で対抗するが、それが不可能だとわかると各々が射線から飛び退く。ちなみにルーシイはずつとナツの後ろにおり、飛び退く際に脇に抱えられて事なきを得ていた。

「ちよつと！グレイ！やめつ、きやあ!!？」

「ミラ!!？」

氷の山の反対側へと、暴れるミラジエーンを肩に背負い逃走するグレイ。慌ててエルザが追いかけてしようとするが、脚を踏み出した瞬間地面に直線が刻まれる。

反射的に飛び退いたエルザは剣を構えると下手人を視認する。

月の光を浴びて怪しげに煌めく銀髪。長いそれをうなじ辺りで編み込み、腰まで伸ばしている。背丈はエルザと変わらない程度だが、その身から放つ圧力がその身体を大きく見せている。何より眼を引くのは爬虫類のような縦に割れた赤眼の瞳孔と、側頭部から生える天を突く様なツノ、オペラグローブ越しにもはつきりとわかる長い爪。そして黒のスレンダーラインを避けるように腰から生える蝙蝠のような羽がそのモノを人外である事を示していた。淡麗な顔を歪ませ、嗜虐に満ちた笑みでこちらを見据える人外の女。

「貴様、グレイに何をした!?!？」

「ふふふ、教えるわけないじゃなあい？」

「そうか。ならば、倒して聞き出すまで!!？ナツ!!？」

「おう!!？ 火竜の咆哮!!？」

反対側に避けていたナツが氷の山を登り、相手の頭上から十八番の魔法を叩き込む。火竜の炎は全てを破壊する炎。その言葉に偽りなしのようで、当たった地面に大きなクレーターを作った。不意打ちに破壊力の高い一撃。これならば、と思った瞬間、上空にいたナツが氷の山に突き刺さる。

「ガツ!!？」

「なにっ!?!？」

「ふふふ」

怪しげに笑う女。その白磁の肌に傷を負った様子はない。

ならばとエルザが換装したのは飛翔の鎧。氷の山を駆使して目にも止まらぬ速さで上空の女に接近する。

「飛翔・音速の爪!!？」
ソニック・ブレード

すれ違いざまに確実に捉えた一撃。しかし、エルザの腕に伝わるの

はまるで水を叩いたかのような感触。骨や肉を裂いた感触ではない。現に裂いた筈の女の肌は何事もなかったかのように元に戻っており、悠々とその手に魔法陣を展開している。

場は空中。滑空できるような羽もなく、武器を振り抜いた体制で敵に背中を晒す、正に死に体。悪魔メは容赦なくその鋭い爪をエルザに突き立てる。

「戦血爪!!?」
ブラッディ・クロウ

「ぐうっ!!?」

振るった腕の軌跡をなぞる様に赤い斬撃がエルザを襲う。寸前のところで体を捻り右腕を掠った程度で治まったが、着地したエルザは歯噛みする。

相手は空を自由に飛翔するモンスター。それも的は小さく、動きも早い。飛行能力を持つハッピーがここにいないのは痛手である。

「にやろ!!? 火竜の鉄拳!!?」

「ふふふ」

跳躍したナツの拳をかわし、不敵に笑う女。余裕ありげに紙一重でかわすが、しかし女はナツのバトルセンスを舐めていた。そのセンスはエルザも認め、突飛な発想を実現できるだけの力も持っている。

「火竜の鉤爪!!?」

振り抜いた拳を慣性そのまま利用して回転し、脚に纏った炎が女の頭部を直撃。破壊力のある一撃は女を地に墮とし、砂煙が舞う。

そしてその隙を見逃すエルザではない。すぐさま投擲能力を上げる「巨人の鎧」に換装。通常武器では効果が薄いと思われ、換装する武具は闇を払う「破邪の槍」。轟音と共に投げられた槍は大地をえぐり、直前状のクレーターを刻み込む。

並のモンスターならばここで仕留めている。しかし、まだだ、とエルザは直感していた。破邪の槍を魔法で回収して再び換装。掴む右腕の傷に顔を顰めるが、そうは言ってられない。もう一度振り被り、そして狙いは自身の意思とは関係なく着地したナツへ。

「なっ!!?」

「うおっ!!?なにすんだ、エルザ!!?」

「違う!!? 身体が勝手にー」

「少し、おいたが過ぎるんじゃない?」

「ぐっ!!?」

「エルザ!!?」

砂塵の中から女の声が出たかと思うと、エルザの右腕が自身の首を締める。残る左腕で抵抗を試みるが、まるで万力のような力で締める右腕を動かすことは叶わない。

原因はアイツだ、とナツが砂塵に向かおうとするがその進行を砂塵の中から飛んだ魔法が塞ぐ。

「近寄らないでもらえるかしらあ? じゃないとお、お友達的首が折れちゃうわよお?」

「なんだと!!?」

一陣の風が吹き、砂塵が晴れた先には先ほどと変わらず傷つくことなど知らないとばかりの女の姿。ナツと目が合い、にやりとほくそ笑むがナツはどこ吹く風。確かに蠱惑的で魅了されるかもしれないが、残念な事にナツはそういつたことに疎かった。

納得がいかないと女は不満をあらわにして、嫌悪を込めた言葉を紡ぐ。

「あなた、なあに? 気味が悪いわあ」

「ンなこと知るか!!? それよりエルザと、ついでにグレイも戻しやがれ!!?」

「いいわよお。私が飽きて捨てたら、だけどねえ」

「てんめえ!!?」

「開け、人馬宮の扉!!? サジタリウス!!?」

「もしもーし!!?」

突如、女の足元にいくつかの矢が穿たれる。地面に突き刺さるそれを一瞥し、放った犯人を見据える。視線の先には氷の山を登ったルーシイの横、馬の着ぐるみをかぶった様な星霊、人馬宮のサジタリウス。間抜けな見た目だが、その弓の腕は百発百中。居抜き方ひとつで様々な効果を生み出す弓の星霊。

「動かないで!!? サジタリウスの弓は百発百中よ!!?」

「ルーシイ!!?」

「ナツ、ここは任せて!!?早くエルザを!!?」

「お、おう!!?」

珍しく勝気のルーシイに少し圧されて戸惑うが、すぐさまエルザの元へ。滅龍魔導士の力のお陰か喉から手を離すことはできたが、少しでも力を抜けばすぐ様また食らいつかんとばかりに力の入るエルザの右腕。

何かしらの状態異常だろうか。何がきっかけかわからないが、異形の女の攻撃を受けたらまずいと理解する。

「星霊……?ふふ、星霊魔導士までいるなんてえ」

興味に移ったのか、ゆっくり一歩一歩、にじり寄る女。

「っ!!?来ないで!!?撃つわよ!!?」

「ふふふふ。肉を裂いて骨を折って腹を貪^{はら}って血を啜^{わた}ってえ……ああ、我慢できないわあ」

ルーシイの警告など梅雨知らず、女の歩む速度は徐々に早くなっていく。これ以上は無理だ、と判断し牽制の意味を込めて脚を狙撃するようサジタリウスに命じる。しかし――

「えっ!!?」

百発百中を誇るサジタリウスの弓。だが放たれた弓は風を切り、女から数メートル離れた場所へと落ちる。

「る、ルーシイ様。限界、であるからして、もしもし……」

「サジタリウス!!?」

当のサジタリウスは一矢放つと顔を青くして、強制的に星霊界へと帰ってしまう。攻撃を受けた様子もなく、何が何だかわからず鍵に向かって呼びかけるが応答に反応はない。

一歩。

女が出した脚が土を蹴り、軽く砂塵が舞う。

一歩。

その音に気がついたルーシイが肩を震わせる。

一歩。

両足に力を込めて、氷山の上にいるルーシイに狙いが定まる。

狙いは確實。魔法の準備万端。唇を潤すように舌舐めずりして跳躍。

「ルーシィー！逃げろ！！？」

ナツの警告に釣られて振り返ってももう遅い。女はすでにルーシィの眼前。腕に纏う魔法を振り下ろせば後はもう肉の塊しか残らない。

直感する死。蛇に睨まれたように動かない身体。脳裏に巡る走馬灯。

辛うじて出た「あ」という言葉が、女の食欲をそそる。

「戦血^{ブラッディ}ー」

刹那、巨大な拳が女の身体を横合から殴りつけた。

咄嗟のことで宙をまう女だが、腰の羽を広げて滞空する。下手人を一瞥しようと殴られた方向を見据えるが、続いてその身の上に落とされる巨大な拳。砂煙を上げて墮ちた女が苛立つように魔法を放って煙を散開させるが、既に誰もいない。

「ああ………まったく、半端者風情がつ」

怒りに顔を歪めて女はまた空を飛ぶ。食事を邪魔されたことに腹は立つが、目当ての獲物が巣穴から飛び出してきたことは確認できた。

ならば、後はおびき寄せるのみ。これからのことを考えて、女は甲高く笑っていた。



「つあ、くつ………」

一方、女から逃げ出したエルザたち一向は森の中にいた。目の前では苦痛に顔を歪めるエルザ。そしてそれに覆い被さるように腕に喰らいつくカイト。

一瞬で移動した矢先の出来事にさしものナツも反応できず、ただた

だ困惑していた。

そうして少し、時間にしてみれば数秒足らずでエルザの怒りが臨界点を突破する。

「や……めんか!!? 馬鹿者!!?」

「げふっ!!?」

噛まれた右腕など気にせず、上半身の筋力のみで大の男を殴り飛ばすエルザ。間拔けな声を出して転がるカイトに追撃を与えようとして、右腕が自由に動くことに気がつく。

「あいたたた……。無事そうだなにより。さてさて、3人とも元気そうなのよりだよとお!!?」

いつも通り飄々とした笑みを浮かべ挨拶を交わそうとするカイトの顔をエルザの拳が貫く。間一髪のところでかわせたが、後ろにあった木にはくつきりと跡が残っていた。

「…………エルザ? 久々の再会に暴力かい?」

「…………偽物かと思ったが、どうやら本物のようだな」

「確認の仕方が乱暴すぎるよ」

やれやれ、とため息を吐くカイト。3人を見据え、どこか達観したような視線を向けると再びため息。それにイラツときたのか、無言で拳を振り上げるエルザに待ったをかけて、慌てて説明する。

「わかったわかった。わかってるよ、エルザ。聞きたいことは山のようにあるだろうけど、一先ず、此処がどこなのか説明するよ」

「霧の谷、じゃないの?」

「少し惜しいね、ルーシイ。霧の谷ではあるけれど、すでに此処は隠世。言うなれば異世界。魑魅魍魎が跋扈する、果ての地。人でなしの巢窟、星々に見放された廃墟」
ディストピア

そこで一息吐くと、カイトはうやうやしくお辞儀をし、さながら舞台役者のように声をあげる。

「不思議の国へようこそ、迷い人達。ウサギが案内するのは出口か破壊か」

楽しげな声色とは別に、顔を上げたカイトには哀愁と憐憫の感情が
刻まれているのだった。

過去

「ん…………んう……………」

寝心地の悪さに違和感を覚え、ミラジェーンは目を覚ます。壁に飾られた蝋燭が薄ぼんやりと辺りを照らす世界の中、周囲を確認する。古く冷たい石畳の床と壁、そして行先を阻むように建てられた鉄の檻。寝起きの頭でも自身が捕らえられている事を理解する。しかしなぜ、こんなところに？と考えたところで痛む頭部。血は滲んではないが、殴られたようにジンジンと鈍痛。しかし、それがきつかけとなりここに至る経緯を思い出す。

(そう、だったわ……………)

突然の奇行に抵抗しようともがいたはいいが、ビクともしないグレイ。そうしてわずわらしくなったのか、頭部を叩かれて気絶したのだ。

グレイに何があったのかわからないが、おそらく敵の本拠地に連れてこられた、ということだろう。檻を掴んで少し揺するがビクともせず、石畳を叩いてみても返ってくるのは硬質な音。脱出は不可能だ。

「無駄です」

「っ!!??誰!?!?」

暗がりから聞こえる声に反応し、そちらを振り向く。何も見えない闇の中だが、うつすらと灯る炎が徐々に視界を慣れさせてくれた。

暗闇の中にいたのは1人の女性。桃色の髪は乱れ、珍しい着物は薄汚れて所々が破かれている。着物から覗く肌も汚れ傷つき、これ以上の損傷は与えまいと身を守るようにして座っている女性。

正気も希望も写さない幽鬼のような瞳に一瞬怯えるが、その顔をミラジェーンは知っていた。

「アナタ、三羽鴉の斑鳩……………」

評議会から回ってきた要注意人物のリスト。暗殺ギルド髑髏会に所属する実力者。見つけ次第報告が義務づけられていた犯罪者は、し

かし人相書きで見た物と同一だとは思えなかった。

斑鳩はくつくつと喉の奥で笑い、顔を下に向けたまま呆れたように言葉を紡ぐ。

「三羽鴉……三羽鴉なあ。懐かしいわあ。うちにもそう呼ばれたった事あったわ」

「なんでここに……。ここはどこなの？」

「ふふつ……。ここはバケモンの巣。家畜を閉じ込める檻や。あんさん、脱出なんて諦めた方がよろしゆどす。うちらはあんバケモンに食われるまで、この暗闇で余生を過ごさなあかんのや」

そこにかつて闇ギルド間で名を馳せた斑鳩はいない。希望も気力も全て諦めた廃人だ。そこまで追い込む化け物の存在にミラジエーンは人知れず生唾を飲み、そして連れてこられる直前に見えたあの女性のことだと確信する。

(吸血鬼……)

御伽噺に語られる伝説上の生き物。流水を渡れず、十字架を嫌い、陽の光に嫌われた種族。それが実在しているなど普通であれば一蹴するだろう。しかし、ミラジエーンは知っている。吸血鬼が実在することを。料理好きで、方向音痴で、笑顔の仮面を被って必死に隠れようとする吸血鬼の存在を。

その時、かつんかつん、と音を立てて石畳の上を歩く靴の音が聞こえる。音源は上から徐々に降りてきており、階段があることが予想される。降りてきたのは筋骨隆々の、しかし頭部が梟となっている男。肩には長髪の男性が物を扱うかのように担がれていた。

こちらにも要注意人物の一人である梟。しかし、同じ三羽鴉であるはずの梟に暴行を受けた様子はなく、虚な瞳はこちらを見ていなかった。

「ホーウ」

一鳴して鉄格子を開けると肩にかけていた男性をぞんぎいに投げ入れると、そのまま立ち去る。投げ入れられたのはヴィダルサス・タカ。こちらは暴行を受けており、手足も痩せこけている。

「……………死にはりました？」

「ガハッ……ばっ、か、言っでんじやねエ」

か細い呼吸にか細い声。誰がどう見ても風前の灯の状態。近づいたミラジエーンが駆け寄って肩を貸そうとするが、その手は弱々しく払いのけられた。

「ほつとけ……地獄見た後、なんだ、よ……」

そのまま動かなくなり、すわ一大事かと勘繰るが、呼吸はしている。どうやら寝入ったようだ。

「……ここも広なりはったなあ」

「まだ他に人がいたの？」

「30人やわ。残りはゼーんぶバケモンの腹ン中どす。さっきかてもう2人おりはったんよ」

つまり、残り2人は食われたということだろう。しかし、吸血鬼といえはその名の通り血を吸う化け物。肉を食うことはないと他でもない吸血鬼本人から聞いている。別の化け物がいるのか？と考えるミラジエーンだが、タカの首筋に空いた2つの穴がそれを否定する。吸血鬼が血を吸った跡だ。

ぴちよん、とどこかで水が跳ねた。

その瞬間、斑鳩が顔を塞ぎ込み震え出す。

「きた……きてもうた……」

誰が？と聞く前に、水音が断続的に、間隔を狭めながら近づいてくる。

滴る水音に続いて香るツンと鼻を刺激する匂い。思わず顔を顰めるほどの濃厚な血の匂い。

その音がピタリとミラジエーンの背後で止まる。振り向こうにも後ろから感じるプレッシャーに微動だにできずに皮膚が粟立つ、まばたきひとつ許されない恐怖。檻が開かれた様子もないのにその肩に死人のような冷たい手が置かれ、その耳元で女が囁く。

「臭いわぁ」

耳元で紡がれる声は意識を失う前、カイトの偽物を演じていた者と一緒のもの。蕩けるような、同性であっても魅力を感じる声ではあるがしかし、同時にこちらに対する侮蔑も孕んでいた。

「酷い臭い。人と魔の混ざり者、けれど根っこからというわけじゃない」

「……………貴女、吸血鬼ね」

震える声を押さえつけ、ようやく捻り出した一言。女は関心するようになり、そしてミラジエーンを観察するように見やると、ため息混じりに答える。

「ええ、そうよお。」

ヴァンパイア

ドラクル

ナイトウォーカー

ノスフェラトゥ

ブラッド・スカー

フリークス

吸血鬼、悪魔、夜に生きる者、不死者、血を啜る者、化物……………好

きに呼びなさいなあ」

「カイトをどうしたの?」

「まあた質問なのお?」

「お願い、教えて」

ミラジエーンの懇願に暫し熟考。数秒ほど押し黙ると、肩に置いた手をミラジエーンの頭に置き換え、そのまま力任せに床に叩きつける。鈍い音を立てて床が割れ、額を切ったミラジエーンの頭部から血が流れる。ひつ、と悲鳴をあげた斑鳩が巻き込まれないようにとさらに身体を縮こませた。

「勘違いしないでもらえるう? アナタはアレを誘き寄せるためのただのエサ。必要なくなれば破棄する消耗品。質問も口答えも生きることさえ、私の許可なくしては許されない家畜よお。人間風情が、調子に乗らないでもらえるかしらあ」

「ぐあつ……………くう……………つ!!?」

「ふふふ。そんなにアレに会いたいの? アナタはアレのなあに? 久しぶりの再会は、私の胃の中なんていかがかしらあ?」

ギチギチと、頭を握る手に力が入りミラジエーンの頭部から嫌な音が聞こえる。ともすれば後数秒足らずで赤い華が咲くという所でその手が離される。再び襲う鈍痛に顔を歪めながらも、ミラジエーンは片目だけでもそちらを見やる。

いつの間にやら檻の外にいた女はミラジエーンの額から掬った血を指先で舐めて、それをすぐに吐き捨てる。女は妖美な笑みを浮かべ、侮蔑を込めた言葉をミラジエーンに送る。

「ああ、ダメねえ。思った通り凄く不味い。これに口を出すアレの味覚は、やっぱり狂ってるわあ」

興味が失せたとばかりに踵を返し、姿を消そうとする女。その姿が消える前に、思い出したようにミラジエーンに告げる。

「ああ、そうそう。アレはまだ生きてるわあ」

「ゲホゲホ……なんで教えてくれるのかしら？」

「ふふふ、簡単よお。人間はできるだけ絶望してから殺すことにしてるからよお」

それだけ告げると女は通路の暗闇へと完全に姿を消す。同時に張り詰めていた糸が切れたように、ミラジエーンもまた意識を飛ばした。



「ワンダー・ランド不思議の国？」

カイトの言葉を復唱するようにルーシイがそう言えば、カイトはいつもの調子でそうそうと告げる。

突如現れたかと思えば訳の分からないことを宣うカイトに、ルーシイの頭はパニック状態。しかし、そんなことは知ったことかとはばかりにナツが噛み付く。

「名前なんてどうでもいいだろ！それよりミラと、ついでにグレイ助けねエと！」

「いやいや、名前は重要だよ、ナツ。名前はその存在を明確にして、姿形を与えるものさ」

「だからなんだよ!!？つーか、ハッピーはどこいったん?!？」

「ハッピーなら村の搜索を任せている。もうそろそろ帰ってくる頃合いだと思うが……」

「カッカッカ……うん、悪手だね。いまごろ、下処理にでもされてる

かな?」

なんとなしに呟くカイト。その言葉を聞いた瞬間、ナツがその胸ぐらを掴み上げる。さして抵抗もせず、ヘラヘラと笑うカイトの横顔にナツの鉄拳が見舞われた。

「ナツっ!!?」

「なんで……なんで笑ってられるんだヨ!!?」

殴り飛ばされたカイトは患部をさすりながら、変わらず笑みを浮かべる。飄々と、いつものように。へらへらと、変化なく。底の知れない笑顔を張り付けて、胡座をかく。

そのいつもと変わらない仕草にルーシイはいも知れない悪寒に晒される。異常空間である中での正常は狂気であるとは、誰の言葉だったか。

「笑顔つてのは場を和ませることができるとかだろうか?俺なりの気遣いだよ♪ほら、スマーイル♪」

「てめっ!!?」

「待て、ナツ」

再び殴りかかろうとするナツをエルザが制止させる。それでも怒りが収まらないのか口答えするナツを目で圧すると、胡座をかけたまま微動だにしようともしないカイトを睨みつける。

「…………カイト、貴様は何者だ?」

「おや?俺が偽物だというのかい?疑うのなら君たちとの思い出をこれから十まで、それこそ朝まで語ろうか?」

「違う。わかっているだろう」

ここにきてカイトの表情が一瞬驚いたものに変わる。それから暫くエルザを見つめると観念したようにため息をこぼす。

「はあ……………なーんでわかったのかな?」

「貴様がわかりやすいだけだ。人を逆撫でする時は大抵何かを隠している時だからな」

「……………隠し事にはなれてるはずなんだけどねえ」

「どういうことなの?」

「わっかんねえ」

憤りの収まらないナツは不服気に鼻を鳴らしながらそう答え、ふと違和感を覚える。スンスンと何度か鼻を鳴らし、終いにはルーシイの髪に顔を近づけて匂いを嗅ぐ。

「何すんのよ!?？」

羞恥のあまり勢いに任せたビンタがナツの頬を叩いて引き離す。それでも収まりがつかないのか、頻繁に辺りの匂いを嗅ぐナツ。

ナツの不審行動はさておき、ルーシイはカイトへと視線を向ける。その視線を感じてか、観念したように後頭部を搔くため息混じりに言葉を溢す。

「はあ……先に言っておくけど、他言無用で頼むよ」

それだけ言うと、カイトは右手を掲げ魔法陣を展開。ソレが徐々に下へと下がりカイトの身体を通過していく。右手から腕へ、顔を通り胴体を通し、腰や脚を通り抜けるとその姿が一変する。

側頭部から生えた雄牛のツノに腰から伸びる蝙蝠の羽。本物であることを示すように空を切る牛の尾。開いた瞳は爬虫類のように縦に瞳孔が伸び、口元から鋭い牙が覗く。

その姿はまるで先程対峙した女性バケモノと同じもの。思わず息を呑むルーシイの反応に悲しげに眉を下げて見せ、それでも飄々とした笑みは崩さずに言葉を紡ぐ。

「コレが隠し事だよ。コレが俺さ。これこそ吸血鬼ヴァンパイアたる俺の正体さ」

「吸、血鬼……?？」

「そう。読書好きなルーシイなら知ってるだろう?陽に嫌われて、十字架を嫌って、銀製品を嫌悪して、にんにくと聖水が弱点の化物フリークス」

どうってことない、とばかりに語ってみせるが、ルーシイは到底受け入れられるものではない。物語の中でしか語られないモンスターが目の前にいるのだ。

確かにカイトの人となりは知っている。しかし、物語の中でも吸血鬼は言葉巧みに人を騙して血を啜っているのだ。もしかしたら、を考えてルーシイは無意識の内にその場から一步退く。

はっと自分の行動を振り返ったところで遅かった。見たことがないほど、それこそ泣きそうなまでに顔を歪ませるカイトに違う、と声

をかけようとするがカイトが手で制し、泣きそうになった顔を戻しながら言葉を続ける。

「うん。それが普通の反応だよ。それが妥当だよ。ルーシイ、君は悪くない。……………逆にエルザ、君はあまり驚いていないんだね？」

「驚いている。驚いてはいるが、それがどうした？ 貴様はカイト、妖精の尻尾のカイトだろうか？」

だから恐る必要はないと心底、さも当然だとばかりにそう応えるエルザ。その言葉が意外だったのか口の中で噛み締めると、いつものようにヘラヘラと笑う。

「……………うん、そうだね。ありがとう」

「礼を言われることはしてない。それよりも続きを話せ」

「一世一代の大暴露をそこまで軽く流されるのもなんだかなあ。……………そうだね、次は何を話そうか？」

「ね、ねえ。もしかしてグレイの様子がおかしかったのも吸血鬼のせいなの？」

「俺はその様子を見てないけど、多分そうだね。恐らく魅了の魔眼でも使われたのかな」

「魅了？ でも、魅了チャームの魔法にそこまでの強制力はないはずよ？」

魔法の中には人の好意を自身に向けさせる魅了の魔法がある。確かに術者の言いなりにはなるが、度を超える命令には応えず、そればかりか魔法自体が解けてしまうのだ。

グレイが嬉々として仲間を襲うなどルーシイからすれば考えられない。妖精の尻尾の一番良いところは間違いなく仲間を信頼していることなのだから。

「人間の使う魅了の魔法とは一線を記すよ。魅了というよりは支配ドミネイト。術者の言う事には絶対に従う奴隷作りの魔法だよ。吸血鬼がいくつか持つてる特性のうちのひとつだね。異性にしか効果はないけど、数秒でも瞳を見つめれば終わりだよ」

それならば納得がいく。恐らく食べ物をつきに行ったあの時を狙われたのだろう。

「待て、ならお前も使えるのか？」

「まさか。俺は半端者だからね。純血の吸血鬼に比べるとできないことの方が多い」

「半端者？」

疑問を覚えたエルザの言葉にそう返せば新たな疑問。ああ、そういうえば、と思い返したカイトは仕方がないとばかりに口を開く。

「そうだね、少し昔話をしよう。山場もオチもない、平坦で平凡で何の変哲もない、退屈な物語を」



ゴトリ、と音を立てて人間だったものが床に転がる。故郷に思い人がいたかもしれない、待ち人がいたかもしれない、思い残したことが多々あったであろう男の身体は身体中の血液が抜かれて干からびており、文字通りの骨と皮だけの状態。

豪華なカーペットにその身を預け、ぴくりとも動かない様を見ずともその命が潰えたことは火を見るよりも明らかだろう。

「片付けておけ」

口元をハンカチで拭う男性がそう命じ、少年は言われた通り、無感情にソレを運ぶ。薄くなつたとはいえ、それでもそこその重さのあるソレを少年はなんの抵抗もなく持ち上げて所定のダストシートへと運ぶ。壁に備え付けられた扉を開けて、下へと続く空間に遺体を投げ入れる。道中にあるいくつもの剣が遺体を細切れにし、その肉片を家畜に食わせる。そこまでが少年の仕事であった。

少年に名前はない。

自身の出自を考えれば当たり前だ。

少年は吸血鬼でありながら人でもある。

愚かな父親が愚蒙にも人に恋し、愚劣にも生まれてしまったのが自

分だ。父親と母親は禁を犯したと処断された。自分がここにいるのは掟のお陰だろう。

吸血鬼にとって掟や契約は絶対だ。それを破ればあるのは処断のみ。

厳しい戒律の中に「子を殺してはならない」という一文のみが己を生かしている。

特別、と言えば聞こえはいいが、己が存在はただの異端、異質、異物である。人にも吸血鬼にもなれない半端者。名があるとしたらまさしくそれだろう。

当然、血族として迎え入れるには吸血鬼としての誇りが許さず、使用人という形で少年は吸血鬼の住まう館に籍を置いていた。

己の在り方について少年は不幸だとは思っていない。むしろ幸福だと感じていた。

少なくとも少年は自身に流れる半分の血を誇りに思い、もう半分の血を軽蔑している。その軽蔑される血を持ちながらも生かしておいてくださる愚鈍な父親の弟であり、肉片の処理を命じた偉大なる現当主には頭があがない。

この館には当主家族しか住んでおらず、自身を除けば吸血鬼は4人。当主に奥方、その娘に息子。これが吸血鬼の生き残りの総数。他の吸血鬼は処断されたか、遙か昔に討伐されたと聞いている。

数を増やすにはその子供達に頑張ってもらわねば、と独り言ちる。いつものように肉片を籠に入れて地下にある牢屋農場にいる家畜はと分配しようと足を運べば、そこに先客がいた。

糞と尿で汚れた床を無視して牢の向こうにいる家畜と言葉を交わす少女の姿。

「お嬢様」

言葉に棘を含ませてそう投げ掛ければ少女はびくりと肩を震わせ、恐る恐る錆びついた扉のようにこちらを覗く。

吸血鬼の証とも言える赤く縦に割れた瞳孔を右往左往させ、身体の前で指先を何度も交差させる少女を見て少年はため息を溢す。

「当主様になんと言われるか………」

「お願い、内緒にしておいてえ」

少女こそ当主の娘にして、その寵愛を受ける吸血鬼。下の弟は未だ揺り籠に揺られる年頃で、少女には時期当主という期待の元勉強に励んでいるはずであるというのに、隙を見てはこのように地下の人間と対話をしに来ているのだ。

家畜と話して何になるのやら、と口の中で不満を溢す。前に一度それを少女に疑問としてぶつけたことはあるが、返ってきたのは少年には理解できないもの。

「知ってるう？人間はねえ、小鳥の囀りに耳を傾けるのよお。川のせせらぎに身を寄せてえ、木々のざわめきに心を寄せてえ。この世界様々なものに価値を見出すのよお。それはとても素敵なことなのだよわあ」

「私たちのように死にながら生きているわけでもなく、それこそ死ぬために生きている彼らの生き方は私たちには真似できない、尊敬するべきなのよお。だから私は彼らの心が知りたくて、お話をしてるのよ」

少女は間違いなく純血の吸血鬼だ。自身とは違い吸血鬼の証である羽もツノも立派であり、髪の毛も夜の光に煌めく銀髪。この歳にして魔法を自在に扱える才能も持つっており、当主からの期待も寄せられていた。故にこうして常識外れの行動をしていると、どうしても嫉妬の感情が湧き上がる。言葉に出してぶつきたい衝動に駆られるが、それをしては当主に面目が立たない。

ぐつと言葉を飲み込んで、渋々と承諾する。少なくとも当主にこのような現状を報告することはできない。

「もうそろそろ夜が明けます。ご就寝を」

「あらあ？もうそんな時間なのお？それじゃあ人間さん、また明日ねえ」

ひらひらと檻の中の家畜に手を振って別れを告げる少女。その姿が見えなくなると少年は家畜を睨む。

悲鳴を押し殺し奥の方まで下がった家畜を忌々しげに睨むと、備え付けの餌場に肉片を転がす。途端に群れを為して我先にと食らいた

く家畜を見て軽蔑し、自身の中にもその半分の血が流れているのかと思ふと憂鬱になる。

ここの家畜のほとんどは森の中を彷徨つて迷い込んだ者。中には勝手に配合して増えた例もあるが、それも極小数。そろそろ補充したいところだが、森の外に出ることは時が来るまで禁止と掟で決まっている。文句をいいたいところだが、その掟に生かされている身が何を喚く権利があるのやら。

ため息ひとつこぼして思考を切り替える。少年はそのまま片付けを済ませると館を出る。過去に戯れで作られ、館での世話を命じられている吸血鬼のなり損ない屍食鬼グールの村を過ぎてその先にある掘建小屋に身を寄せる。

純血の吸血鬼でないものを館に住まわせることはできず、またグールたちも扱いに困るためこうなったのだ。中には布団と呼ぶには薄すぎる布が一枚だけであり、外にある水瓶を使って血の汚れを洗う。

それが少年の1日であり、一年を通しての生活だ。

先も言った通り少年はこの境遇を不幸だとは思わず、そしてまた死ぬまでこの生活が続くのだと信じていた。

何の変化も変哲もない日々が過ぎてゆくのだと思っていた。

しかし、運命というのは時にその御手で誰かを包み、そして時に牙を剥く。そこに生物としての違いはなく、ある意味での真なる平等。そして不変というものに少年が擁護されていたのならば、これは変化という牙が少年に突き立てられる。

あくる日。いつものように作業を行い、さて残りは掃除だけだと息抜きのつもりで窓の外を眺める。薄く張られた霧の向こう、そこでは人間が生を謳歌していると聞くが果たして本当だろうか？と考えたところでちらりと視界の隅、窓の外で動く影を見た。反射的にそちらを向けば人目を気にして辺りを見回す少女の姿が。

(お嬢様?)

また逃げ出したようではあるが、それにしても様子がおかしい。普段であるなら屋敷の地下に行くであろうに、その手にはバケツを持ち足を向ける先には森。嫌な予感とでもいうべきか、少女が何をする

つもりなのか理解した少年はそれを止めようと3階の窓から飛ぼうとするが、それよりも早く意を決した少女は森の方へと走り出す。

森に入るだけならばまだ良い。しかし、その先に出るつもりならば掟に反してしまう。それだけはダメだ。それをしてしまえば当主が嘆き悲しむことは間違いない。

森に入り当たりを見渡す。

当然だが見える範囲に少女の姿は見えない。しかし、足元には明らかに獣道ができており、奥の方へと続いている。予想が外れるようにと半ば祈るように先へと進み、そして暫く歩いたところに少女はいた。

森を抜けていないのちに安堵のため息を溢すが、少女の側に人影が見えてすぐさま姿を隠す。

「すごいわあ。他にはどんなものがあるのかしらあ?」

「そうだな……王国には何万人という人がいて、毎日がお祭りのような雰囲気なんだよ」

「まあ、何万もの人が!??それはすごい、すごいわ!!?なんて素敵なのかしら!!?」

ちらりと覗き込み、会話を盗み聞きしている中で、相手が外から来た人間だということがわかる。食^{青年}頃に見える人間の四肢や頭には包帯が下手くそに巻かれており、少女の持ってきたバケツトを側に置いている。

人間は発見次第捕まえ、地下に送る決まりではあるが、また少女の悪い癖が出たのだろう。掟とは違い強制力はないため破つても問題はないが、それでも決めたのは現当主だ。少年としてはいい心地はない。

「それにしてもお嬢ちゃん。ここには他にも君みたいな吸血鬼がいるのかい?」

「ええ、もちろんよお。お父様にお母様、弟に従者。もう5人しかいないけれど、寂しくはないわあ。でも………」

「でも?」

「毎日毎日お勉強ばかり。それはとてもつまらないわあ。こうして

人間さんとお話ししている方が楽しいものお」

「はっはっは!!?それは嬉しい限りだ」

楽しげに会話する少女と人間。家畜如きと何を話しているのやら。あまりの苛立ちに口の中で恨言を転がし、益もないことだと悟ると踵を返す。少女の方は戻り次第、こつそりと注意でもしておこうと心の中で決めておく。その後、館で少女に注意を施すが暖簾に腕押し、聞き入られる様子はなく、誰にも相談できない案件を抱えた少年はもはや黙認するしかなかったのだ。

所詮は人間。当主に秘密にして飼う飽きたら捨てる愛玩用として黙っておくことにしたのだ。

少年にとつては取るに足らない家畜。

少女にとつては大事な話し相手。

だからこそ気づかない。

だからこそ気づけない。

だからこそ見て見ぬふりをする。

青年の首から下がる十字架の存在に。

忌避して唾棄する神聖な存在に。

吸血鬼の数ある弱点の存在に。

その日、少年は異常な声を聞いて目を覚ます。

人間が必死になって抵抗する時に出す、断末魔に似た叫びを。

しかし、少年の小屋から屋敷までは距離があり、人の声など聞こえるはずもない。何事かと警戒しながら外に出て絶句した。

暗い筈の夜空は赤く照らされ、屍食鬼の住まう村では火の手が上が。幾多の人影が追われ、幾多の人影がそれを追う。手に持った剣で胴を刺し、脚を斬りつけ、首を跳ねる。

悲鳴が響く。

感嘆が漏れる。

困惑が広がる。

怒声が飛ぶ。

少年は理解ができない。思考が追いつかない。しかし、これが何と

いうのかはストーンと胸に落ちるものがある。

これは地獄だ。

首から十字架をぶら下げて鎧に身を包んだ人間が嬉々として屍食鬼を追いかけまわし、そして高笑いしながら首を掲げる。ざまあ見ろと、化け物どもめと、口々に叫ぶ。

「死ね、化け物め!!？」

「この害虫どもが!!？」

「我らが神の名の下に！」

「神の名の元に!!？神の名の下に!!？」

剣が振るわれるたびに、少年の世界が崩されていく。平和と平穏と安寧が汚されていく。怨嗟の聲が人間の合唱に掻き消され、その声は誰の耳にも届かない。

ハツと我に返った少年が初めに気がついたのは当主や少女の安否だ。魔法を使えばすぐに向かうことも、人間を殲滅することもできたのかもしれない。しかし、少年の魔法は酷く不安定で使えたものではなく、移動は徒歩だ。燃える建物の影に隠れながら少年は進み、霧の向こうにある館へと走る。

きつと当主ならばなんとかしてくるはずだ、と一途の希望を持つて。

そうしてたどり着いた先、いつも聳え立つ館を見て絶望した。

館も同様に燃え上がっているのだ。周囲には村にいた者と同じ格好の人影が館を囲むように並び、手には剣ではなく松明を。

吸血鬼相手に鉄の剣は役に立たない。しかし、銀製の武具は吸血鬼の傷の再生を阻害し、炎は吸血鬼の身を焦がす。数ある弱点の中でもそのふたつは特に危険とされており、食器類に銀製品がないのはもちろん、館には火に纏わるものは置いていない。

幸いなことに当主家族の死体は見当たらないが、しかし、それも時間の問題だろう。万が一に備えて森の中にある地下から続く脱出口には見張りはおらず、また使われた形跡もなく扉は錆びついたままだ。

吸血鬼の力でも開けづらい扉を開けて炎に包まれる館に乗り込む

のに躊躇いはなかった。

炎に炙られ皮膚が焼けようが、少年は必死に当主家族を探す。食料庫の家畜は阿鼻叫喚、出してくれと叫ぶがそれに耳を傾けず、少年の脚は当主のいる寝室へ。

寝室へと続く廊下の途中、窓から脱出しようとしたであろう屍食鬼は脳天に矢が突き刺さって絶命していたり、炎に包まれて焼けている死体をいくつか発見。その度にその姿を当主家族と重ねてしまおうが、頭を振って必死にそれを思考の隅に追いやる。

靴は既に意味をなくし、脚を踏み出すたびに肉の焼ける匂いが少年の鼻腔を攪る。それでも必死に脚を動かし、目的地へと脇目も振らずに走り抜ける。

ようやくの思いで目的地へと辿り着き、焼けて変形したドアに身体を何度かぶつけて開く。ドアの崩壊と共に転がるようにして室内に入った少年は、もはや何度目になるかわからない、理解できない光景に言葉を失う。

部屋にいた当主は身体の半分が天井に押しつぶされた奥方を傍らに、まだ乳児である長男の血を啜っていた。奥方の傷は確かに致命的ではあるが、直接的な死因は吸血によるもの。その証拠に遺体はカラカラに干からびており、水分を無くした皮を我先にと炎がその肢体を舐める。

吸血鬼が吸血鬼の血を啜ることは禁忌とされており、掟にもそのように記述されている。厳格な当主がそれを破ったことにも驚愕したが、何より家族に手をかけるその姿が少年には信じられなかった。

「貴様……………」

少年の存在に気が付いたのか、口に啜えていた乳児を離し、視線を少年に向ける。いつものような冷え切った視線ではなく、周りを取り囲む炎よりも熱い、憎悪に満ちた瞳に少年はヒツと悲鳴を漏らす。

そうして遠慮もなく、ただただ殺意にだけ満ちた当主の歩みは一足で少年の目の前へと移動し、加減のない脚の一振りを食らわせた。

少年の身体は軽々と飛んで燃えた壁を突き破り廊下を転がる。炎に炙られた箇所が激しく痛みを伝え、それ以上に蹴られた箇所が熱を

持つ。

しかし、痛みに悶える暇もなく当主はその胸ぐらを掴み上げ少年を睨みつける。

「貴様のような忌子を生かしておいたのが間違いだった……。貴様がこの災厄を呼んだのだ!!? 貴様の存在がこの厄災を起こしたのだ!!? 貴様が私に家族を殺させたのだ!!? 兄上の残した種だと思いい見逃していたがつ……。貴様には穢れた人の血しか流れておらん!!?」

血涙を流し、心底悔しそうに、恨めしそうに少年を睨み、掴み上げた胸ぐらを思い切り振り投げた。少年は崩壊する館の壁を破って館の外に放り出され、宙を舞う。

「貴様の血など吸ってやらん。貴様は惨めに殺されろ」

放り出された少年の視界はまるでスローモーションのようにゆっくりと世界が流れ、決別され、激しいそしりを受け、絶縁された少年^{吸血鬼}の世界を名残惜しむかのようにその目に焼き付けられた。

一瞬の浮遊感、そして落下。存在すら拒絶され絶望の淵にいた少年に飛行するという手段は思いつかず、そして運の悪いことに館の前に集まっていた人混みの中へと落ちた。

突然のことで割れる人混み。そして相手が人外だとわかるや否や剣と槍を其方に向ける。吸血鬼の再生は魔力を用いるが、少年の魔力量はいかんせん少なく、再生に手間取っており落下で折れた四肢を使つての逃走は不可能。それよりも少年の頭の中はなぜ? という疑問に覆い尽くされていた。

なぜこうなった?

なぜ我らが滅びる?

なぜ吸血鬼からも拒絶される?

なぜ? なぜ? なぜ? なぜ? なぜ? なぜ? なぜ? なぜ?

そうして視界にちらりと写った人間を見て思い当たる。

その人間はいつか少女が手当てをして、熱心に話を聞いていた青年。少女から傷が完治して逃げられたと話を聞いた時は柄にもなく心が躍ったことを覚えている。

その人間が今輪の中に加わり、こちらに憎しみを、自身に愉悦を

持った表情で少年を睨む。

「ああ……、貴様のせいか……」

青年が霧の向こうの世界を話し、そしてその存在を許さない人間が大挙して来たのだろう。いや、もしかすれば初めからそのつもりだったのかもしれない。そう思いこんでしまえば後は一瞬。少年の奥底にあつた怒りが血潮を辿って全身を駆け巡り、眠っていた魔力が四肢を動かす。

せめて一矢報いるために、少年は最後の力を振り絞って青年の首に喰らいつく。死に体の必死の抵抗に驚いたのか、青年は抵抗する暇なくその首元に牙を突き立てられ、そして悲鳴も困惑の声も漏らす間もなく干からびたミイラのような姿に。

これにて少年の仇討ちは終わった。しかし、まだ足りない。胸の奥に湧く憎悪を、はちきれんばかりに四肢を突き動かす熱を、吸血による血の昂りを抑えるには、まだ足りない。

少年の復讐譚はまだ幕を開けたばかりなのだから。

一瞬の怯えも、しかし仲間がやられたことで怒りに塗りつぶされ周囲の人間が武器を振るわれる。致死性が込められた確かな一撃は、少年に直撃する直前に下から突き出た影の槍により防がれた。

感情の昂りにより体の奥底に眠っていた魔力までもが呼び起こされ、少年にとつて初めて使う魔法。しかし、なにをどうするべきかは不思議と頭の中で理解できた。

「リグレット穿杭」

影の槍が足元に消えたかと思えば、刹那、殺意を持って展開された魔法陣から再び迫り上がる。まるで剣山のように噴き出す影は周囲を囲っていた人間の腹を、胸を、手足を、首を、頭を、それこそ見境なく突き上げ辺りを鮮血で染める。

血の雨があたりに降り注ぎ、中央にいた少年はもちろん、範囲外にいた人間たちの鎧も真っ赤に染め上げ、呆然とその光景を見つめる。そうして、自身達が狩られる側だと理解すると一目散に森へと逃げ出した。

蜘蛛の子を散らすような幾人かを背後から強襲するがそれも数え

る程度。それだけではこの血は静まらない。鎮めてはならない。

「人間……人間、人間人間人間人間人間!!? 神の都合で我らを滅ぼす人間め!!? 逃げられるとは思うな!!? 草の根をかき分けてでも探し出し、貴様らの血を一滴残らず搾り取ってやる!!? 夜に怯えて暗闇に恐怖して目を閉じるたびに思い出せエ!!?」

吐き捨てるようにそう警告した少年は疲労のためか肩で息をする。魔法を開花させたばかりの者にはよくあることで、上限がわからず魔法を酷使したためである。急激な疲労感に加え、抗い難い睡魔。せめて当主を救おうと館に向けて魔法を放とうとするが、魔力が底をついて発動できず、そして館自体が大きく音を立って崩れ出す。

燃える燃える。瓦礫となった生まれ故郷が燃えてゆく。

消える消える。己が生きた軌跡が消えてゆく。

「カツカツカツ……」

少年は生まれて初めて声を出して笑う。それが自嘲を込めたものだ。知ったのは後になってからだ。アレではいくら吸血鬼でも生きてはいない。身を焦さし、炎で焼かれ、瓦礫に押し潰されてしまっただろう。

吸血鬼としても生きていけず、人としても生きていけない自身はこれからどうするべきか。いや、それよりも当主家族の埋葬が先か。考えたいことは山のようにあるが、どうにも頭が働かず、少年はそこで意識を手放すのであった。

現在

「オエツ」

胃の気持ち悪さに耐えきれなくなり、口から飲み込んだモノを吐き出す。一頻り吐き出した後、疲れからかぐつたりと仰向けに寝そべり、夜空を見上げる。

館の崩壊後、少年は森から出ていた。掟を破ることに強い抵抗を覚えたが、それよりも自身にはやらなければならないことがあると言いついて聞かせてなんとか這い出したのだ。

森を抜け出すにも苦勞し、初めて浴びた太陽の光に焼かれかけたが、それでも少年は前に進まなければならなかった。

全ては復讐のために

怨の一字が少年を突き動かす

あの日あの場にいたニンゲンの追跡は不可能であった。それぞれが散り散りに逃げた上、痕跡を見つけ出すなど素人の少年には不可能。しかし、少年の復讐心はもはや全人類に向けられていた。

故に手当たり次第に夜道を歩くニンゲンを襲い、血を啜る。朝日が登る前に洞窟や森の影に隠れて夜を待つ生活を過ごしてきた。もはや何度夜を過ごしたかも覚えておらず、そして吸血のたびに迫る気持ち悪さに口の中で悪態を転がす。

少年には知るよしもないが、本来であれば吸血鬼は血を吸えば吸うほど強くなる。だが、少年に流れるニンゲンの血はそれを拒否し、普通の吸血鬼にはない吸血の限界があった。それこそ飢えていたり、感情由来の爆発でもない限り人1人の血を吸い出すことさえ難しい。現に外に出て以来昏睡したニンゲンはおれども、死亡したニンゲンは1人たりともいなかった。

そして、少年の体調の悪さにはもう一つ原因があった。

「スウ……ゴフツ!!?ゲホツエホツ!!?」

深く息を吸い込んで気持ちをリセットしようとするが、途端に咳き

込み出す少年。口の端から血が流れ、咳き込むたびに少量ではあるが血が宙を舞う。

忌々しげに脇腹を触り、その痛みに顔を顰める。少年の脇腹には傷があり、血は止まっているが傷が塞がる様子はない。

死亡者はいないとはいえ、ニンゲンを襲っていれば討伐隊、もしくは討伐依頼は出されて当然。腹の数はその時にできたモノだ。ご丁寧に銀製の剣で刺され、今もお燃えるような痛みには晒されている。純血であれば血を啜れば治る傷も、少年の場合はその治りも遅い。これがただの傷であれば魔力を用いることで治せるのだが、と自身に流れるニンゲンの血を恨む。

「ニンゲンめ……………」

口から溢す悪態が燻る復讐心に更に火をつける。

なぜ我らが滅ぼされねばならない。確かに、我らは人の血を啜る。しかし、それは食事のためだ。徒に血を啜ることはないし、血を啜る相手も自ら命を投げ捨てに来たものだけだ。その命をどう扱おうと我が自由ではないか、と自己弁護を計る。

怒りに心を燃やしていると、通りの向こうでちろちろと光る火種が見える。目を凝らしてそちらを注視すれば、武装した幾人かが見えた。間違いなく討伐隊だろう。

相手をしようにもコンディションは最悪。いや、最高だとしても武装した幾人もの相手を少年ができるはずもない。地力が違いすぎる。

奥歯を噛み締め、逃走する。翼を羽ばたかせ夜の空へと姿を消そうとするが、腹部の痛みが長時間の飛行を許さない。そうでなくとも少年の力ではせいぜいが30分が限度。今は飛べて10分が精々だ。

ふらふらと蛇行飛行を繰り返し、なんとか近隣の森の中へ。高い木の上に身を隠し、息を潜めて夜を越す。

(そろそろこの場所も危ないな……………)

ここから逃げるとして、次はどこへ行くべきかを考えて、まずこの場所がどこかわからないことに気がつく。どうも森を出てから方向感覚に狂いが生じる。このままでは復讐を成した後、故郷に帰ることもできるかどうか。

(…………ニンゲンの1人でも案内させるか)

その後血を啜り殺せばいい。家畜の活用法としてはいい方法ではなからうか。そう考えたところで朝日が昇る。ああ、また忌々しい朝日が顔を出した。それに連れて近くの街道にも人の通りも少しずつではあるが増えてきた。

ニンゲンめ。

最後にそう口の中で転がして、少年は意識を閉ざした。

次に目を覚ましたのは聞き慣れない音が聞こえたからだ。

耳に届くのは笛や太鼓の音。次いでガヤガヤと騒ぐ人の声。何事かと思えば木の影から顔を出し、街道の様子を見る。

そこには松明を掲げて自信を探すニンゲン達とは違う、もっと華やかで騒がしい集団が街道から少し離れた場所に集まっていた。どうやら休憩中のような。時刻はわからないが、太陽が真上に昇っている頃。吸血鬼が1番嫌う時間帯だ。

集団は休憩中でありながらもいくつものボールを空中で回したり、剣を飲み込んだり、数人が身体を組み合わせたりと様々な事を行っている。成功するものもあれば、失敗するものもある。それでも笑い、時に激昂し、失敗を反省してまた挑む。

うるさい、と思いつつも見たこともない光景に惹かれ、こつそりと近場の木に飛び移って距離を縮める。

獣と一緒に芸をしたり、互いにピンを投げ合ったり、脚でボールを持ち上げその上で逆さになったりと、どれも少年の視線を惹き寄せるものばかりだ。特に目を惹かれるのは顔を白く塗ったニンゲン。奇抜な衣装に身を包み、そして玉に乗って転び、いくつものボールを投げて頭に全て落とし、音を立てて転ぶ。

一見バカらしく見えるソレに、少年は惹かれた。

具体的に何が？と聞かれても少年は答えられないだろう。強いていうのなら何度失敗して笑われようとも、挑戦をやめないその姿に惹かれたと言うべきか。

もつと見たいと身を乗り出そうとして、別の馬車から出てきた小柄の老人を見た瞬間、素早くその姿を隠す。

一眼見ただけでわかる自信との格の違い。挑もうとする意欲さえ湧かないレベルのニンゲン。吸血鬼としては許されないことだが、臆したのだ。

逃げようにも行動に移した刹那に捕らえられる未来しか見えない相手に、少年は息を殺して気配を隠す。そして自身がニンゲン如きの芸に惹かれてノコノコと近くにやってきた事を後悔する。

「おやおやあ？マアスターさあん、ご休憩はよろしいのでえ？」

「なあに、腹ごなしの散歩じゃよ。それよりも、移動式サーカスというのも面白いのう」

「ホッホーウ、魔導師の方にそーう言われるとうつれしいですねい」

ニンゲンたちの会話を盗み聞き、この集団がサーカスというものだという事を知る。また見てみたいと思った心を押しつぶし、二度と近づくものかと理性で蓋をする。

「本心なんじゃかのう。それより、そこらをふらつと散歩してくるわい。出発には戻るようにするからの」

「お願いしますねい。なんせアタシたちやしがない芸人。巷で噂の怪物に出くわしや全員お陀仏なんですから」

「わかっておる。ワシも街まで運んでもらう身じゃ。護衛はちゃんと務めさせてもらおう」

そう言つて老人は集団から離れる。逃げるチャンスかと思いきや、老人が向かう先は少年のいる方角。けれど自身は木の上、それに近いとはいえそれは吸血鬼での感覚だ。このまま気配を殺せば気付かれるはずがないと心の中で安堵を溢す。

「お主、こんな所で何をしておるんじや？」

そして、同じ高さから聞こえた老人の声に、反射的に飛び退いた。飛び移った樹木に爪を立て、四つん這いの状態になりながらそちらを睨む。

警戒していた老人が視線の先にいた。こちらに敵意は向けられていないが、少年の警戒レベルは最高潮。かつてないくらいに冷や汗を流す。

「近寄るな、ニンゲン」

精一杯の虚勢を張るが、老人は優しそうにこちらを見つめるだけ。人外者であることは一目でわかるはずだ。しかし、老人からは不思議とこちらを害そうという気配は感じられない。

信用させてから害する。なるほど、いかにもニンゲンらしい汚い手だ。と更に爪を立てて逃走準備を計る。

「落ち着かんか。ワシはお主に何もせんよ」

「ウソをつくくな!!? ニンゲンはそうやって我らを騙し殺した!!?」

「ふむ……………。ならば、どうすれば信用してくれる?」

「カツ!!? そこから飛び降りろ」

「あい、わかった」

するはずもないと鼻で笑い、無茶な命令を下す。どんなに綺麗事を並べようと腹の中身は汚いニンゲンなのだ。と嘲笑うかのように下した命令を、老人は躊躇う事なく実行した。

まさか実行するとは思わず、少年は驚愕する。明らかに人の身では耐えられない高さ。それを老人は迷わず実行したのだ。

落下している今なら逃げられる。四肢に力を入れて反対方向に逃げようとする。だが、視線は落下する老人から固定され、目が離せない。数瞬の葛藤。そして跳躍。少年は落下する老人を抱え、転がりながら地面に堕ちた。

自身でもなぜこのようなことをしたかわからない。ニンゲンなど見捨てればよかった。しかし、それをしてしまえば何かが終わる気がしたのだ。捨ててはいけない何かが消えてしまうのだ。

肩で息をして、老人から素早く離れる。両者共に擦り傷はあるが、被害はその程度。傷も少年の方はすぐさま修復される。

「はあ、はあ……………。何のつもりだ、ニンゲン!!?」

「これで、信用は得てもらったかの?」

老人の言葉に、言葉を失う。信用を得るためだけに老人は命を投げ捨てたのだ。信じられない程のバカだ、と少年は心の中で悪態を飛ばす。自身が助けなければどうするつもりだったのだ。

そう一蹴するのは容易いが、どうにもバツが悪い。言葉を喉で押し止め、ぐつと声にならない声が口から溢れる。老人はその場で胡座を

かくとこちらを見据えて言葉を続ける。

「見たところ人ではないようじゃが……お主は何者じゃ？」

「……誇り高き吸血鬼。貴様らニンゲンが化物と呼ぶ者」

「ふむ。御伽噺に聞く吸血鬼とはな。お主一人だけか？」

「みんな、殺された。他でもない貴様らに」

「それは……悪い事をしたのう」

深々と頭を下げられ、少年の頭に血が昇る。今度は喉から迫り上がるものを抑えることはできず、それこそ年相応に相手にぶつけた。

「悪かった、だと？ふざけるな!!？そんな言葉で許されると思ったのか!!？言葉なんていらぬ!!？対話なんていらぬ!!？我らを滅ぼした罪を背負って、ただただ無価値に死ぬ!!？」

「最近、人を襲う怪物がいると噂されてはいたが、お主がその正体か」
「だったらなんだ!!？貴様らニンゲンにされた事をやり返しているだけだ!!？」

爪を振るい、老人の真横の空間を薙ぐ。地面に軌跡が残るが、老人は動ずることなく、少年から目を離さない。自身の正体が人を襲う化物だと知っても変わらない視線に、少年は思わずたじろぐ。

「……人が憎いか？」

「当たり前だ」

「その割に、先程は熱心にサーカスの芸を見ておったのう」

「っ！……あ、あんなのただの気まぐれだ。うるさくて目が覚めただけだ」

「ホッホッ。化物と言われようとも、中身は人のようじゃのう」

「くっ!!？バカにするな!!？」

人のようだと馬鹿にされ、今度こそは当てようと腕を振りかぶる。だが、腕が頭の頂上に来た瞬間、老人は少年の目の前に立つ。あまりの驚きに少年の動きは止まった。

「お主、ワシのギルドへ来んか？」

「はあっ!!？」

老人からの突然の提案に、少年は距離をとってわけがわからないとばかりに声を出す。ギルドというものの存在は知っている。同じ紋

章をつけたニンゲンを何度か見たこともあるし、屍食鬼たちの世間話でも小耳に挟んだこともある。

用はニンゲンたちが集団となり、何かをなし得るための総称だ。そんなものになぜ化物たる自身がいかなければならないのか。

「狂ったか、老害!!?・化物に人と組みしろとでもいうのか!!?」

「そうじゃ。確かにお主は人に仇をなした。死人はおらぬとはいえ、ワシら人からすればお主は討伐対象じゃろうて」

「そんなモノを、匿うのか!!?」

「無論じゃ。子供に人も化物も関係ない。人として、年長者として、お主が破滅の道を歩むのを、ワシは見たくはない」

「ふざけるな!!?・ニンゲンなんて、どいつもこいつも同じだ!!?・嘘つきで、汚くて、家畜にも劣る奴らばかりに決まってる!!?」

「全ての人間がそうとは限らん。お主たちを滅ぼした人間もおるが、反面、お主が興味を持つサーカスに属する人間もおる。ワシのギルドでそれを見極めても良いのではないか?」

「ふざけるな、ふざけるなふざけるなふざけるな!!?・騙されないぞ!!?・そうやって俺を殺すつもりだろう!!?」

「……………1人の夜は辛かろう」

少年の泣き言のような声に、老人は終始優しく声をかける。そして老人が放った言葉に、少年は言葉を詰まらせた。

寝ても覚めても家族はおらず、仕えていた者さえいない毎日。傷ついた時でさえ、誰にも助けを求めることも出来ない日々。ちくり、と胸の奥に何かが刺さる。

「1人でおることはキツかろう」

「そん、なわけ……………」

「1人でいることは楽かもしれん。じゃが、1人でいることに慣れても、1人を楽しむことができる者などいない」

そつと差し出された老人の手。それが嫌に少年の視線を釘付けにしていた。

「だからギルドがある。ギルドという家族がおる。ギルドマスターとして、大人として、1人で泣くお主を見捨ててはおけんのじゃ。お主

は確かに人を傷つけた。だからと言って、子供を修羅の道に歩ませて良い道理はない。ワシと共に来んか？」

差し出された手が異様に大きく見える。

あれだけ恨みつらみを述べた筈のニンゲンの手に縋りたい衝動に駆られる。

(ニンゲンにも良いやつと悪いやつがいるだと？そんなはずない!!？そんな、はず……………)

襲ったニンゲンの中に、こちらに声をかけてきたニンゲンもいた。まだ森を抜け出して間もないころ、暗闇で疼くまる自身に心配そうに声をかけてきたニンゲンが。

アレは確か老いたニンゲンの番だったはずだ。大丈夫？どうかしたのかい？両親はどこにいるんだい？そう声をかけられた。その時は憎しみのあまり血を啜った。その光景を唐突に思い出し、少年は老人から一歩身を引く。

「……………俺はニンゲンを襲った」

「知っておる。じゃが、これから贖罪をしていけばよい」

「……………俺はニンゲンの血を啜らねば生きていけない」

「ならば、ワシの血をやろう」

「……………俺は……………俺は!!？」

思い起こすのは当主家族、そしてその娘である少女の姿。いつだったか少女の言葉がふと蘇る。

「知ってるかしらあ？人間って1人じゃ生きていけないくらい弱いんだよ。けどお、だからこそ番を見つけて、家庭を持って、家族を持つて強くなるのお。不思議よねえ、だからこそ素晴らしいわあ」

聞いた当初はどこが素晴らしいのかさっぱりわからなかった。それは今も変わらないし、もしかすればこれから変わらないだろう。しかし、自身に流れるニンゲンの血は温もりを求めていた。隣にいる誰かを求めていた。

「もう、1人は嫌だ!!？」

もう1人で夜を越すのは、1人でいるには、少年の心は耐えきれないでいた。復讐を果たそうとも同族が戻ってくることもなく、何の益

もない空虚な生を考えないようにしていた。

同族が見れば考えられない、誇りを忘れたかと罵詈雑言を浴びせられても仕方がない行為だとはわかっている。しかし、それでもなお少年は老人の手を握る。

今ならばなぜサーカスの集団に目を奪われたのか理解できる。羨ましかったのだ。家族のように笑い合う、あの集団が眩しくて羨ましくて羨望していたのだ。

涙を流しながら手を握る少年の背中を老人は優しく宥め、そうして泣き止んだ後、老人は少年に問いかける。

「そういえばお主、名はなんじゃ？」

「……………名前はない。俺は純血の吸血鬼じゃないから」

「ふむ。それは不便じゃのう……………よし、ではワシが名をつけよう」

老人は暫く悩んだあと、良い名が思いついたとばかりに声を出す。

「お主の名は——」



「カイト？」

ふと、思い出と感傷に浸っていたせいか、不思議そうに名を呼ばれる。

カイト。

それが老人から貰った名前。

他の誰でもない、自身を指し示す称号。

それを呼ばれるのが嬉しくて、少年はなんでもないと笑みを浮かべて返す。

「とまあ、何とも面白みの無いお話はこれで終わりだよ。拍手は……………この状況じゃなければ欲しかったところだけどねえ」

流石に居場所を知らせるような真似はやめるべきだ、と諦めて、その場にいる全員を見据える。

アレから十数年。当時の自身では考えられないほど環境が変わったものだ。人間のギルドに所属していると話したら、当時の自身は何と答えるだろうと益もないことを考えて口角を上げる。

「つまり、あの女はお前と同族なのか？」

「本人からすれば甚だ遺憾だろうけどね、その通りだよ。まさか生きてるとは俺も驚きさ」

その存在を知ったのはギルドに加入して暫くのことだ。王国から派遣された先遣隊からの報告により確認された、霧の森に住む化物の討伐依頼。発行年数は新しく、明らかに自身を指したものは無い依頼書を受注したのは未だに覚えている。

同族がまだ生きていることに歓喜する反面、それを裏切るような形で生きている今の自身を晒すのが怖くて今まで見て見ぬふりをしてきた。それでもきっかけを与えてくれたのは目の前にいるニンゲン^{仲間}たちだ。

「……………」

「そんなに睨まなくても大丈夫だよ、エルザ。ここまで巻き込んでおいて、これは俺の問題だから帰れなんて言えないさ。どこかの誰かさ^んみたいに」

「一言余計だが……当然、私たちも手を貸そう」

「カツカツカ♪……うん、ありがと」

きつと御伽噺のように手を繋いで仲良く大団円とはいかないだろう。けれど、それでも、前に進まないとならない。例え同族を犠牲にしようとも、同族に殺されようとも、家^{ファミリー}族さえ無事であればそれでいい。

「それで、ナツ？君は何をしてるのかな？」

決意を新たにしたところでカイトは話も聞かずに周囲の匂いを嗅ぐナツに視線を向ける。現在のナツはカイトの頭の匂いを嗅いでいる形で、流石のカイトもこれには苦笑いを浮かべていた。

一頻り匂いを嗅いだナツはカイトから離れると首を傾げる。

「もー、話も聞かないで何してるのよ、アンタは」

「うーん、やっぱダメだ。全然匂わねエ」

「おや？ ナツ、鼻が効かないのかい？ 風邪でもひいた？」
仕方がないなあ、と笑みを浮かべている時にそれは聞こえた。

ドチュリ

まるで肉を詰めた風船を割ったような、酷く聞き難い音がある。全員がその場に居る全員の耳に届く。次いでツンと香る濃厚な血の匂い。全員がそちらを振り向き、そして驚愕する。

今まで楽しみに話していたカイトの胸の中央に、腕が生えていた。真っ赤に濡れる腕はそのまま勢いよく引き抜かれ、貫通された景色が嫌によく見えた。一眼でわかる致命傷。吸血鬼であるカイトの身でも許容限界なのか、傷が塞がる様子もなく、口からゴポリと大きな血の塊を吐き出した。

「案内、ご苦労様あ」

「カイトオオオ!!？」

「テンメエエエ!!？」

カイトの背後にいた同族の女性が妖美な笑みを浮かべて、そこにいた。

あまりの光景に言葉をなくすルーシイを他所に、ナツとエルザの動きは早かった。素早く魔法を展開し、女性に接近。しかし、女性は腰の羽を飛ばたかせ、カイトの身体ごと後退する。剣と拳が空を切り、空中で待機する女性はここまで接近した種を明かす。

「ふふふ。たかがニンゲン風情に、私が心優しく治療すると思つたのかしらあ？ 吸血鬼はね、血の匂いに敏感なの。桜髪の子の血に私の

血を少量混ぜて匂いを感じなくさせてあげただけとお………ここまで上手くいくなんて思いもなかったわあ」

女性の言葉にエルザは奥歯を噛み締める。

相手の信用を得るために治療は間違いなく行うだろうと立てた見通しは甘かった。しかし、これについてエルザを責められる筈もない。ただ、相手が吸血鬼という常識外れの生き物だったことが最大の誤算である。

「さて、アナタたちはもう用済み。本来なら家畜小屋に行ってもらうのだけれどお………ここまで案内してくれたお礼よお。楽に殺してあげる」

「くそっ!!?火竜のー」

「待て、ナツ!!?」

やられる前に、とナツが咆哮を放とうと口内に魔力を貯めるが、エルザがそれを阻止する。女の方を見れば、カイトをいつでも盾にできるように身構えていた。それに気づいたナツも魔法を途中で止め、未だシヨックから立ち直れていないルーシイの元に駆け寄る。

「ルーシイ!!?」

「な、なっ………」

「仲良く潰れなさいなあ。 ブラッディ・ハンマー 戦血槌!!?」

そうしてナツがルーシイを押し倒し、エルザが来たる衝撃に身を構えた瞬間、遠くから何か巨大な物が大地を穿ったような爆音が聞こえた。

一瞬、そちらに意識を向け、いけないとまた意識を空を飛ぶ敵に向けるが、女性は腕を振り上げたまま動いていない。それどころか周囲の景色さえ微動だにしていない。もしやと思いエルザが数歩移動して目の前の空間を剣で薙ぎ払う。予想通り、目の前の景色は切り裂かれ、その後ろにある景色が露わになる。

霧が濃いことに変わりはないが、それでもうっすらと奥の方に何かの影が見える。恐らくはアレを指せというカイトからのメッセージだろう。

(あの馬鹿者が………っ!!?)

あれだけ深い傷を負って尚、こちらを移動させることを優先するな
ど正気の沙汰ではない。その力を使って逃げるなりすればいいだろ
うに。

カイトへの罵詈雑言を飛ばしたいのは山々だが、その本人がいない
のであれば言えるはずもない。

「2人とも、無事か!?!」

「ああ、なんとかな。んなことより、ルーシイが!!?」

「ぜひゆっ……ぜひゆっ……!!?」

「不味いな過呼吸だ。ルーシイ、聞こえるか? ゆっくりと息を吐き出
して、呼吸を楽にしろ。ナツ、お前は側についていてやれ」

「おう。けど、エルザはどうすんだ?」

「この先に何かの影が見えた。私はそれを調べてくる」

カイトがこの場所に転移させたということは、何かしら理由がある
のだろう。それを見越して罠が貼られているかもしれない。しかし、
それでも尚エルザは先へと進まないとならない。散ってしまったカ
イトのためにも。

「そして、ルーシイが落ち着き次第すぐにこの森を脱出しろ」

「んなことできるわけねエだろ!!?」

「言うことを聞け!!?。そしてこれまでのことを必ずマスターに報告す
るんだ!!?。わかったな!?!」

「だったらオレが残ってもいいだろ!!?」

「ならん!!?。あいつはお前に仕込んだ血を辿って来た!!?。隠密が必要
な今、お前に何ができる!?!」

「仲間がやられてんだ!!?。このまま引き下がれるかヨ!!?」

罫があかないと頭を悩ませるエルザ。とにかくこのままここで騒
いでも相手の思う壺、それにルーシイの過呼吸も悪化するだけだと踏
ん切りをつけて、ちらりとルーシイの方に視線を向ける。

「……ナツ、ルーシイはどこにいった?」

「は?」

言われてナツもそちらを見やれば、確かにその姿がどこにもない。
音も痕跡も残さず、ルーシイは消えていたのだ。

もう我慢ならないと怒りで奥歯を噛み締め、ナツは拳に炎を纏い辺りを見渡す。嗅覚が使えない今、頼れるのは己の視覚、聴覚のみ。大声を出そうものなら敵に見つかってしまおう。

「エルザ!!? 向こうは頼んだぞ!!?」

「あ、おい! ナツ!!? ……くそつ!!?」

それだけ言い残してナツは走り出す。明らかに逃げ出すためではなく、消えたルーシーを探すために。引き止めたいところだが、現状では1人で2つの問題を解決することは不可能。ナツに頼るしかないのだ。

自身の不甲斐なさに怒りを覚えながら、エルザは影が見える方へと走り出すのであった。



「驚いたあ。まだ魔法が使えたのねえ」

ナツたちが消えた後、その場に巨大な蜘蛛の巣状のヒビを刻みながら、女性は死に体のカイトに声をかける。

当然返事はなく、屍のように女性に襟首を掴まれてぶら下がっているだけだ。死んではいない。ただ返事を返す体力さえもないのだ。

「けどお、もう流星に魔法は使えないようねえ」

吸血鬼の再生には体力の他に魔力が用いられ、魔力のある限り実質不死に近い身体を持っている。逆に魔力がなければ傷を塞げず、死に至るだけなのだが、それでも吸血鬼というのはしぶとい。人間ならば即死であろう傷も、半端者のカイトでも後5分は生き残ることはできよう。カイトの身体を視線まで持ち上げて、少し悲しげな表情になる。

「半端者が………無様ねえ」

悔しい、名残惜しい、口惜しい。そんな感情を込めた言葉は誰にも届かず、次の瞬間女性はカイトの首に容赦なく牙を立ててかぶりつ

く。目が窪み、手足が木々のように細々くなり、肌から文字通り血の気が引く。カラカラに渴いた残り滓を地面に投げ捨てると、視線は自然と落下する死体に向けられた。

「半端者が私の血肉になれたのだものお。感謝しなさい」

そこに先ほど憂いを見せていた姿はどこにもない。口の端についた血液を舐めとり、さて、と彼方にいる残りの人間の方へと視線を向ける。確かに逃げられはしたが、この森にいる限り逃げ続けることはできない。追跡用の刺客も既に放たれている。

「ふふふ。精々逃げ惑いなさいな、アリスたち。ここは悪魔の住まう悪夢の国。悪夢からは逃れられないのだからあ」

女性は羽を広げて空を踊るように舞う。

逃したナツたちを追うこともなく、霧の中を迷わず進み、帰路へとつく。後に残されたカイトの死体はどろりと溶けて、グズグズと地面に飲み込まれるのであった。

V S. フクロウ

「くっ!!?」

ゴツ、と鈍い音を立てて、自らを閉じ込める檻に体当たりをする。しかし、鉄製の檻が動く様子はなく、逆にぶつかった肩に痛みが走る。緊張から気絶した後、ミラジェーンは脱出を試みて檻に体当たりをかましていた。しかし、成果は芳しくなく、何度目になるかわからない衝突に次第にミラジェーンの身体は悲鳴をあげていた。痛みを顔に響めて、患部に手を添える。痛みは酷いが折れている様子はなく、歯を食いしばってもう一度体当たり。

「くっ!!?」

当たりどころが悪かったのか、ミラジェーンの口から苦悶の声が漏れた。このまま蹲るのは簡単だ。けれど、膝を突きつつも上半身のバネを使って頭突きをかます。何度か額をぶつけるが、檻は壊れることなく先にミラジェーンの限界が来て仰向けに倒れてしまう。酷く痛む額と肩に顔を響め、何度か深呼吸をすると立ち上がってまた檻に体当たりをかます。

薄暗がりの中、その狂気にも似た光景を斑鳩は見つめる。

身体をできる限り縮めて、これ以上傷つかないように、傷つけられないように身体を守る。故にミラジェーンの行動は不可解だった。なぜ自ら傷をつけにしようとするのか理解できなかった。

「もう諦めなんし。あんさんがいくら身体ぶつけても、ここからは逃げらりやしまへん」

この檻を抜け出しても、その先に待っているのは視界の悪い霧の森に身も凍る吸血鬼。抗う気力さえ湧いてこない。だというのに、気絶から復活した後からミラジェーンは今のよう脱出を試みている。斑鳩からすれば正気の沙汰ではない。

再度仰向けに倒れたミラジェーンは呼吸を荒げ、流石に限界が来たのか今までよりも立ち上がる速度が遅い。それでも檻を手で掴み、足

腰を震わせながら立ち上がるともう一度頭突きをかます。

「……………何があんさんをそこまでさせるんです?」

暗殺ギルドの一員として、斑鳩は物事に対してドライである。自身と釣り合う強者との戦闘には心躍らされるが、目の前でギルドの仲間が死のうと、依頼主を叩き斬ろうと心動かされることはない。

自身の命の危機に瀕した時は流石に狼狽するが、もはや諦めを享受した今、ミラジエーンの行動には疑問を抱くばかりだ。最早頭を打ちつける体力さえなくなったミラジエーンはその場にへたり込むと、それでも檻から手を離さずに、脱出の意思だけは折らずに答える。

「はあ、はあつ……………みんなが、待つてるから」

外に待つ仲間がいる、と答えたミラジエーン言葉に、斑鳩はより一層怪訝そうに顔を歪める。仲間がいるからなんなのだと、そう言葉にしようとしてミラジエーンに遮られた。

「助けを待つだけなんて、嫌なの。囚われのお姫様なんて、柄じゃないの。助けようとしてくれるみんなに、合わせる顔がないじゃない」

だから諦めるわけにはいかないと、今度は檻を両手で掴み、渾身の力を持って曲げようとする。当然、そんなことは叶わず、ただ徒に消耗するだけだ。

「ええなあ、あんさんは。助けてくれる仲間がおりはって」

「ふう、ふう……………貴女にも仲間がいるじゃない」

「やからこそ、や」

そう言い放つ斑鳩の言葉が理解できず、ミラジエーンは首を傾げる。いい機会だ、と斑鳩はほくそ笑み、そのうちに秘めたモノを話す。「暗殺ギルド髑髏会、その三羽鴉の隊長なんて言われてはりますけど、ウチらの実力はそう変わらんよ。ウチはサッ一対一の勝負が得意やし、そこで寝とるヴィタルダス・タカは多数対一が得意や。それで、残るフクロウは暗殺そのもんが得意なんよ」

「それが……………はあ……………どうかしたの?」

「あんさん、血い流しすぎて頭働いてないと違います? 視界不慮のフィールドに、暗殺が得意な梟がこちらさんに付いとる。あんバケモンも恐ろしいけど、ウチがいつとう恐れとるんわフクロウの方や」

ここを逃げ出しても追いつかれる、そう確信めいた斑鳩の言葉。あの意味での仲間への信頼を聞き、それを聞いたミラジェーンは考える素振りなど見せず、再度両腕に力を込めて檻をこじ開けようとする。「聞いてはりましたか？逃げ出しても無駄です」

「き、いてたわ……でも、だからって！私がつ、諦めていい、理由にはならない、のっ！」

びくともしない檻をこじ開けようと躍起になるミラジェーン。それを見ながら、こん人はホンマもんのイカれや、と内心愚痴をこぼす。諦めからまた自身の殻に閉じこもろうと頭を下げる斑鳩に、ミラジェーンがそれに、と告げる。

「それに！私の、仲間もっ！アナタに負けなくらい、強いんだから！ふんー!!？」

「さよですか。ほんなら、おきばりやす」

くだらないと一蹴して、斑鳩は心を閉ざす。

薄暗闇の中、ミラジェーンの声だけが嫌に響いていた。



霧の深い森の中、巨体が森の中を疾走する。

その身体には不釣り合いに思えるフクロウの頭は霧の中を見通し、足音も木々に擦れる音も漏らさずに走り抜く。その腕に掴まれているのはルーシイだ。乱暴に頭を鷲掴みにされ、抵抗しようにも過度のパニック状態で何が起きているのか理解できていない。

景色が上へ下へ、右へ左へ流れ、状況を確認しようにも掴まれた頭が痛み、そうでなくとも呼吸がうまく行かず脳まで酸素が回らない。せめてもの抵抗として掴まれる頭を必死に外そうとするがうんともすんとも言わず、不意に浮遊感を味わった。宙空に投げ出されたルーシイはそのまま重力に従って地面を転がり、何回転かした後樹木に背を打って止まる。

痛む節々、回らない頭、定まらない呼吸。

それでも自身を攫った敵の正体は見えた。楽園の塔の際、グレイやナツから聞いた筋骨隆々の身体に鳥類の梟の頭を取ってつけたようなアンバランスさ。間違いなく三羽鴉のフクロウだ。

(なんでこんなところに？反撃しなきゃ。鍵、どこ？身体痛い。頭痛い。呼吸苦しい。あれ、何すればいいんだっけ？手当て。違う。眠りたい。もうやめたい。なんでこんなところに。誰か、誰か!!?)

早まる呼吸、高鳴る心音、合わない焦点。

そんなものはお構いなしにと、フクロウはゆつくりとルーシイに近づく。人を殺めるのに道具も魔法もいらぬ。その万力で頭を潰し、首を捻り、心臓目掛けて拳を振るえばそれで終わりだ。命令に忠実に、決して疑うこともなく、痛む心さえ持たずにフクロウは距離を詰める。

無意識の内に鍵を触り、それがきつかけとなったのか、回らない頭でも何をすればいいのか思い出す。

「開け、金牛宮の扉!!?タウロス!!?」

「M O O O O O O !!?」

選ばれたのはルーシイの手持ちの中で最もフィジカルの高い星霊、金牛宮のタウロス。2本の脚で立つ牛の星霊はフクロウに負けず劣らずの筋肉で、主人に近づけさせまいとフクロウ相手にがつつり両手を組み合わせて押し返そうとする。

「グヌヌ……………ルーシイさんには、近づけさせねっす!!?」

「ホーウ」

普段のルーシイであればタウロスの異常に気がつきただろう。しかし、パニック状態から抜け出せないルーシイには厳しい話。いつもよりも力の衰えが見えるタウロス。それでも必死に主人を守ろうと歯を食いしばるが、フクロウは無感情に、無関心なほどに呟いて、両手を掴んだままタウロスを頭上に持ち上げる。

驚くタウロスを他所に、そのまま横に振り抜けば、両手から離れたタウロスはルーシイの隣の木に激突。上下逆さまになった状態で、今の一撃で満身創痍だ。

「タウ、ロス……」

「モ、MO^{モウ}しわけねっす、ルーシイさん……」

そのまま光る泡となり姿を消すタウロス。死んだわけではないが、許容限界を超えた傷を受け、強制的に星霊界へと帰還させられたのだ。遠距離の得意人馬宮のサジタリウスに続き、フィジカルの高いタウロスがダウンとなった今、ルーシイが使えるのは巨蟹宮のキャンサーと宝瓶宮のアクエリアスのふたつ。しかし、方や戦闘能力の低い美容師系星霊。方や戦闘能力は高いが敵味方関係なく巻き込む上、水場がないと呼べない星霊。最早打つ手がない。

「ホホーウ」

気がつけば射程範囲まで近づくフクロウ。腕を大きく振り上げ、拳を振り下ろす。倒壊した樹木が空を飛び、地面には蜘蛛の巣状のヒビが入る。後に残るものはなにもなし。遺体も、悲鳴も、血飛沫も、ここにいたはずの人物の痕跡はなにもない。

けれど、フクロウには見えていた。

攻撃の直前、回避も間に合わないはずのルーシイの身体が光ったかと思うと、一瞬にして視界から消えたことを。いや、正確にはルーシイの腰にある鍵のひとつが光っていたことを。

「女性は絹を扱うように優しく接する。そう教わらなかったのかい？」

声がするのはフクロウの背後。そちらをゆっくりと振り向けば、金髪を逆立て、スーツを着込んだ美丈夫に横抱きにされるルーシイ。

突然のことで惚けたように口を開けるルーシイは、ようやく思考が追いついたのかその男の名を呼ぶ。

「それに、彼女は僕のマスターだ。無粋な輩には触れさせはしないさ」「レオー」

星霊界を追放された者

光り輝く金色の獅子

黄道十二門のまとめ役

その名は獅子宮のレオ。フェアリーテイルの一員にして、ルーシイとの絆によって罪を許された存在が、そこにいた。

「でも、なんで……………」

「緊急事態だったからね。強制的に開門させてもらったよ」

なんでもない風というレオだが、それは星霊にとってかなりのリスクが伴う荒技だ。契約者の魔力を用いて召喚する通常方法とは違い、強制開門は星霊自身の魔力を使う。現界でできる時間も、強制開門によつて痛む四肢も、ルーシイに不安を与えないために涼しい顔をして誤魔化する。

「さあ、ルーシイ。僕の後ろに」

ルーシイを腕から下ろし、自身の背後へ。そして体勢を整えてフクロウを見据える。

近接戦闘の得意な星霊として、体格差があるとはいえフクロウとの相性はいいだろう。しかし、強制開門に加え、召喚された場所が悪いと内心冷や汗を流す。

霧の谷は星霊にとつては魔界に等しい。星の光を受け付けられない彼の地は、星霊の力を目に見えて激減させる。

ニコラなどの低級の星霊はさほど影響を受けないが、黄道十二門クラスともなるとその影響をモロに受ける。現界による魔力の消費も早く、まるで泥に沈められたかのように身体が思うように動かない。(それでも、退くわけにはいかない)

自身の後ろにはルーシイが。

星霊としての役目を果たせずに終わるはずだった我が身を救ってくれた彼女がいる。

それを傷つけるわけにはいかず、そして傷つけようとしたフクロウはなによりも許せない。脚に力を込め、大地を蹴り飛ばす勢いで踏み出す。

ルーシイの目にはレオの姿が一瞬消えたかと思うと、次の瞬間にはフクロウの頬に拳を突き立てる姿が見えた。

「ホーウ」

「くっ!!?」

人は頬を殴られれば多かれ少なかれ多少は怯む。しかし、フクロウは痛痒に感じた様子も見せず、すぐさま反撃の一撃がレオに叩き込ま

れる。胴体目掛けて放たれた一撃を両腕を交差させてなんとか防ぐが、それでも勢いは殺せずレオの身体が宙に浮く。

防御にまわした両腕が痺れ、その予想外の攻撃力に驚きを隠せないレオ。そして空中で呆気にとられるレオに、追撃とばかりに両手を握ったフクロウの一撃が頭上から振り下ろされる。

「ガハッ!!?」

肺から酸素が全て抜け出すような衝撃がレオを貫き、そのまま地面に叩きつけられた。攻撃の手を休める様子のないフクロウの踏み潰さんと降ろされるスタンピングを転がってかわし、再度距離を取って一呼吸。

ゆらり、とそちらを振り向くフクロウの攻撃を逃げるようにしてかわす。

「レオ!!?」

防戦一方の戦闘にやはりレオでもダメなのか、とルーシイの心に不安が過ぎる。

手助けしようにも自身の戦闘能力は所詮素人に毛が生えた程度。それはルーシイ自身もわかっている。けれど、ピンチに陥る仲間^{星霊}を放っておくことができるほどできていない。

腰にムチがあるとはいえ、自身に出来ることといえば、精々魔力を送る程度。力のない我が身が恨めしく、歯を食いしばりながらせめてものと胸の前で指を絡めて祈るように魔力を送る。

(予想以上だ……………)

対してのレオは肩で息をしながら冷静に状況を再確認する。

この場で星霊である自身の力は存分に発揮できないことは理解していた。

相手とのウエイトの差も頭に入れていた。

けれど、そのどれもが予想より遥か上だったのだ。自身の力は半減どころではなく9割減。ウエイト差はまだしも、吸血鬼に支配されているフクロウに痛みや怯みという感情はなく、ただただ命令通り目の前の敵を屠る事しか頭にない。

(小技は効かない。なら、全力の一撃を叩き込むしか……………)

ただでさえ現界に魔力を消費する中、一撃を打ち込むために魔力を節約して防御に回るしかない状況。厄介だ、という言葉が口の中で転がす。

迫り来る拳の側面に手を当て、力の流れを逸らしながらなぜ吸血鬼のためにこんなことをと考える。

思えばロキとして振る舞っていた頃、初めて見た時はカイトには苦手意識があった。それが吸血鬼だからと思えば納得だ。レオ自身が吸血鬼に何をされた、というわけではない。星霊界全体が本能的に吸血鬼を嫌っているのだ。

ハーフだからか、カイト自身に嫌悪感を示すことはないがそれでも苦手意識というものは残る。故に、厄介ごとを丸投げしたり、無茶振りをしたりと思えば返せば出るわ出るわの所業。これはきつとその時の報いだろうと心の中で自嘲する。

(けれど、彼は嫌な顔をしつつも僕に伝えてくれた)

ダブルブツキングした時も、パーティーで記憶に残るような料理を作ってくれと言った時も、依頼でやらかした時も、カイトは渋々といった調子ではあるが応えてくれたのだ。

ギルドの中でも間違いなく信頼できる人物。普段は気恥ずかしくて言えないが、レオはそう評価していた。

(そうでなくとも、彼はフェアリーテイルの仲間だ)

吸血鬼だのなんだのは関係ない。

フェアリーテイルのカイト。

道化と呼ばれ、人と戯れ、そしてその仮面笑顔の奥で涙を流す、大切な仲間。

(だからこそ!!?)

拳を、蹴りを、膝を、肘を。レオを殲滅せんとする攻撃の悉くを防ぎ、ようやく見せた大振りの隙。

ルーシィから送られる魔力に乗せられた思い。保身のためではなく、仲間を思う願いの魔力。まったく、自分はいい主人に巡り会えたと内心ほくそ笑み、身体の奥底から湧き上がる魔力を拳に込める。

(だからこそ、僕はーーー!!?)

「レグルスインパクト獅子王の輝き!!?」

「ホキヨツ!!?・!??」

文字通り全身全霊の一撃。金色に輝く拳はフクロウの腹を捉え、輝く魔力ごと敵を森の彼方へと押しやる。木々を薙ぎ倒し、地面を転がり、ようやく倒れたフクロウは流石にダメージが大きいのか白目を剥いて起き上がる様子はない。

霧で見えずとも直感でそう感じたレオは安堵のため息をこぼし、全身が光の粒子に包まれた。現界に必要な魔力まで消費した代償だ。今すぐにも倒れたい気持ちではあるが、それでは格好がつかない。気を抜けば震えそうになる脚に力を入れて、必死に両足を立たせる。

ルーシイをこの場で孤立させるのは悔いるばかりではあるが、最早自身にはどうしようもない。

「レオ!!?」

「大丈夫さ、ルーシイ。星霊界に帰るだけさ」

駆け寄るルーシイを安心させるように笑みを浮かべ、レオを包む光が強くなる。もうすぐ完全に退去してしまうだろう。これから口にすることは仲間に対する裏切りに等しいだろう。

そう思うとレオの渦中は荒れ狂い、トゲトゲとしたものが喉の奥に突っかかるような錯覚に陥る。それでも、レオは意を決してそれを言葉にする。

「ルーシイ、君はここを抜け出したほうがいい。なんだか嫌な予感がするんだ」

「でも、カイトが……」

「大丈夫。彼は生きてるよ」

少し前の光景を思い出し、暗い影を落とすルーシイにレオはそう言う。実際、十中八九死んでいると予想されるが嘘も方便。星霊を呼べないルーシイをこの場に残すよりはマシだと自分に言い聞かせて、疑問を浮かべるルーシイに言葉を紡ぐ。

「彼のしぶときは僕が保証する。だから、君は一刻もはやくー」

「逃げないわ」

被せるようにそう言い放つルーシイの言葉に、たじろぐレオ。芯の

通った、真つ直ぐな言葉を、レオに向けて放つルーシイの言葉は続く。「あたしが戦力にならないことはあたし自身が一番わかっている。でも、だからってみんなを見捨てて逃げる理由にはならないわ」

確固たる意志を持ってそう言い放つルーシイに一瞬惚けた表情を見せ、そしてやはり彼女が主人となつて本当によかつたと安堵する。例えお荷物になるとわかつていても、仲間を助けるためならば全力を尽くす。そんな彼女だから自身は救われたのだ。そんな彼女だから星霊と強い絆を結べるのだ。

願わくば――

「それに、レオが思ってるより、あたし強いんだから」

「ああ。無用な心配だったね、マイマスター」

――彼女の行く末に光あらんことを

星々に見放された地で、果たして祈りが届くかどうか。それでも星霊界の王、星霊王に届くことを願い光に包まれたレオが消える。残されたルーシイは一瞬仲間がいないことに不安を覚え、心の中にもやもやとしたものが籠るよりも早く自身の頬を叩く。

「よしー」

喝を入れ、気持ちをし、不安を彼方に追いやつて前を向く。真つ赤になつた頬を携てさあ、いざ行かんと脚を踏み出したところで、ふとその脚が止まる。

「……………ハハ、ズハハ。」

静寂が支配する深い濃霧に包まれた森の中、早くもルーシイは絶望感に浸るのであった。

V S. グレイ

「ルーシイ!!?どこだー!!?」

深い霧の中、ナツは声を上げながら攫われたルーシイを探すため奔走する。視界が機能しない中、そんなものはお構いなしにと突き進み、敵に居場所を晒すかのように声を響かせる。

元よりナツの血には微かに吸血鬼の血が混ざられているため、血に敏感な吸血鬼から隠れることは不可能。ならば隠密に徹する必要はない。学はないに等しいが、こと戦闘となると頭の回るナツの発想は正解といえよう。

しかし、いつもならば頼りになるはずの嗅覚を抑えられ、視界も最悪。耳を澄ませても聞こえるのは静寂の音。搜索の結果は芳しくない。

「クソツ!!?」

拳を反対側の掌にぶつけ、苛立ちを多少なりとも発散させる。

ルーシイとミラジエーンが攫われ、ハッピーは行方知れず、グレイは敵の傀儡となり、カイトが目の前で殺された。仲間を大切に思うナツにとって、これ以上の屈辱はない。人知れず奥歯を噛み締め、霧の中を探し回る。

これ以上、何も奪わせやしないと意気込んだところで、がさりと茂みの奥で何かが動いた音がした。一瞬、ルーシイかと脚を止めるが、聞こえる音は複数あり、向けられているのは敵意の視線。間違いなくルーシイではない。

拳に炎を纏い、一息の合間に飛んできた影に拳を当てる。

「ぎゃいんー!」

「なんだア!?」

殴り飛ばしたのは赤毛の狼。その大きさは大型犬と言っても過言ではないほどであり、街中に出れば間違いなく討伐対象になるだろう。しかし、ナツが驚いたのはそこではない。殴り飛ばした狼はしばらく悶えた後、その肉体が消して、その体積に見合った血溜まりに変わる。

ナツの知る由もないが、赤毛の狼は魔法で作られた生物であった。
「ブラッディ・ハウন্ズ戦血狼群”。

それが魔法の名である。群とつくだけあり、その数は1匹や2匹ではない。使用者の力量に左右されるが、草葉の陰からナツを虎視眈々と狙っているのは20匹。喉奥を震わせて、タイミングを合わせ、一斉に飛びかかる。

普通であれば大型犬相当の大きさ、それも複数に襲い掛かれるとなれば絶対絶滅の危機。身を翻して脱兎の如く走り出しても文句は言えない。

しかし――

「上等だア!!?火竜のー!!?」

それを相手取るのはフェアリーテイルの火竜ことナツだ。

幼少のころからギルドに所属し、数々の依頼をこなしてきたナツにとってこの程度窮地でも何もない。そして何より、フェアリーテイルの魔導士は引くことを知らない。

「鉄拳!!?」

飛びかかる狼を炎を纏った拳で殴り飛ばし

「鉤爪!!?」

後ろに回った狼を脚で蹴り飛ばし

「翼撃!!?」

両腕から燃え盛る炎が翼のように広がり、広範囲の敵を薙ぎ倒す炎が収まれば後に残るは名残として残る血液の水溜りだけ。

他愛もないとばかりに鼻を鳴らし、ルーシイの搜索を再開しようと脚を踏み出す。

「うおッ!!?」

瞬間、襲いかかる殺気に足を止め、反射的に横へと飛ぶ。

遅れて過ぎ去るのは氷の矢。着地したナツを追うように次々に迫る氷の矢を後退しながらかわし、それが止んだ後飛んできた方向を睨みつける。

「グレイツ!!?」

姿は霧に阻まれて見えないが、下手人がグレイだということを直感

するナツ。伊達に幼い頃から喧嘩しているだけのことはある。

しかし、普段と違うのは腹が立つからなどのじゃれあいではなく、敵意丸出しの状態だということ。それに思うことはあるが、兎に角距離を空けられるとまずいと矢の飛んできた方向に駆け出そうとする。しかし、2、3歩踏み出したところでまた先程の赤い狼が茂みから飛び出してきた。

「邪魔だア!!?」

拳に炎を纏い、殴り飛ばそうとした瞬間、再び飛んでくる氷の矢。それに反応して、矢を叩き壊せば生まれる隙。そこを容赦なく狼が突き、その腕に噛み付く。

「ぐあつ!!?この……っ!!?」

「ぎゃいん!!?」

すぐさま強引に突き放すが、噛まれた跡から流れる血。動きに支障はないが、それでも痛みに顔を顰める。悪態をつきながら脚を踏み出そうとすれば、周りの木陰からガサガサ、ガサガサと複数の音がする。前からは氷の矢、そしてその隙を突くように現れる狼。どうしようもない状況に、ナツは諦めるわけもなく、逆境を跳ね飛ばすかのように声を大にしてあげる。それが合図だったかのように攻撃が始まるのであった。

氷の矢を番ながら、虚な目をしたグレイは何を思うわけでもなく矢を放つ。視界の条件はナツと同じく最悪なものにも関わらず、その狙いは正確だ。それにはわけがある。

「ふふふ、良い調子よお」

グレイの隣に立つ、吸血鬼の女性。彼女がグレイの狙撃を補佐しているのだ。吸血鬼にとってこの程度の霧で視界を遮られることはなく、また展開している狼から送られる視界の情報でナツの姿は丸見えであった。

卑怯とは思わない。これは純粋な種族としての差。愚かな人間と高潔な吸血鬼の格差だと彼女は考えていた。

ちらり、と横目でグレイを見て、舌打ちをひとつ。

吸血鬼にとって相手の血を吸うことは食事という意味合いの他に、相手の存在を受け入れること。記憶も、魂も、肉体以外の全てを取り込むことである。カイトの血を吸うことにより記憶が引き継がれ、羽虫程度にしか思えなかったグレイに対し妙な愛着が湧く。犬や猫を可愛がるような庇護欲ともいえるだろうか。

半端者風情の最後の抵抗だろう、と忌々しげに頭を抑え、思考を切り替えるように頭を振るう。

半端者とはいえ、同族をここまで墮落させたフェアリーテイルの面々にはそれ相応の罰を与えねばならない。まずは手始めとして身内による殺戮、そして絶望の淵に至る所を吸血。血は全て吐き出して、残った肉は屍食鬼に食わせてやる、と心の中でそう決めて視線をナツに向ける。

矢と狼の二段構え。そう易々とは突破されないとたかを括った彼女はその光景を思わず二度見した。

「オオオオオオオオ!!?」

雄叫びを上げてこちらに向かって走るナツ。その体には狼が牙を突き立てているが、そんなものはお構いなしにと歩を進める。

「ッ、撃ちなさあい!!?」

命令通り放たれる氷の矢。しかし、それは空中で破壊され、ナツの歩みは止まることを知らない。

それならばと狼の量を増やすが、身体の主要部を守るだけで反撃する様子はなし。攻撃が効いていないわけではない。現に噛まれた部分からは血が出ている。

(なんてヤツなの?!?)

何か弱点はないか、と記憶を漁るが、出てくるのは他愛もない日常の風景。炎を食べ、ノリノリで喧嘩して、仲間のために吠える姿のみ。役立たずめ、と吸収したカイトに愚痴を溢す。

「見いつけたアアア!!?」

そうこうしている内に、視認できる範囲まで近づいたナツがその鉄拳を女性に向けて振るう。その身に噛み付く狼たちに動きを阻害するように指示を出そうとするが、ナツ自身から発せられる炎により倒

される。一瞬の思考停止。正に死に体。そのまま拳が突き刺さると思われるや否や、その寸前でグレイの放った矢をかわし、強制的に距離を取らされる。

「グレイッ!!? 邪魔すんじゃないエツ!!?」

「ふ、ふふふ……人間風情がよくここまで……。けれど、貴方の仲間には既に私の手中。2対1のこの状況、大人しく降参したほうが身のためじゃないかしらあ?」

危うい所であったが、それを表に出さず、優位はこちらにあるとばかりに高圧的にそう言い放つ彼女。

無論、降参すれば命の保証をするはずもなく、予定通り殺すだけである。けれど、ナツがそのような甘言にのるわけもなく、そして不利な状況であろうと諦めるはずもない。

「知るかつ!!?」

全身から炎を昇らせて戦闘態勢を整える。

「仲間を見捨てることなんかできるか! 操られてるかなんか知らねえけど、ぶん殴って目エ覚まさせるだけだ!」

「羽虫風情が生意気ねえ……。できるものならやってみなさい!!?」

狼では効果が薄いと分かったのか、女性は手から湧き出した血を周囲にばら撒く。その隙に詰め寄ろうとするナツであるが、それを阻害するのはグレイだ。

「アイスメイク、ランス」

「クソッ! だったらまず、テメエからだ!!?」

グレイの支援攻撃はまずいと判断したナツが拳に炎を灯してそちらに向かう。しかし、その途中で地面から突き出した木の根が行先を阻んだ。

木の根には血管のように黒い線が張り巡らされており、一眼見てわかる異常性。だからと言って怯むナツではない。

「邪魔だアア!!?」

拳で木の根の壁を破壊しようと振りかざす。だが、木の根は意志を持つかのようにばらけてそれをかわすと、逆にその腕に絡みついてナツを拘束する。

「クソっ!!?..なんだ、コレ!!?..」

ブラッディ・ツリー
「戦血樹林よ。このまま絞め殺してあげる」

吸血鬼である彼女の魔法は血を操るもの。自身の血液を自由に操ることのできるものである。吸血鬼独自の魔法、ということではないが、人間の中でこの魔法を使う者はほんの一握り。というのもこの魔法、血は操ることはできて血を生み出すことは出来ず、人間であれば多用すれば失血死につながるからだ。

しかし、彼女は吸血鬼。血を啜り、それを糧とする化物。血の量は無限と言っても過言ではない。

リスクなしで血そのものを操り、その血を吸収した対象をも操ることのできる魔法と吸血鬼の組み合わせ。幼き頃から将来有望と言われていただけあり、魔法を操る技術も相当だ。

木の根がナツを覆い尽くし、そのまま万力の如く締め上げる。骨と内臓が潰れる音を幻想し、ニヤリとほくそ笑む女性。しかし、繭の如くナツを包む木の根が突如として内側から爆発し、周囲に火炎と閃光が走る。

思わず腕で視界を覆ってしまったが最後、その中から飛び出したナツの姿を確認した時にはすでに懐へ。対処しようにももう遅い。全身に炎纏ったナツの一撃が女性を確実に捉える。

「火竜の劍角!!?..」

「があああつ!!?..!!?..」

体当たりの瞬間、炎と共に打ち上げられた女性。身を焦す炎と突然の状況に理解が及ばず、羽を広げて滑空することも忘れ地面へと叩きつけられた。

「火竜のオーソー!!?..」

（まづいわ!!?..）

地面に倒れる女性はすぐさま反撃を繰り出そうとするが、予想以上のダメージで身体が動かない。それどころか立つことさえままならない。

（人間が……、人間風情が……っ!!?..）

胸の内を這いずり回る憎悪、脳裏に写る忌々しい過去の光景、奥歯

を砕いてしまうかのような悔しき。それらを内包した瞳に、ナツの拳が突き刺さる。

「鉄拳っ!!?」

地を割る一撃が女性の頭部に突き刺さり、その身体が跳ねたかと思うとすぐに動かなくなる。魔力の使いすぎによる疲労からか、肩で息をするナツ。これでグレイも元に戻るはずだと疲労困憊ながらもそちらを見やれば、飛んでくる氷の槍。

「アイスメイク、ランス」

「おわっ!!?」

寸前のところかわすが、そんなものお構いなしにと飛んでくる攻撃の数々。避け続けること叶わず、そのうちの一本がナツに直撃した。

「クソッ!どうなってんだ!!?」

元凶である女性は倒した。なのに解けないグレイの洗脳。カイトにウソを吐かれたかとも考えるが、そんなことをするはずがないと頭を振る。何より意味がない。

その時ふと、無意識のうちに横目で女性の亡骸を見やれば、狼たちを倒した時のようにその身体が血溜まりへと姿を変えていた。ひとつだけ違うのは、まるで意志を持つかのように血溜まりが森の奥へと消えてゆくこと。倒したのは偽物だと直感で理解したナツは頭上から落ちてくる氷の大槌を受け止めた。

「ぐっ!!?ダアア!!?」

全身のバネを使ってそれを放り投げ、グレイを睨む。

顔を合わせれば喧嘩しかしない間柄ではあるが、だからこそ無表情でこちらを睨むグレイの姿が気持ち悪くて仕方がない。

「……………けるな……………」

フェアリーテイルに所属している者は皆家族だ。

殴ったり殴られたり、口喧嘩でヒートアップしたりはするが、それでも本心から嫌っているわけではない。その家族が体の良い傀儡に使われ、あげくの果てには目の前で殺された。

元凶はこちらを嘲笑うかのように姿を隠し、こうしている間にも他

の家族に危険が迫っている。

「ふざけんじゃねエエ!!?」

ナツの堪忍袋は最早限界だった。

両脚から炎を噴出しグレイへと接近を試みる。当然グレイも反撃するが、その攻撃はどれも直線的。本来であれば柔軟な発想と的確な状況判断で戦うグレイだが、操られている今、指示された通りの攻撃しか行わない。多数対一であれば厄介ではあるが、この状況であればナツの敵ではない。

飛んでくる氷の槍を左右のステップでかわし肉薄する。苦し紛れに造られた氷の盾を拳で粉碎し、その頬に突き立てる。

「いい加減、目エ覚ませエ!!?」

鈍い音をして、グレイが派手に飛ぶ。

手応えは十分にあり、起き上がる様子もない。

「戦争だ」

この場での勝利を収めはしたが、しかし敵はまだ残っている。

奥歯を噛み締め、拳を振るわし、ナツは決意を新たにする。

その時、近くの茂みがガサガサと揺れた。

また狼か、と拳を構えて迎撃体制を取るが、そこから現れた影を見て力が抜ける。影は茂みから飛び出すとナツの胸に飛び込み、あらゆる力の力を持って抱きしめた。

「ナツウウ!!?」

「おおー！ハッピー！無事だったか!!?」

「あいー！」

抱きついてきたのは行方不明になっていたハッピーであった。見た限り怪我をしている様子もなく、再会が嬉しいのか涙と鼻水を流しながら頬ずりする。ナツも喜びのあまりナツを抱き上げてその場でくるくると回りだした。

「はは！よかった！どこ行ってたんだよ！」

「村に行ってたんだ！それで、あの女の子にここまで案内してもらったんだよ！」

若干目を回しながら指を刺すハッピー。そちらを振り向けば遠慮

がちに木陰からこちらを覗く少女の姿。どこかで見覚えが、と考えて村に案内してくれた少女だということを思い出す。

「オイラ、あの子に危ないところを助けてもらったんだ」

「そうなのか！ありがとなー！」

木陰に隠れる少女の手を握ると元気よく上下させるナツ。その状況に少女は困惑するばかり。自身の手とナツの顔を交互に見て、不思議そうにしている。

「ん？どうかしたのか？」

「えつと……アナタ、私が怖くないの？」

「なんでだ？」

「だって、私、そのお……人、じゃないから……」

「けど、ハッピーを助けてくれたんだろ？だったらそれでいいじゃねエか」

申し訳なさそうに視線を逸らす少女にそう告げ、にこりと笑うナツ。まるで太陽のように笑うナツに一瞬啞然とし、そしてふわりと釣られて笑う。

「あ！それより、ルーシイ探さねエと！ハッピー、わかるか？」

「え、ルーシイ迷子なの？」

「あつちよ」

慌てる2人を見かねて、少女が霧の彼方を指さす。普通に考えれば罨かもしれないと疑うだろう。けれど、ナツは「本当か!?」と少女の言葉を信用し、グレイを担ぐと礼を言いながら走り去ってしまった。

それを急いで追うハッピーを見送り、少女は不思議な人だと思案する。人外相手だと言うのに尻込みすることもなく、対等に話し合えるナツのような存在を嬉しく思い、少女は踵を返す。

肩まで流れる銀髪が歩きに合わせて揺れ、霧の中へと消えてゆくのであった。

死人花

「……時は少し遡り

村の様子を探るというエルザからの指令を受けたハッピー。その途中、村人たる少女に捕らえられたハッピーは困惑していた。

「さあ、これで完成よ！」

目の前に立っていた少女がその場を離れ、その後ろに設置してあったヒビの入った鏡に今のハッピーの姿が辛うじて映し出される。

大きめの黒を強調したゴスロリ調の服に、頭部には少し汚れの目立つ赤いリボン。正直に言えば中々の悪趣味だが、少女は満足のいく出来らしく、「可愛いわ。とーっても可愛いわ！」と大はしゃぎ。

きやいきやいと騒ぐ少女を他所に、ハッピーは改めて周囲を見回す。

大人物の服や子供用の服が一区画を占め、海の写真や都市部の写真が貼られた壁、置物も様々で可愛い人形からどこかの兵士が使っていたであろう甲冑、どこで使うかわからない謎のお面など、部屋に置いてある物に統一性は見当たらない。良く言えば物置、悪く言えばゴミ屋敷のような印象を受ける家にハッピーは連れ込まれていた。

最初は命の危機を感じて身を硬らせていたが、少女が予想以上に喜びはしゃぐ姿を見て毒気が抜かれてしまい、思わず肩の力も抜ける。

「ね、ねえ」

「なにかしら、可愛いネコさん？」

「オイラをどうするつもりなの？」

そう聞かれて困った表情を浮かべる少女。しばらくうんうんと唸って悩んだ後、手を叩いて朗らかに笑う。

「そうね、ネコさんには色んなお洋服を着てもらいたいわ！それからお茶をして、お外のお話をたくさんしてもらおうの！とつても素敵じゃない？」

「外の話？」

「そう！私はね、ネコさん。この森の向こうの景色を知らないの。海ってどんなところ？街はどんなもの？お祭りのお話も聞きたいわ！」

それくらいならば、とハッピーが了承を示そうとした瞬間、扉が遠慮がちに叩かれた。それが聞こえた少女はため息をこぼし、その顔から一切の表情が抜ける。その豹変ぶりに思わずヒツと悲鳴をあげそうになるハッピーの口を少女が塞ぎ、人差し指を口の前に持つてきて静かにとジエスチャーで示す。ハッピーが頷くのを確認すると、再度叩かれた扉を開けた。

そこにいたのは村長を名乗る老人。笑顔でハッピーたちを歓迎していた彼だが、今は申し訳なさそうに、何かに怯えるように身を縮こませながら少女の前に立つ。

「何かしら?」

「み、巫女よ。申し訳ありません!あの贅達が逃走をはかりました!」
言い終えるや否や老人は少女の前で平伏し、お許しをと延々と小声で囁る。側から見ればなんとも異様な光景。しかし、少女はそれが当然とばかりに表情を崩さず、ただ淡々と言葉を紡ぐ。

「安心なさい。これは女王の戯れ、ただの見戯。あの者は女王の掌上です。あなた方はいつも通り女王の沙汰をお待ちなさい」

「ははあつ!!?」

「要件は以上ですか?ならば去りなさい」

少女の言葉に従い走るように立ち去る老人。その姿が闇夜に消えるのを確認すると、少女は大きく溜息をこぼす。そうしてハッピーの方に振り返れば先ほどと同じような期待に満ちた笑みが浮かんでいた。

「お待たせしたわね、ネコさん。それじゃあお話を聞かせてもらえるかしら?」

「待ってよ!」

なんのこともないとばかりに話を戻そうとする少女だが、先程の会話の中でどうしても聞き逃さないものがハッピーにはあった。

「贅達って、もしかしてオイラたちのことなの!?」

「……………ええ、そうよ」

誤魔化しは効かないと判断したのだろう、少女は笑みを浮かべたまさそうハッピーに告げる。それを聞いたハッピーは急いで服を脱ぐ

と出口へと向かおうとする。しかし、その方向には既に少女が待ち構えており、当然の如くハッピーの行先を塞ぐ。

「何処へ行くのかしら?」

笑顔を崩さない少女に少し気圧されて尻込みするハッピーだが、それでも歯を食いしばり、一步も引くことなく少女に立ち向かう。

「オイラ、みんなを探さないで! だから退いて!」

「ダメよ。ダメだわ。もう他の人達は既に霧の中。闇雲に探しても見つかるはずもないのよ。それよりもここで安全に暮らした方が賢い選択ではなくって?」

「それでも、見捨てられるわけないよ!」

「自身の危険も顧みず? 何がネコさんを突き動かすの?」

「みんなオイラの仲間だからだよ」

「仲間……ネコさんはあの人達と種族が違うのに?」

「そんなの関係ない! オイラたちはフェアリーテイルなんだから!」

ハッピーの心からの言葉に、少女はふむ、と熟考するように顎の下に手を置き、仲間という言葉が口の中で転がす。そうしてハッピーがいてもたってもいられなくなり、強行突破しようと決意した瞬間、少女は手をひとつ叩いて嬉しそうに笑う。

「素敵ね、素敵。素敵だわ! ネコさんは仲間のために命をかけられるのね! なんて素敵なのかしら! ねえ、ネコさん。私にもそのお手伝いをさせてもらえないかしら?」

「え?」

少女からの申し出に、ハッピーは思わず疑問の声を上げる。

先程の様子から敵意はないが、だからと言って完全に味方と言える根拠もない。どうするべきか、と考え、少女はハッピーを抱き抱える。

「大丈夫よ、ネコさん。これはお礼なのだから」

「お礼?」

「ええ、そう。人の素晴らしきを見せてくれた、貴方へのお礼」

そう言われてハッピーは暫く考えた後、わかったと告げる。瞬間、潰れるくらい抱きしめられたハッピーは「ぶぎや!!?」と苦しげな声を上げるが、有頂天の少女はそれに気づいた様子はなく、くるくると

その場を回る。

「きゃー!!?・ありがとう、ネコさん!!?・そうと決まれば早速出発ね!」
その言葉通り、少女はハッピーを抱えたまま小屋を飛び出すと、何の迷いもなく霧が立ち込める夜の森へとずんずん進んで行く。その歩みに迷いはなく、まるで何かに導かれる様に進む少女にハッピーは後悔を覚えるが、だが背に腹は変えられないと決断を下し、仲間のもとへと急ぐのであった。



森の中を駆ける。

息を切らし、邪魔な木々を蹴散らしながら前へ前へと進む。

後ろからは自身を追いかけける様に複数の息遣い。そしてそのうちのひとつが跳躍と共に飛びかかる。背後から迫る牙と爪を手に持った剣で薙ぎ払い、断末魔ひとつあげると下手人は血の塊へと変わる。

息を吐く暇もなく次々と襲いかかるそれらを叩き伏せ、その波が終わるとまた走り出す。

ナツと別れてから現在、エルザは霧の向こうに映る影を目掛けて歩を進めていた。しかし、暫くして襲いかかってきたのは血の様に赤い狼の群れ。エルザの技量であれば樹木に剣をひっかけるようなことはしないが、見通しの悪いこの状況の中、死を恐れない狼たちから追われるのは精神的な負担が大きい。額から玉のような汗を流し、珍しく肩で息をするエルザは一刻も早く目的地に到着せんと先を急ぐ。

「ここか……」

そうしてようやくたどり着いた先にあつたのは村の時と同じように台風の日と言わんばかりの霧ない空間。村よりは広い空間ではないが、それでも人が住むとすれば十分な面積。夜ということもあり見通しは悪いが、星あかりに照らされているのは一面の赤い彼岸花。草葉の陰から除く白骨に根を張り巡らせ、いつそ毒々しいまでに赤い彼岸花に囲まれた中心には焼け崩れた廃墟がひとつ。焼けてしまった元の大きさはわからないが、残った部分から察するに元はかなりの豪邸だったのだろう。

警戒しながらその廃墟に近づくが、変わった様子はない。しかし、最後の力を振り絞ったカイトが訳もなくここへ飛ばしたとは考え辛い。

慎重に当たりを探り、ふと足元から硬質な音が返ってきた。そちらを見れば鋼鉄の扉がひとつ。明らかに怪しげなソレを慎重に開ければ下へと続く階段が現れた。夜の闇よりもさらに暗い地下へと続く階段、意を決してそこを降りる。

足音を立てないように慎重に降ると、弱々しくも薄らと通路を照らす蠟燭が見え、そして壁にはいくつもの牢屋が設置してあった。中心に位置する場所には上に続くダクトと、深い受け皿、そして台車が置いてあり、ここが話に聞いていた家畜として扱われていた人間たちの牢なのだ当たりをつける。だとすれば攫われたミラジエーンもここにいるのだろう。

声を大にして探したいが、敵がいつ現れるかもわからない状況。下手な真似はできない。壁に立てかけてある蠟燭をひとつ手に取り、牢屋の中をひとつひとつ覗いていく。そうしていくつかの牢屋を探すと、ようやく目的の牢屋を見つけた。

「ミラ、か?」

「ん……もしかして、エルザ?」

闇の中でうずくまるひとつの影にそう問い掛ければ、返ってくる聞き慣れた声。鍵など持ち合わせていないため、剣で牢屋を破壊すると、ゆっくりと起き上がろうとするミラジエーンに近づいて蠟燭を近づける。

間違いなくミラジエーンではあるが、その淡麗な顔には血が滲み、よく見れば指先も爪が割れて、血豆が潰れて痛々しい惨状であった。

「来てくれたのね」

「ああ。しかし、どうした?何をされた?」

「ああ、これ?大丈夫よ。脱走しようとして失敗しちゃった」

なんでもないと風を笑うミラジエーンだが、付き合いの長いエルザはそれが無理から来るものだと察していた。

「ウソやん。ホンマに来なはった」

「地獄に仏たアこの事だな」

「誰だ!?!?」

「エルザ、大丈夫。味方よ」

暗闇からの声に咄嗟に剣を抜くエルザ。それを手で制し、暗闇の中の斑鳩とタカを紹介する。当の本人達は仲間になったつもりはないと溢しながら自己紹介。

「ヴィダルダス・タカ。髑髏会のひとりだ」

「同じく斑鳩。妖精女王の噂はかねがね」

「髑髏会だと?暗殺ギルドの一味がなぜこんなところに?」

「そんならどうだってええでっしやる。それよりほら、はよお逃げやす」

片手で邪魔だとばかりに2人を追い払う仕草を見せる斑鳩。タカも同じように逃げようとする素振りは見られない。

「お前たちは逃げないのか?」

「冗談だろ。誰がわざわざバケモンに殺されに出るんだよ」

「うちらは残り少ない余生をここで過ごすん決めたんよ。そこのお姫さん連れてはよ出ていきなはれ」

「……………そうか。では行かせてもらう」

普段であれば助けようとするエルザも、今この時ばかりはその余裕はない。味方はちりぢり、敵は不死に近い化け物、頼みの綱のカイトも殺された。今は一刻も早くここからの脱出と仲間との合流が先だと意気込みミラジェーンの手を引こうとするエルザ。

しかし、ミラジェーンはその手を振り解き、困惑するエルザを他所に2人に向き直る。

「……………ねえ、貴方達も一緒に逃げない?」

「聴いてはりました?うちらはここで死ぬんや。血い流しすぎて頭ボケたとちやいます?」

「聴いてたわ。けど、見捨ててなんておけないわ」

「救いの手なんざいらねエつつてんだよ。それとも同情でもしてんのか?」

「そんなつもりはないわ。これはただの私のエゴよ」

座り込む2人に向けて差し出した手。それを一瞥し、鼻で笑うとまた塞ぎ込む。

「エゴて……うちら共々生き残れる手でもあるんどす?」

「あるわ。ね、エルザ。ここに来てるのはエルザだけじゃないんでしょ?」

「あ、ああ。だが、他のみんなは散り散りになっていてだな……。それにカイトも……」

口籠るエルザを見て何かを察したミラジエーンは一瞬驚いた様子を見せるが、それでも「そう……」とだけ呟いて笑顔を見せる。

「ほら、私の仲間達も来てるもの。みんなで戦えば怖いものなんてないわ」

「その仲間が無事集まる保証も、バケモンに勝てる見込みも無エだろ」「いい加減諦めておくれやす。何があんさんをそんなに駆り立てるんどす?それもエゴやなんて無粋なモンで片付けるつもりなんどす?」

斑鳩の言葉にミラジエーンは少し考える素振りを見せ、自身の中で納得のいく答えを見つけたのだろう。軽く頷き、その思いを言葉に乗せる。

「私は……」

「ミラ!!?」

その瞬間、まるで全身を冷水の中に漬け込んだかのような悪寒がエルザを襲い、警告を出す。しかし刹那、視界が白く染まった。次いで来るのは全身がバラバラになりそうな衝撃と浮遊感。

「ぐうつ!!?」

反射的に金剛の鎧を纏い傷は軽傷で済んだものの、それはエルザのみ。地面に着地して周囲を見渡すが他の3人は見当たらない。寸前のところで防御が届いたと信じて周囲を注意深く見渡し、ようやくその影を見つけるが、立っているのは斑鳩とタカの2人。驚愕の色に染まる2人の足元には怪我を負ったミラジエーンが倒れ、足下は瓦礫に埋まっている。

すぐにでも駆けつけたいが、それは目の前の爆発を起こしたであろう下手人が許さない。

「あらあ？まさか生き延びてるなんてえ」

ふわりと空中から降り立ち、側頭部からツノを生やした人外の女性。縦に割れた瞳孔はエルザを興味深く見つめ、そして頬が半月状に裂けるのでは無いかと思うくらいに口角をあげる。

「まあ、いいわあ。貴方達を殺すことに変わりはないものお」

「くそっ……………!!？」

今は怪我を負うミラジエーンから距離を離すべきだとエルザはミラジエーン達とは反対方向に逃げる。

「どこへ逃げるのかしらあ？ここは悪魔私の庭よお。……………ん？」

逃げるエルザを追いかけようとそちらを向くが、不意に香る血の匂い。気づかれたと悟り、方向を急転換。女性に斬りかかるエルザだが、その剣は女性の爪が食い止める。

「ああ、なるほどお。怪我人がいるのねえ」

「それがどうした？私に背を向けた瞬間、貴様の負けだ」

「ふふふ。私を殺す術も持たない人間が何を言ってるんだかあ。でもお、そうねえ」

実際はエルザの持つ破邪の槍は吸血鬼である女性には効果的ではあるが、それを悟らせないために女性は嘯く。そして更に思考を乱してやろうと笑みを深め、その背中に魔法陣を展開。鮮血が溢れそれが徐々に形を作り、そして最後には女性と瓜二つのモノが出来上がる。

そして何をするのか察したエルザは素早く本体である女性に再度斬りかかるが、それを横合いから殴りつけた分身体が止める。

「戦血乙女。足止めお願いねえ」

「ふふふ」

鮮血で作り上げられた分身体。与えられた魔力に応じてその力は本体に近しくなるそれには女性の魔力の半分が与えられており、本体である女性となんら変わりない。

吸血鬼の剛腕を持ってして弾き飛ばされたエルザは木々を突き破り、霧の彼方へと消えてゆく。分身体にそちらを任せ、本体である女性ミラジエーンたちへと恐怖を煽るようにゆっくりと近づく。

「おい、やべえぞーあのバケモンが来る!!？」

タカの焦りに満ちた声が斑鳩を呼ぶ。しかし、斑鳩は足元に転がるミラジエーンを見つめるばかり。痺れを切らしたタカが再度声をかければ、ようやく斑鳩は動きを見せた。

「おい、斑鳩！」

「……………最後に、聞かせてもらってよろしゅうおす？」

「なに、かしら？」

息も絶え絶えで、満身創痍だというのにミラジエーンは笑顔を崩さない。爆発の寸前、ミラジエーンが斑鳩たちを庇ったのは守られた本人がよく理解している。彼女のおかげで自身は軽症で済んだのだと。だからこそ、その行動の意味がわからない。今まで人を殺して生きてきた斑鳩には、理解できない。

今を逃せば2度とその機会は訪れないのだろうと。金輪際、知ることはないのだろうと。この胸のモヤつきを拭うチャンスは訪れないだろうと。だからこそ、斑鳩は問いかける。

「なんでそこまでして、うちらを守りはったんどす？」

そう言われてミラジエーンは困ったように笑い、そうして応えた。「私を救ってくれた人の影響よ」

思い返すは幼少期。村に住み着いた悪魔を倒したミラジエーン。しかし、代償としてその右腕に悪魔の因子を色濃く受け継いだことにより異形化。村人から迫害され、幼い2人の弟と妹を連れてフェアリーテイルへと訪れたのだ。

弟と妹は上手く馴染めていたが、異形化した腕を持つミラジエーンは引け目を感じてこっそりとフェアリーテイルを去ろうと決意していた。それを呼び止めたのがカイトだ。

今よりもきごちない笑みで、それでも必死にこちらを元気づけようとしてくれた、優しい吸血鬼。その姿は滑稽を通り越して呆れるものばかりであった。けれど、あまりにも間抜けな格好を見て腹を抱えて笑い、元気を貰ったのは今でも鮮明に覚えている。

だからだろう。

諦めを享受した2人が、過去の自身とダブってしまったのは。それを助けたいと思ってしまったのは。

「アホらし。聴いたうちが間違いやったわ」

「理由なんて、それで十分よ。少しは笑えた？」

「ちつとも。笑いの感性狂つとるとちやいます？」

「そう、残念ね」

「おい、斑鳩!!？」

「わかつとる。……………ほな、お互い生きとつたらまた会いまひよ」

これ以上は限界だとタカが叫び、斑鳩もそれを察して返事を返す。

名残りおいしいとは思わない。他人よりも自身の安全だ。

「ええ、またどこかで」

後悔も命乞いも懇願もせず、ミラジエーンは2人を見送る。

そして2人の姿が霧の向こうに消えたのを確認すると、身を振って瓦礫から足を抜け出そうとする。しかし、相当深くハマってしまったのだらう。脚が抜けるような気配はない。

「仲間に見捨てられて、この場にひとり。逃げようにも逃げられない状況に落とされた気分はどうかしらあ？」

ふと、ミラジエーンの目の前に化け物が立つ。

瞬る様な視線で、嗜虐的な笑みを浮かべ、口元から垂れた涎を舌が舐めとる。捕食者と被食者の関係だというのに、ミラジエーンの表情に陰りは無い。

「見捨てられてないわ。逃げてもらったのよ」

「強がりねえ。人間の自己犠牲の精神ってものかしらあ？」

「そんな立派なモノじゃないわ。ただ、あの人ならこうすると思つて」

「あの人お？」

「ええ。人が嫌いなくせに、笑顔の仮面を被る困った吸血鬼なら」

「……………生意気ねえ」

躊躇いなく、倒れているミラジエーンの右腕を踏みつける化け物。骨が折れる鈍い音が響き、さすがのミラジエーンも微かな悲鳴を口から零す。

「人間風情が、半端者とはいえ吸血鬼^{わたしたち}を理解してるつもりい？笑えない冗談ねえ。不快よお。不愉快よお」

折れた腕を踏み躪られ、声を殺しながら痛みに悶えるミラジエー

ン。それが面白く無いのか、忌まわしげに顔を顰めると踏んでいた足を浮かせ、今度はミラジエーンの頭に乗せる。

「ねえ、少しは命乞いをしたらどうかしらあ？醜く泣いて、みっともなく喚いて、それでも生きたいと願うのが人間でしょう？もしかしたら、私の気が変わるかもしれないわよお？」

「ふふ……うそ、ばっかりね……」

「ええ、嘘よお。アナタたちは確実に殺す。血肉を踏み躪って、骨が粉になるまで砕いて、土と一緒にかき混ぜてあげるわあ」

徐々にミラジエーンに乗せる足に力を入れてゆく化け物。耳の奥でミシミシと骨が軋む音が聞こえ、逃げ場のない圧力がミラジエーンをゆっくりと襲う。

けれども、その圧力は一定を保ったまま、さらに上がる様子はない。痛みは充分だが、殺される様子もない。何かがおかしいと化け物の顔を覗けば、化け物としても意図していなかったのか困惑の色を浮かべて力の入らない脚に無理やり力を入れようとしている。

しかし、奮闘虚しく、どころかミラジエーンにかかる圧力はゆっくりと離れていき、終いには反発するかのごとく脚が勢いよく天めがけてあげられたではないか。

予想だにしない出来事に化け物はバランスを崩して、勢いよく転がる。何が起こったかわからず目を白黒させる化け物は倒れたまま自身の意に従う脚を確認する。

「もう、何なのお」

悪態を吐きながら立ち上がれば、クスクスと笑うミラジエーン。

「なあに？そんなに面白いのお？」

「ふふ………そこにいたのね」

「？何を言ってるー」

刹那、ミラジエーンが魔力を込めたかと思うと展開される魔法陣。ミラジエーンの魔力に加え、まるで意志を持つかのように魔法陣に吸い込まれる血液。魔法陣の向こうから漂う危険を感じ、猶予はないと一気にミラジエーンを仕留めようと爪を振るう化け物。しかし、ミラジエーンの方が早い。

ミラジエーンの魔力と血液を吸収した魔法陣は光だし、その効力を
発揮する。

「来て、カイト」

「ああ、いつでも、いつだって、君たちのそばに」

魔法陣より飛び出した吸血鬼体のカイトはミラージェーンに迫る爪を防ぎ、動揺する化け物に向けて一撃を喰らわすのであった。

肉食兎

魔法の中には召喚魔法というものがある。

数ある魔法の中で最もポピュラーで最も複雑な魔法と言われているのがそれだ。

召喚魔法には大まかに道具の召喚、人外召喚、代償召喚の3つがあり、それぞれが違う特徴を持っている。

まず、道具の召喚は読んで字の如く、魔法剣や銃器に収まらず、日常品から何から何まで、自身で別空間にストックしたモノを呼び寄せる魔法。凡庸性が広く、ストックの容量に個人差はあるが、召喚魔法の中で一番実用的であり、最も取得者の多い魔法といえよう。エルザの魔法、騎士がザ・ナイトこれに当てはまり、その有用性は言うまでもない。

欠点を上げるとすれば状況に応じたモノを随時換装させるとなる
とストックの容量が足りなくなり、人によっては剣一本で限界が来る
などの明確な個人差が出る。そして生き物はストックすることは
できず、同じように食料もストックできない。

次に人外召喚。

こちらは別の場所、もしくは別の世界にいる生き物と術者が契約を
交わし、召喚するモノだ。主にルーシイの星霊魔法のように星霊が一
般的ではあるが、中にはモンスターと契約する者も。一度契約を交わ
せばそれを破らない限り、術者の呼びかけに応じて召喚獣は術者に従
う。

欠点は召喚するモノによるが召喚による魔力が他の召喚魔法に比
べて膨大であること。そして、契約の内容はそれぞれであり、下手に
契約を交わせば術者への負担が増えること。召喚中は維持費として
魔力が消費されること。それらを差し引いても有能な魔法であるが、
確かな召喚術の才能が必要であり、誰もが契約を交わして召喚できる
というわけではない。

最後に代償召喚。

こちらは人外召喚とは違い、魔力を持たない一般人でさえも扱うことができる。

しかし、その代わりに召喚獣が提示する供物が必要であり、その供物というのは殆どが血生臭いものである。ある召喚獣は術者の両腕を、ある召喚獣は子供を、ある召喚獣は人間の魂を。召喚されるのはほとんど悪魔やそれに準ずるものであるため黒魔術に分類されている。また、こちらも術者と契約を交わさねばならず、もし破れば召喚獣が術者に牙を剥きやすい。

それ故に取得者が格段に少ない魔法であるが、召喚されるモノは他よりも一線を画しており、使い所と扱い方さえ間違えないでいれば強力な切り札となる。

さて、今回ミラジエーンが使用したのは言わずもがな3つ目の代償召喚。悪魔との間に交わされたのはミラジエーンの三分の一の血液と、半分の魔力。他の代償召喚に比べてハードルは低いが、これはカイトが同じ世界にいるためであり、供物としては充分。召喚中の魔力の消費もない。

マカロフにでさえ秘密にしていた秘中の秘。こんな状況でなければ使うことのない奥の手。ミラジエーンの妹が亡くなって以降交わした、とびつきりの切り札。ジョーカー

「混沌ノ爪!!？」カオス・クロウ

代価を支払われ、その効力を遺憾なく発揮された召喚魔法。魔法陣より飛び出したカイトが爪を振るい、その軌跡を縫うように魔法が飛ぶ。突然のことで直撃を食らった化け物は空中に弾き出され、そのまま翼を広げて滞空。忌々しいとばかりにカイトを睨む。

対するカイトはいつものように飄々とした笑みを浮かべ、背後で倒れるミラジエーンに背を向けたまま回復魔法をかけて安否を確認する。

「やあ、ミラちゃん。呼び出してくれてありがとう♪」

「初めからそのつもりだったくせに」

「まさか。まあ、ミラちゃんなら気づいてくれるとは思ってたけどね」
♪

召喚者と召喚獣。

契約で縛られる者にはない確かな絆が二人の間にはあった。

笑顔で会話を交わす2人目掛けて、紅い魔法がひとつ飛ぶ。それを難なく迎撃すると、気持ちを切り替え、相手を見据える。かつて自身が仕えたお嬢様。そこにかつての人間を愛する面影はなく、苛立ちと怨恨に満ちた目でこちらを睨む。

「さて、あちらさんは殺る気満々みたいだねえ。ミラちゃん、ちよおつとばつかし待ってて貰えるかな？」

「ええ。でも、できるだけ早くね。話したいことが沢山あるの」

「カツカツカ♪ああ、わかったよ、マイマスター」

ミラジエーンを拘束する瓦礫を影で砕き、防御魔法で保護するとカイトも翼を広げて宙へ浮かぶ。

「随分と人間風情と仲良しなのねえ」

「カツカツカ♪羨ましいかい？」

「まさかあ。それでえ？どう言うことなのお？アナタは確実に吸血^殺したはずよお」

「なに、肉体と魂さえあれば召喚魔法は成功するのさ。肉体は影に隠して、魂は壊れないよう注意して」

なんでもないとばかりの調子のカイトだが、その行動は綱渡りに等しい。抜け殻となった肉体を隠すのはまだしも、吸血鬼に吸われた魂を保持することは並大抵のことではない。吸収される恐れもある上に、他の魂と混ざり合いその自我を失うのだ。復活など望むべくもない。

だというのに、根性論で乗り切ったと言うふざけた話に化け物は片眉を上げて怒りを露わにする。

「バカにしてるのお？」

「してないさ。魂^我が強くな^っちやフエアリー^っテイル^ちではやってけないからね、部のいい賭けだよ♪」

「人間社会に染まり過ぎよお。この裏切り者」

「そう言われても仕方がないね。でも、人間社会も楽しいものさ」

「私たちを滅ぼした人間があ？………もう、手遅れねえ」

最早言葉は不要。方や人間を怨む化け物に、方や人間に組みする化け物。相入れない仲となつてしまった事を理解した化け物は魔法陣を展開させながら腕を肩までの高さにあげる。

「我が名はレプス・コルヌトウスⅡアルミラージュ。ヴァル・コルヌトウスⅡアルミラージュが娘。最後の吸血鬼にして、人の世を憎む者」

その名乗りは吸血鬼同士の決闘の合図。それは互いの命を掛け合う絶対の掟。途中退場も命乞いも許されない吸血鬼の誇りを掛けた命懸けの戦い。

絶対零度の視線をカイトに向けて、応じるのを待つ。それはカイトに向けられた吸血鬼としての最後の慈悲。

少し寂しげな表情を一瞬浮かべたカイトだが、覚悟は既に決めていたのだろう。同じように魔法陣を展開させながら名乗りを上げる。

「我が名はカイト・オールベルグ。フェアリーテイルの一員にして、世に笑顔を齎す道化」

言の葉に乗せた明確な敵対。魔ではなく人であることの宣言。

後悔がないと言えば嘘になる。当主に生かされていた恩義もある。けれど、カイトの中の優先順位は既にフェアリーテイルが1番なのだ。

それに対して化け物ーレプスに揺らぎはない。わかっていたのだ。吸血した時に覗いた記憶の中に、もう吸血鬼自分たちの入り込める余地はないのだと。

声高らかに続きを促し、感情の昂りを表すかのように右手に纏う血液がのたうち回る。

「ああーさあ、いざいざ」

「いざいざ」

「その命、貰い受ける!!?」



「は、はっ……はっ!」

霧の深い森の中、ルーシイは無闇矢鱈に駆け回る。

行先も当てもなく、隣には誰もいない。それでも仲間との合流を果たすために彼女は走る。時々木の根に足を取られたり、枝がその柔肌を引っ搔くがお構いなし。転んでも、傷が痛くても、彼女は駆ける。全ては仲間のために。

そうしてどのくらい経ったのだろう。

ルーシイの息はこれまでにないくらいに上がり、鼓動は耳元で鳴らされているかのように煩く聞こえる頃、霧しか見えなかった彼女の視界がようやく明るみを取り戻される。

「……は……」

飛び出したのは少女に案内された集落。離れに出ればよかつたのかもしれないが、不運なことに家が軒々と立ち並ぶ区画。中央から辺りを照らす篝火が焚かれているのがルーシイから見え、周囲に住人の影がないことが確認できた。

信用できない村人がいないことに安堵を覚えて、ルーシイは膝から崩れ落ちる。流石にもう限界だ。脚は生まれたての子鹿のように震えるし、視界にはちらちらと星が見える。

「ふう、ふう……でも、こんなところで立ち止まれない」

なんとしてもナツやエルザと合流し、敵に囚われたグレイとミラ

ジエーンを助けねばならない。使命感に燃えるルーシイが近場の木を支えにゆつくりと立ち上がり、辺りを見渡す。

あれだけ騒いでいたせいで篝火の周囲は食べ残しや足跡が目立つ。そして篝火の横に置いてある水瓶を見つけた。確かあれは村長が自分たちに進めようとしたものだと思い出す。

水、と意識して唐突に喉の渇きを覚え、危険だとわかりながらも隠れながらゆつくりと水瓶の方に近づくとルーシイ。そして手の届く範囲まで近づいて少しだけなら、と己に言い聞かせて釈を持ち上げる。

そして香るツンとした匂い。水に意識がいつていたルーシイだったが、その匂い何なのか気づき、その手を止める。初めて見た時はわからなかったが、今ならその匂いの素が何であるのか理解できる。理解、してしまった。

「これ、もしかして………きやつー！」

不意に訪れた頭部への鈍痛。あまりの痛みと疲れも合わさり、意識を手放すルーシイ。暗闇に沈む中、悪意に満ちたいくつもの紅い眼がこちらを覗くのが見えていた。



「ぐっ!!?」

「ふいふい!!?」

鋼と爪がぶつかり合い、硬質な音を響かせる。一瞬の迫り合いの後、弾き飛ばされたのはエルザ。しかし、すぐさま体勢を立て直すと追撃を許さない。レプスの分身体は霧の中に身を隠し、エルザの視界から逃れる。

エルザがミラジエーンから離されてから現在、戦いは膠着していた。

エルザにとってこの霧のフィールドは視界も悪く、そしてどこから攻めくるかわからない敵に神経を削られ、現れても一撃離脱を繰り返されてばかりで攻め込めないでいる。

対するレプスに視界の悪条件などない。吸血鬼の目は闇をも見通す力を持ち、霧程度では防ぐことは不可能。だが、エルザの持つ剣から発せられる銀の気配。触れる分には誤魔化しが効くが、切りつけられたら成す術もない。吸血鬼特有の腕力で攻めようにもエルザの技量の前には肩無し。こちらも攻めあぐねていた。

互いに決定打のない膠着状態。

一進一退の攻防戦。

銀に触れ、焼けるように煙を上げる爪を切り落とし、再生させる。肉の身体ではなく血液の塊である分身体に再生に使う魔力は必要ない。ただ自らの形を変えればいいだけだ。ただし、再生も無限ではない。分け与えられた血液の絶対量がある限り、必ず限界は来る。

相手に銀が弱点であることを悟らせないようにしているのだが、銀の武器を下げることはないだろう。弱点がバレているのは非常に面倒だと内心口を溢す。それでもダメージを与えられていないと勘違いさせることはできる。アドバンテージとしては有効だろう。

(ああ、もう。面倒ねえ)

吸血鬼本来の戦い方として、このようにコソコソと相手を狙うような真似は本来であればしなくても良い筈だ。吸血鬼特有の怪力に、多彩な能力、そして変幻自在の自らの魔法。正面突破のゴリ押しで勝利はもぎ取れるのだ。だが、実際に何度か打ち合いソレが不可能だと言う事を理解してしまった。

剛力も魔法も当たらなければなんのことはなし。今は能力によって誤魔化しているだけで、それがなければ敗北は必須だろう。

人間相手に屈辱的な戦法を取らなければならぬことに腹が立つが、だらかといって態々殺されに行くわけにもいかない。何か良い手は無いかと模索しながら、木々の隙間から相手の出方を窺う。

レプスが腹の中で罵詈雑言を飛ばす中、エルザもエルザで冷静を装いながらも内心焦りを見せていた。

(このままではミラが……………)

ただでさえ無理をしていたミラジェーンが更に傷を負い、そして吸血鬼が側にいる。生存確率は限りなく0であるが、もしかすればがあ

る。今すぐにもでもミラジエーンの元へと馳せ参じたいが、来た道は既にわからず、そうでなくともレプスの分身体がそれを邪魔する。

これがただのモンスターであればエルザも対処がしやすかっただろう。しかし、知恵が回るといえるのはそれだけで厄介だ。

（このまま防戦一方では埒があかない。何か手は――）

その時、近場の茂みから何か飛び出す。張り詰めた精神は咄嗟の状況にも対応し、襲いかかる影を斬りつける。

「ぎゃうん!!？」

飛び出して来たのは血のように赤い狼。魔法により作り出された魔法生物。分身体であるが故に易々とは使えず、持続も頭数も劣る劣化版の魔法。しかし、膠着状態のこの場では友好的な一手。

振り抜いた体勢では反撃も防御もできない死に体。

「しまつー!!？」

「ぎんねえん!!？」

後悔よりも先に反対方向からレプスの強襲。吸血鬼の剛腕は甲冑に身を包んだエルザを軽々と吹き飛ばし、木々をいくつも倒壊させていく。まるで砲丸のような勢いで飛ばされたエルザはそのうち霧を突き抜け、そして家屋の中でようやく落ち着く。

一撃。たった一撃を受けて鎧は凹んでエルザ自身も満身創痍。内臓と脳が暴れ回り、天と地がぐるぐると回る。血反吐を吐きながら剣を支えになんとか起き上がり、飛ばされている内に切ったであろう額から流れる血を抑えながら辺りを見渡す。

「ここは……あの集落か」

エルザが破った穴から覗く家屋を見て、ここが最初に案内された集落なのだと辺りをつける。しかし、家屋からは住民の気配がまるでない。避難した、とは考え難く、そこから先を考えようにも全身の痛みが思考の邪魔をする。

こんな時にカイトがいれば、と強く思い、頭を振る。

（今はそのような時ではない。とにかく、外に出ないと）

この状態で再び強襲されたらひとたまりもない。せめて見晴らしのいい屋外に出ようと荒い息のまま外に出る。

壁に手をかけて、息も絶え絶えで外に出れば、どこに隠れていたのかゾロゾロと集まりだす住人たち。ここは危険だと警告を出そうとして、その集団に紛れている人物を見て驚愕する。

「ルーシイ!!?」

「むうーっ!!?」

猿轡を噛まされ、必死に抵抗を示すルーシイがそこにいた。その両隣には成人男性が控えており、ルーシイの抵抗をもともせず抑え込んでいる。

「動くでない」

咄嗟にルーシイの救出を計ろうとするが、その言葉とともにルーシイの首筋に刃物が添えられやむを得ず止まる。

声をかけたのはこの村の村長だ。数時間前に見かけたばかりだというのに、その顔からは最初に出会った時のような生気を感じない、死人のような青白いものへと変わっていた。いや、よく見ればそこに集まる住人皆そのように変貌している。皆一様にこちらを恨む様な視線をよこし、今にでも飛びかからんという意気込みが伝わってくる。

「ふむ、良し。このまま拘束し、女王の元へと献上するとしようかの。おい、だれか縄を持ってこい」

「待て!!? お前たちは何者だ!!?なぜあいつの味方をする!!?」

「はて、これは意な事を。我らは屍食鬼。あの方の手足にして下僕。我らが主人の助力をするのは当然じゃろうて」

「屍食鬼……ならば、元は人だったのだろうか?なぜこんな事を?」

「人、じゃと?」

その言葉に、一団の中で平静を装っていた村長に怒りが燃える。

「貴様ら人間と、ワシらを同列に扱う気か!!?ふざけるでない!!?ワシらは皆、貴様らに迫害されてここにおるのじゃ!!?」

口の端から泡を飛ばし、興奮止まない村長は一步エルザへと脚を踏み出す。それが合図だったかのように村長の右腕が根本からぼとりと落ちる。その瞬間に漂う、顔を顰めてしまうほどの腐臭。ナツの鼻が効かなくなるわけである。ここにいる全員、死体なのだ。死体であ

りながら動きリビンググデツドなのだ。

落ちた腕を忌々しげに一蹴すると、村人から怒りの声が続く。

「俺は友人だったやつから借金を背負わされた!!?」

「私は顔の火傷のせいで誰からも相手にされなくなった!!?」

「僕は両親に捨てられた!!?」

続くも続く、不幸な身の上話。声高々に語られる悲劇の数々。絶望と怨嗟の声が延々と木霊して、エルザに浴びせられる。

そうして村長が残った片腕を上げて声を沈めると、侮蔑に満ちた視線をよこす。

「そしてワシは、息子夫婦に口減らしのために置き去りにされた。当てもなく、希望もなく、未来のないワシらに、女王は手を差し伸べたのじゃ。ワシらに救いをくださったのじゃ。ワシらもこの霧の向こうに出ることはできん。じゃが、時がくればワシらを貶め、辱め、迫害した者どもに復讐を下すことのできる救いをのう」

「そうか」

身の上を聞き、エルザは持っていた剣を収納する。抵抗の意思が消えたと感じ、村人の1人が縄を片手にゆつくりとエルザに近づく。そしてその身を縛ろうとした瞬間、エルザの鉄拳が顔に突き刺さる。

「なっ!??」

「お前たちの言い分はわかった。人の身を辞めた理由を知った。あれを信奉する意味を理解した。だが――それがどうした?」

まさかの行動に驚愕に染まる一団をさておき、エルザは天輪の鎧へと換装する。

「確かに絶望的な出来事で、悲劇的でもあった。だが、それは歩みを止める理由にはならない」

かつて奴隷のように虐げられ、明日に希望を見出せない日々を送っていたエルザにとって、彼らの話は同情に値するものだった。

誰も誰もが幸福な世の中など夢物語でしかなく、現実といえば悲劇と不幸の積み重なりだ。けれど、その中には確かに希望があるのだ。

独房にいたロブじいちゃんは魔法の存在を教えてくれた。辛いことも仲間といれば緩和された。

「同情はしよう。憐れだと思おう。だが、だからと言って私はお前たちの為にこの身を捧げることはしない。私は私の仲間のために、この剣をお前たちに向けよう」

エルザの背後に浮かぶ無数の剣が村人全員に向けられ、敵意を露わにする。人質を盾にしようにも、それよりも早く両サイドに控えていた男たちの足元に剣が突き刺さり、強制的に距離を取らされる。その隙にルーシイは走り出しエルザに保護された。

人質も失われ、身動きひとつ取れない状態。数はこちらが上とはいえ、戦闘能力は間違いなくエルザの方が上だ。そも、屍食鬼たちの戦闘能力など素人に毛が生えた程度だ。拳が触れ合うほどの距離であればその膂力も持つてして制圧できるかもしれないが、現状望むべくも無い。

「ルーシイ、無事か？」

「ぶはっ！ありがと、エルザ」

そうこうしている内に人質の拘束も解かれてしまった。勝ち目のない状況に冷や汗を流す村長。その時、突如として聞こえた声に歓喜し、同時に畏怖する。

「あらあ？なんの騒ぎかしらあ？」

危機的状况でありながらも、エルザを追って背後から現れたレプスの姿を見た瞬間、村人全員が平伏の姿勢を取る。

エルザはレプスの姿を確認した瞬間、ルーシイに後ろに下がる様についてけると臨戦態勢を整える。先ほどと違い開けた視界の中であるため向こうの優位性は消えた。だが、だからと言って樂觀視できるわけではない。少なくともルーシイを庇いながらの戦闘は難しいとしての判断だ。ルーシイもそれがわかっているため引き下がり、万が一に備えて相手の様子を影から伺う。

「じよ、女王におかれましては、本日もまた美麗でー」

「世辞はいらないわあ。それでえ？何であなたたちがいるのかしらあ？」

有無を言わせないレプスの圧力。代表して喋る村長は身体中から汗を吐き、カラカラに乾く口内を必死に湿らせながら言葉を紡ぐ。

「は、はっ！私どもは女王のお力になるべく、あの者を捉えて、交渉しようとしていた所存でございます」

「交渉？」

「はっ！その身を女王に捧げよと、そのように！」

「ふうん」

まるで値踏みをするかのように村長を眺め、そして村人全員に視線をよこす。痛くなるような静寂の中、レプスは村長の前に立つ。

「あなた、屍食鬼になってからどのくらいだったかしらあ？」

「わ、私は13年ほどになります！」

「そう」

刹那、ノータイムで振り下ろされた脚が村長の頭を砕く。村人たちは恐怖の悲鳴を口の端から零し、そして突然の行動にエルザは驚愕する。

「はあ………これだから嫌なのよお、元人間はあ。自分たちを選ばれた存在だと勘違いして勝手なことをしてかすんだからあ」

続いてその側にいた女の身体を爪で薙いで切り裂く。村人たちは小声で許しを乞いながらも平伏の姿勢から動こうとしない。わかっているのだ。動いた瞬間に自分たちがあなることを。

「やめろオ!!？」

あまりの行動にエルザが剣を振り下ろして止めに入る。しかし、怒り故に手に握られているのは銀ではなく普通の鉄の剣だという事を忘れていた。レプスにそんなものが効く筈もなく、片手で止められる。

「なあに？これはこちら側の問題よお？横槍はやめてもらえるかしらあ？」

「だとしても、目の前で命が奪われていくのを黙って見ていられるか！」

「はあ………本当、人間ってわからないわあ」

腕を振り払い、魔法を飛ばすが効果なし。振り払う瞬間に自ら後退して迎撃の姿勢を整えていたのだ。そして背後に控えていた銀製の剣をいくつか飛ばすが、その軌道は単調にしか操れない。しかし、レ

プスはそれをかわす事なく、近くにいた男を片手で持ち上げて肉の壁にする。

「貴様っ!!? 仲間ではないのか!?!?」

「仲間あ? 人間ってその言葉好きよねえ。反吐が出そうよお」

鬱憤を晴すかのように壁にした男をエルザに投げつける。既に物言わぬ死体ではあるが、だからと言って無体にすることはできない。しかし、とてもでは無いが受け止められるような速度ではない。やむを得ずそれをしゃがんでかわせば、後方から聞こえる人体が潰れる音と共に、男の影に隠れていたレプスの爪と鏢迫り合う。

「ぐっ!!?」

エルザは両手で歯を食いしばっているというのに、レプスは片手。種族としての差が如実に現れていた。

「こいつらは私の手足。私の眷属。私の奴隷。同族扱いなんてのは侮辱よお」

「それでも! 貴様に仕えていたのではないのか!?!?」

「あなた、自分の手足に感謝を捧げたりするのかしらあ?」

自身に仕えるのは当然だと、レプスは言う。それが幼き頃、楽園の塔建設時に自分たちを奴隷のように扱っていた神官たちと重なって、エルザはさらに両腕に力を込める。少しずつであるが押され出したことにレプスは少し驚きつつも、反対側の腕でエルザを振り払う。直撃を受けたエルザは再度家屋に突き刺さるが、しかしダメージを感じさせない動きで再度レプスに肉薄する。

「なぜこの様な事を?!?」

「当然よお。吸血鬼にとって戦いとは己の矜持をかけたものよお。それを人質なんでもので汚そうとしたのだものお。殺されても文句はいえないわあ」

それが吸血鬼にとつての戦いなのだ。姑息な手段で手に入れた勝利など願ひ下げ。それを受け入れて仕舞えば自身の格が落ちる。それは吸血鬼にとって死よりも恐ろしく、唾棄されるもの。

だからこそ、エルザの背後に隠れるルーシーを狙うことはしない。それをしてしまえば吸血鬼として終わってしまうからだ。

「ああ、その点だけはあなたたちを評価してあげるう。吸血鬼に真つ向勝負を挑む、お馬鹿さんとしてねえ!!?」

空中に展開された魔法陣。その中から拳大の血の塊がいくつも発射されエルザを襲う。点ではなく面による制圧射撃。その中でもエルザは自身に向かつてくるものだけを瞬時に選択し、切り捨てる。

レプスもそれで仕留められるとは思っていない。だからこそ、動きが制限される今だからこそ使える魔法を発動する。手に握られるのは真紅の槍。禍々しい装飾で施されたそれを掲げ、刃先をエルザに向ける。

「さあ、ファイナーレよお!!?」

振りかぶり、投擲しようとした瞬間、横合いから迫る炎。瞬時にそれを飛んでかわせば発生源が森からだということがわかった。そして隠れる気のない下手人は森から飛び出すと、敵意に満ちた視線をレプスに向ける。

「よオやく見つけたぞ!!?」

「ナツ!!?」

現れたのはナツだった。肩には気絶したグレイを担ぎ、足元も視界も悪い道中だったというのに、疲労の様子は見られない。まさかの登場にルーシイが歓喜の声をあげ、エルザの表情も明るくなる。そして意識を削いだことにより魔法が止み、エルザは飛翔の鎧に換装すると家屋の屋根に登って飛び上がる。

「悪手よお!!?」

魔法が止んだとはいえ、エルザの存在を忘れたわけではない。飛行能力のないエルザが空中に飛んだとしても格好の的。まずは厄介なこいつからと魔法を放とうとするが、ナツの炎がそれを邪魔する。

「火竜の咆哮!!?」

「チツ!!?」

苦手な炎に触れたく無いと更に上昇してそれを交わせば、炎から飛び出す銀の短剣。迷うことなくそれはレプスの肩に突き刺さり、エルザたちが初めて有効打を与えた瞬間だった。

「ルーシイ！無事だったんだね！」

「ハッピーー！」

「ルーシィ、グレイと一緒に下がってろ」

遅れた登場したハッピーがルーシィとの再会を喜んでいるが、前にいる2人は油断せず前を向く。あまりの険呑とした雰囲気ルーシィはナツに言われるがままグレイを受け取り、引きずりながら後ろに下がる。

2人の視線の先にいるレプスは肩に突き刺さった短剣を引き抜くと、傷口を抑える。再生が出来ずに煙を上げる肩を一瞥して、エルザとナツを見据える。そこにあるのは敵意かと思いきや、全くの無。感情というものを一切感じさせない無表情。

それは2人を獲物ではなく敵として認めた証。最早殲滅するべきものだど認識した証左。奇しくも一撃入れたことでレプスも本気を出したのだ。それを肌で感じた2人は一層警戒を強め、臨戦態勢を整える。

「もう、いいわ」

指を鳴らした瞬間、平伏の姿勢のまま苦しみ出す村人たち。突然のことで驚愕していれば村人たちの全身から溢れ出す血液。そして村の中央に置かれた水瓶から立ち上る赤い液体。それらは意思を持つかの様にレプスの上空に展開された魔法陣に吸い込まれ、そして空を覆う様な巨大な門が形成される。

「代償魔法契約^{チギリノモン}ノ門発動。代償、血液。誘われるは破壊の化身」

真紅で形成された、何の装飾もない無骨な門。それが開かれた瞬間に発せられるプレツシャーに、その場にいた意識ある者の全身の毛が逆立つ。

あまりの圧にルーシィは呆然とへたり込み、ハッピーは藁にも縋る思いでルーシィの服の裾を掴む。エルザの剣を持つ手が震え、ナツは震えそうな歯茎をしつかりと噛み締める。それを嘲笑うかのように、門の向こうからソレは姿を表す。

「さあ、全てを破壊なさい。大血^{アトラス}ノ巨人」

戦血

「混沌カオスノラッー」
「戦血ブラッー」

「爪クロー!!？」

互いの魔法が空中を飛び、ちょうど二人の中間の距離でぶつかり合う。相殺による爆煙が立ち昇るが、次の瞬間には紅い弾丸と黒い杭がそれを突き破り互いを襲う。互いの腕が飛び、脇腹を抉り、頭蓋を吹き飛ばすが瞬時に再生。戦闘は続行される。

吸血鬼同士の戦いは言ってしまうえば互いの命を喰らい合う泥試合だ。どちらかが再生の限界を迎えるか、その魂を食われるかでしか決着がつかない醜い争い。本来であれば五分五分の戦いが行われるのだが、今回はレプスの方が有利である。

「ふふふー」

手のひらから生み出した拳大の円盤状の血液を飛ばし、カイトの右腕に傷を入れる。即座にその傷口を抉り再生させるカイトの表情に普段の飄々とした笑みはない。

レプスの操る魔法は毒に等しい。傷口から侵入を許してしまえばその部位を操られることはおろか、最悪全身を乗っ取られる。故にカイトは少しの傷も許してはならないし、その度に再生しなければならぬ。

(ホント、純血種ってのは厄介だねえ)

力も、魔力も、再生力も、何もかもがレプスに劣るカイト。半端者と言われるだけはあると心の中で自嘲して、接近してくるレプスから距離を取るために上空から森の中へと逃げる。得意の影魔法も空中では制限されるための措置だ。

案の定追いかけてきたレプスに影の拳をぶつけるが効果なし。わずわらしいとばかりに一掃された。

(ほーんと、厄介だね)

苦戦するカイトだが、意外なことに対するレプスも余裕はない。

エルザに仕向けた分身体に血液と魔力の半分を用いたのもあるが、それ以上に魔力が減っているのだ。原因はもちろんカイト。その魂が肉体に戻る際についてとばかりに魔力も持ち逃げされたのだ。

(あんまり悠長はしてられないわねえ)

カイトの魔法は微々たるダメージしか受けませんが、だからといって食らい続けていいわけではない。周囲に血を撒き散らし、それを吸収した木の根を操りカイトの行手を阻む。なんとかそれを躲すが、躲した先にも獲物を待ち受ける数多の木の根。

「かかったわねえ!!?」

カイトの反応速度よりも早く、まるで獲物を捉える食虫植物のように繭状になった木の根がカイトを覆い、そして圧縮する。

鳴り響く肉と骨が潰れる音。木々の隙間から溢れる血液。殺った、と木々を更に圧縮させ、再生さえ許さない。そしてトドメをさそうと繭を開いた瞬間、そこに何もいないことを確認する。血も肉も骨もこびりついているというのに、そこにカイトの姿はない。

どこに行った、と周囲を見渡そうとした瞬間、少し離れた木の影からカイトが姿を表す。潰れた右腕の再生も後回しに、口内に蓄えられた魔力。

「混沌ノ息吹!!?」

吐き出された白と黒の光の奔流。それは直線上のモノを悉く破壊し、煙が辺りに舞う。滅竜魔導士の真似事ではない魔法であるが、威力は充分。これで倒れてくれたら御の字だと、焼けた口内と右腕を再生させながら自嘲する。

「ふふふふ!!?どうしたの、半端者!!?この程度なのお!!?」

煙を羽で吹き飛ばし、五体満足な姿を表すレプス。

影の中を移動して、右腕までもを潰して不意をついたというのに、まさかの結果にげんなりとするカイト。しかし、それを表に出さず、弱味は見せないとばかりに不敵に笑う。

「カツカツ!!? うるさいよ、日陰者!!?」

影から大小2本の刀を作り出す。魔法の名は偽・仏斬大刃太刀。本来であれば巨大な鋏のそれを振り回しやすいように縮小させただけではあるが、効果は靦面。距離を詰めたレプスの胴体を両断することに成功。しかし、レプスも負けじとばかりに残った右腕がカイトの頭を貫通する。

互いに致命傷であるが、すぐさま再生。遠くから聞こえる獣のような雄叫びを合図に、再びノーガードの攻撃が互いを傷つける。

化け物同士の殺し合いはまだ始まったばかり。



其は災厄の獣

其は破壊の権化

其は地を支える者

其の名はアトラス

咆哮はまるで世界を呪い

巨腕はまるで万物を破壊し

巨脚はまるで万象を踏み潰す

赤い肌を持ち、人というよりは牛寄りの顔つきの巨人は現世の全てが敵だとばかりに鋭い目つきで辺りを見渡し、鬣のような頭髪と側頭部から生える巨大なツノを震わせ召喚者の指示を待つ。

全長は30m程の巨大。見上げんばかりのその大きさに、フェアリーテイルの面々は言葉を忘れた。巨大なモンスターはそれなりに

見てきた筈だが、コレはそのどれをも凌駕している。大きさも、危険度も。

「やりなさい、アトラス。眼前の悉くを破壊しなさい」

レプスの指示に叫ぶことで承諾を示すと、その巨大な拳が高く振り上げられる。

「ツ!!?:よけるオ!!?:」

そう叫ぶや否や、エルザは拳が直撃するであろう場所へと前進し、金剛の鎧へと姿を変える。ナツはともかく、グレイを引きずるルーシイが逃げる時間を稼ぐためだ。

「ぐっ、おおおおお!!?:」

拳が直撃した刹那、全身の骨が砕かれんばかりの衝撃がエルザの身体を駆け巡り、そして大地がそこを中心にひび割れ、陥没する。

予想以上の重さと衝撃に一瞬崩れそうになるが、少しでも時間を稼ぐために声を出して奮起する。

「エルザ!!?:ぐえっ!!?:」

「ナツ!!?:」

エルザの助けに入ろうと足を出したナツだが、まるで川の魚を鳥が捕らえるかの如く飛来したレプスがそのマフラー掴んで上昇する。本命はそちらかと自らの行動に苦悶を漏らすエルザだが、それは違う。レプスからすればどちらも本命。自身とは相性の悪いエルザをアトラスに任せ、残ったナツたちを狩る。

空を高く舞うレプスがトドメとばかりにナツの首筋に牙を突き立てようと口を開ける。

「なるっ!!?:」

そうはさせないと拳に炎を纏うナツが殴りかかるが、それよりも早くレプスは手を離す。当然、空を飛ぶ術を持たないナツは重力に従い落ちていく。死ぬには絶好の高さ。ナツの耳元で風が次々に上へと流れていき、まるで死へと誘う曲のようにも聞こえる。しかし、ナツに焦りはない。最も信頼している相棒の名を、声高々に叫ぶ。

「ハッピー!!?:」

「あいさー!!?:」

下から飛んできたハッピーがナツの背中を掴むと、そのままレプスへと急接近。ふるった拳がレプスを捉え、大きく突き放す。長い付き合いだからこそできるナツとハッピーの連携。それが疎ましく思え、殴られた腹に手をかざしながら血の射撃をお見舞いする。

空中で格闘するナツたちを横目で確認し、あちらは大丈夫だとエルザは確信する。ナツたちが負けるとは思っていない。確かな信頼を胸に抱き、こちらを押し潰さんとする拳を支える。浮遊している一対の盾がミシリと嫌な音を立てるが、移動はできない。このままかわせば自身はともかく、まだ逃げきれないルーシイが危険だからだ。流石に成人男性一人を抱えて早く移動することはできず、また悪くなった足場に四苦八苦しながら後退するルーシイ。

更に音を立てて大きくヒビが入るエルザの盾。これ以上は、と諦めが頭の隅によぎった瞬間、ルーシイの声が響く。

「エルザ、こっちは大丈夫!!?」

「だがっ!!?」

ルーシイの位置は未だ影響の及ぶ範囲内。エルザが支えるのをやめた瞬間、確実に被害を被るだろう。けれど、だからといってルーシイは目の前でピンチに陥るエルザを見ていらなかった。

「いいから、早く!!?」

「くっ!!?.....気を付けろ!!?」

それだけ言うとすぐさま飛翔の鎧に換装。迫り来る拳を持ち前のスピードでかわし、その腕を駆け上る。

「ごめん!!?開け、時計座の扉!!?ホログラム!!?」

拳が大地に接触する瞬間、召喚されたのは柱時計に手足が生えたような星霊ホログラム。本来であるなら世界中の時間を教えてくれる星霊だが、その身体は見た目よりも強固であり、術者を守ることも可能である。それを察してか、召喚されたホログラムはすぐさまルーシイとグレイを柱部分に収納し、迫り来る衝撃波から二人を守る。

まるで大地が悲鳴をあげるかのように打ち震え、そして周囲の家屋や木々が耐えきれずに宙を舞う。被害はそれだけにおさまらず、続く

ように舞い上がった数トン単位の土砂が重力に従い降り注ぐ。文字通りの土砂降り。たった一撃で周囲を更地に変えてしまうその力に、腕の上に逃れたエルザは戦慄する。

「ルーシイ!!？」

思わず叫び安否を確認するが、やはり返事は返ってこない。判断を誤ったことに後悔し、奥歯を噛み締めるエルザの耳に、聞きなれない声が聞こえる。

『あたしなら大丈夫!』と申ししております」

土砂の中から這い出たのはホロロギウム。無傷とはいかず、自慢の身体は至る所に傷がついたり凹んだりしているが、それでも柱部分のルーシイたちは無傷である。

ルーシイが柱部分から出ると同時にホロロギウムの姿は消え、感謝を込めてルーシイはその鍵を抱く。

その姿を見てホツとするのも束の間、突如エルザの頭上に影が差す。腕の上に乗るエルザを潰そうと振り上げたアトラスの掌だ。巨大故にその動きは鈍いが、その巨大さ故に躲すのも一苦労。腕から肩まで駆け上がり事なきを得るが、叩くと同時に巻き上がる爆風に煽られる。

剣を肩に突き刺してそれに耐え、一先ず注意がこちらに向いていることに安堵。そしてまずは生物の弱点である顔から切り崩そうと駆け上がる。

「早く、逃げないと。んゝっ!!？」

ここにはエルザの迷惑になると移動を再開するが、やはり脱力した男性一人と一緒となるとその労力はかなりのもの。必死にグレイの腕を肩に回して引きずりながら移動するが、やはり遅い。

それでも少しでも早く、と霧の向こうに視線を向けた時、不意に声がかけられる。

「ねえ、お姉さん。お手伝いしましょうか？」

「え？」

いつの間そこにいたのだろう。ルーシイの背後から現れた、村まで案内してくれた少女。ルーシイとは反対側からグレイの肩を担ぎ、

道化

エルザ・スカーレットという人物から見て、カイトという人物を一言で表すのなら「胡散臭い」というのがピッタリであろう。

初めはギルドに加入してから少しして。まだエルザがギルドに慣れず、周りと壁を作って依頼のないときは隅のテーブルでぼつんと一人で過ごしていた時のことである。

「やあ、君が噂の新人さんだね♪」

テーブルの木目を数えんばかりに俯くエルザの眼前にひよつこりと、無理やり貼り付けたような笑みを添えて現れたのが初の接触だ。

思わず背中から転び、背中をさするエルザの前に手を差し出して、こちらの困惑も意を返さずに自己紹介を連ねるカイトに怯えたのは、後にも先にもこの時だけだ。

「俺の名前はカイト。君よりも少しばかり先に加入した、まあ先輩だね♪」

「おい、何やってんだよ!!?」

「ああ。こっちはグレイ。君よりも歳は下だけど、実力は………どうだろ?もしかすれば君の方が上かもしれないねえ♪」

「そこはオレの方が上って言っとけよ!!?」

「あいたっ!!? やれやれ、グレイ。君は少しは先輩を敬ってくれてもいいんじゃないかな?」

「知るか!!? それより、ビビらせてどうすんだよ!!?」

「なあに。ファーストコンタクト、というのは大事だろう?これで彼女とは忘れられない思い出ができたさ♪」

「トラウマの間違いだろうか!!?」

そう言ってカイトをどつくグレイに助けられていたのは、今はもう懐かしい。それからと言うもの、カイトは事あるごとにエルザに絡んだり、後から入って来たナツやミラジエーン達にもファーストコンタクトという名の最悪な印象を植え付けていたのだ。

人となりを知っている今でこそ信頼はしているが、やはりあの第一印象は忘れられず、そして歳を重ねるごとに飄々とした笑みを深めることから信用はしていなかった。

それはカイトも理解しているだろうに、落ち込んだ時や疲れた時には、いつもいつも顔を覗いてくるのだ。あの胡散臭いが、どこか安心する笑みを添えて。

「やあ、エルザ。元気してる?」

「まったく……お前と言うやつは——」

吸血鬼だろうと関係なく、やはり彼はギルドの仲間であるカイトなのだ、改めて思い知らされる。

相も変わらずこちらに内心を悟らせないように笑みを浮かべて、のしかかる巨大な脚を背中で受ける、腹に腕ひとつは易々と入るであろう穴を開けたカイトの姿がそこにあった。



無くなった右腕と半分になった頭部を回復させながら、レプスはその光景に歯噛みをする。

空中で戦っていた筈の2人だが、アトラスの姿と闘うエルザを見た瞬間、カイトは隙を見せた。そこを突いて腹に風穴を開けたのは良いものの、自傷を省みず脇腹をそのまま抉り、時間稼ぎのつもりなのかレプスに少しの攻撃を与えるとカイトは止めを刺さんとされているエルザの元へと一目散に向かったのだ。

吸血鬼の決闘を受けておいて他所に注意を向けられるなど屈辱でしかなく、何よりも人間を優先したことが何よりもレプスの心を苛立たせていた。

「そんなにニンゲンが好きなら、仲良く潰れてなさいな!!? アトラスツ!!?」

命令を受けたアトラスは脚にかける力をより一層込めて、2人まとめて踏み潰さんとする。けれど、死に体の吸血鬼のどこにそんな力があるというのか、一向に潰れる様子はない。

ならばと下へと急降下し、カイトを攻撃しようと魔法を放つ。しかし、遠距離の魔法は全て影や障壁に阻まれ効果を得ない。舌打ちひとつこぼして接近戦へと持ち込む。一直線に進む進路を妨害されるが、そんな悪あがきなど意味をなささない。

「さあ、ファイナーレよお!!?」

爪を振り上げ、牙を剥き出しにして吠えるレプス。そしてその爪が射程範囲に届いた瞬間、全身を襲う寒気。吸血鬼たるレプスは知る由もないが、それは恐怖。死にながら生きること麻痺した本能による最後の警鐘。

羽と身体を無理やり駆使してブレーキをかけるが、遅かった。

驚くほど軽く、まるで張り詰めた糸を切るかのような音が、レプスの耳に聞こえた。次いで感じる左腕と顔の熱。今まで感じてきたものとは違う、身が焦げるような痛み。

「浅かったか」

いつの間に換装したのか、さらしと袴を纏うエルザが持つ銀剣と、ぼとりと目の前に落ちた左腕を見て斬られたのだと理解する。遅れてやってくる、身を滅ぼさんばかりの灼熱の痛みがレプスを襲った。

「アアアアアアアアア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア、ア!!?」

追撃を振るうエルザだが、痛みに狂乱しながらもそれを躲したレプスは空へと舞い上がり、一向に再生する兆しの見えない顔の傷を抑えながら冷静さを取り戻そうとする。

「くそつ、なんなのよお!!？」

満身創痍だったはずだ。アトラスの直撃を受けて無事で済むはずがない。だからこそ邪魔はないはずだ考えていた。2人纏めて潰せる筈だと思っていた。

だというのに、件のエルザは肩で息をしているとはいえ、動けないほどの疲労は溜まっておらず、傷もまた動きに支障が出るようなものはない。

初め考えたのはエルザ自身による回復魔法。けれど、エルザの魔法は鎧や剣を換装させるもの。別の魔法を使ったとは考え難い。

次に自己治癒を促す鎧、もしくは剣を身につけた。だが、それにしでは回復が継続する様子はない。

ならばカイトが回復させたのか？しかし、防衛に手一杯だったカイトにそちらに回す魔力が残っているとは考えられない。

ではなぜ？と考えたところで、アトラスの足からチラリと覗いたカイトが目に入る。その視線に気がついたのかこちらに笑みを見せ、舌を舐めながらニヤリと笑う。

「ど、こ、ま、で、もお、苛立たせてくれるわねえ!!？」

エルザが動けた理由はカイトが回復させたのだと確信する。では、その魔力はどこから来たのか？それは吸血による回復。吸った血を魔力へと変換させたのだ。

「偽・仏斬大鋏!!？」

レプスの左腕から流れる血が右手に集まるのを確認すると、カイトは上に乗っかるアトラスの脚を脛から切り落とす。分厚い肉に守られていたはずの脚はまるで豆腐の様に切り裂かれ、バランスを崩したアトラスがその巨大を沈める。巻き上がる砂塵で視界が塞がれるが、そのくらいレプスには関係ない。右手に完成した紅い槍を投擲しようとして構えるが、それよりも前に飛んでくるアトラスの脚。鬱陶しいとばかりにそれを一振りで彼方に追いやれば、自身の上に落ちる影。

「デーモン・ハンド偽・魔王ノ御手」

ぱちんと、まるで蚊を叩くかのようにレプスをはたき落とし、カイトはそれを追う。去り際にエルザに目配せすると、その意を汲んだように頷き返す。エルザが銀剣の代わりに手にしているのは黒い二振の刀。カイトが渡した偽・ぶつぎりだいぼたち仏斬大刃太刀。それを構えてエルザはカイトとは反対方向、大勢を立て直しつつあるアトラスに向けて走り出す。



衝突

衝突

衝突に次ぐ衝突

炎と鮮血が宙を舞い続ける

エルザたちから離れた場所にいるナツとレプスの分身体による空中戦は衝突の連続であった。

近接戦では分が悪いと判断した分身体は霧の中へと逃げ込み、姿が見えない中で魔法を放っていた。掠りでもすれば勝負がつく筈の一戦。だというのに、ナツは迫り来る魔法の数々を自らの炎を纏った拳で防ぎ切っていた。

それも全てというわけではなく、周囲を押しつぶす様な魔法や破壊に難しい魔法は背中のハッピーが理解して的確に躲しているのだ。まるでナツにそのまま羽が生えているかの様な違和感のなさ。吸血鬼が苦手とする連携を駆使した戦いに分身体は困惑していた。

「見つけたアア!!？」

そして、何より厄介なのは姿が見えない筈の分身体を的確に発見してくることだ。鼻が効いていないはずのナツではあるが、積み上げてきた戦闘による勘を十分に働かせているのだ。飛んできたナツの拳を降下して躲し、森の中を経由してまた姿を隠す。

種族的な差で言うのなら、明らかに吸血鬼である分身体の方に軍配

が上がるだろう。その差を埋めているのは経験の差。今まで自身に有利な森に閉じこもり、入って来た人間を襲う吸血鬼と、数々の依頼をこなし、強敵を倒して来たナツ。

強敵を倒すためのプロセスを組み上げ、それを行使する実行力。そして予想外の事態が起きても対処できる判断力。それが2人の差を埋めていた。

「ツ!!? 本当は、使いたくないんだけどお!!?」

このままではまずいと判断した分身体は自らを構成する血液を大地へと流し、周囲の樹木へと吸収させる。そしてそのまま樹木全体の水分を支配。根を操り近場の樹木へと突き刺してそれも支配。そして限界まで支配した血液を一気に手元を集める。当然、水分を抜かれた樹木は全て干上がり、そして砂の様に散っていく。

「なんだ!?!」

「ナツ、あれ!!?」

突如として周囲が砂漠化する様子に追跡に来たナツが驚愕して、背中のハツピーが警鐘を鳴らすがもう遅い。

ブラッディ・アフターアクション
「戦血 吸収!!?」

手のひらサイズに圧縮された水分を地面に叩きつけて一気に解放。まるで間欠泉のように噴き上がる真っ赤な水はその質量を余すことなく周囲に叩きつけ、そして内部に秘されてある血の針が瀑布を免れた木々にいくつもの風穴を開ける。

威力もさることながら、少なくとも血液を使用するこの魔法。血液で構成された分身体からすれば諸刃の剣。しかし、目の前にいるのは獲物ではなく敵と定めたナツだ。この魔法を使用するに十分値する。

天高く打ち上げられた激流が収まり、隠せない疲労をあらわにする分身体。そして打ち上げられた水が細かい粒子となり紅い霧として周囲に漂う中、拳に炎を纏うナツが突撃をかます姿を見て舌打ちを溢す。

「オオオオオ!!? 火竜の鉄拳!!?」

確かに分身体の技を食らったのか、その身体は傷つき少くない血が流れている。背中に張り付いていたはずのハツピーはいない。寸

前のところでナツが庇つたのだ。ハッピーは無傷ではあるが、さすがに魔力を使い果たし、草陰でダウンしている。

飛行手段を無くし、体力も残り少ないと言うのに、そんなことはお構いなしに繰り出した攻撃は疲労故に躲すことの出来なかつた分身体の頬を捉えた。

「ツ!!? イツタイわねえ!!?」

爪先に血を纏い、お返しとばかりに切りつけるが結果は防御に回した腕を傷つける程度。しかし、そこそが分身体の狙い。確実に相手の傷に自信の血を混ぜることはできた。これで優位性はこちらのものだとほくそ笑んだところでナツの炎を纏う脚が分身体の腹に突き刺さる。

「火竜の鉤爪!!?」

「ぐっ!!?」

ダメージに後退しながらも、分身体はナツから視線を外さない。さあ、ここから反撃だとナツの腕を操ろうとして、その腕が操れないことに気がつく。

驚愕する間も無く、両手を組んで炎を宿すナツが魔法を放つ。

「火竜の煌炎!!?」
かりゆうのこうえん

全身を痛ぶる炎。至近距離で攻撃を浴びた分身体は空中に放り投げられながら、体勢を立て直しそのまま滞空する。

何故か自身の攻撃が効かず、そして確実に大ダメージを与えてくるナツ。相性が悪い、どころではない。こんなもの最早天敵である。

「なんなのよ、あなたはあ!!?!!?」

「決まってるだろ!!? オレたちはフェアリーテイルだ!!?」

跳躍し、拳を振るうナツ。しかし、その程度であれば分身体は躲せる。

(フェアリーテイル……あの半端者が所属していたギルド)

くだらない、と腹の中で一蹴。半端者とはいえ誇りある吸血鬼が家畜の真似事など反吐が出る思いだ。

「あなたも不憫ねえ。あの吸血鬼のなり損ないに振り回されてこんなトコにまで脚を運ぶだなんてえ。笑っちゃうくらいに哀れだわあ」

「うるせえ!!?」

明確なカイトへの侮辱に、ナツは全身から炎を激らせ怒りを露わにする。

「あいつが吸血鬼だろーが関係ねエ!!? あいつはカイトだ、フェアリーテイルの仲間だ!!?」

ナツは知っている。カイトが人との距離を置いていることを。人との距離を詰めてくる癖にして自ら距離を取っていることを。飄々とした笑みの下で、誰よりも臆病なカイト。その上で誰よりも人の事が好きなカイトを、ナツは嫌いではなかった。

だからこそ許せないのだ。その苦惱も知らず、ただただ表面上の出来事だけ見てそれを嘲笑う分身体が存在が。

「フェアリーテイルは仲間を見捨てねエ!!? 人じやなろうと、心が通じ合えば仲間なんだよ!!?」

「くっくだらなあい!!?」

自身を構成する血液のほとんどを使って作り出したのは赤い投擲槍。それを大きく振りかぶり、狙いをナツへと定める。

「仲間仲間仲間……あなた達がそう思ってるだけでしよう!!?」

「だとしても、それで十分なんだよ!!?」

「話にならないわあ!!?」

投擲槍を握る手に力を込め、体勢を整える。放つのは文字通り全身全霊をかけた一撃。そしてナツもそれを察し、魔力を解放する。

「全魔力解放!!? 滅竜魔法奥義、不知火型しらぬいのかた!!?」

「此れなるは不滅にして必滅の一撃!!?」

分身体とはいえ吸血鬼。その身に宿る膂力は人外のそれ。放たれた槍のスピードは音速を超え、回避不可、威力絶大を併せ持つ必殺の技。

「戦血魔槍!!?」
「フォルカス」

迎え撃つナツは溢れる魔力を足裏から噴出。スピードは及ばずとも破壊を司る炎を見に纏い、一直線に飛び立つ姿はさながら竜の如く。

「紅蓮鳳凰劍!!？」
ぐれんほうおうけん

互いの技が空中でぶつかり、嵐のような暴風が木々を揺らす。拮抗する両者の魔法。負けてたまるかと互いに魔力を振り絞る。

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!？」

「くっ、アアアアアアアアアア!!？」

永遠に続けられるかと思われる格好。しかし、それは唐突に終わりを告げた。

「あつ……………」

自身の魔法だから、それとも単なる偶然なのか。それに気がついたのは分身体だった。己が魔法に小さなヒビが入り、それが加速的に広がる光景が、嫌にはつきりと分身体の目に映る。

そこからはあつという間に魔法は甲高い音を立てて砕け、一直線に飛んでくるナツ。

「ドラ、ゴン……………」

そんな筈はないというのに、分身体の目に映るのは赤い鱗の竜の姿。こちらを飲み込まんとはかりに口を開け、威風堂々とした姿で飛ぶ火竜。その恐ろしさのあまり身が竦み、火竜は分身体を捉えた。

後に残るは身体を貫かれ身体を維持することもできなくなった分身体。そして全気力を使い果たして力なく落下するナツ。

「ナツーー!!?」

頭から落下するナツを受け止めたのはルーシイだった。横合いから抱きつくように受け止めたルーシイはそのままゴロゴロと転がり、そしてようやく止まったところで下に敷いたナツの無事を確認する。

「もう、無茶ばかりするんだから」

「でも、助けてくれただろ?」

そう言って笑うナツに釣られてルーシイも笑う。

「……………お邪魔だったかしら?」

「あい」

少し離れた場所でそんな事をぼやくグレイを運ぶ少女と回収されたハッピーは2人の間に割って入ることを躊躇うのであった。

吸血鬼

轟々と、燃え盛る火があつた。

誰かを暖める優しいものではなく、全てを燃やし尽くさんとする貪欲な炎。

己が内で音を立てて燃え盛る炎。

人を呪い、世を呪い、呪詛を吐き続ける炎。

四肢を巡り、我が身を復讐へと駆り立てる怨嗟の炎があつた。

炎は我が身を駆り、復讐を成す。

それが正しいのだと、正当なのだと呼び、^薪贅を飲んで更にその身を燃やす。

燃やして燃やして、稀に種火を与え、さらに炎は燃え上がる。

そうして、ふと対岸に自身より小さな火があることに気がつく。

本質は自身と同じであるというのに、弱々しく、ちろちろと燃えるそれに集う薪達。しかし、火は薪に燃え移ることなく、細々とか細く燃えてばかり。

炎は吠える。なぜそれらを喰わないのかと。火としての矜持はないのかと。

けれど、火は応えずにただただそこに在るばかり。

炎々と燃ゆる炎。

消えぬ復讐、尽きぬ怨嗟、底しれない憤怒。

それらを飲み込んで、炎は更に燃えてゆく。



「ッ……………」

カイトに吹き飛ばされたレプスは頭を振りかぶり、意識をはつきりとさせる。今しがた何か頭の中に浮かんだ気がしたが、もはやそれも思い出せない。それよりもここはどこだと辺りを見回すが、鬱蒼とした樹々で阻まれて遠くまで見渡せない。兎にも角にも動かなければと左手を地面につけようとして、そこに在るはずのないものが無いことに気がつく。

「くっ……………」

銀で焼かれた腕は再生する予兆さえ見えず、ただ煙をあげてばかり。人間に傷つけられ、無様な姿を晒すことに憤りを覚え苛立ちのまま翼を広げて浮かび上がり、人間に然るべき報いをと飛び上ろうとした瞬間、木々から飛び出した影がレプスを掴み、地面に叩きつける。

「行かせないよ」

離れた位置にある影が盛り上がると、そこからカイトが現れる。吸血鬼としての矜持も誇りもない、血を裏切る半端者。

「裏切り者があ!!?」

烈火の如く燃ゆる怒りのまま飛びかかろうとするが、行手を阻むように頭上の木陰から幾つもの影の武器がレプスを地面に縫い付けた。

ダメージは微小。だが、物理的に縫い付けられたことにより一瞬の硬直が生まれる。その隙を逃さず、四方八方から躍り出る影の魔法の数々。拳や剣、幾多もの刃物でさながら袋叩きのようにされるレプスを見ながら、カイトは沈んだ声を出す。

「君には申し訳ないと、本当に思うよ。吸血鬼として間違った事をしているとも」

本音を言えば、生き残りの同族がいることがわかった瞬間、歓喜を覚えた。自分は1人ではないのだと、安堵した。それを否定するかの如く攻撃を加える事に後ろめたさも、かつて仕えた相手を殺そうとしている事に罪悪感もある。

いつそ、この身が何の感情もない虚であればとこの短い期間に何度思ったことか。

けれど、ここで手を抜けば待っているのはこの場にある悉くを血の海に沈める悲劇。バッドエンドそれがわかつているからこそ、カイトは攻撃の手を休めない。

一撃目が入った瞬間から魔法を各所に展開し、この場はすでにカイトの掌の上。ひとつひとつのダメージは少なくとも、数さえ積みめばそれは無視できないものになる。

「ぐっ………がああああ!!?」

それでも、予想外というものは起きてしまう。攻撃の雨に打たれながらレプスは立ち上がり、戦血を以って周囲の木々ごと魔法を破壊す

る。幸いカイトのところまで届きはしなかったが、攻撃の手を止めてしまった。

しかし、対するレプスも限界は近い。最早再生に回せる魔力さえ少なく、その身は自身の血に濡れていた。けれど、鋭い眼光はそのままに、怨敵で在るかの如くカイトを睨む。

「人間人間人間人間ツ!!? なぜそんなにも人間を庇うの!!? 我らを滅ぼした所業を!!? 我らが受けた苦痛を!!? その全てを忘れたというの!!?!!?」

「忘れちゃいないさ。人間は愚かで、醜いことだって知ってる」

「だったらー!ー!!?」

「そしてそれと同じくらい、素敵なところも、俺は知ってるよ」

フェアリーテイルに加入して様々な依頼をこなしてきたカイト。確かに自身の欲のままに動き、他者を貶め辱め、己というものを主張する生き物は他にはいないだろう。その様な人間を見るたびに心がささくれ立つのを覚えている。

だが、それが人の全てではない。他者を尊重し、地を這う者に手を差し伸べ、友と肩を並べて笑い合う、そんな人間もいたのだ。

「俺は人間が好きだよ。誰かのために怒ってくれる人間が、誰かのために泣いてくれる人間が、誰かのために戦う人間が、誰かのために寄り添ってくれる人間が」

脳裏に浮かぶのはフェアリーテイルの面々。ギルドのために怒るナツ、敵にさえ発破をかけるグレイ、厳しくも優しいエルザ、人一倍仲間思いなルーシィ、魚が大好きなハッピー。そしてー!ー

「そして、吸血鬼だと知りながらも手を差し伸べてくれる人間が、俺は大好きなんだよ」

初めはマカロフ、そしてミラジエーンが思い浮かび、胸の奥が熱くなっていくのを実感する。吸血鬼だろうが関係ないと言ってくれたマカロフ。ああ、確かにその通りだったのだと独りごちる。吸血鬼であろうと関係なく手を差し伸べてくれる人間は確かにいるのだ。

両手に混沌ノ鎧を纏い、その爪をレプスに向けて声高らかに宣言する。

「だからこそ、俺は君の前に立ちはだかるよ。俺の大好きな人間を、これ以上傷つけさせないためにも」

「……………そうなのねえ」

カイトの確かな決別の言葉を聞き、どこか寂しそうにそう呟く。そして絶対零度の視線を向け、レプスの右手に流れ出した血液が右手に集結する。

「最早、言葉は不要。この一投、離別として受け取りなさい」

現れたのは禍々しい装飾の槍。それは分身体がナツに向けて放つた戦血魔槍フォールカスの魔法。だが、分身体と違いレプスの身体から湧き出す幾つもの怨霊のようなものが魔法に纏わりついている。

それは吸血鬼としての最終手段。血液と共に飲み込んだ魂の解放。全ての生命を呪う悪霊の群れ。

ネクロ・フォルカス
「怨恨魔槍」

その魔法はレプスの手を離れた刹那、回避することさえ許さない速

度でカイトの腹を貫通する。音を置き去りにする速度は衝撃波を生み五体を引き裂き、そして追隨する怨霊が生きとし生ける者全てを塵芥へと還す。地も木々も、その直線上の何もかもを飲み込み消して行く。

もはや再生する肉体や魂さえ塵へと還されれば吸血鬼としても終わりである。

凶悪な魔法であるが、その分代償も大きく、レプスは全身の力が抜けていくのを実感する。吸血鬼としての力は既に今までよりも遙かに落ちており、傷の再生すらままならない。けれど、残る人間を始末するには充分だと疲労で震える脚に喝を入れる。穴の空いた羽では飛ぶことは出来ず、仕方なく徒歩でこの森を抜けるしかないと一步を踏み出す。

「行かせない、と言ったはずだよ」

「なっ!?？」

そんな声が聞こえたかと同時に首筋に感じる灼熱と共に抜け出す自身の力。それでも必死にそちらに視線に向ければそこに殺した筈のカイトがいた。

抵抗しようとするが、ただでさえ力を使い果たした身。それに加えて吸血されることにより腕さえ上がらない状態。それでも頭に浮かんだ疑問は音となり、掠れた声で紡がれる。

「どう、して……………」

「影法師^{シャドーマン}。影で作り出した偽物だよ」

会敵した時から既に魔法は発動されており、本体は匣とは反対側に隠れていたのだ。匣は魔法を操ることが出来ないが、本体が動きに合わせて操れば早々見破れない。この魔法と追撃で既に魔力を使い果たしており、この機を逃せば後はない。

故にその肩に置いた両手に力を込め、在らん限りの力を持つてして吸血を続ける。

「ぐうっ!!?」

このまま大人しく吸血されるレプスではない。せめて一矢報いようと自らの生命力を振り絞って血に魔力を送り、カイトの内から殺そうと目論みる。

けれど、首筋に落ちた一滴の水滴がレプスの気を惹き、それを視線で辿る。辿って、しまった。

（なみ、だ?）

視線の先、カイトの両目からは止め処なく涙が溢れていた。吸血鬼にとって涙は恥辱の証。それを惜しげもなく流し出すカイトを見て、レプスの身体から力が抜ける。

（なんて顔して血を吸ってるのよお…………）

敵である自身に同情をしているのか？初めはそう思ったがそれは違うのだと直感する。

（寂しいのねえ…………）

「……………いいわあ。存分に吸いなさい」

そつとカイトの頭に手を置いて、吸血を促す。それに応える様に自身の身体から急速に力が抜かれていくのを感じる。死ぬことに対して、抵抗はないと言えば嘘になる。

けれど、ここから逆転する手札も最早なし。ここで生き足掻いても無様な姿を晒すだけ。ならばこのまま潔く死に行こう。

(それに、ねえ)

この魂がカイトの中で生き続けられるというのなら、少しは寂しさも紛れるのではないだろうか。

今際の際に脳裏に浮かぶのは、朽ちた館に独り取り残された日々のこと。側に誰もおらず、誰も助けてはくれない、闇に残された絶望。人が1人で生きてはいけないように、化物も1人では生きていけないのだ。いや、吸血を必要とする分、吸血鬼は誰よりも人に依存している。

そう思えば、吸血鬼とはなんとも脆い生き物なのかと自嘲する。

「おやすみなさい、ダンピール半端者」

最後にそう言い残し、添えられた手が力なく落ちる。そしてその身体も魂も全てを飲み干したカイトの両目からは涙が未だに流れ、けれど穏やかな表情で胸を撫で下ろす。

「ああ。おやすみ、レプスお嬢様」

胸の内にレプスの魂を感じる。けれどそれに意思はなく、ただただそこに在るだけのもの。それが堪らなく悲しく、何かが抜けたかの様な喪失感がカイトを襲い、それを飲み込む様に空を見上げる。

そこには相も変わらず空を遮る、霧の幕が掛かっていたのだった。

「お！カイト！」

ふと、声をかけられてそちらを振り向けば、ナツがそこにいた。肩には気絶したグレイを担いでおり、その後ろからは疲労困憊のルーシーとハッピー。誰もが怪我を負っているが、誰もが無事だ。

それに胸を撫で下ろし、そして声を返そうとして、その後ろから着いて来た人物を見て固まる。

美しい銀髪をたなびかせ、淡麗な顔つきをどこか後ろめたさを秘めた、年端もいかない、在りし日の少女。

「レプス………？」

先程呑み込んだ筈の吸血、幼い頃のレプスがそこにいた。

終幕

いつからだろう、人を目で追う様になったのは

食糧や家畜としか見られない人間に、興味が湧いたのは

古い記憶を遡れば、物心ついた頃には人を愛していた

吸血鬼からすれば異常者の扱いを受けてもおかしくはないだろうが、そんな私を父と母は変わらず愛を注いでくれた

無論、私も吸血鬼である以上、人の血を吸わなければ生きていけない。だが、その際は心からの感謝を込めて、それこそ愛をもってして血を頂いていた。

血を飲み、魂を喰らい、そしてその者の記憶を読み調べる。

人の魂に刻まれた記憶はいつも私をドキドキさせ、ワクワクさせ、何度も何度もお気に入りの本を読み返すように記憶を追体験する。

そのうち館の地下で飼育されている人間からも思い出を聞くようになって、より一層人への愛を深める。

同じ歳の従者は、はしたないと咎めていたが、それでも私の人への愛は変わらない。

そうして初めて檻の外にいる人間を見た瞬間、私の愛は爆発した。暴発したと言っても過言ではない。

その人の求めるものをできる限り用意し、傷を癒そうと努力し、同

じ吸血鬼から目を逸らしてあげた。

けれど、私の愛は一方通行。この愛は決して届かず、また叶うこともない。なぜならば私は吸血鬼。人の世では生きていけない、闇の住人。

看病した人間から逃げられ、悲しみに暮れた日々。食事も喉を通らない喪失感を抱えていた頃、突如として館に火の手が上がる。

外に逃げようにも周囲は銀製の武器をこちらに向ける人々。館の中では火に包まれて絶命する使用人たち。助けを求め父親を探すが、見つけた父親は頭上から落ちてきたであろう瓦礫に身を貫かれていた。

その身は全身が炎に包まれて、それでも死なないのか呪詛を溢しながら虚空を見つめる父親に、私は恐怖を感じた。胸部を貫かれ、助かる見込みのない父は、それでも私を見つけると傷口を広げて脱出。止め処なく溢れる血を気にすることもなく、後退りする私にゆつくりと近寄る。

壁の端まで追い詰められ、覆いかぶさる様に父は逃げ道を塞ぐ。そうして私に言うのだ。「人を呪え」と。

人を呪い、人を恨み、人を滅ぼせと、まるで何かに突き動かされるように同じことを繰り返す父は、私に大量の血液を浴びせて絶命した。

恐怖で腰を抜かしながらも、腹這いになりながら地下へと逃げる。予想通り、石造りの地下に熱は籠っているが、それでも火の手は回っていない。愛おしい人々の熱に燻された死体に涙しながらも、私は館の外へと続く通路へと進む。

やつとの思いで扉にたどり着き、なんとか外に出た瞬間、待ち受けていたのは先ほども外で武器をこちらに向けていた人間。

なにかに怯えていた様子の人間は、こちらを見るや否や震える手で武器をこちらに向ける。そうして狂った様に獲物を振り回し、私の静止の言葉も聞き入れず、焼ける様な痛みを私に刻んで刻んで刻んで。

そうして目の前が赤く染まったと思った瞬間、その人間は消えていた。否、そこにはいるが、在るのは骨と皮だけになったものだけ。自身の両手を見れば真っ赤に染まり、口元からは血が垂れる。

怖くなった私は地下に戻り、両膝を抱えてうずくまる。どうしてこうなってしまったのかと、ひたすら自問し、どれくらいの時間が経ったのだろう。

館の火はもう燃やすものはないとばかりに鎮火して、飢えを認識しだした頃、私は答えを導き出す。

全ては人間のせいなのだ。

全ての悪はあちら側なのだ。

呪い、憎み、恨み、呪詛を吐いて、立ち上がる。幽鬼のような足取りで館を出て、睨みつけた先に新たに外から来た人間がそこにいた。

あつと言う間にその人間の血を啜り、そうして飢えを満たす。脆弱な人間め、と呟いた所で、癖になってしまったのかその人間の記憶を読み取る。読み取ってしまった。

その人間にも同じように家族があり、家庭があり、やむを得ない事情でここに来たのだと理解してしまった瞬間、私は膝から崩れ落ちる。

憎かった人間にも、自身と同じような別れがあつたのだと理解し、私はその遺体に泣きながら謝罪を告げる。

けれど、私の内から聞こえた声はそれを許さない。人は滅ぼすべきなのだと言ふ。そんなことはしたくないと私が叫べば、ならばそれは私が果たそうと私の内から出て行く。

私の力の大部分を持っていき、最早吸血鬼の縛りカスとも言える私に、血を纏う呪いは告げる。

「あなたは私のオリジナル。あなたを殺せば私は消えてしまうから生かしておいてあげる。けれど、よく見ていなさいな。あなたの愛した人間は取るに足らない存在なのだ。滅んでも仕方のない業の深いものなのだ」と

そうして私は力も名も失い、呪いが時折作り出す屍食鬼たちの世話係へと変わった。それでも私は人への愛は消えていない。消してはいけない。それが私に残された、唯一の存在理由なのだから。



「ンだとコラア!!」

「やんのか、ああ!?!?」

薄暗い森の中、ナツとグレイの声が辺りに響く。互いに満身創痕だと言ふのに遠慮なしで殴り合い、傷を増やして行く。

戦いが終わり、無事に全員が集合を果たしたのはいいものも、目を覚ましたグレイがことの顛末を聞いたのが始まり。そこからナツが

煽り、あれよあれよといつも通りの殴り合いに発展したのだ。

いつもはそれを止めるエルザも疲労で止める様子はなく、ルーシイはよくやるものだと思えるばかり。

「元氣ねえ、あんたたち」

「あい。ナツとグレイですから」

「あの2人はあれでいいのよ」

そう言っつていつも通りニコニコと笑みを浮かべるミラジエーン。身体の至る所に包帯が巻かれ、痛々しい姿であるがその表情に陰りは無い。流石は過去、自身とタメを張っただけはあると内心感心しながら、エルザは周囲を見渡す。

焼け崩れた館を取り囲む様に群生する彼岸花の群れ。確かに不気味な光景ではあるが、よくよく見ればそれぞれ手入れが施されており、まるで館に向けて献花されているようにも見える。なるほど、と独り納得していれば、不意にルーシイに話しかけられる。

「そう言えばエルザ。あのおつきな奴にどうやって勝ったの？」

「いや、勝利はしていないさ。私はあいつの邪魔にならないよう、足止めをしていただけだ。まあ、片足がなかった上、貫った刀が良く切れてな。思いの外善戦できていたがな」

カイトと視線を交わした時、アトラスが邪魔をしない様にする事が自身の役割なのだど理解したエルザは積極的に攻撃することは避け、注意をこちらに向ける事だけに専念していたのだ。

レプスが倒れたタイミングで契約の切れたアトラスはその姿を消した時は安堵したとは本人の言ではあるが、恐らくエルザならば倒れていただろうと当たりをつけるルーシイ。

例え片足がなく、手持ちの武器が良くてもあのサイズ差で善戦するエルザはやはり化物だと戦慄しながら、決してエルザに逆らわないと心に誓う。

「それにしてもミラ。私はお前とカイトが契約を交わしていたと言うことに驚いたぞ」

「契約？星霊みたいなものなの？」

「オイラ知ってるよ！悪魔との契約はすつごく不条理なんだって」

ルーシイの問いにハッピーがそう答えれば、エルザが肯定する。

「そうだ。契約内容によっては身体の一部や大量の生贄を要求される」

「生贄……。さ、流石にそんなことないですよね？」

「そうねえ。内緒にしておこうかしら」

人差し指を口に添えてウインクするミラジェーン。どうやら話すつもりはないらしい。後で張本人を絞めて聞き出そうと決意するエルザ。それを察したのかミラジェーンはころころと笑う。そして霧に閉ざされた森の方を見つめ、その先にいるであろうカイトを思い浮かべる。

きっと彼はこれからも仮面をつけて笑うのだろう。ケジメをつけたからと言っても、そこは変わることはできないだろう。変化することなく、胡散臭いと罵られながらも道化を演じるのだろう。けれど、それでいいとミラジェーンは思う。

彼は半吸血鬼^{ダンピール}。人にも吸血鬼にもなれない半端者。仮面をつけて

人の世に居られるのなら、それでいいのだ。それでも彼は人が好きなのだから。

それに――

(それに、仮面の奥の素顔は、契約者私の特権なもの)

その思いを告げるつもりは、まだない。

この想いを告げるときは、きっと彼がその素顔を晒した時なのだから。



ぶるり、と突如として襲った悪寒に身を震わせ、カイトは脚を止める。この後自分は肅清と言う名の理不尽な暴力に遭うのだろうと直感し、少しばかりゲンナリとする。

その様子を見て隣を歩く少女、レプスはくすりと笑った。

「愉快的人たちね」

「カッカッカ、まあ、うん。そうだね。飽きはしないよ」

力なく答え、憂鬱な気持ちを払拭する様に笑うレプスを見やる。

自身の手で殺した筈の、吸血鬼。かつて仕えたお嬢様。それが昔の姿のまま目の前にいるのだから、世の中わからないものだとため息を溢す。しかし、姿形は当時のままとはいえ、その身は吸血鬼としての力は皆無に等しい。その力は既にカイトが吸収しているが、だからと言って返すつもりもなく、そして本人もそれを望んでいない。

言葉少なく2人揃って暫く歩き、そして脚を止めた先には断崖絶

壁。霧の谷と人の世を分け隔てる山の岩肌。この崖の先に霧はなく、そして吸血鬼は出ることができない。

「……………本当にいいのかい？望むのなら、うちのギルドにー」

カイトの言葉を遮る様に右手を向けるレプス。そしてゆっくりと首を振ると言葉を紡ぐ。

「お気持ちは嬉しいけれど、それはダメよ。これは吸血鬼としての、私の矜持。搾りかすにも満たない私だけれど、それくらいのプライドはあるのよ」

「そっか……………」

きつとどれほど言葉を積み重ねても、彼女が首を縦に振ることはないだろう。それを理解したカイトはそれ以上何も言わず、下を向く。

「そんな顔をしないで。さあ、行きましょう」

「……………うん。行こうか」

少し困った様に笑うレプス。その差し出された手を掴み一気に抱き上げると羽を広げて空を飛ぶ。

遮る枝葉を押し退けて、高く高く、前へ前へと進み、そろそろ霧を抜けると言う頃、腕の中のレプスがぎゅっとカイトの腕を握り締める。吸血鬼としての掟が外に出ることを禁じているための拒否反応だ。

痛いくらいに握り絞められた腕。けれど、それを振り切り、徐々に暴れ出すレプスを抑えて、更に高く。

そうして霧を抜け視界が開けた先、地平線から登る朝焼けに染まる

空が顔を出す。朝日に照らされた山や、その麓の町、温かな光に照らされる世界が、2人の目の前に広がる。

霧の谷ではありえない、息を呑む様な初めての光景にレプスは感嘆の声を漏らす。

「ああ、これが外。これが世界。これが人の世なのね」

「レプスお嬢様……………」

「連れてきてくれてありがとう、カイト。カイトカイト……………ふふ、いい名前ね。とても素敵だわ」

見惚れる様に外の景色を眺め、愛おしげに手を伸ばし、そして徐々に顔を出す朝日がそれを拒絶するように2人を照らす。

半端者であるカイトの身体が燃え上がるが、人の血が消滅を防ぎ、全身に激痛を走らせるだけに止まる。だが、搾りかすと言えども純粹な吸血鬼のレプスはそうはいかない。伸ばした手から灰となり、宙に巻かれる。だと言うのに苦痛に顔を歪めることはせず、最後に見る景色を目一杯魂に焼き付ける。

「ああ、世界はこんなにも美しいものなのね」

最後にありがとうと呟き、レプスの身体が完全に消滅する。

力の大部分が倒されたことによりレプスの身体は限界を迎えており、先がなかったのだ。ならば倒された末の消滅よりも、自らの自死によって幕を下ろす決意を決めたのだ。

末期の願いとしてカイトはそれを聞き入れ、どうせならば憧れていた世界を見せることとなっていた。

覚悟していたとは言え、同族の消滅に涙し、空を見上げるカイト。

「ありがとう、は俺のセリフだよ」

彼女のお陰で人間の世界でも暮らすことができた、と言っても過言ではない。彼女のお陰で、人を愛する事ができたのだ。

誰もいない虚空にそう礼を告げ、墜落する様に霧の中へと戻る。そうして涙を拭いた後、笑顔を作つてフェアリーテイルの面々と合流を果たす。吸血鬼だと判明しても何も変わらない対応に心癒され、帰路へとつく。

「あつ、霧が……………」

それに気づいたのはルーシイだった。

森を抜けた瞬間、最早封じる者はいないとばかりに霧が晴れて行く。それが本当に吸血鬼はもういないのだと語りかけてくるようで、心配するようにルーシイがカイトの顔を覗く。けれど、カイトは少し寂しそうな顔をするだけで、どこか達観したように霧の晴れた森を見つめる。

「大丈夫だよ、ルーシイ。確かに吸血鬼はもういないのかもしれない。けれど、俺には君たちがいるからね」

そう言っつていつものように胡散臭い笑みを浮かべて、カイトは歩き出す。それに追従するように、他の面々は脚を進めた。

「しかし、今回は流石に疲れたな。帰ったら甘いものが食べたいものだ」

「オイラはお魚あ!!?」

「オレは火の玉セット!!?」

「またあの趣味悪い飯かよ。腹壊しちまえ」

「ああん!?!?」

「やんのか!?!?」

「ホント元気ね、アンタたち。あ、あたしも甘いもの食べたい」

「ふふ。ギルドに帰っても休む暇がないわね」

「カッカッカ。少しは労って欲しいものだよ」

肩を落とし、けれど心地よい気持ちに包まれながら、彼らはギルドへと帰る。今までも、これからも変わらない、少し変わった吸血鬼を連れて。

B O F T 編 収穫祭

「暗殺ギルド髑髏会、三羽鳥出頭!!？」

「国王、城下町を視察」

「彼氏にしたい魔導師ランキング発表」

「魔導師ギルド巨人の腕、タイタン・アーム壊滅か？」

様々な見出しに彩られた新聞。情報とはかくも貴重なものであり、大なり小なり意味を持っている。それこそ、くだらないと一笑するよ
うな話が、実は後々重大な意味を持つたり、小さな町工場の倒産が大
企業の株を下げたりと、様々な影響を与える。

大見出しひとつ、小見出しひとつ、付属の4コマひとつ舐める様に
眺め、そして次を読もうとページを捲ればひらりと一枚のチラシが床
に落ちる。

マグノリア収穫祭

そう大きく記載された宣伝チラシ。年に一度の、街を上げてのお祭
りが開催されるのだとそう宣言する紙を拾い、カイトはにやりと笑
う。

街が主催というだけあり、その規模は大きい。そしてそれに乗じて
商店街やレストランなども集客を目的とした参加するのだ。当然、
フェアリーテイルもギルドとして毎年参加しており、魔導師ならではの
の見せ物などで稼ぎ、ギルドの維持費に充てている。特に最終日に行

われる大パレードファンタンジアは大陸に誇る華やかさを誇り、毎年毎年頭を捻ってどう言う事をするのかと議論をしていたりする。

それはさておき、今年もこの季節がやってきたのだとカイトは高鳴る胸を抑え、ひとり暗闇で声を殺して笑う。

「さあ、喜劇の幕を開こう。」

笑い、笑われ、狂うくらいの笑劇しょうげきを

喝采の止まないアンコールを

「カカ……カツカツカ……カアツカツカツカツ!!?」

「うるさい!!?」

エルザの鉄拳が突き刺さり、カイトの頭が比喻なく地面に突き刺さる。現在は収穫祭の一週間前。霧の谷から帰ってきてまだ1日である。

土木作業着に換装しているエルザは呆れた様にため息を零し、ファンタジアに使われる山車を作るギルドの面々はまたエルザがお怒りだと、その逆鱗に触れない様そそくさと自身に割り振られた作業に戻る。

「まったく、誰のせいで作業が遅れていると……」

「カツカツ……それを言われると弱いよ」

本来であれば終盤に差し掛かる祭りの準備も、現在は手をつけたばかり。それもこれもカイトのせいである。実は今回の準備の実行委員長はカイトだったりする。誰が何をするのか、どういった山車を使

うのか、どのスケジュールで回すのか、それらを統括せねばならない立場であるのだ。

だというのに、霧の谷への移動に加え、提案されている物を全て突っ込もうとする暴挙。さらに甘いスケジュールの管理。それらのお陰で準備が遅々として進んでいないのだ。

先ほどの笑いも楽しみ半分、そして空笑い半分といった調子であり、リーダーとはうまくいかないものだとしばかり反省する。

ひらり、と舞い落ちたチラシを取り、内容を確認するエルザ。何かの間違いで開催日を変更してないかと淡い期待を寄せるが、残念ながらそんなことはなかった。ため息をひとつ更にこぼして、そう言えばとチラシの隅ではあるが注目を集める見出しをカイトに向ける。

「このミス・フェアリーテイルとはなんだ？」

「ああ、それ？パレードの山車に提案者の周りに女の子を侍らすってというのがあつてね。その代替え案だよ♪」

「……………ちなみに、どのくらい同じ案があつたんだ？」

「聞きたい？」

「……………いや、やめておこう」

頭が痛いとはかりに手で押さえるエルザ。実際、ギルドの三分の一が同じように複数の異性と組みたいというものだったのだから、カイトとしても驚きである。流石に苦笑いしか出ず、しかしこれほどの提案者がいるのならそれもいいのではないかと言うマカロフの提案もあり実行されたこの企画。

参加者は無論、フェアリーテイル所属の女性限定ではあるが、順位は審査員制ではなく観客からのポイント制。観客へのアピールが重要となるのだ。ちなみにポイントであるが、一枚100Jジュエルの紙に指

名者を記入してもらおうこととなっており、観客が多ければ多いほどギルドに金が入る仕組みになっていたりする。

ただでさえ問題を起こして金が飛んでいくフェアリーテイル。是が非でも成功してもらいたいものだど内心溢す。

余談ではあるが、この事を知ったチームシャドウギアのジエット、ドロイは既に100枚ずつ購入することを決意しており、同じチームの出場者レビイにポイントを入れることにしているらしい。

流石にそんなことをされれば公平な結果とは言えないので、購入は1人一枚を絶対としようと算段を立てる。

「それにしても、カイト。こう言った物作りはお前の魔法が適役じゃないのか？」

「そうしたいのはやまやまなんだけどねえ」

指示を出すばかりで動こうとしないカイトに苦言を漏らすエルザ。確かに、カイトの影魔法を使えば作業は格段に進みだろう。しかし、カイトは試しに足元から影を出すのが、現れた影の腕は造形がぐちゃぐちゃで、とても木材を運んだりできそうにない。

「この通り、魔法の調子が良くなってね。手伝おうにも、といった感じなのさ」

「珍しいな。どうした？」

魔法の調子が悪くなるのは、魔導師にとってはままある事である。主に体調が悪いときがそうだろう。しかし、現在のカイトの不調は違う。それは霧の谷で吸血鬼の血を吸ったことによる反動だ。

吸血鬼の血を吸うことでカイト自身の魔力は跳ね上がったが、同時にその吸血鬼としての力も増大させることとなったのだ。そのため

封印に使う魔力の増大に加え、魔力が身体に馴染んでいないのだ。

周りの目もあるので「まあ、ちよつとね」と言葉濁し、カイトはファンタジアの山車の順番を割り振る作業に戻る。地味かもしれないが、どうすれば観客の目を惹くのか、楽しめるかなどを考えないといけないため、重要な仕事だったりする。

これ以上は話しても無駄だろうと諦め、エルザは自身の作業に戻る。だがその途中ふと、あることを思い出す。あのメンツは参加しないのだろうか、と。

例年行われるファンタジアであるが、参加しないメンツもいるのだ。最たる例はギルド最強候補に唄われるミストガン。だが、彼は強力な睡眠魔法を振り撒き、その姿はギルドメンバーさえ知らない謎の男。

そしてエルザ自身は彼こそがギルド最強だと認めているギルダーツ。しかし彼はここ数年、とある依頼を受けて帰還していないのが現状。

そして、エルザが一番気がかりに思っているのはマカロフの実孫にして別ベクトルでの問題児。

(ラクサス………)

思い返せばエルザがギルドに加入した頃からラクサスはファンタジアに参加した試しがない。苦手ではあるが、だからと言って参加し欲しくない訳ではない。

できれば今年こそは、と口の中で転がしながら今度こそ作業に戻る。



―――迎えた感謝祭当日。

その日のマグノリアはいつもよりも大盛況。右を見れば人を呼び込む出店が、左を見れば路上パフォーマンスが、路地裏を覗けば愛を語るカップルがと大賑わい。その中でも特に人が集まっているのは間違いなくフェアリーテイルのギルドだろう。

目的は当然、ミス・フェアリーテイル。

それを見に来た人々はその時を今か今かと待ち侘びながら、ギルド内で販売している焼きそばやイカ焼きなど、出店の定番品を片手にステージに注意を向ける。

その民衆を横目に、まさかここまで集客があるとは嬉しい誤算と悲鳴にご満悦のカイト。毎度毎度、ギルドメンバーが酒を飲んで暴れてその修繕費などで利益は雀の涙ほどであったが、今年は余裕ができそうだと鼻歌混じりに料理を作る。

(ミラちゃんに出場をお願いした甲斐があったねえ)

流石はフェアリーテイルの看板娘だ。

そうでなくとも優勝者には50万Jの賞金が出るため、参加者は思いの外多い。ギルドを知らない人からすればどんな子がいるのか、メンバーからすれば誰が優勝するのかとわいわい騒ぐ声が厨房まで聴こえてくる。

そうこうしている内に垂幕が開き、歓声と共にミス・フェアリーテイルが開催された。MCはギルドで購買を営んでいるマックス。得意の砂魔法を駆使して観客を楽しませながら進行させる姿は、初めてとは思えない堂の入ったもの。挨拶もそこそこに、早速進めていく。

「エントリーNo. 1! 異次元の胃袋を持つエキゾチックビューティー!!? カナ・アルベローナ!!?」

コンテストが始まったことにより客足が途絶えた厨房。予想以上の売り上げに大喜びのカイト。この後はコンテストの投票用紙の振

り上げ作業、そしてファンタジアに向けての最終調整の仕事が入っている。

一見地味で活躍の場は少ないが、しかしこう言った裏方作業の重要性は理解しており、何よりこういったものの方が得意である。過去の従者経験がこんなところで発揮されていた。

さて、ではコンテスト終了までどうするか、と考えた所で厨房内から裏口へと続くドアの開閉音が聞こえた。ともすれば歓声に飲まれそうな小さな音。聞き違いかもしれないと一蹴すればいいのかもしれない。

けれど、その後には続く足音が気のせいではないと示しており、ため息を溢す。出番はちょうどミラジエーンが出てきた頃合い。流石は週ソラでグラビアを飾っただけはあり、ギルド内が揺れるほどの期待に満ちた歓声。それを見逃すことに無念を覚えながら、カイトは裏方に戻る。

「さて、どちら様かな？迷ったお客さんならご愛嬌、迷惑なクレーマーならお帰りを願うんだけどねえ」

クレーマー然り、無謀な挑戦者然り、ストーカー然り、毎年必ずいるのだ。今回もその類だろうとたかを括り、キッチン台やコンロなどが並べられた厨房内を散策する。広くない空間、けれど人影は見えず、ならば食糧庫の方かと足を進めれば、入口から正面に積まれた小麦の山の裏手から人影が現れる。

魔法が上手く使えないながらも、臨戦体制を整え構えるカイト。だが、その姿を見た瞬間、構えを解いた。

「なんだ、フリードか」

そこにいたのは長髪の美形、フリード。フェアリーテイル謎の男ラッキンクがあれば必ず上位に食い込むほど交友関係が少なく、またギルドに帰ってくることも少ない。カイトも再開は半年ぶりなのだ。

「久しぶりだねえ。元気にしてたかい？」

「……………」

「無視は悲しいよ♪」

どう話しかけても対話に応えず、こちらを敵意に満ちた瞳で射抜くフリード。ため息ひとつ零し、とりあえず話はここから出てからにしようと思っただけのとき、フリードがようやく口を開く。

「……………俺はお前が憎い」

「……………はい？」

憎いとは、これまた御大層な宣言だと、怒りより疑問が浮かぶ。混乱するカイトを他所に、堰を切ったように敵意が憤怒に染まり、拳をあらんかぎりの力で握りしめる。

「あいつに認められているお前が……………だというのに飄々としているお前が、心底憎い」

怒号は飛ばさず、けれど怒りに満ちた静かな声。

あいつ、と言われてもそれが誰なのか、と考えて、ラクサスのことかとおぼしけをつける。フリードの数少ない交友関係、その中でもトツブクラスに仲がいいローラーというわけではなく、特に慕っているのがラクサスだ。自らがラクサス親衛隊、通称雷神衆のリーダーを名乗り、ラクサスのためなら例え火の中水の中森の中。ラクサスのためなら自らの命さえ厭わないフリード。

けれど、ラクサスから認められた覚えなどカイトにはない。確かに同世代の中では一番付き合いが長いが、顔を合わせれば憎まれ口を叩

く間柄。何かの間違いだろう。

「あー、フリード？何のことかわからないけど、とりあえず外に出ようか。まずはお祭りを楽しんで、そこからにしよう」

そうやって一步を踏み出した瞬間、カイトの周囲が文字に囲まれる。

(術式!?!?)

フリードの操る魔法『術式』。描いた文字に魔力を付与し、行動を制限する結界系の魔法。そのためクイツクリーな戦闘には向かないが、反面トラップとしての効果は絶大。その効果は術者の力量次第では聖十魔導師にさえ脱出は不可能。そして目の前のフリードはそれを可能とする実力を持っている。

「何のつもりだい？」

「この先の展開に、お前は必要ない。そこで大人しくしている」

「カツカツカ♪ジョーダンじゃない」

両手に不完全ながら混沌ノ鎧を纏い、肉弾戦で仕留めようと距離を詰める。けれどどうしたことか、踏み出した足はそれ以上進まず、身体が止まる。釣られて下を見れば、下半身がゆっくりと石になっていくのが見えた。

「【この空間で魔法を使った者は石となる】。それが掟だ」

舌打ちひとつ零し、己の過ちに気づく。フリードは確かに実力者だ。けれど対象を束縛する術式まで使えるとは思わなかったのだ。

半年前よりも確実に上がっている実力を認識していなかった事に後悔し、せめて一矢報いようと魔法を放とうと右手を上げるが、そちらも既に石となっていた。

「お前はそこでラクサスが勝利する姿を見ることもなく、ひとり孤独に震えている」

「くそっ!!?」

後悔しても既に遅い。暗くなる視界の中、満足そうにこちらを一瞥して立ち去るフリードの姿が嫌に鮮明に残っていた。



「どういうつもりだ、フリード!!?」

怒号、そして衝撃。ラクサスの繰り出した前蹴りがフリードの腹を捉え、地面に転がる。

場所はカルディア大聖堂。マグノリアで一番の大きさを誇るその建築物の中に、ラクサスたちはいた。

事は少し前、ミス・フェアリーテイルのコンテストを利用したバトル・オブ・フェアリーテイル
B O F の開催を宣言。その内容は制限時間3時間以内にラクサスと雷神衆を含めた4人を倒す事。バトルフィールドはマグノリア全体。100人近くいるギルドメンバーに対してあまりにも無謀な事であるが、街全体にはフリードの術式が張り巡らされており、中に入った者は同士討ちをせざるを得ない。そして3時間以内にラクサスたちを倒さなければ人質として石となったコンテスト参加者たちが砂となってしまうのだ。

そして今まさにギルドメンバーたちの同士討ちが行われている中、

ラクサスはフリードに怒りをぶつける。

「てめえ、なぜ勝手にあいつを行動不能にした!?!?」

「ゴホッ……それは……」

BOFが始まって早々、街を奔走するメンバーの中にカイトがいな
いことに気がついたラクサス。問い詰めて見れば案の定、フリードの
仕業だったのだ。

そしてフリードはその理由を言えるわけがなかった。この期に及
んで唯の私怨なのだと、そう言えるわけがないのだ。しかし、この場
で何も話さないことはもつとまずい。ぐつと歯を噛み締め、喉から迫
り上がるものを抑え込んでフリードはヨロヨロと立ち上がり、ラクサ
スを見据える。

「あいつに拘る必要はない。オレはただ、お前のことを思ってる」

「オレがあいつに負けるとでも思ってるのか!!?」

再び怒号と衝撃。今度の前蹴りはフリードを壁へと押しやり、血反
吐を吐く。咳き込むフリードに舌打ちひとつ。これ以上傷つけてB
OFに支障が出ては面白くない。フリードに背を向け苛立ち隠さず
に言葉をぶつける。

「チッ・フリード、てめえもさっさと行け。エバもビックスローもそ
ろそろ動き出す頃だ」

「ああ……」

そう了解を示すと、フリードの身体は文字となりその場から姿を消
す。それを確認したラクサスは近くにあった柱に拳をぶつけると悔

しきから奥歯を噛み締める。

「クソが……っ!!?てめえは、オレの手で……っ!!?!!?」

誰にも聞こえない独白。脳裏に蘇るのは幼き頃、まだマカロフをじーじと呼び親しんでいた時代、出会ったばかりで笑顔どころか無表情のカイトの姿。

初めは自身の肉親がそちらに気にかけてばかりでつまらなく、幼子ながらの考えで懲らしめてやろうとしたのがきつかけだ。初めはこちらが返り討ちに遭い、次戦に挑めばこちらが勝利、そして挑まれた次戦で敗北。それが延々と繰り返している内に、気づけば今の関係だ。

勝負を挑み挑まれていたのも随分昔。今や互いに手を出す事は稀で、顔を合わせても憎まれ口を叩き合うだけ。

今回のBOFで完全に決着をつけてやると意気込んでいたというのにこの結果。行き場のない怒りを手当たり次第のモノにぶつけて晴らそうとするが、胸の中のモヤモヤは一向に取り除かれない。

「クソツ、どうにかしてあいつを……いや、今はそれどころじゃねエ」

胸の中の怒りはまだあるが、だからと言って目的を忘れたわけではない。

現マスターである祖父マカロフからその座を奪い、誰にも嘗められない最強のギルドとして再興する。それが本来の目的だ。カイトと雌雄を結するのはその後でも十分に間に合う。

深呼吸ひとつ、そして目を閉じて6秒経過し怒りをなんとか抑えると、そこに先ほどのラクサスはいない。冷静、冷徹、冷淡。ギルドメンバーが同士討ちしてくれただろうが知った事ではないと絶対零度の視線で目の前に挙げられる街の現状を把握する。

「妖精の共喰いにどこまで耐えられるかな？ジジイ」

雷帝は大聖堂の中で、静かにその時を待つ事にしたのだった。

「おい、おまえ!!?」

フェアリーテイルの隠れ家のひとつにて。

夕陽が建物の影に沈むのを窓際で確認していると、扉が開かれたと思えば突如として声を投げかけられた。この場はフェアリーテイルが万が一に備えて用意している隠れ家のうち、特に秘匿性の高いもののひとつ。認識障害の魔法がかけられており、そこに在ると認識していない限り存在を知ることさえ出来ない。

ここに来るのは日に数度、人間世界の常識を教えるためにやってくるマカロフのみ。はて、ではこの子は誰だろうと頭を捻る。人の顔を覚えるのは苦手だが、少なくとも出会った事はないはず。というよりも、ここに連れてこられてから一度も外に出ていないのだからそれが当然だ。

だと言うのに突如として現れた少年は憤りに満ちた視線をこちらに向けている。しばらくその姿を注視していれば、少しも動じないこちらに物怖じしたのか、たじろいだ少年は気合を入れ直すように頭を振ると、再び指先をこちらに向ける。

「じーじはマスターで大変なんだぞ！お前に構ってばつかじやダメなんだ！」

要領を得ない会話。何を伝えたいのかよくわからず、より一層頭を捻り、じーじとはマカロフの事ではないのかと当たりをつける。

「じーじ……マカロフのこと？つまり、君はマカロフの親族？」

「しんぞく……?じーじは俺のじーじだ！」

どうやら当たりらしい。つまりはマカロフが最近こちらに構ってばかりでつまらないので、それを止ようと乗り込んできたのだろう。面倒なことになったとため息を溢す。少年を害せばマカロフは流石に黙っていないだろうし、そうでなくとも無闇に人を傷つけてはならないとマカロフと魔法契約を結んでいる。破れば即ち死。逆にマカロフには無闇に正体を吹聴してはならないと契約しているのでマカロフがけしかけたと言う線は除外していいだろう。

しかし、と注意深く少年を見やる。

「な、なんだよ」

「……………似てる」

マカロフの孫、というだけあり、目の前の少年は確かにかの老人に似ている。姿形は似てはいない、けれど、ある種のカリスマと言うのだろうか、惹き寄せられる様な魅力を目の前の少年は持っていた。

「……………君、名前は？」

「ら、ラクサス……………おまえは？」

じつと見つめられるのが居心地悪いのか、たじろぐ様にそう答えるラクサス。そしてその問いに少し悩んだ様子を見せ、そして答えた。

「カイト。ねえ、ラクサス。良かったら君のお爺ちゃんについて、話を聞かせてもらえるかな？」

興味本位にそう問うて、手を差し出す。

人間社会に溶け込もうと踏み出した一歩。眼前のラクサスはその差し出された手を見つめ、そして――



「起きろオオ!!?」

「げふっ!!?・!??・?」

怒号と共に全身に走る衝撃。くるくると床を転がり、壁にぶつかって止まった痛む身体をゆっくりと起こし辺りを見渡す。

閑散としたギルド内で異彩を放つステージ上の石像。こちらをあんぐりとした表情で見るマカロフ、ナツ、ハッピー、ガジル。そして普段からは考えもつかないふりふりのゴスロリを着たエルザ。出入口の空間に表示された「残り4人」の文字。

なるほど、まるで状況が読めないと頭を捻るカイト。

「さてさて、誰か状況を説明してくれるかな?」

そしてマカロフから説明を受けるカイト。

どうやらミス・フェアリーテイルのコンテスト最中にラクサスを含めた雷神衆が乱入。参加者を人質に街全体を使ったバトルロワイヤルを開催。制限時間3時間以内にラクサスたちを倒さなければゲームオーバー、人質の石像は砂となってしまう。そのためにギルド全体でラクサスたちを探そうとすれば街中に展開されたフリードの術式の罠に掛かり同士討ち。現在残っているのはこの場に残っているナツ、ガジル、エルザ、カイトの4人のみ。

本来であれば意気揚々と参戦するはずのナツであるが、ギルド周囲に張り巡らされた術式「80歳を超える者と石像の出入りを禁止する」というものに何故か引っかかっているとのこと。

人質であったはずのエルザだったが、右眼が義眼だったためかエバーグリーンの魔法「石化眼^{ストーンアイズ}」の効力が半減。ナツが熱したお陰か

復活を果たしたらしい。

そして復活したエルザは同じく石になっていたカイトにドロップキックをかまして復活させたのだと言う。復活ではなく破壊して再生したのは言うまでもない。

「モーニングコールにしては過激すぎない?」

「起きたではないか」

尚、本人に反省の色はない。

あまりの扱いにさめざめと泣くカイトを他所に、残り人数が4人から5人へと増える。

「増えた」

「誰だ!?!?」

一斉にステージの方へと視線を向けるが、誰一人として復活した様子は無い。では誰が、と考えたところでエルザがくすりと笑う。

「どうやら、あの男も参戦を決めたか」

少し離れてマグノリア郊外。

そこに5本の杖を背負った覆面の男がいた。彼こそがフェアリーテイルの最強候補に数えられる1人、ミストガン。

これならば、と希望が芽生え始めたギルド内。

「反撃開始じゃ!!?」

「行けー!!?」

マカロフの指示を受けて走り出すエルザとカイト。そして街のどこかにいるミストガン。逆襲劇がこれより幕を開けるのであった。



さて、意気揚々とついつい走り出したカイトではあるが、現在魔法が使えない状況。それに加えいつもの方向音痴ぶりを見事に発揮しており、人探しなどは完全に不向き。聞き込みでもしようにもどうやら街中でフェアリーテイルが暴れていることは知られているらしく、近づくどころか離れていく一方。街中にはあるが、カイトの周囲には空間が出来ていた。

進展しない状況に肩を落とすがしかし、だからと言って参加しないわけにはいかない。これはギルド内紛争。ラクサスの目論む跡目争い。負ければまず間違いなくフェアリーテイルの殆どは脱退するだろう。

それはいけない。ただけない。

カイトはフェアリーテイルが大好きだ。だからこそこんな馬鹿なことをしでかしたラクサスを止めなければと珍しく使命感に燃えていた。

(それに、ねえ……………)

同世代の中で、ラクサスは一番古い付き合いだ。幼い頃は殴り合ったり、最近では嫌味を言い合う仲ではあるが、それでも大切なギルドメンバーだ。ここまでのことをして元の鞘に収まることはできないだろうが、今すぐ止めれば減刑くらいは聞き入れてもらえるかもしれない。望み薄ではあるが、何もしないよりはマシだろう。

「さてさて、あの聞かん坊をどう止めますかねえ♪」

「ねー」

「止めなくちや」

「ね〜」

ふと、返ってきた声に反応してそちらを見れば、羽の生えた樽のよ
うな人形が5体、そこに浮かんでいた。奇怪なそれを確認したや否
や、カイトは走り出す。それを追う様に5体から発射された魔力弾を
躲しながら壁をよじのぼり、人気の少ない屋上へとたどり着く。

これで人形を巻けたとは思っていない。すぐさま周囲を見渡して
目的の人物を探す。

「よオ、久しぶりだな」

目的の人物はすぐさま見つかった。カイトからは少し離れた玩具
屋の屋上。

頭部をボディースーツ、顔の上半分をバイザーで覆った巨漢。毘に
かかった獲物を見るように舌なめずりするのには雷神衆の1人、ビツク
スロー。

厄介な奴に見つかったと内心冷や汗を流す。しかし、それを悟られ
ない様に陽気な声を出して、不安定ながらも周囲に魔法を張る。

「やあ、ビツクスロー。久しぶりだねえ♪再会ついでにラクサスの場
所を教えてくれないかな?」

「ヒャーハツハツハツ!!? 教えるわけねエだろ」

「だよねえ」

内心舌打ちひとつ。ラクサスの居場所も魔法の展開も進まず、状況は最悪。苦し紛れに両腕に混沌ノ鎧を纏うが、いつもより歪な形でしか展開されない。

「なんだよ、それ！もしかして体調でも崩したか？だからって手は抜かねエけどな！やっちゃまいな、ベイビー!!？」

カイトの背後から現れる先ほどの人形。ビックスローの魔法ひとつき人形憑は術者の魂を依代に憑依させて操る魔法。飛ばしてくる魔法弾を躲しながら周囲に展開した魔法を発動させる。

シャドー・ナツクル
「影 拳 !!？」

周囲から現れた影の拳。大小様々で不揃いの歪なものではあるが、人形を破壊するには十分。多少手こずりはしたが5体とも破壊された。しかし、油断はできない。

破壊したのはあくまで依代。それを操る魂は破壊できず、そしてビックスローの足元の玩具屋は依代の宝庫だ。すぐさま新しい人形が補充され、カイトの前に立ちはだかる。

「ヘイヘイ、どうしたよカイト!!？こんな程度だったのか!!？」

「カッカツカ♪ビックスローは強くなったねえ」

最後に会った時よりも確実に上がった人形操作の腕前。それに人形の切り替えも早い。今のままでは確実に負けるだろう。

仕方がないため息ひとつ、そして右手に溜めた魔力をビックスローに向けて振るう。

カオス・クロー
「混沌ノ爪!!？」

「無駄だって知ってるだろ!!？」

カイトの放った魔法は人形たちに防がれ、ビックスローには届かない。粉塵が舞う中、どのように攻められても対応できるよう、ビックスローは新たに追加した人形たちを周囲に待機させる。

そして煙が風で流されて周囲が晴れた頃、ビックスローは目を見開く。

「いねえ!!?!?!？」

まさかまさかの逃亡である。虚仮にされた怒りのまま、周囲を人形たちに探らせる。戦闘の影響で周囲に人はおらず、大通りに逃げたという線は低いだろう。ならば路地裏や小道はと目を光らせるがそこにもいない。

「ソンのヤロオ!!?!?!どこいきやがった!!?!？」

怒りそのままに、人形を街中いたるところに徘徊させる。そして人形の一体が路地裏を通り過ぎたのを確認すると、隠れていたゴミ箱の中から顔だけ出して周囲を見渡すカイト。

魔力が不安定な中、影の中に潜り込むことはできず、こうして原始的な策に出るしかないのだ。屈辱的な気持ちになりつつ、頭に乗ったバナナの皮を捨てて、ゴミ箱から身体を出す。人間、一度見たところは早々に見返したりしないものだ。範囲が広いのなら特に。

(けど、どうしたもんかねえ。打てる手立てはないし、救援を待つ余裕もない。せめて魔力が馴染んでくれたら……いや、ないものねだりしてもしょうがないけどね)

顎に手を当てて八方塞がりのこの状況をどう打開したものかと考えていれば、ふとゴミ箱の影に蹲っている人影が目に入る。隠れる時

は急いでいたので気づかないでいたが、よく見ればグレイである。
身体中傷だらけで、共闘は難しそうだ。それは兎も角、カイトはグレイの肩を揺すって安否を確認する。

「おーい、グレイ。生きてるか？」

「う……………。カ…………。イト…………？」

「よかった。意識はあるね」

傷だらけではあるが、意識も戻ってきたため安堵のため息を溢すカイト。グレイは少し何度かまばたきをして状況を確認すると、突然カイトの肩を掴む。

「ここはヤベエ!!?すぐに離れろ!!?」

「……………はい?」

「もう遅えヨ!!?」

困惑するカイトを他所に、上空から声がかけられる。釣られて見上げれば壁と壁の間をその脚で支えながらビックスローがこちらを見下ろしていた。そして同時に、路地裏から出さないと云わんばかりに術式が張り巡らされる。

これがラクサスを探すギルドメンバーたちがやられた術式か、とひとりで納得するカイト。術式内のプレイヤーが1人にならない限り突破不可能の領域。厄介なものに捕まったと焦る気持ちを抑えて、いつもの様に飄々とした笑みを浮かべてビックスローと対峙する。

「グレイ、君はそこで寝てな♪すぐにここから出してあげるからさ♪」

「へエ。さつきより強気じゃねエか。けど、オメエに勝ち目はねエけどな！」

「待て、カイト!!?」

グレイの静止を無視して、両手に魔法を発動しようとするカイト。だが、苦勞して練り上げた魔力は瞬時に霧散し、その効力は発揮されない。驚くカイトを他所に、ビックスローが長い舌を出して嘲笑う。

「うひやはははは!!?バーカ!!?」

ビックスローが馬鹿にするのも無理はない。この術式内では魔法は発動できないルールが刻まれており、遠隔操作系の魔法であるビックスローには何の妨害を受けることなく相手を蹴ることができる。

それを証明するように、術者の外から現れた人形たちが啞然とするカイトに遠慮なしに魔力弾を放つ。なす術なく魔力弾が直撃し、爆炎が舞い上がる。

「カイトツ!!?」

「お?いたのか、グレイ。てめえにはさつき殴られた仕返ししてエと思っってたんだよな!!?」

先ほどビックスローに敗退したグレイにB.O.Fに参戦する権利はない。しかし、決着がつく直前に一発殴られた恨みはある。

「まとめてやっちまいな、ベイビー!!?」

「ぐあああつ!!?」

爆炎に次ぐ爆炎。そうしてグレイの苦痛の音が聞こえなくなった

頃、ビックスローは止めを指すべく人形たちを五角形になるように隊列を組ませる。

「さあ!!?その魂をラクサスに捧げる!!?バリオンフォーメーション!!?」

五角形に並べられた人形。その中心から特大の魔力弾がビックスローを除いた路地裏全域を襲う。高笑いをしながら決着がついた事に酔いしれるビックスローだが、いつまで経っても解除されない術式に疑問を覚えて下を見る。

「おいおい、アレ喰らって生きてるのかよ」

ビックスローの視線の先。また十分に爆炎が晴れていない路地裏で、倒れ伏すグレイを庇う様、カイトが両腕を広げて先ほどの魔力弾を受け止めていた。

いつもならば回復する筈の傷は術式の影響で回復されず、焦げた様に黒くなったカイト。その身体は倒れていないとはいえ、風が吹けば倒れてしまいそうなほどの重傷。止めは刺さなかったが、結果は上々。嬉々としてもう一度集中砲火の餌食にしようとした瞬間、ゆっくりと顔を上げたカイトと目が合う。

「混ざったよ♪」

一瞬で自身がまな板の鯉である事を理解させられる様な、皮膚が粟立つ様なゾツとする笑み。無意識の内に身体が震え、呼吸が荒くなる。

ありえない、と頭を振って、恐怖心を外に追いやる。相手は既に死に体。怯える必要はないのだと言い聞かせて、人形たちに指示を出す。

「ラインフォーメーション!!?」

人形たちが一列に並び、そして斬撃のような魔力弾を放つ技。しかし、人形が列を組んだ瞬間、横合いから飛び出した黒い犬が人形たちを食い破る。大型犬共言うべきその犬は気付けば2匹、そして視線を動かせば3匹。気づけば5匹にと増えて、術式の外からビックスローを睨む。

カラミティ・シャドウ
「災厄影——影——犬」
ブラックドック

それは影で作られた魔法。普段ののっぺりとした単調な影魔法とは違い、生物の息づかいを感じさせる造形。魔法で作られたものだと知らなければ野犬とも見間違えるそれらはビックスローが新たにこさえた人形を発見するや否や破壊する。

高度を保とうが壁を跳躍して破壊され、ならばと攻撃しようにも獣ならではの俊敏な動きを捉える事ができず、逆に破壊されてしまう。

「さあ、ビックスロー。君はあと何度魂を憑依させられる? 10? 20? 100? いくらでも憑依させるといい。全て壊してあげるよ♪」

両手を広げて、さながら舞台役者のように身振り手振りでビックスローを挑発するカイト。その指揮に合わせるように、影犬たちが遠吠えするかのように吠える。

その光景に思わず身体が震えるが、それを抑えて必死に虚勢だと自身に言い聞かせる。確かに、カイトは魔力を取り戻したのだろう。けれど、この場は魔法が使えない術式の中。当然、外の影犬たちも中には入って来られない。肉弾戦はカイトの方に部があるが、満身創痍の中ビックスローのいるところまで登って来られることはできないだろう。

カイトの気迫に飲まれそうになったが、後は持久戦に持ち込めばビックスローの勝利は確実。そう至ったからこそビックスローの余

裕の表情は持ち直される。

「ひやはははは!!? そんな状態でオレに勝つつもりかヨ!!? ベイビーたちは出せねエけど、オメエももう限界だろ?」

「カツカツカ♪ ああ、そうだね。俺も限界さ。けれど、君もフェアリーテイルなら知ってるだろう?」

だらりと、首から肩にかけて力を抜き、ゆらりと立ちつくすカイト。そしてゆっくりと片足を後ろに下げて、上半身を低く低く構える。まるで狩りをする獣のような動きにビックスローは吞まれかけるが、あり得ないと否定する。否定しなければ、恐怖でどうにかかなりそうなのだ。

「フェアリーテイル俺にとって、限界は越えるもの。そうだろう♪」

そしてカイトが脚に力を込めた瞬間、その脚に纏っていた封印が解かれる。吸血鬼としての本来の脚力を戻したカイトの身体は地面を抉ると、一瞬にしてビックスローの眼前にまで移動する。

啞然とするビックスローに勢いそのまま肘鉄をぶつけ、地面へと押し倒す。落ちた先のゴミ箱を破壊して、砂煙が舞う中ケホケホと咳をしながらカイトが立ち上がる。足元には気絶したビックスロー。そして勝敗が決したお陰で術式が解除される。

「カツカツカ♪うーん、魔力がみなぎるってのはやっぱりいいね♪」

術式が解除されたお陰ですぐさま身体中の傷が回復されるが、それでも有り余る魔力にご満悦のカイト。伸びをひとつとして身体をほぐすと倒れたビックスローとグレイの様子を見る。どちらも息はあり、傷もそこまで酷くはない。この調子ならば少し休ませておけば大丈夫だろうと見切りをつけて2人を壁際に寝かせる。

「さて、これからどうしたものかねえ」

ビックスローにラクサスの居場所を聞く予定だったのだが、流石に気絶した状態で聞き出すことは不可能。歩いて探すのもいいかもしれないが、時間制限がある以上悠長なことは言ってられない。

そしてふと、途方に暮れて空を見上げた瞬間、目に入ったのは等間隔に並べられた黒い球。マグノリアの街を取り囲むように浮かぶそれを見た瞬間、カイトは近場の建物の屋上によじ登り、足元から影犬を繰り出す。術者の指示を受けた影犬たちはすぐさま街の至る所に分散し、カイトの目となり耳となる。

無論、はじめての試みであるため、影犬の魔法に全神経を集中させなければ維持ができない。街中を影犬たちが駆け回り、流れてくる情報量の多さに頭痛を覚えながら暫く、ようやくカイトは目的地を探りあてた。

「まったく、あんのおバカ。神鳴殿かみなりでんまで持ち出したらダメでしょうに………」

愚痴をひとつ零し、カイトは屋根伝いに駆け出す。これは本格的にまずいかもしれないと冷や汗を流し、目的地であるマグノリア大聖堂へと向かうのであった。

V S. ラクサス

「やあ、ラクサス♪元気そうだね」

これ見よがしに舌打ちひとつ、目の前に現れたカイトの脇を通り抜けようとすれば、当の本人は先回りしてまたラクサスの正面に立つ。

つい先ほどラクサスは祖父であるマカロフと喧嘩しており、虫の居所が悪かった。そうでなくとも、何を成しても周囲からは流石はマカロフの孫という評価しかもらえない現状に苛立ちを募らせており、ギルド内でも素行が目立つようになってきていた。

周囲から人が避けるようになっていながらも関わらず、カイトは初めの頃よりは幾分かマシになった胡散臭い笑みを貼り付けてラクサスの行先の邪魔をする。

「カッカッカ♪どこへ行く気だい、ラクサス？もうすぐファンタジアだよ？」

「チツ、うざってえ」

「そう邪険しないでくれよ♪さあ、共に準備を進めようじゃないか♪」

さながら舞台役者のように、大袈裟な身振り手振りで手を差し伸ばすカイト。パン、と乾いた音を立ててその手を弾くと、ラクサスは胸ぐらを掴み上げる。

「うぜえって言うてンだよ!!? ファンタジアなんざ知ったことじゃねえ!!? 勝手にやってろ!!?」

そう怒鳴ってやれば、一瞬きよんとした表情を浮かべ、そして察

しがついたように掌の上に拳を置くカイト。

「あー、なるほど。今年は参加しないんだね♪」

「ツ!!?」

どこか抜けたような発言にラクサスの怒りは臨界点を超え、感情のままに拳を振るう。机を壊し、床に投げ出されたカイトを一瞥すると、不機嫌さを隠さずに歩き出すラクサス。しかし、数歩歩いた所で突如肩を掴まれた。誰の仕業かと反射的にそちらを振り向けば、いつの間にかカイトが拳を振り上げてそこにいた。

驚きに声をあげる暇なく、カイトの拳がラクサスの頬に刺さり、同じように床に投げ出される。

「まったく。なんで殴られたのかわからないけど、一発には一発だよね♪」

「ツ!!?てめえ!!?」

すぐさま立ち上がると、お返しとばかりに拳を返す。そして追撃を喰らわせる前に、死角から伸びた影の拳がラクサスを殴る。

「カッカッカ♪君とおてて繋いで仲良く、なんてものを期待するだけ無駄だったねえ♪思えば、君に手を握ってもらったことなんてないんだっ♪」

「あゝあ?!?上等だ!!?オレの方が上だつて事、わからせてやる!!?」

そこからは乱闘騒ぎの始まり。途中からは大人も混じえた大乱闘へと変わり、最終的にマカロフの仲裁が入る結末に。乱闘の中心とも言える2人は仲良く罰を言い渡される結末に。

罰を与えられたことに憤りは感じている。けれど、マカロフと喧嘩した時よりもどこかスツキリとしたものがあり、それが何なのかかわからず、同じように街のゴミ拾いに精を出すカイトを横目に見て舌打ちを溢す。

まるで湧き上がった親愛感を打ち消すように。



マグノリア大聖堂にて

BOFも残り10分を切り、終盤が見えて来た頃。ラクサスはそこにいた。

雷神衆も全員倒され残るはラクサスのみだと言うのにも関わらず、彼に焦りの色はない。確かに、エバーグリーンが倒されて人質は解放されたが、それは神鳴殿で対応することにより街全体を人質にするこ
とができた。

時間が経てば雷の魔力が込められた魔水晶ラクリマは、それを思う存分周囲に放出する仕組みとなっており、破壊しようものならば対象に蓄えていた魔力を浴びせる生体リンク魔法のおまけ付き。ひとつでも破壊しようものならば、重症は免れない。

それによつてBOFを継続することができているのはいいが、ラクサスはひとつ不可解なことがあった。

それはギルドマスターであるマカロフが何の反応も見せていないのだ。流石にそろそろ何かしらのアクションを起こすだろうと予想していただけに拍子抜け。それだけエルザやカイト、ミストガンを信頼しているということなのかもしれないが。

「降参する気はねえってか……………。相変わらずの頑固ジジイめ」

眩きひとつ零すと、後ろから聞こえた足音に振り返る。

「来たか」

そこにいたのは5本の杖を背中に携えた、覆面の男ミストガン。目元しか見えないため感情は読めないが、少なくとも降参を告げに来た使者という訳ではないだろう。

「まさかお前がこのゲームに参加するとは思ってもなかったぜ………
いい加減てめえも出てきたらどうなんだ？」

ラクサスが向けた視線の先。ミストガンとは反対方向の影が一瞬揺らいだかと思うと、そこから影が盛り上がりカイトが姿を表す。いつものように飄々とした、内心をひた隠しにする笑みを浮かべて。

「おやおや、バレちゃったか♪さてさて、フェアリーテイル最強候補のミストガンに、君の手の内を知り尽くしてる俺。降参して神鳴殿を解除してくれると嬉しいんだけどねえ？」

「ハッ！とうとうてめえの脳みそもボケたか？」

「だよねえ♪でも、流石に同時に相手することはきびしいんじゃないかな？」

「テメエらが束になろうが、オレには敵わねえよ。フェアリーテイル最強はオレだ」

「それはまた大きく出たねえ。俺としてはギルドーツを推すけど、ミストガン。君はどうだい？」

「興味はないが、私もギルドーツを推そう」

「あいつはダメだ、帰って来ねえ。同じくエルザもいい線はいつてもまだ弱い」

「エルザが弱い？とんだ節穴だな、お前の目は」

ラクサスの発言を鼻で笑うミストガンに、両手に混沌ノ鎧を纏うカイト。それを見てラクサスも両手に雷を纏う。

「さて、雁首揃えて和気藹々。このまま大団円といきたいけれど、そうはいかないよね？」

「ほざいてろ、道化。いや……ヴァンパイア吸血鬼って呼んだ方がいいか？」

ラクサスの言葉に一瞬目を見開き、そして観念したかのようにため息を溢す。しかし、その瞳はラクサスの背後にいる何かを睨み付けるように、薄く細められていた。

「……………誰から聞いたのかな？」

「ハッ！化け物が一丁前に怒ってんのかよ。滑稽だな。テメエもそう思うだろう？なあ、ミストガン。……………いや、アナザー……」

そう言いかけた瞬間、それ以上の言葉は許さないとミストガンが杖を張り、カイトが合わせるように腕を払い、ラクサスがそれらを迎撃する。衝撃波は周囲を襲い、カルディア大聖堂のガラス全てを破壊。キラキラと破片が舞う中、三者三様に睨み合う。

「後悔するぞ、ラクサス。お前は未だかつて見た事のない魔法を見ることになる」

「2対1が卑怯だとは言わないでくれよ？」

「構うか、来い。格の違いを見せてやる」

その瞬間、我先にと踊り出したのはミストガン。背中に携えた5本の杖を扇状に広げ魔法を発動する。

「まてんろう摩天楼」

それはほんの一瞬の出来事。床が突然唸りを上げるようにのたうったかと思うと、光が溢れて出しカルディア大聖堂が内側から爆破された。爆破の衝撃で打ち上げられたラクサスは、まさか一撃で大聖堂を破壊するような魔法を放つとは思っておらず動揺を隠せないでいた。

そして上空から感じる殺気に振り返れば、空を割って這い出していく見た事のない化け物。逃げようにもいつのまにか身体にはいくつものベルトが巻かれており、身動きひとつとれはしない。

「なんだこの魔法は!!?!?!?」

見た事のない、あり得ない光景に絶叫し、そしてその場にあるもの全ての動きが止まる。続いて聞こえるのはガラスを叩き割ったような音とラクサスの嘲笑。

「ははははははは!!?!?!?くだらねえなア!!?!?!?こんな幻覚でオレをどうにかできるかと思っただか?!?!?ミストガン?!?!?」

そう。先程の起こった事はすべて幻覚。本来であれば一瞬で決着をつける魔法であるが、実力の近いラクサスには通用しない。そのまま反撃に転じようとするラクサスに、上空から魔法を腕に纏うカイトが待ったをかける。

「混沌カオスノーロー!!?」

「読めてンだよ!!?」

しかし、それを読んでいたラクサスは振り下ろされた魔法を躲すと、その身体に拳を打ち込む。くの字になったカイトの背中を追撃を喰らわせようとして、突如としてカイトの身体が無数の黒い蝶に変わる。

「災厄カラミテイ・シヤド影グリム・バタフライノーロー悪魔蝶!!?」

黒い蝶が怪しく光出したかと思えば爆発。ひとつひとつの爆発は小さくとも、数が揃えば大爆発となんら変わらない。寸前のところで雷のような速度で躲すラクサスだが、内心の冷や汗とは裏腹に笑みを凶悪に深める。

そして柱のひとつから覗くカイトの姿を発見した。しかし、すぐに向かう様な真似はしない。明らかなブラフ、見えすいた詐欺。つい先程騙されたばかりであるから、何を仕掛けてくるのかつい身構えてしまったのだ。

「眠れ。五重魔法陣、御神楽みかぐら!!?」

ラクサスの頭上に展開された五枚の魔法陣。最初一枚から放たれた魔力が次の魔法陣を通過する事に威力を増し、最大威力となる五枚目を通過した魔力がラクサスに直撃した。

完全に不意を突いた、高威力の一撃。衝撃で舞う煙と暴風から顔を庇いながら2人は行く末を見守る。そしてそれらが落ち着くよりも早く、中心部から稲妻のような速度で飛んできたラクサスが柱に隠れていたカイトに膝の一撃を喰らわせた。

「はははっ!!?..どうしたよ、カイト!!? オレがああ程度でくたばるわけねえだろオが!!?」

「ぐえっ!!?」

ラクサスの膝が腹部にめり込み、口から血を吐く。

魔力が馴染み、魔法を使えるようになったカイトではあるが、それに伴い濃くなった吸血鬼としての血がこの場では枷となっていた。言うまでもなく、悪魔と教会の組み合わせなど最悪であり、純正な吸血鬼ならば近づくことさえできない。前までは足を踏み入れても気だるさを覚える程度のカイトだったが、現在はまるで手足にいくつもの鉄球をぶら下げているかのような倦怠感に見舞われていた。

（まったく。狙ったワケじゃないだろうけど、厄介なフィールドを用意してくれたものだよ）

カイトの正体が人外だということを知っていても、肝心の内容までは知らない。例え弱点を知っていたとしても、敢えてそこを狙わず、自身の力のみで勝利をもぎ取りに行く。ラクサスとはそういう人間なのだ。

「ッ!!?.. カイト!!?」

ミストガンが助けるように杖のひとつから魔力弾をラクサスに向けてる。しかし、呆気なく躲かれるどころかカイトを盾にして防いだのだ。

動揺するミストガンに向けてカイトを投げると、2人して教会の床に転がる。

「イツツ……ミストガン、無事かい?」

「くっ……ああ」

素早く立ち上がる2人だが、回復するカイトとは違い脇腹を抑えて立ち上がるミストガン。どうやら痛めたらしい。

(これも原因のひとつだねえ……)

そも、支援や搦手を得意とする2人。正面切って殴り合いなど向いていないのだ。そして互いに同じギルドの仲間ではあるが、精々が顔見知り程度。何ができて何ができないのかが互いにわからないから連携もとれやしない。

せめて相方がエルザならば、と内心口を零していれば、突然教会の出入り口からふたつの影が現れる。

「ラクサス!!?」

反射的にそちらに視線を向ければ、そこにいたのはエルザとナツ。初めの衝突が合図となり、街を駆け回っていた2人が駆けつけたのだ。

そしてエルザの姿を確認したミストガンが視線を反らす。それがいけなかった。

「ハッハア!!?」

ラクサスの手から放たれた一筋の雷。雷が直撃した覆面が焼かれて、その下の素顔が晒された瞬間、エルザの呼吸が止まる。

「ジェラール……」

楽園の塔で散ったはずの、幼き頃苦楽を共にしたかつての友がそこにいた。

「お？知ってる顔だったのか？」

「カッカツカ♪どういふことかな？知ってるんだろう、ラクサス？」

「言っただけだぜ。オレに勝てたら教えてやるってな」

「ああ、そうかい!!？」

指をひとつ鳴らして、周囲に展開した魔法陣を発動させる。確かに、ミストガンの正体がジェラルドだったのは驚いた。けれど、カイトはすぐさま他人の空似だと察していた。姿形はふり二つ、けれどミストガンからは中身魔力が感じられない。所持系ホルダー魔導師は確かに道具を用いて魔法を扱うが、それでも術者の魔力が無ければ発動は不可能。

「サウザンド・ナツクル
千影万雷!!？」

今は兎も角、ラクサスの方を優先。注意が多少削がれた隙に発動した魔法の数々。四方八方から迫る影の拳たちをラクサスは危なげもなく回避する。

そして伸ばされた影の間に来た一瞬の空白を狙い、ラクサスは雷速の速さでカイトに迫る。しかし、カイトは薄く笑う。むしろ待ってましたとばかりに嘲笑う。

「オレと勝負だ、ラクサス!!？」

横合いから飛び出して炎を纏った脚をラクサスにぶつけたのはナツ。ナツもミストガンの素顔に驚きはしたが、しかしエルザよりも動揺は少なく、かつややこしい事よりもラクサスを優先せねばならないと直感していたのだ。

視界が悪い中での不意打ち。けれど、ラクサスはナツの一撃を腕一

本で防ぐとお返しとばかりに手のひらから雷を放つ。

「うせろ、ザコが!!?」

「させないよ」

瞬間、ラクサスの足元から飛び出した影が標準をずらし、攻撃を空へと向ける。忌々しいとばかりに舌打ちひとつ、そしてナツから放たれた拳を躲しながら後退する。

「だあー!!?カイト、邪魔すんじゃねえ!!?」

「カツカツカ♪先に戦ってたのはこっちなんだけどねえ♪ぷげっ!!?」

ナツに対してそんな軽口を返すカイト。そしてそのカイトの頭を足蹴にして、放心から我に返ったエルザが剣を振るう。それを躲して相対するラクサスにエルザは問う。

「あの空に浮かんでいるものはなんだ、ラクサス?」

「神鳴殿……聞いたことくらいのあるだろう?」

「貴様!!?」

ラクサスが街を破壊するつもりだと理解したエルザの怒りの前蹴り。それを易々と受け止めて、涼しげな表情でラクサスは告げる。神鳴殿発動まで残り2分だと。

「カイト!!?」

「あー、はいはい………とりたいとこだけど、流石に一人じゃ厳しいよ」

エルザの簡素な呼びかけに全てを察したカイトだが、一人では不可能だと告げる。ただでさえ最悪なコンディションの中、無理矢理魔法を行使している現状。少なくとも残り2分で空中に浮かぶいくつもの神鳴殿を破壊するのは無理である。

そうでなくとも、神鳴殿には生体リンク魔法というものが付与されている。これは術者の傷を対象にも負わせる魔法であり、神鳴殿の場合破壊された瞬間、貯蔵してある雷の魔力が対象に降り注ぐ仕掛けとなっているのだ。

「ハッ！化物にさえ手出しできねえ神鳴殿が300個。どうするつもりだ？」

「くっ!!？」

ラクサスの雷に飲まれるエルザ。けれど直前に身に纏うのは雷系の魔法を半減させる雷帝の鎧。無傷のまま後退し、ラクサスを睨むエルザだが、痺れを切らしたナツが待ったをかける。

「なにラクサスとやる気満々になってやがる!!？こいつはオレがやるんだ!!？」

振り返ったエルザがナツを見据え、そして微笑む。

「信じていいんだな？」

「へ？」

「カイト。ついて来い」

「ん？ああ、なるほどね。ナツ、後はよろしく」

「オ、オイ!!？」

突然の事に困惑するナツだが、外に駆け出す2人を見て察する。2人は神鳴殿を止めるつもりなのだ。それはラクサスも察しており、できるはずもないと嘲笑する。

「ははははっ!!？無駄だア!!？一つ壊すだけでも生死にかかわる!!？時間ももう無い!!？」

「全て同時に破壊する」

「不可能だ!!？ できたとしても確実に死ぬ!!？」

「おや？俺たちの心配してくれるだなんて、随分優しいんだねえ♪」

そう言って笑うカイトの言葉に上手く返せず、言葉を詰まらせるラクサス。そしてゲームのルールを潰されては堪らないと足を踏み出した瞬間、ナツの咆哮がそれを拒む。

それを尻目に2人は人気のない通りに入り、エルザは剣を、カイトは影で出来た杭をそれぞれ展開する。

「カッカッカ♪にしても、無茶なことを思いつくものだねえ♪」

「無茶ではないさ。私とお前ならばいける筈だ」

「そりやまた厚い信頼なこと♪」

しかし、軽口とは裏腹にそれぞれ展開できたのは2人合わせて200。これ以上増やそうにもエルザは魔力が、カイトは精神的に限界が

近づいていた。さらに時間も残り1分を切ってしまったている。

最早これまでかと諦めがエルザの脳裏を掠めた瞬間、それを押し出すように脳内に声が響く。

『おい!!?みんな聴こえるか!!?一大事だ!!?空を見ろ!!?』

頭に直接響く声の主はギルドメンバーであるウォーレン。その魔法は離れた相手とも会話のできる念話^{テレパシー}。声は街にいるフェアリーテイル全員に届いており、全員が空を見上げる。

『あの空に浮かんでる物をありったけの魔力で破壊するんだ!!?ひとつ残らずだ!!?あれはこの街を襲うラクサスの魔法だ!!?時間がねえ!!?全員でやるんだ!!?』

「ウォーレン。おまえ、なぜ神鳴殿のことを……」

『その声はエルザか!!?無事だったか!!?』

「グレイ!!?そうか、おまえが……」

石になっていたはずのエルザが復活していたとわかれば、そのほかのメンツも無事だということが判明し、声の届いている全員が活気づく。

それはともかくとりあえずは神鳴殿の破壊を、と促すウォーレンに、街中で負けたマックスが毒を吐けば釣られて出るわ出るわの喧嘩腰。それを聴きながらカイトは笑う。可笑しくてしようがないと涙を流して笑う。

そも、カイトからすれば街の被害などぶつちやけどうでもいいのだ。ただ、それによってフェアリーテイルの汚名と借金が増えるのを阻止したいだけである。

人間からすれば危機的状況だということは理解している。だと言

うのにフェアリーテイルのメンバーは、カイトの愛すべき人間たちは不満を溢しつつも変わりない。街のため、友のため、ギルドのため。それぞれ違いはあるが誰一人として破壊を拒もうとするものはいない。それが可笑しくて、とても愛おしいのだ。

「カツカッカ♪きてきて、空を見上げる皆々様方。喧嘩はさておき、狙うは空に浮かぶ神鳴殿。ひとつでも取り流せば被害は甚大。見事破壊できれば拍手喝采といこうじゃないか♪」

「おい、カイト」

「止まらないよ、エルザ。こんな状況で手を貸さないメンバーは、うちにはいないさ」

そうカイトが答えれば、確かにその通りだとため息を溢す。そして、剣を高々と掲げて合図を上げる。

「北の200個は私とカイトがやる!!? 皆は南を中心に全部撃破!!」

「二〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇!!?!!?」

エルザの合図と共に空に向けて放たれた魔法の数々。一瞬の静寂、次いで街を囲む神鳴殿が全て破壊された。キラキラと舞う破片が月明かりに反射して、まるで花火のようにも見える幻想的な景色の中、撃ち落とした面々は神鳴殿の反撃に沈んでいた。

「カツカッカ♪」

ウォーレンの念話はまだ繋がっており、先ほどの喧嘩は何処へやら。皆健闘を讃えあい、笑い合っている。それがまた可笑しくてカイ

トも笑う。

(さてさて、これである意地っ張りも引けばいいんだけどねえ)

まあ、それはないかとくつくつ喉奥で笑い、ゆつくりと再生する身体を起こす。今回の件、最早マカロフに懇願してもおもしろい処罰は免れない。良くてギルド破門、最悪犯罪者として王国騎士団に突き出されるだろう。

幼い頃から付き合いのある人間がいなくなる。それを考えると胸に空洞が空いたかのような悲しさがカイトを襲う。けれど、2度と会えないわけではない。せめて、この幕の最後には緩やかな終わりをと思いを馳せる。

そして、教会方面から迫る光に目を向ける。

術者が敵とみなす者を攻撃対象とする超魔法、妖精フェアリーの法律。フェアリーテイルが誇る三大魔法のうちのひとつであり、誰でも使えるわけではない。今のギルドを壊し、新たなギルドを作り上げようとするラクサスが使うとは皮肉が効いてる。

特に抵抗を見せず、光を受け入れ、疲労から意識を手放すのであった。

フアンタジア

がちやり、とギルドの医務室からエルザが出てくる。それだけだと言うのに皆の視線は一樣に注がれ、その一挙手一投足を見逃すまいとギルド内に緊張が走る。そして、皆の前に立ったエルザの言葉を今か今かと待ち構えて、全員が生唾を飲み込む。

「ポーリシユカさんのお陰で一命は取り留めたそうだ。安心してくれ、マスターは無事だ」

その言葉を聞いた瞬間、その場にいた全員が安堵のため息を零して、歓声を上げる。

ラクサスの件から夜が明けた現在、殆どのメンバーが身体のどこかしらには包帯を巻きつつも、疲労を見せないほどの騒ぎっぷりでギルド内は今日も騒がしい。

実を言えばB O F最中、マカロフは持病が悪化して生死の境を彷徨っていたのだ。そこに手を貸してくれたのがマグノリア郊外の森に住む人間嫌いの偏屈婆さんことポーリシユカ。彼女の助けがなければ今頃マカロフは帰らぬ人となっていたことだろう。

「よかったあ。一時はどうなるかと思ったけど」

「あのjeeさんがそう簡単にくたばる訳ねーんだ」

「しかし、マスターもお歳だ。これ以上心労を重ねればまたお身体を悪くする。皆もその事を忘れるな」

いつもならエルザの言葉を聞いて姿勢を正すメンバーも、流石に今回ばかりは喜びが先に出て聞いてはいない。けれど、それもしょうが

ないとエルザは深く追求しない。斯くいうエルザも喜びに浮き立っているのだから。

「けど、こんな状況で本当にファンタジアやるつもりなのか？」

「カツカツカ♪そりやごもつともなんだけどさ、エルフマン。マスターの意向なんだよねえ」

「こんな状況だから、なんじゃないかしら？」

今回、弟のエルフマンの命の危機に瀕した際、それがきっかけでかつての魔法接収^{テイクオーバー}・サタンソウルを解放。そのお陰で雷神衆の1人、フリードを倒す事はできたが、久しぶりの魔法の解放。反動が出てしまい、傷つけられたというよりは内部から傷ができてしまったミラジエーン。

珍しくボロボロで、カイトに肩を貸してもらって歩いていたりする。ちなみに姉が取られると思ったエルフマンからすぐさまそのポジションは奪われていた。

「ジュビアもファンタジア観るの楽しみです」

「アンタは参加する側よ」

さめぎめと扱いの酷さに泣くカイトを他所に、話は進む。本来、ギルド加入歴の浅い新人はファンタジアの見学という名目のもと、夜はフリーであったが、そうはいかなくなつたのだ。

ただでさえ怪我人が多い上、街中で乱闘を繰り広げたのがまずかつた。流石にラクサスが原因でそこらかしこで乱闘しました、などと近隣住民に発表できる訳もなく、苦肉の策としてファンタジアでの意見が食い違った為の乱闘ということにしたのだ。

その結果として、またかという諦めが7割、いい加減にしろという

苦情が3割というものに。少ないとは言え苦情を放置することはできず、お詫びとして例年よりも派手に開催することが決定したのだ。流石にそのままギルドメンバーに報告することはせず、単純に動けるメンバーが少ないとそれとなく伝えるだけにしているが。

「ふあがふんごが!!?おがえかべおごおご!!?」

「無理だね。参加できる訳ねーだろ、クズが」

「何で通じてるのかしら……」

ちなみに、今回の一番の功労者であるナツとガジル。2人のお陰でラクサスを止めたと言ってもいい活躍を見せたのだが、現在は2人して包帯でぐるぐる巻きにされていた。ナツに至っては口元まで包帯で巻かれている為、喋ることさえままならない。なぜかガジルには通じているようではあるが。

ともあれ、ギルド内のごたごたも一件落着といった様子のギルド内。けれど、そこに水を刺すような影が入り口から現れる。

「ラクサス!!?」

初めに気づいたのは誰だろうか。その言葉をきっかけに全員がそちらに振り返る。元凶ともいえるラクサスは確かに傷を負っているが、ナツやガジルほどではないようで、威風堂々と歩く姿に翳りはない。

「ジジイはっ!」

今回の事を悪びれる様子もなく、そう問い出すラクサスに周囲は怒り心頭。口々に怒りをぶつけるメンバーを制したのはエルザだった。

「よさないか」

エルザとラクサス。互いに視線がぶつかり合い、すわ激突かと思われたがエルザは道を譲る。

「奥の医務室だ」

「オイ、エルザ!!?」

礼もなく、エルザの横を通り過ぎるラクサス。そして我慢できなかったのかナツがラクサスの進路を邪魔すると、言葉にならない言葉で何かを囁し立てる。

ぽかんとする一同であるが、ガジルが親切にも解説してくれた。曰く「二対一でこんなんじゃないや話にならねえ。次こそはぜってー負けねえ。いつかもう一度勝負しろ、ラクサス!!?」とのこと。

確かに、二対一で勝利したとは言え、勝者の方がボロボロでは勝ちとは言えないだろう。負けず嫌いなナツの横を通り過ぎ、呼び止めるナツに右手を上げて応える。その反応が珍しく、包帯の下でナツは喜色に染める。

「さあ、みんな。ファンタジアの準備をするぞ」

「オイ!!? いいのかよ!!? ラクサスをいかせちまつて!!?」

「大丈夫よ、きつと」

「そうそう♪きつと、おそらく、多分………うん、大丈夫さ♪………メ
イビー」

「自信なさすぎじゃねえか!!?」

「ナツ、おまえラクサスよりひでーケガってどーゆー事よ」

「んがごがー!!?」

「こんなの何ともねーよ、だどよ」

「ナツー!!?血イ!!?血出てる!!?」

今日も今日とて騒がしいフェアリーテイル。若干の不安を残しつつも、夜のファンタジアへと向けて準備を進めていくのであった。



日も暮れて、夜の帷が降りた頃。

マカロフに破門を言い渡され、雷神衆に別れを告げたラクサス。1人そつと旅に出ようと足を進めていけば、ふと色鮮やかな光がメインストリートから路地裏へと漏れていることに気がついた。

視線をそちらに向ければ、様々な装飾や魔法で民衆の前を踊り歩くフェアリーテイルの面々。どうやらファンタジアの準備は間に合ったようだ。

安堵のため息ひとつ溢して、自身に見る資格なしとばかりに立ち去ろうとするラクサスの前に、どこから現れたのかカイトが立ち塞がっていた。

「やあ、ラクサス♪ どこへ行くつもりなのかな?」

「カイト……………。なんでここに」

へらへらと笑うカイトを前に困惑するラクサス。闇討ちをするような性格でもないし、嬉々としてファンタジアに参加しているものだ

と思っただけに、その困惑も大きい。そうしていれば察したのか、笑いながらカイトはその問いに答える。

「カッカッカ♪まあ、体調不良だね。魔法がうまく扱えないんだよ♪」

ただでさえ相性の悪いカルディア大聖堂での大立ち回り。それが影響してか、カイトの体調は急降下。ろくに魔法を使うこともできず、できることなら横になりたいのだが、そうはいかない。

くつくつと喉奥で笑いながら、そつとラクサスの後方、ファンタジアの方を指差す。

釣られてそちらを見れば、やはりフェアリーテイルの大舞台、力の入りようが違う。ミス・フェアリーテイルに参加していた女性たちのダンスにグレイとジュービアの水と氷のコンビネーション、エルザの剣舞にボロボロになりながらもフェアリーテイルのロゴを火で作りに出すナツなどなど。

それぞれの持ち味を活かして織りなす、魔法の舞台。それが幼き頃に参加したファンタジアと重なって、胸が熱くなるのをラクサスは感じた。

そして、最後尾である大トリはマカロフ。手足をシャカシャカと動かして、非常にコミカルなダンスを見せる姿に、病気に侵されている様子はない。マスターという立場にあるにも関わらず、街の皆に野次を受けて笑われる姿をラクサスは嫌っていた。けれど、今ならばわかる。これは愛されているのだと。

少なくとも、もし仮にラクサスの野望が達成し強いフェアリーテイルを作り上げたとしたら、この様な拝めなかつただろう。

吸い付くようにそれらを眺めるラクサス。そして不意にマカロフが人差し指と親指を突き立てて、天高々とそれを翳す。それを做つて他の面々も同じようなポーズを取っていた。

それは幼き頃マカロフと約束したサイン。人混みの中でも自身はマカロフを見ているというメッセージ。どれだけ離れても見守っているという表れ。

「カツカツカ♪ なんだかんだ言ってたかもしれないけど、ラクサス。みんな君のことが大好きなんだよ♪だから、辛くなったらいつでもギルドに顔出しなよ。旅先の土産話を待ってるからさ♪」

「ああ……ああ!!?」

溢れ出した涙をせめてカイトには見せまいと顔を覆うラクサス。けれどそれで隠せるはずもなく、指の隙間から零れる涙。珍しいものが見れたとご満悦なカイト。そして暫くして涙が収まったラクサスは一息吐くとカイトのほうに向き直る。

「お前にも迷惑かけたな」

「カツカツカ♪何を今さら。お互い様だろう?」

「ふっ、そうだな」

そう言っただけで差し出された手を握るラクサス。それが意外だったらしく、差し出した張本人であるカイトが今度はぽかんとした表情を浮かべていた。

「ん?どうした?」

「いや……。初めて握手に応えてもらえたなあって」

そうだったのだろうか、と頭をひねれば確かに。カイトと手を重ねる事など、それこそ喧嘩の時ぐらいしかなかったことを思い出す。初めて出会ったときでさえだ。

それが可笑しくて少し笑うと、握った手に力を入れる。

「またな」

「カッカッカ♪ ああ、またね」

最後は言葉少なく、互いに別れの言葉を交わしてラクサスはマグノリアの外へと足を運ぶ。その姿が見えなくなるまで見つめると、カイトの顔から笑みが消える。

「さてさて、ドラゴンに育てられた者しか使えない筈の滅竜魔法。それがなぜラクサスが使えるのか……気になるとは思わないかい？
ねえ、ガジル？」

物陰の先、そちらに視線を向ければ観念したようにガジルが姿を表す。身体に包帯は巻いているが、滅竜魔導師の回復力なのか、歩き回る程度には治ったらしい。

「……………いつから気づいてやがった？」

「カッカッカ♪ 内緒さ♪」

胡散臭い笑顔を貼り付けて、人差し指を口元に持つてくるカイトに舌打ちひとつ返して、ガジルは話を進める。

「それで、テメエは知ってんのか？あいつが滅竜魔導師だったってこと」

「まさか。付き合いが長いだけの関係だよ、俺たちは」

まともに話し合うつもりはない。そう察したガジルは踵を返して去ろうとする。しかし、カイトがその背中に待ったをかけた。

「そうそう。彼のことを知りたいのなら父親に尋ねるといい。きっと、真相を知っているはずさ♪」

その言葉に驚き脚を止め、思わずそちらに振り返る。ガジルがラクサスの父親、イワンの元へと向かう事を知っているからだ。誰にも話していない筈のスパイ活動、フェアリーテイルの動向を報告するためだ。

無論、報告するのは虚偽のもの。ガジルはイワンがマスターを務める闇ギルド大鴉レイウン・テイルの尻尾への二重スパイ。マカロフから頼まれた大事な任務。それをなぜ知っているのか。

「ああ、誤解しないでね。俺はおじいちゃんから君を助けるように言われてるんだ。不足の事態に備えてね♪」

動きを止めたガジルに歩み寄るカイト。情報源ははつきりとして、それもマカロフから頼みだと言うのだから恐る事はない。けれど、ガジルの脚は震え、まるで蛇に睨まれた蛙のように身動きが取れないでいた。

「ああ、けれど、何の間違いか、手違いか、もし、仮に、万が一、億が一にも、君がフェアリーテイルを裏切る様な真似をしたのなら、その時は……………わかってるね？」

そつと肩に手を置いて、ガジルの目を覗くカイト。その瞳に熱はなく、広がるのは全てを飲み込む様な闇のみ。何とか唾を飲み込んで、わかってしていると返すと、目を細めてガジルから離れる。

「カッカッカ♪無論、信用はしているよ。さあ、行くといい。帰ってきたらファンタジアの打ち上げに参加しておくれよ♪腕によりをかけるからさ♪」

こちらを振り返らず、じゃあこれから仕込みがあるからと手を振りながらそう言うカイト。未だ高鳴る心臓を抑えて、夜の闇に消えていくカイトを見てガジルは思う。

「あいつ、どこに行くつもりだ？」

向かう先はギルドとは反対方向。買い出しに行くにしても、ファンタジアでどこも店は閉まっている。ガジルは知らなかったが、カイトの方向音痴が炸裂しているのだ。

案の定、迷ったカイトはその後ファンタジアの打ち上げに間に合わず、いつものことだと誰も探しに来てくれなかったことに1人すすり泣いていたりしていたのだった。

ニルヴァーナ編 連合

さんさんと辺りを照らす陽の光

心地よく揺れる馬車

青々と萌ゆる樹々

おおよそ、馬車旅をするにはうってつけの気候の中、カイトはなんとも場にそぐわない憂鬱な気持ちを抱えていた。

出したくなるため息をグツと堪えて、下がりそうになる口元に力を入れて、笑顔を貼り付ける。いかにも馬車旅を楽しんでます、とばかりの表情を作り、馬車窓から流れる景色を楽しみむふりをする。

そうして時折、自身の正面に座る少女を横目で見やる。

年端もいかない、それこそまだ10代に差し掛かって少ししか経っていないであろう少女はこちらをちろちろと、恥ずかしげに視線をやって目が合いそうになる度に視線を逸らす。

その妙な空気が心地悪く、余計にげんなりとした気持ちを抱えるカイト。なぜこんなことに、と考えて数日前の事を思い出す。



「何ですか、これ？」

ファンタジアも終わり、街並みもすっかり修復された頃、ギルドの壁に描かれた絵図を見てルーシィは疑問の声をあげる。

大きな丸の中に三つの丸があり、そこから枝分かれするように複数の丸。そして端の方に独立した丸。ぱっと見何が書いてあるのかわからないそれ。その疑問に答えたのはミラジエーンだ。

「闇ギルドの組織図を書いてみたの」

「どうしてまた？」

「近頃動きが活性化してるみたいだからね。ギルド同士の連携を強固にしないといけないのよ」

ファントムとフェアリーテイルは特殊な例として、普段であればそれなりに交流のあるギルド間。それこそ実力者になればなるほど、ギルド同士の交流会などに顔を出すようになるのだ。

ギルドの力の誇示、という面もあるが、1番は自身の手札を見せることによって相手を害するつもりはないというアピールの面もあるのだが、それはさておき。

闇ギルドはそれこそ正規ギルド以上の数があり、その対処が追いつかなくなっている。それこそ、つい最近には闇ギルドのひとつが銀行を襲う事件があり、ルーシイがそれを解決したのはいいのだが、一歩間違えれば豊富な資金を闇ギルドが手に入れていたかもしれないのだ。

それが末端のギルドならまだしも、組織だったものの場合、いちギルドでは対処しきれない。そのため、今回ギルド同士の連携を深める話になったのだ。

「教えてあげよう、ルーシイ。あの大きなくくりで囲まれた3つの丸はバラム同盟。闇ギルドを纏める最大にして三大勢力。それぞれがいくつかの直属ギルドを持つてるんだよ♪」

ここぞとばかりに意気揚々と説明するのはカイト。ご丁寧にメガネと指示棒片手にしながら、あれこれと説明を続ける。

「バラム同盟は六魔将軍オラシオンセイイス、悪魔の心臓グリモアハート、冥府の門の3つから成っているのさ♪ 大体の闇ギルドはこのいずれかに所属しなきゃやってけないんだけど、例外としてあるのがこの端の大鴉レイヴァンテイルの尻尾。他のギルドよ

り動きも少ないし、目立った活動はしてないけど、評議員に認可されてないから分類としては闇ギルドなんだよね♪」

「あ!!? 鉄アイゼンヴァルトの森って!!?」

「そうだ。あのエリゴールがいたギルドだ」

「あれは六魔將軍ってギルドの傘下だったのか」

「あれ? 聞いてない感じ!?!?」

カイトを蚊帳の外に、わいわいと、戦々恐々としながら盛り上がるメンバーたち。道化として闇ギルドを潰していた身として、この話題には滅法強いのだが。さめざめと泣くカイトの肩にミラジエーンがぽんと手を置く。

「私は聞いているわよ、カイト」

「ミラちゃんだけが味方だよ!!?」

「姉ちゃんに近づくな!!?」

ミラジエーンのあまりの優しさに抱きつこうとした瞬間、間に割って入るエルフマン。その強靱な肉体を抱き締め、まあこれでもいいかとそのまま涙でエルフマンの学ランを濡らし嫌がられる外で、話題は進む。

「そういや、六魔將軍って6人しかいねーって聞いたぜ」

「どんだけ小せエギルドだよ」

「たった6人で最大勢力を担ってるのよ」

「う!!?」

「その六魔將軍じゃがな、ワシらが討つ事になった!!?」

「!!?!!?!!?」

「おや、おかえりおじいちゃん♪」

「違うでしょ!?!?」

定例会から帰ってきたマカロフの突然の発言に、一部を除いて驚愕に顔を染める。動じていないのは話を聞いていないナツに、呑気なミラジエーン、そして泣いていたのが嘘の様にすつきりとした表情のカイト。

ふざけたことを曰うカイトに制裁の一撃を加えて、エルザがマカロフに問う。

「マスター、一体………どういうことですか？」

エルザがそういうのも可笑しくはない。闇ギルド、それも三大勢力の一角を討つなど並大抵の事ではない。

話を聞けばここ最近、件の六魔將軍に怪しい動きがあったとのこと。これは見過ごせないとなったのだが、いかせん相手が相手。どこかのギルドが相手をしてバラム同盟全体から睨まれたらたまったものではない。

故に、今回は4つのギルドが各々メンバーを選出して討伐に挑む、連合を組む事になったのだ。

参加ギルドは妖精の尻尾、ブルーベガサス、青い天馬、ラミアスケイル、蛇姫の鱗、ケットシエルター、化猫の宿。異例にして異常の事態にギルド内は騒然となり、誰が行くのかと騒ぎ出す。しかし、人選は既に決まっているらしく、エルザ、ルーシイ、グレイ、ナツ、ハッピー、カイトの最凶チームが選ばれたのだ。

そして当日、作戦説明のため集合場所となっている青い天馬の別荘まで馬車が出ることとなったのだが、その馬車が4人乗り。ハッピーは誰かの膝の上に乗せるとなっても1人余る事に。

幸い、化猫の宿からの馬車が途中通過するらしく、じゃんけんの結果カイトが乗り合わせることとなったのだ。



(下手すれば簀巻きにされて荷台に乗せられる所だったから、感謝は

するけど……………)

なぜ、自分がこんな目にと思わずにはいられない。

これがただの人であればカイトも今まで培ったスキルを駆使して、目的地まで盛り上げようとしただろう。しかし、目の前の少女が纏う雰囲気は凡人のそれではない。

(滅竜魔導師、かな?)

元より、滅竜魔導師のナツやガジルに対して、カイトは他の一般人に対するような嫌悪感はない。どこか人とは乖離した、どこか親しみを覚えるような独特の雰囲気があるのだ。

しかし、だからと言って気安く話しかけられるわけではない。むしろ予想だにしない出来事に困惑していた。稀少であるはずの滅竜魔導師の知り合いが3人目。なんともまあ、我ながら不思議な縁を持ったものだと思嘆を。

けれど、このままでは埒が開かないと心の中でため息ひとつ。笑顔の仮面をかぶって少女の方を向く。

「やあ、こんにちは♪化猫の宿の人だね♪お名前はなんていうのかな?」

「は、はいーわ、わわ、わわわ!!?」

突然話しかけられたことに驚いたのか、ワタワタと慌て出す少女。なぜこんな子1人で連合に参加したのだろうかと思議で堪らない。呆れる声を抑え、少しでもリラックスさせようと思ひ、こちらから名乗りをあげる。

「ああ、申し遅れたね♪俺はカイト。よろしくね♪」

「あーう、ウエンディです!よろしくお願ひします!!?」

差し出された手を握る事なく、綺麗なお辞儀を見せるウエンディ。出した手を引っ込めてから笑いを零し、話を続ける。

「そう畏まらなくても大丈夫だよ♪俺たちは今回、同じ目的を持つ仲間なんだ。気楽に行こうよ♪」

「そ、そんな！あのフェアリーテイルの人に、そんな事!!？」

「……………どんな悪名を聞いてるんだい？」

「そんな！悪名だなんて!!？むしろ、大ファンなんです!!？」

先ほどとは打って変わって、鼻息を荒くするウエンディ。あのフェアリーテイル、と言われて警戒したが、どうやら別の意味で緊張していたようだと言われ、一安心。大方、ギルド内でも人気の高いミラジエーンやエルザのファンなのだろうとたかを括り、見てくださいと渡された雑誌を流しみる。

刹那、見なければよかったと後悔した。

「あのっ！私、フェアリーテイルの方の中でも道化さん自身が特に大好きで！すごく憧れてるんです！」

雑誌に掲載されていたのは、いつの日かの道化自身の写真。【激写!!？噂の道化!!？】という見出しと一緒に月明かりに照らされた一枚。それだけならばまだ飲み込めただろう。続いて出されたノートには雑誌の切り抜きがずらりと。無論、自身以外の写真も多々あるが、先程の雑誌を見た後だと否が応でも目立ってしまう。

いつの間にかすっぱ抜かれたのだろうかと言う後悔半分、饒舌にフェアリーテイルの良いところを話し出すウエンディの変貌に驚き半分と言った調子で思わず笑顔が固まってしまう。

延々と、それこそ嬉々として語るウエンディの言葉を右から左へと流していれば、ようやく目的地にいた馬車が停まる。

鬱蒼と茂る森の中、窓枠や壁など目立つところにハートを散りばめ

た屋敷に悪趣味だと思いつつも、そちらへ促す。

「あ、あー。ほら、ウエンディちゃん。到着したみたいだよ？だから、サインはまた今度ね？」

ちょうど記念にサインを、と強請られていただけに安堵の気持ち強い。少し残念そうに返事をするウエンディを先に降りると、ふと荷台でゴソゴソと動く白い塊。それが何なのかはわからないが、取り敢えずの害はないだろうとそっぽを向いて屋敷に入る。

「やあ、皆さん♪お揃いでぶあ！！？」

「遅い！！？」

先程の鬱屈を発散させようと、少しでも明るく登場してみれば返ってきたのは拳。言うまでもなくエルザである。殴られた顔が凹んでないか触って確認していれば、仁王立ちのエルザがカイトを睨む。

「まったく、どこでほつつき歩いていた？」

「いや、普通に馬車に乗ってきたよ？化猫の宿と一緒にんだから遅くなるに決まってるじゃないか」

「言い訳するんじゃない」

思わず「酷くない!?!？」と叫びたいが、言っても無駄だろうと諦めたため息を溢す。エルザの気が悪いのは恐らく、彼のせいだろうと視線をそちらに向ける。

見た目は悪趣味だが、内装は反して豪華絢爛。敷き詰められた絨毯は柔く、備えられたテーブルや椅子は職人の手によって作られたオーダーメイド。用意してある飲み物も水で薄めたようなものではない。そんな空間の中、良くも悪くも異彩を放つものが1人。

堀が深い大きな顔が目立ち、そのせいかただでさえ低い身長がより小さく見える、お世辞にも整っているとは言い難い体型の持ち主。

来ているスーツは一級品だが、その側にある3人のタイプの違うイケメンに囲まれていると、体型も相まって服に着られている感の強い男性。

彼こそ青い天馬のエース、一夜。カイトの数少ない、ギルド外の友人である。

以前ギルド交友会で出会った時からエルザはあまり好意を抱いておらず、身代わりにと差し出された結果、仲を深めたのだ。

人の美醜に疎いカイトではあるが、確かに一夜は見てくれは醜いのであるとはわかる。けれど、それを補って有り余る実力と心の持ち主であり、そこがカイトは気に入っていた。

「やあ、一夜♪元気だった?」

「おお!我が友よ!無論、元気だとも!君も元気そうだなにより」

「それで、化猫の宿からは君か」

「は、はい!ウエンデイです!」

「あ。ほつとくのね……」

「関わりたくねえんだろーな……気持ちにはわかるが」

カイトと一夜の再会を捨て置いて、後から入ってきたウエンデイに注目するエルザ。ルーシィとグレイの辛辣な言葉はさておき、まさかこの様な大掛かりな作戦に年端も行かない子供1人が参加とは思っておらず、周囲は騒つく。

「こんなお子様1人よこすなんて、化猫の宿はどういうおつもりなの?」

「あら、1人じゃないわよ。ケバイお姉さん」

思わずと言った調子で蛇姫の鱗からの参加者であるシェリーが苦言を漏らせば、そこに差す影一つ。現れたのは可愛らしい服に身を包んだ白い猫。言葉を発する点もそうだが、二律歩行している、鋭い視線を張り巡らせる猫。

「シャルル！ついてきたの!?!」

「当然よ。アナター人じゃ不安でしょうがないもの」

鋭い表情に似合った、鋭いセリフ。どうやらウエンデイの仲間らしい。同族なのだろうか、とちらりとハッピーを覗けば、どうやら一目惚れでもしたらしく、熱い視線を送っていた。白い猫、シャルルの方はそんな気は微塵もなく無視されているが、どうやら気にはしていないらしい。

「ウエンデイ……………」

「おや？見覚えでもあるのかい、ナツ？」

「どこかで聞いたことあるような、ないような……………」

珍しく頭を悩ませるナツ。暫くうんうんと唸るが、諦めたらしくカイトに助言を乞う。

「思い出してくれねーか？」

「カッカッカ♪君のそういうところ、好きだよ♪」

当然ながら、他人の記憶など思い出せるわけもない。ひとしきり笑った後、ちらりと集まったメンツに目を向ける。

蛇姫の鱗からは先程の苦言を漏らしていたシエリー。かつてグレイと同じ師の元で魔法を学んだりオン。聖十大魔道の称号の最近下賜された岩鉄のジユラ。

青い天馬からは一夜を始め、爽やかな印象のヒビキ、幼さを残すイヴ、浅黒い肌に切れ目のレン。誰もがギルド内ではトップの実力派である。

化猫の宿からはウエンデイにシャルル。シャルルは兎も角、ウエンデイの実力は未知数。本人曰く、攻撃魔法よりもサポートの魔法が得意とのこと。

そして、フェアリーテイルからはナツ、グレイ、エルザ、ルーシィ、ハッピーに自身を加えたご存じ最凶チーム。

これはどうなることやら、と内心期待しながら、トイレから帰ってきた一夜から今作戦の説明を受ける。

「ここから北に行くところ、ワース樹海が広がっている。古代人たちはその樹海に強大な魔法を封印した。その名はニルヴァーナ」

「ニルヴァーナ？」

「聞かぬ魔法だ」

「ジユラ様は？」

「いや、知らない」

誰もその魔法を知らず、そして青い天馬もその全貌は掴めていない。ただ、強力な破壊魔法ということしか判明していないのだ。けれど、六魔将軍がその地に集結したのは十中八九その魔法を手に入れる為。それを阻止、そして討伐するのが今作戦の概要である。

「こっちは13人、敵は6人。だけど、あなどっちゃいけない。この6人がまたとんでもなく強いんだ」

ヒビキの解説と共に中空に現れた6枚の画面。それぞれに人物が写っており、それが今回のターゲットだということが伺える。

「毒蛇を使う魔導師コブラ。その名からしてスピード系の魔法を使うと思われるレーサー。天眼のホットアイ。心を覗けるといいう女エンジェル。名前しか情報が掴めなかったミッドナイト。そして奴等の指令等ブレイン」

それぞれが1人でギルドのひとつくらいは潰せるほどの実力を持っており、少なくとも一対一で戦わず、数の利を活かした戦闘をしなくてはいけないのだ。

戦闘が苦手な面々がいるが、しかし今作戦の要は戦闘だけにあらず。まだ補足はされていないが、樹海には仮設拠点があると推測されており、可能な限りの敵をそこに集めてしまえばいい。

その後は青い天馬が誇る魔導爆撃艇クリスティーナによる空中爆撃で決着をつけるのだ。主に戦争に用いられる爆撃艇を一ギルドに使うのは異例中の異例。けれど、そこまでしなくてはならない相手だということなのだ。

「おしつ!!?・燃えてきたぞ!!?・6人まとめてオレが相手してやるアー!!?!!?」

作戦を聞いて顔が青褪めるルーシイはさておき、テンシヨンの上がったナツが全く作戦を聞いていないようなセリフを吐きながらいの1番に樹海へと向かう。それに続くように各メンバーも足早にその場を後にして、残るのはジユラと一夜、カイトの3人。

「やれやれ」

「メエーン」

「カツカツカ♪いやあ、何はともあれ作戦開始だねえ♪」

「そうだな。我々も行くとしよう」

「そうだね♪その前にー」

ジユラが脚を踏み出した瞬間、両腕に混沌ノ鎧を展開したカイト。刹那、背後にいた一夜に拳の一撃を食らわせる。

「カイト殿!!?・なにを!!?」

「カツカツカ♪まあ、見てなよ」

カイトの奇怪な行動に思わず戦闘態勢に入るジユラだが、吹き飛ばされた一夜の姿を見て固まる。床に転がる一夜が淡く光ったかと思うと、その姿が一転、2体のぬいぐるみのような姿へと変化した。

「なっ!?」

「あーあ、バレちゃったゾ」

ジユラの驚愕を他所に、緊張感を感じさせない声で、仕方がないという感情がない音で、1人の女性が階段から降りてくる。見間違うはずもない、先程紹介されたエンジェルがそこにいた。

「バレちゃったね」

「ねー」

「はいはい、お喋りはそこまで。それにしても、何でバレちゃったんだゾ? ジェミニのコピーは完璧なはずだゾ」

「カッカッカ♪星霊の気配には敏感でね♪」

吸血鬼性が上がったせいなのか、星霊の気配というものをカイトは感じられるようになっていた。気配、というよりも匂いに近い。嫌悪感を抱くような、酷い匂いを。

幸い、ルーシイの持つ星霊に対しては抑えられているが、やはりそれ以外となると顔を顰めたくなるほどだ。

答えを聞いたエンジェルは興味なさげに「ふーん」と応えると、そばにいた星霊を閉門する。続け様に星霊を召喚する様子はなく、かといって投降する様子もない。

「おや、観念するつもりかな?」

「油断するな、カイト殿。何か隠しているやもしれん」

カイト、ジユラがそれぞれ戦闘態勢を整えるが、エンジェルの余裕の表情に翳りなし。何か奥の手があるのやもと2人ともより一層エンジェルに注視する。

「そんなに睨んでも、何も怖くないんだゾ。それに、ジェミニのコピーでアナタたちの作戦は丸わかりなんだゾ」

「カッカッカ♪だからと言って逃すわけないだろう?」

「逃げる必要なんてないんだゾ。だってアナタたち」

「もう終わってるんだゾ」

何を、と二の句を告げる前に感じる脇腹からの灼熱。実際に熱されたわけではなく、丸太のような赤黒い甲羅と多数の節と足を持つ何かのカイトの腹を貫き、そして背後のジユラを拘束していた。

「ぐおおおっ!!?」

骨が折れる音がして、気を失うジユラ。エンジェルが動いた様子はない。伏兵が潜んでいたことに今更気づき、せめて六魔の一角に一矢報いようと腕を振り上げるが、背後から飛んできた何かその腕を引きちぎる。

視界に入った事でようやくその姿を視認できたのはムカデ。しかし、大きさは規格外であり、どう少なく見積もってもその全長は人の身を軽々と越している。

「はあ……。人使いの荒い連中だ、まったく」

「そう邪険しないで欲しいゾ。働いた分、報酬は出すんだゾ」

「それは何より」

階段から悠々と現れたのは紫色の髪を乱雑に纏め、少し黄ばんだ白衣に身を包む男性。だらしない服装に反した淡麗顔つきは心底面倒だと言わんばかりに歪められており、メガネの位置を直しながらも嫌悪感を隠そうともしない。

カイトの腕を貪るムカデをひと撫でし、倒れ伏すジユラとカイトを一瞥する。まるで観察するかのような、何の感情も秘められていない

その視線はすぐさま興味が失せたとばかりに外され、エンジェルに向けられる。

「ここでの仕事は終わりだろうか？ さっさと僕本来の仕事に戻らせてもらおう」

「はいはい、わかってるゾ。まったく、態度が大きすぎるゾ」

「ふん。僕は君たちの傘下ではなく、あくまで協力者だ。媚びへつらうつもりはないと言った筈だ」

最早こちらのことなど眼中にないとばかりに交わされる会話。その隙を突こうにも、カイトの視界は二重三重に振れており、末端が痺れて酷い脂汗が流れる。

(くそっ、毒か……っ！)

吸血鬼の回復能力は万全ではあるが、しかし万能ではない。あくまで身体の傷を回復させるだけであり、毒のように体内に残留するものには効果がないのだ。

対処としては解毒魔法を使うか、耐性が出来るまで死に続けるかの2択。解毒魔法はカイトに使用せず、取れる手段は耐性ができるのを待つしかない。完全に詰みである。

「邪魔はさせないゾ、光の子たち。邪魔する子は天使エンジェルが裁くゾ」

最後にエンジェルの言葉を聴いて、カイトは倒れ伏すのであった。

ニルヴァーナ

真つ暗な世界。

上も下もなく、右も左もない、闇。

一筋の光さえ届かない暗澹。

そんな中でぼつん、と意識だけが残っている。

ここが何処なのか、カイトは知らない。けれど、毒による死によってここに来たということはわかっている。

早く復活せねばと急ぐが身体は動かず、助けを呼ぼうにも声は出ない。煩わしいジレンマだけが心の中を支配して、より一層焦燥する。

それでも思い浮かべるのは仲間のこと。六魔だけを相手にすれば良いと考えていただけに、あの白衣の男の存在は厄介だ。故に早く動いてその情報を報さねばならない。

この程度の毒であれば純血種ならば動けていただろう。けれど、この身は半端者。一度は受け入れた人の血を恨まずにはいられない。

早く早くと焦燥していれば、ふと匂いを感じた。

透き通るような、心を落ち着かせる淡い匂い。それは時をおうごとに段々と増していき、全身がその匂いで満たされていくのを感じる。

これは何が？と疑問を抱けば、視線の先に光が見えた。一筋の光は爆発的に広まり、そして真つ黒な空間を焼いていく。その光に包まれたカイトは思わず目を瞑り、そして――



「つぷはあー！」

「おお！起きたか、我が友よ！」

呼吸は必要ないと言えど、気持ち的に海面から浮かんた様な心情で空気を求めるカイト。ぜえぜえと荒く呼吸をしながら周りを見渡せば安堵の表情を浮かべる一夜と、反対に驚愕に顔を歪めるジユラがそ

ここにいた。

回らない頭を必死に回し、状況を把握する。一夜の手に握られた試験管から漂う香り、それが香りを操る一夜の魔法だということはおわかった。毒が抜けきっていないのか、まだ身体が痺れる感覚はあるが、痛みはない。十分に活動できる範囲だ。奪われた腕も回復していることから、思いの外死にかけていたらしい。

とりあえず床で身動きの取れないジユラに回復魔法である白衣を巻いて、状況を整理しようとする。

「バカな……脈も呼吸も止まっていたというのに……」

「ふっ。我が友がそれくらいで死ぬ筈ないだろう」

「一夜、信頼はありがたいけど、俺を不死身だと思ってるの？」

実際不死には近い存在であるのだが、それはさておき。身体を起こして、頭痛のする頭を振る。痛みと一緒に負けた悔しさも飛べばと期待したが、どうやらそんなことはないらしい。

しかし、あの白衣の男は一体誰なのだろうか、と考えたところでジユラが声を上げる。

「よし。早く皆と合流せねば」

「確かに。我々の作戦は筒抜け。それにエンジェルだけでもあの危険な香り……。態勢を整えなければ」

「それに、あの白衣の男のことも知らせないとね。傘下なのか外部協力者なのかはわからないけど、下手すればあの男以外にも伏兵がいるかもしれないしね」

男の正体や敗北の後悔はあるも、それよりも情報の共有が先である。何より痛いのはこちらの作戦が相手にバレていること。練り直す時間もなく、こうなってしまうては行き当たりばったりになるしかない。

兎にも角にも今は時間との勝負。軽い痺れの残る脚に鞭打って、力

イトは走り出す。

「そつちは逆だつ!!?」

「……あつれえ?」



一方その頃、先行していたナツたち一向は全滅の危機に瀕していた。

倒れ伏すその先にいるのは六魔將軍の面々。作戦内容を知った六魔將軍は先手として要である魔導爆撃艇クリスティーナを破壊。そして動揺する先遣隊を降したのだ。

その中でも上位の実力を誇るエルザも、六魔將軍に囲まれてしまつては手も足も出ず、コブラの側に控える毒蛇に腕を噛まれてしまった。

「ゴミどもめ。まとめて消え去るがよい」

ブレインの持つ髑髏の付いた杖を中心に、怨念のような魔力が集う。それはまるで大気が怯えるように震え、恐怖心を駆り立てるような醜悪な魔力。

「ダーククロンド常闇回旋曲」

そして、収束した魔力が解き放たれようとした瞬間、ブレインは見つけた。開戦直後、恐怖から近場の岩陰に隠れていたウエンディを。

「どうした、ブレイン!!?なぜ魔法を止める!!?」

「…………ウエンディ」

「え?え?」

仲間から咎められようが、それも気にならず。じつくりと確かめるようにウエンデイに視線を寄越す。しかし、当の本人はなぜ闇ギルドが自身のことを知っているのかもわからず、また顔を合わせたこともないため困惑に陥っていた。

「どうした、ブレイン。知り合いか？」

「間違いない。天空の巫女」

「天空の……………」

「巫女？」

「なにそれ〜!?？」

ブレインの言葉を反芻する面々。しかし、やはりウエンデイからすればそんなもの知りはいしな。岩陰に身を縮めるが、ブレインはそれを許さなかった。

「これはいいものを拾った。来い」

「きやあ!!？」

「ウエンデイ!!？」

杖の先端から伸びた闇色の雲がウエンデイを掴み、そちらへと引き寄せる。

「何が、この……………!!？」

「金に上下の隔てなし!!？」

痛む体に鞭打って、ナツが取り返そうとするが、それよりも早くホッドアイの地面を軟化させる魔法が周囲を襲う。

助けを求めて必死に手を伸ばすウエンデイ、そして助けようと走るシャルル。だが、慌てていたのだろう。ウエンデイが掴んだのは他の誰でもない、ハッピーの手だった。

「きゃああああ!!?」

「ナツーーーー!!?うわーーーー!!?」

「ウエンデーーーー!!?」

「ハッピー!!?!!?」

「うぬらにもう用はない。消えよ」

宙空に消えるウエンデイとハッピー。そして用は済んだとばかりに放たれるブレインの魔法。上空から降り注ぐ怨念の塊に回避行動は既に間に合わない。

せめてものと耐シヨック態勢を取るが、そこに割って入る影があった。

「岩鉄壁!!?」
がんでつへき

ホッドアイの魔法の影響で周囲の盛り上がった大地から岩の柱が現れる。それは続々と現れて、ついにはブレインの魔法を防ぎきることに成功した。

現れたのは先程六魔将軍に倒されたと聞いていた岩鉄のジュラ。窮地を救われた喜びと生還の喜びに一時湧くが、すぐさま正面に視線を移す。しかし、砂塵が晴れた先には誰もおらず、六魔将軍は既に逃げていた。

「完全にやられた……」

「あいつら強すぎるよ」

「ジュラさん。無事でよかったよ」

「いや、危うい所だった。今は一夜殿の痛み止めの香りバルファムとカイト殿の回復魔法で事なきを得てはいるが」

「六魔将軍め。我々が到着した途端に逃げ出すとは………さては恐れをなしたな」

「カツカツカ………あー、いや。笑えないねえ、コレ」

続いて到着した一夜とカイト。一夜はどこでそんな傷を負ったのやら、ボロボロの姿ではあるが、それでも臨戦態勢を整えており、カイトは到着するや否や倒れていたエルザに目をつける。

「一夜、痛み止めの香りパルファムを。あとナツ、無闇に突っ込もうとしないの」「んが!?」

怒髪天をつくとばかりに樹海に踏み込もうとするナツを影で出来た手でマフラーを引っ張って止めて、一夜に痛み止めをするよう指示する。しかし、痛み止めの香りはその名の通り傷を癒すわけではなく、誤魔化すだけ。ジジュラのように骨が折れて歩行不可能ならばカイトが回復魔法をかけるが、そうでない限り手を出さない様になっている。理由はひとつ。回復魔法というのは自身はまだしも他人をとみると傷の大小構わず大量の魔力を消費するからだ。普段ならまだしも、六魔將軍の討伐最中に魔力不足に陥るなどあつてはならない。故に、傷だらけではあるが動けないほどではない面々に魔法はかけない。しかし、倒れているエルザは自身の魔法も、一夜の魔法も効果が無いことを悟る。

「毒………相手は白衣を着た男だったかい?」「え?ううん。六魔將軍のコブラってやつだった」

偏食したエルザの左腕。毒によるものと推測し、思わずあの白衣の男が頭に浮かぶが、それは違った。同じ毒であれば抗体ができてい自身吸えばいいと思っていたが、別の種類となるとそうもいかない。

患部をじつと見つめるカイトを心配そうに覗き込むルーシイがどうにかならないのかと懇願されるが、それを一蹴する。

「ねえ、なんとかならないの?」

「無理だね。白衣に解毒作用はないからね。それに解毒剤なんて持ち

合わせてないし、作ることなんてもつと不可能だよ」
「外傷は、治療できる……そうだな？」

痛みに悶えながら、エルザはそう問いかける。それを聞いたカイトは何をするのか察したらしい。深々とため息を吐くと、右手に混沌ノ鎧を纏う。それを振り上げた瞬間、グレイが待ったをかけた。

「オイ、何するつもりだ!!？」

「エルザの腕を患部ごと切り落とす。死ぬよりはマシだよ」

「バカな事言ってるじゃねえよ!!？」

「よせ、グレイ。私もここで死ぬわけにはいかん」

いつの間にかハンカチを啜えて準備を整えているエルザ。本人の意志とはいえ、そんなものを許容できるわけがない。カイトを羽交締めに止めるが、周囲は賛否両論。

「離せ、グレイ。その女に死んでもらう訳にはいかん」

「てめえは黙ってる、リオン!!？」

「よさないか!!？」

「そんな事しなくても!!？」

「エルザ殿の意志だ」

こうなる事がわかっていたのだろう、カイトは再度ため息を溢す。そも、カイト自身もこの様な事したいわけではない。しかし、だからと言って他に妙案は浮かばない。こうしている間にも必死にどうにかできないかと頭を捻るが、エルザを救うには腕を落とすしかないと言ふ事がなまじ判明しているため、その方法しか思い浮かべることができない。

(ああ、もう。あつたま痛い……)

毒がまだ残っているのか、ズキズキと痛む。周りの騒ぐ声が段々と意味をなさないノイズに聞こえ、頭に血が昇る。痛みが思考を鈍化させ、ノイズが集中力を乱して、血が視野を狭くさせる。

いつそのこと全てを、と思考が危険な方向に飛びかけようとした時、その場によく通る声がひとつ。

「ウエンディなら助けられるわ」

瞬間、その場にいた全員がそちらを振り向く。仕方がないとばかりに、凜とした声で、注目を浴びるシャルルは続ける。

「今さら仲間同士で争ってる場合じゃないでしょ。力を合わせてウエンディを救うの」

ついでにオスネコも、と付け加えるシャルルの言葉に好奇心を見出す一同。話を聞けば解毒だけではなく、解熱や痛み止めを含めた治癒魔法を行えるとのこと。それがウエンディー―天空の滅竜魔導士の力である。

シャルルの言葉に安堵のため息を溢すと同時に、カイトは頭に昇った血を降ろさんと頭を振る。普段であれば危険な手段など早々に取らないはずなのだが、妙におかしい。やはり毒が残っているのだろうか、と不安を抱えつつも気持ちを切り替える。

「今、私たちに必要なのはウエンディよ。そして目的はわからないけど、あいつらもウエンディを必要としている」

「…………となれば、やる事はひとつ」

「ウエンディちゃんを助けるんだ」

「エルザの為に」

「ハッピーもね」

「おっし!!?行くぞオ!!?!!?」

「「オオツ!!?!!?」」

かくして方針は定まった。

決意を新たにした一同は気合を入れ直し、作戦に臨むのであった。



広大なワース樹海。その一角にぽつんとひとつ、廃れた村があった。かつてそこにいた古代人が都を築いたとされているが、残されているのは朽ちた村の残骸のみ。そして村の端、祭事に使われていた洞窟の中に六魔將軍はいた。

「きゃあ!!?」

「ぎゃわ!!?」

連れてきたウエンデイとハッピーを乱暴に奥の壁に押しやり、それを取り囲む六魔たち。あまりの扱いにハッピーが噛み付くが、ブレインに気絶させられてしまった。対する面々はブレインの突然の拉致には少々驚いたが、しかしあそこで正規ギルドを潰さなかったとしても今作戦に支障はないと理解しているが故に焦りもない。

「ブレイン、この女は何なんだ?」

「ニルヴァーナに関係してんのか?」

「そんな風には見えないゾ」

「そうか!!? 売ってお金に!!?」

「こやつは天空魔法………治癒魔法の使い手だ」

各々から上がる疑問にそう答えたブレイン。治癒魔法といえば^{ロストマジック}失われた魔法の一種である。予想を超えた答えにメンバーが驚き、そしてウエンデイを拉致した理由を悟る。

「まさか!!?!?!?」

「その通り。奴を復活させる」

まるで自身が手を貸す事を前提に話を進める六魔将軍。精一杯の抵抗としてそれを否定しようとするが、しかし洞窟に新たに入ってきた人物がそれを止める。

「それは、僕との契約を破棄するということか？」

苛立ちを隠さない声色で入ってきたのは先ほどカイトを戦闘不能に追い込んだ白衣の男。そばに控える巨大なムカデが鎌首を持ち上げて、攻撃態勢に入っていた。それを見た六魔たちはそれぞれが嫌悪感を隠さない表情で出迎え、すぐにでも動けるように態勢を整える。ただ一人、ブレインだけは余裕のある含み笑いを添えて、男に話しかけた。

「そんなはずないだろう。貴様がいなければ我らはここまで辿り着けなかったやもしれん」

「当然だ。だが、質問に答えてないぞ、ブレイン。僕の助けがありながら、なぜ奴の力を欲する？」

「なに、万が一のための保険だ。貴様との契約は未だ健在、十分に役に立ってもらおう」

「ふん。言い方が気に食わないが、いいだろう」

ブレインに対し傲慢な態度を崩さない男。それが気に食わないのか舌打ちと愚痴を溢すコブラ。

「チツ、ニルヴァーナを見つけてるのがテメエの仕事だろうが。オレたちに噛み付く前に、テメエの仕事を片付けろよ」

「黙っている、蛇男」

コブラの嫌味に対し毒舌を返す。頭に来たコブラが攻撃しようとするが、慌ててレーザーが止める。コブラが負けるとは思っていないが、この2人がこの場で戦闘を行えば残るメンツが危なくなるからだ。

「ここまで探しておいて見つからないとなると、恐らく封印自体に隠蔽の魔法がかけられているのだろう。封印の場所を知らなければその道に辿り着けないような、厄介な魔法が」

「なるほど。それは解けそうか？」

「当然、と言いたいが、流石の僕でも時間がかかる。少なくとも2年はかかるだろう」

「長すぎだゾ」

「何百年も人の目を欺いてきた魔法を2年で解くんだ。寧ろ早いだろう」

言外にお前たちには無理だと言われ、今度はエンジェルが手を出そうとしてホットアイに止められる。こんなところで戦闘が始まって一銭にもならないからだ。

「ならば、より一層奴の手は必要だろう。レーザー奴をここに連れて来い。コブラ、ホットアイ、エンジェル。貴様らは正規ギルド共を排除して来い」

「遠いなア。だが、問題ねえ」

「しゃあねえ、行ってくるか」

「ねえ？競争しない？一番正規ギルドを倒せた人が」

「100万^{ジュエル}J!!?のつたア!!?デスネ」

「高いゾ」

ブレインの指示に従い、各々が動き出す。

「わ、私……!!?絶対手を貸しません!!?」

巨大なムカデに対する恐怖と、人を人とも思っていない面々の言動への恐怖。それらに打ち勝ち精一杯の抵抗を見せるウエンディ。けれど、ブレインは小馬鹿にしたように笑う。

「いや、貸すさ。うぬは必ず、奴を復活させる」

精一杯睨みつけるウエンディ。けれど、じつと見つめられる視線を感じて、ふとそちらに意識がいった。視線を辿れば白衣の男の姿。これが色のあるものであれば、ウエンディもそこまで怯えないだろう。けれど、感じるのはまるで実験動物でも観察するかのような、感情の籠らない闇のような視線。思わずヒツという悲鳴が口から溢れる。

「ああ、ベルよ。隠蔽を解く他に、機会があれば貴様も正規ギルド共を排除してもらいたい」

「僕の仕事を増やすか。まあ、いいだろう。造作もないことだ」

ベルと呼ばれた白衣の男はため息を溢すと、踵を返す。ほっと安堵するウエンディは気絶したハッピーを抱えて、思わず弱音を溢す。

「助けて、シャルル……ジエラール……」

思い起こすのは親友とも言えるシャルルと、かつて自身を救ってくれたジエラールの姿。次いで脳裏に思い浮かべるのは月光に輝く道化の姿。

それは突然の出会いだった。

まだ幼いウエンディが受ける依頼といえは、おつかいの延長線のよくなものばかり。それでもやはり危険というのはどこにでも潜んでいるもので、薬草の採取の際、闇ギルドと遭遇してしまったのだ。逃げようにも足がすくんで逃げることも叶わず、シャルルに運んでもらおうにも既に一撃食らって気絶してしまった。

伸ばされた手に怯えて目を閉じた瞬間、目の前から人の消える気配。そして遠くに飛んでいく悲鳴。恐る恐る目を開けばそこに白い衣に身を包む道化がいた。

当時はその存在を知らず、また早々に立ち去ってしまったため名前もお礼も言えていない。だが、その颯爽と現れ人を救う姿に憧れに似たものを感じたのは間違いない。

後日、見かけた雑誌でその存在を知ってからにはより一層憧れは強くなったのを覚えている。戦闘は苦手だが、いつか私もこんな風に人を助けられたらな、と何度思ったことか。

今作戦では道化が所属しているとと言われるフェアリーテイルが参加すると聞いて胸が躍った。しかし、残念なことに今回は不参加。この場にいるはずもない。だからこそ、ウエンデイは強く願う。

「助けて、道化さん……………」

気絶したハッピーを抱きしめて感じる温もりが、今のウエンデイの唯一の救いであった。

ジエラール

六魔討伐より先に、ウエンディとハッピーの救出とこととなった一行。

位置情報や各員との連絡の取れる青い天馬のヒビキと戦闘には向かないとのことで残ったルーシイ。そして各々のギルドに別れ樹海の中を搜索する。

無論、カイトが襲われた白衣の男という存在もあり、森の中には他の協力者ないし、傘下のギルドが待ち構えている可能性は存分にありえる。

だが、今回集ったのは各ギルドの精鋭たち。苦戦はするかもしれないが、負けるとは微塵も思っていない。万が一六魔と遭遇した時は撃退せず、逃走か時間を稼ぐことが推奨されているが、寧ろ返り討ちにしてやると一部は息巻いていたのは当然といえよう。

「さあ、早く行こう！友よ!!？」

カイトを先導する一夜。本来であればギルドの仲間と共に行動する予定だったのだが、いかんせんカイトは乱戦となると多くの手札を失うことになる。その点、一夜の香り魔法との相性は良く、戦意喪失の香りパルファムをはじめとしたサポートに加え、一夜自身も戦闘を行えるオールラウンダー。トリツキーナ戦闘が主軸のカイトとはどちらもがサポートと攻撃に回れる関係であった。

意気揚々と先頭を走る一夜とは反対に、カイトの気は晴れない。六魔にしてやられたこともそうだが、何より頭痛が酷いのだ。はじめは毒のせいだと思っていたが、時を追うごとに増す痛みに思考を乱され、正直搜索どころではない。

しかし、そうも言ってられないのが現状。動ける人員を動かさなければ事態は好転しない。

(しっかし、気味の悪い森だねえ)

故郷の霧の谷が先の見えない恐怖を駆り立てるとすれば、ワース樹海は肌に纏わりつくような粘つく恐怖とでも言うのだろうか。もがけばもがくだけ呑み込まれるような底なし沼のような、気持ち悪さがそこにある。

一夜を見るに何の影響も見られないことから、この感覚は己自身しか感じていないのかもしれないと仮説を立てる。では何の影響なのかと考えようとして、また頭痛が疾る。苛立ちのまま小さく舌打ちをすれば、何かを発見した一夜が声を上げる。

「おお！見よ、友よ！！？」

一夜が指差す先、そこにあるのは黒く染まった一本の樹。明らかに不自然なそれは先端に当たる部分から黒いモヤのようなものが出ており、より一層周囲との違和感を醸し出していた。

モヤの行先は樹々に阻まれて確認できないが、どうやら樹海の奥の方に向かっているようだ。一夜が恐る恐る近づき匂いを嗅げば「メエーン！！？」と声を上げて顔を顰めていた。

「な、なんとという強烈な負の香り……」
パルファム

「一夜、しっかりしておくれ」

あまりの匂いに倒れる一夜を引つ張り起こし、カイトは黒く染まった樹を注視する。見ているだけで不愉快感を抱く樹に生命の気配はなく、かと言って葉や木肌が枯れているわけではない。それこそ、魂だけを抜かれたような状態だ。よくよく見ればその樹木以外にも黒く染まったものがあり、どれも一様に同じような状態である。

六魔の誰かがやった、と考えるのは難しい。樹々の魂を抜いたところで意味を成さないからだ。

では、原因はなんだと痛む頭を無理やり思考させて、仮説を立てる。

「……………一夜、ニルヴァーナについて何か知ってるかい？」

「む？いや、作戦会議でも言った通り、強力な破壊魔法という事しか知らないな」

「そう……………」

この地に封印されているニルヴァーナは破壊魔法ということもあり、もしや魂をエネルギーとして貯蔵しているのでは？と考えたが、その線は低いだらう。いくつかある仮説の中では確立の高い方ではあるが、これが正しかったところで対抗策を練ること自体不可能だ。

(ああ、もう。面倒だなあ)

できることなら頭を掻き乱して転げ回りたい気分だが、そうしたところで何も成さないと自身の中の冷静な部分がそう告げる。

それに樹木のことにも気になるが、まずはウエンデイの救出並びにエルザの解毒だ。

「一夜、今はとにかくウエンデイちゃんが最優先だよ。エルザが危ない」

「そうだ！こうしてはおれん！うおおおお！！？待っていてくれ、マイハニー、エルザさー！ーん！！？」

「あ、一夜。そっちは」

カイトの言葉に触発されてか、一夜は走り出す。ご丁寧に自身の速度を上げる俊足の香りの魔法を使って、それこそ風のように走り出す一夜。

しかし、その先にあるのは崖である。

「メエー……………ん！！？…？」

「崖だよ……………つて遅かったかあ」

当然、一夜は飛べるはずもなく、カイトが注意を促すよりも早く崖から落ちてしまった。幸い、そこまで高度があるわけでもなく、下も青々とした樹々で埋まっている。怪我はしているだろうが、放っておいても大丈夫だろう。

(……………ん？いやいやいや)

ふと、一夜を見捨てる選択肢が出てきてカイトは頭を振る。確かに死んではいけないだろうが、下手をすれば歩けないほどの重傷を負っているかもしれない。それに、数少ない友を見捨てることなどできるはずもない。

助けに行こうとは思っている。心配する気持ちも本物だ。けれど、カイトの身体はそこに縫い付けられたかのように動こうとしない。

(助けに……………いや、友達って言っても所詮向こうは人間だし……………いやいや、だからこそ助けに行く……………価値があるかなあ)

ぐるぐると思考が巡る。二転三転としても定まらない結論。早く助けねばと叫ぶ良心を封殺する冷徹な心。

頭がガンガン痛み出して、耳鳴りがうるさくて、視線が虚いだして。そうして崖を覗く形で固まっていれば、いつの間にか周囲に人が集まり始める。六魔が妨害のために用意した傘下の闇ギルドだ。

「おいおい、正規ギルドがこんなところでなあにしてんだあ？」

「大人しく帰った方がいいんじゃないかなあ？」

「ま、大人しく帰すわけねえんだけどな!!？」

ゲラゲラと笑う声が耳障りで、周囲を囲う人の気配が鬱陶しくて、呼吸の音でさえ気に障って。そうして何かがぷつんとカイトの中で

何かが切れた。

ぐつくつと煮えたぎる怒りが身体を駆け巡り、顔から力が抜けて、あれほど痛んだ頭痛が急にクリアになる。

「じゃ、てめえも落ちなあ!!？」

一番近くにいた人間の振り上げた武器がカイト目掛けて振り下ろされる。それが酷くスローモーションに見えて――

「人間風情が」

ふわりと、自然に、悪魔は舞い降りた。



「ぎゃほっ?」

ワース樹海の片隅で、一人の男が目を覚ます。男の名はザトー。六魔の傘下である裸ネイキツドの包帯男ドマミーのギルドマスターである。その側には同じくギルドマスターであり兄弟分のザトーの姿、周囲を見渡せばメンバーの面々が気絶して転がっていた。

なぜこんなことになったのかと思いつけば、脳裏に浮かぶのはナツとグレイの姿。その2人に叩きのめされたことを思い出す。

「くそっ、あのクソガキ共がっ!!? おい! さっさと起きろ、テメエら!!」

たった2人に自らのギルドを壊滅させられたという怒りが湧き、自然と拳が震える。足元に転がるメンバーに蹴りを入れながら起こし、お礼参りの準備を進める。このまま舐められたままでは示しがない上、何より六魔將軍の怒りを買ってしまう。そう考えたばかりでぞくり、と背筋が震えて恐怖に頭が支配される。

「ザトー兄さん、無事か!?？」

「ああ、無事だぜ。ガトー兄さん」

「ヨシ!!? テメエら、早くさっきのガキ共見つけ出すぞ!!? じゃねえとオレらが殺される!!?」

「ああ、無事だぜ。ガトー兄さん」

「それはさっき言ったぜ、ザトー兄さん」

「ああ、そうかい。ガトー兄さん」

いつも通りの2人のやりとりを挟み、メンバー共々痛む体に鞭打つてすぐさま搜索をば、と動き出そうとした時だった。

「おやおやおあ? まだいたのか」

背の高い樹々に覆われた樹海に響く、呑気な声。だというのにその場にいた全員が身体を震わし、何事かとそちらに視線を向ける。

そこにいたのは吸血鬼と化したカイトの姿。目に見えてわかる異形。芯から凍えるような恐怖の体現者。たった一言だけしか発していないのに、あろうことが全員が怯えて言葉が出せないでいた。

「つぷ……と。流石にもう呑めないしなあ。さて、どうするか」

「ヒいっ」

「っ!? やれエエ!!?!!?」

口を開くたびに匂う、濃厚な血の香り。それが堪らなく恐ろしく

て、近くにいた人間が気絶する。それを合図に気を取り戻したガトーの命令に、全員がカイトに襲い掛かる。この恐怖をなんとかさせねばと。この不安の種を取り除かねばと。

しかし、対するカイトは構を取ることもなく、絶対零度の視線を向ける。それは家畜に反撃されたような煩わしさからくる怒り。敵うはずもないという驕り。生者に対する死者の怨念。

「人間風情が……………生意気だよ」

刹那、カイトの口から発せられたのは言葉にならない異音。ガラスを引つ掻くような、フオークで皿を引つ掻くような、不愉快な音を集めて混ぜたかのような不快な音の集合体。

それだけ、たつたそれだけでその場にいた全員が白目を剥いて気絶した。

「魔法のひとつでこの有様だなんて……………あー、いやいや、違う違う。何してるんだ、俺は」

頭を振って冷静さを取り戻そうとして、それでも思考がどんどん冷えていくのを感じる。ガトー達を気絶させたのは混沌魔法のうちのひとつ、カラミティベル災厄ノ鐘。聴いた者の意識を奪うものだが、本来であればカイトはこの魔法を使うことを良しとしない。何せ効果範囲が広過ぎるのだ。敵のみならずまだしも、味方も入り混じっている状態であれば言うまでもなく、例えばこの場にいなくとも音が聞こえただけで影響を及ぼす魔法であるが故に。

それを何の躊躇いもなく使った自分自身の判断が信じられず、正気に戻ろうと頭に腕を突っ込んで脳を掻き回したりするが、それでも思考に熱は戻らない。まるで霧の谷を抜け出した時のようだ、と口の中で転がして、腕を抜く。

見る者全てに憎悪して、恨んで、傷つけていた幼少期の自分が身体を動かしているような違和感、自分で自分を抑えられない無力感が胸

の中で渦巻くが、それもすぐに嫌忌の中に飲み込まれる。

ため息ひとつ溢して、カイトは歩き出す。普段であれば彷徨うはずのカイトの足取りは、しっかりと確実に、六魔が仮説拠点としている古代人の集落を目指していた。



どくん、どくん、と心臓が早鐘を打つ音が嫌に耳に響く。

握った拳がわなわなと震え、頭に血が昇る。

口の中がカラカラに乾き、舌が回らない。

けれど、一言。その一言だけがすんなりと音となり、空気を震わす。

「ジェラール……………」

ナツとグレイ、シャルルの3名で捜索を行い、途中六魔のひとりレーサーの妨害がありつつも、グレイに任せてやつとウエンディの元にたどり着いたナツとシャルル。

けれど、待ち構えていたのは勝利を確信したようにほくそ笑むブレインに、泣きじやくるウエンディ、怯えるハッピー。そして、楽園の塔で死んだはずのジェラールの姿。

「ごめん……………なき……………この人は私の、恩人……………な、の……………」

「ウエンディ!!? あんた治癒の魔法使ったの!!? 何やってんのよ!!? その力を無闇に使ったら!!?」

「ウエンディ!!?」

涙を流しながら謝罪するウエンディ。それを叱責するシャルルだったが、限界がきたのだろう。気絶してしまったウエンディに駆け寄るハッピー。けれど、ナツの視線はジェラールから離れない。

「な、なんでお前がここに……………!!?」

脳裏に浮かぶは楽園の塔での出来事。ゼレフ復活のためにエルザを悲しませ、シモンを殺した悪行の数々。

「ジエラアアアアアアアル!!?!?!?!」

拳が炎に包まれ、何の感情も感じられないジエラルルに向かって突進するナツ。けれど、ジエラルルが手をかざして撃退しようとした寸前、洞窟の入り口が爆発した。

その音に一瞬全員が止まり、そちらを反射的に振り向く。

「あ、あー……………うん。ここで合ってる、よね?」

「カイト……………」

そこにいたのは吸血鬼の姿となったカイトの姿。爆発したと思っただのは高高度からの着地の音だったのだろう。洞窟が埋まっているようなことはなく、代わりにその場が陥没していた。

カイトは周囲を見渡し、突然のことで呆けるナツを見ると何かを思い出したように手を叩く。

「そう、君はナツだ。横にいるのがシャルルで、奥にいるのはハッピーとウエンデイちゃん。そう、そうだよ、ああ、君たちは味方だったはずだ」

「お前、何言って……………」

「ナツ……………?」

人知れず様子のおかしいカイトに警戒するナツ。確かにカイトはふざけた事をするし、下手な笑みを浮かべて誤魔化したりもする。けれど、一瞬とは言え仲間へ敵意を向けることなどしない。

偽物の可能性を疑うが、ナツの鼻は正確にカイトの匂いを嗅ぎ分けられている。間違いなく本物のカイトだ。そうしてジエラルルの方に視

線を向け頭を捻るカイト。

「ふむ……奥の君たちに見覚えはない。つまりは敵ということか。うんうん、そうだ、そうに違いない。……ああ、ダメだ。ごめん、ナツ、逃げてくれ!!?」

「おわっ!!??!!?」

突然カイトの姿がブレたかと思うと、次の瞬間にはカイトの爪がナツに襲いかかっていた。間一髪の所で飛び退いて躲すが、困惑は大きい。

「何すんだよっ!!?」

「ああ、くそ。君誰だっけ?身体が言うこと聞かないんだよ。うるさい、死ね」

支離滅裂な言葉を発しながらカイトの爪に魔力が集まる。そうして横薙ぎに放たれたのは混沌ノ爪。壁に刻まれた爪痕からは手加減した様子など微塵も感じられず、地面を転がって躲したナツの頬を一筋の汗が流れる。

「なんだ、仲間割れか?他所でもらいたいものだな」

「ナツ……エルザ……」

「どうした、ジェラール。早くニルヴァーナの封印を……になっ?」

ナツという単語を聞いてから頭を抱えるジェラール。見かねたブレインが声をかけた瞬間、足場がジェラールの魔法によって崩された。穴に落ちてゆくブレイン、そしてこの場で最も危険だと感じたのだろう。カイトがそちらに意識を向け、一足飛びでジェラールと相対する。

「オイ、カイト!!?」

「後にしなさい!今はウエンデイを連れて帰ることの方が重要でしょ!!?エルザを助けたいんでしょ!!?」

「~~~~つ!!?わかってんよ!!?!!?ハッピー!!?」

「あいさー!!?」

様子のおかしいカイト、そして怨敵とも言えるジェラール。その2人を見逃すことに強い抵抗を覚えるナツだが、シャルルの言も最もである。シャルルがウエンデイを、ハッピーがナツを抱えて洞窟を飛び出す。

「…………君が誰かはわからない。けれど、どいてくれ」

「カッカッカ♪奇遇だね、俺も君が誰か知らないよ」

ジェラールの掌から放たれた魔力の直撃を受けても、怯むことなく襲い掛かるカイト。繰り返される魔法や物理攻撃を躲すジェラールは流石の一言に尽きる。けれど、相手は人外。その動きは常人のそれではない。

「カオス・クロ混沌ノ爪!!?」

「くっ!!?」

狭い空間を四肢を駆使して駆け巡り、不意を突いたカイトの一撃がジェラールを襲う。だが、それは読まれていた出来事。攻撃の直後で硬直した一瞬。その一瞬の内にジェラールから放たれた濃密な魔力がカイトを襲った。

その一撃はカイトを壁に押しやり、そして天井の一部を破壊してカイトを生き埋めにした。後に残されたジェラールは荒く肩で息をすると、踵を返して外へと足を向ける。

(ああー、くそ。ダメだね、コレは)

ジェラールが去り、穴に落ちたブレインが這い出してジェラールの後を追う。洞窟内で自身以外の存在を感じなくなったのを確認すると、カイトは必死に積み重なった岩盤から抜け出そうと模索する。

けれど、手足胴体諸共が潰され、顔の半分も地面と同化している中、脱出は至難の技ともいえよう。傷ついたお陰か、それとも死にぞこなっているのが原因かわからないが、思考は嫌にすつきりとしていた。

(さてさて、どうしたものかねえ)

身動きはとれず、そして脱出してもまた思考がまともな保証もない。第一、捨てた筈の復讐心がまた燃えている原因すらもわからないのだ。

強いて言えば、まるで誰かの怨嗟が流れ込んできたような感覚。外から器の中に水を注がれたかのような、継ぎ足されたような意識。胴が潰れているのに湧き上がる吐き気に辟易しながら、カイトはどうかならないのかと思考を巡らせるのであった。

高らかに勝利を確信するブレイン、そして眼下に広がる古代人の都市を眺めるコブラ。移動する城塞都市、それがニルヴァーナの正体である。ブレインたちがいるのはその中心部であり操縦席である塔、通称王の間。離反したホットアイを除けば最早3人となった六魔將軍であるが、些細なこと。ブレインの脳裏には輝かしい未来が描かれていた。

その時ブレインたちの背後からぱちぱちと、気の抜けたような拍手が鳴る。

「念願成就おめでとう、と言ったところか？」

そこにいたのは白衣の男ベル。苛立ち隠さない表情で、ここまでの足としていたのだろう、腰掛けていた巨大ムカデから降りてブレインに近づく。

「テメエ、今更なんの用だ？」

「黙っている、蛇男。僕はブレインに用があるんだ」

ブレインの側に控えていたコブラがガンを飛ばして威圧するが、対するベルも絶対零度の視線を向ける。しかし、ブレインが「よい」と指示を出せば、舌打ちひとつ飛ばしてコブラが下がる。

「して、どうした、ベルよ。我らが祈願は成された筈だ」

「そう、貴様たちの目標だ。……なぜあの男、ジェラルルを復活させた？封印の解放は僕に任せた筈だろ？」

ベルが苛立つ原因は一点、自身に任された筈の仕事を横取りされたからだ。ベルの目的はニルヴァーナの存在の証明、並びに古代人の遺産の調査。故にニルヴァーナの解放は別に六魔將軍でなくともよかったのだ。

今回は偶然目的が一致しただけであり、六魔に対する仲間意識など持ち合わせていない。だからこそ事前にブレインと魔法契約を交わしている。

内容を要約すれば

1. 互いを害することを禁ずる。
2. 外部からの敵性勢力に対し互いに協力し合う。
3. 契約の完了はベルのニルヴァーナの十分な調査を終えてからとする。

以上の3つのうちひとつでも違えば契約に判を押したブレインかベルに死の制裁が加わるのだ。

だからこそベルは気に食わない。ブレインの行動は契約に引っかからず、ブレインの描いた絵図の上にいることを。

「ふっ。知れたこと。万が一に備えての保険だと言った筈だ」

「そんな言い訳が通じると思うのか!!?」

「通じるとも。うぬにはそれしか道がない」

ブレインに言われなくともベルもわかっている。痼癩のまま攻撃しても益はなく、それを呑み込むしかないということ。出来ることなら自分の手でニルヴァーナの復活をと目論んでいただけあって、失望と苛立ちがベルの胸の中で渦巻く。

「それよりも、うぬの仕事はどうした？ニルヴァーナの調査があるのだろうか？」

「っ!!?わかってる!!?だが、これ以上の邪魔は容赦しないからな!!?」

捨て台詞ひとつ飛ばして、ムカデに乗るとそのまま塔を降るベル。

「チッ！ムカつく野郎だ。ブレイン、なんであんな奴を協力者にしたんだよ？」

「ふっ。コブラよ、あやつ魔法を知っているか？」

「ああ？確がデツケエ蟲を召喚するんだろ？」

「否、それは違う。あやつ魔法は蟲を産み出すのだ」

ベルの操る魔法「蠱毒」は蟲を産み出す魔法。通常であれば精々が蝶や蜘蛛など、よく知るサイズのものしか生み出せない戦闘には向かない魔法。けれど、ベルはその魔法を根本から改造したのだ。

魔法陣の仕組みを書き換え、魔力の流れを新たに作り出し、そして出来上がったのが人のサイズを優に超える毒虫の生成。毒の種類はいくつも有り、何より生半可な魔法では蟲は止められない。そして魔力の続く限り蟲は産み出される凶悪な魔法。

その言葉を聞いてコブラはぞつとする。毒の滅竜魔導士であるコブラならば相性はいいが、しかし物量戦に持ち込まれたらと思うと勝利できるかわからないからだ。

「ワシから言わせれば、奴は自尊心の高い阿呆よ。しかし、その殲滅能力の高さには目を見張るものがある。それを上手く使えるのであれば使うしかあるまい」

「はっ！利用するだけ利用するってことか」

「あくまで協力関係であれば後腐れもあるまい。では、光崩しを進めるとしよう」

ブレインが杖を一振りすれば展開される数多の魔法陣。それらが連結し、動力部に接続されるとニルヴァーナは動き出す。最初の犠牲者は既に決まっている。目標に向けてブレインはニルヴァーナの歩みを進めさせる。

「進め!!？古代都市よ!!？我が闇を光へと変えて!!？」

高々と声を上げるブレイン。その真上にひとつの影が舞い降りる。

「オレが止めてやるアアアアアツ!!?」

炎を吐きながら飛来するナツ。その背中にはハッピーの姿。かくして命運を分ける戦いは始まるのであった。



「はあ、はあ……」

ニルヴァーナの一角。外周部に位置するそこでシャルルは荒い息を立てていた。

「ごめんね、シャルル。無理させちゃって」

「私の事はいいの。それよりアンタ、こんなトコまだ来てどうするつもりなの?」

側にいるのはウエンディ。戦闘能力はお察しである筈の彼女であるが、それでも無理を言っここまでシャルルに連れてきてもらったのだ。

シャルルとしても危険な地面にいるよりはマシだとは思っているが、しかしなぜ頑なにもウエンディがこの場に來たがったのかはわからないでいた。

「アンタまさか、まだジェラールつてのを追って……」

「違っ!!? あ、えと……それもちよつとはあるけど……」

言い淀んだウエンディを訝しめば、返ってきたのは芯の通った言葉。
葉。

「私、なんとかしてそれを止めなきゃって!!? 私にも何かやれることがあるかもでしょ!!?」

ウエンディを眺め、そしてシャルルに視線をやる。

「喋るネコ、か……………興味深いな」

「聴いてるの!??ウエンディ、しつかりして!!?」

「あう……………はっ……………」

軽い酸欠に陥っているウエンディ。けれどベルは拘束を緩めようとしなない。どころかその反応を観察する始末である。話が通じないと判断したシャルルがムカデの顔目がけて突撃しようとするが、悠々と躲されるだけである。

「天空の滅竜魔導士……………他の魔導士と比べ、滅竜魔導士は耐久に優れていると聴くが、それはどこまでだ?酸欠からどのくらい耐えられる?毒の耐性はどこまでだ?この拘束から脱出する術はあるのか?」
「やめなさいよ!!?」

ムカデの対処は不可能と判断したシャルル。ならば術者をとベルに向かって突撃するが、しかし頭を掴まれて止められてしまう。

「それにこのネコだ。ネコでありながら二律歩行し、言葉を操り、剩え魔法を使う。これは本当にネコか?ネコに類似した何かの可能性は?中身はどうなっている?……………これは論文が捗りそうだ」

「むくっ!!?むぐくっ!!?」

「しゃ……………る、る……………」

酸欠の影響で朧げに映る視界。それでもシャルルが危険な状況だと言うことはわかった。しかし、自身はこの拘束から抜け出せず、また反撃できるような手段も持っていない。

何もできないこの身がいつそ恨めしいときえ思ってしまう。それでも何かできないか、何か手段は、と回らない頭を必死に働かせる。けれど思い浮かぶのは走馬灯。ジェラールに助けられ、化猫の宿に拾

われ、シャルルと出会った過去の記憶。

その中で一際強く思い浮かんだのは白い衣に身を包んだ道化の姿。ウエンデイの憧れた、弱気を助けるヒーローの様な人。

「た、す……け………」

人知れず言葉が溢れる。何もできない自分が悔しくて、助けを呼ぶことしかできない自分が恥ずかしくて、失うことが怖くて、大粒の涙を零しながら懇願する。

「助け、て……ど……け、さ………」

この場にはいないはずの人間を呼んでも意味などあるはずもない。苦し紛れに溢れた願い。けれど、思いとは裏腹に、その身体から締め付けられる感覚はなくなり、ふわりと誰かに抱えられた。

急に入ってきた酸素に咽せ、荒い呼吸のまま朧げな視界で誰なのかを確認する。

「カイ、ト……さん？」

一瞬、ツノのようなものが生えている様に見えたが、瞬きの内に消えてしまう。けれど、ツノの有無に関わらずその表情はどこかぎこちなく、けれどこちらを安心させるように微笑んでいるのであった。



助けて、と声が聞こえた

無垢なる祈りの声が

純粹なる願いの声が

救いを求める声が

願いを聞くのが神の役目ならば、叶えるのは悪魔^{我等}が領分。悪魔^{我等}の本懐。悪魔^{我等}の使命。

ならば、この身は参じねばならない

そこに善も悪もなく、請い願う者のために身を焦がす

周囲を渦巻く絶望も、怨嗟も、今こそは我が身を動かす燃料に過ぎず

悪感情を飲み干して、岩盤を溢れる魔力で破壊し、それをそのまま推進力とする

最短距離を、最善策で、最速で駆け抜け、願いの先にいたのは少女の姿

それが誰かなど、今は些細なこと

拘束する蟲を切り裂き、捕らえられたネコに手を伸ばす

腕の中で咳き込む少女

苦しげではあるが生きている

……ああ、ようやく

ようやく我は誰かを救えたのだ



「貴様……っ!!?」

怒りに満ちた表情で、侵入者であるカイトを睨むベル。研究対象を奪われたのもあるが、自身の意のままにならない現状に一番腹を立てていた。奥歯を噛み締めて殺意をぶつけるが、当のカイトは何のその。というよりも現状が把握できないでいた。

何か夢を見ていたようだが、それも思い出せず。腕の中で安堵から涙を零すウエンデイと、反対の手で鷲掴みにされてるシャルルの姿、そして敵意を向けるベルがどういいう状況なのか説明してくれる。なるほど、襲われていたのかと合点していれば、シャルルから嫌味が飛んでくる。

「ちよつと!!?いい加減離しなさいよ!!?」

「ああ、うん。ごめんよ」

腕の中のウエンデイとシャルルを地面に下ろせば、抱き合う2人。よほど切迫した状況だったのだろう。経緯はわからないが、助けられたことには変わらない。人知れず安堵を零し、ベルの方を向く。

「さあてさて、このまま回れ右してくれたらこちらとしても助かるんだけどねえ。どうかかな?」

「ふざけるな!!?貴様こそ、その2人を残して消えろ!!?そいつらは僕の研究対象だ!!?」

「だよねえ………はあ」

ベルの手により作り出された新たな巨大ムカデ。それが闇夜に紛れたウエンデイたちを奪おうとするが、それよりも早く影の魔法がム

カデを捉え、ニルヴァーナの外へと放り出す。

初戦はエンジェルに意識を向けすぎて不意を突かれたが、手の内が割れた今、その手は通用しない。それがわかったのか更に殺意を強めるベルの手に展開された魔法陣からぞろぞろと数多の蟲が這いずり出す。ムカデやハチ、サソリやクモ。手のひらサイズのものもいれば、見上げんばかりの巨大なものと大きさも様々。共通しているのはそのどれもが毒を持つということ。

「やだなあ。嫌いなんだよね、蟲って」

軽口ひとつたいて、その身に魔法を纏う。無数の足や細かい毛の生えた体、無機質な瞳。そのどれもに嫌悪感を抱いてしまう。一匹二匹ならまだしも、視界を覆わんばかりの数を前にして本音を言えば、回れ右してさっさと逃げ出してしまいたい。けれど、そうも言ったられないのだ。

ちらり、と背後を盗み見て、固まるウエンディとシャルルの姿を確認する。夢は臍げではあるが、しかし確かに聞こえたのだ。

助けて、と。

ならば、手を貸すのも致し方なし。この身はいつだって誰かを笑顔にするために。

「さあさ、お立ち会い。これよりは数多の怪物踏み倒し、姫を守る道化の物語……なくんてね♪」

身に纏うは純白は他を拒絶する象徴

黒を穢し、全てを飲み込む表象

誰かが求めた噂話^{御伽}

「色々御宅を並べても、結局の所は私怨による復讐劇^{リベンジマツチ}なのさ♪」

カオス・クラウン
混沌ノ道化師を纏い、仮面の下でカイトは軽快に笑うのであった。

蟲王

息を呑む、とはまさにこのことだろうと、呆然とする頭の片隅でウエンデイは思う。

白い道化装束を身に纏った憧れの人。その正体にも驚いたが、それよりも驚愕したのは目の前で行われている戦闘だ。無数の、それこそ波のように迫る蟲の大群をカイトはその場から動かず、影魔法を使って撃退していた。

「デーモン・ハンド偽・魔王ノ御手!!？」

影から作り出した巨腕が大きく手のひらを広げ、カイトの動きに併せて振り下ろされる。地響きと共に広範囲の蟲が潰されるが、同時に古代人の建築物も潰されて煙を上げる。後続の蟲たちがそれに怯えることもなく襲い掛かるが、腕の一振りで彼方へと吹き飛ばされる。

「ちよつとー少しは加減しなさいよー！」

地響きの度にウエンデイが身を縮めるのを見てシャルルから苦情が入るが、カイトはカラカラと笑って応える。

「カッカッカ♪そうしたいのはやまやまなんだけどねえ……そうもいかないみたいだ」

「やめろオ!!？」

砂塵を貫き、雨霰の様に降り注ぐいくつもの細かな針。迎撃は不可能だと判断したカイトは瞬時に防御魔法を展開。難なく防ぎきり、砂煙が晴れた先にいたのは空中を飛ぶベルの姿。単独での飛行でなく、背中には人と同サイズの蛾が貼りついていてる。

「貴様っ！この都市の価値をわかつているのか！？無闇に破壊するんじゃない！！？」

「カッカツカ♪生憎、歴史には疎くてねえ」

「チツ！低脳がつ……………！！？三夜毒蛾さんやどくが！！？」

ベルの指示のもと、周囲に展開された魔法陣から生み出された蛾。数はそれこそ十数羽ほどだが、羽ばたきひとつで大量の毛が射出される。針だと思っていたのはどうやら毛のようだ。

さすがに何度も防ぐようなことはせず、ウエンデイとシャルルを抱えて大きく飛び退く。軽い足取りで建築物の屋根の上に飛べば、背後から待っていたとばかりに現れた巨大なサソリがその尾を振り下ろす。

ブラックドック
「影 犬！！？」

足元から現れた影犬が間一髪のところまでサソリの尾を噛みちぎり、その身諸共屋根から落ちる。しかし、状況は好転していない。落ちた影犬との繋がりが切れたことから、周囲は囲まれているようだ。

「カイトさん、脚が！」

米俵のように抱えられたウエンデイが悲鳴に近い声をあげて釣られて見れば、いつのまにかカスっていたのだろう。先程の蛾の毛が脚に何本か刺さっており、その脚が倍近く腫れ上がっていた。試しに動かしてみようとするが、脳天を突くような過剰な痛み。反射的に声を押し殺すことはできたが、これでは移動もままならないだろう。

「待つてください、今治療を！」

「待ちなさい、ウエンデイ！アンタ、また気絶したいの！？？」

「でも……………」

「ふん。最早これまでだ。さあ、その実験体を渡してもらおうか？」

空中で勝ち誇るベルに、カイトの治療の有無で騒ぐウエンデイとシャルル。少し前ならばそれらの喧騒がノイズにしか聞こえなかったかもしれないが、今は違う。冷静に状況を分析し、淡々とウエンデイとシャルルを守護する手段だけを模索する。

なぜこんなにも2人を助けようとしているのか、カイト自身もよくわかっていない。けれど、心が叫んでいるのだ。守護せよと、救えと。ミラジエーンに召喚時よばれたに似た使命感のみが胸中を支配し、カイトは冷徹に判断を下す。

「シャルル、ちよつとウエンデイちゃんの目を塞いでな！」

何を、とシャルルが問い返す前に、カイトの影から2振の剣が伸び出す。それが交差する場所に腫れ上がった患部を見た瞬間、何をするのかわかったシャルルが急いでウエンデイの顔に張り付く。

「きやつ!!?・シャルル!!?」

「いいからー!・アンタは目閉じてなさいー!」

ウエンデイの視界が封じられたことを確認すると、容赦なく剣が交差して、患部を切り落とす。一瞬の喪失感、けれどまばたきの内に新たな脚が生える。

ワース樹海で血を啜ったお陰でこのくらいの数であれば瞬時に回復できるようになっていたカイト。不敵に笑うカイトを興味深そうにベルは睨む。

「ほう、再生者リジエネーターか」

「ま、そう思ってくれていいよ。シャルル、もう大丈夫だよ?」

「その足どうにかしていいなさいよ!!?」

「ああ、そうだった……ねっ!!?」

足元から伸びた影が残骸を掴むと、勢いよくベルに向かつて投げつける。舌打ちひとつ、反射的にそれを手で弾けば、屋根の上にはいたはずのカイトたちがいないことに気がつく。

どこに？と疑問を感じて視線を少し巡らせば、ウエンデイとシャルルの悲鳴を片手に、屋根を飛び回りながら逃げるカイトの姿があった。

「きやあああああ!?」

「ちよつとおおお!?」

「カツカツカ♪」

「くそっ! 追えっ!!」

蟲たちに指示を出してすぐさまそちらに向かわせる。こういう時にこの魔法は頼りにならないと内心毒づくベル。蟲毒の魔法は確かに強力である。毒を精製するとなれば話は別だが、蟲単体であれば魔力はそう消費しない。けれど、生み出した蟲は単純な命令をひとつしか聞けず、行動と攻撃はその都度指示を飛ばさなければならぬのだ。

屋根に着地して、すぐさま高い跳躍を繰り返すカイト。こうも激しく上下されては蛾の狙いも定まらず、着地点を狙おうにも蟲たちはまだ追いついていない。そして最後尾の蟲が移動した瞬間、ベルはカイトが心の底から笑ったように見えた。

「あーあ。追いかけて来ちゃったねえ♪」

醜悪な、加虐的な、悪魔のような笑み。それを見た瞬間、ぞくりとベルの背筋が震える。

「混沌魔法」

「っ! やれエ!!」

きよこうのおおあな

「虚口ノ大穴!!」

破れ被れの特攻。それはベルもわかっていた。この攻撃は通らないと。自らの背を支える蟲だけを残しての暴力の波。けれど、誰が予想できるだろうか。巨大な魔法陣が展開されたかと思うと、刹那盛り上がった影でできた巨大な口が、菌茎を剥き出しにその直線上にいた蟲たちを余すことなく飲み込んでしまうなど。

しかし、焦りは一瞬。確かに、たったひとつの魔法で消されたのは驚いた。だが、呑まれた蟲たちのほとんどはローコストで生成できる毒を持たせていない蟲ばかり。流石に回数をすぐさまに創り出すことはできないが、それなりの数は用意できる。

すぐさま反撃を、と魔法陣を展開しようとした瞬間、視界を覆うほどの影の口が消え、更地へと成り果てた跡を飛び越えてこちらへと飛び込んでくるカイトの姿。拙いと驚愕する間もなく、カイトの魔法が駆り出される。

「カオス・クロウ
混沌ノ爪!!?」

「ぐうっ!!?..!!?」

防御間に合わず、カイトの魔法はベルを袈裟斬りにし、背後にいた蛾の翅を切り裂いた。空中に留まることの出来なくなつたベルは錐揉み回転しながら、ニルヴァーナへと落ちるのであった。

続いてカイトも影の魔法を使って落下の衝撃を和らげる。それまで肩に担いでいたウエンデイを降ろすと、顔色の悪くなつたウエンデイがすぐさま膝をつく。

「き、気持ち悪いです……………」

激しく上下運動に加え、急激な方向転換。三半規管が狂って、目を回すのも仕方がない。吐き気を抑えるウエンデイを宥めながらシャルルはカイトに噛み付く。

「もうちよつと優しくできないの!?？」

「カツカッカ♪いやあ、あの魔法、展開に時間はかかるわ、術者諸共巻き込むわで使い勝手最悪なんだよね♪よしよし、ウエンデイちゃん、吐きたいなら吐いた方がいいよ?」

「うう……」

ウエンデイの背中をさするカイトに、触るなど激怒するシャルル。シャルルからすればカイトは怪しさ全開の不審人物。やることなすこと不快に思うし、何より洞窟の一件がそれに拍車をかけていた。今の場では頼りにしているが、油断はしないとキツく睨みつける。それがわかっているのか、これはどうしようもないと仮面の下で笑みを浮かべて両手を上げるカイト。その仕草がより一層不信感を抱かれているというのに。

「さてさて、このままここにいてもしょうがないし、どうにかしてコレを止めないとねえ♪」

「うう………そ、そうだ!早くしないと化猫の宿のみんなが!」

「おや、そうなのかい?だとしたら、尚更止めないとー!ツツ?」

刹那、カイトが腕を振るうと同時に甲高い音が辺りに響く。視線の先、カイトの腕で受け止めているのは、胴回りだけで人ひとりの大きさはある巨大ムカデ。強襲事態、問題ではない。問題はコレを生み出した術者がまだいることだ。

ブラックドッグ
「影 犬!!?」

「ひゃあつ!??」

カイトの足下から生み出された黒い大型犬。言葉なくともカイトの指示を察し、ウエンデイを背中に乗せシャルルを口に咥えると、すぐさまその場から離脱する。犬とは思えない跳躍を繰り返し、屋根伝いで目指す先は1番近いナツたちの元。

別れも何も告げず、困惑するウエンデイを他所に、カイトはムカデを切り裂くと、その先にいるベルを睨む。

手応えはあったはず。死にはしなくとも、暫く動けない怪我を負わせたはずのベルの身体には、確かに大きな血の痕がついている。けれどそれが広がる様子もなく、荒い呼吸をしているが傷を負っているようには見えない。レンズの壊れたメガネを投げ捨て、忌々しいとばかりにこちらを睨んでいる。

そしてなにより、その身に纏う雰囲気が変わっている。油断できない、何をするかわからない、見逃せない雰囲気。先程のようにウエンデイたちを庇いながらでは難しいとカイトは判断したのだ。

「それで？なーんで化猫の宿を狙ってるのか、教えてくれたら嬉しいんだけどねえ」

ゆるりと構えながら視線は外さず、そして周囲に影を散らす。一挙手一投足見逃すまいと睨みを効かせるカイトを、ベルは鼻で笑う。

「ハッ！サルが。かつてニルヴァーナを封印したニルピット族、その末裔である化猫の宿を標的にするのは当然だろう？」

「ニルピット族？」

「古代人の名だ。善悪を反転させる超魔法、ニルヴァーナを棲家とし、そして滅びたはずの歴史の影。ふん、ニルヴァーナを創り出したことは認めるが、所詮は滅びた民族。僕ならもっと上手く扱える」

ベルの言葉に、ああなるほど、と納得のいくカイト。ワース樹海に入ってから起こしていた頭痛の原因が判明したのだ。

反転魔法で周囲の悪を善に塗り替えたとしよう。確かに周囲に悪意を持つ人間はいなくなるかもしれない。けれど、塗り替えられた悪意というのは消えないのだ。悪意はニルヴァーナに充満し、そしてやがてそこにいる人々に影響を与える。その先にあるものを語るべくもない。

そうして死んでいた者の怨念、怨嗟、恐怖。それらがカイトに影響を与えていたのだ。人よりも魂というものに理解のある吸血鬼は格好の依代だったのだろう。我が無念を晴らさんと、我が仇を討たんと、我が怨念を報いらんと。

1人2人ならまだしも、何百何千という悪意に押し潰された結果がアレだ。内心くだらない、と一蹴するカイト。それは死んでも尚恨みを晴らさんとする魂と、そんな魂に踊らされた自身に対しての言葉だった。

さて、ここまで素直にベルが話したのは、なにも彼が心優しい人物だからと言うわけではない。知られても問題ない、知っていても対処できないという驕りからだ。

(周囲に蟲の気配はない。魔法を発動させた瞬間、拘束をーーッ!!
?!?!?)

そう考えたところで、視界からベルが消えた。そして次の瞬間、カイトの背後から現れたベルが頭を掴み、力の限り地面へと叩きつける。轟音と共に蜘蛛の巣に割れる地面。そして突然のことで一瞬、カイトの脳内が白に染まる。

「本来であれば、こんなもの使いたくはなかったが………貴様は図に乗りすぎた」

「ッ！クソッ!!？」

反撃として周囲に展開した影から拳を飛ばすが、先程と同じように瞬きの内にその場から消え、気づけば攻撃する前と同じ場所に立っている。瞬間移動、などではない。地面に濃い足跡が残っていることから高速での移動。それも視界に捉えることが難しい速度。

単純な強化魔法ではないだろう、と思案するカイト。これほどの出力ならば蟲を出さず初手で使えば済む話。けれど、そうしなかったということは何かしらのデメリットがあるのだろうか。

それを察したのか、ベルは鼻で笑うと自らの手札を公開する。

「ふん。貴様の考えている通り、バアル・ゼアル蟲王には欠点がある。だが、それよりも早く貴様を倒せば済むことだ」

自らの魔法を明かし、欠点があることさえ認める。内容から察して時間が経てば経つほどデメリットが大きくなるのだろう。即ち、カイトは遅延戦闘に徹すればいい。しかし、問題はベルの言う通り、時間を稼げるかどうかだ。

（スベック）身体機能は圧倒的に向こうのほうが上。小手先だけの搦手じゃ打ち破られるね、これは」

封印を解放してしまえば差は縮まるかもしれないが、しかし自我を保てるかどうかの不安要素が大きい。どうしたものかと思案するカイトのすぐ横で、「ああ、勘違いしているようだが」とベルの声がした。

「単純な強化魔法と一緒にしないでくれたまえ。この魔法は僕が独力で作り上げた、蟲の力を身に宿すものだ。即ち、毒の脅威は去っていないのだよ」

反射的に爪を振るうが、ベルは片腕のみでそれを防ぐ。代わりにとばかりにガラ空きになった胴体にベルの拔手が突き刺さる。瞬間、攻撃されたら箇所から燃えるような痛みが広がる。神経を直接焼かれるような激痛に叫びそうになるが、開けた口から悲鳴の代わりに魔法を放つ。

（カオス・ワッタス）「混沌ノ息吹!!?」

白と黒の業火がベルを包んだかと思いきや、そこにその姿はない。どこに行った?と探すよりも早く、上空から針の嵐が降り注ぐ。

腕を交差してそれを防ぎ、上空を睨めば背中から先程の蛾と同じような羽を生やしたベルがいた。いくつか腕に刺さった針から注入された毒がカイトの腕を侵し、何倍にも膨れ上がる。身を振るだけで走る激痛に顔を顰めながら、影から出てきた鋏が患部を斬り落とす。そうして再生した腕で今度は胴体の患部を抉り取り、再生させる。

「ふん。悪あがきを……大人しく死んでいればいいものを」

「カッカッカ♪フェアリーテイルの諦めの悪さ、舐めてもらっちゃあ困るよ」

精一杯の強がりひとつ。森の中で吸血したお陰で魔力は溢れんばかりに残っている。だが、それを活用できないというのは何とも歯痒いものだ。果肉の策として足元の影を広げ、魔法を発動する。

「デーモン・ハンド偽・魔王ノ拳!!？」

視界を覆う程の巨大な拳。しかし、ベルは一瞥しただけでその魔法を受け止める。ベルの身体には現在、甲虫の躰のように鎧に覆われており、ちよつとやそつとの攻撃では傷つけられないようになっていいる。それに加え、蟲の力と素早さ、さらには毒性まで備えているのだから厄介極まりない。

けれど、弱点はある。この魔法を発動中、魔力はもちろん理性や知性を犠牲にしているのだ。これは一種の代償魔法。削られた理性や知性は魔法を解除しても戻らない。

ベルの厄介な点は殲滅力だけではなく、その知性だ。それは単純に頭がいいというわけではなく、魔法陣を理解し、組み替え、再構築する理論の組み立てが上手いのだ。かつて最年少で魔法開発局に所属していた経歴もあり、その点だけであればブレインよりも上だ。

無論、この魔法はベルからすれば失敗作。けれど、それに頼らなければならぬほど追い詰められている証左でもある。

「ふん。この程度——ッ!?」

余裕綽々とばかりに受け止めた魔法。だが、次の瞬間同じ魔法が上空からベルを押しつぶす。舞う砂塵の中、怪我はないが虚仮にされたベルの頭に血が昇る。苛立ち混じりに砂塵を振り払えば、屋根を伝いながら遠くに逃げるカイトの姿。

「逃すかつ!!?」

背中の羽を羽ばたかせて、すぐさまカイトに追いつくベル。驚愕に染まる顔に優越感を見出し、腕の一振りでその顔を吹き飛ばす。しかし、吐き出すのは血ではなく無数の黒い蝶。呆気にとられるベルを蝶は包み込み、次の瞬間爆炎が包み込んだ。

それを建物の影からこっそり覗き確認したカイトは、急いで真逆の方へと走り出す。今のでどうにかなるとは思っていない。しかし、目眩しの時間が稼げれば充分。道すがら影で作り出した分身を四方八方に放り、本体である自身を紛れ込ませる。

(見たところ、身体強化に近い魔法。索敵なんかには向いていないはず。多分、蟲を出さないってことは、大部分のリソースをそちらに割かないと発動できないんだらうね)

はず、だろう。情報が少なく、そんな憶測でしか作戦を立てられない現状。これがもし間違っていたら確実に負けるのでカイトとしては当たってほしいところだ。

そして、カイトの憶測は完全に裏切られた。

「そこかつ!!?」

爆炎から現れたベル。羽は燃えて最早飛行は不可能となったが、その身体に傷はない。頭部から生えた2本の触覚がカイトを捉え、そし

て分身など意に介さず本体へと直線距離で向かう。

そして響く轟音と衝撃。カイトに追いついたベルはその頭を地面に押しさえつけると、怒りに身を震わせる。

「小癩な真似を……!!? 貴様達低脳なサル共は、大人しく僕の意志に従っている!!?」

口元から涎を垂らし、左目が複眼となりつつあるベルの知能は明らかに低下している。けれど、強い怒りが、身を燃やすほどの憤怒がなけなしの理性を保たせ、なんとか現状把握できている状態だ。

「ツ!!? 千影^{せんえいばんか}万化!!?」

周囲に散らした影を刃物に変換させて攻撃を試みる。けれど、赤黒く染まった皮膚を貫通することは叶わず、内心で苦心する。確かにベルの魔法は時間経過によるデメリットが存在する。だが、同時に時間経過によるパワーアップの効果もあったのだ。それは完全に計算外。力だけで言えばエルザよりも既に強い。逃げ出す術を模索するよりも早く、カイトを地面に押し付けたままベルは走り出す。

巻き込まないようにしていたはずの遺跡を破壊しながら、真っ直ぐに。血の軌跡を残しながら、ただただ真っ直ぐに進むのであった。

影ノ都

ベル、という人間を一言で表すのなら「天才」だろう。

齢3つにして言葉を流暢に操り、10になるころには大人顔負けの頭脳を有していた。特別な生まれ、というわけではなく、ごくごく一般的な家庭の一般的な両親から生まれた天才。両親はこれに喜び、多大な愛を持って育てた。

そうして出来上がったのは他を見下し、己の頭脳に絶対の自信を持った子供。実際に優秀な頭脳や成績を修め、15歳という年齢で史上最年少の魔法開発局局長となったのだから手に負えない。

いくつもの論文をまとめ、いくつもの魔法を開発し、羨望と妬みものになったいたベル。けれど、上には上がいるように、天才の上にもまた天才がいたのだ。

「紹介しよう。彼はジークレイン、今後この開発局の一員となる人物だ」

青い髪に頬に目立つ刺青をいれた、新人。初めはその程度の認識だった。どうせ自身の足元にも及ばないだろうと、たかを括っていたのだ。自身よりも若く、僅か14歳でエリートが集まる開発局に身を置くのは確かに腹立たしい。けれど、所詮はそれだけだと意識の外に外したのだ。

けれど、現実は違った。

若くして所属するだけあり、その業績は目を追うごとに積み上げていくではないか。そうして、1年も経てばその存在は誰もが認めるようになっていた。

「ジークレイン、聞いたぞ。この間の論文、評議会の中でもかなり評価が高いらしいじゃないか」

「ああ、ジーククレイン。この間はありがとう。お陰でなんとか魔法を組み立てることができたよ」

「ジーククレインさん！よかったから、この後お昼でもご一緒にどうですか？」

周囲の皆が皆、声を上げてジーククレインを褒め称える。それがなんとも面白くない。奥歯を噛み締め、誰もいなくなった部屋の中、机の上でペンを握る。新たな論文を、新たな魔法を、とどれだけ励んでもジーククレインには遠く及ばず、どころか焦りで視野が狭くなっていたのか些細なミスが増える始末。

「ベル先輩、この魔法陣間違えてますよ」

そうジーククレインに指摘された瞬間、ベルの頭の中は憤怒に染まる。辱められた、とそう感じたのだ。

「くそっ！どいつもこいつも……っ!!?なぜアイツばかり見る!!?なぜ僕の成果を見ない!!?」

握りつぶしたペンからインクが溢れ、途中であつた論文を黒く染める。しかし、それが気にならないほどにベルの頭には不満が募っていた。何より嫌なのは、こちらを見ないことだ。視線をこちらに向けていてもベルにはわかっていて。あいつはこの僕をただの踏み台や通過点としか見ていない、という事を。

実際、ベルは優秀である。けれど産み出す魔法の多くは人権被害を無視した物が多く、評議会から却下される事が多いのだ。だが、ベルはそれを認めない。評議会もグルなのだと言ふ勝手な妄想に陥ってしまう。

だからこそ、強硬手段に出たのだ。

誰もその存在を見ようとしさない、無かったことにしようとするものを表に出そうとしたのだ。

ファイオーレ王国に管理された禁書庫。そこに侵入し、保管されていたニルヴァーナの書を見つけた瞬間、これだと感じたのだ。これを白日の元に晒せば、誰も自身を侮ることなどないと、歓喜に震えた。けれど、当然禁書庫に侵入するなど犯罪であり、そうでなくとも侵入する過程で幾人もの番兵を蟲の餌としていることからベルはその場で捕獲。捕まえたのは他でもないジークレインだった。この事をきっかけに評議員入りが確実と噂されるようになったが、それはさておき。

薄暗い地下で、死を言い渡されるのを待つばかりのベルはやはり反省などしておらず、格子の間から天井を、その先にあるであろうジークレインに怨嗟に満ちた視線を向ける。

出される食事に手をつけず、恨み骨髓とばかりに過ごしていれば、突然面会に来たのは局長であるブレイン。

「……………何のようだ？」

ぶつきらぼうに、いつそ拒絶するようにベルがそう言えば、ブレインは不敵に笑みを浮かべる。腐っていたならば見捨てようと思っていたが、その瞳に陰りはない。これならば利用できる、歓喜に満ちていた。

「うぬをそこから出してやろう」

「ふん、戯言はやめておけ。いくら局長の立場だとしても、死刑囚を牢から出せるほどの権限はないはずだ」

「局長、ならばな」

含みのある言い方に片眉を上げ、怪訝そうに顔を顰める。そうしてブレインは自らの正体を明かした。

「ワシは闇ギルド、六魔將軍の1人。この程度、造作もない」

「……………見返りはなんだ？」

「うぬが禁書庫で見たモノの情報をもらおう」

本来であればブレイン本人が禁書庫に忍び込み、目当てのニルヴァーナに関する情報を盗み出すつもりであった。けれど、ベルが侵入したことにより強化された警備を抜けるのは中々の骨だ。

だからこそ、ブレインはベルに手を差し出す。これで何も覚えていないようであれば手のひらを返してしまうのだが、ブレインはそれはないと断定する。性格に難はあるが、ベルの頭脳は確かに本物だ。そうでなければベルは今頃クビになっているはずだ。目にした範囲ではあるが記憶していると確信していた。

少しばかり考えたベルは、「いいだろう。だが、条件がある」と不遜な態度を崩さない。それが面白く、そして計画が進む事に歓喜してブレインは笑う。

その日、死刑囚のベルの姿が牢屋から消えていたのは言うまでもない。牢屋に破壊の後はなく、ただただ忽然とその姿を消していた。同じ頃、ブレインも局長の座をジークレインに譲り、その姿を消す。一度は関連づけられた2人の関係だが、その軌跡を追うことはできずに事件は闇の中へと消えてしまったのだ。

死刑囚という立場から逃れられ、仮初の自由を手に入れたベル。風の噂でジークレインの正体を知り、評議員から外されたと聞いた瞬間はざまあみろ、と鼻で笑ったが恨みが消えたわけではない。

今度こそ、あいつを越えよう。今度こそ、あいつよりも認められよう。今度こそ、あいつの視界にはいるのだと。



「ジェラール!!？」

「エルザも一緒よ」

「ウエンデイ、無事だったか」

カイトの手によって逃されたウエンデイとシャルル。行き着いた先にいたのは乗り物酔いでまともに動けないナツと、それを連れ去る

うとするブレイン。そしてそれを止めようとするジュラ、ルーシィ、グレイ、ハッピー。ジュラの活躍によりブレインは倒され、乗り物酔いのナツを治療したウエンディはニルヴァーナを止めようとする5人とは別行動。他に止める術がないのかを探していた。

そしてその道中、六魔最後の一角のミッドナイトを打倒したばかりのエルザとジェラールに合流したのだ。

「君は……？」

恩人であるジェラールが自身の事を忘れている。それがショックで表情に影が落ちるが、エルザが記憶を無くしていることを説明すると、納得する。

けれど、やはり近づいてみてからこそ、疑問に思う。あの時助けてくれたジェラールとは、どこか違う匂いを感じるのだ。そんな疑問を他所に、ニルヴァーナは目的地である化猫の宿へと進路を進む。

「アンタ、ニルヴァーナの止め方までわすれてるんじゃないでしょうね!?」

「最早、自律破壊魔法陣も効かない。これ以上打つ手がないんだ、すまない」

「そんな……」

ジェラールならば、と考えていただけに、その落胆は大きい。どうにかしたものか、と頭を悩ませていれば、遠くから断続的に聞こえる破壊音。それがこちらに近づいているとわかったエルザは即座にそちらを振り向き、剣を構える。

「どうしたんですか?」

「離れている。何か、来るぞ!!」

一瞬の困惑。遅れて正面にあった遺跡が音を立てて崩れ、破壊音の

正体が現れる。そこにいたのはベル。だが、その右眼は完全に複眼となり、口の端から正面に向かつて牙が覗いている。左腕は前腕が肥大化して黒と黄色のストライプ柄となっており、臀部からはその腕よりも太い節くれ立つ尻尾。その先端には毒針が顔を出していた。

乱雑にまとめていた髪を振り乱し、右手には削られた肉片を持つベルの姿にウエンデイは思わず短い悲鳴を上げて、それを庇うようにエルザが前に出る。自然と剣を握る手に力が入り、相手からひと時も目を離さない。

荒い呼吸をしていたベルはジエラールを視界に捉えると、肉片を投げ捨てて、憤怒に満ちた声で叫ぶ。

「ジエラアアアアル!!?」

「!!?!!?」

油断も、予断もしていなかった。だと言うのに、エルザの視界に捉えていたはずのベルは気づけばエルザの背後に周り、尻尾の毒針をジエラールに突き刺さんと振り上げていた。その針がジエラールを貫く直前に割って入り、剣で防ぐことは出来たが、勢いそのまま2人とも押し出され壁に激突してしまう。

「邪魔を、するなア!!?この、むしけら低脳がああああ!!?」

振り上げた毒針を何度も砂塵の向こうのエルザたちに振り下ろし、その度にエルザが剣で難いで防ぐ。視界が悪い中、卓越したエルザの技術で怪我は負っていないが、それでも防戦に回る他ない。

「や、やめてエ!!?」

「ウエンデイ!!?」

なんとかしなければ。そんな使命感に襲われてか、ウエンデイの体当たりがベルに当たる。けれど、体格差のある相手にそんなものは意

味をなさず、けれど興味を引いたのかそちらに視線が注がれる。

色も温度もない視線がウエンディを貫き、短い悲鳴をあげた瞬間、その背中をシャルルが掴んで飛翔し、砂塵から飛び出したエルザが剣を振るう。

「もう！アンタは無茶ばかりして!!？」

「シャルル、でもっ!!？」

「2人とも、ジェラールを連れて離れてくれ」

魔力も残り少なく、短い間でしか飛行が叶わず、シャルルはエルザの背後に降り立つ。抗議しようとするウエンディだったが、エルザの言葉にはつと前を向けば、紅羽の鎧に換装したエルザの一撃を左腕で受け止め、罅迫り合いをするベルの姿。振るわれた右腕と尻尾を横に避けて躲し距離を開かないようにしているが、それも長くは続かないだろう。

助けに入ろうにも、下手な介入は返って邪魔になると判断した2人。壁に押し付けられ、痛めたのか肩を押さえながらも心配そうに行く末を見守るジェラールに駆け寄り寄るウエンディとシャルル。

「ジェラール、早く！」

「だが、エルザが………っ！」

「ここにいても邪魔になるだけよ！さっさと動きなさい!!？」

壁にもたれかかる形で倒れていたジェラール。ウエンディたちが何とか逃がそうとするも、エルザが心配で動こうとしない。シャルルに檄を飛ばされるが、そんな事はジェラール自身が一番わかっている。

魔法とはとことん突き詰めると、イメージの力だ。自身に何ができて、何かを望んで、それを現実に反映する力である。無論、それに準ずる技術も必要であるが、大切なのは想像することなのである。

記憶を失い、己がかつて使っていた魔法すらも忘却してしまった

ジエラールに魔法は使えない。何ができて、何ができないのかイメー
ジが湧かないからだ。

奥歯をぐつと噛み締め、剣舞を披露するエルザを見やる。先端速度
が捉えられないほどの速さで剣を振るい、次々と迫る攻撃を防ぐ姿に
自身の入る余地はない。苦悶の末、「……………わかった」と呟き、ウエン
デイの手をとって腰を上げようとした瞬間からである。

「逃スカアアアアアア!!?」

ベルの右肩が盛り上がったかと思うと、そこから甲殻類の持つよう
な巨大な鋏が生まれる。大きく開いた鋏はジエラールとウエンデイ
を壁に縫い付け、その場から動けなくする。

一瞬の虚をつかれ、拘束を許してしまったエルザだが、すぐさまそ
の根本を叩き切ろうと剣を振るう。しかし、ただでさえ両手と尾の手
数に悩まされている中、そこまでの余裕は生まれない。その隙を突か
れあえての一撃を貰うことを考えるが、尾や爪の先端から溢れる毒液
が地面に垂れると、そこが煙を立てて溶けていることから危険だと判
断していた。

「くそっ!!?」

思わず悪態が溢れてしまう。拘束を逃れたシャルルが何とかウエ
ンデイだけでもと鋏を引き離そうとするが、やはりと言うべきかびく
ともしない。そうしている内に鋏の感覚が徐々に狭まっていること
に気がつく。

「うそっ!!?エルザ、早くそいつを倒しなさい!!?この鋏、閉じていつ
てるわー!」

「なにっ!??」

「ぐううっ!!?」

「ジエラール……………っ!!?」

自身のせいで巻き込んだと自責の念に囚われたジェラール。何とかウエンデイだけでもと鋏に対抗しようと身を振るが、無骨な見た目に反して、その切り口は鋭利で接触箇所から血が溢れる。けれど、ジェラールは止まるつもりはない。例えばこの身が裂かれようと、彼女だけでも助けなければ他でもないエルザに顔向けができなくなる。ウエンデイの泣きそうな表情を意にも返さず、ジェラールは渾身の力をもつてして抵抗する。

(誰か……っ!!?)

祈る。無事を、安全を、救出を。最悪自身はどうなってもいい、けれどジェラールだけは、と乞い願う。けれど、エルザは手を貸せる状況ではなく、シャルルも力が足りない。それでも祈りを叫ぶ。

かつて助けてくれた人の名を。
憧れの人の名を。
羨望する人の名を。

「カイトさんっ!!?!?!?」

「ああ、呼んだね、俺の名を!!?!」

ベルの投げ捨てた肉片からカイトが現れ、鋏が根元から叩き切られ

る。激痛で攻撃の手が緩んだ瞬間、エルザの横薙ぎの一撃がベルを弾き飛ばした。

崩れる壁から視線を逃さず、エルザは安堵と苛立ちの混じったような声で咎める。

「もう少し早く出てこれなかったのか？」

「カツカツカ♪無茶言わないでよ、流星に身体の大部分を削られたらきついよ」

けらけらと、いつそ普段通りのカイトに安堵、そして同時に苛立ちからその頬を一発殴る。酷いと抗議するカイトだが、視線は自然と背後のジェラールとウエンデイへ。満身創痍で肩で息をするジェラールと安堵からか腰が抜けたウエンデイ、それを確認すると前へ向き直る。

「さあてさて、何でジェラールがいるのか、色々問いただしたい所だけどそれは後回しにしよう」

「どうした？珍しくやる気だな」

「まあ、同じ相手に何度もやられたからね。それに、助けを願われたんだ。無様な姿は見せられないよ♪」

白い道化衣装を身に纏い、弾き飛ばされたベルを見据える。そして現れたベルは変化が進み、右腕も同じように肥大化し、顔の右半分が蜂のような顔つきへとなっていた。発する言葉も聞き取りづらく、その殆どがガラスを引っ掻いたような甲高い音にしか聞こえない。

一足飛びでカイトたちの前に現れたかと思うと、その両腕を振り下ろす。爪の先端から溢れているのは腐食性の高い猛毒。喰らえば骨の髄まで溶けてしまう。だが、ベルが腕を振り下ろすと同時に引き裂かれる空間。まるで一枚の絵のようになびくカイトたちがふわりと空中に消える。

「さあ、幕を開こう。これなるは今は亡き都、歴史の彼方へと消えた
廃都、ネクロポリス我れらが貴き理想郷エルドラド」

声高々にそう告げるカイトの声。振り返れば廃屋のひとつ、その屋根の上で優雅に謳う。もはやベルに人の意識はほとんどない。あるのは擦り切れた記憶と怒りのみ。ベルの尻尾がカイトに向けて伸ばされるが、刺さる直前にどろりとカイトが溶けて空を突く。

そうして、いつの間にか隣に立っていたカイトが魔法を発動する。

シャドー・アスガルド
「影ノ都!!?」

反射的に振るわれたベルの腕。だが、その刹那地面から迫り上がった影がその行く末を阻み、腕が影の中に沈む。まるで水面に腕を入れたかのような抵抗感のなさに嫌悪と警戒し、大きく飛び退く。

影はそれだけに収まらず、そこを起点に溢れ出した影は廃都を飲み込み、その風景を作り替える。そうして出来上がったのは少し大きめな街の風景。ベルの立つ大通りの正面には噴水が作られ、それを囲むようにベンチが置かれている。街路樹やアパート、一軒家に遠くに見える時計塔。そのどれもが影で形作られ、閑散とした街並みを作り出していた。

けれど、人の意識が希薄となったベルに焦りや戸惑いはない。獲物を探すように辺りを見回すが、左右の建物の壁から伸びた巨大な双腕が指を組み、ベル目掛けて振り下ろされた。

反射的にそれを躲すベルだが、その先で地面から突き出した幾つもの槍がその脚を止めた。身体に傷はついていない、だが、動きを止めるには十分。左右から飛び出した手のひらが勢いよくベルと激突し、衝撃から血反吐を吐く。

「カッカッカ♪さあ、舞台は整った。共に踊ろうじゃあないか。手足がもがれても踊り、血反吐を吐いても尚踊り、魂が擦り切れるまで踊

り続ける死の舞踏を!!？」

「ジ、イイイツ!!？」

甲高い音で鳴いて、腕の拘束を振り払ったベルが通りの向こうにいたカイトへと飛ぶ。けれど、その攻撃が届くよりも早く足元の影に沈むと、代わりに影の拳がベルを空中へと突き上げた。

影を操るカイトにとって、影でできたこの空間は既に掌の上。上下左右どこからでも攻撃が可能であり、範囲内であればどこにでも逃げられることが可能であるのだ。その代わり、かなりの時間をかけて魔力を練り込まなければならず、高速戦闘などでは使えないのだが。

宙に浮いたベルを別の腕が地面に叩き落とし、近くから現れた黒犬たちがその身に牙を剥ける。けれど、その身体に牙は通らず黒犬たちは尾の一振りです倒されてしまった。

しかし、ベルも全くの無傷というわけではない。外骨格が硬いとはいえ、その中身は柔いまま。衝撃を喰らえばもちろん、中身に傷はつく。口からとめどなく血反吐を流しながらも、ベルは辺りに攻撃を加えるが、そのどれもが意味をなさない。

「ド、コ……………ダア!!？」

金切り声混じりに聞こえる憤怒の声。腐食性の毒を辺りに散らしながらも変化は起こらず、お返しとばかりに足元から現れた大蛇がベルにまきつき締め上げる。

鉄さえ押し潰す蛇の締め上げを、ベルは後也容易く引き裂けば、散り散りになった破片から生まれる黒い蝶。それらの姿を捉えたかと思ふと次の瞬間には爆発。炎と煙がベルの身を包んだ。

「ジ……………ラル……………ラアル……………！ジエラアルウ!!？」

最早、ベルの渦中にあるのはジェラールへの怒りのみ。爆煙を切り裂き、金切り声混じりの音で叫び、ジェラールを探す。

「おいおい。ダンスパートナーそっちのけで他の男を呼ぶのかい？それは無粋が過ぎるよ♪」

「ジイイイ!!？」

近くの通りから現れたカイトが視界に入った瞬間、その身が尾で貫かれる。けれども、どろりと泥のように溶けて意味を為さず。そして動きが止まった一瞬の隙を、足元から昇る拳が捉えた。

高く高く、空中へと放り出されるベル。そして、その後を続くようにカイトが宙を舞った。

身に纏う白い衣が月光に反射して煌めき、道化のようでありながら美しくもあるその姿に見惚れるような感性を、既にベルは持ち合わせていない。

「ジエラアルツ!!？」

自身より高みに昇るカイトに向かって突き出された尾。それは深々とカイトの脇腹に突き刺さり、鮮血が宙を舞う。刺された箇所から毒が回り、ぐずぐずと組織を溶かしていくが、はつきりとした意志でカイトは尾を掴む。

「捕まえた♪」

死に体のどこにそんな力があるのか、万力の如き力で掴まれた尾を抜くことができず、そして反対側に集められた魔力を見て、ベルの反応が警鐘を鳴らす。尾を振ろうとするが、しかし、地面から伸びた影が関節を硬めてしまう。

腕にのたうつ魔力の奔流。それは腕に収まらず、肩を伝い、まるで巨大な刃のように空へと昇る。

「ジ、ジイイイイ!!？」

負けたくないという気持ちか、はたまたただの本能的な行動か。変化が進み人間性を完全に捨てた蟲のような身体となるベル。肩と脇から新たな鋏と、鎌のような腕が生えそれらをカイトに向けて伸ばす。けれど、もう遅いのだ。

「ピック・クロー混沌ノ巨爪!!？」

繰り出されたのは遥かに巨大な混沌ノ爪。黒と白で彩られたそれはベルの攻撃を弾き、ベルの身を飲み込むとそれでも飽き足らず眼下のニルヴァーナの脚のひとつを切断し森の中へと消えていく。

上々の出来だと内心ほくそ笑み、毒の回ったカイトの身体は月光に照らされる中、ボロボロと崩れ溶けていくのであった。

マスターゼロ

「カイトさん!!?」

ぼろぼろと、空中で崩れニルヴァーナの上に降る塵芥。離れた場所へ転移したものだから最初は見失ったウエンディだが、空へ舞うカイトの姿を見てからは一目散にそちらへと駆けていた。

けれども、時既に遅く。ウエンディがたどり着いた頃にはカイトの姿はなく、代わりに塵の一部が山になっているだけで。その光景を見た瞬間、ウエンディは頬に涙を伝わせながら膝から崩れ落ちる。自身が助けを求めたせいだと自責の念に囚われれば、涙の量が増えてしまう。

遅れて到着したエルザやジェラールも絶句し、同時にこれでは復活は不可能だと直感する。ジェラールが震える肩にそつと手を置こうとするが、何を言って慰めるべきかわからず、その手は置き場所を探すばかり。流石のシャルルも今回ばかりは櫂を飛ばせず、心配そうに見つめることしかできない。

「私が……私の、せいで……っ!!?」

「ウエンディ……」

「おやおや?なんで泣いてるのかな?」

「泣くな、という方が無理だろう。かく言う私も、胸にくるものはある」

「カッカツカ♪エルザがそんなところを言うなんて、明日は槍でも降りそうだ♪」

「ちやかすな。そして生きているなら早く出てこい!」

いつの間になっていたのやら、エルザの隣にいたカイト。からからと笑いながらエルザを茶化せば、お決まりの如くエルザの拳が顎を貫いた。

「カイトさん!?」

大の字で倒れるカイトに近づき、しつかりと生きていることを確かめるウエンデイ。そうして安堵した途端にまた涙が溢れ出し、カイトに抱きついて感謝と感動を表す。困惑するのはカイトの方で、どうすればいいかわからず助けを求めて辺りを見渡せば、エルザは責めるような視線でこちらを睨み、ジェラルルは困惑したような視線を寄越し、シャルルは汚物でも見るかのような絶対零度の視線を向けていた。

なるほど、味方はいないようだとな得すると、上半身を起こして泣きじゃくるウエンデイの頭に手を置いて慰めるように優しく撫でる。

「おーいてて。エルザ、アッパーカットは酷いよ。顎が砕けるかと思っただよ?」

「知るか。笑えない事をした罰だ」

そう言われてしまっってはぐうの音も出ない。痛む顎をさすりながら、ちらりとジェラルルに視線を向ける。他の面々に比べ、カイトは別にジェラルルに対して恨み辛みを抱いているわけではない。ただ、危険だと思っていた人物がやはり危険人物だった、というだけだ。

楽園の塔の一件で特に何かされたわけでもなく、結果論としてフェアリーテイルの面々は無事だったからだ。これが癒えない傷を負わせたなどであれば、視界に入れ次第、即刻魔法を放っているのだが、それはさておき。

記憶を失っているせいなのか、以前ほどの覇気も危険も感じず、どころか明らかに弱体化しているジェラルルを見て、思うことはない。放って置いても害はないだろう、と放置を決める。

「それで?どうやってあの状態から回復したんだ?」

エルザが指差すのは塵芥の山。それを見てどこか言いづらそうにあー、と言葉を濁せば、早く話せとエルザが睨む。これを無視すれば次は拳が飛んでくると確信したカイトは諦めて事情を説明した。

「いや、あの状態からの回復は流石に無理だよ？だから、毒が回りきる前に、そのう……首をね、切って、ね？」

「ウエンデイの前で何言ってるのよ!!？」

「理不尽!!？」

あまりにもあんまりな回答にシャルルの飛び蹴りがカイトの顔面にクリティカルヒット。ウエンデイが咎めるように声を上げるが、シャルルは悪びれる様子はない。

再び大の字で倒れるカイトだが、突如今まで揺れていたニルヴァーナがその脚を止める。ニルヴァーナは目的地である化猫の宿に脚を進めていた。それが止まったということは――

「あ、やば」

今までの振動とは別に、大地が小刻みに揺れ始める。それはニルヴァーナ正面に付属してある魔導収束砲ジュピター。しかしそのサイズは他よりも一線を期しており、山のひとつやふたつを飲み込むニルヴァーナの隠し玉のひとつ。

カイトの緊張感のない声と共に、ジュピターは発射される。眩い極太の光が化猫の宿に直撃する直前、ニルヴァーナ後方の脚に衝撃が走り、その軌道が上に逸らされる。

ニルヴァーナごと大きく揺れたそれ。なんとか転げ落ちないよう各自足場を確保しながら、上を向く。

「あれば……魔導爆撃艇、クリステイナ 天馬!!？」

そこにあつたのは、破壊されたはずのクリステイナの姿。ぼろぼ

ろの状態ではあり、辛うじて飛んでいるに等しいそれから、砲撃の後だろう、砲門からは煙が吹き出している。

『聞こえるかい!?? 誰か、無事なら返事をしてくれ!!?』

突如として頭の中に響く声。その声に当たりをつけたエルザが声を上げる。

「ヒビキか?」

「わあ!」

『エルザさん? ウエンデイちゃんも無事なんだね』

『私も一応無事だぞ』

「カツカツカ♪お互い悪運が強いねえ、一夜」

『先輩!!? よかった!!?』

「あれ、無視された?」

密かに心配していた一夜の安否にほっと胸を撫で下ろして声を上げれば、まさかの無視である。ヒビキとしては憧れの一夜の無事が知れたことに喜びが大きく、気がつかなかったただけなのだがそれはさておき。

「どうなっている? クリスティーナは撃墜されて」

『壊れた翼をリオンくんの魔法で補い、シエリーさんの人形撃とレンの空気魔法で浮かしているんだ。さっきの魔法はイヴの雪魔法さ』

「あんたたち……………」

『クリスティーナの本来持つてる魔導弾と融合させたんだよ…………。だけど、脚の一本すら壊せないや。それに、今ので…………もう…………魔力が…………』

頭の中に響く声がどんどん小さくなっていく。彼らも樹海で戦い少くない傷を負っているのだ。だというのに、ニルヴァーナの封

印が解かれた後、身体に鞭を打って駆けつけたのだ。

「ありがとう、みんな……………」

自然とウエンデイから感謝の言葉が溢れる。けれど、無茶の代償というべきか、徐々にクリステーナの高度が保てなくなり、ふらふらと蛇行し始める。

「ツ!!?カイト!!?」

「流石に射程外だよ」

カイトの影で救出を目論むが、流石に魔法の射程圏外。受け止めることは不可能。それがわかっているというのに、ヒビキは更に声を上げる。

『僕たちの事はいい!!?最後にこれだけ聞いてくれ!!?時間がかかったけど、ようやく古文書アーカイブの中から見つけたんだ!!?ニルヴァーナを止める方法を!!?』

「本当か!?!」

それは誰もが待ち望んだ情報。食い気味に聴くエルザに、ヒビキは本当だと返す。

『ニルヴァーナの足のようなのが8本…………いや、今は7本か。その足、実は大地から魔力を吸収しているパイプのようになってるんだ。その魔力供給を制御する魔水晶が各足の付け根付近にある。それらを同時に破壊する事でニルヴァーナの全機能が停止する』

「同時に?一個ずつじゃダメなのかい?」

『それはダメだ。破損箇所を他の魔水晶が修復してしまう。唯一、カイトくんがしたように根本から切り落とせば回復しないようだけ…………アレを何度も放てるかい?』

「あー、無理だね。流石に魔力が足りないよ」

戦闘前ならいざ知らず、あれほど溢れんばかりに滾っていた魔力は既に量が減り、現在は通常よりもやや使い過ぎた程度の魔力しか残っていない。もう一戦行うならギリギリだが、大技を何度も繰り出せと言われると流石に不可能。

もし無理やり実行しようとするればそれこそ、この場の何人かの血を吸い尽くさねばならぬだろう。

ヒビキも期待はしていなかったのか、『そうだよね……』とどこか悔いの残るような声でそう呟き、説明を続ける。

『君たちの頭にタイミングをアップロードした。次の砲撃の装填完了する直前だよ』

「20分？」

「思っていたより短いな」

ヒビキの言葉通り、それぞれの頭の中にニルヴァーナの構図、魔水晶の場所、そして時間が流れ込んでくる。エルザの言葉は尤もで、時間的には難しいものがある。けれど、無茶だ無謀だと声を上げる者はいなかった。

『無駄なことを……』

その時だった。不意に頭の中に聞こえる男の声。それは六魔将軍のブレインに似ている。だが、念話越しでも感じる、底冷えするような恐ろしさが含まれていた。

『オレはゼロ。六魔将軍のマスター、ゼロだ』

それはブレインがあまりの凶暴性故に封印した別人格。六魔それぞれに生体リンク魔法を施し、決して表に出ないようにしていた裏の

顔。全てを無に帰す破壊の権化。

六魔全員が倒れ復活を果たしたゼロは悠々と言の葉を紡ぐ。

『聞くがいい、光の魔導士よ!!? オレはこれより全てのものを破壊する!!? 手始めに仲間を3人破壊した。滅竜魔導士に、氷の造形魔導士、星霊魔導士……それとネコもか』

『ナツくんたちが……?』

『そんなのウソよ!!?』

ウエンディの必死の反論だが、今の今までナツたちが反応しない事を見ると納得がいつてしまう。エルザが唇を噛み締め、カイトが小さく舌打ちをするが、ゼロは続ける。

『てめえらは魔水晶を同時に破壊するとか言ったなア? オレは今、その7つの魔水晶のどれか一つの前にいる!!? ワハハハハ!!? オレがいる限り同時に壊す事は不可能だ!!?』

それだけを言うと、一方的にゼロとの念話は途切れる。ゼロに当たる確率は7分の1。しかも、ジェラルルやウエンディが当たってしまったら勝負にはならないのは明白。それ以前に、魔水晶を壊せる魔導士の人数が足りないのだ。

「あーあー、敵さんは勝ちに酔っていて、こっちはこっちで人数不足。念のため聞くけど、ウエンディちゃん。破壊の魔法は使えるかい?」

「ご、ごめんなさい……私、使えなくて……」

「あー、責めてるわけじゃないよ? 仕方がないさ」

「カイト、お前は分身を作れた筈だよな?」

「できるけど、分身は魔法を使えないよ。さて、残り4人か……」

『友よ、何を嘆く。私がいるではないか』

頭を悩ませるカイトに、一夜の頼もしい声が聞こえて顔を綻ばせ

る。一夜本人は現在縛られて身動きが取りづらい状況であるが、そんな事は口にしない。ここで弱音を吐くなど、イケメンではないからだ。

「あと3人だ!!? 誰か返事をしろ!!?」

そう叫ぶエルザだが、叫んだ本人がもう頼るべき人間が他にいないことを知っている。先程、ゼロに倒されたというナツ、グレイ、ルーシイ。その3人に立ち上がってもらおう他ないのだと。

厳しい事を言っている自覚はある。けれど、ここで立ち上がらなければ化猫の宿が、ひいては王国が、大陸全土がニルヴァーナに吞まれてしまう。それがわかっているのだろう。自然と、祈りに似た、けれども確信を秘めた言葉が口から溢れる。

『グレイ……立ち上がれ……。お前は誇り高きウルの子だ……。こんな奴等に負けるんじゃない』

『私、ルーシイなんて大嫌い……。ちよつとかわいいからって調子にのっちゃってさ……。バカでドジで弱っちいくせに……。いつも……。いつも一生懸命になっちゃってさ……。死んだら嫌いなれませんわ。後味悪いから返事しなさいよ』

「ナツさん……」

「オスネコ……」

「ナツ……」

「ナツ……」

『ナツくん……。僕たちの……。声が……』

「聞こえてる!!?!!?」



その後、なんとか立ち上がったナツたち。意識朦朧としながらも作戦は聞こえていたのか、各々が各脚に割り振られた番号を指す。

そして、1番を宣言をしたナツ。足元もふらふらで、息も絶え絶えで、けれども倒れるそぶりは見せずに魔水晶へと続く通路を進む。

この先にゼロがいるということを、ナツは匂いで確信している。確かに先程は負けた。けれど、まだ五体満足で、息をして、心臓は鼓動し、心は燃えている。ならば、挑むしかない。そして勝つ他ないのだ。早く行かねばと使命感を燃やし、焦燥感に駆られていれば不意に、背後から足音がした。そして背後から香る匂いに、振り返らずとも察する。

「カイト……………」

「やあ、ナツ♪ふらふらだねえ♪」

ひらひらと、手を振りながら笑みを浮かべるカイト。割り振られた番号は7番。ナツが目指す1番とは反対方向だ。ヒビキが残した地図がインプットされていることから、迷ったとは考えづらい。では、何をしに来たかと言えば間違いなく横取りだろう。

「どけ。アイツはオレがやる」

疲労からか、言葉少なくその場を後にしようとするナツ。仕方がない、と肩をすくめたカイトがピツと人差し指を立てて、御高説を垂れる。

「そうそう、ナツ。知っているかい？俺の魔法、影法師シャドーマンはただの分身を作り出す魔法なだけだよ。実はある応用にも使えるんだよ♪」

無視して前を進むナツを他所に、カイトは笑みを深めると、軽い足取りで近づき、その肩に触れる。

「それはね、対象を入れ替えるマーカールの役割さ♪」

瞬間、手を振り解こうとしたナツが肩を振るが、それが虚しく空を切る。そして、いつの間にもやらかイトが消えていた。否、匂いが遠のいたことから、転移させられたのだと悟る。脳内マップを参照すれば案の定、カイトが向かうはずだった7番の魔水晶の通路。ここから身体に鞭打って走っても、恐らく時間には間に合わない。

愚痴をひとつこぼして、氣力を失ったナツは壁にもたれかかりながら、腰を下ろす。

「くそっ…………。ぜってえ…………殴って…………や…………る…………」



ニルヴァーナの動力源たる巨大な魔水晶を背に、ゼロはほくそ笑む。

通路の奥から聞こえて来る足音は規則的で、どうやら先程倒した3人ではない事を確認する。本音を言えば壊しがいいのあるナツが来て欲しかったところではあるが、新たな人間を破壊するのもまた一興。ゼロにとって、形あるものはそれが例え人間であろうと破壊の対象である。破壊し、破壊して、破壊を重ねて、その存在が消えるまで破壊し尽くす。そうして覚えるのは絶頂にも似た高揚感。

ブレインはニルヴァーナを使い、自らを王に仕立てようとしていたが、ゼロは違う。玉座に魅力を感じず、ただただ破壊の限りを尽くせばいいのだ。

そんなゼロの前に現れたカイト。いつものように笑みを浮かべ、ど

こか軽い足取りでゼロと相対する。

「よオやく来たか。待ちくたびれたぜ」

「カツカツカ♪そりやごめんよ♪けど、余生を噛み締める時間には充分だろう?」

「ほう?勝てるつもりでいるのか?」

「いやいや、勝算なんてもものはないよ。けどねえ、これだけは言いたかったんだ♪」

皆纏うは純白の衣、道化の様な衣装。マスクの下に隠されたいつもの様な白々しい笑みは一転、その顔から表情が消える。

「俺はね、怒っているんだ」

「家族が傷付けられたことに」

「誰かの涙が流れたことに」

「何より、俺自身が家族に手を出したことに!!?」

脳裏に浮かぶはワース樹海での一件。正気ではなかったとは言え、それで納得できるほど大人ではない。これは間違はなく八つ当たりだと、カイト自身理解している。仲間のためだとか、どんなに御題目を立てようと、結局のところ自身の感情の問題なのだ。

自己中だろうと、自分本位だろうと、何と言われようと、この怒りにケリをつけなければ次は進めない。

背後に浮かぶのは一对の巨大な影の腕。拳を握りしめて、まるで鎌首を持ち上げた蛇の様にゼロへと狙いを定める。

「さて、滅ぶ覚悟はいいかい、人間」

対するゼロは笑みを深める。ただでさえ壊しがいのあるやつが来たと思えば、その正体は噂に名高い道化。まるでおもちゃを与えられた幼子のように喜色満面の声をあげる。

「クハハハハッ!!?何だっぺいい!!?かかってこい!!?」

その言葉を合図に、決戦の火蓋は切られた。

混沌魔槍

番号を割り振り、それぞれが担当する場所に向かう中、一足先に担当箇所は向かったカイトを見送ったエルザはぼそりと言葉を溢す。

「……………キレてるな、あいつ」

「え？カイトさん、怒ってるんですか？」

小声だったはずの言葉は、しかし耳のいいウエンデイには聞こえていたらしく、声を返される。聞こえてしまったものは仕方がないと、エルザは続ける。

「ああ。あれは相当キレてるな」

「で、でも、笑ってましたよ？」

「わざとらしくかったけどね」

「シャルルっ!!？」

どうにもカイトに好感を持ってないシャルルの毒舌はさておき、別れ際に確かにカイトはいつもの様に、胡散臭い笑みを浮かべていた。いつもの様に、変わらず、努めて笑顔を作って。それを思い出して頭が痛いとはかりにエルザが患部を抑える。

「あいつの悪癖だ。何でも笑って誤魔化そうとする。そして、そういう時は大抵何か隠している時だ」

恐らく、ナツたちが倒された辺りで怒りが湧いたのだらうとエルザは推測する。舌打ちを溢したのが何よりの証拠だ。何をするつもりなのかはわからないが、ロクでもないことだらうとはわかる。

「えっと、それって追いかけた方がいいんですか？」

「いや、大丈夫だろう。フェアリーテイルの名に泥を塗る様なマネはしないだろう」

「それって、あいつ自身の尊厳はどうでもいいってこと？」

「あいつの尊厳など既にないだろう？」

「それもそうね」

「2人とも!!?.....あれ?ジェラール？」

ウエンデイがあまりにもあんまりな2人を咎めていれば、隣にいたはずのジェラールがいつの間にか後ろで頭を抑えている。すわ何事かと近づけば、何やら呼吸も荒い。

「フェアリー.....テイル.....ッ!!?」

「ジェラール?どうしたの?」

「.....いや、なんでもない。それより、オレたちも早く向かうおう」

明らかに何でもない、ということはないであろうが、既に呼吸や頭痛は落ち着いたようで、エルザたちに背を向けて歩き出す。それに不信任を感じるエルザだが、今は何より時間がない。

心配事が増える一方ではあるが、エルザは振り分けられた5番へと急ぐのであった。



「ツイン・アーム 偽・魔王ノ双腕」

抑揚のない、酷く冷たい声で繰り出された、カイトの背後に控えていた一対の巨腕。片方が大きく振りかぶり、そして拳を嬉々として迫るゼロに振り下ろされる。衝撃により舞う砂塵、そこから飛ぶように後退するゼロが現れる。

代わりとばかりに残っていた巨腕がゼロを空中へと打ち上げる。両腕でガードしてダメージを減らすのが、しかし、今の一撃の目的はゼロを空中に浮かす事。思ったよりも威力のない攻撃に肩透かしを食らったゼロにカイトの攻撃が殺到する。

ぶえいひやっぱん
「武影百般」

「又オオオオ!!?」

ゼロの真下から伸びる、影でできた刃の数々。躲しきれないと察したゼロは掌から魔力弾を放ちその数を減らす。しかし、数が多すぎた。破壊しても破壊しても次から次へと湧き出る刃に吞まれ、その姿が影に覆われる。

魔水晶の影からそれを見届けたカイトは一息つく。傷はすでに塞がってはいるが、魔力の消費が激しいのかその溜息は重く深い。短期決戦を目論んでの戦闘、けれどやはりというべきか、六魔のマスターを名乗るだけあり一筋縄ではいかないようだ。

「ハッハア!!?」

全身から魔力を放ち、周囲の影を消し飛ばすゼロ。カイトが素早く片手に魔力を溜めるが、ゼロの方が速い。着地と同時にスタートを切ったゼロは妨害の影の壁を突き破り、最短距離でカイトに肉薄する。

そのまま繰り出された拳は的確にカイトの頬を捉え、地面を転がるカイトを逃すものかと蹴りを入れて追撃を加えた。面白い様に転がるカイトは爪を立てて、なんとか態勢を立て直す。そうして、ゼロの膝がカイトの顔面を捉えた。

「最ツ高じゃねエか、壊れねエおもちゃなんてよオ!!?常闇回旋曲!!」
ダーケクロンド

壁に追い詰められたカイトの傷が修復される様を見て、ゼロは吠え叫ぶ。息を吐く間も無く、怨念のような魔力の塊が雨の様にカイトに降り注いだ。

飛ぶ鮮血、宙を舞う手足、抉れる胴体。けれど、その度にカイトの身体は修復し、そしてその度に破壊される。意識を繋ぐ事できえ必死になる中、ゼロの高笑いとは別の、聞こえないはずの音が聞こえた。

「そこまでだ!!？」

瞬間、ゼロに飛ぶ魔法。けれど、あまりにも稚拙なそれは腕の一振り霧散してしまふ。水を差されたゼロが忌々しげにそちらを見遣れば、そこにはここまで走ってきたのだろう、肩で息をするジェラルがいた。

「誰かと思えば……何のつもりだ、ジェラル？」

「はあ……はあ……これ以上、好きにはさせない」

「ハッ！なんだ、今頃正義にでも目覚めたのか？」

「そんなものじゃないさ。ただ、全てを破壊されるのは困るだけだ」

「それでオレを止めると？ハハハッ！かつてのテメエならまだしも、記憶をなくしたテメエなんざ、前座にすらなりやしねエンだよ！」

「いや……思い出したんだ。フェアリーテイルという名の希望を」

「なに？」

薄く笑ったジェラルの隣に、カイトが並び立つ。回復が追いついていないのか、その姿はボロボロではあるが、けれどその瞳は死んでいない。喉が潰れたのか、何度か咳払いをして調子に戻すと、視線をゼロから外さずに問う。

「あ……んんっ！記憶は戻ったのかい、ジェラル？」

「完全に、とはいかないが……オレの罪は覚えているさ」

「そう」

短くそう返し、ゼロの動きを観察するが、動く気配はない。寧ろ、何か出来るものならやってみろ、という余裕さえある。事実、記憶を取り戻したばかりで魔力の覚束ないジェラールと、瀕死に等しいカイト。2人がかりでかかっても勝機はない。

どうしたものか、と頭を回転させるカイトの目の前にジェラルルの腕が出される。

「カイト、呑んでくれ」

「……………いいのかい？」

願ってもいない血と魔力の補給の機会。全開とまではいかずとも、それに近いくらいの回復は期待できる魔力をジェラールは有している。しかし疲労もあり、いつもなら出来る吸血の調整が危うい状態。誤って全てを吸い尽くす可能性さえあるのだ。

そんな思いが込められた一言を察してか、ジェラールは薄く笑う。

「こんな事で、オレが犯した罪が消えるとは思わない。だが、オレはエルザが信じる君を……………フェアリーテイルを信じている」

「カッカッカ♪……………負けられないねえ、これは」

ジェラルルの腕に噛みつき、その血を啜る。苦痛に歪めるジェラルルが膝から崩れ落ち、意識が遠くなるのを感じる。最後に「勝つてくれ……………」と言葉を溢して、瞳を閉じた。

それを確認したカイトは口元の血を拭い、冷徹な視線をゼロに向ける。

「ああ、無論だとも」

吸血で高揚した身体は一気に本来の姿を取り戻す。吸血鬼と化し

たカイトだが、その意志が周囲の怨念に吞まれることはなく、羽を広げてゼロを威嚇した。

「クハハハハッ！なるほど、吸血鬼か！どおりで壊れねエはずだ！！？」

そうやってゼロが後退すれば、次の瞬間にはカイトの爪が地面を抉る。その隙をついて攻撃に転じようとした瞬間、ゼロの足首にカイトの尾が巻き付いた。

「ウオツ！！？」

足首を引っ張られ、仰向けに倒れそうになるゼロ。しかし、空中で反転し、バク転の要領で両手でその衝撃を受け止めて転倒を防ぐ。不敵に笑うゼロの眼前に、カイトの拳が迫っていた。

「カオス・インパクト
混沌ノ一撃」

両腕に魔力を纏い、なんとか防ぐが、ゼロの身体は大きく後退する。確かに、カイトが全力を出せるようになり、戦況は五分五分といったところ。けれど、優位性が消えたからと言ってゼロに焦りはない。寧ろ、壊しがいいのある相手に興奮していた。

「クハハハハッ！！いいじゃねエか！！？もつとだ、もつと来いッ！！？」

両腕から発動する常闇奇想曲^{ダーククロンド}。それを鞭のようにならせて、周囲ごとゼロは攻撃する。それを躲すカイトだが、何度か攻撃を喰らい、そして回復する。それで消費される魔力を感じながら舌打ちを溢すカイト。

魔力は回復できたが、だからといって無闇に消費できるものではない。瓦礫を投げて牽制するが、やはりというべきか、全て破壊されてしまう。

「ダークグラビティ!!?」

「ぐおっ!!?」

そうしているうちに逃げ場を失ったカイト。周囲の床ごと下の階層に落とされる。飛行能力を駆使して地面との衝突を避けるが、片方の羽が魔法で貫かれ、地面を滑った。

「そんなモンかよ、吸血鬼!!? 御伽噺に出てくるテメエの力は、こんなモンじゃねエだろ!!?」

追いついたゼロの蹴りがカイトを宙へ浮かし、その顔めがけて拳が放たれる。しかし、それを両手で掴むと、口内に溜めた魔力を放出した。

「混沌ノ息吹!!?」
カオス・ワッタス

「ぐぬうおおお!!?」

全身に魔法を浴びたゼロは大きく後退。カイトも疲労からか追撃を加える余裕さえない。それはゼロも同じようで、受けたダメージが大きいのか肩で大きく息をしている。

「はあ……はあ……!!? 最高だな、壊れ辛いおもちゃつてのは!!?」

「ふう……ふう……うるさいよ、人間。お前を喜ばせる趣味はない」「つれねエじゃねエか。だが、これで終わりだ」

ゼロの両手に魔力が集い、円を描くように回転させる。そうして出来上がる魔法陣の向こうから聞こえる、嘆くような、怨むような、呪うような、怨嗟の音。

「我が前にて歴史は終わり、無の創世記が幕を開ける。開け、鬼哭の門

!!? ジェネシス・ゼロ!!?」

現れたのは、それこそ数えるのさえバカに思えるほどの魂の波。それぞれが無念を残し、未練を残し、同族を作り出そうとする怨霊の群れ。囚われた者はその記憶から魂にいたる全てを世界から抹消される、破滅の魔法。

「消えろ!!?・ゼロの名の元に!!?」

カイトを取り囲む怨念の群れ。対処しようにも消費を考えると残り大技一発程度。大きく息を吐いたカイトは足場を踏み込み、さらに下の階層へと落ちる。

「無駄だア!!?」

その言葉の通り、怨霊たちは下の階層に逃れようとするカイトを追う。だが、カイトの行動は逃げるために在らず。手には魔法によって作り出した一本の槍。柄から白と黒の螺旋が描かれ、二又の穂先がそれぞれの色で別れたそれを空中で構え、ゼロに狙いを定める。当然、そのような隙を怨霊たちが逃すはずもなく、カイトに噛み付いて喰らいつく。

「怨霊風情が……………」

瞬間、カイトから発せられる圧。死した魂たちには無縁のはずの、死をも予感させるプレッシャーに怯え、震え、恐怖に吞まれる。

「退け」

一言。地の底から響くような、魂の芯まで凍るような、悍ましい一言で怨霊たちはカイトの気分を害さないように、視線を向けられない

ように道を開ける。驚いたのはゼロだ。魔法の制御を奪われたならまだ理解できる。だが、今起こっているのは魔力によつて導かれた怨霊たちの弾圧。それもただの言葉でだ。

動揺するゼロに向けて、開かれた道を進むようにカイトの魔法が放たれる。

カオス・フォルカス
「混沌魔槍」

「ヌツ、オオオオオオオ!!?」

踏ん張りの効かない空中で放たれたそれは音速とまではいかずとも、瞬きの内にゼロを捉える。穂先の間挟まれたゼロはそれを振り解こうとするが、急な加速により視界はブラックアウトし、強力なGに身体が付いていかない。

そして、天井を破り、その先にある魔水晶をも貫いた。ただでさえ巨大な魔水晶の内部は大地から魔力を吸い上げるシステムにより、膨大な魔力が渦巻いている。人一人がそれに吞まれるなど、自殺行為に等しい。

ゼロが魔水晶諸共破壊されると同時に、ニルヴァーナ各所から破壊の音が上がる。作戦は成功したようだ、無様に地面に転がりながら笑みを浮かべるカイト。魔力は精々が封印に回す分しか残っておらず、疲労から身体も動きそうにない。

動力源を失ったニルヴァーナが崩壊する中、ふと、耳元で感謝の言葉が聞こえた。それはニルヴァーナに染み付いた怨念のたちの声。依代が無くなったことにより解放されたのだ。

「カツカツ……」

やはり、感謝されるのはこそばゆいと顔を顰める。崩壊により落ちてくる瓦礫を避ける体力もなく、生き埋めは嫌だなあ、という何処か他人事のような事を思い浮かべながら、崩落の波に吞まれるのであつ

た。

別れ

「つぶね!!?みんな、無事か!!?」

「ぷはー」

「あぎゅ!!?」

「ぷはあつ!!?」

「エルザさくん!よかったあ!!?」

「な、何だその体は!!?」

ニルヴァーナの崩壊と共に、命からがら脱出に成功した面々。一足先に崩壊から免れたグレイが点呼の確認をし、続くように大きく息を吐くルーシイとハツピーとナツが。少し遅れてエルザが到着し、その後をついてくるように一夜が現れる。最後尾となったのはジェラルルの代わりに魔水晶を破壊したウエンデイとシャルル。瀕死から動ける程度に回復したジュラの助けもあり、その場にいる全員が大きな怪我はしていないことを確認する。しかし、その場にカイトの姿はない。

「カイトさんは!!?ジェラルルもいない!!?」

「見当たらんな」

「あのヤロウ……まさか、迷ったんじゃねえよな」

「んなの、許さねエゾ!!?」

「やめろ、ナツ!!?」

「カイトさん!!?」

グレイの言葉に不安が煽られ、崩壊したニルヴァーナの方に目を向けるウエンデイ。ナツが疲れを感じさせない勢いでニルヴァーナに突っ込もうとするが、危険だと判断したエルザが止める。

そして緊迫した空気の中、突然ルーシイの足元が膨らみ出した。

「ん？」

「ひっ!?？」

慌てて飛び退き、全員の視線がそちらに向く。風船のように膨らんだ土が弾けると、中から現れたのは宗教者めいた服装の六魔将軍のホットアイ。その腕に抱かれているのはジェラール。外傷は少ないが、カイトに血を飲ませた影響なのだろう、ぐったりとした様子である。

「はあ、はあ………何とか、助けられました………デスネ」

敵であった筈のホットアイだが、ニルヴァーナの影響で奥底に眠っていた良心が反転。金銭欲の強かった心は愛が目覚め、ジュラと共に行動していたのだ。そんな中、ジェラールの存在に気がついたナツが歯を剥き出しに、敵意をぶつける。

「ジェラール!!？」

「ジェラール!?？」

「落ち着いてくれ。説明する」

拳に炎を纏うナツを羽交締めにし、面識のないグレイとルーシイが驚愕している中、ジェラールの状況を説明するエルザ。離せとナツが騒ぎ立てるが暖簾に腕押し、どころか話が進まないと感じたエルザは両腕で首を絞める。容赦がないとグレイとルーシイが戦慄しているそんな中、ウエンデイは不安を隠さずに当たりを見渡す。やはり、カイトの姿はどこにもない。

「あ、あの！カイトさんは!?？」

「私が救出できたのは、彼だけデスネ………」

心痛極まりないと、表情に影を落とし、自身の力及ばなさに奥歯を

噛み締めるホットアイ。そも、ホットアイが現場にたどり着いた時には既にカイトは瓦礫の下だったのだ。遠目でもわかるほどの、夥しい血が隙間から流れているのを確認している。

見捨てたわけではない。そのつもりであればジェラルルを助ける意味がないのだ。それがわかっていこそ誰も責める事はできない。重苦しい空気が場を支配していた。そんな時だった。近くの茂みから音が聞こえたのは。

全員がそちらを振り向き、六魔將軍の残党か、と緊張感を走らせる。だが、茂みを揺らし出てきたのは黒い仔犬。小さな身体にいくつもの傷を負った仔犬は今にでも倒れそうな足取りで、ゆっくりと前へと進む。

「なんだ、仔犬じゃないか。ホラ、怖くないよ」

「おい、一夜」

「大丈夫ですよ、エルザさん。ホラ、おいで」

ただの仔犬だと判断した一夜が腰を下ろして腕を出す。エルザに咎められるが、安全だと一夜は確信していた。確かに血の匂いはするが、それはその仔犬が怪我をしているからであり、他者の血だとは考え辛い。それに、片腕に収まる程度の大きさの仔犬に何ができるというのか。

そう考えていた一夜が差し出した手。それを訝しげに見つめ、ちよこちよここと動く指に気を惹かれたのか、ゆっくりと近づくと仔犬。彼我の距離が縮まり、仔犬は一夜の指の匂いを確かめる。そして――

「メエー……ン!?!?」

思いつき指に噛み付いた。

「一夜殿!?」

「いたたたた!!?は、離してくれえ!!」

傷だらけの仔犬のどこにそんな力があるのか。魔水晶を破壊する際に使った力の香りの影響で筋骨隆々となっていて一夜が腕を激しく振るうのだが、離れる様子はない。

慌てて助けに入ったジュラが仔犬を掴み、なんとか引き離そうと尾を綱引きのように引っ張り、少しの拮抗の後ようやく口を離した。しかし、突然力が抜けたものだからジュラも一夜も尻餅をついて、仔犬は宙を舞って森の中へと消えてしまう。

「いたたた……大事ないか、一夜殿？」

「まったく……迂闊に野生生物に手を出すからだ」

「メエーン……」

エルザの軽い叱責もあり、仰向けに倒れて涙する一夜。動物には好まれる自信があったから尚更ショックだ。だから、身体に力が入らないのはそのせいだ、と決めつけてしまった。

「それよりも、今のジェラールに脅威はない。わかったか、ナツ？」

「ゲホゲホッ!!？」

「ナツ、大丈夫？」

「容赦なさすぎだろ……ん？」

「どうしたの、グレイ？」

「いや、なんか揺れたよーな……」

流石のグレイもナツに同情していたが、ふと感じた違和感を口に出してルーシイも地面に意識を集中させる。初めは何も感じなかったが、少しすれば確かに。地震とは違う、断続的な揺れがあった。次第に揺れと共に何か硬いものを叩くような音も遠くから聞こえ始めるしまつ。

そうなってくれば全員が音と揺れの発信源を探すように辺りを見渡すが、いかんせん深い森の中。見えるのは鬱蒼とした樹々と、崩壊

したニルヴァーナくらいだ。

「あれ、この音……………」

「ニルヴァーナからだ」

耳のいいウエンディとナツが反射的にそちらを振り向く。遠く聞こえていた筈の音は近づき、全員がそちらを振り向く頃。固唾を飲んで見守る中、崩壊したニルヴァーナの内部から、爆発するように黒い巨腕が生えたではないか。

役目を終えたとばかりに腕は溶けるように消えて、開けた大穴からひよっこりと顔を出すカイト。

「あー……………ようやく外に出れた……………」

ふう、と安堵のため息をこぼして、自身の状態を確認する。土に汚れて、血に塗れてと、酷い格好の人の身体。封印を施したはいいが、潰れた身体と魔法を使えるまでに回復した魔力が何処から出たのかと頭をひねる。

血の香りとは別に良い香りがしたのは覚えているのだが、と思いついていけば、くすくすと耳の奥で誰かが笑ったような気がした。聞いたことのある、聞き間違える筈のない声に作り物の心臓が跳ねる。

「……………まだくたばるな、って事かねえ」

よく耳を澄ましても聞こえなくなった、かつて仕えたお嬢様の声。喰らった筈の魂が勝手に動くことなど本来あり得ない筈のだが、不思議とずっとその真実が胸に落ちる。

ただの願望だと一蹴するのは容易いが、人間らしく夢を見るのも悪くないと独言を溢して、眼下に見える面々に手を振って応える。

作った笑顔で駆け寄った先で待っていたのは労いの言葉ではなく、心配をかけるなど怒り心頭のエルザから繰り出された渾身のアツ

パークット。比喻表現ではなく、実際にカイトの身体は空を舞った。

「さて、これで全員の無事が確認できたな」

「何人か無事じゃないですけど……」

ちらりと横目を向けるルーシイの視線の先、そこには大の字になって倒れる一夜とカイトの姿。一夜は仔犬に吸血されて、カイトは顎を砕く勢いで繰り出されたアツパーのダメージを負っている様子で、大の男が2人して空を仰ぐのは見ていて痛々しい。

「メエーン……」

「お空、きれい……」

「あ、あの、えっと、治療を……」

「放っておきなさい。ただでさえアンタもボロボロなんだから」

治療をしようとするウエンディをシャルルが止める。身体がボロボロなのもあるが、ジエラルルの代わりに魔水晶を破壊する際に初めて滅竜魔導士十八番の咆哮を放ったのだ。本人が思っているよりも魔力は消耗しており、ここで治療をすれば十中八九倒れるとシャルルは睨んでいた。

それは本人も自覚しているのか視線を彷徨わせて、せめてものどばかりに患部を撫でて痛みが和らぐようにと願う。

「エルザ殿、やはりやりすぎでは……?」

「いや、このくらいしなければコイツはまた同じことを繰り返す。それに、このくらい慣れてるからな」

一部始終を見ていたジュラが及び腰ながらも抗議をするが、エルザがそう返せば静かに戦慄する。無論、暴力を厭わないエルザにであ

る。

敵でなくてよかったと一人胸を撫で下ろし、視線は少し離れた木陰で佇むジエラールの元へ。

エルザから記憶がないことを聞き、どころかニルヴァーナを止めようとしていた事も知っている。だが、だからと言って仲良くできるかと言われれば否である。

記憶がなかりうと、評議会を破壊した一端を担った指名手配犯。ナツのように納得がいかないとむすくれる程子供ではないが、受け入れ難いのは間違いない。それがわかっているのか、ジエラール本人もこちらに近づこうとはせず、一定の距離を保っていた。

「あ、おい、エルザ」

「大丈夫だ、グレイ。とりあえず、力を貸してくれた事には感謝せねばな」

そんな空気を読んでか、グレイの静止を聞かずに近づき、労いの言葉をかけるエルザ。記憶を無くしても覚えていた、エルザという言葉。罪悪感からなのか、それとも別の感情なのかは本人をもってしてもわからない。

けれど、自身のやったことが後ろめたくて顔を合わせることが出来ずにいた。

「いや……感謝されるような事はなにも……」

「これからどうするつもりだ？」

「……………わからない」

暫しの熟考。そして自身が何をしたいのか、どうやって償うのか、考えてもわからない。記憶を取り戻したと言っても、それはほんの一部。せいぜいが自身が何者で、どんな罪を起こしたのか、というくらいだ。

「……………怖いんだ。記憶が、戻るのが……………」

今は犯した罪を償うつもりはある。けれど、記憶を取り戻した時、自身がどのような行動をとるのか、わからない。罪悪感が残っていればいい、だが、もし更に罪を重ねようとしたら？

それがわからなくて、怖い。記憶を取り戻すきっかけさえ、恐ろしい。そんな恐怖に飲まれるジェラールに、ふわりとエルザは微笑む。

「私がついている」

それはジェラールの記憶にない、他者を安心させるような優しい微笑み。

「例え再び憎しみあうことになろうが、今のお前は放っておけない……………私は……………」

「あぎゅっ!?？」

何かを言いかけたエルザだが、それを遮るように鈍い音と痛みに悶えるハッピーの声。

「どうしたんだ、ハッピー？」

「トイレに行こうとしたら何かにぶつかったんだよう……………」

不貞腐れていたナツが頭に大きなタンコブを作ったハッピーに話を聞けば、そんな言葉が返ってくる。壁と言われても、目の前には鬱蒼と広がる樹々ばかり。けれど、確かに腕を伸ばせば硬質な感触が返ってきた。

「何か地面に文字が……………」

「これは……………術式!?？」

初めに気づいたウエンデイの言葉に釣られて地面を見れば、一同を囲むように展開された術式がはつきりと認識できる。

閉じ込められた、と誰かが叫ぶまでもなく周囲を取り囲むように武装した兵士がさらにこちらを取り囲んだ。

「な、なんだア!?!?」

「オイ、いい加減起きろ!!?」

「いててて……うわ、何この状況」

「わ、私たちは怪しい者ではないぞ!!?」

グレイが未だ倒れたままの2人を起こし、状況を読めないカイトと、すぐさま両手を上げる一夜。ちなみにはあるが、半裸の筋骨隆々の男の時点で十分に怪しい。それはそれで何らかの誤解を招きそうだが、兵士の着る制服に心当たりがあるのか、ジュラが呟く。

「評議院の部隊……」

「評議院?でも、今は機能してないはずじゃ……」

「手荒な真似は致しません。しばらくの間、動かないでただにたいのです」

楽園の塔の一件で、ジェラルドとウルティアの手により壊滅的ダメージをおった評議院。無論、魔法界の法を取り締まる機関が機能しないのだから闇ギルドを始めとした犯罪者は増加した。

小さな悪事は各地の魔導士ギルド、または王国からの守備兵が鎮圧、または牽制することで大きな被害は出ていないが、今回のようなバラム同盟の一角を担う強大なギルドはこれを好機と見て動いたのだ。

未だ機能を果たしていない筈の評議院。だが、目の前の光景はそれを否定する。偽証という線は考え辛く、自警団のような民兵にしては練度が高い。そして、さらに畳み掛けるように代表者なのだろう。兵士の間から出てきたのは長髪を後頭部で纏めた、厳格そうな雰囲気

漂わせる男。放つ言葉は丁寧ではあるが、どこか高圧的にも感じ、場合によっては反感を買いそうではある。

「私は新生評議院、第4強行検束部隊隊長ラハールと申します」

「オイラたち何も悪いことしてないよっ!!?」

「お……おう!!?」

身に覚えのあるナツが言葉に詰まるがそれはさておき、心当たりのあるカイトが思わず視線を逸らす。今作戦は評議院が発案したものではなく、地方ギルド連盟の独断での行動なのだ。

評議院が発足していない中、動きを見せた六魔への対処。行動としては仕方がないものがあるが、だからと言って許されるものではない。結果として六魔は壊滅したのだから良し、ではないのだ。

良くて嚴重注意、最悪は各ギルドの解体か。最悪の未来を想像して頭を抱えるカイトを他所に、ラハールは要件を告げる。

「存じております。我々の目的は六魔將軍の捕縛。そこにいるコードネーム、ホットアイをこちらに渡してください」

「ま、待ってくれ!!?」

確かに、ホットアイは六魔將軍の一員ではあった。けれど、今作戦ではジュラたちを逃すためにミッドナイトの殿を務め、果てはジェラルルを救いだすなどの献身ぶりを見せたのだ。

渡してくれ、と言われてはいそうですか、とは言えない。間違いないけど、そんなジュラに待ったをかけるのは、ホットアイ本人であつた。

た。

「いいのデスネ、ジュラ」

「リチャード殿」

「善意に目覚めても過去の悪行は消えませんデス。私は、一からやり

直したい」

肩に手をかけたホットアイーリーリチャードが必要はないと首を左右に振ってそう告げる。当の本人にそんな事を言われてはは、ジユラも強くはいえず、けれど諦めきれずに、せめて彼の願いだけはと提案を出す。

「ならば、ワシが代わりに弟を探そう」

リチャードが六魔將軍に入り、そしてなによりも金を求めた理由。それは生き別れた弟を探し出すためだった。金さえあれば、力さえあれば、と探し求めた家族。弟さえ無事でいてくれたのなら、他には何もいらないとまで言い切れる願いを聞いていたジユラの提案に、リチャードは喜びに満ちた声で応える。

「本当デスか!?!」

「無論だとも。弟の名を教えてください」

「名前はウォーリー………ウォーリー・ブキヤナン」

「ウォーリー!!?!?!」

「知っているのデスか!?!」

ウォーリーと聞いて、真っ先に思い出したのはエルザ。楽園の塔で同じ独房に入れられ、苦楽を共にした友人の姿。兄がいる、という話は聞いたことがないが、何処となく似た容姿とファミリーネームまで一致しているとなると、まず間違いはないだろう。

「ああ、私の友だ。今は元気に大陸中を旅している」

信じられないと、困惑と期待が入り混じるリチャード。けれど、エルザが本当だと頷き、弟が生きているとわかったリチャードの両目から滝の様に涙が溢れる。

「これが、光を信じる者だけに与えられた奇跡というもの、デスカ………ありがとう………ありがとう………っ！ありがとう!!？」

両手で顔を覆い、歓喜に震えて蹲るリチャード。口から紡がれるありがとうの言葉には今まで込めたことのない、万物にまで捧げる感謝が込められていた。そうして大人しく、いつそ清々しいまでの表情のリチャードは囚人護送車に乗せられる。

憐れみの表情だけ見せて、ちらりと周りを取り巻く環境を覗き見るカイト。目的を果たしたはずの評議院、けれど術式が解かれる様子はない。むしろ警戒をより一層顕にして、その視線が術式内の1人に注がれる。

どうしたものか、とカイトは頭を悩ませる。個人的には捕らえられなくても構わないが、そうすれば悲しむ人間が出てくる。しかし、だからと言って見逃してもらえないかと言えは否だろう。今回の件の功績を盾にしても、極刑を免れるか否か。それほど彼が犯した罪は重い。

「評議院さんよオ、そろそろオレ達を解放しちやくれねエのか？」

「も、漏れるう！」

「ちよつと!!？」

「いえ、私たちの本来の目的は六魔將軍ごときではありません」

「「へ？」」

ハッピーの膀胱を心配してかグレイがラハールに物申すが、けれどまだ仕事が残っていると返されてハッピーから距離を置くシヤルルを含めた一同の目が点になる。しかし、幾人かは予想していたのだろう、驚き少なく自然とそちらに目を向けた。

「評議院への潜入、破壊。エーテリオンの投下。もつととんでもない大悪党がそこにいるでしょう」

すつとラハールが罪人を指差し、全員の視線が集中する中、観念したように、達観したかのように抵抗の意志さえ灯らない瞳で下を向く。

「貴様だ、ジエラール!!? 来い!!? 抵抗する場合は抹殺の許可もおりている!!?!!?」

「そんな……………!!?」

予想以上の扱いに思わず驚愕の声が漏れる。隣に立つエルザは悲痛に満ちた表情で、その言葉を聞き入れるのであった。

「ジエラール・フェルナンデス。連邦反逆罪で貴様を逮捕する」

驚くぐらいいつさりと、拍子抜けする様にジエラールは言われるがまま、されるがまままで手錠をかけられる。魔力の流れを妨害する特殊な手錠は拘束者の魔法を使えなくするもの。

記憶がないから、は理由にならず、また法も記憶の有無に罪は左右されないと記載されているため、正攻法で助け出すことは不可能。また犯した罪の重さから2度と陽の目を見ることは叶わないだろう。

待ったをかけるウエンディを止め、最後まで思い出すことができないくてすまないと謝り、エルザに感謝を告げると大人しく護送されるジエラール。

納得はしていない、だがこの場で事を起こせば危うくなるギルドの立場。そんな理性と、2度と暗闇の中に行かせてはならない思いがせめぎ合い、エルザを動けなくしていた。

そうして、決意を固めた瞬間、エルザの背後からナツが飛び出した。

「行かせるかああつ!!?」

「ナツ!!?」

「相手は評議院よ!!?」

魔法を使う余力もないのか、その身一つで立ち塞がる評議院に立ち向かうナツ。驚きを隠せず、無謀だと叫ぶグレイとエルザ。けれどナツは止まらない。元より、そこまで聞き分けのいい性格ではなく、己の心に従ってナツは進む。

「そいつは仲間だア!!?連れて帰るんだー!!?」

ナツは理解していた。このまま去ればジエラールだけではない、エルザのためにもならないのだと。楽園の塔の件は根に持っているし、助け出せたら一発は殴るとは決めている。けれど、だからと言えど敵かと言われたらそれは違う。少なくとも今回、ジエラールの助けなければ敗北していたかもしれないのだ。

過去のことは水に流すことはできない。だが、その贖罪はエルザの隣であるべきなのだ。

「と、取り押さえなさい!!?」

取り押さえようとする人員が足りないかと判断したらハールが追加の戦略を投入する。ナツに殺到する兵士たちだが、横合いから現れたグレイがそれを止める。

「行け、ナツ!!?」

「グレイ!!?」

「気に入らねえんだよ!!?ニルヴァーナ防いだ奴に、一言も労いの言葉もねえのかよオ!!?」

グレイの言葉を皮切りに、一理あるとジユラが、エルザが悲しむと一夜が、仕方がないとばかりにルーシイにハッピーが、連れて行かないでとウエンディにシャルルまでもが参戦し、場は騒然。高笑いを押

し殺し、それでも喉奥から笑みを零しながらカイトも参戦する。

敵であったジエラールを仲間だと言い張るナツに。それに賛同する面々に美しく、そして愛おしいと笑い、近くにいた兵士に体当たりをかます。ここまで来れば最早ギルドの体裁など無いに等しい。ならば、人間らしく我を通すのも悪くない。

「来い、ジエラール!!? お前はエルザから離れちやいけねえつ!!? ずっと側にいるんだ!!? エルザの為に!!? オレたちがついてる!!? だから、来いっ!!?」

「全員捕らえろオオオオ!!? 公務執行妨害及び逃亡幫助だー!!?」

ラハールの言葉に兵士たちも本気でこちらを捕らえようと魔法を使い始める。さしもの面々も魔法を使う体力が残っていない中、反撃らしい反撃を行えない。けれど諦めることなく、必死で手を伸ばす。

「ジエラールーール!!?」

「もういい!!? そこまでだ!!?」

蜂の巣を突いた様な騒ぎの中、凜と響くのは他でもないエルザの声。まさかの静止の言葉に味方共々固まり、視線がそちらを向く。

「騒がしてすまない。責任は全て私がとる。ジエラールを、つれて……………いけ……………」

エルザ自身、離れたくないと言う気持ちは間違いなくある。けれど、差し伸ばされた手をつかもうとしないジエラールを見て理解したのだ。記憶がなくなるとも、本気で自身の罪と向き合うつもりなのだ。それを自らの勝手で邪魔することなど、エルザにはできなかった。

エルザにそう言われてしまったのは、抵抗する意味もなくなる。握っていた拳から力を抜いて、それぞれが言葉少なに距離を開けるとジエ

ラールは護送車に送られた。

「そうだ……………」

その道すがら、ふとジェラールが思い出したように首だけで振り返る。

「おまえの髪の色だった」

それはその場ではジェラールとエルザにしか分からない思い出。記憶をなくしたはずのジェラールからは、まず出ない言葉。

「さよなら、エルザ」

「ああ……………」

それを最後に護送車の重い扉が閉まり、その姿は見えなくなる。目的を果たした評議院は抵抗した面々を拘束できないことを不承不承ながらも納得し、撤退する。

その姿が森の中に消える前にエルザは「一人にしてくれ」とだけ残して反対方向へと姿を消した。残された面々はエルザの気持ちを探してか、又はエルザがなぜあのような判断を下したのか理解できないと後を追うことはしない。

森の奥から聞こえる微かな泣き声を聞きながら、朝焼けに染まる空を見上げる。今までに見たことがないくらいに綺麗な緋色と少しの暗闇が残る青みがかかった空。2人もこの空の様であれば、と誰かが零す。

そんな心情を知らずに陽は昇り、空から闇夜は消えていくのであった。

そうして、陽がすっかり昇りきった頃。報告のために立ち寄ったのはワース樹海から一番近い化猫の宿のギルド。先に到着していたクリステイナーに乗っていた面々も傷はあるものの、重傷者はおらず、再会を喜び合う一同。特に一夜を慕うヒビキ、レン、イヴの3人は一夜と熱い抱擁を交わしていた。

汚れた服を着替えた女性陣も揃い、化猫の宿のギルドマスターであるローバウルが地方ギルド連盟を代表して礼を告げる。

「よくぞ六魔將軍を倒し、ニルヴァーナを止めてくれた。ありがとう、なぶらありがとう」

ニルヴァーナを作ったニルピット族。その末裔で結成されたギルド、ということもありメンバー自体はそう多くはない。けれど、ローバウルの礼に続き全員が頭を下げる光景は照れ臭いもので。嬉しいやらむず痒いやら、それぞれがそんな反応を見せていた。

「どういたしまして!!? マスターローバウル!!? 六魔將軍との激闘に次ぐ激闘!!? 楽な戦いではありませんでしたがつ!!? 仲間との絆が我々を勝利に導いたのです!!?!!?」

「「さすが先生!!?」」

「ちやつかりおいしいトコもっていきやがって」

「あいつ、誰かと戦ってたっけ?」

「カツカツカ♪頑張ったことには間違いないよ♪」

代表してなのか、一夜が返礼し、納得のいかないルーシィが少し毒づく。魔水晶の破壊の際、頑張ってくれたことは間違いないのだが、確かに戦闘らしい戦闘を一夜はしていない。そこを濁して精一杯のフォローをするカイトはちらり、と横目でエルザを見る。

やはり、ジェラルドとの別れを引き摺っているのだろう、一夜の陽気に釣られてか薄く笑ってはいるが、やはりどこか影が差している。

そんな顔をするくらいならば、止めに入らなければいいものを、と内心思う。いつも強気なエルザがこんな塩辛いとなると、少し落ち着かず、やはり人の心、特に恋愛というものはよくわからないため息を零し、宴だ宴だと騒ぐ面々に視線を向ける。

「一夜が？」

「「一夜が？」」

「活躍!!？」

「「活躍!!？」」

『あ、それ!!？わっしょいわっしょいわっしょい!!？』

青い天馬の面々から始まり、ナツ、グレイ、ルーシイ、ハッピーまでもが両手を挙げて踊りだす。けれども、ウエンデイとシャルルを除く化猫の宿の面々は沈痛な面持ちで静まり返っていた。

流星にそんな雰囲気では踊れず、痛い沈黙の中ローバウルが口を開く。

「皆さん、ニルピット族の事を隠していて、本当に申し訳ない」

「そんな事で空気壊すの？」

「全然気にしてねーのに。な？」

「マスター、私も気にしてませんよ」

ナツの言葉に全員が頷き、ウエンデイとシャルルも気にしていないことを告げる。けれど、ローバウルの表情は晴れず、何かを決心したようで深呼吸をひとつすると、ゆっくりと話し出す。

「皆さん、ワシがこれからする話をよく聞いてくだされ」

そこから始まったのは、ニルヴァーナとニルピット族の歴史。40年前、ニルヴァーナを作り出した張本人から紡がれる、彼方の記録。世界中で広まる戦争を止めようとニルヴァーナを作り出したニル

ピット族。移動する都市で暮らし、進む先の闇を光に塗り替えることで世界をより良く変えようとしていたが、人々から失われた闇は蓄積され、そこにいたニルピット族を依代としたのだ。

そこから先は同族で殺し合う地獄の始まり。血で血を洗い、屍山血河が築かれて、後に残ったのはローバウルのみ。そのローバウルでさえ、既に肉体無き魂のみの存在。力無き自身に変わってニルヴァーナを破壊できる者が現れるまで、ずっと己を呪いながら見守る事しかできないでいた。

「今、ようやく役目が終わった……」

話された真実に驚きを隠せず、誰も言葉を発することができない。ただ1人、カイトだけは何とはなしに察してはいた。だからこそ同情せず、ただただ作った表情で驚いたフリをするだけだ。

そも、人の身でどこかない理想を高望みして滅んだ、自業自得の末路としか思っていない。流石に口に出せばどうなるか、それがわかっている為に内心で毒づくだけではあるが。

そして、気づけば1人、2人と加速的に化猫の宿の面々が文字通り消えているのに気がつく。狼狽えるウエンデイとシャルルにローバウルは告げる。「ギルドのメンバーはワシが作り出した幻じや」と。

元々、この場合は廃村で、ニルヴァーナを見守る為にローバウルが1人で住んでいたのだ。けれど7年前、1人の少年がウエンデイを預かるように頼み込んできたのだ。

1人でいようと決めていたローバウル。けれど、継るように泣くウエンデイを放ってはおけなかった。そうして作り上げたのが化猫の宿。ウエンデイの寂しさを紛らわす為に作られた、優しい嘘で塗り固められたギルド。

「そんな話聞きたくない!!? みんな……みんな消えないで!!?」

「ウエンデイ、シャルル……もう、お前たちに偽りの仲間はいらない。本当の仲間がいるではないか」

泣きじゃくるウエンディを安心させるかのように笑う、ローバル。その姿が薄くなり、堪らずウエンディは走り出す。

「マスター!!?」

「皆さん、本当にありがとうございます。ウエンディとシャルルを頼みます」

差し伸ばしたウエンディの手は空を切り、右肩に刻まれた紋章が儼く消える。仲間が消えて喪失感に満ちたウエンディの肩を、エルザが優しく叩いた。

「愛する者との別れの辛さは、仲間が埋めてくれる………来い、フェアリーテイルへ」



ウミネコが空を行き、潮風が頬を撫でる。波で揺られる船上で、乗り物に弱いはずのナツは気持ちよさそうに水平線を眺めていた。

「ああ……船って潮風が気持ちいいんだな」

いつもならいざ知らず、現在ナツは乗り物酔いに効く魔法、トロイアがかけられていた。ニルヴァーナに乗り込む際、乗り物判定となり戦いどころではなかったナツにかけたのがことの始まり。魔法の効果は現在まで続いていた。

戦いも終わり、それぞれのギルドが帰路へ。行きは陸路であったが、帰りはナツの希望で海路を進む。その目的が船旅を楽しむだけだとはと、ニヤけるナツを見てグレイは呆れる。

「なんだありや、気味悪い」

「よっぽど嬉しいんでしょね。それに比べて……」

船上を駆け回るナツから視線を逸らし、ルーシイは木箱の上で横になるカイトを見る。吸血鬼性が上がった影響で、少し体調を崩す程度だったはずのカイトは現在、前後不覚になるほどの船酔いを見せていた。

「だ、大丈夫ですか？」

「放っておきなさい、そんな奴」

「うゝ……ウエンデイちゃんの優しさが身に染みるう……」

側に控えるウエンデイがタオルで風を送ったり、頭を撫でたりと慌てているが、効果はなし。当然、種族的な問題なのでトロイアの魔法も効果はない。フェアリーテイルでも数少ない献身っぷりに嬉しい反面、気恥ずかしさを覚えるカイト。シャルルの毒舌の方がまだ心地よいと思ってしまうほどに参っていた。

7年間、寝食を共にした仲間を失ったウエンデイとシャルル。エルザの助言もあり、フェアリーテイルへの加入を決意したのだ。憧れていたフェアリーテイルということもあり、楽しみだと答えていたウエンデイだが、シャルルは知っている。ギルドの加入は勿論嬉しい。そして同時に推しといっても過言ではない道化カイトが近くにいることも喜びのひとつであるのだと。

シャルルの中では絶対に信用できない人物トップ3に入るカイト。ウエンデイにちよっかいをかけようものなら容赦はしないとカイトを睨む。いつもなら笑って誤魔化すカイトも余裕がないようで、貫つたタオルを顔にかけて視線から逃れていた。

「あー!!? そうだ!!? カイト!!? よくも邪魔してくれたな!!?」

ふと、はしゃいでいたナツが思い出したのは魔水晶破壊での一件。自分が相手をするはずだったゼロを横取りされた事を根に持って、怒

りのままに胸ぐらを掴んで前後に振る。

「オレが相手する筈だったんだぞ!!?」

「ナツ、まっ……酔うぶっ……!!?」

「ナ、ナツさん!!?あの、やめっ」

カイトの必死のタップも、ウエンデイの静止も聞かないナツ。けれど、誰が原因かと言われたら間違いなくカイトであるので、周りも止めない。ギルド内であればよく見る光景だからだ。

それでも必死にナツを止めようと、腰に抱きついて引き離そうとするウエンデイ。そして不意にナツの動きが止まった。何のことはない、トロイアの効果が切れたのだ。散々はしゃいだ分のつけが回って来たのか、カイト共々顔を青くして、2人して口を押さえて船縁へと向かっていった。

「何やってんだ、あいつら……」

「いつもこんな感じなの?」

「あははは……まあ、そうね」

「ナツ大丈夫?」

「カイトさーん!!?」

呆れるグレイに、シャルルの疑問に目を逸らすルーシイ。船縁に貼り付くナツとカイトの背を撫でるハッピーとウエンデイ。いつもより賑やかな景色の中、エルザは薄く笑うのであった。

エドラス編 別世界

ウエンデイとシャルルの加入から少しして。

フェアリーテイルの大多数が口を揃えて最強を推すギルダーツが3年ぶりの帰還を果たすなどのイベントがあったが、ギルドの雰囲気慣れて来た2人。加入当初は不安でいっぱいだったウエンデイも、快く受け入れてくれた面々の影響か明るい表情でいることが多い。

ふとした拍子に前のギルドの事を思い浮かべて影を落とす事もあるが、時間が解決することであり、周りもそれを了解しているのかあまり触れないようにしている。ただ1人、カイトだけはその度に笑いを取りに行こうとしてシャルルやエルザから制裁をくらっているのはご愛嬌。そも、初手で気分転換がてら散歩に誘い、翌朝まで迷い歩いていたのだから無理もない。

そんなことはさておき。

マグノリアの街に厚い雲がかかり、そろそろ一雨くるかもという天気。当然そんな中依頼に赴くような物好きは多くなく、メンバーの大半は暇つぶしも兼ねてギルド内で思い思いに過ごしていた。

ウエンデイもそのうちの1人に入り、特に何をすることもなく、厨房で勤しむカイトの姿を少し離れたテーブルから眺めている。その視線は観察するような訝しげなものではなく、どちらかと言えば宝物を見つめるような子供のような憧れの視線。

「……………何してんのよ」

「ひゃっ!??!? いや、シャルル!!?も、もう、驚かさないでよ!!?」
「ずつとここにいたわよ」

同じテーブルの上で座っていたシャルルの事を忘れるくらいに集中していたようで、声をかけられたウエンデイがあからさまに驚いて

いた。側から見れば怪しき全開であつた事を理解して欲しいものだと、呆れたように紅茶を啜る。

カイトが淹れた紅茶ということもあり、毒でも入ってないからと初めは警戒していたが、思いの外の美味しさに少しばかり悔しさを噛み締める。人間性はともかく、料理の腕は確かなようで厨房に次々と注文が舞い込むのも頷ける。

お茶請けにと出されたクッキーを食べながら、またカイトを眺め出すウエンデイにため息を溢し、何を言っても無駄だと諦めてまた紅茶を啜る。アツサムの甘さと香りだけが、今のシャルルの癒しだ。

「なにになに？恋バナ？」

どこで聞きつけたのやら。いつの間にか座っていたルーシーが告げる。どうやらそう言った話は好物なようで、その表情は楽しげだ。そも、ギルド内でも恋愛話ができるのは精々親友のレヴィくらいのもの。それも、小説のネタでの話だけだ。実際の恋の話となれば興味が湧くのも当然だろう。

ちなみに、傷心中のエルザにその手の話題を振ることはできず、ジュービアはグレイが取られると思つてか威嚇され、アイザックに片思ひ中のビスカは顔を真っ赤にして逃げ出してしまうのだ。

「こゝ、恋だなんて、そんなつ！！？」

真っ赤になつて照れるウエンデイを見て、揶揄うように笑うルーシー。けれど、その視線の先にカイトがいたとなると、少し言葉に詰まつてしまう。種族違いの恋、といえはよく聞こえるが、それは小説の中だけの美談であり、現実的に考えれば土台無理な話だ。それも、相手は血を吸う吸血鬼ともなると弊害が多すぎる。

率直にやめておけ、とは言えず、どう伝えたものかと悩んでいれば、空になったティーカップに新たな紅茶を注ぎながらシャルルが横目で助け舟を出す。

「アンタからも言ってやって。男の趣味が悪いつて」

「だから、そんなのじゃっ!!??:.....その、憧れの道化さんに会えて、嬉しいなあって思ってたただけだから」

「あー、ウエンデイもファンなんだっけ?」

「はいっ!もしかして、ルーシイさんもですか?」

「あたしはファンだったかなあ.....」

過去を振り返るように、もしくは現実から目を逸らすようにギルドの天井を見上げるルーシイ。抱いていた幻想を打ち砕かれ、現実を知った大人の目をしていた。

はて?と首を傾げるウエンデイに何でもないと告げ、ため息を溢す。無垢に憧れていた頃を思い出して、そして彼女も同じ道を辿るのだと思うと胸が痛む。

「シャルル〜!!?」

いつそ、現実を教えてあげるのも優しさではなからうか、とルーシイが悩んでいれば壁にもたれかかりながら寝ていたナツの隣にいたハッピーがニコニコとこちらに駆け寄ってくる。

両手で掲げるのは近くの湖で獲れる魚。リボンで一生懸命に装飾したそれを、ハッピーは一も二もなくシャルルに差し出す。

「これ、オイラが獲った魚なんだ。シャルルにあげようと思って」

「いらないわよ。私、魚嫌いなもの」

プレゼントはおろか、ハッピーにすら視線を寄越さずそっぽを向くシャルル。1000年の恋も冷める態度であるが、相棒ナツに似たのか諦めをしないハッピー。

「そっか.....じゃあ何が好き?オイラ今度ー」

「うるさい!!?」

言葉を重ねるハッピーを食い気味に、シャルルは怒鳴る。流石のハッピーも怒られるとは思っておらず、しゅんと目尻と一緒に髭と尻尾が垂れ下がった。

「私に付き纏わないで」

「ちよつと、シャルル!!?」

「何もあんな言い方しなくても……ねえ、ハッピー」

はつきりと拒絶を示して、シャルルはテーブルを降りる。あまりの言い方にウエンデイも憤慨するが、気にした様子はない。慰めるようにハッピーの頭を撫でるルーシイだが、シャルルがそのままギルドから出ていくのが見えて慌てて追いかける。

「あー待って、シャルル!!?」

健気に追いかけるハッピーの背中では、どこか哀愁が漂うのであった。

そんな現場を横目で見ながら、やはり恋愛はよくわからないと遠い目をする。あそこまで拒絶されて尚も恋心を燃やすハッピーの気持ちが汲めないのだ。親子の愛や愛着と言ったものは理解できる。しかし、異性に対する愛というのは吸血鬼は持たず、種を増やすのも兄弟姉妹間という手段しか持たない。

自身の存在が人間との交配が可能という事実を突き付けているにしろ、やはり人の言う愛は理解が及ばない。化物に人の愛は手に余るということなのかもしれないが。

そう勝手に自己解釈と納得していると、目の前のカウンターに座っていた2人が同時にジャツキをテーブルに叩きつけ、声高々に叫ぶ。

「おかわり!!?」

昼間から顔を赤くして酒を飲んでるのはギルドでも古参の部類に入るマカオとワカバ。若い頃はぶいぶいと言わせていた2人だが、歳と家庭を持ったためなのかかなり丸くなっている。今はセクハラ親父としてギルドを賑やかす毎日だ。

実力もあり同期でライバルである2人だが、こうして昼間から浴びるように酒を呑むのは珍しい。食器を拭く手を止めてため息混じりに疑問を飛ばす。

「またかい？あまり呑みすぎると身体に毒なんだろう？」

「うるへエ!!？オレたちの辛さがためえにわかるか!!？」

「慰めなんざいらねエから酒持つてこーい!!？」

どうやら2人して何かあったらしく、ヤケ酒を決め込んでいるようだ。酒が飲めない体質のカイトはこれのどこがいいのやら、と愚痴を溢しながら追加の酒を注ぐ。

「それで、何があったの？家庭内での不満かな？」

「うっ」

カイトの言葉が刺さったらしく、同じタイミングで胸を手で抑える2人。暫く居心地の悪そうに互いの顔を見つめ、そして注がれた酒を飲み干すとぽつぽつと話し出した。

「……最近よお、ロメオのやつが冷たくてよお」

「ああ、ロメオくん。あれ？でもこの間一緒に魚釣りしたんだって自慢してなかったっけ？」

「そうなんだよ！あん時までではよかったんだよ！けどよお、この間からなあんかよそよそしくてな……今日なんてキャッチボールしようって誘っても断られてよオオオオ!!？」

「あー……」

マカオの息子のロメオ。偶にギルドに顔を出すということもあり、少しばかり交流があるのだ。そのロメオだがつい先日、マカオのいない時間を見計らってギルドに顔を出していた。

なんでも魔法を覚えたいらしく、ナツを含めた炎系魔導師に教えるを請うていたのだ。なぜマカオに相談しないか尋ねた所「内緒で特訓して、父ちゃんを驚かせたいんだ」とのこと。

「わかるぜ、マカオ……。オレもよお、最近母ちゃんと娘から避けられてよ……。この間なんて、オレに内緒でどつか出かけてたんだぜ!? 聞いても答えちゃくれねエし、会話も少なくなっただしよお」
「ありやー……」

マカオよりも少し早く家庭を持ったワカバ。ギルド内で愚痴を溢したりしているが、その実家族を大事にしていることは周知の事実。そんなワカバの奥さんと実は知り合いの仲であるカイト。

買い物情報の交換仲間であり、安売りの戦場では大活躍の彼女であるが、なんでも今度のワカバの誕生日でサプライズをしたいと相談されたのだ。娘さんも大きくなり、出会ってから10年、これからもよろしくという意味を込めて盛大に驚かせたいのだと。

「ロメオおっ!!? 父ちゃん寂しいゾオオ!!?」

「離婚はやだアアア!!?」

いい歳をした大人か2人して、机に伏せておいおいと泣く様はあまりにも哀れだ。どちらも言わないでと約束を交わしており、悪魔として約束を破ることはしたくないカイト。

せめてもの慰めとして後ろで影の手が調理していた唐揚げを受け取り、2人の前に差し出す。下味から入念に仕込んだ一皿は何気に自慢の品であったりする。

「ほら、サービスするからこれでも食べな」

「カイトおとおお!!?」

傷心中の2人にその優しきは嬉しかったのだろう。悲しみとは別の涙を流し、鼻水を垂らす2人。早く誤解が解ければいいねえ、と内心ぼやき片づけを進めようとすれば、唐揚げを頬張る2人の隣に別の男が座る。

「おつ、美味そうだな。カイト、オレにも同じもの」

茶髪をオールバックに纏めた、髭面が特徴的な中年男性。ギルド内だというのに煤けた黒いマントで身体を覆って現れたのはギルダーツだ。

突然の登場だがマカオとワカバは気を悪くした様子はなく、寧ろ3年ぶりの帰還であるギルダーツを快く迎える。そのまま流されるように座ろうとしたギルダーツだが、自身の魔法「破壊^{クラッシュ}」を無意識のうちに発動させたのだろう。粉々になった椅子がギルダーツの体重を支える事なく、その尻を勢いよく床に打ち付ける。

「いったあ!!?!!?」

「がははっ!!?何やってんだよ!!?」

「あいつ変わらずだなあ!!?」

尻を摩りながら立ち上がるギルダーツに、これ見よがしにため息を溢すカイト。本人の実力もさることながら、扱う魔法も相応に強力。だというのに本人のドジが高頻度で炸裂し、こうして物を壊すこともしばしばなのだ。

これで何度目だため息を吐きたくなるのも無理はない。出歩きたびに迷うカイトが言えることではないのだが。

「すみません、カイトさん」

「ん？なんだい、ウエンデイちゃん」

「シャルルがまだ帰ってなくて……私、心配なので探してきます」

「わかったよ♪依頼の方はキャンセルしておくよ♪」

「すみません、今度は必ず！」

「うん、楽しみにしておくよ♪一雨来そうだから気をつけてね」

「はい！」

悪い悪いと快活に謝るギルダーツをさておき、ウエンデイがシャルルを探すために抜ける事を告げる。元々この後に依頼をこなす予定だったが仕方がない。まだ承認のサインを受けていないため、また掲示板に貼り直すだけだ。

ひらひらと手を振って見送るカイトに釣られて、3人がウエンデイの後ろ姿を目で追い、その姿が見えなくなるとニヤニヤと嘲笑うようにカイトに視線を戻す。

「なんだよお、いい雰囲気じゃねエか」

「ああ言った子がタイプなのか？」

「手エ出すならもうちよい時間おけよ」

「カッカッカ♪邪推が激しいよ」

年長者3人の微笑ましいモノを見る視線を無視して、カイトは食器磨きを再開する。そして、アレはどうなんだい？とテーブルの上に出現した影の手が3人の背後を指差す。そこにいたのはジュビアとグレイ。

「カラメイドフランクはこう食うんだ、こう！でけえ口を開けてだな」

「こうれふか」

「元々上品に食うモンじゃねえんだ」

「でも服は脱がない方がいいと思う」

どうやらカラメイドフランクを上手く食べられないジュビアに指

導していたらしいグレイ。いつもジュビアに対してぞんざいな扱いのグレイだが、面倒見は良く、見かねて助けたようだ。

いつものように、いつの間にか上半身が裸になっているが、ジュビアは恥ずかしそうにしながらも目を逸らさないでいた。

そして、その近くで2人を羨ましそうに眺めるビスカとアイザック。いつの間にか互いに距離が近づき、手が触れた瞬間に離れたりを繰り返している。

カイトからすればいつも通りの光景なのだが、絶賛心の傷を携えるワカバとロメオには傷口に塩を塗られるに等しい。

「どいつもこいつもイチャつきやがって、チクシヨオオオオ!!?」

「こんなトコ居てられっかアアアアア!!?」

涙を見せない様に腕で目元を覆い、律儀にお金を置いてギルドを立ち去る2人。どうせそのまま他のお店に行つてヤケ酒を続けるのだろう、と特に心配することもなくお金を金庫に入れるカイト。

一連の流れを愉快に笑いながら眺め、ギルダーツは横目でギルドを見渡す。

雨が降ってきたということもあり、それなりに人で溢れ出したギルドの中。しかし、よく見ればそこらかしこに影の手が生えており、それぞれが雑務に励んでいた。例えばテーブルの上を片付けたり、掃除をしたり、喧嘩に巻き込まれそうな割れ物を避難させたりと忙しい。

それが目の前のカイト1人が統制しているというのだから、内心舌を巻く。魔法の操作能力という点では間違いないフェアリーテイルでも上位だろう。

3年前よりも成長した姿に感慨深いモノを感じていれば、黒いコートに身を包んだミラジェーンが厨房から出てきた。

「カイト、注文のパイがあと少して焼けるわ。残りお願いね」

「ん、わかったよ、ミラちゃん。お出かけかい?」

「ええ、ちよつと教会に。エルフマン、行きましょう」

「ああ、こつちは大丈夫だぜ。ねえちゃん」

ミラジエーンとエルフマンの背中をひらひらと手を振って見送り、もうそんな時期なのかとため息を溢す。

「……………リサーナ、死んだんだってな」

「まあ、ね……………2年前にね」

2人の妹であるリサーナ。ナツやグレイと歳が近く、明るい性格もあってムードメーカーだった少女。2年前、モンスター討伐に失敗した際にその命を落としたのだ。不思議な事に遺体は残らず、教会に置いてある墓の中には何も入っていない。

ギルド内は勿論、カイトでさてその死を悼み、暫くギルドとして活動不可能に陥った事さえも懐かしく思える。

2年越しに黙祷を捧げたギルダーツは、そういえばと口にした。

「ミラとはどこまでいったんだよ？」

にやにやと、それこそ先ほどよりも笑みを深めるギルダーツ。右手で輪を作り、左の人差し指を抜き差しするジェスチャーをする姿は紛う事なくセクハラ親父だ。

「何の事かわからないよ♪」

「……………オマエ、マジか？」

本人は決して認めないが、ミラジエーンが淡い気持ちでカイトに寄せているのは周知の事実である。ジュビアほどオープンではないが、明らかに距離が近い。それがわからない程、カイトは鈍感ではないと知っているギルダーツに、カイトは肩をすくめて見せる。

話すつもりはないのか、と大きなため息を溢す。魔法の腕は上がっ

たのかもしれないが、人間性の成長は著しくないようだ。

「ん？　そういや、オレの酒は？」

「あー、そうだねえ……」

最初に注文した筈の酒がまだ出ていないと不満を垂れるギルダーツに、愛想笑い全開のカイトがカウンターにしゃがむ。その様などころに酒樽はない筈だがと頭をひねれば、再び立ち上がったカイトはギルダーツの目の前に分厚い紙束を置いた。

「お酒を飲みたいならまず、3年前のツケを払ってからだねえ♪」

「つ、ツケ……」

厚さ10cmはありそうな紙束をぺらぺらと捲れば、そこに記されているのは金額と共にギルダーツのサインが書かれてある。3年前、確かに100年クエストの前夜祭だと騒いだ記憶はあるが………と考えた所で最後のページにあつた合計金額を見て目を見開く。

「ぎ、3000万ジュエルJウ!!?!!?か、カイト、冗談だよな!!?」

「カッカッカ♪……まさか」

愛想笑いだったカイトだが、いかんせん目がまったく笑っていない。かなりキレていると悟ったギルダーツは何とか穴がないか何度も読み返す。確かに飲み食いの金額は普通よりも高いが、まだ払えただろう。だが、後に続くのは修繕費にはとんと覚えがない。

「カイト、この修繕費つてのは………?」

一縷の望みにかけて問い出せば、変わらない愛想笑いでカイトは告げる。「酔った勢いで壊した建物の数、知りたい?」と。

そう言われてしまえば頭を抱えるしかない。記憶にはないが、心当

たりと前例が多すぎる。

「さて、ギルダーツ。これは君と俺の間で交わされた、一種の契約だ。俺が約束や契約といったものを大事にしているのは、知っているだろう？」

ギルダーツはカイトの正体を知る1人だ。だからこそ、カイトが約束事に対して融通が効かない事も知っている。グレーゾーンを攻めたり、契約の穴をついたりしても咎めはしないが、契約の反故となれば話は別。

今回の場合、それこそギルダーツを質に入れてでも金額の回収をするだろう。

「これ、カイト。そう責めるではない」

カウンターの隅で酒を呑んでいたマカロフ。一連の話は既に耳にしており、仕方のないやつだと溜息を吐く。

「3000万Jはギルドにつけておけ。今後のギルダーツの成功報酬から返してもらえばよい」

「さすがだぜ、マスターア!!？」

救いの手を差し伸べられたギルダーツ。顔を綻ばせ、感激のあまりマカロフに抱きついた。暑苦しいわい、と押し合う2人を尻目に、マスターの命令ならばとため息を溢すカイト。

過程はどうあれ、約束は守られたのだから文句はない。今出てるジャツキは洗っているの、新しいのを出さなければと厨房に入ろうとした時だった。

「みんな!!？ 大変なの!!？ 空が……!!？」

遠くから雨音に混じって聞こえる、ウエンデイの声。焦燥に満ちた声に驚いて振り向いた瞬間、世界が振れた。

螺旋を描く様に、サラダなどに使うフジツリのように、前を向きながら後ろを向くという矛盾に中指を突き立てる現象が目の前で行われ、カイトの視界はブラックアウトした。



「なんだア、こりゃ」

目の前の光景に、ガジルは思わずそう呟く。

ギルドを離れ、探し物をに精を出していたガジルは、今日も目当てのモノを探しマグノリアの街を駆けずり回っていた。これも違う、アレも違うと睡眠時間すら削り、朧げな視界の中で見たのは突如街全体を襲った暴風。

一切合財何もかも、全てを巻き上げる如き旋風に思わず目を瞑り、風が収まって開けた瞳に映ったのは真っ白になった大地。大理石もかくやという白さの大地の上には何も残っておらず、誰も見当たらない。

転移させられた、という線を除けば、一瞬にしてマグノリアの街が人諸共消えたのだ。

「オイ、誰かいねエのか!?」

明らかな異常事態。けれどさすがは歴戦と言うべきか、慌てずに生存者を探す。しかし、やはり返事はなく、探し回る足取りも次第に速くなる。

右を見ても左を見ても白しか写らず、状況が読めないことに苛立ちを露わにしていれば、不意に何かに躓いた。

「ぶっ!??ッてエ……………」

受け身を取れずに顔から強打して、苛立ちながら足元を確かめる。——そして、激しく後悔した。

「ウオオオオッ!??!!?」

ガジルの足元からなんと、手が生えているではないか。それもがちりとガジルの足首を掴み、離すつもりはないらしい。思わず反対側の足で手を何度も蹴り、力が緩んだ瞬間即座に距離を取る。

手は辺りに何もないのを確認するように何度か握ったり地面を触ったりと動き、何もないことが判明するともう片方の手が地面から突き出る。

何が何だかわからず、眺めるしかないガジルの目の前で状況は進み、手から腕へ、そして大地に手を置いてその持ち主が這い出した。

「ぺっぺっ……………うえ、口の中砂まみれ」

出てきたのは他でもない、カイト。口の中から砂粒を吐き出して、周囲に気がついたのか動きを止める。辺りを見渡して、目の前で尻餅をついているガジルを見つけると首を傾けた。

「ガジル、まさか君……………」

「んなワケねエだろ!??」

懐疑の視線に思わずツッコむガジル。まあ、それもそうだろうとカイトは再び周囲を見渡す。大気中の魔力の乱れはあるものの目立つような破壊痕もなく、大地を含めた街全体が転移したかの印象。人の手や破壊兵器によって、という線は捨てて良いと考える。

では、どうやって?と言われても頭をひねるしかない。街全体を転移させた意味もわからず、なぜ自身とガジルが残されたのかすらもわ

からない。

「…………君は何か知ってるかい？ねえ、ミストガン」

「なにっ!?？」

「……………」

ちらりとカイトが横目を向いて問い掛ければ、観念したのか空間から湧き出るようにして現れたミストガン。いつもの覆面はしておらず、その下の素顔、ジェラールと瓜二つの顔が申し訳なさそうに歪んでいた。

まさか他に人がいるとは思わず、そして面識はなくとも犯罪者として大々的に取り上げられていたジェラールの顔を知っていたガジルがその腕を鉄へと変えるが、カイトがそれを手で制する。

「久しぶりだねえ♪……………」と、言いたいところだけど、ミストガン。君は何か知っているね?」

疑問から確信めいた言葉へ。たまたま居合わせただけならば隠れる必要などなく、気付いた時点で合流すればいいだけだ。何より後ろめたさを雄弁に語るその表情が何よりの証拠だ。

「……………すまない。君たちを…………この街を巻き込みたくはなかったんだ」

「オイ、どオユーーことなんだ?」

「この街を消したのは、私の故郷が原因だ」

苦しげに、そう言葉を絞り出したミストガン。瞬間、周囲に展開された魔法陣から影の刃が生まれ、ミストガンの逃げ場をなくす。身じろぎひとつでもすれば傷を負う状態。身動きひとつ、背中の杖にも手を伸ばさないミストガンの様子を暫し眺めると、ため息をこぼして拘束を解除した。

「はあ……敵じゃないみたいだね。ごめんよ、ミストガン」

「いや、君の怒りはごもつともだ。気にしないでくれ」

「……………イイのかよ？」

「大丈夫だよ♪彼が本気なら、あんな拘束すぐに抜けてるさ♪」

それに、仲間内で疑心暗鬼になるのも嫌だしね♪と笑うカイト。嘘つきめ、と溢したガジルはもつともである。

「それで、教えてもらえるかな？この状況と解決策を」

「ああ」

そうしてミストガンの口から紡がれたのは、俄には信じがたい話。ミストガンの故郷、エドラスはこの世界とは別の世界にあり、そこでは魔力の使用は限られている。需要と供給の見合わないエドラス世界の生活は当然のごとく魔力を枯渇させる事態へと。

その魔力を補うために作り出されたのが別世界の魔力を吸収する魔法、超亜空間魔法アニマ。6年前から始まったこの計画は思う様な成果を得られず、予定の十分の一以下の魔力しか集まらない。

それは間違いなくミストガンがアニマを閉めて回っていたお陰なのだが、今回は桁違いの大ききゆえに防ぐことなど出来ず、結果としてギルドをはじめとしたマグノリアの街が飲み込まれてしまったのだ。

特殊な魔力を持つ滅竜魔導士の面々は対象を外れ、元よりエドラスの住人であるシャルルとハッピーも難を逃れていた。

ナツとウエンデイ、シャルルとハッピーはギルドを取り戻すために既にエドラスへ。そして星霊のおかげで取り残されていたルーシイも、既にミストガンの手によって送り出されていた。

「身勝手な話だとは、わかっている。だが、頼む!!？君たちの手を貸してくれ!!？」

「カッカッカ♪言われるまでもないよ♪」

元よりカイトにとってギルドは第二の故郷だ。それが奪われたとなれば取り戻すことに躊躇いはない。例え、どんな犠牲をだそうとも、という気概である。

「君もおんなじ気持ちだろう、ガジル？」

「あ？オレはパス、ンなめんどくせえことやっつてられっか」

同意を求める様にそちらを振り向けば、返ってきたのはまさかの拒否。言葉通り手を貸すつもりはないようで、背を向けてどこかへと去ろうとしてしまう。

しかし、本当は気になっているのだろう。その足取りは少しゆつくりだ。タダ働きはごめんだ、と察したカイトは仕方がないとため息を溢す。

「ねえ、ミストガン。シャルルとハッピーはそのエドラスの住人なんだよね？」

「あ、ああ。エクシードと言って、向こうでは神と崇められる、唯一体内に魔力を持つ者だ」

「なるほど。なら、あの2人以外にもたくさんいるってことだよね？」
「無論だ。浮遊島のひとつがエクシードたちの国となっている」

カイトたちの会話に、ぴたりとガジルの足が止まる。最近ガジルが探しているモノの正体、それはハッピーやシャルルと同じように歩いて喋るネコだ。

ギルドの滅竜魔導士3人中、1人だけ相棒ネコがない。それが悔しくてそこかしこを探し回っていたのだ。

最近、不審な動きの人がいると何度もクレームが来ており、探してみたらオレのネコとぼやくガジルだと判明。弱みを握られている状態で交渉など愚の骨頂だと薄く笑うカイトは、続く言葉を強調するよ

うに紡ぐ。

「へえ〜。じゃあ、もしかしたら、誰か1人、気が合って、相棒、なくんてことも、あるかもしれないねえ♪」

「ツ〜!!? わーっただよ!!? いきやあいいんだろ、いきやあ!!?」

日頃の行いがばれていると悟ったのだろう、顔を真っ赤にしたガジルがズカズカと足音を鳴らして戻ってくる。うまくいったと笑うカイトに、懐疑の視線を送るミストガン。実力はともかく、本当に頼んでよかったのだろうか。

「さて、そろそろ向かおうか♪あんまり悠長にしていると、弊害も出そうだしね♪」

「んんっ! その前に、コレを」

「ああ? アメか?」

「エクスポールという。あちらでは魔法を自在に使えない。その対策だ」

空返事ひとつ、渡されたエクスポールを飲み込んで余剰分を影の中にししまい込む。準備は整い、ミストガンが地面に杖を突き刺して魔法陣を広げる。

「散ったアニマの残骸を集めて、入口を作る。私から離れないでくれ。どこに飛ばされるかもわからん」

「チッ! 帰ったら腹一杯鉄食わせろよ」

「カツカツカ♪ ああ、お安いご用意さ♪」

「行くぞ!!?」

魔法陣が一際大きく輝き、目が眩むほどの閃光が辺りを襲った。光が収まった後には何も残らず、ただ閑散とした荒野が広がるのであった。

エドラス

空に浮かぶ大地、見知らぬ植物、見たことのない動物。

目に映る何もかもが自身の住まう世界には無いものばかりで、エドラスという別の世界に來たのだと実感させられる。

初めは未知に心を躍らせていたガジルも、今や意気消沈。思い足取りで荒野を歩く。緑のない大地は燦々と輝く太陽の熱を反射して、ただそこにいるだけでとめどなく汗が吹き出す。

額から溢れる汗を腕で拭い、何でこんな目にと半ば現実逃避しながら空を睨んだ。

エドラス世界へと転移したガジル、カイト、ミストガンの3人。しかし、到着後街の方向を示すと「私は先に行つて、準備をしておく」だけ残して1人早々と消えた。

残された2人は歩き出したのはいいが、予想外の環境に体力を削られ、2日経つた今も街の輪郭さえ見えてこない。そも、転移させるなら街の近くにしろよ、と悪態を垂れる。

「オイ……水……」

「カツカツ……もうないよ」

同行者のカイトが万が一の為に影の中に保管していた水も等々底をついた。その事実にがくりと項垂れて、ふらふらと足を進める。

吸血鬼であるカイトは暑さはまだしも、太陽の光で体力をかなり消耗しており、倒れそうになったところを咄嗟にガジルの肩を掴む。ガジルも体力の限界だったのか、支えることも難しく2人揃つて倒れてしまった。

しばらく無言でその場から動かない2人。重いと感じたのか、最後の力を振り絞つて上に乗るカイトを押しやるガジル。

仰向けに転がるカイトが反転した世界の中、進路方向に目を向ける

がやはり街は見えてこない。

「カツカツ……………」

苦し紛れの空笑いしか出てこない、そんな状況。薄らとしか視認できない視界の中、正面から煙を上げて向かってくる何かが見えた気がした。



「グゴツ……………あぁ?」

いつの間にか寝ていたらしく、いびきをかいていたガジルが目を覚ました。視界に映るのは見知らぬ天井。決して忌々しいまでに澄んだ青空ではない、人工の屋根の下だ。

決して寂れているわけでもなく、豪華というには見窄らしい至って平凡な造り。そこまで柔らかくもないベッドに身を預けて、何があつたのか思い出す。

確か、荒野のど真ん中で体力の限界で倒れたはずだ。ならば、誰かに拾われたのか?

まず頭に浮かぶのはカイト。しかし、自身と一緒に倒れた上に極度の方向音痴だ。まずないと考えていい。

次いでミストガン。可能性はあるが、弱い気がする。準備とはそんなに早く終わるものであつたのだろうか。

考えても仕方がないと判断したガジルは上体を起こすと、近くに置いてある水をピッチャーごと飲み干す。乾いた身体を潤す水分に一息ついていれば、下からカイトの笑い声が聞こえた。それも、いつもの様な嘘くさい笑い声ではなく、心からの呵呵大笑。

机を叩く音さえ聞こえてきて、なんだなんだと下の階へと。そこにいたのはご満悦の様子のカイトと、自身と瓜二つの顔を持つ男。服装

は普段では絶対に着ない、黒いスーツと黒いソフト帽、それにメガネ。違いがあるとすればそれだけだ。

足音で気がついたのだらう、突然の光景に固まるガジルにカイトが視線をやると、一息ついた筈の笑いが込み上げる。

「な、なんだ、こりやア……………」

「目覚めたんですね。こんにちは、アースランドの僕」

「ぶっ！カッカッカッ!!？」

自身とそっくりな顔を持つ人間が、嫌に丁寧な言葉を放つ。それが恐ろしく気味が悪くて皮膚が粟立ち、いまだに笑うカイトに問い詰める。

「オイ、どうなってんだ、こいつア!!？」

「カッカッカ!!？あゝ、可笑しい♪見ての通り、彼はこの世界の君だよ」

「はア？」

「何となく、予想はつくだろう？ミストガンの顔があれだけそっくりなんだ。この世界にはそっくりさんがたくさんいるってことだよ」

他人の空似、というにはあまりにも似過ぎていたミストガンとジェラルル。ならば、エドラス世界にもそっくりさんはいるのだらうと予想していたカイト。予想はしていたが、いざ事実を目の当たりにすると込み上げるものがあるが、さておき。

また笑い出すカイトを苦笑いで流し、エドラスのガジルがアースランドのガジルに挨拶する。

「僕はガジル。お会いできて光栄です」

「お、オウ……………」

同じ顔の人間と握手。妙な気分になりながらちらりとカイトを横

目で見る。ひとしきり笑って落ち着いたのか、窓の外の様子を眺めておりこちらに意識すら向けていない。どうやら魔法で作りに出した夕子の悪いイタズラという線はないだろう。

「にしても……カッカッカ。魔力が有限という割には、何だか活気のある街だねえ」

皮肉を混えるカイトに釣られてガジルも外を見れば、そこに広がるのはパレードかと思間違うほどの煌びやかな大通り。そこかしこでは魔法を用いたであろう装飾や看板に、魔法を使ってお菓子を作り出す露店。

街を行き交う人々の表情に翳りはなく、魔力が枯渇性資源として扱われている様には思えない。

「ええ……お恥ずかしい話、国王は魔力をこの王国に集中させ、国民の不満を発散させているのです」

帽子で顔を隠しながらそう答えるエドラスのガジル。

独裁国家ということもあり、そういった暴挙に出ても国民は不満は出せても叛逆はそう易々と起こせない。何せ、武力たる魔力は国王が掌握しているのだから、足掻こうにも足掻かないのだ。一応、現王政に反抗する魔導士ギルドもいくつかあるのだが、王国軍に追われる始末。

王政に対抗するべく、エドラスのガジルはフリーのジャーナリストとして反王政の記事を書いているが、成果は著しくない。

ふーん、と空返事ひとつ。興味がないと視線を窓の外から動かさないカイト。居た堪れない空気が堪えたのか、ガジルが口を開く。

「アー、そんで。なんでテメエはオレたちの事知ってんだ？」

「ああ、それはですねー」

「彼が私の協力者だからだ」

タイミング良く玄関から現れたのはミストガン。外していた筈の覆面を付け、差し入れなのだろうその手には幾つかの紙袋が握られていた。

「テメツ、今までどこにいやがった!?!?」

「情報収集の為に、先に王都に。そこで、エドラスの彼に出会ったんだ」

「僕もまさか、協力を依頼されるとは思いませんでしたよ」

苦笑いひとつ溢すエドラスのガジル。ミストガンからすれば、反王政を掲げる彼は都合が良かったのだろう。まあ、関係ないか、と心の中でこぼし、見流していた外の景色を一区切り、ミストガンに向き直る。

「やあ、ミストガン。早速だけど、いくつか聞きたい事があるんだ」

「構わない。答えられる範囲であれば、答えよう」

「優しいねえ。なら、一つ目。こちら側に吸い込まれたみんなの行方は?」

指を一本立ててそう問うカイト。その鋭い視線から逃れる様に、視線を逸らしながらミストガンは答える。

「アニメに吸われたマグノリアは現在、魔水晶となっている。あまり時間をかけすぎると魔力と融合して戻れなくなってしまうから、早めに行動を移したい」

「そう。なら、二つ目。戻す方法は?」

「この世界では滅竜魔導士の特殊な魔力はさまざまな事に使える。魔水晶を破壊すればいい」

カイトの視線がちらりとガジルに向き、その視線に気がついたガジ

ルが任せるとばかりにニヤリと笑う。面倒な事は考えずに魔水晶を破壊、なんともシンプルで自分に適任なんだと。

「三つ目。みんなを戻したとして、帰る方法は？」

「それはこちらで用意している。心配しなくも大丈夫だ」

そ、と軽い承諾をひとつ。他に手段があるなるばまだしも、現状信じて作戦を練るしかないのだ。

それと、と4本目の指を立てて、予想外だったのか覆面の下でもわかる程怪訝な表情のミストガンに構わず、言葉が続ける。

「先に来たっていう、ナツたちの行方は？」

「……………ナツ、ウエンデイ、ルーシイの3人は捉えられ、エクシードの2人は母国に送還された」

刹那、溢れんばかりの重圧が部屋を支配した。言葉もなく、魔力を放っているわけでもない。だが、カイトから発せられる見えない筈の怒りがその場の重力が何倍にもなったかのような錯覚を与えているのだ。

「オ、オイ!!?落ち着け!!?」

「落ち着く?カツカツカ……………そうだね、落ちついていき。落ち着いているとも。ああ、そういえば。御伽噺で女の子が歌で召喚した魔王が一国を滅ぼした、なんてのがあったねえ」

「オイ、なんで今それを……………やめろよ?ぜってえだぞ!!?」

「さて、どうだろうねえ」

ギルドを奪われ、仲間を利用され、カイトの怒りは既に臨界点ギリギリ。その上、仲間が捉えられているとわかった今、御伽噺よろしく魔王にでもなつてやろうかとさえカイトは考えていた。

これは本人さえ理解していないが、実のところカイトの中にはかつ

て吸血鬼が定めた掟が僅かながらに生きている。その中でも特に重んじているのが「子を傷つけてはならない」というもの。

かつてその掟によって生かされていたこともあつてか、カイトは例え人間といえど子供は庇護対象として見ていた。例にも漏れずウエンデイの事はその対象として見ており、よく気にかけているのはその為だ。

「待ってくれ!!? 気持ちわかる。だが、今だけは堪えてくれ!!?」
「カッカッカ、可笑しなことをいうね、ミストガン。行くよ、ガジル」
「行くって、どこにだヨ?」

嫌な予感がする、と付き合いの短いガジルでもわかつていた。できれば外れて欲しいと冷や汗が背中を伝う中、カラカラと笑いながらカイトは答える。

「決まっているだろう? この国、滅ぼすよ」
「眠れ!!?」

刹那、ドアに手をかけたカイトが崩れ落ち、床を枕に寝てしまう。下手人であるミストガンを責めることを、ガジルはできない。そも、こんなに過激なやつだったのだろうかと疑問に思うばかりだ。

実のところ、カイトが今まで暴れていないのはギルドの立場というものもあるが、マカロフとの契約のお陰だったりする。無闇に人を傷つけてはならない、という契約を結んでいなければそれこそ厄種となっていただろう。

そのマカロフが現在は生死不明の状態、契約は白紙に近い状態。ストツパーがなくなつたカイトは暴走列車さながら。

「……………本当に任せても大丈夫なんですかね?」

エドラスのガジルの言葉に、ミストガンは「信じるしかない」と一

抹の不安を抱きながら空を仰ぐのであった。



エドラス王国王城、その会議室にて。

捉えられたナツ、ルーシイ、ウエンデイの処遇を検討するべく
の会議が国王参加の元行われていた。

エドラス国王、ファウスト

幕僚長、バイロ

幕僚長補佐、ココ

第四魔戦部隊隊長、シュガーボーイ

第三魔戦部隊隊長、ヒューズ

第一魔戦部隊隊長、パンサー・リリー

後は第二魔戦部隊隊長のエルザ・ナイトウォーカーがいるのだが、
今回は所用によって席を外している。しかし、普段であれば禁止され
た魔法をいまだに使おうとする魔導士ギルドを取り締まる為に各地
を巡る面々が一同に揃うのはそうそうあることではない。

ポピポピと、不思議な足音を立てながら会議室を走るココを背景
に、会議は進む。

「ぐしゅしゅ……やはり言い伝え通り、アースランド地 上の魔導士は皆、体内に
魔力を持っていることがわかりましたぞ」

「んー、まるでエクシードのようだなア」

「しかし、その魔力はエクシードの比にはなりません」

ポピポピ、ポピポピ。元気に走り回る姿を王は好んでおり咎めを受
けることはないが、しかし、側から見れば不敬であると捉えられても
おかしくはない。

机の周りを走るのが何周目かに入るところ、ココの頭が掴まれた。

「はっつっつ」

「ココ、何度も申しているでしょう。場を弁えなさいと」

いつのまにそこにいたのだろう。王の斜め後ろに待機していた女中はココをそのまま持ち上げると、その顔の前まで持ち上げる。

淡白な、いつそ感情を全て拭い取ったかのような無表情は、美しい顔付もあつて作り物のような印象を与えるもので。色も温度もない、短く刈り揃えられた髪と同じ濡羽色の瞳に睨まれるのはそれは恐怖でしかない。

恐怖で震えるココを見かねてか、王が「よい」とだけ告げると、機械的にココを解放する。すぐさま距離を取って王の椅子の影に隠れるココを見つめることもなく、女中は静かにまた王の斜め後ろに待機した。

「ねえちゃん!??なんでいるんだよ!??」

「職場でねえちゃんはやめなさい、ヒューズ。給仕に参じたまでよ」

よく見れば、確かに。女中の横にはカートが置いてあり、すでに王の前には紅茶が置かれていた。王が何も言わずにそれで喉を潤していれば、言えることなどない。

弟であるヒューズはできれば姉に仕事姿を見られたくないと思っているが、職場が同じである限り不可能だろう。

「んー、さすがエドラス王国の女中を束ねる鉄の女。仕事が早い」

シユガーボーイも出された紅茶に舌鼓を打ちながら、会議は進む。

ルーシイにも魔力はあるが、エクシードの女王シャゴットより抹殺の命令が出ているため飼殺しにすることはできず、逆にナツとウエンデイには何の縛りもないため、魔水晶と共に半永久的に魔力を吸い上げる方針が決定した。

会議も終わり、各々が席を立って魔力を手に入れた後の皮算用に耽る中、ひとりただ静かに座っていたパンサー・リリー。甲冑を身に

纏ってはいるが顔は剥き出しで、人というよりも寧猛な猫科そのものの顔は何か言葉を探しているようだ。

「どうした、リリー」

「陛下……………最近の軍備強化についてなのですが」

王に促され、胸の中の不満を口に出す。けれど、その先を告げるな、という王の視線に何も言えなくなり、「失礼しました」とだけ告げて去ろうとする。

その際に、ちらりと横目に入った女中の瞳には一瞬だけ嫌悪と侮蔑の混じった物があったような気がして、けれど瞬きの内に消えてしまう。

リリーの外見上、そういった奇異の眼差しで見られることは少ない。出世も早かった為に嫉妬や妬みと言ったものにも慣れていいる。今回もまたそう言ったものだろう、と無視して会議室を出る。

残された王はため息を吐いて背もたれに身体を預けると、近くに寄った女中の話を聞く。

「王よ、例の作戦はいかがいたしましたでしょうか？」

「進めておけ……………その時にはお主にも働いてもらう事となる。よいな、カイト」

「御意」

腰を曲げて礼をひとつ。カイト、と呼ばれた女中は機械的に淡々と、命令をこなすのであった。



ざわざわ、と賑やかな声がそこかしこから聞こえる。

言葉として聞き取れば、誰も彼もが王を称賛し、讃え、幸福な未来がやってくるのだと騒いでいる。

はん、とひとつ鼻で笑い飛ばす。一体、誰の犠牲の上に成り立つ生活なのかと侮蔑の視線を飛ばしていれば、先行していたガジルから早く来いと促された。

2人が現在いるのは王都のメイン通り。その先にある広場に鎮座する魔水晶を目指してだ。

どうやら魔水晶は切り出されたものらしく側面に断面が見えており、残りの魔水晶は安全を踏まえ浮島のひとつに補完されているらしい。それがどうしようもなく腹立たしく、衝動的に周囲の破壊を考えるがガジルから睨まれて止める。

今のところ、ガジルとミストガンが最後の心の拠り所だ。その2人から念押しに破壊を禁止されては頷く他あるまい。

肩を竦めてガジルと並び立つと、魔水晶に集まる民衆に紛れて状況を確認する。

魔水晶を中心に、等間隔で衛兵が並び、一定の範囲には近づかないように牽制している。人数はおおよそ40人前後、といったところだろう。

国を滅ぼす、と言ったカイトだがさすがにそう易々と事が進むと思っていない。確かにエドラスは魔力が有限ではあるが、だからと言って弱いわけではないのだ。

練度の差はあれど、下手をすれば全国民が魔導士にもなれるエドラスの魔法体系。これは魔導士の適正がなければ魔法を使えないアーランドではまず不可能な事だ。

「いいか？作戦通り進めろヨ？ぜってえ余計な事すんなよ!?!?」
「信用ないねえ。わかってるよ、壊すのは魔水晶だけ。街への被害はなしで、でしょ?」

本当にわかっているのか、と不安に思いつつ、ガジルは頷く。そして人混みを掻き分けて前へ進み、最前列まで辿り着くと一気に魔水晶へと走り出す。

「な、何者だっ!!?」

「敵襲、敵襲!!?」

あつという間に取り囲まれそうになるガジル。けれど、その足は止まらない。一直線に魔水晶へと進むガジルを妨害しようと槍を片手に衛兵が進路を妨害するが、ガジルの背後から現れた黒犬が応戦する。

「うわっ、なんだこいつら!!?」

「どこから!!?」

ブラック・ドッグ

「黒犬。さあ、ガジル。景気良くやつちやえ」

「ケツ、わアってるよ!!? 鉄竜棍!!?」
てつりゅうこん

道が開けた先にある魔水晶へと跳躍。その勢いそのまま繰り出された滅竜魔法。この世界で唯一、魔水晶から元の形へと戻すことのできるその魔力は、魔水晶へとヒビを入れ、それが加速的に全体に広がる。まさかの事態に民衆も言葉を無くし、一瞬の静寂。そして魔水晶が弾けるように消えるとそこにはエルザとグレイの2人がいた。驚いたのは民衆だ。自分たちの希望の象徴とも言える魔水晶が破壊されたのだ。

テロリストだ、反乱軍だ、と騒ぎながら我先にと逃げ惑い、衛兵たちは突如現れたエルザとグレイに困惑する。

「なんで、エルザ隊長が……?」

「横にいるのはフェアリーテイルのグレイ・ソルージュ!!?けど、なんで魔水晶に??」

「ん……、ここは?」

「なんだア、こりや」

エルザとグレイの姿を見て、1人ほつと胸を撫で下ろすガジル。暴れ出すかもしれないカイトのストッパーがピンポイントで現れたの

だ。柄でもなく両手を高々と上に上げたい衝動を抑え、2人に近づく。

「詳しい話は後だ!!?てめえらはさっさとあの城に向かえ!!?カイト!!?」

「はいはい、わかってるよ。ほら、2人とも、これ飲んで」

わけもわからず困惑する2人にエクスポールを渡し、混乱から立ち直って衛兵たちを黒犬で牽制する。

「おい、カイト。どうなっているんだ、これは?」

「てか、ここドコだよ!!?あー、くそっ!!?わかんねえことだらけじゃねエか!!?」

「悪いけど、道すがら話すよ。今ちよつと余裕ないから、さ!!?」

黒犬では罫が明かないと、足元の影から巨大な蛇を生み出し道を作る。先行しようとするカイトを、エルザが待ったをかけた。何もわからない、どうすればいいのかわからない状況。だが、これだけは間違いないと正さねばならないと。

「待て。カイト、お前が先行すれば迷子になる。場所を教えろ」



エドラス王国に捉えられていたナツ、ウエンデイ、ルーシイの3人。ナツとウエンデイは利用価値と実験があるため方が一も踏まえ地下で監禁され、ルーシイは小高い塔の中にいた。

抹殺命令の下っているルーシイを亡き者にしようと、エドラスのエルザが高所からルーシイを落とすが、寸前のところでエクスタリアから逃げ出したハッピーとウエンデイにより救出。

しかし、ハッピーとウエンデイを追うエクスタリア兵と王国軍に挟まれ絶対絶命の危機に陥るが、王国はエクスタリア兵を魔水晶へと変えてしまった。

それは明確な敵対行為。エドラスにおいて天使とも神とも謳われるエクシードへの反乱。無限の魔力を手に入れるため、エクシードと魔水晶を犠牲にするコードー エクシード・トータル・デストラクション E T D が国王の手によって発令された。

それには滅竜魔導士の魔力が必要不可欠であり、目下の目標はナツとウエンデイの救出。シャルルが騙し得た情報を元に、ルーシイたちはそちらへと向かう。

「きやつ!!?」

「うわっ!!?」

地下へと向かう階段の中、突如背後から槍が投げられる。躲すことはできたが、尻を強かに打ったルーシイがそちらを睨むと、そこにエドラスのエルザがいた。

「この先には行かせんぞ」

「もう!!? あたしたちに興味なくしたんじゃないの!!?」

理不尽さに吠えるルーシイ。星霊魔法は手枷の影響で使えず、使えたとしてもエルザの後ろに控える兵士たちまで相手するとなると難しい。悔しさに歯を噛み締めていれば、投擲された槍が光出す。

「え!!?」

爆音、そして衝撃が3人を襲い、地下へと転がる。死んではいないが、それでも身体を動かさない程のダメージを負った3人に悠々と近づくエルザ。その時だった、通路の奥から少女の叫び声が聞こえたのは。

「ウエンデイの声……………」

長年連れ去ったシャルルが聞き間違えるはずもない。これは自らのパートナーの、悲痛の叫びだと。

「アンタたち…………ウエンデイに何してるの……………」

「CODE TDに必要な魔力を奪っているんだ」

「や、やめて…………やめなさいよ!!?」

未だに続くウエンデイの叫び。噛み付くシャルルに槍の穂先が向けられた。

「気にやむな。どうせ、おまえはここで死ぬ」

常であればエクシードに槍を向けるなど、あつてはならない。だが、既にエクシードの翼は折れ、王国の未来への糧でしかないのだ。

「ウエンデイはやらせないぞ!!?!!?」

「ならばお前からだ」

痛む身体に鞭打ってハッピーがシャルルの前に立つが、エルザは冷徹に、冷淡に槍を振り上げる。

「ダメエーーーーー!!?」

シャルルの叫びが響き、そしてーーーー

「なんだ!!?!!?」

その穂先がハッピーの直前で止められ、エドラスのエルザが突如爆

破でもしたように騒ぎ出す背後を睨む。いつそ面白いように宙を舞う兵士たちの間から現れる3つの影。

「オイ、コラてめえら。そいつらウチのギルドのモンだと知っててやってんのか？」

「ギルドの仲間に出した者を、私たちは決して許さんぞ」

「カツカツカ……まあ、許すつもりはないんだけどねえ。お前たちは全員、フェアリーテイルの敵だよ」

砂塵の中から堂々と現れたのはグレイ、エルザ、カイトの3人。まさかの登場に驚くも、頼りになる仲間の姿に安堵してルーシイたちは涙を流すのであった。

救出

「ヒューズ、シユガーボーイ様。おふたりは万が一に備え、侵入者の撃退をお願いします。パンサー・リリー様、貴方は浮島の魔水晶の護衛を」

コードETDが宣言され、かつて神と讃えたエクシードへの反乱を恐れる兵士たち。けれど、その先にある無限の魔力という魅力が恐れを塗り潰し、兵士達の士気を上げていた。

そんな中、一連の出来事が眺められる王城のテラスに集まっていた各隊の隊長たちに指示を飛ばすのは王の側に控えている筈の女中。普通ならば立場としては隊長たちの方が上であり、寧ろ指示を貰う側である。

だが、隊長たちは言葉をひとつふたつ交わして持ち場へと走り出すではないか。

「め、メイド長！わたし、私はどうすれば!?!？」

「ココ、貴女はパイロ様と一緒に王の元へ。コードETDの要となるお仕事です。しっかりと励みなさい」

「はいい!!?。」

苦手意識があるのだろうか。いつもより固い動きのココは敬礼を解くと、一目散に廊下を走り出す。非常時とはいえ、廊下をそう走るなと一言告げたいところだが、それは後回しに。

入れ替わるように現れた兵士から金属製の手甲を受け取り、両の拳を打ち鳴らす。

「侵入者の状況は?。」

「はっ！現在、エルザ隊長が迎撃に。また、追加で3人の侵入者が現れたと報告が!。」

「そうですか。ならば、兵の半分は迎撃に。残りは王の守護を」

「隊長はどちらに？」

「私は迎撃に回ります。この国の未来のため、各自奮闘するように」

メイド服を脱ぎ捨てて、その下に着ていたラバースーツが顕になる。一見して細身にも見える身体つきではあるが、それは無駄な脂肪を削ぎ落とした証。指の先、足の先まで鍛え上げた執念ともいえる努力の末。

キツと鋭い視線を通路の奥に向け、女中は進む。この国の未来と安寧の為、無限の魔力の為、犠牲を厭わない覚悟と冷徹さを秘めて。

「近衛隊、出陣」

王城メイド長兼王国近衛隊隊長。それがエドラスのカイトの肩書きであった。



通路の奥から聞こえる、ウエンデイの叫び。ああ、この先にいるのかと察したカイトは眼前の衛兵たちを温度のない瞳で見据える。

ミストガンと約束した手前、無闇矢鱈と滅ぼそうとはしない。だが、やり返す事なく場を納める気など毛頭ない。目には目を、歯には歯を、悲痛には絶望を。

「グレイ、みんなをよろしく頼むよ」

影から取り出したエクスポールを渡し、困惑しながらも武器を構える衛兵たちを黒い大蛇が襲う。出来上がった道をグレイが走り出すが、そこを狙うエドラスのエルザ。飛び上がって大蛇を躲し、天井を足場にして迫る攻撃をアースランドのエルザが防ぐ。互いの獲物がぶつかり合い、一瞬の静寂のあと周囲に衝撃が走った。

「エルザ、助けはいる?。」

「不要だ。カイト、お前は地上を」

「はいよ」

言葉を短く交わし、カイトは階段を登る。その先に待ち受けていたのは我先にと地下へと向かおうとする衛兵たち。カイトの役目はエルザの闘いに邪魔が入らないようにすること。役目としては地味かもしれないが、ただでさえ拮抗している両者の闘い。そこに援軍を向かわせるわけにはいかない。

「いたぞ!アースランドの者だ!!?。」

「エルザ隊長をお助けしろっ!!?。」

「カツカツカ……………」

一斉に地下へと続く階段へと走る衛兵たち。けれど、その前に立つカイトの視線を受けて思わず足を止める。いっそ、見下した様に冷めた目をされるならば、まだわかる。侮蔑も、蔑みも、魔導士狩りをする上で何度も受けてきた。

だが、カイトの視線には何も込められていない。清々しいまでの無関心さであり、無機質さ。口元は無理やり笑わせたように引き攣り、声もただ音を出しているだけだ。

そんなカイトの足元からぶわりと、溢れんばかりの幻想的にも見える黒い蝶が周囲を舞った。

グリム、バタフライ
「悪魔蝶」

蝶たちが周囲の建物や衛兵、それぞれ自由な場所に留まると刹那爆発を起こす。建物から飛び散る瓦礫が道を塞ぎ、爆風に飛ばされた衛兵たちが宙を舞い、砂塵に隠れてカイトは告げる。

「お前たちに恨みはない、といえは嘘になるよ。けどまあ、理解できないわけじゃあない。お前たちはお前たちで、必死に生きる為に足掻き続けた結果だつて」

けど。けれど。と続けたカイトが砂塵を引き裂き、姿を現す。混沌ノ道化師の魔法を纏い、右手にその怒りを表す様に膨大な魔力を込めて、瓦礫の山の上から声高々と告げる。

「俺たちのギルドが犠牲になるというのなら、話は別だ。演目も音楽も必要ない、正にこれは生存競争。なら………滅ぼされる覚悟は、あるんだろうね？」

言葉と共に放たれた混沌ノ爪。ヒツ、と誰かが息を呑む。誰も避けられない、直撃コースだと悟ったからだ。せめてものと身体を丸め、瓦礫を盾にして逃れようとするが、それが役に立たないことなど本人が一番わかっている。

けど、そうでもしないと、何かしらのアクションを起こさなければ恐怖に吞まれてしまう。黒と白の魔力が混ざり合う魔法は、けれど予想とは裏腹にガラスが割れる様な甲高い音を立てて衛兵たちの前で碎け散る。

「まったく、何をしているのですか」

握った拳を振るつたその人は、頭が痛いとはかりに反対側の手で顔を覆う。遅れて後方から現れた増援が負傷兵を助け起こし、誰も彼もが歓喜に震えた。

「カイト隊長!!？」

「隊長が来てくださつたぞ!!？」

「助かつた………助かつたアア!!？」

突然現れ歓声を受ける人物に、カイトは眉を顰める。カイト隊長。目の前の人物は確かにそう言われた。ならば、エドラスの自身なのだろう。

だが、ガジルやジェラールとは違い、性別も違っていれば顔も似ていない。唯一髪の色が近いことくらいだろう。

「叫ぶ元気があるなら侵入者を追いなさい。A班は負傷兵を、B C班は所定位置へ」

歓声に応えず、淡々と指示を出す姿にカイトはここに来て初めて笑う。普段ならば道化として相手を笑わせようとしているが、なるほど。ここまで滑稽な様は確かに笑うしかない。

不躰に笑う姿が癩に障ったのか、ただでさえ鋭い目つきが更に鋭くなりカイトを突き刺す。それさえもまた笑いの種だ。

「……………なにがおかしいので?」

「カッカッカ。いや、なに。負傷兵だのなんだの、悠長に構えるお前が面白くてね」

ぱちん、と指をひとつ鳴らせば周囲から現れる影の拳たち。次の合図で総攻撃を凶れば終了。後は皆を元に戻すだけだ。そうたかを括るカイトの期待を裏切る様に、次の瞬間展開した魔法が次々と破壊された。

「!??!」

確かに、恐怖を覚えさせようと魔法は待機させたままだった。だが、こうも易々と破壊されるものなのかと意識を割かれている内に、一足飛びで懐に入ったエドラスのカイトはそっとカイトの胸に片手を添える。

「アースランドの私は、足元が疎かなようで」

そうして反対の手を添えられた瞬間、全身から血が吹き出すような感覚と浮遊感がカイトを襲った。吹き飛ぶカイトを更に隠れていた兵士たちが持っていた銃で追撃し、十分に蜂の巣にされたカイト。

激痛の中、魔法を破壊したのは隠れていた部隊かと当たりをつける。舌打ちひとつこぼして起きあがろうとするカイトの顔を、エドラスのカイトが容赦なく踏み潰す。飛び散る赤、靴の裏にこびりつく肉の感触に何の感慨も示さず、淡々と指示を出し始めた。

「状況クリア。これより、第二魔戦部隊隊長、エルザ・ナイトウォーカー様の援護に入ります。B班は先行し安全の確保を、C班は合図があり次第突撃を。D班は広場の援護へ。遠距離からの支援を徹底なさい」

「はっ！！？」

それぞれが指示を受け、まるで機械のように正確に動き出す。エルザを含めた魔戦部隊が王国の剣ならば、エドラスのカイト率いる近衛隊は盾。その任務に失敗など許されず、所属しているのは選りすぐりのエリートのみ。

他とは一線を期す衛兵たちが一丸となって動くのだから厄介極まりない。制圧力という点では王国随一の實力を持つ部隊。それが瞬きの間に空を舞った。

「なっ！！？」

突如として足元から現れたのは黒い巨腕。エドラスのカイトは後退して難を逃れたとはいえ、負傷兵、そして近衛隊を含めた全員が宙を舞う。そのままハエを叩く様に街の方へと弾かれる様を見ながら、今し方頭部を潰した筈の死体を見る。

「……………どうやら、アースランドの私は人ではないようですね」
「カツカツカ、今ので動揺してくれたら助かるんだけど……………エドラスの俺は人でなしだねえ」

ゆっくりと身体を起こし、まるで逆再生でもするように頭部が復活する。街に弾いた兵士たちは影で作ったネットに叩き込んだとはいえ、復活は難しいだろう。手っ取り早く滅ぼせばよかったものの、交わした約束もありそう過激な手立ては使えない。まあ、事故ならば違反にはならないと思っではいるが。

互いに睨み合い、そして合図もなく互いの爪と手甲がぶつかり合う。

「王国メイド長兼、近衛隊長、カイト・ヴァーミリオン。我が王国のため、速やかに死んでいただきます」

「フェアリーテイル、道化のカイト・オールベルク。ウチに手エだしたツケ、払ってもらおうよ」



王国の地下に幽閉されたナツとウエンディ。グレイたちのお陰で助け出され、魔水晶にされた仲間を助けるため動き出す。

強制的に魔力を抜かれるという激痛の最中、確かに聞いたのだ。王国は浮遊島に浮かぶ魔水晶とエクシードたちの国、エクスタリアを衝突させこの世界に無限の魔力をもたらすつもりなのだ。

無論、衝突による両者の命はない。ナツ、グレイ、ルーシイの3人は国王を直接止めるために、ハッピーはガジルを連れて一刻も早く魔水晶から仲間を解放するために、ウエンディとシャルルはエクシードたちを避難させるためにそれぞれ動き出す。

「ウエンデイ、危ない!!?」

「きやつ!!?」

階段を使って地上に出た瞬間、すぐ隣の空間に何か投げ込まれる。転がる様にして躲し、恐る恐るそちらを見やれば白い道化服に身を包むカイトがいた。

「カイトさん!?」

「いつつつ……おや、ウエンデイちゃんにシャルル。2人とも無事でなによ、りつ!!?」

言葉をかけるカイトが慌てて防御魔法を展開すれば、一拍遅れて轟音が辺りに響く。薄く光る壁の向こうでは淡々とこちらを睨むエドラスのカイトの姿。一撃では不可能と判断したのだろう、息も切らさずに無表情のまま拳を叩き込む姿は恐怖でしかない。

「くそっ、ゴリラ女め……。2人とも、危ないから下がってな!!?」

「で、でも!!? 私たち、エクスタリアに行かないと」

「エクスタリア?」

「私の故郷よ。魔水晶とぶつけて無限の魔力を手に入れるそうよ」

シャルルの言葉に一瞬空を見上げ、あーと納得したように溢し、防御魔法に意識を割きながらちらりとウエンデイたちの様子を見る。

「……………危ないからやめておきなさい」

「え?」

甲高い音と共に防御魔法が破られるが、すぐさま影の魔法で対象を繭のように包み込む。内側から何度も拳を放たれてぐにぐにと動く拘束魔法はあまり長く保たない。この隙にウエンデイたちを逃さなければとカイトは判断する。

「君はまだ幼いんだ。危ないことは俺たちに任せて、早く安全なところ、に……………」

言葉を続けていく内に、どんどん膨らむウエンデイの頬。視線はこちらを見ずに、拗ねた様に合わせようとしない。怒っている、とはわかるが何故怒っているのかわからず、困惑するカイト。

「…わ…し…フエ……………」

「えっと、ウエンデー」

「私だって!!?フェアリーテイルの一員だもん!!?」

言葉が聞き取れず、聞き返そうとすれば耳が痛くなる様な大声でそう宣言された。そばにいたシャルルがたまらず耳を塞ぐほどの音量に込められていたのは憤慨。

カイトにとってまだ幼子としか思われていないこともあるし、信用されていない事に対する怒り。ここに来るまで少なからず溜まっていたストレスを吐き出す様に叫んだウエンデイに目を白黒させるカイト。

「シャルル、いくよ!!?」

「え、ええ」

「あ、ちよつ、ウエンデイちゃん!!?ウエンデイちゃあーん!!?」

カイトの静止も聞かずに空へと飛び立つ2人。止めようにも拘束を引き裂いたエドラスのカイトがそんなことを許さず、繰り出された掌底を腕でカードするもそのまま弾かれ城壁へと激突。

瓦礫に寝そべるように崩れながら、なぜウエンデイがあんなにも怒っていたのかを頭の隅で考える。声色もセリフも表情も、相手に不快感を与えるようなことはしていない筈だ。ならば何故?と考えたところでこちらを見透かしたようにエドラスのカイトがため息を吐

いた。

「アースランドの私は、人の心がわからないようで……いえ、人もどきに理解しろという事の方が無駄ですね」

「カツカツカ。なら、お前はわかるのかい？」

苛立ち混じりに放たれた混沌ノ爪。そんなヤケクソの攻撃など脅威ではないとばかりに甲高い音と共に砕き、魔法の向こうで鉄面皮を崩さず、けれど嘲笑と侮蔑を込めた視線を送る。

「当たり前です。主人の機微に聡いメイドを務め、幼い弟を育ててきた身ですから」

「なら、教えてもらおうかな？」

「なぜ？ 貴方に教示する義理も義務もないもいうのに」

「それもそうだ、ねっ!!？」

空いていた彼我の距離を一足飛びで縮め拳を振るうエドラスの力イト。それを幾重にも重ねた影の拳で遮り、お返しとばかりに黒い蝶の群が対象を包み込んだ。

即座に起こる爆炎に煽られながらもカイトは臨戦体制を崩さない。周囲に罫を仕込み、どこからでも対処できる様に準備する。

「けれど、ひとつ言えることがあるとすれば」

上空から聞こえた声に、反射的にそちらに視線を向ける。爆炎を利用して飛び上がったのだろう、服や顔が少し煤けたエドラスのカイトにそれ以上の傷はなく、高々と振り上げた脚が降下と共に振り下ろされた。

「あの少女は、守られるだけの存在ではない、ということですよ」

カイトの展開した半球状の防御魔法。けれど、エドラスのカイトの攻撃は重く、耐えきれなくなった地面が蜘蛛の巣状にひび割れそのまま地下へと落下した。



「……………よかったの、ウエンデイ?」

「いいの!!? 私たちだけでも、できるんだから!!?」

怒りが収まらないのか頬を膨らませて、視線はエクスタリアに向かってはいるが脳内ではカイトに対する反論が埋め尽くすウエンデイ。その背中で呆れつつも、気持ちはわからないでもない内心ぼやく。

フェアリーテイルに加入してから今まで、認めたくはないがカイトはウエンデイを大切に扱っていた。それこそ、ウエンデイの頼みは基本断らず、共にした依頼でもウエンデイの安全を考えて。憧れを抱くウエンデイは気づかなかったかもしれないが、側にいたシャルルにはそれがよく見えた。

決して好感度を稼ごうなどという下心はなく、シャルルもシャルルでウエンデイに危害が及ばないのならと黙認していたが、それがまさか幼いからという理由だったとは。

精一杯、フェアリーテイルの一員として新たなスタートを切っていたウエンデイに対する裏切り。信頼していた人から信頼されていないという絶望感。マグノリアに戻ったのならばエルザと協力して締めることはシャルルの中では決定事項である。

「ほら、もうすぐつくわよ。気を引き締めて」

「う、うん!!?」

最後に胸の前で両拳を握り、鼻から息を吐き出して覚悟を決める。プレッシャーで潰れるよりはマシかもしれないが、怒りで視野が狭く

ならないか、そして自分たちを神の眷属だと信じるエクシードたちが
こちらの言葉に耳を傾けてくれるのか。

様々な不安に駆られながらも、2人はエクスタリアの地に脚を踏み
入れるのであった。

竜鎖砲

「ねえちゃん」

その声に進んでいた筆が止まる。ゆっくりと振り返ればそこに弟がいた。夜の帷もすっかりと落ち、未だ朝陽も顔を出さないこの時間はまだ眠いのだろう。寝ぼけ眼を擦りながらシーツを片手に、うつらうつらと船を漕ぐ弟はそれでもとととと、覚束ない足取りでこちらへと向かってきた。

今にでも眠りに落ちて倒れそうな弟を抱えてやれば、安心するように首に腕を回して肩に顔を預ける。

「どうしたの？」

「ねえちゃん、いなくて……しん、ばいで……」

幼い弟にはこの時間帯に起きていること自体が難しいだろうに、自身の心配をして来てくれた事を愛おしく思いながら、その背中をゆっくりと叩く。安心なさいと、私はここにいる、と囁いてやればそのまま眠ってしまった弟。

それでも回した腕を離さない様子からこれ以上の夜更かしは無理だろうと判断し、寝室へと向かう中、ふと昔の事を思い出した。

魔水晶を加工する職人で頼りになる父、内向的で信仰深い母、そして自身と弟。裕福とはいえないが、それなりに幸せだった過去。

魔水晶を取り扱う父であったが、しかし、魔力の減少と共に採取できる魔水晶の数も激減。職を失い酒に溺れて暴力を振るい始めたのはいつの頃だったか。母はそんな苦難から逃れる様に一層エクシード達を拝み奉り祈ったが、神の手助けなどなく、心身を病み首をくくってしまった。

今よりも幼い弟の手を引いて家から逃げ出し、残飯を漁る毎日。けれども、そんな日々が続くはずもなく、次第に栄養失調で弟は倒れて

しまった。大事な大事な、たった一人の弟。薄汚い路地裏で信じてもらいながった神に助けを求めるが無意味な事。

だが、まだ幼い自分にできることなどそれしかなく、この場を離れた際に弟の燈が消えてしまいそうで。不安と恐怖で体が震えて、涙が溢れて、それでも壊れたおもちゃのように助けを求める。

どうか、弟を。どうかどうか、この子だけでも。

「どうかしたのか？」

そう声をかけてくれたのは神と讃えるエクシードではなく、偶々視察に来ていた国王。後ろから慌てて追い続ける近衛たちを他所に、高価な服が汚れることも厭わずに救いの手を差し伸べてくれた。

事情を聞いた国王の行動は早く、すぐさま街には孤児院が建てられ、失業者に新たな職場に着く機会を与えてくださったのだ。

あの時国王の助けなければ、腕の中で眠る弟はいなかっただろう。孤児院の2人部屋に着くと弟を抱えたまま横になり、頭を撫でながら決意する。

きつとこのご恩はお返しするのだと。そして、2度とあんな思いはしないのだと。月明かりが窓から差し込む中、エドラスのカイトはルーカイト・ヴァーミリオンはそつと眠る弟の額に唇を落とすのであった。



剣戟。

剣戟。

剣戟に次ぐ剣戟。

エルザ対エルザという、ある意味で怪獣決戦とも言える戦いは互角の争いであった。身体能力を向上させる鎧を纏うエルザの魔法^{ザ・ナイト}騎士^{ザ・ナイト}であるが、エドラスのエルザも同じように形状によって身体能力を向上させる魔鎧テン・コマンドメンツを操り、現状は膠着状態。

互いの体力も技量も変わらない泥沼の戦いの中、突如として天井が

崩落した。

「っ!??!?」

互いに後退すると同時に、2人の間に落ちる瓦礫の山。砂煙に紛れて降りてきたカイトたちに驚きながらも視線は敵を捉えたままだ。

「カイト!??!?」

「おや、まだ決着がついていないとは……らしくありませんね、エルザ様」

「黙っている」

「いつつつ……。うわ、エルザが2人いる。なにこれ、地獄?」

「黙らせるぞ」

ふわりと舞う様にナイトウオーカーエドラスのエルザの隣に立つヴァーミリオンエドラスのカイトに対し、転がるようにしてエルザの隣に立つカイト。

カイトの頭に拳をひとつ落としてエルザは人知れず歯噛みする。ただでさえ対等な戦いを繰り広げていた中の乱入。それもカイトが苦戦を強いられている相手だ。早くグレイたちと合流せねば、と焦るエルザを宥める様に患部を摩りながらカイトはエルザの肩に手を置く。

「カッカツカ。そう焦らないでよ、エルザ。君がいるなら、まあ、なんとか切り抜けられるよ」

「カイト……」

「ふん、小癪な。私たちを倒せるとでも?」

「教育してさしあげましょう。エドラス王国に刃向かう愚かさを」

交戦的な笑みを添えて鎧を構えるナイトウオーカー、無表情のまま半身で構えるヴァーミリオン。それを見てまたエルザも構える。そして視線でカイトに問いかける。

任せていいのか、と。

それを見て任せるとでも言う様にカイトは薄く笑うと、足元の影を広げる。

「さあてきて、お立ち会い。アースランドの魔法、骨の髄にまで体感させてあげるよ」

ぱん、とカイトが手を叩くと同時に地を蹴るエドラスの2人。狙いは接近戦で厄介なエルザ。無表情に、冷徹に、鎧と手甲がその命を刈り取らんと煌めき、狙いが定められる。

剣を構えるエルザだが、先ほどと比べ隙が多い。何かの罠かと訝しむが、罠ごと粉碎する気概で繰り出されたそれぞれの攻撃は。

「なーんてね」

突如として崩れた天井に阻まれた。崩落に巻き込まれる危機感に意識が削がれ、通路の奥から伸びた影の手がエルザを回収。残る2人も後退して躲して追撃を試みるが、通路を埋める瓦礫の山がそれを邪魔をする。

ちらり、と上を見れば影でできた巨腕がゆっくりと擲擧うように消えていく姿。落ちる前に罠を残していたのかと舌打ちを溢すナイトウォーカー。

「チッ！どうするつもりだ？」

暗にお前のせいだぞ、と睨みつけければなんともないとばかりに澄ました顔で高くなつた空を仰ぎ見る。

「どうもこうも、地上に出て追いかける他ないかと」

「遠回りになるだろう。瓦礫を破壊した方が早い」

「二次被害を考えるとやめておいた方がよろしいかと」

「チッ！」

やはりコイツとはウマが合わない。そんな内心を表すかのような舌打ちをひとつ。それはヴァーミリオンにも言える様で、鉄面皮の奥から冷やややかな視線を送っていた。

王国の誇る矛と鉄壁の盾。そう呼ばれる2人ではあるが、相性は最悪。方や嗜虐性を持ち必要以上に相手をいたぶる事を好み、方や感情を微塵も出さずに淡々と物事を進める事を良しとする。顔を合わせるたびに衝突するのも領けよう。

けれど、仲が悪いからと言って協力ができないわけではない。ナイトウオーカーが走り出し勢いそのままヴァーミリオンに飛びかかる。それに合わせて拳を構えると、その上にナイトウオーカーの足が乗る。言葉もなく拳が振られるタイミングに合わせて跳躍、地上への帰還を果たす。下にいるヴァーミリオンに向けて鎧の形状を変化、伸縮性の高い形態へと移行させるとそのまま救出。

互いに嫌ってはいるが実力を認めているからこそできる芸当を見せた2人。

「行きましよう」

「しきるな。言われなくとも」

魔力を温存するため身体能力を上げる魔法は使えない。疲労が残る中、それでも国のため、世界のために走る2人を見つめる一羽のラス。その存在を示すようにひと鳴きすると翼をはためかせる。

一羽見つめて、二羽鳴き、三羽飛び立ち、四羽嘴煌めきと、さながら数歌のように増えるカラスの群は気づけば空を覆うほどの数になり、2人の進路を妨害する。

「くそっ！なんだ、こいつら!!?」

反響するように囀るカラスの群れは次第に2人を中心に円を描く

様に旋回。一点集中による強行突破しようにも、攻撃を躲すように割れた包囲網はすぐさま建て直されてしまう。

「…………アースランドの私は心底、性格が悪いようですね」

「貴様もそう変わらんぞ」

心外な、とびくりとも動かない表情のまま拳を。これ以上時間を取られるわけにはいかないと鎧を。それぞれの獲物を構えた2人は仕方なくカラスの殲滅に移るのであった。

「よしよし、このまま時間を稼がせてもらうよ」

地下通路を走る中、片目を手のひらで隠したカイトの呟き。攻撃力のない、視界を共有できる魔法であるカラス。ハリボテの耐久力はいえ、数を揃えればそこそこ時間を稼ぐことはできるだろう。

カイトたちの目標は仲間たちの魔水晶からの解放。別に戦闘にこだわる必要はないのだ。一刻も早い作戦の遂行を果たさねばならない。

だが、手元にある情報はあまりに少なく、また当然ながら反抗戦力も無視していいものではない。まずはグレイたちの合流を考えると考えるが、いかんせん入り組んだ地下通路。現在地もわからない状態だ。

「おい、カイト」

どうしたものか、どうするべきか、と頭を悩ませるカイトに、並走するエルザが声をかける。それに無理やり貼り付けた笑みを添えて「なんだい？」と応えれば、エルザは仕方がないとため息を溢した。

「あまり一人で抱え込むな」

「…………バレてる?」

「何年の付き合いだと思ってる」

そう言われてしまつては返す言葉もない。あー、うー、と言葉にできない気恥ずかしさを唸つていればくすりと笑うエルザ。現状いっぱいいっぱいになつていだけあり、いつもの胡散臭い笑みも余裕も浮かべる余地もないらしい。その人間臭い仕草に思わず笑つてしまいました、敵わないとカイトが両手を挙げる。

「それで、何があつた？」

「あー………1番はギルドが魔水晶になつたことだけど………さつき、ウエンデイちゃんに怒られてねえ」

「………何をした？」

「心当たりはないんだけどねえ。精々、危ないから下がつてなつて言つたくらいだよ」

「怒りを買つて当然だろう」

「え？」

本気でわかつていないのか、何とも間の抜けた顔でエルザを見る。呆れた様子でエルザがため息を吐けば、人の心はないのかこいつはと心の中で毒づく。いや、そういえば人外であつた。どこかズレているのは仕方がないのかもしれない。

それはそれとして、タイミングがあれば拳で端正してやろうと心に決めるエルザ。

「カイト、例えばだが先ほどの状況で、私がお前だけ逃げろと言つたらどうする？」

「ふざけてるの？」

「それが答えだ」

間髪いれずに答えたカイトはエルザの言葉に凶星を突かれたように一瞬口をつむぐが、でもと続ける。

「彼女はまだ子供だよ？守ってあげないと」

「幼なくとも、彼女も立派なフェアリーテイルの一員だ」

「けど……」

「認めてやれ。彼女は守られるほど、弱くない」

「うーん……」

納得がいつていないが返す言葉も浮かばず、押し黙る他ない。内心、初めて口論で勝利したことに喜ぶエルザだが、通路の奥から聞こえるいくつもの足音に警戒を露わにする。

金属音を激しく立てて現れたのは王国兵。5人1組で動いていた彼らはエルザたちを発見するなり、通路に響き渡るよう大声を出した。

「いたぞ、アースランドの魔導士だ!!?」

「こつちだ、早く来い!!?」

「王国の未来は、オレたちの手にかかってんだ!!?」

「……カイト」

「うん?……ああ、いいんじゃない?」

武器を手に襲いかかる王国兵たちを前に、未だ思考の海に没頭するカイトに声をかければ首を縦に振る。そうして浮かべるのは悪魔カイトさえドク引きする獰猛な笑み。

反対するつもりはないが、そも話なんて聞かなかつただろうにと肩をすくめ、形ばかりの合掌を。これから起こる惨劇に同情も憐憫も向けるつもりはないが、ここで出会ったのが運の尽きだろう。

「オイ、王はどこにいる?」

「は?なにをー?ぶえつ?」

「王はどこにいる?」

「なつ?お、おい!!?ぐはつ!!?」

「王はどこにいる?」

「ま、待て待て!!? おどっ!!?」

「容赦ねえ!!?」

「アースランドのエルザ隊長は悪魔か!!?!!?」

「え、援軍!!? 援軍はまだかあっ!!?」

質問という脅迫、そして答えなければ殴られる中、1人1人とまた倒れる。援軍の来る足音が聞こえるが、結果は変わらないだろう。暴力の鈍先が自身ではないことに安堵しつつ、とりあえずは思考を切り替え仲間の救出作戦を練るカイトであった。



王城の頂上近く。街を一望できる大部屋の中に異彩を放つ兵器がひとつ。

規格外の大きさを誇るコードETDの要となる大砲。名を竜鎖砲。滅竜魔導士から吸い上げた魔力を動力に、天に向けた砲門が定める照準はアースランドから吸い上げた巨大魔水晶の土台である浮遊島。発射された砲弾はアンカーとなり、隣にあるエクシードたちの国へと衝突。そうして魔水晶、滅竜魔導士、エクシードの3つの魔力が合わさればこの世界に無限の魔力が齎される。

後は起動キーとなる鍵を差し込むだけなのだが、ここで時間が発生。幕僚長補佐であるココが浮遊島で戦うリリーを巻き込みたくないと鍵を奪い逃げ出したのだ。

なんと馬鹿なことを、と国王であるファウストは王の証である錫杖を握りしめる。多少の犠牲によって得られる無限の魔力の素晴らしさを、あの子は理解していないのかと。

あの子の走り回る姿が好きだった。元気に、軽快に、ポピポピと走り回る姿は見ていて和み、それが未来の国民達の姿を重ねて。だからこそ、不敬だと周りから言われようと許され、国王はココを側に置いていたのだ。

我が子のように愛した者からの裏切りと作戦が上手く運ばないジ

レンマに苛まれる中、1人の兵士が国王に近づき耳打ちをする。話を聞いた国王はすぐ通せと命じれば程なくして扉が開く。

そこにいたのはエルザ・ナイトウオーカー。その両手には縛られたナツとグレイが引き摺られ、後ろから続く兵士が警戒するように槍を向けていた。

「エルザ!!? 鍵を持ってきたというのは誠か!?!?」

「破壊されたようですが、ご安心を。こいつが鍵を作れます」

投げ出されたグレイに心当たりがないのか、国王が誰なのかを尋ねればアースランドの魔導士だと告げられる。縄を解かれたグレイだが、エルザの手には疲労からか脱力したナツ。その首に剣が突きつけられ反撃の隙はない。

けれど、諦めはしない。竜鎖砲が起動直後に照準を魔水晶へと変更。そうすれば仲間を救えるのだ。

手早く造形した氷の鍵を差し込めば、重い駆動音を響かせて起動する竜鎖砲。国王を含めその場の全員の意識がそちらに向かっていく隙に辺りを見渡すが、それらしい装置は見当たらない。焦るばかりで時間だけが過ぎる中、剣を突きつけていたエルザが合図を出す。

「ナツ!!? カイト!!?」

「おう!!?」

「!!?!!?」

「な、何だ!?!?」

突然のエルザの言葉に困惑する中、脱力していたはずのナツが力強く頷けば、両手に纏った炎が兵士たちを薙ぎ倒す。

「火竜の翼撃!!?」

「貴様ツ!!?」

「おっと、動かないでもらえるかな?」

ナツの攻撃を逃れた兵士が一本踏み出せば、エルザの後ろにいた兵士が指を鳴らす。それと同時に足元から現れた黒い蛇が周囲の兵士たちに巻きつき、身動きを封じる。

突然のことで動じる国王をエルザは後ろ手で拘束すると剣を首に突きつけた。

「発射中止だーっ!!?」

「エルザ……貴様!!?何のマネだ!!?」

まさかのエルザの行動に兵士たちは困惑し、国王は激怒する。しかしエルザが光に包まれたかと思えばいつの間にか鎧を身に纏う。それは間違いなくアースランドの魔法。

「私はエルザ・スカーレット。アースランドのエルザだ」

「悪い、機転を利かせてくれて助かった」

「これぞ作戦D!!?騙し討ちのDだ!!?」

「カッカッカ。人間きの悪いねえ」

作戦が上手くいき形勢は逆転。交戦的に笑みを深める中、兵士の中から人質を取るとは卑怯だと声上がる。だが、全員がそんな野次などどこ吹く風。仲間を救うためならば手段を選ばず余地などない。

フェアリーテイルの要求はただ一つ。照準を魔水晶へと移し、仲間を解放すること。しかし、永遠の魔力を不意にすることなどできるはずもない。

「ツ!!?近衛よ!!?ワシに構わずやれエ!!?」

「ツ……!!?御意!!?」

国王の願いは無限の魔力。しかし、それは決して私利私欲の為ではなく、全ては国民のためである。この身の命で民が救われるのなら

ば本望。それを察した近衛兵は一瞬の躊躇いの後、せめて苦痛なくと王を拘束すらエルザごと攻撃を仕掛ける。

しかし、その攻撃はエルザどころか国王にも届かず、一步目を踏み出した刹那の内に足元から伸びた影が近衛兵たちを壁に叩きつけた。言葉もなく、そちらに意識さえ向けていないカイトの罨だ。そも、芝居をしている最中にこの場は既に掌握済み。それこそエルザのような罨を力技でねじ伏せるような実力者でもない限りこの場からの脱出さえ不可能だ。

「くそお……!!?」

「やれ!!?陛下が危ない!!?」

「照準変更!!?巨大魔水晶に変更だつ!!?」

「バカモノがつ!!?永遠の魔力を不意にする気か……!!?」

国王の叫び虚しく砲門の軌道は修正される。後は発射のみ、と安堵の息を吐こうとした時だった。

「スカーレットオオオオ!!?」

「な!!?」

「ナイトウォーカー!!?」

「チツ!!?」

屋根を伝い上空から現れたナイトウォーカー。さすがに空中への罨は設置しておらず、すぐさま影で拘束しようとするカイトの懐に人影ひとつ。

「させるわけにはいかせません」

「ツ!!?ああ、もうっ!!?」

寸前のところで影を重ねて防ぐが、その隙にナイトウォーカーとエルザが衝突。拘束していた国王が解き放たれた。そこから先の兵士

たちの動きは早く、すぐさま照準が元に戻される。

忌々しげに目の前にいるヴァーミリオンの鉄面皮を睨み、ナツとグレイも発射を阻止しようとするが少なくない兵士たちに囲まれてはどうしようもない。

国王の勝利を確信した笑いと共に発射された竜鎖砲。砲門に蓄えられた魔力は楔となり、過不足なく浮遊島に接続。鎖のように繋がる魔力を操作してエクスタリアへと移動し始めた。

こうなってしまうては最早大元である竜鎖砲を破壊しても、慣性の法則に従い島は動き続け国王の目論見通りマグノリアの街が無限の魔力へと変換されてしまう。どうすれば、と額に汗を流した時だった。

「みんなあ!!?乗って!!?」

「ルーシィ!!?」

「なぜあの小娘がレギオンを!!?!!?」

空の向こうから現れたルーシィが乗るのは巨大なツノと翼を携えた空飛ぶ生き物。レギオンと呼ばれるそれはエドラスに存在する魔獣であり、王国が飼育している筈のもの。

主人が認めない限り操ることが不可能な筈のレギオンをルーシィが用意できるはずもない。ひよっこりとルーシィの影から見えるのは幕僚長補佐であるはずのココ。レギオンを操りアースランドの者に加担するのは王国に対する裏切りだというのに、その表情に後ろめたさはない。

「こいつで止められんのか!!?」

「わかんない!!?でもいかなきゃ!!?」

「行かせるとお思いで?」

「うおっ!!?」

背にフェアリーテイルの面々が乗り込みレギオンが鳴いて飛び立

乗って追いかけます」

「第二魔戦部隊もだ!!? 急げ!!?」

「ワシも行こう。ドラム・アニマを用意せい」

王国の、世界を脅かす者と判断した国王。禁忌とされた兵器の使用さえ厭わず、必ずやつらを始末するのだと心に決める。

決着の時は刻一刻と迫り来るのであった。

大義

発射された竜鎖砲。楔を打ち込まれた浮遊島は動き出し、進む先はエクスタリア。ウエンデイとシャルルの警告も無視して、そこにいるエクシードたちは逃げ出せばいいものを、この期に及んでまで女王であるシャゴットが何とかしてくれるのだと樂觀視していた。

そも、何百年と長い間神や天使として奉られていたのだから危機感を抱くことも難しいだろう。墮天したと看做されたシャルルとその仲間であるウエンデイに物を投げつけられ、嘲笑されるのは辛い。

2人身を寄せ合うように抱きしめ合いながら、やはり自分には無理なのかとウエンデイは自己嫌悪に陥る。無論、ここまで来たのは紛れもなくエクシードたちを救うためであり、ウエンデイの意思の下動いた。だがカイトに反発して、少しでも見返してやろうという気持ち皆無かと言われれば首を横に振る。

けれども、今ここに至っては自分ではしゃばらずに、素直に誰かに任せた方が上手くいったのではないのかと思ってしまう。

彼女の中にあつた自信という名の柱にヒビが入る、そんな時だった。王国の端、島の縁側部に浮遊島が衝突したのは。

幸いな事にまだ接触しただけに止まりすぎさまに魔水晶との融合、ということはないがそれも時間の問題。しかし、エクシードたちは焦りながらもまだ大丈夫だと声をあげる。

なぜなら自分たちには女王がいる。神と崇められ、自分たちには到底不可能な力を持つ女王が。だから安心だ、と声をあげるのは果たして周囲を宥める為か、それともそう自分自身に言い聞かせているのか。

島の崩壊まであと少し。



「うおおおおおっ!!?。」

ココの操るレギオンが何とかエクスタリアと浮遊島の間割り込み、その巨大をぶつける。続くようにその背中にいた面々も押し返そうとするが、後退するどころか減速さえしない浮遊島。

パンサー・リリーと戦っていたガジルも参戦するが暖簾に腕押し。そうして遂にエクスタリアとの接触を許してしまった。

「ッ!!? カイト!!?あのデツケエ腕出せねエのかヨ!!?」

「そんな余裕、ないよ!!?それこそガジル!!?なんで魔水晶壊れてないの!?!?」

「黒ネコが邪魔すんだヨ!!?」

カイトの影魔法は確かに便利ではあるが、足元の影を起点にしなればならず、そも魔法を展開する余裕もない。

魔水晶破壊の任を背負っていたガジルもパンサー・リリーの妨害により遂行できていない。例えば妨害がなかったとしても街ひとつ分の魔水晶の破壊は短時間では困難。それこそナツやウエンデイと力を合わせても不可能だろう。

解決策が力押しのみということに辟易するが、弱音は吐いてられない。腕と脚に施された封印を部分的に解放。吸血鬼の膂力を持つて更に力を込めるが変わった様子はない。

「無駄な事を!!?人間の力でどうにかできるものではないというのに!!?」

パンサー・リリーの言う通りそも、何千、何万トンにも及ぶ質量を押し返すことなど不可能なのだ。それでもフェアリーテイルは諦めない。声を上げ、負けないと歯を食いしばり、踏ん張りを効かせる。そのうち、エクスタリアから飛んできたシャルルも加わるが、やはり変わらない。けれど――

「うあー！？」

エクシードの1人、ナデイから始まり続くように大量のエクシードたちが加わった。女王であるシャゴットの宣言、自分は人間に抗う術を持たないただのエクシードであるということの判明。これにより救いはないのだと諦めるエクシードたちの前で、せめて自分の命をケジメとして他のエクシードたちの助命を試みた。

しかし、シャルルはそれを拒否。諦めてなるものかと吠える姿がひとり、またひとりと動かしたのだ。

「あっ……」

そんな中、他のエクシードに抱えられたウエンデイの視界にカイトの姿が目映る。大見えを切った手前、結果的にエクシードたちの力を借りるということになったが、それは自身の力ではなく、エクシードたち自身が決意したことだ。そんな後ろめたさがあるのかそんな場合ではないというのに表情に影が差す。

それに気がついたカイトも何と言えはいいかわからずに顔を逸らし、視界に入ったエルザに睨まれて覚悟を決めた。

「ウエンデイちゃん!!?」

「は、はいっ!!?」

「色々言いたいことあるけど……よく、やったね!!?」

「っ!!?はい!!?」

「オイ、それ今じゃなきやダメか!!?」

「カツカツカ!!?言えるうちに言わないとねえ、グレイ!!?」

「縁起でもねエ事言ってンじゃねエ!!?」

エクスタリアがひとつとなり、浮遊島を押し返す。その姿にかつて傷ついた人間をエクスタリアに入れたことで追放となったパンサー・リリーも心を動かされ、方翼で必死に飛ぶシャゴットを救う。

ひとり、ひとりと力が加わり、そうして遂に押し返される浮遊島。そして次の瞬間眩い光と旋風が魔水晶を包み込んだ。

あつと驚いたのは束の間、弾き飛ばされた面々をエクシードたちが抱える中目にしたのは魔水晶が消え去った浮遊島。唾然とする一同の前に巨大な鳥に乗るミストガンが現れた。

「全てを元に戻すだけの巨大なアニマの残痕を探し、遅くなった事を詫びよう。そして、皆の力がなければ間に合わなかった。感謝する」

「おお!!?」

「元に戻したって……………」

「そうだ。魔水晶はもう一度アニマを通り、アースランドで元の姿に戻る。全て終わったのだ」

ミストガンの言葉に一瞬場が鎮まり、ある者は涙を流し、ある者は隣と確認し合い、ある者は笑みを浮かべ、そして爆音のような喜びの声 that 空を包む。

「リリー、君に助けられた命だ。君の故郷を守れてよかった」

「ええ……………ありがとうございます。王子」

覆面を外したミストガン。その正体はかつてパンサー・リリーがエクスタリアを追放されるきっかけとなった、エドラス王国ファウストの息子。互いに生還を喜び、涙を流していたその時だった。下方から飛んできた魔力弾がパンサー・リリーの腹を貫いたのは。

「リリー!!?!!?!!?」

「カイト!!?」

「あいよ!!?回収は任せた!!?」

落下するパンサー・リリーに向けて放たれる回復魔法の白衣。かんに巻きつき傷を癒すが、流石に引き上げるような事はできない。得

意の影魔法も空中では使えず、ひとりのエクシードに回収を任せると下から迫る集団に視線を向ける。

「スカーレットオオオオ!!?」

「ナイトウォーカー……」

怨敵とばかりに睨みをつけるナイトウォーカーとヴァーミリオンを先頭に、レギオンを駆りこちらへと飛ぶ王国軍。しかし、その進行は前に出たミストガンの姿を見て止まった。

「エドラス王国王子であるこの私に刃を向けるつもりか、エルザ・ナイトウォーカー、カイト・ヴァーミリオン」

「くっ!!?」

「……」

齒噛みするナイトウォーカーとは対照的に、どこか呆れたようにミストガンを睨むヴァーミリオン。その拳が握りしめられる中、国王の声が周囲に響く。

『ワシは貴様を息子などと思っておらん。7年も行方をくらませておいてよくおめおめと戻ってこられたものだ。貴様が地上でアニマを塞いで回っていたのは知っておるぞ、この売国奴め』

「この声どこから……」

「あなたのアニマ計画は失敗したんだ。もう戦う意味などないだろう?」

『意味?戦う意味だど?これは戦いではない。王に仇なす者への報復。一方的な殲滅』

「な……何アレ!!?!!?」

『ワシの前に立ちはだかるつもりなら、たとえ貴様であろうと消してくれる。跡形もなくなア』

「父上……!!?」

『父ではない。ワシはエドラスの王である。そうだ………貴様をここで始末すれば地上でアニマを塞げる者はいなくなる。また巨大な魔水晶を作り上げエクシードを融合させることなど何度でもできるではないか』

誰が先に見つけたのか。絶句し、視線を一点に見つめる先には王国から程近い森。木々を薙ぎ倒し、王の声を拡散するソレは姿を現した。

『フハハハハッ!!? 王の力に不可能はない!!? 王の力は絶対なのだ!! ?!!?』

現れたのは銀に輝くトカゲの様なモノ。ドロマ・アニメと言われるソレは竜騎士を意味し、外部からの魔法を無効化させる搭乗型の甲冑である。2足で立つその姿は確かにどこことなくドラゴンにも見えなくないが、やはり不恰好だと内心嘲笑うカイト。

しかし、その力は本物であり、何より魔水晶をアースランドへと還してもアニメがある限り2度目3度目の事態が起こることは確かである。アニメを破壊しても設計図がある限り何度も組み直せる上に、魔力が有限だと言え侮れる相手ではないのだ。

さて、どうしたものかと周りのエクシードたちが魔水晶へと変えられる中、エクシードたちの保護を選んだ一同はココの駆るレギオンに乗り、王国軍を追う。

「うーん………ココ、って言ったっけ? ドロマ・アニメはどこまで魔法を無効化できるの?」

「もう全部!!? 全部だよ!!? 王国の粋を集めた最強の魔法なんだよ
う!!?」

なるほど、と納得しながら自身との相性は最悪だと内心ため息を溢す。勝機があるのはエルザくらいだろう。混沌ノ爪を飛ばしながら

王国軍の妨害に励むが、空中の機動力は向こうのほうが上であり、直線では飛ばない魔法は容易く躲かれてしまう。

『人間は1人として逃がさん!!?全員この場で死んでもらう!!?』

ドロマ・アニムの口から放たれた閃光。数ある武装の中でも破壊力に富んだ攻撃は、しかし、ミストガンの魔法が受け止めた。

「ミストガン!!?」

「エルザ!!?今のうちに行け!!?三重魔法陣、鏡水!!?」

ドロマ・アニムに跳ね返される閃光。だが、例え自身の攻撃であろうと魔法である以上無効化され、お返しとばかりに放たれた攻撃にミストガンが森の中へと消える。

「ミストガン!!?」

『次は貴様等だア!!?』

「くそ!!?アレを躲しながら戦うのは無理だ!!?」

閃光が収束し、今まさに放たれようとしたその瞬間、突如としてドロマ・アニムの頭を上空からの一撃が揺らした。

『何!?!?』

続く様に腹部からの衝撃に操縦席ごと揺らされ、追撃とばかりに風の暴風がドロマ・アニムを襲う。

「やるじゃねーか、ウエンデイ」

「いいえ。2人の攻撃の方がダメージとしては有効です」

「ヤロウ、よくもオレのネコを」

ドロマ・アニムの前に立つのはナツ、ウエンデイ、ガジルの3人。ナ

ツとガジルはともかく、戦い慣れていないウエンデイがいる事に驚きのあまり目を見開いたカイトは危ないから下がれと思わず口に出さうとする。

「カイトさん、見ててください」

しかし、予想していたのだろう。こちらを振り向かず、しっかりと敵を見据えたウエンデイの声に、口を開けたまま固まるカイト。

「私、守られてばかりじゃないんです。私だって、戦えるんです。だから、見ててください。私だって、やれるってところを!!?」

確かな決意と、確固たる意思を持ってそう言い放ったウエンデイ。ちらりと見えたその眼差しをしばし見つめ、そして大声で笑い出す。突然の事で周りから怪訝な目で見つめられるが構わずに、カイトは思いつきり笑う。

何が守るだ。何が救うだ。そんなもの、ただの上から目線の独りよがりではないか。彼女を見る。もはや守護を必要としない、芯のある立派な人間ではないか。

そんなことがわからずに、ただただ身勝手に、馬鹿の一つ覚えのようを守るのだと口にする自身が可笑しくて、恥知らずで、あまりにもあんまりな滑稽さに笑いが止まらない。

「お、オイ。頭でも打ったか?」

「カッカッカ!!? いや、なに。あまりにもな自身の身勝手さに笑えてね」

「え、今更じゃない?」

「今更だろう」

「今更だな」

「カッカッカ!!? ああ、そうだね。今更だ」

目尻の涙を指で拭って、改めて3人を見つめる。なるほど、相手が竜を名乗るのならば、滅竜魔導士である彼等はうってつけ。多少なりとも攻撃が通るのであれば勝機も見える。なんと皮肉なことだろうかと、またもや笑い出すカイトにドン引きしながら、エルザはエクシードを追う王国軍を見据える。

「ここは任せたぞ!!?」

「「オウ!!? (はい!!?)」」

「む、無理だよう!!? 相手は王国最強の魔道兵器なんだよう!!?」

「進め!!?」

「は、はいいい!!?」

エルザの圧に負けてレギオンを繰るココ。きつと彼等ならば大丈夫だと信頼し、一同はエクシードたちの救出に乗り出すのであった。



「見て! 王国軍が見えてきた!!?」

「よし! このまんま突っ込め!!?」

「頑張つて、レギびよん!!?」

「んー……………」

「どうした、カイト?」

王国軍を追いかけて少しして。

ようやくその姿が点ではあるが見えてきたころ。何が不満なのか、唸りをあげて頭を捻るカイト。そんな様子に気がついたエルザが声をかければ前を見据えながら言葉を紡ぐ。

「いやあ。なんだか上手く追いつけたなあって」

「それがどうした?」

「順調すぎるんだよ」

相手が少数ならまだしも、軍という大世帯。半数をこちらの妨害に回すなりしてくると予想していたのだがそれもなし。それだけエクスードたちを捕らえる事に優先を置いている、とは考え難い。

ならば、と考えたところで地上から飛び立つレギオンの群れ。それらは一同を取り囲む様に滞空すると、背中の兵士たちから武器を向けられる。ああ、やはり罫を仕込んでいたかのため息を吐いても後の祭り。

待っていたぞ、と堂々と現れたナイトウォーカーを尻目に、さて自身ならばこの後どうするかを考える。

「……………ハッピー、シャルル。みんなを抱えて飛ぶ準備して」

「？」

「下から来るよ！」

カイトがそう叫んだ瞬間、地上から放たれた攻撃が乗っていたレギオンを襲い、少なくとも傷を負わせた。飛行不可能となったレギオンから放り出された面々はしばしの滞空の後、シャルルとハッピーに抱えられてゆつくりと落下。

その隙を狙おうとする王国軍を自前の羽で滑空しながら妨害するカイトと、換装した鉤縄でレギオンを捕らえ移動するエルザ。

エルザの向かう先にはナイトウォーカー。激突しながら興奮したレギオンが導く先にはひとつの浮遊島。決着はそちらでつける様だ。ならば自身の相手はこちらだろうと、地上から飛び立つレギオンを睨む。

「カツカツ。しつこいねえ、お前も」

ヤケクソ気味に放たれた混沌ノ爪。飛来するソレを甲高い音を立てて破壊するのはヴァーミリオン。吸血鬼の姿を表すカイトに驚いた様子もなく、表情筋をぴくりとも動かさず睨み返し、半身に構える。

「それはこちらのセリフです。大人しく魔力となればいいものを」

「無限の魔力のために、かい？」

「我らが幸福のために、です」

ヴァーミリオンの後ろに控えていた兵士が攻撃魔法を放つ。しかし、攻撃は届かず、振るったカイトの爪が全てを破壊する。

「許せ、とは申しません。我らが大義の為に、その命いただきます」

右手を挙げたヴァーミリオンを合図に、地上から放たれる攻撃魔法の数々。流石に張り巡らされた弾幕を躲すことはできずいくつもの直撃が直撃するが、カイトは動じない。むしろ、爆炎の向こうから高らかに笑う声が兵士達を怯えさせていた。

「カッカッカ！大義、大義ときたか！」

片手で顔を覆い呵呵大笑するカイトにすっかりと怯え、追撃される様子はない。笑い声が収まると覆っていた手を外し、表情の抜け切った顔でヴァーミリオンを睨む。

「何が大義だ、ふざけるなよ。お前達の欲のために死ぬるわけないだろう」

大きく伸ばされた羽が羽ばたけば湧き起こる暴風。さしものレギオンも対抗できず、その背中に乗っていた兵士たちが振り回せれる中、カイトは高らかに宣言する。

「改めて自己紹介をしよう。俺はフェアリーテイルのカイト。道化であり、吸血鬼であり、そして——」

「お前達の絶望だ」

追撃として放たれた混沌ノ息吹がレギオンを襲い、その身を大地へと叩き落とすのであった。

姉弟

墜落したレギオンを盾にして、地面との衝突を免れたヴァーミリオン。同乗していた近衛数人も同じ様にして難を逃れていたが、カイトの魔法を少なからず受けたせいかな戦線復帰は難しそうだ。

「現状報告を」

「つ……………。全員命に別状はありませんが戦闘は不可能。現在、救難信号を送って部隊を集めています」

「わかりました。貴方達は下がっていなさい」

淡々とした命令を下し、部下に一瞥もかけない姿は冷徹にも見える。しかし、部下もわかっていた。目の前の敵はそんな隙を見せていい相手ではないと。

ゆつくりと焦らす様に、もしくは威圧する様に降り立つカイト。胡散臭い笑みは鳴りを潜め、感情が抜け切った表情ははつきり言って気味が悪い。両手をポケットに入れ隙だらけの様ではあるが、油断ならない雰囲気は部下たちも感じていた。

「しづといねえ、お前も。今ので死んでいれば楽になれただろうに」

「しづとく生き抜いてみせますとも。この国の安寧のために」

「安寧？魔法を手に入れれば幸せだとも？」

そんな事あるわけないだろうとでも言わんばかりに肩をすくめ、足元の影が蠢く。ざわざわと湧き立つ影はまるでカイトの内心の苛立ちを表しているようで。

「魔力があろうとなかろうと、この国は変わらないだろうさ。いや、なまじ力を手に入れた分、そこかしこで争いが起こるだろうね」

「それでも、我々には魔力が必要なのです」

「知らないよ。知ったことかよ。お前達のために犠牲になってたまるかって話だよ」

優しい言葉も、慰めも、激励も投げつけず、淡々とそう告げるカイト。生きるとは、他の犠牲の上に成り立つものだ。犠牲を無視して己は己の力のみで生きている、と宣う者はそういないだろう。誰だって食い物にされたくないし、犠牲にだってなりたくない。

それがわかっているからこそ、カイトはフェアリーテイルを狙った事には怒りを覚えるが、エドラスが行う政策に文句をつけるつもりはない。

この戦いは間違いなく生存競争。食うか食われるかの戦い。憐憫も、思いやりも、敗者に対する侮辱だと捉えているからだ。

グリム・バタフライ
「悪魔蝶」

足元から溢れ出すのは殺伐とした雰囲気とは場違いの、黒く美しい蝶の群れ。部下たちがあまりの光景に見惚れてしまうが、次の瞬間辺り一面を爆発が包んだ。樹々や大地が爆煙に紛れて舞う中、それを切り裂いたのはヴァーミリオンの拳。

空に向かって放たれた正拳突きは衝撃波を生み、暗くなった視界を晴らす。背後にいる部下たちを守ったようで防げなかったのか所々煤けているが、動きには支障がないらしい。踏み込んだ脚が大地を割り、一足飛びでカイトの懐へと向かう。

「読めてるよ」

しかしその途中、足元から伸びた影の手がヴァーミリオンの行手を阻む。足首が掴まれる寸前のところで後退し事なきを得るが、以前距離は開いたままだ。

「お前の魔法、一つは身体強化。もう一つはその手甲から衝撃波を放

つものだろうか？」

「……よくお分かりになりましたね。我が魔法は王より特別に下賜されたもの。ヒントは与えていない筈ですが」

「あれだけ食らえば流石に、ね」

エルザと同等かそれ以上の身体能力を素で出せるなどいるはずもない。それに加えて展開した防御魔法を破壊するとなると、力任せではまず不可能。そこから導き出した答えだが、ですが、とヴァーミリオンは言葉を紡ぐ。

「少し訂正がございます。我が魔法はただ衝撃波を放つものではありません」

ヴァーミリオンが拳を空に向けて振るった瞬間、2人の間を遮るように伸びた無数の影の手が弾かれる。まるで大砲の弾でも撃ち込まれたかのような衝撃の後、大地を殴ったヴァーミリオンを起点に放射状に伸びる地割れ。飛んで躲せばそこには両手を組んで高々と振り上げるヴァーミリオンの姿。

呆気にとられる暇なく振り下ろされた両拳は過不足なくカイトを捉え、その身体を比喻なく地面へと沈めた。

「このように衝撃波を操る事が可能です」

続けてカイトの消えた穴の周囲に向けて複数の拳を放てば、波のように広がった衝撃波が大地を砂へと変える。砂の重みで潰されてしまえと思う反面、これで仕留められたとは思っていない。

奥底から這い上がる振動を感じて後退すれば、そこから伸びる巨大な影の腕。握った拳が開かれて現れたカイトは耳に入った砂を落としながらヴァーミリオンに視線を向ける。

そうして、わかりやすく指でヴァーミリオンを指し示せば周囲に展開された魔法陣から伸びる影の刃。四方八方から迫り来る攻撃をそ

の場から動く事なく、身体強化の魔法をフルに活用して破壊する。拳を放つたびに周囲に円状に広がる衝撃波。それが影の操作を阻害して事なきを得ていた。

「くそっ!!? 援軍はまだか!?!」

「それが、突如現れたフェアリーテイルに妨害を受けているらしく!!」

「なにイ!?!?」

ヴァーミリオン1人に重荷を背負わせる事に不甲斐なきを覚え、早く増援をと叫ぶが、増援部隊は現在エドラスのフェアリーテイルの妨害を受けていた。元々は墜落したグレイ、ルーシィ、ココ、ハッピー、シャルルの追撃だったのだが、アースランドの人間が頑張っている中、自分たちも負けていられないと今まで逃げの一手だったギルドが参戦。数が増えた事により王国軍は苦戦を強いられているのだ。

あまりの事態に歯噛みする部隊の副隊長。手持ちの魔法道具は落下の衝撃で使えず、そうでなくとも身体を動かすだけで精一杯なのだ。このまま参戦しようものならば足手纏いでしかない。

「ちくしょう!!? なんでだよ!!? お前らの世界じゃ魔力は無限にあるんだろ!?! オレたちにもわけてくれりゃいいじゃねエか!!?」

「副隊長!!? 危ない!!?」

四つん這いになりながらも悔しきから地面を殴る副隊長。それに対する返答は近くの茂みから飛び出す影の槍。咄嗟の事で動けず啞然とする副隊長目掛けて放たれたそれは、他でもないヴァーミリオンが受け止めた。

「た、隊長……」

「っ……!!?」

しかし、全くの無傷というわけではない。伸ばした右腕を盾にしたせいで手甲ごと槍に貫かれるのは堪えたのか、流石に表情を少し歪めるヴァーミリオン。残る左腕で魔法を破壊するが、腕に刺さった槍が消えると同時に自慢の手甲も砕けてしまう。

「隊長………っ!!??え、衛生兵!!??止血を!!??回復魔法を、早く!!??」

「無理です!!??道具が壊れていて………っ!!??」

「おや、それは残念だねえ」

「っ!!??!!??」

全くそんなこと思っていないだろうに、カイトが台座にしていた巨腕から跳び退くとヴァーミリオン目掛けて拳が振るわれる。それにいち早く気づいたヴァーミリオンが左腕で応戦するが、サイズ差は元より酷使しすぎたのだろう。拳がぶつかり合う瞬間、魔法を発動する暇なく手甲は破壊されそのまま森の奥へと弾き飛ばされてしまった。

それを追いかけてようと、急ぐこともなく悠々と歩を進めるカイトを、部下たちが止める。手に持つ武器を、壊れた今鈍器にしか使えない魔法道具をカイト目掛けて振り下ろす。

だが、それらに一瞥向けることなく、足元の影がそれらを受け止めて弾き返した。仰向けに倒れた部下たちを影の魔法で捕らえ、意識を向けることさえできない事に悔しさを隠しきれない副隊長に、背を向けたままのカイトが思い出したように告げる。

「ああ、さっきの返答だけでも。お前達がこの世界を救いたいと願うに、俺達もギルドを犠牲にしたくないってだけさ。誰だって、犠牲にはなりたくはないだろう?」



「げほっ………げほっ!」

森の奥へと殴り飛ばされたヴァーミリオン。一瞬飛んだ意識を繋げば腹の奥から込み上げる不快感にむせかえる。仰向けに横たわるせいで口元は血混じりの唾液に塗れ、それを反射的に拭おうと腕を動かそうとすれば激痛が走る。

さしもの鉄面皮も歪み、動かせない両腕の代わりに腹筋の力で上体を起こせば視界に映るのは見るも無惨な両腕。右腕には穴が開き、左腕は指の先端から肘にかけてひしゃげている。身動きひとつで走る激痛に顔を顰めながらも、両脚に力をこめて立ち上がるヴァーミリオン。

戦闘など出来る身体ではないというのに、その瞳に諦めの色はない。無限の魔力のために、ひいては国王への恩義のために、何より弟のために、ここで膝をつくわけにはいかないのだ。

(力が………スーツも、壊れましたか………)

いつもなら身体能力の向上の魔法を持つスーツのお陰で幾分かマシな筈の身体も、魔力が無ければ意味がない。実際はガラ空きになった王城に忍び込んだミストガンによるアニマの逆回転によりエドラスから魔力が消えている影響なのだが、そんな事を知る由もなく。

己の力のみで立ち上がったヴァーミリオン。荒い息のまま見つめる先にいたのは悠々と歩くカイトの姿。ヴァーミリオンの嫌いな人外、人を救うことさえしない化け物。

「まだ立てるとはねえ。横になっていた方がラクだろうに」

何の感情も込められていない、路肩の石でも見るような視線に、忌々しいとばかりに口内の唾を吐き出して応えるヴァーミリオン。

半身の構えを取るが痛々しいその姿に警戒する価値もなしとばかりに肩をすくめて徒歩で距離を縮める。振るわれたハイキックを躲せば、そのままバランスを崩して倒れてしまった。それでも立ちあが

ろうとするヴァーミリオンの背中をカイトは踏みつけ、あまりの呆気なさにため息を溢す。

「ぐうつ!!?」

「もう諦めなよ。お前に逆転の目はないし、反撃の糸口もない」

背中を踏み躪るカイトはまるで弱いもの虐めのようなだと、再度ため息を溢す。確かにギルドを奪われた事に腹を立ててはいるが、別に弱者を甚振りたいわけではない。側から見れば悪役ではないかと抗議したいところだ。

少しは抵抗して欲しいものだと内心ぼやいていれば、微かながらに足元から反発が加わる。視線を下にやれば両足と額を起点に立ちあがろうとするヴァーミリオン。しかしながら力が弱すぎて脚を跳ね除けるどころか微動だにしない。

「あき………らめて、たまるもの………ですか………!」

本能的に敵わない事を察しながらも、ヴァーミリオンの心は折れない。脳裏に浮かぶのはかつて死にかけてた弟の姿。魔力がなければ、力がなければ、またアレを味わうのかと思うと震えが止まらず、そして負けてはならないのだと己の心に喝を入れる。

「あの子が……ヒューズが、安心して暮らせる………世界のために………! 私はっ! 負けられないっ!!?」

声を荒げ、額から血を流しながらヴァーミリオンは叫ぶ。腕が動かなくなるが、身体が悲鳴をあげようが、そんなものは知ったことではない。己の大事な人のために、2度とあんな悲劇を起こさないと、立ち上がるしかないのだ。

しかし、彼我の力量差は歴然。微動だにしないカイトは面倒だと言わんばかりに徐に片腕を上げて、魔力を込める。

「そう。まあ、(´`´)苦労様」

持ち上げられた腕に魔力が迸り、唸りをあげる。重体のヴァーミリオンを屠るには十分過ぎる魔力が込められた一撃。何の感慨も見せず、振り下ろそうとした刹那、横合いから飛び出したひとつの影がぶつかり、衝撃に思わずバランスを崩したカイト。

そのまま襲撃者から馬乗りのまま殴られるカイトを他所に、疲労困憊のまま顔だけそちらに向けたヴァーミリオンが目を見開く。

「ヒューズ……………」

「このっ！ねえちゃんを、虐めんな!!?」

守るべき、守っているはずだった、弟の姿。ヒューズの魔法は王城内にある遊園地を陣地として、その場にあるアトラクションはもちろん、水の一滴砂粒ひとつまでを操る魔法。故に彼の部隊は主に防衛を任せられている。

だというのに、魔法を使えないので慣れない肉弾戦を行い、ナツにやられた傷も治っていないというのに、この場へと馳せ参じたのだ。あまりの衝撃に言葉を無くすヴァーミリオン。

「鬱陶しいよ」

「うぐっ!!?」

「ヒューズツ!!?」

馬乗りで殴られながらも、そも喧嘩慣れしていない者の拳など痛痒にも感じない。わずわらしいと地面から湧いた影がヒューズを押し飛ばし、徐にカイトは立ち上がる。そうして今の一撃で既にボロボロになりながらもヴァーミリオンを遮るように腕を広げるヒューズの姿を見て怪訝そうに顔を顰めた。

「何のつもりだい？敵わないと、わかっているはずだろう？」

「ヒューズ、退がりなさい!!？」

「嫌だ!!？ねえちゃんを置いて逃げられるわけないだろ!!？」

もはや動く力もなく、ただただ最愛の弟が自らを庇う姿を見せつけられ、ヴァーミリオンは悔しさに歯を噛み締める。逃げろと叫ぶが、頑なに動こうとしないヒューズは腹の底から響く鈍痛に顔を歪ませながらも、その視線はカイトを捉えていた。

「今までずっと、ねえちゃんに守られてきたけど！オレだって、ねーちゃんを守るんだ!!？ねえちゃんがいなきや、無限の魔力手に入れたって楽しくないんだよ!!？」

ヴァーミリオンがヒューズを大事にしてきたように、ヒューズもヴァーミリオンが大事なのだ。無限の魔力さえ手に入れば、姉はきつと昔のように笑ってくれるはずだと信じていた。あの冷たい鉄面皮を剥がせると思っていたのだ。

けれど、姉がいなくなってしまうのなら、傷ついてしまうくらいなら――

「ねえちゃんが死んじまうくらいなら、オレは無限の魔力なんていらねエ!!？」

声高々にヒューズが吠えたその刹那、周囲から展開された影魔法の数々がヒューズを取り囲む。温度などないはずなのに、ひんやりとした殺気を放つ影の刃が首筋に構えられ、眼前では黒犬が獰猛な唸り声を上げる。そして何より、術者であるカイトが放つ殺気が重く、まるで暗闇の中にいるかのように黒く塗りつぶされているようにさえ見えてしまう。

言葉さえ発せなくなるほどの重圧に足腰は震え、呼吸が上手くできずにはくはくと口が動く。それでも逃げ出そうとせず、目尻に涙を浮

かべながらもヒューズはカイトを睨む。そうして時間にしては30秒足らず経過したころ、場を支配していた殺気も魔法も霧散した。

「……………うん、その言葉に嘘偽りなしのようだね」

「あ……………お、おい！」

「安心しな。傷つけはいいないよ」

腰を抜かしたようでへたりと尻を地に付けるヒューズの横を通り過ぎて、ヴァーミリオンの近くで腰を下ろす。そうして特に酷い両腕に回復魔法をかけながら、感嘆のため息を漏らす。

「強いねえ、彼」

「……………ええ、自慢の弟です」

殺気を放った時、逃げ出すならば所詮口だけだと鼻で笑ってやるつもりであったが、予想に反してヒューズは折れずにいた。真つ直ぐに、恐怖で震えながらも、その瞳はカイトから逸らすことなかったのだ。

愛する者のために我が身さえ厭わないその姿勢は世界が変わろうとも、変わらない。人の輝きは変わらないものだとはくそ笑み、怪我が治ったことに喜び姉に抱きつくヒューズを横目にカイトの身体は光に包まれ浮遊する。

空を見上げれば雲を呑む様に口を開く大穴の姿。その正体こそアニマだ。

魔力をエドラスに流し込むアニマを逆回転し、この世界から魔力を消すというミストガンの作戦は上手いきき、こうして生物を含めた魔力がエドラスから消える。

久しぶりの団欒なのだろう。嬉しそうに抱きつく弟をどう対処したのかと無表情のままワタワタと手を動かすヴァーミリオンと、ちらりと視線が合う。戦って友情が芽生えたような間柄ではなく、互いのエゴをぶつけ合った仲だ。さよならという言葉も、会釈さえ交わさ

ない。

だが、それでいいのだと互いに思う。所詮は生存戦争をかけた自分たちが歩み寄るわけにもいかない。鼻から微かな溜息を溢し、カイトはアニマへと吸い込まれる。それを確認したヴァーミリオンは抱きつくヒューズの背中に手を回して優しく撫でる。

「ねえちゃん……ねえちゃんっ!!?」

「ええ、ヒューズ。私はここにいますよ」

いつの間にか大きな背中になったものだと思いきや、感慨深い想いに浸り、肩口から聞こえる安堵からの涙を見ないふりをして、ヴァーミリオンは何年振りかになる涙を静かに溢すのであった。

姉弟妹

「冗談じゃないわよ!!？」

堂々たる仁王立ちで、棘をマシマシにしたシャルルの言葉を受けるのはエドラスにいるはずのエクシードたち。一国民丸々なのだからその数はかなり多い。皆、シャルルの言葉がごもつともなのか項垂れていた。

さて、なぜこのように状況に？と異様とも言える光景から現実逃避するべく、カイトは頭の中で状況を整理する。

アニマの逆回転によりアースランドへの帰還を果たした一同。街を一望できる丘の上へと転移し、眼下に見えるのはマグノリアの街。次は人員の安否だと意気込んだところに先に到着していたエクシードたちが現れたのだ。

エクシードたちは呑気に人々の無事を伝えてくれたが、無数のネコが空を舞う様は見ていて頭が痛くなる。話を聞けばアニマの逆回転に呑まれこの世界に来たのだと。

項垂れる面々の中でも特に居心地が悪そうにしているのは女王を名乗るシャゴット。力の弱いエクシードたちを守るためとはいえ、神を騙り、未来視によって見たエクスタリアの破滅から逃すために、滅竜魔導士の抹殺という名目の子供達のアースランドへの避難。

シャゴットの独断ではなく元老院をも含めた計画だったとはいえ、その背中に乗る重圧は中々のものだろう。

誤解も解けての大団円とはならず、威嚇してばかりのシャルルをどうしたものかとウエンデイが視線で助けを求めるが、部外者が口を挟む場面ではない。苦笑いを浮かべるだけしかカイトは思いつかなかった。

そも、エクシードたちを送り返そうにもその様な技術はこの世界には存在せず、エドラス側も魔力が消えた以上2度とアニマを開くことはできない。カイトにできることと言えば精々、新たな住処を探す手

伝いをするこくくらいだ。

そうしている内に、シャゴツトの話を聞く内に折れたシャルル。決定的だったのはシャゴツトと同じ予言の力を自身も持ち、それが断片的に見えた為にもしれない使命があると思ひ込んでいたという話だろう。

6年前に逃した子供達を探すべく、空を舞うエクシードたちを見送りながらカイトは肩を竦めてため息ひとつ。考えるのは今後のことだ。

「さて、どうしようかねえ……」

「あ？何がだ？」

「いや、今回の事の報告をね……それ、楽しい？」

「おう。オメエもやるか？」

「遠慮しておくよ♪」

顔長のエクシードの癖に感化されたのか、腕を上下に振り続けるナツ。よくよく見ればグレイ、ルーシイ、エルザも真似していた。

それはさておき、目下課題なのは報告だ。ミストガンの脱退の件は、マカロフのことだ仕方がないですませてくれるだろう。しかし、問題は評議院への報告だ。少なくとも数日の間、街が消えていたのだ。必ず評議院ないし王国からの調査が入るだろう。

ただでさえ睨まれているフェアリーテイル。それに異世界へと行きました、と証言しても聞いてはくれないだろう。

真似したいのかうずうずしているウエンディを嗜めながら、山積みの問題に半ば現実逃避をしていれば、ガジルが声を上げる。

「リリーはどこだ？パンサーリリーの姿がどこにもねエ!!？」

「オレならここにいる」

騒ぐガジルの制したのは、探し人であるパンサーリリー張本人。しかし、その姿はエドラスの様に巨大ではなく、ハッピーやシャルルと

同じ程の大きさになっていた。本人曰く、アースランドとの魔力の兼ね合いだろうとのこと。

王子であるミストガンが世話になったギルドに加入したいらしく、念願の相棒を手にしたガジルは抱擁しながらの大泣き。そんなにか、と少しばかりカイトは引いていた。

「ん？リリー。君、何持ってるの？」

「ああ。ここにくる途中、怪しいやつを捕まえた。来い」

「ちよ…!!？私、別に…：怪しくなんか!!？」

リリーの持つ縄に気がついたカイトが指摘すれば、無遠慮に引つ張られる縄。不審者という事もあり、少しばかり警戒をしていたが、その声が聞こえた瞬間、言葉を失う。

ありえない、と切り捨てようにも、記憶の底から響く声に彼女の声はあまりにも似ていた。そうして、藪の向こうから転がる様に現れたその姿に息を呑む。

「私もフェアリーテイルの一員なんだけど…：…：…」

「リサーナ…：…：…」

2年前、確かにこの世から消えたはずの彼女が、確かにそこにいた。頭に浮かぶのは沢山の疑問符。他人の空似というにはあまりにも似過ぎていて、生き返ったというにはあまりにも荒唐無稽。現在を受け止めきれない一同が出した結論はエドラスのリサーナが舞い込んできたというもの。

しかし、件のリサーナはナツを見つけた瞬間、縄を持つリリーごと突進するやうに抱きついた。

「ナツ!!？!!？また、会えた…：…本物のナツに」

空から降る雨とは別の水でナツの頬が濡れる。啞然とする一同さ

ておき、ハッピーに抱きついたかと思えばエルザとグレイに久しぶりだと言ひ、ルーシィとウエンデイに挨拶を。

ありえない、ありえないのだ。死んだのだ、彼女は。死んだはずなのだ。棺を用意して、離別したのだ。けれど、目の前の現実はそれを否定して、困惑しながら出した結論を嘲笑う。

「カイト……」

「うん、信じられないけど……いや、本当に信じ難いけど……りサーナ。君は、アースランド（脚）のリサーナなのかい？」

「師匠………はい」

「なっ!!?!?!?!」

「ええええー?!?!?!」

「師匠?!?!」

「違う、ルーシィ。驚くところ、そこじゃないよ」

若干一名、違うところで驚いていたが、場が驚愕に包まれる。喜びのあまり抱きつこうとするナツとハッピーを止めて、エルザが問う。なぜ2年前に死んだはずの彼女がここにいるのか、と。

そうしてゆつくりと語り出そうとしたリサーナを遮る様に、カイトが手を叩いてそれを中断させた。

「まあまあ、エルザ。それよりもまず、先にやる事があるだろう？」

「やる事？」

「そうさ♪とりあえず、移動しようか。行き先はカルディア大聖堂だよ♪」



カルディア大聖堂。そこは神に祈りを捧げる場所であると同時に、死者を弔う墓地。敷地の一角にはいくつもの墓石が立ち、そのうちのひとつにミラジェーンとエルフマンが死者に花を手向けていた。

降り頻る雨など気にせず、後悔と懺悔が2人の中で入り混じる中、

声が聞こえた。

聞こえるはずのない、2度と聞く事が叶わないと思っていた、愛しい妹の声。ミラ姉と、エルフ兄ちゃんと、そう聞こえたのだ。

最初は聞き間違いかと自嘲を。けれど2度3度となるとそうも言っていられない。幻聴だと、ありえないのだと思い、少しばかりの期待を込めてそちらに振り向いた瞬間、2人の時間は止まった。

雨の中、こちらに駆けてくるリサーナの姿。傘を持つ手が震えて、目尻から溢れる涙が視界を歪ませようとも、しっかりとその姿は確認できていた。

気がつけば駆け寄り、抱きしめ合う兄弟姉妹。2度と会えなかったはずの者との再会を果たし、雨と混ざり合う様に歓喜の涙が溢れるのであった。



その日、ギルドはいつも以上の大盛り上がりを見せていた。何せ死んだはずのリサーナが戻ってきたのだ。飲めや騒げやの大はしゃぎ。配膳に回るカイトも心からの笑顔を浮かべていた。

ギルドが異世界に囚われた時は荒れていたが、結果としてみれば元通り。どこか死んだはずの人間まで復活したのだ。嬉しくないはずがない。

ミストガンが脱退したのは確かに悲しい。だが、それは彼が決めた道であり、第三者である自身がどうの言えるものではない。きつとエドラスで元気になっているだろう。

食糧庫を空にする勢いで料理を作り、配膳された料理は瞬きの内に消えてしまう。負けてられないと謎の負けん気を胸に抱き、鼻歌混じりにマルチタスクをこなすカイトに、そういえばとルーシイが声をかける。

「師匠ってどういうことっ。」

「ああ、それ？なんのことはないよ。エルフマンとリサーナに魔法を

「教えたのは俺だからね♪」

「そうなの!?!?」

元々、魂というものに関しては一家庭のある吸血鬼。そして接収テイクオーバーの魔法は対象の魂を読み取ることが鍵だ。教えた、と言っても少しばかり手解きしただけなのだが、それ以降リサーナからは師匠呼びなのである。

余談であるが、最初の方こそエルフマンも師匠呼びではあったのだが、ギルドでの飄々とした姿があまりにもあんまりで次第に名前呼びとなっているのだ。

「わ、私もカイトさんから色々教わりたいです!!?!?」

「それはいいけど、どうしたのウエンデイちゃん?すごいやる気だね?」

真面目なウエンデイの、いつも以上のやる気に驚きつつも手は止めない。オーブンから取り出したスポンジケーキにクリームを塗りつつもそう問えば、露骨に視線を逸らすウエンデイ。

師匠呼びに憧れを抱いた、とは流石に言えず、力をつければエドラスでもっと活躍できたはずだからと誤魔化す。

そんな目が泳ぎまくるウエンデイを横目に、少し離れた机の上からシャルルの睨み。既にエドラスでやらかし、エルザからはアイアンクローからの宙吊りを、シャルルからはその鋭い爪で顔を横薙ぎにという仕置きを受けていたカイトはわかっている、という意味を込めて苦笑いを返す。

肩を竦めてため息を溢すシャルル。言外にどうだか、と言ってるのは火を見るよりも明らかだ。信頼がないのは仕方がない。以前のようには構い過ぎず、過保護にならず、程よく教授しようと思えるカイト。といっても、扱う魔法が違いすぎるのでそこまで深く教えることはできないのだが。

「うん、できた♪エルザー」

「ようやくか」

「いや、既に3ホールは食べてるよね?」

「3ホール!?!?」

最後に飾り付けを施したショートケーキを受け取ったエルザ。そのままホールごと食べ始めるのだからルーシイとウエンデイは驚きを隠せない。よくあれだけ甘いものを食べてあのプロポーシオンを保てるものだと絶句と共に羨望を。

これがS級魔導士の実力かと物怖じするルーシイたちを尻目に、見慣れた光景故に気に求めず次々と料理や片付けなどに勤しむカイトの姿に視線ひとつ。

少しばかり熱っぽい視線を送るのはミラジェーン。いつもならカイトと同じ様に厨房で激務に励む彼女ではあるが、今回は別。リサーナの隣で帰還の喜びを分かち合うミラジェーンであったが、ふとした瞬間、無意識のうちについて目で追ってしまうのだ。

この気持ちは恋や愛だの、そう言った類のものではないと、ミラジェーンは自覚している。これはただ幼き頃、ギルドに引き留めてくれた恩人への感謝の延長線なのだ。

だから、カイトが他の人と楽しそうに談笑する姿を見て痛む胸はきつと、幼子が親に構ってもらえない悲しきと同じものなのだ、そう納得させる。

そんなミラジェーンに気がついてか、リサーナこつそりとミラジェーンの横に顔を近づけると少し意地の悪い笑みを浮かべて問います。

「ねえ、ミラ姉。師匠とはどこまでいったの?」

「……なんのことかしら?」

いつもの様に微笑みを添えてそう返すミラジェーン。まだ認めないつもりなのか、と内心呆れてしまうリサーナ。いつそのこと、みんな

なにバレているぞと教えた方がいいのだろうか？

それはそれで面白そうだが、この姉のことだ。意固地になって頑なに認めようとはしないだろう。

カイトの事を師匠と慕うだけあり、リサーナの行動原理は面白さが優先される。無論、カイトよりも理性が働くために大事には至らないが、怒るに怒れないセーフゾーンで人を揶揄うのは間違いなく師匠譲りである。

「おおい、リサーナ!!?こっち来いよ!!?」

「リサーナあ!!?」

「なになに?何かあったの?」

「あ、おい!!?」

可愛い妹に汚い野郎を近づけまいと奮闘するエルフマンの脇をくぐり抜けて、はしやぎ回るナツとハッピーの元へ。

姉の恋愛論はとりあえず後回しに。今はとにかく、2年越しの再会を心から楽しむことだ。

ナツとハッピーに勢いよく飛びかかるように抱きつき、リサーナは会えなかった期間を埋める様に笑う。それを見てまた、ギルドの全員が昔を思い出して微笑むのであった。

天狼島編

天狼島―①

「……と言うわけなんですよ、ミラさん!!?」

リサーナの帰還から少しして。お祭り気分もようやく落ち着いてきたこの頃、ギルドのカウンターに座るルーシィが昨夜あったことをミラジェーンに報告していた。

曰く、いつの間にか部屋にいたカナが突然ギルドを辞めようかと悩んでいるのだとか。

確かに一大事やもしれないが、この時期になると決まってカナはそう言い出す。理由は誰も知らず、深掘りしようとしてもしない。きつといつか話してくれるだろうと、皆カナの気持ちに整理がつくまで待つているのだ。

だからこそ、ミラジェーンは大丈夫だと告げる。どんなことがあると、彼女は仲間なのだから。

「ミラちゃん、そろそろヘルプ頼むよ♪」

カイトの呑気な声とは裏腹に、バーカウンターの隣、依頼受注用のカウンターでは珍しく人で溢れていた。受注の有無は目で確認し、当人に見合った案件かを判断せねばならず、この件に関してはカイトも手作業で行う。

「仕事仕事オー!!?」

「あいさー!!?」

「ただいまア!!?次イ!!?」

「受注早くしろや!!?」

「どけ、こいつアオレんだ!!?」

「んなの知るか!!?」

クエストボードに貼られた依頼を奪い合い、依頼に出かけて帰ってきたかと思えばすぐさま別の仕事へ。チームを組んでいるはずのジエツトとドロイでさえ、この時期ばかりは別々に仕事をこなしていた。

鬼気迫る勢いで群がる面々を流石に捌ききれず、やむなく助けを求めるカイト。ミラジエーンがそれに了承すればルーシイを押しつけるように群がり始める。

「何事なの!?!?」

「直にわかるわよ」

あまりの変わり様に危機感を覚え、カウンターの端の方に避難するルーシイ。ギルド全体が慌ただしいかと言われればそうでもなく、離れたテーブルではウエンデイ、シャルル、リサーナが談笑を。テーブルや椅子が撤去された空間ではパンサーリリーとエルザによる剣の鍛錬が。

仕事に励む人もいれば全くいつも通りの人もいて何が何だかわからず、ミラジエーンやカイトに聞いても明日になったらわかる、と言わられて答えてもらえず、悶々とすること一夜明け。

その日ギルドにはほとんどのメンバーが集まっていた。事情を知るものは今か今かと待ち侘びて、知らないものは何が起こるのかと不思議そうに辺りを見回す。

「やっと秘密がわかる」

「ジュビア、ドキドキします。…… 그레이様を見てると」

「あんたもう帰れば?」

いつも通りのジュビアに呆れるルーシイ。その時だった。ギルドの正面、壇上に掛けられていたカーテンが勢いよく開き、マカロフ筆

頭にエルザ、ミラジエーン、カイト、ギルダーツの5人が現れた。

「マスター!!?」

「待ってました〜!!?」

「早く発表してくれ〜!!?」

「今年は誰なんだ!?!?」

騒がしい野次もマカロフの咳払いひとつで静まり返る。それだけ皆このイベントに注視しているのだ。

「フェアリーテイル古くからのしきたりにより、これより〜」

「S級魔導士昇格試験出場者を発表する」

ギルドが割れんばかりの歓声に包まれるこのイベント。喜ぶのも無理もない。なにせ、この試験に合格すればその名の通りS級魔導士へと昇格できるのだから。

S級魔導士ともなれば受けられる依頼の幅も報酬も跳ね上がり、個人の知名度も知られる。エルザやミラジエーンが良い例だろう。無論、ギルド公認の実力者という面もあり、ナツを始めとした面々は早く昇格して肩を並べたいとウズウズしている。

一度受けたら二度と受ける事はできないという事はないが、試験は毎年違うため予想はつかず、また内容は一貫してハードなため辞退する例も。

ここ数日、ギルド内が慌ただしかったのも、全てこの日のため。

「各々の力、心、魂……ワシはこの一年見極めてきた。参加者は8名」

ナツ・ドラグニル

グレイ・フルバスター

ジュビア・ロクサー
エルフマン
カナ・アルベローナ
フリード・ジャステイン
レヴィ・マクガーデン
メスト・グライダー

以上8名がS級魔導士への昇格権を得た。選ばれなかった者は嘆き落ち込み、選ばれた者は恥じぬ様戦意を燃え上がらせる。

試験は一週間後、選出された者以外とペアを組み試験に臨む様言い渡されその場は解散となった。

裏方に戻ったマカロフ筆頭5人は試験内容の最終調整をせねばならない。

「さて……………改めて言うておくが、お主ら。ちゃんと手加減はするんじゃないぞ」

「わかってるよ、おじいちゃん♪しつかしまあ、今年が多いねえ」

手元の資料をパラパラとめくりながらカイトは呟く。今回の試験、S級魔導士は道すがら妨害するようになり言い渡されているのだ。実力で言えば参加者よりも上のため手加減を言い渡されるが、S級には不十分だと判断された暁にはその限りではない。

その合格ラインは各々が決めて良しとされているため、S級魔導士たちも力がある。

「ナツはハッピーを選ぶとして……………他のみんなは誰を選ぶんだろうねえ」

「誰が来ようと構わん。全力で相対するだけだ」

「エルザ、手加減の意味知ってる？」

「エルザのルートはデスゾーンね」

「ミラちゃん、君もエルザに負けず劣らず手加減知らずだからね？」

「よっしや！S級魔導士昇格祝いだ！カイト、酒とつまみ！」

「気が早すぎるよ、ギルダーツ。あと、そろそろツケの期限が近いけど大丈夫なのかい？」

「大丈夫じゃろうか……………」

あまりにも自由なS級魔導士たちに肩を落とすマカロフ。一次審査だけとはいえ、任せて大丈夫だろうかと一抹の不安を覚える。今更になって後悔するがもう遅い。試験まで残り1週間しかないのだ。内容を変更する時間はない。

各々の思惑、願いが渦巻き1週間後。

海を挟んだ孤島、フェアリーテイルの聖地である天狼島。島の中央から天を衝くように伸びる大樹が特徴的なこの島で今回の試験は行われる。

一次審査は八つのルートの内ひとつを選び、その先に待ち受ける候補者同士の対決、もしくはS級魔導士との対決を抜けた者が二次審査へと進むことができるのだ。

そのうちのひとつ、割り振られたHルートにカイトはいた。既に移動による酔いは覚め、薄暗い洞窟の中いかに腰掛けて誰が来るのかを待ち侘びる。

ペアはナツとハッピーは当然として、カナとルーシィ、フリードとビックスロー、ジュービアとリサーナ、エルフマンとエバーグリーン、メストとウエンディ、レビィとガジル、そして去年から約束していたというグレイとロキと、錚々たるメンツ。

誰が来ても楽しそうだと両手を組んで伸びをすると徐に立ち上がる。そうして仄かな灯りが近づいてくると挑戦者の姿が現れる。

「ゲツ……………テメエかよ」

「カツカツカ♪ご挨拶だねえ、ガジル」

ガジルを先頭に、その後ろに控えているレビイ。頭の少し上には実体化したlightの文字。レビイの魔法立体文字だ。ソリッドスクリフトあからさまに面倒な奴に当たったとゲンナリするガジルとは別に、レビイの表情は絶望に染まっていた。

「ケツ、まあいい。テメエをさっさと倒して火サラマンダー竜たちを殴ってやらア!!?」

「待って、ガジル!!?」

「カッカツカカ♪もしかしてみくびられてる?」

レビイの静止も聞かず、意気揚々と走り出すガジル。実際、ガジルはこの戦いは比較的的苦戦しないとタカを括っていた。カイトは確かにその手数が多さや何をするかわからない怪しさなど、敵にまわれれば厄介だ。

だが、エルザの例もあるように、速攻や策の通じない程の力押しで攻められたら後手に回るしかないのだと、そう判断していた。

自身の鉄竜の鱗は生半可な攻撃は効かず、その硬さはそのまま攻撃力となる。己を形作る魔法を信頼してこその特攻は、しかし、足元から迫り上がる影に阻まれた。

「ウオツ!!?」

足場が崩されるのではなく、足場そのものが持ち上がり、バランスを崩したガジル。そこ狙うように暗闇に紛れた蝶が殺到、そのまま爆発を起こす。だが、ガジルの予想通り攻撃そのものは大した事はなく痛痒にも感じない。爆煙に紛れて反撃を、と思ったところで視界を奪うほどの巨腕がガジルを対面の壁へと弾き飛ばした。

「ガツ!!?」

「ガジル!!?」

慌ててかけよるレビイ。その渦中では不安や絶望でいっぱいだ。何せ、閉鎖空間でレビイたちが到着するまでの間、余裕を持って策を練る事のできたカイト。エルザやギルダーツでさえ躊躇するような状況で挑まなければならぬのだ。

「カッカッカ♪どうしたんだい、レビイ。これは君たちの為に用意した劇だよ？主演が踊らなきゃ意味がない」

背後に一对の影の巨腕を従えて、カイトは笑う。その姿はさながら悪魔のようで、滑稽な一人芝居のようで――

「さあ、幕は開かれた。ジャンルは喜劇。題名は、そうだねえ………囚われの妖精と鉄竜、なんてのは安着すぎるかな？」

――まるで、御伽噺の勇者が挑む魔王のように、そう高らかに告げるのであった。

天狼島―②

「オルア!!?」

腕を剣へと変えたガジルの横薙ぎの一撃。眼前に広がる無数の影の腕の群れを雑草の如く刈り取るが、瞬きの間に復活する。

「ファイア炎!!?」

続け様に放たれたレビイの魔法も、当たった影は燃えるが如何せん数が多すぎる。埒が開かないと焦れる2人を、影の手の群れを挟んで反対側、背後に一对の巨腕を従えながらカイトは飄々と笑いながら眺めるだけ。

戦いが始まってから終始、流れはカイトにあった。十全に罫を仕掛けたフィールドで遅れを取るはずもなく、ガジルとレビイそれぞれの攻撃は意味をなさない。距離を詰めようにも影が邪魔をして、それを乗り越えたとしてもその次は影の巨腕が待ち受ける。

数度の衝突の後、レビイの表情には諦めが混じる。

レビイとカイトの関わりは、はつきり言って薄い。精々顔見知り程度だろう。だが、その実力はよく知っている。エルザ、ミラジエーンに続き若くしてS級魔導士となった実力者。道化と呼ばれるフェアリーテイルのトリックスター。普段の胡散臭い態度とは裏腹に、その実力は本物だ。

チーム・シャドウギアの実質的なリーダーの様な立ち位置であるレビイ。それ故に彼我の実力差に打ちひしがれていた。

「ガジル……………やっぱり、私たちじゃ……………」

「諦めてンじゃねエ!!?」

弱音を吐くレビイへの苛立ちをぶつけるように、ガジルの咆哮が影

の手の群れを襲う。鉄の刃が混ざる殺傷力の高い攻撃は影の妨害を貫くも、背後に控えていた巨腕に塞がれた。

瞬時にまた妨害の群れが形成されるが、ガジルに諦めるような様子はない。予想以上の体力と魔力の消費に息を乱しながらも、カイトを見据え隙がないか探っている。

「諦めの悪いのがフエアリー^テメエ^{メエ}テイル^らだろオが!!? そう簡単に逃げ出してンじゃねエ!!?」

「ガジル……………」

レヴィに一喝入れるや否や、上空に飛んだガジルが影の群れに向かって鋼鉄となった腕を振り下ろす。罨を張る魔法陣の破壊を目論む攻撃は、予想通り受け止められ壁へと叩きつけられる。

鉄竜の鱗はこの程度では砕けず、衝撃で呼吸が一瞬止まったくらい。そうしてカイトの弱点を見つけたのだろう、荒い呼吸のままニヤリと笑えば、それを察したカイトがため息を吐く。

「ギヒツ……………」

「はあ……………影^{シャドウ・ナツクル}拳」

今回の試験、あくまでガジルはレヴィのペアだ。いくらガジルが奮闘しようとも、レヴィが動かないのであれば合格とはいえない。少しばかり大人しくしてもらおうと繰り出した影の拳。

獲物に群がる獣のように襲いくる攻撃を、ガジルは防ぐ術はない。しかし、間に割って入ったレヴィは素早く空中に文字を描く。

「防^{ブロック}御!!?」

ひとつふたつの文字では防げない。だからこそ一度に複数、全方位に向かって描き続ける。防ぎきれなかったいくつかの攻撃がレヴィを掠めるが、それでも感嘆の拍手をカイトは送る。

レヴィの魔法固形文字^{ソリッドスクリプト}は術式と比べ単語で効果を発揮するために

クイツクリーな戦闘でも使い勝手はいい。しかし、カイトのように手数での戦闘を得意とするタイプ相手には文字が間に合わず、後手に回る事もしばしば。

この土壇場で不完全とはいえ防ぐことに成功したのだ。S級の候補に挙げられる実力は間違いなく彼女にはあるのだ。

「ギヒツ、遅エンだヨ」

「うっさい。私だって、S級魔導士になりたいんだからこのくらい!!」

「カツカツカ、甘いよ♪」

視界を防御と影に覆われている中、レヴィイの死角から飛ぶ影の刃。それに気づいたレヴィイが「え?」と惚けた声を上げ衝突。しかし、攻撃はレヴィイに当たらず、レヴィイを押し除けたガジルがその身で受け止めた。

「ガジル!!?」

「この程度、屁でもねエ」

硬度はガジルに分があるようで、言葉通り傷ついた様子はなく逆に影の刃を手で砕いた。下手に攻めても効果はなしと判断したカイトは攻撃を引つ込め、後の先を狙う。それを察したガジルは凶悪に笑うとレヴィイに耳打ち。それを聞いたレヴィイは納得したようで、攻略法を思いついたのかカイトを見据える。

「できるか?」

「やらなきゃいけないんですよ。やってみせる」

ガジルの後押しがあるとはいえ、本音を言えばまだ弱音を吐く自分が心の中にいる。しかし、これ乗り越えなければS級魔導士など夢のまた夢。何より、強引とはいえパートナーとなったガジルに申し

訳が立たない。

「ギヒッ、いくゾオ!!?」

(また突撃……?)

声高らかに走り出すガジルに不信感を覚えるカイト。狙いは魔法陣諸共地面を破壊することだろうが、それにしてもあまりにも芸がない。ナツとは違い、ガジルは本能ではなく計算的に動くタイプ。無闇矢鱈な突撃などしないはずだ。

「鉄竜の咆哮オ!!?」

「またそれか」

影の群れを排除するつもりだろうが、その手には乗らない。確かに普通の影では対処できないが、背後に控える巨腕であれば防ぎ切れることはわかっている。

補充できるとはいえ、その度に魔力を消費するのだ。回避するため片方の巨腕を前に出し防ぎ切る。残る巨腕の拳を握った直後、盾にした巨腕がガジルの手によって破壊された。

「てつりゆうそう鉄竜槍・きしん鬼薪!!?」

滅竜魔導士の咆哮を受けた傷口を狙った、腕を鋼鉄の槍に変えての乱撃は流石に耐えきれず。残る巨腕で反撃をと構えたところで開けた視界の先、後方にいたレヴィの周りに漂う文字を見て、柄にもなく背中を冷や汗が伝う。

「させないよ!!?」

「やらせるかヨ!!?」

影の群れで妨害を図るが、それらを根本から伐採するガジル。伸び

た影はレヴィイに触れる前に消えていき、また群れの中から飛ばさねばならない。舌打ちひとつ溢し、巨腕で妨害しようとするがそれよりも早くレヴィイの文字群が天井へと飛んだ。

「いくよ、ガジル!!?・破壊!!?」
クラッシュ

巨腕で文字を塞ごうにも初動が遅れ、いくつもの文字が洞窟の天井にぶつかりその効果を発揮した。最初は些細なヒビ割れ、しかし加速的に広がるヒビはやがて洞窟全体を巻き込んでの大暴落を招く。

時間にしてみれば数十秒足らず。しかし、その被害は甚大の一言。すっかり青空が見えるようになった岩盤だらけのフィールドで、崩落が落ち着くのを待っていたのだろう。岩盤のひとつから鋼鉄が伸びると周囲の岩盤を破壊。その中から現れたガジルといくつかの鉄竜棍を支えに、その下に避難していたレヴィイが顔を出す。

「こんだけやりやアあいつも……おい、何座り込んでんだ?」

「あはは……ちよつと腰抜けちゃって……」

自分がやった事とはいえ、経験した事ない程の大崩落。ガジルの鋼の下から聞こえる落下音に衝撃、支えが折れてしまうかの精神的不安。腰を抜かすのも仕方がないだろう。

「チツ、締まらねエなア」

「しようがないでしょ!!?怖かったんだから!!?」

「アア!!?オレの鉄が折れるとでも思ってたのか!!?」

勝ちを確信したのか、緊張の糸が切れたのか、ギヤアギヤアと騒ぐ2人。ある意味微笑ましい光景に水をさすように、2人の肩に手が置かれた。

「まあまあ♪2人ともよく頑張ったんだから、称え合おう♪」

「ツ!!?!!?!!」

反射的に飛び退こうとするガジル。しかし、気がつけば脚を影の腕に掴まれて身動き出来ず、レビイも両手が同じように掴まれていた。2人のなぜ?が伝わったのだろう。飄々と笑うカイトは種明かしをひとつ。

「なあに、簡単な話さ。君らが戦っていたのは影法師、つまりはただの木偶さ♪俺は君たちの近くの影に潜んで動きに合わせて魔法を操っていただけだよ♪」

「テメエ……!!?!!?!!」

「卑怯、とでも言いたいのかい?残念だけど、S級魔導士を目指すならこの程度見破ってもらわないとねえ♪」

カイトとしては手を抜いていたわけではなく、マカロフの言葉通り試験として手加減をしたただけだ。流石に洞窟全体を崩壊させるとは思わず面を喰らってしまったが、思い切りの良さは評価しようと独り言ちる。無論、そんな弁明をしたところでガジルの怒りは治るわけないのだが。

しかし、状況は最悪。2人とも行動は抑制され、肩で息をする2人とは対照的に相手は無傷。自慢の鋼鉄もこの距離なら必中のはずだが、躲かれる予感しかない。つまりは試験に敗れたのだ。憂鬱な表情のレビイと、何か打開策はないのかと思案するガジルに、カイトは告げる。

「……………」

「おや、レビイ。何を不安そうな顔をしているんだい?君たちは試験に合格したんだ。もっと胸を張ればいいものを」

「ハア?!!」

「なんで?!!」

「別に試験はS級魔導士を倒せ、じゃないよ。君たちの行動を見て、こ

ちらが評価するのさ♪俺は君たちの思い切りの良さと、土壇場での底力。その2つを評価して合格としてあげよう♪」

ああ、崩壊こられは流石に自重してね♪と悠々と告げるカイトに我慢ならず、せめてもの一発をとガジルが拳を振りかぶる。だが、カイトの手が顔を多い、その手から昇る魔力がガジルの動きを止めた。

混沌カオス・メイノ鎧の禍々しさに物怖じしたのもあるが、何よりそこに湧く魔力を防ぎ切れる自信がなかったのだ。ぞわりと皮膚が粟立ち、耳元で心音がうるさくなる緊張感。

観念したようにゆっくりと腕を下ろせば、カイトも手を離す。

「うん、賢いね。蛮勇と勇氣は別物。S級を目指すのなら、そこを履き違えちやダメだよ♪」

「……………クソツ!!?」

敵わないと怖気付いた自身の苛立ちを悪態に。そのまま去ろうとするガジルをカイトは呼び止める。

「ガジル♪♪パートナーを置いていつちやダメだよ♪」

「……………チツ!!?」

「あ、ちよつと!!?」

腰を抜かしたレビイの静止を聞かず、その小さい身体を肩に担いで先へと進むガジル。そして荷物のように抱かれるレビイは抵抗を諦めたのか、死んだ魚の様な目で虚空を見つめる。手をひらひらと振りながら揶揄い概の2人を、その内また弄ってやろうと心に決める。

試験はまだ始まったばかり。



「……………ってな感じだったねえ」

「うむう………」

カラカラと笑いながらそう告げるカイトになんというべきか悩むマカロフ。試験のために手加減したことは褒めるべきかもしれないが、あまりにも煽り過ぎだ。一次試験通過後、ガジルが不機嫌だったのも頷ける。

2人は現在、朽ちた慰霊碑のような物の前にたむろしていた。通常であればカイトの役目は終わり、あとは仮説テントで自由に過ごすはずである。しかし、案の定彷徨い、二次試験の開始した少し後にマカロフの元に現れたのだ。

余談であるが、一次試験を脱落したフリード、ビックスローペアはギルダーツと共に小舟で既に帰る支度をし、ジュビア、リサーナペアはエルザ、ミラジェーンと仮説テントへ。メスト、ウエンデイのペアは行方はわからず、恐らくテントまでの道がわからないのだろう。

そんなこんなで始まった二次試験の内容は、初代マスターメイビスの眠る墓を見つけ出すこと。孤島とはいえ、それなりの広さをもつ島。独自の生態系も合わさって難航することは必須だろう。

カイトが影から取り出したアイスを食べながら、マカロフはちらりとカイトを見る。孫であるラクサスの次くらいには面倒を見てきた半吸血鬼。人間社会に馴染むために様々なことを教えてきたが、どうにも人間性はまだ勉強が足りないようだ。

「時にカイト。ミラとはどうじゃ?」

「ミラちゃん?仲は悪くないけど、どうして?」

「誤魔化さずともよい。気づいておるのじゃろう?」

マカロフの言葉に一瞬驚いたように目を見開くカイト。しかし、隠すことは無理だろうと判断したのか、苦笑いを浮かべながら頭を掻く。

「うん、まあ……彼女からの好意らしきものは感じてるよ。けど、それ

だけさ」

「気づいておるのなら、なぜ応えてやらん」

「人の愛だのなんだのは理解できないからねえ」

肩を竦めてそう答えるカイト。それに深いため息をこぼすマカロフは先が思いやられると心の中でこぼす。

愛がわからないとカイトは言うが、そんなことはないとマカロフは考える。きつとカイトの中では愛とは穢れなき綺麗なものでも捉えているのだろう。確かに、それも愛の一面だ。しかし、愛とはそれだけではない。

愛とは確かに美しいが反面、その実態をとことん突き詰めてしまえば区別だ。AよりもBが、BよりもCが好きだと、それぞれ秤にかけて傾いた方に好意を持つものだ。既にカイトはフェアリーテイルとそれ以外と区別して、前者に愛を注いでいる。

「……………例えばじゃが、カイト。ミラがお主意外の、ギルド外の男と仲良くしておつたらどう思う?」

「うーん……………ミラちゃんが決めたことだし口は挟まないよ」

「そうではない。お主がどう思うかじゃ」

またも誤魔化しが効かず、マカロフには敵わないと内心溢しながら頭の中で想像する。そうして苦虫を噛み潰したように顔を顰めると、苦々しくその思いを口に出す。

「面白くないねえ……………ねえ、やめないこの話。たられ過ぎ得るものがないよ」

「なに、老人の戯言じゃと聞き流せ」

カイトもカイトでミラを思っていると言うことがわかっただけでも大収穫。後は互いに気がつけばよいのだ。好々爺然とした態度でそう言えば、カイトも深く詮索してこない。

アイスもなくなり、茹だるような暑さに辟易すること暫く。それは唐突に訪れた。

「っ!!?・マスター!!?」

「なんじやと!?!」

音を立てて空に上がる赤い信号弾。それは敵の存在を示すコンデーションレッドの発令だ。フェアリーテイルのメンバーしかない筈のこの島に敵が攻めてきたのだと、そう告げているのだ。

「カイト!!?」

「あいよ!!?」ブラックドック 黒犬、ラウム 魔鴉!!?」

マカロフの合図と共に、カイトの足元から爆発するかの用に這い出す黒犬と鴉の群れ。100を超える鴉の群れは空を飛び、50ほどを黒犬たちはすぐさま森を駆け抜ける。それら全てと視界を混合するため身動きの取れなくなるカイトではあるが、そのかいあってか目的のものはすぐさま見つかった。

「ああ、くそっ! 既に島内に何人かいるよ。島の内部に2人、外縁部に2人……いや、1人はメストを名乗っていた誰かだね」

その近くにはここまで飛んで来たのであろうシャルルとリリーの姿。そしてメストを名乗っていた不審者の隣にウエンディ。本当ならばすぐさま駆けつけたところだが、いかんせんそうもいかない。彼女ならば大丈夫だと信じるしかないのだ。

それよりも見逃せないのは空を飛ぶ飛行船。間違いなく天狼島を目指すそれが掲げるのは闇ギルドバラム同盟の一角、グリモアハート 悪魔の心臓の紋章。

島内に潜入したのが先遣隊ならば、こちらは間違いなく本隊。ギルドマスターを始めとした実力者がいることは間違いない。

「マスター、敵は北から来るよ。それも悪魔の心臓。ここで墮としておこなきゃヤバイ」

「うむ……………ならばカイト、行くぞ」

少しの熟考の後、カイトを連れていくことを決めたマカロフ。島内にいる敵が少数精鋭の可能性もあるが、こちらにはエルザとミラジエーンに加え、勝るとも劣らないS級候補の面々がいるのだ。

それに、天狼島の加護により、フェアリーテイルの紋章を身につける者は致命傷を追う事はない。最悪の場合、飛行船を沈めてすぐに探し出せば良い。

楽な相手ではないことはわかっている。そう易々と事が済むはずもないとも理解している。けれど、家族を信じて下した決断にカイトは頷き、一も二もなく走り出そうとした瞬間、動きを止めた。

「っ!!?」

「カイト?」

「……………なん、でもないよ♪」

明らかに何かあつた様子ではあるが、笑顔の仮面を被つたカイトは答えない。問いたただす時間も惜しく、深くは突っ込まないマカロフの背を追いながらカイトは思案する。

それぞれに展開した魔法たちを戻す直前に見えた男。黒髪黒目の、これといって特徴のない平凡そうに見える男。明らかにギルドのメンバーではないが、敵意も感じなかった。

敵でも味方でも第三者。放っておいても問題ないはずの推定漂流者。

しかし、なぜだろうか。彼の姿を見た瞬間、故郷を思い出すような郷愁に駆られたのは。

天狼島―③

空を駆ける巨大飛行船。それ自体がギルドの本拠地として稼働し、その機動力から評議院さえ所在を掴む事さえ叶わない三大闇ギルドの一角、悪魔の心臓。

マスターであるハデスの実力もさながら、その下に控える煉獄の七眷属も並の実力ではない。一人一人が下手なギルドであれば単騎で壊滅させられる実力を持ち、その力に惹かれてかギルドに属する者は闇ギルドの中でも最多だ。

一向が進む先は天狼島。そこに眠るとされる闇魔導士の代表格、ゼレフを手に入れるために。

煉獄の七眷属の内ひとり、かつて評議院として潜入していたウルティアはこの作戦にかける思いは人一倍強く、怨敵もかくやとばかりにそろそろ見えてくる頃である天狼島を睥む。

「ウル！あれ!!?」

「私をウルと呼ぶな」

「ご、ごめんなさい」

その名は忌々しい思い出しか呼び起こさず、声こそ荒げなかったが確かな怒りが込められた声に同じく七眷属のひとり、メルデイは目を伏せる。

「そんなナーバスになるなってば！で？どうした？メルデイ」

「見えてきた」

軽い調子で慰めるのは七眷属のひとりザンクロウ。そしてメルデイの言う通り確かに、肉眼でも確認できるようになった天狼島が。しかし、その島の手前。まるでこちらの侵入を阻むかのように巨大な人影も見える。

その正体は巨人化の魔法を最大までに使ったマカロフ。巨大飛行船よりも2回り以上に巨大なその姿は紛う事なく巨人。初代から受け継がれてきたギルドを、何より家族を守るためにその力を躊躇いなく振るう。

「ここから先へは行かせんぞ」

振るわれた拳は強化装甲の筈の船体を容易く破壊し、中にいる人員に驚愕を与える。しかし、そんな中でも玉座に座するハデスに焦りはなく、冷静に事を見据えていた。

「速度を上げろ」

続く二撃目、マカロフの左の拳は残る左舷をフルに活用して避けられる。そして振り切った腕が死角となり、マカロフに向けて放たれた魔導収束砲ジユピター。戦争にも使われた破壊兵器の一撃を、マカロフは腕一本で受け止めた。

「ほう」

知古の成長が喜ばしいのか、ハデスの口から思わず声が漏れた。それとお返しとばかりに振り上げた蹴りが船体を確実に捉えた。さしもの破壊力に船内に動揺が走るが、ハデスは次の一手を繰り出す。

「ウルティア」

「は。時のアーク、レストア」

ハデスの命を受け、ウルティアの発動した失われた魔法^{ロストマジック}。時を操る魔法は崩壊する飛行船を再生のように復活させた。さて、このままでは一進一退。ならば自らが相手をせねばと腰を上げようとするハデスの首元に刃が当てられた。

「おーっと、動かないでもらえるかな？」

いつの間そこにいたのやら、玉座の影から顔を出したカイト。刃と思われていたのは偽・ぶつぎりおほほさみ仏斬大鋏は切断に特化した魔法。刃を交差させなければならぬが、その切断能力は絶対。対魔力障壁ならばまだしも、只人を殺めることなど造作もない。

「貴様っ!!?」

「動くな、って言ったよね？」

脅しだけではないのだと見せつけるように、ハデスの首筋から一筋の血が流れる。ハデスの実力はギルドの全員が知っている。しかし、もしもの可能性が拭いきれず、踏みとどまった。

目標を目の前にして足踏みを許容させられ、憤怒の形相で睨むウルティア。首元に当てられた刃を盗み見ながら、ハデスは視界の端にカイトを捉える。

なるほど、最初の一撃はカイトを潜入させるためだったかと当たりをつけ、40年前よりも頭が回るようになったと知古の成長を喜んだ。

「人質のくせに余裕だねえ」

「老いると刺激に鈍くなつてな。こういうアクシデントは寧ろありがたい」

「そう。なら、冥土の土産にでもしてな」

吐き捨てるようにそう言い放ち、カイトは船内を見渡す。ハデスの予想通り、マカロフの拳に隠れて潜入。そしてそのままマスターを人質に取ったまではない。後は評議院に突き出すなり、このまま墜落させるなりすればいいと考えていた。しかし、今ここに至ってはカイトの胸中には言いようのない不安が渦巻いていた。

人質に取られているというのに余裕を崩さないハデス。何か裏があるのかと思案するが、背後に貼った魔法の罠には何の反応もなし。前方にいる面々も歯を食いしばって怒りを抑えているだけ。

悪手ではあるが、このままハデスの殺害を目論むカイトを他所に、ハデスは首に刃を当てられたまま指示を出した。

「カプリコ。全員をあの島に連れて行け」

「なっ!??しかし、ハデス様!!?」

「いい。この程度、何の障害にもならん」

「くっ……了解」

カプリコと呼ばれた、二足歩行の羊とも言うべき姿をした男が手を鳴らすと、ハデスとカイトを除いた全員が消える。後に残るのは大量のビー玉サイズの球体。それを魔法で回収したカプリコはすぐさま背中に飛行装置をつけて飛び立とうとするが、カイトの魔法の方が早い。

「行かせないよ」

足元から這い出した黒犬がカプリコ目掛けてその鋭い牙を光らせる。しかし、その牙が獲物を捕らえようとした瞬間、黒犬が文字通り弾けた。

「これ、邪魔するものでない」

「ッ!!?ああ、もう!!?」

下手人であるハデスはその場から動かずとも魔法を破壊したのだと悟る。予備動作もなしに魔法を発動するなど、相当の実力者。わかってはいたが、実際に目の前にするとならしくもなく焦りが生まれる。

とりあえずはハデスを倒し、後を追うべきだと判断したカイトは首

筋に当てた刃を交差させる。
鮮血が宙を舞った。



「フェアリーテイル審判のしきたりにより、貴様らに三つ数えるまでの猶予を与える」

今し方大量のメンバーを連れたカプリコがマカロフの脇を通り、島内に侵入したのを確認した。カイトの提案した作戦は失敗したということだろう。

しかし、マカロフの次なる一手は逃走されようと関係がない。術者が敵と判断した者を全て討つ超魔法、フェアリーロウ妖精の法律。

マカロフの両手から生み出された光は周囲を照らし、無慈悲で理不尽とも言える魔法がいま放たれようとしていた。

「一つ……二つ……三つ。そこまで」

「やめておけ」

両手を合わせ、収束した光が放たれようとした刹那、船首に顔を出したハデスがマカロフの視界に映る。そして驚愕から動きを止めたマカロフに見せつけるように、ボロボロとなったカイトがハデスの手に。

カイトがこうもやられる事が予想外なこともある。しかし、それ以上目の前に立つハデスには見覚えがあるのだ。

時が経とうと変わらない。自身が目標とし、憧れていた人を間違える筈もない。何せ、マカロフの持つギルドマスターという称号は彼から受け取ったのだから。

「久しいな、小僧」

「マスター……プレビト……」

フェアリーテイルの先代マスター、プレビト。それがハデスの正体であった。

「ガフツ!!?」

「ツ!!?カイト!!?ワシの家族に何をした!!?」

首を掴まれて宙吊りにされたカイトの咳き込む声に我に返ったマカロフ。なぜ先代マスターがこのようなことをしているのか、聞いただしたい事はたくさんある。しかし、今は瀕死までに追い込まれた家族の救出を優先した。

「家族? 相変わらず物好きだな、マカロフ。吸血鬼でさえ家族に迎え入れるとは」

「何が悪い!!? そやつが何であろうと、ワシの家族に代わりはねエ!!?」

「いや、なに。悪いとは言わんよ。しかし、中々に奇遇だと思ってな」

そう言つてくつくつと喉奥で笑い出すハデス。その間にもカイトの傷が回復する様子は見られない。どころか、普段は滅多に見せない筈の吸血鬼としての姿を徐々にではあるが見せ始めている。

何重にも施した封印に影響が出始めているのだ。単に返り討ちにあつたわけではない。何かされたのだと判断したマカロフは怒りに任せて拳を振るう。

「そやつを離せえ!!?」

例え城壁であろうと粉碎せしめる破壊力を持つ拳。例えハデスであろうとまともに食らえばタダでは済まない。だが、一呼吸置いたハデスは冷静に、冷徹に、言葉を発した。

「私にも、吸血鬼の配下がいるのだよ」

「なにっ!!?!!?があっ!!?」

まさかの言葉に一瞬だけ拳が鈍る。その隙をついたようにマカロフの肩口に激痛が走った。ついで訪れるのは喪失感。魔力をはじめとした体力を吸われるような感覚。この感覚はよく知っている。昔、カイトをギルドに迎え入れた頃、何度か血をやった時に訪れた感覚だ。

肩口を見れば、確かに。件の下手人はそこにいた。反射的にそれを潰そうにも、「返すぞ」と投げつけられたカイトがマカロフの鳩尾に刺さり、魔法の維持もままならずそのまま島内へ。

続くようにハデスもそこに降り立てば、通常サイズとなったマカロフ。カイトの姿はどこにもなく、衝撃でどこかに飛んでいってしまったのだらう。そしてその手前では待っていたのだらう、恭しく礼をする壮年の男性がひとり。

短く刈り上げた銀髪はまだしも、その側頭部から生える雄牛のツノと背中から生える蝙蝠の翼、腰に携えた雄牛の尻尾がその物を人外だと安に示している。ゆっくりと開けた瞳は真っ赤に染まり、瞳孔は縦に割れた人外。激痛に苛まれながらも、それを見据えたマカロフは間違いなく吸血鬼だと当たりをつけた。

「よくやった、エリゴスよ」

「光栄です、マスターハデス。して、いかように?」

「折角の再会だ。少しばかり話がしたい。お主はどうする?」

「私はアレを探しに参ります。では」

短く別れを告げた吸血鬼。その姿が掻き消えると、横たわるマカロフに視線を向けた。吸血されたというのに弱々しいながらもこちらを睨む瞳は死んでいない。流星は自身が見込んだ男であり、ギルドを48年も支えてきただけはある。

「ハア、ハア……あ、あなたは立派なマスターだった……ワシらに
和」を説き、正しい道へと導いた……」

荒い呼吸のまま、力の入らない身体に喝を入れながらゆっくりと立ち上がるマカロフ。脳裏に蘇るのは、昔のハデスの姿。自分よりも立派で、誰よりもギルドを愛した憧れの人物。だからこそ、何かあったのではと問う。

返答は立つだけでも精一杯だったマカロフへの攻撃。指を軽く振っただけで走る衝撃波にマカロフは大地に沈み、気絶した。それを確認したハデスは背を向けて歩きながら、もう既に聞こえないマカロフへの独白を紡ぐ。

「かつて魔法は闇の中で生まれた。その力は虐げられ、恐れられてきた。やがて魔法は日常化し、人々の文化とも言える時代になった。……だが、魔法の根源を辿り、ゼレフに行き着いた時、私は見た。魔道の真髄というものを」

誰に理解されなくとも良い。全ては魔道のために、かつて所属したギルドの、その子供達に手を上げることさえ辞さない覚悟。

「眠れ……フェアリーテイルの歴史は終わる」

その時だった。油断という隙を見つけたマカロフは最後の力を振り絞ってハデスに突撃する。魔道の真髄だの、興味はない。受け継いだギルドを、愛した家族を失ってたまるものかと、自身の命を顧みない攻撃は、しかし予想していたのだろう。振り返ったハデスの手から放たれた魔法がマカロフの身体を突き抜けた。

今度こそ完全に倒れたマカロフを一瞥することもなく後を去るハデス。しかし、その脚が不意に止まる。

「ふう……エリゴスめ。態と見逃しおったな」

ハデスの周囲から延びる影魔法の数々。四方八方から降り注ぐ、殺意全開で繰り出された魔法の数々を踊るように躲せば、上空から音もなく落下するカイトの姿。

本当ならば、マカロフの助けに入りたかった。しかし、当のマカロフ自身がそれを許さず、隠れ潜んで好機を伺う他なかったのだ。封印に回す魔力も、回復に回す魔力でさえ攻撃に当て、怨敵を討たんと咆哮する。その声は人の声というよりも、獣に近い理性を感じない音。言葉にすらならない怒りを、殺意を、全てを右腕に込める。

「カオス・クロ混沌ノ爪!!?!!?」

渾身の魔力を込めた一撃。間違いなく直撃した筈の一撃。しかし煙が舞う中差し出された腕には傷一つついておらず、姿を現したハデスに怪我を負った様子もない。

「消えろ」

ハデスの腕から放たれた魔力の奔流。避けることさえ叶わず直撃を受けたカイトは周囲の地形を巻き込んだ一撃を受け、ハデスの視界から消えた。

服についた埃を払うと、今度こそハデスはその場を後にする。後に残るは直線状に抉られた地形と重傷のマカロフ。どちらも後には引けない戦いは、また始まったばかり。



「うぐっ……いぼぼっ!!?」

吹き飛ばされたカイト。天狼島の加護がなければ不死者であろうと消滅も免れない一撃を生き延びたのはいいものの、目を覚ました瞬

間口から血の塊を吐き出す。

身体が内から引き裂かれそうな激痛に苛まれる中、脳裏に浮かぶのは悪魔の心臓の飛行船内でのこと。

確かにハデスの首を刈ろうとしたカイト。しかし、ハデスはその魔法を純粋な魔力で押し返したのだ。驚愕するカイトの背後に飛んだ弾丸。それを受けた直後から身体の調子がおかしいのだ。

体内に施していたはずの封印を突き破って表に出た吸血鬼の側面。まるでコップに注いだ水が溢れ出したかのように、魔力が言うことを聞かない。ハデスを強襲できたのは一重に幸運でしかなかった。

「いっふっ!!??ぶえっ……!!?はあ、はあ………」

ようやく収まった吐き気。口の端から垂れる血を拭い、胸の奥底から湧く吸血欲求をなんとか抑えようとするが、その思いと裏腹に今度は涎が垂れる。

「くそっ……血が、足りない………」

朦朧とする意識の中、頭の中を埋め尽くす欲求。それと同調するように牙は肥大化。天を突くように生えたツノは二又に別れ、羽も禍々しいものへと。

無意識の内に身体は近場から香る血の方向へ。遮蔽物のない、抉られた地面を辿り、行き着いた先にいたのは重傷の老人と、その治療をする少女、そして2匹のネコの姿。

誰も彼もが血の匂いを漂わせ、空腹のカイトの鼻腔と腹を刺激する。混濁とする意識の前に目の前の人物が誰なのか分からず、またこちらにも気づかれていない絶好のチャンス。

(血………血を………!!?)

踏み出した脚が大地を割り、彼我の距離を一足飛びで縮めればあと

は簡単。爪を振るえば良いだけだ。それだけで脆弱な人間^{獲物}は傷つき、壊れて、血を流す。

「え?」

少女に気づかれてしまったがもう遅い。天高々と上げた爪を振り下ろそうとした時、呆気にとられた少女と目が合う。瞬間、カイトの動きが止まる。少女の顔の真横、紙一重で止まった爪はそこから動く様子もなく、次第に震え出した。

「うえん、でい……………」

そう、ウエンデイだ。フェアリーテイルの、後輩、家族、仲間。傷つけてはならない、幼い少女。それを破ろうとした自身が信じられず、そして本性が露見したことに恐れ、だというのに頭の隅では未だ血の欲求が傷つけてしまえと囁く。

「ウエンデイ!!?」

「くそっ!!?…こんな時に!!?」

相棒の危機にシャルルが、力及ばないことに歯噛みしながらもリリーがカイト目掛けて飛びつくが痛痒にも感じず。震える爪を信じ難い物を見ると両手で顔を覆ったカイト^{化物}は羽を広げて周囲に風を巻き起こす。

急な突風に煽られて、カイトを中心に数メートルの距離が開けば一目散に逃げ出した。

「ま、待って!!?」

転がるウエンデイが樹々の枝を伝って森の奥へと姿を消すカイトに声をかけるが既に届かない。例え聞こえたとしてもカイトの精神

状態では聞き取る事さえできなかつたであろう。それほどまでに今のカイトは困惑していた。

(な、んで俺は……………!!?)

違う、自分はあるなことをするはずがないと頭の中で否定するが、先ほどの光景がそれを否定する。契約中のマカロフが瀕死だから白紙に、血の欲求に負けて、など言い訳が思いつくが許される事ではない。

(違う、違う……………!!? 私は吸血鬼で、俺はフェアリーテイルの一員で……………!!? ああ、ああ!!?)

「我は誰だ」

混乱する頭はついには自我さえ忘却の彼方に追いやり、吸血鬼としての本能が前に出る。足早に駆けつけた枝の上で立ち止まり、下から聞こえた話し声に目をやる。

フェアリーテイルを殲滅せんと動く悪魔の心臓の下っぱだ。10人ばかりの人数で固まって動き、周囲を警戒しているが頭上には関心を向けていない。

ちろりと、化物が唇を舐め、哀れな子羊たちの上へと飛来した。

天狼島―④

「ま、待って!!？」

地面に転がる自身を嘲笑うかのように遠くなる化物の姿。伸ばした手は届かず、出した声は届かない。

化物に手を出される、という経験はウエンデイの短い人生の中でも初めてで、至近距離からの殺意に身をすくめてしまった。死に瀕したとき、自分でも驚くくらいに世界がスローモーションに見えて、今まさに命を奪わんとする化物の姿が鮮明に見えていた。

ツノや羽に差異はあれど、御伽話に出てくる吸血鬼。血を啜り、夜の闇を好む人外。幼い頃、早く寝ないと吸血鬼が襲いにくるぞと何度もロウバウルに揶揄われた化物が目の前にいた。

ドラゴンのように縦に割れた紅い双眸がウエンデイを捉え、口の端から流す血混じりの唾液が首まで流れる。けれども、ウエンデイがその命を散らす刹那、化物が動きを止めたのだ。

なぜかはわからない。だが、何かに怯えるように顔をくしやりと歪めるとその場から逃げてしまった。

なぜ手を伸ばしたのか、ウエンデイにもわからない。だが、妙な確信が胸の中にあった。

「待って……カイトさん!!？」

カイト。ウエンデイの憧れた人であり、これまでお世話になってきた、優しいギルドの先輩。シャルルからは男の趣味が悪いと言われるが、そんな事はないと胸を張って答えられる。

確かにお世辞にも人間性は良いとは言えないだらう。空気の読めなさや人を煽る仕草など、欠点を挙げればキリがない。

だが、ウエンデイにとってそれを補って有り余るくらいにカイトの良いところを知っている。いつだって誰かの為に行動するカイトを、

こちらを氣遣つてくれるカイトを、下手くそな笑みで落ち込む自身を励ましてくれるカイトを、よく知っている。

そんなカイトが自身に手をあげようとしたなど信じたくはない。しかし、匂いや姿が変わろうとも懂れて目で追っていた人を間違えるはずがなかった。

あんな状態のカイトを一人にしておけないと追いかけてようとしたウエンデイに、待ったの聲がかかった。

「待ちなさい、ウエンデイ!!?それどころじゃないわ!!?」

「今のでマスターの傷が開いた!!?くそ、血が止まらねえ!!?」

カイトの起こした突風に煽られてか、地面を二転三転した重傷のマカロフ。シャルルやリリーの言葉通り、巻いた包帯から血が滲み出していた。

一瞬の迷い。口惜しくカイトの去った後を睨むと、すぐにマカロフに駆け寄り回復魔法を施す。幾分かよくなった顔色と傷口にほつとため息を溢し、疲労から流れる汗を拭う。

「ウエンデイー……!!?」

「ナツさん!!?ルーシイさんも!!?」

何かを追つてこの場から消えていたナツとハッピー、そして別チームで行方のわからなかったルーシイも合流。無事にまた会えた事にウエンデイの表情に歓喜が溢れるが、それどころではないと頭を振る。

「ナツさん、今カイトさんがここに来て!!?」

「なにイ?にやろう、ドコ行ったんだ?」

合流したというのにこの場を去ったと認識したナツが辺りを見渡すが、誰もいない。匂いを頼りに探し出そうとするが、そこにカイト

の匂いはなく煮詰めたように濃厚な血の匂いが森の奥に続くのみ。

そうではないと訂正するウエンデイに、状態のよく飲み込めない3人が頭を傾げた。

「そうじゃないんです!!? なんだか様子がおかしくて……」

「アイツがおかしいのはいつもの事じゃねエか」

「そうじゃなくて!!?」

「どう言う事なの?」

「化物が出たのよ」

慌てるウエンデイでは上手く説明できないと判断したのか、比較的落ち着いているシャルルに問いかけるルーシー。話を聞けば化物がウエンデイたちを狙ったとのこと。その姿は御伽噺に出てくる吸血鬼のようであったと話を聞けば、その正体に納得がいった。

化物の正体には納得いくが、ウエンデイたちを襲ったという点是不可思議だ。少なくともカイトだけに当てはまらず、フェアリーテイルはそう易々と家族に手を出すような人間はいない。ならば確かに異常事態なのだろう。

「私、カイトさんを探しに行かないと!!?」

「ちよつと正気!!? マスターを治療できるのはアンタしかいないのよ!!?」

シャルルから飛ぶ声には、ナツも賛成だ。重症のマカロフと行方知れずのカイトのどちらが重要かと問われれば間違いなく前者だろう。それがわからないほどウエンデイは愚かではないし、ナツ自身カイトならば放っておいても大丈夫だとある意味信頼しているからこそその結論。

それでもと食い下がるウエンデイを嗜めようと口を開こうとしたナツを、ルーシーが止めた。

「ウエンデイ、本気なの？」

「ルーシイさん………はい。マスターの容体は何とも言えません………けど！私はカイトさんを放っておけません!!？」

「そう………なら、行って」

反対されるだろうと思っていた周囲が呆気に取られるが、そんなものお構いなしにルーシイはウエンデイと目線を合わせて言葉を続ける。

「でも、これだけは約束。絶対に後悔しないこと。アイツが何であろうと、受け入れてあげて」

「お、おい」

「いいから!!？応急処置くらいならあたしにだって出来る、だから行って!!？」

「っ、はいっ!!？」

ルーシイに背中を押されて森へと駆け出すウエンデイ。それを追いかけるシャルルを横目に、納得がいかないとばかりにナツが不貞腐れていた。

「イーのかよ?」

「言ったでしょう?応急処置くらいならあたしにだってできる。それに、いつまでも隠せる事じゃないから」

森の中へと消えていくシャルルの後ろ姿を眺めながら、ルーシイはそう告げる。憧れていた人物の正体を知り幻滅して欲しい、などとは思っていない。けれど、それを知らなければ彼女たちの仲はいつまでも進展しないだろう。

おせっかいだっただろうか、と内心自嘲しながらまずはマカロフをなんとかしなければと喝を入れるのであった。



森を駆ける。樹々を伝い、時に地を蹴って、日差しの弱い森の中を彷徨い歩く。偶に見つける人間に、頭の中にあるのはただ一つの疑問を投げかけては血を啜る。

「私は誰だ？」

「ヒツ、ヒイツ!!？」

答えない。

「僕は誰だ？」

「聞いてねえぞ、こんな化物がいるなんて!!？」

答えない。

「我は誰だ？」

「知るかよ、クソっクソツ!!？」

答えない。

「俺は——」

誰なのだろう。

頭の中にある記憶は酷く混濁していて、どれもこれも容量を得ない。誰かから名を貰ったようではあるが、しかしその名さえ思い出せない。

誰かが笑っている。

誰かが泣いている。

誰かが喜んでいる。

誰かが怒っている。

私は、我は、誰かに乞われて、願われて、そして——

「ああ……」

血だ。血の海だ。

山だ。屍の山だ。

混濁した記憶の中で鮮明に写ったものは屍山血河の中で佇む私と、手を差し伸べる誰か。

混沌とした記憶の中で一等輝くのは、こちらに微笑む2人の少女。ああ、彼の者は誰だ？

ああ、彼女たちは誰だ？

バケツをひっくり返したような雨が降り注ぎ、この身を濡らす。陽の光が消えたことで、行動範囲も森から外へ。しかし、やる事は変わらない。問いかけ、俺の正体を知る。私の存在理由を知ることだけが、今の我には必要な事だ。

そうしなければきつと、私の自我は崩壊し、ただ血を求めるだけの化物下衆に成り下がってしまうという確信があった。

早く早く教えてくれ。我が身のことを。私の存在を。俺の名を。



「はあ、はあ!!?」

「ちよ、待ちなさいよ!!?」

慣れない森を走るウエンデイの後を追うシャルルの声さえ届かず、ウエンデイは唯ひたすらに脚を動かす。大木とも言うべき樹木が乱立する森は走るには向いておらず、カイトの後を辿ろうにも森の中は濃厚な血の匂いが充満していて上手く嗅ぎ取れない。

だからこそ我武者羅に、遮二無二に、ウエンデイは走る。

「どい……どこにつ……」

「このっ!!?いい加減になさい!!?」

「あう!!?」

森を抜けるまで全く聞く耳持たずのウエンデイに我慢の限界が来たのだろう。その小さな背中にシャルルが体当たりすればようやくやくウエンデイが脚を止めて転がる。降り出した雨でぬかるんだ地面に

転がり泥まみれでも尚、カイトの搜索を諦めようとしないうエンデイの頭を強く叩けば恨めしそうに睨まれた。

「シャルル、邪魔しないで!!?」

「するに決まってるでしょう!!?あの化物探し出してどうするつもり!!?殺されに行く様なものよ!!?」

ここまでの道のりで地に倒れ伏す悪魔の心臓の構成員達の姿をウエンデイも見たはずだ。死んではいけないが瀕死の重症で身動きの取れない姿を見たはずだ。

そんなものに近づこうとする相棒を止めようとするシャルルは間違っていない。そも、戦闘が不得意のウエンデイが今できることはマカロフの治療。ルーシイの後押しがあったとは言え、搜索に出る事事態間違っている。

「わかってる!!?でも、放っておけるはずないでしょ!!?」

「放っておきなさいよ!!?相手は化物よ!!?」

「違う!!?あれは化物なんかじゃない、カイトさんだった!!?」

「だったら尚更よ!!?今のアイツに近づくのは危険だって言ってるの!!?」

「シャルルの分ならず屋!!?」

「ウエンデイの死にたがり!!?」

互いに興奮状態だからこそ自然と悪態が口から出てきて、それでも2人は口論を辞めない。ウエンデイもシャルルの気持ちはわかっているのだ。自分の役割も理解している。

しかし、あんな悲しそうな瞳をしたカイトを放ってはおけないのだ。拒絶されることを恐れる様な、それでいて独りになることに怯える、そんな感情を露わにした瞳を見て放っておけるわけがなかった。

かつて育ての親のドラゴンが突如としていなくなり、泣きながら彷徨い歩いたウエンデイ。その時の自分と嫌に被るのだ。今よりも幼

き頃とはいえ、あの時の悲痛はよく覚えている。

だからこそ手を差し伸ばさなければならぬ。ジエミラールトに助けられた時の様に。エルザにギルドに誘われた時の様に。なにより誰かの為に手を差し伸ばすカイト憧れのの様に。

「ふむ、喧嘩はよくない」

ふわりと、いつの間にか。言い争う2人の側に立つ壮年の男。異形のツノや羽、尻尾があることから間違いない人外。降り頻る雨など気にもせず、顎に手を当ててこちらの様子を伺っていた。驚きのあまり声も出せず固まる2人を見て満足そうな笑みを作ると、男は手を差し伸ばす。

「うむ、やはり喧嘩はよくない。ほら、立ちなさい」

差し出された手を取ることを、2人はしない。顔は笑みを作っているが2人にはわかる。胡散臭い笑みを浮かべるカイトよりも尚一層怪しく、その身から湧き立つ感情に友愛など一切込められていない。手を取れば最後、逃げることなど叶わないだろう。

警戒されているのがわかったのか、男はため息をこぼすと差し出した手を顎に当てる。

「上手くいかないものだ……まあ、よいだろう。所詮は余興でしかない」

「っ!!? ウエンディ、逃げるわよ!!?」

目の前の男は危険だ。一刻も早い避難をとシャルルが横を振り向いた瞬間、目を疑った。

「ウエンディ!!?!!?」

「あ……え……?」

顎に当てている手とは反対、自然と向けられた指先が剣となりウエンデイの腹部を貫いていた。何が起きたかわからず、患部を見て事態を把握したのか遅れて吐血して、背中から倒れる。

シャルルが慌てて駆け寄るが、無造作に引き抜かれた傷口から溢れ出す血。ウエンデイの回復魔法は当然ながら術者本人に異常があれば使えない。つまりは自身に対して回復は行えないのだ。

そうでなくとも刺されたショックと激痛で過呼吸になるウエンデイにその余裕すら生まれず、頭の中はパニック状態。傷口を必死に抑えるシャルルの声さえ遠い。

「ウエンデイ!!? しつかりして、ウエンデイ!!?」

(い、たい……………)

シャルルの小さな手では圧迫は間に合わず、雨に混じって血が地面に広がる。さながら血の海に沈むウエンデイを一瞥することなく、男は辺りを見渡す。下から香る血の匂いに釣られそうになるが、コレは餌であり、贄だ。手を出すわけにはいかない。

ぼんやりと、激痛の最中自分は死ぬのかと曇天の空を見上げながらウエンデイは思いを馳せる。

化猫の宿での思い出、フェアリーテイルでの思い出、憧れの人の背中。走馬灯の様に駆け巡る記憶の中で、一際思い浮かべるのはカイトの事。

(もつと、お話したかったなあ……………)

もつと声が聞きたかった。

もつと姿を見ていたかった。

もつとこちらを見て欲しかった。

もつともつともつと……………。

そこまで考えて、ああ、とウエンデイは独白する。なんだ、自分は

カイトに憧れてなんかいなかったのだと。

(私、カイトさんの事、好きだったんだ………)

今となつてはもう遅い、叶わない恋心。淡く儂く消えゆく恋慕。冷たくなつていく指先のように、このまま冷え切つてしまうのだろう。

「ねえ、うそ!!?目を開けてウエンデイ!!?」

身体を揺さぶられているの感じる。けれど、もう無理なのだ。瞳が重く、持ち上げる力も残っていない。ああ、せめて、最後までらしいには愛しい人の姿をと、心地よい闇に身を委ねようとするウエンデイ。

けれども、直後に顔に降りかかる大量の水。それが血液だと鉄臭い香りが抑えてくれた。反射的に咳き込むウエンデイの意識は次第にはつきりとしていき、覆い被さる様にこちらを見やる異形の姿を捉えた。

姿が変わろうと、その身が血塗れであろうと、見間違えるはずのない、朦朧とした意識の中で恋焦がれた人。

「答えよ。我は誰だ?」

天狼島―⑤

「か……いと、さ……かい、と、さん……」

助けた少女に自身の事を問えば、そう返された。雨とは違う水分を目から溢しながら、まだ傷口が癒えていないというのにしきりにカイトトという言葉を繰り返す。側にいるネコが喋るなど諫めているが、どうやら意味はないようだ。

「か、いと……かいと……カイト……?」

少女の言葉を反芻し、脳に送り込む。しつくりとはこないが、嫌に懐かしいと思える音の響き。これが求めていた答えなのだろうか。

「いえ、いえ!!?違いますぞ、我が王よ!!?」

頭を捻っていれば、近くにいた同族が否を告げる。身振り手振りは大袈裟で、さながら道化役者のようにも見える同族は胸に手を当て懇願するように言葉を紡ぐ。

「貴方様こそは我らが主人!!?魔を導く先導者!!?悪鬼の首魁にして君臨するお方!!?即ち――」

「魔王!!?」

「ま、おう……?」

「何言ってるのよ、そんなの御伽噺の中の存在でしょ」

「何を言う。御伽噺であるものか。人間により討たれたとはいえ、我が王は不滅。王の因子と依代を持って今ここに蘇ったのだ!!?」

ありえないと叫ぶネコの言葉を、同族は否定する。魔王というのはわからない。だが、嫌にしつくりとくるのも確かだ。彼ならば、我が存在を知っているのだろうか。

無意識のうちに踏み出す一歩。だが、袖に微かな抵抗を感じて止まる。振り返れば、弱々しくも袖口を握る少女の姿。行かないでと懇願するような、親を求める子のような縋るような瞳に、自然と二歩目を踏み出す事を諦めた。

「カイトさん……………」

またその名だ。その名を呼ばれるたびに身体は鉛のように重くなる。まるでそちら側には行かせないと抵抗するかのような我が身。だが、例えその様な状態であろうと、少女を振り払うことは簡単だ。軽く手を振り払えばいい。

引き離そうと袖を引っ張ろうとした刹那、少女は言葉を紡ぐ。

「私は、貴方の事を知っています」

「ギルドの誰よりも優しくして」

「約束事に厳しくて」

「笑顔がちよっと下手で」

「方向音痴でよく道に迷ったり」

「お料理が好きで、いつも美味しい物を作ってくれたり」

「誰よりもギルドを愛している」

「私の、大好きな人です」



ウエンディの独白を聞き、壮年の吸血鬼トリーエリゴスは失敗した

と悟る。即興とはいえ上手くいつていただけに後悔は深い。

たかが人間だと侮りすぎたかと反省する間もなく飛ぶ様にして後退した刹那、足元から繰り出された影の槍が空間を貫く。

「あー……そうだ、そうだよ、そうだったね」

「ぐっ!!?」

続け様に放たれた弾丸のように迫る黒い杭を手ではたき落とせば、背後から伸びた影の手がエリゴスを拘束。脱出を試みるよりも早く両側から伸びた槍がエリゴスを中心に交差した。

「おしいちゃんマカロフからもらった、大事な名前。俺を人たらしめる楔。フェアリーテイルの道化にして、人と共に歩む事を決めたドラクル悪魔」

鬱憤を晴らすかの如く、エリゴスの体内で影が縦横無尽に暴れ狂い、最後には大量の槍となつてその口から天を突くように伸びる。飛び立った鮮血を頭に浴び、それを拭う様に重くなった前髪を後ろへと掻き上げた。

「俺はカイト。カイト・オールベルグ。魔王なんて知らないよ」

止めとばかりに内側から膨張した影がエリゴスの身体を突き破り、惨たらしいまでの槍の花を咲かせる。再生はするだろうが、これで少しは時間が稼げるだろうと安堵をひとつ。そして袖口を握るウェンデイの手にそつと手を重ねた。

「ありがとう、ウェンデイちゃん。感謝なんてしても足りないくらいに、君には助けられたよ」

「……………」

「あれ? ウェンデイちゃん?」

返事がないことに不審に思えば、ウエンデイは顔を真っ赤にして俯いていた。好意を自覚し、怪我と朦朧とした意識の中勢いで告白まがいの事をしたのだ。返事はもちろん、顔を見ることさえ恥ずかしい。話が進まないと見かねたシャルルが咳払いをひとつ。

「んん！色々聞きたいことがあるけど……アンタ、アレの知り合
い？」

「さあ？同族って事はわかるけど、見た事はない顔だねえ」

降り頻る雨に紛れて漂う赤い霧。それらが集い形を成すと現れるエリゴス。あまりにも復活が早いとカイトは内心舌打ちを溢す。

かつて戦ったレプスとは違い、エリゴスは成人の吸血鬼。歴が違えば内包する魔力もこれまで啜った血の量も段違いだ。一筋縄ではないくはずもなく、そしてウエンデイたちを逃す余裕さえないだろう。

「さてさて、お前がどこの誰だか知らないけど、フェアリーテイルに
手を出したんだ。滅ぶ覚悟はあるんだろうねえ？」

「ふむ、これ以上の投与は逆に危険……また一からやり直した方が
早い。そうなると、母体はどうしたものか」

「カッカッカ、会話さえしてくれないか！」

言葉を切ると同時に展開された影の拳の数々。いつもより調子が
いいのか、その数は視界を埋め尽くすほど。逃げ場さえ失う物量を、
エリゴスはそれら全てを爪で破壊する。

やはり小手先だけでは無駄かと判断したカイトは迎撃に意識を取
られている隙に大技を繰り出した。

「デーモン・ファイスト偽・魔王百裂拳!!？」

作り出したのは影の巨腕の群れ。指先ひとつで指示を出せば津波
の様に群がる攻撃。純粋な質量による圧倒的な一撃は、しかし思いも

よらぬ形で破られた。

「テイクオーバー ウェポン・ソウル」
「接収・武器魂」

一閃。

一瞬の煌めきと共に、地形を変えるほどの怒濤の攻撃が一瞬にして破壊された。唾然とするカイトの腹に一筋の線が刻まれ、そのままずるりと上半身が崩れ落ちる。落下する中、視線を外さなかつたカイトは確かに見た。エリゴスの腕そのものが大剣になっっている様を。

接収魔法は対処の魂を読み取り、それをその身に宿す魔法。故に模倣する相手は生物でなくてはならない。だというのに、目の前の吸血鬼はそれを覆したのだ。

それを察したのか、訝しげに眉をあげたエリゴスは刃を撫でながら説明を。

「なんだ、あやつから何も教わっていないのか？魂とは生物に限らず、全てのモノに宿っている。我々吸血鬼ならば、それを感知することも可能。この身に宿すことなど容易い」

「カツカツカ、誰のことを言ってるかわからないけど、慢心すぎだよ!!?」

遅れて倒れた下半身をくつつけながら、カイトは魔法を発動。エリゴスの背後からいくつもの頭を持つ蛇が襲いかかる。だが、エリゴスはそれを一瞥することなく肘を背後に向けた。肘の先端から覗くのは銃口。2、3度の発砲、発射されたのは弾丸ではなくエリゴス自身の骨。着弾と同時に骨に込められた魔法が発動し、内側から外へといくつもの刃が魔法を粉碎した。

「ふむ、知らぬはずはなからう。我が弟にして、私の後をついだヴァル・コルヌトウスⅡアルミラージュの事を」

その言葉にぎくりと、ない筈の心臓が跳ねた錯覚を覚える。その名はよく知っている。かつて当主として君臨し、仕えていた吸血鬼。人間に攻めいられ命を落とした、滅びた存在。

カイトの反応を見て死んだことを察したのだろう。エリゴスは顎に手を当てると再度思考する。

「ふむ、となると私が最後の吸血鬼となるか……まあ、構わぬ。王さえ復活すればどうとでもなる」

「影ノ都!!?!?!?!」
シャドウ・アスガルド

同時並行で行っていた仕込みも終了。カイトの足元の影が広がり、そこから街が作り上げられる。小手先だけの技は通用せず、物量や不意打ちも効果が薄い。ならばと、全方位からの強襲。作り上げた街全体が殺意をもってエリゴスに襲いかかる。

影が槍となり、刃となり、獣となり、腕となり。上空から降る雨にも負けない弾幕の数々。さしものエリゴスも両腕を剣にしても全てを捌くことはできないのか、いくつか致命傷を負うがそこは吸血鬼。すぐさま再生してしまう。

カイトもそこは織り込み済みだ。しかし、吸血鬼といえど無限に再生することはできない。それこそ魔力が尽きれば殺すことすら可能だ。弱点である銀武器や陽の光が使えない以上、有効な手はこれしかない。

「ふむ………」

攻撃を捌きながらちらりと足元を見るエリゴス。傍目では見分けのつかないが、妙な違和感を感じている。そしてそれが確信に変わった時にはすでに遅い。

「捕らえたよ!!?!」

カイトが掌を握れば、それに合わせて街全体がエリゴスを中心に球体となる。内部では攻撃が反響し、逃げ場もない状態。後は煮るなり焼くなりなんなりと、できる状態であった。

だが、一瞬の悪寒。本能が告げる警鐘。

「きゃっ＝っ？」

反射的に背後にいたウエンディとシャルルを引つ掴み大きく横に飛び退く。そしてそれが命運を分けた。

「ウソでしょ……………」

大地を揺るがす轟音と共に魔法が縦に裂かれ、地面は蜘蛛の巣状に大きくひび割れる。特に酷いのは直線状に走った衝撃波だろう。飛び退いていなければ今頃、ウエンディとシャルル諸共無事では済まなかったほどの攻撃。

「ふむ、やはり剣は手で持つに限る」

悠々と脱出してみせたエリゴスの両手には人の背丈程はある2振りの大剣。魔法に囚われたエリゴスは切断した両腕を大剣へと変え、吸血鬼の膂力を待つとして破壊してみせたのだ。

さて、どうしたものかとカイトは思案する。今の所得意である遠距離での戦闘を続けているが、このままでは間違いなくジリ貧。隙を突いてもその身で受け止めて反撃されるのみ。頭の中でいくつもの選択肢が浮かび、そしてそのどれもが効果なし、もしくは不可能だと否定する。

唯一勝機があるとすれば、接近戦での吸血。しかし、他と比べてと言うだけであり、可能性自体は低い。カイト自身接近戦の苦手があるが、何よりも自力が違いすぎる。それこそ、大人と子供ほどの差があるのだ。

諦めが脳裏を掠めた瞬間、カイトの身体から力が湧き上がる。

「アームズパリーニア剛腕瞬足!!?」

その名の通り腕力と機動力を上げる魔法は側のウエンデイが放つたもの。魔法を使うのも辛いだろうに、息も絶え絶えでも尚、ウエンデイは諦めていなかったのだ。

「ウエンデイちゃん……………」

「はあ、はあ……………私には、これくらいしかできないけど……………信じてます。カイトさんなら、勝てるってこと」

「ウエンデイ、アンタ……………」

無理をするな、と檄を飛ばしたいシャルルだったが、無理をしなければ勝負にすらならないこともわかっていて、こんな時に力にならない非力な自身に歯噛みしつつ、少しでもウエンデイの助けになればと体を支える。

「……………勝ちなさいよ」

「カッカッカ……………ああ、もちろん」

ここまで思いを託されては苦手だのなんだの言ってられない。自身より幼い子が頑張っているのに、諦めるわけにはいかないのだ。

首を鳴らしながらウエンデイたちから離れると、片方の剣を大地に突き刺し空いた手を顎に当てるエリゴスと向き直る。彼我の距離はおおよそ30メートル。吸血鬼ならば一足飛びで間合いを詰める事のできる距離だ。

「待ってくれるとはねえ。案外律儀なところもあるんだね」

「いや、なに。再考の余地があるやまと観察してただけだ。また一から作り直すのも手間なものだな」

「カッカッカ、だと思つたよ。それで、再考の結果は如何かな？」
「ふむ…………念の為、生け取りにはしておこう」

カイトが右に飛び退けば、次いで急接近したエリゴスの大剣が大地を割る。反撃をと身構えるが、大地ごと振り回した大剣。その軌跡に沿って石の礫がカイトを襲う。

左右どちらに逃げようとも追撃を浴びせられると察したカイトは影の中に退避。そのままエリゴスの背後に回ると拳に魔力を纏わせる。

カオス・インパクト
「混沌ノ一撃!!?」

「ふんっ!!?」

鉄さえ陥没させる魔法の一撃。だが、エリゴスは大剣を背後に回し防御に回す。完全に受け止めることは不可能だったようで大剣がへし折れるが、ダメージは微々たるもの。残る大剣を振り回してカイトの身体を裂いた。

しかし、一瞬の揺らぎの後カイトの身体は黒く染まり、泥のように溶けてしまった。そして、振り切った体勢では一瞬の硬直が生まれてしまう。エリゴスの足元から現れたカイトは口内に溜めた魔力を存分に放つ。

カオス・ワツタス
「混沌ノ息吹!!?」

白と黒の魔力の奔流はエリゴスの身体を包み、過不足なくその威力をぶつける。だが、案の定とも言うべきか。煙を割いて反撃するエリゴスに痛手はない。振り下ろした大剣は大地を裂くが、一瞬早く空中へと脱出したカイトには届かない。

「ふむ、面倒ではあるな」

大剣を握る手とは反対側の腕を銃へと変え、弾丸に似せた骨を空中のカイトに向けて放つ。食らえば最後、骨に込められた魔力が発動し、カイトの五体は粉々になるだろう。防御魔法での回避も悪手だと判断し、地面から昇った影の手にそれぞれ受けさせる。

受け止めた影の内側から複数の剣が飛び出して魔法を破壊するが、カイト本体にはノーダメージ。宙で消える魔法を尻目に、腕に込めた魔法を放った。

「カオス・クロ
混沌ノ爪!!?」

「剛剣」

手持ちの大剣では受け止めることは不可能と判断したエリゴス。それを捨て右腕を引きちぎると、その腕が姿を変える。それは俗に言うツーハンドソード。巨大さ故に振り回すのにも一苦労する反面、その威力は甲冑ごと断ち切る程の威力を持つ大剣。

エリゴスはそれを背中まで大きく振りかぶると、迫り来る魔法に向けて振り下ろした。瞬間、魔法はもちろんのことその衝撃で地に落ちた雨が再び舞い上がり、遠くの樹々が枝を揺らす。

突然の暴風に煽られカイトは墜落、そしてその隙を見逃さずエリゴスの接近を許してしまった。

「ぶつぎりだいたいばたち
偽・仏斬大刃太刀!!?」

振り下ろされたエリゴスの一撃を、寸前のところで展開した二振り
の影の刀で受け止める。だが、ただでさえ尻餅について力の入りずらい状況。弾き変えそうにも上手くいかず、拮抗させるのに精一杯。

「ふむ、魔法の腕は良いが……吸血鬼の力は存分に奮えておらず。やはり、有り合わせの母体ではこの程度か」

「ふぐつ!!?」

精一杯のカイトとは反対に、余裕の表情のエリゴス。これまでの打ち合いで落第の判断を下し、手抜きは不必要となった。片足を棍に変えると、未だ防ぐのに手一杯のカイト目掛けて蹴り放つ。

面白いように転がるカイトを尻目に、エリゴスの視線はウエンデイへと。依代としての価値が消えた今、せめて贄の確保でもしないことには割に合わない。

エリゴスにとって悪魔の心臓の目的である大魔法世界――非魔導士を殲滅した、魔導士のみの世界など興味はない。ゼレフの捜索には手を貸してもいいとは思うが、第一目標は魔王の復活だ。

そのためならばハデスに仕えることも厭わず、依代の準備に何十年かかるかと耐えてみせる。全ては魔王のために。

「ツ!!?ウエンデイ、逃げるわよ!!?」

「はあ、はあ……………だい、じょうぶ……………」

「何がよ!!?あんなやつと戦えるわけないでしょ!!?」

「だいじょうぶ……………だから……………」

煮え切らない事を繰り返すウエンデイに業を煮やしたシャルルは羽を広げる。自身のMAXスピードならば、逃げ切れるはずだと確信して。だが、すぐそばに着弾した骨から生まれた剣の山が逃げ道を阻害する。逃すつもりは毛頭ないらしい。

「くつ……………!!?」

怪我と疲労で満足に動けないウエンデイに、戦闘はからつきしのシャルル。逃げ道は塞がれ、恐怖を煽るようにエリゴスの足取りはゆっくりだ。何もできない自分に悔しくて震えるシャルルの肩を、そつとウエンデイが抱きしめた。

「大丈夫、だよ、シャルル……………絶対、勝つって、約束してくれたから」

「そんなこと言ってる場合じゃ……………つ!!?」

すわ、恐怖のあまり気が動転でもしたのかとシャルルは焦る。しかし、ウエンデイの瞳に怯えの色はなく、信頼を込めた声色で言葉を紡ぐ。

「お願いします、カイトさん……」

刹那、エリゴスの足元に闇が広がる。黒く、昏く、どこまでも黒い闇黒。それは見渡す限りの大地を闇へと還す、広範囲殲滅魔法。天狼島の実に4分の1を覆い尽くしてしまった。

「まだ、動けたのか」

歩みを止めてゆっくりと振り返れば、そこには荒い息で地面に手を付くカイトの姿。ウエンデイの支援魔法も効力を失い、残された手はこれしかないのだと自身に言い聞かせる。

範囲が広い上に、敵味方関係なく襲うこの魔法を制御しきれぬのか。そんな不安がよぎるが齒を食いしぼり、全神経を魔法へと注ぐ。

「呼び起こされるは666の獣、666の災厄。全てを呑み込む禍……」

カオス・インヴェイジョン
「混沌ノ侵食」

天狼島―⑥

それは異様な光景だった。

「なんだ、これは……………」

突如として現れた、地面を覆い尽くす闇。どこまでも黒く、どこまでも続くような、心を掻きむしるような闇。

悪魔の心臓煉獄の七眷属がひとり、ラスティローズは困惑していた。

フェアリーテイルを殲滅するため、彼が攻め入ったのは仮説テント。そこにはこれまでに負傷したガジル、ミラージェーン、エルフマン、エバーグリーンに加え、看病に徹していたレビイとりサーナ、リリーのみ。

戦えるメンツが3人の上、ラスティローズの扱う魔法“想像のアーク”は術者の想像したものをも具現化させる強力な魔法。終始優勢だった戦闘に水を指したのは信号弾に気付き戻ってきたフリードとビックスロー。

2人の参戦により拮抗しだした戦闘だったが、突然の怪現象に足を止めてしまう。それはフェアリーテイル側も同じようで、何か仕掛けてきたのかと警戒を露わにしていた。

「なにこれ……………」

「アイツの魔法……………ではないようだが」

「氣いつけるよ、フリード。何が起きても不思議じゃねえ」

「……………ヒツ!?」

それを最初に認識したのはレビイだった。ぱちりと、足元の闇から紅い瞳が世界を覗く。ひとつ、ひとつと、加速度に瞳は増えていき、嘲るように、恨むように、無関心に、訝しむように、それぞれが世界を

「蒼穹の剣よ、我が敵を斬り払え!!？」

自身の周りに想像したのは水晶のように蒼く透き通る剣。その数30本。それら全てが地面の闇に向けて射出され突き刺さるが、魔法は消えず。紅い瞳も獲物を見定めたのかラスティローズに向けられたまま。

これでは効かないかと、更に破壊力のあるものを想像しようとした瞬間、ラスティローズの背後を闇から生まれた獣が阻む。

「ぐはっ!!っ..」

獣の頭を持ち、その姿は御伽噺に出てくる獣人のよう。けれども肉体は闇で構成され、紅い瞳が身体中に張り付く様は不気味でしかない。背後を突かれたラスティローズを獣は叩き落とし、不気味な笑い声を上げながらまた闇の中に潜る。

落下の痛みで想像力が途切れ、無駄な魔力を消費した。普段であるならば心^{カケラ}が震えると溢すラスティローズも、ここまでコケにされては苛立ちを覚える。

とにかく反撃をと顔を上げた瞬間、目の前に闇でできた大小様々な獣の姿を見て呆け、そしてヨダレのように口元から闇を垂らす光景がこれから起こることを容易く想像させてしまった。

「や、やめ……………っ!!っ?」

悲鳴、絶叫、そして咀嚼音。ギルドに所属している以上、そういった悲惨な場面は目の当たりにしてきたフェアリーテイルの面々。だが、この光景は目に毒だ。顔を背けるが耳に入ってくる音はその光景を容易に想像させてしまい、あまり意味を成していない。

そうして、術者が死亡したからだろう。面々を拘束していた塔が空気のようになくなり、地面に降ろされる。しかし、それは同時に獣たちのテリトリーに侵入してしまったということだ。

「やった、動ける!!?」

「気を抜くな!!?来るぞ!!?」

フリードの言葉通り、ラストイローズを腹に収めた獣たちの視線は次なる獲物へと。幸いなことに、仮設テントに寝かせている面々には興味を示しておらず、襲われる様子はない。

だが、絶対の安全というわけではない。注意がそちらに向いた瞬間、狩りやすい獲物から仕留める可能性はゼロではないのだから。

獣の咆哮が合図となり、フリードたちは痛む身体に鞭打って戦闘を開始する。そして、その激戦故にフリードたちは気がついていなかった。

「はあ………いか、なきや………」

ダメージと疲労で困憊のミラジエーンが仮設テントから抜け出していることに。



「兄上!!?」

背後から聞こえた声に足を止め、そちらへ振り返る。樹々を掻き分け現れたのは自らの弟の姿。急いできたのであろう、身体のうちちに葉や枝を付けている。

神経質な弟の意外な姿を見た、と切羽詰まった様子の子の弟は反対に、呑気な事を考えていれば弟は叫ぶ。

「なぜ……なぜなのですか、兄上!!?なぜあんなものを作り出したのですか!!?!!?」

「ふむ。なぜ、か………」

弟の言うことに心当たりがついたのか、納得のいったとばかりに顎に手を当てる。地下牢に幽閉していた人間、その内の1人との間に設けた子のことだ。

別に彼自身、人間に欲情したからだとかそう言ったつもりで作ったのではない。かつて大陸に君臨した魔王、その依代になるのではないだろうか。

吸血鬼の間に残された文献では、彼の魔王は竜と人の魔から生まれたという。ならば、名残とはいえその因子を受け継ぐ吸血鬼と人の間から生まれた物は依代に相応しいのではないかと考えたのだ。

耐え難い苦痛を抑え込み、使用人にも内密に進めた計画の先に生まれたのは、吸血鬼にも人にも慣れない半端者。母親の腹を食い破り、産声を上げたものの、胸中には落胆しかなかった。

当然、この行為は禁忌だ。吸血鬼の祖先が決めた絶対の掟。それを破ったのだから自身は排されなければならない。先代も息を引き取り、残る吸血鬼は自身と弟、そしてその下の妹の3名。それを自身の手で減らすのだから、弟の葛藤もわかっている。

「理由がなんであれ、私を肅することに変わりはないから」

だからこそ、腕を広げ抵抗の意思さえ投げてしまう。せめてもの弟への贖罪であり、これもまた検証のひとつなのだから。

「ぐっ………オオオオオオ!!？」

迷いを捨て、掟に順守するために、弟は腕に纏った血を彼に突き刺す。一度の攻撃では死なず、何度も何度も。返り血で弟は赤く染まり、彼自身も大量の魔力を消費したせいで疲労困憊。

「やらばだ、兄上!!？」

止めとばかりに繰り出された袈裟斬り。一瞬の静寂のあと、背にしていた霧の壁の向こうへと彼は倒れた。肉親を屠り、新たに当主の座に着いた弟は心に決める。せめて、せめて兄上が残した落とし子だけは。あの子には罪を負わせてなるものかと。

「ぶふっ……くく、はははっ!!?上手くいくものだなあ!!?」

そんな弟の事など梅雨知らず、仰向けになりながら高笑いする彼。自身の意思では出られない霧の壁をどう越えたものかと考えていたが、予想以上にうまくいき笑いが止まらない。

暫く笑い、ようやく落ち着いたところに天を仰ぎながらこれからどうするかを考える。

「さて、まずは人を喰らおう。依代の調達はそれからだ」

ゆつくりと起き上がり、口を舌で濡らす。人を襲うため闇に紛れる吸血鬼の姿を、星空だけが目撃していた。



(…………ふむ、なぜ今になってこんなことを)

故郷である霧の谷を出た時のことが、ふと脳裏によぎった。その後、人間の世界を回ったはいいが、依代に相応しい母体は見つけられず悉く失敗に終わってしまった。見捨てた筈の依代が再び目の前に現れたのには柄にもなく高揚したものだ。

だが、なぜ今になってこんな事を思い出すのか?迫り来る攻撃の数々をいなしながらエリゴスは頭の中で疑問を浮かべる。それを人の言葉で走馬灯ということは、知らない。

「フツ、フツ、フツ……………!!?」

全神経を集中して、カイトは魔法に魔力を込め続ける。名目上魔法とはいうが実際の所、ただの魔力の暴走に近い。一度発動してしまえば範囲内の術者以外の生物に攻撃する、使い勝手の悪すぎる魔法だ。操作性など皆無に等しく、精々視界の範囲内を少しだけ操れる程度。今は視界の端にウエンデイを納め、湧いてくる獣を徘徊されるだけで済んでいるが意識を逸らした瞬間、間違いなく襲いかかる。鼻から血を垂らし、エリゴスの様子を伺うカイト。ウエンデイたちを襲わないようにしているためか、数はそちらの方へと集中しており、徐々にではあるが押されている様子。

「りよふ脊斧」

腕を引きちぎり変形させるのは、刃の部分だけでも1.5メートルはある巨大な斧。その一振りで暴風が舞い、範囲内の獣を悉く切り裂いてゆくがその数は減らない。

ならば湧き出る闇を消し飛ばそうと地面に斧を振るうが、まるで水面に打ちつけたような手応えのなさ。そのまま御伽噺のように闇の中に呑まれてしまう斧を一瞥する間も無く、エリゴスの喉笛に獣の牙が突き刺さる。

「こっしだん骨指弾」

首にぶら下がる獣に骨を打ち付け、内部から飛び出す刃物の山。そのまま10本の指それぞれを銃口へと変え今度は術者であるカイトに向かって撃つが、到達する前に湧き出した獣たちに阻まれる。

ならば、直接叩くべきかと脚に力を入れた瞬間、その脚が断ち切られた。股下にいる、両手が刃物になったイタチの仕業だ。相変わらずその姿は闇に覆われ、口もないのにその身体に纏わりつく紅い瞳が嘲笑を浮かべていた。

瞬きの内に回復する脚だが、体勢を崩した今まともな反撃はできな

い。そこを狙って群がる獣たち。狼のような獣の牙が、二足歩行する虎の爪が、牛頭の巨漢の持つ斧が、それぞれ得意な獲物をエリゴス目掛けて振るう。

攻撃自体、差して痛痒にも感じない。だが、それに伴う回復には魔力を消費する。回復する側から破壊され、遠ざけようと骨や筋肉を刃に変えようとも新たな獣の波がすぐさま補充されるため意味を成さない。

(これは……………)

不味い、と焦燥を口の中で転がす。絶え間ない攻撃と回復で自分の中の魔力が湯水のように消えていくのを感じる。

「総剣、抜刀——!!?」

——鉄針灰塵!!?

それは全身隈なくを刃へと変化させる大業。爪を、四肢を、骨を、筋肉を、関節を、その全ての刃を限界まで伸ばした姿は針山地獄さながら。周囲を大きく切り裂き、若干の猶予を得ることはできた。この隙に本体をと体勢を立て直そうとした刹那、上から振り下ろされる巨腕に気がつく。

「沈めエ!!?」

その正体はかつて霧の谷で召喚された大血の巨人アトラスそのもの。模造品とはいえ、その巨大さは本物と遜色なく、気がついた時には逃げ場もない。闇の中に沈められた場合、待っているのは無限に等しい攻撃。周囲の存在全てが攻撃となり、対象を魂尽きるまで殺し尽くす。

鼻から流れた血が口を伝うがそこに気を向ける余裕もなく、勝利を確信するカイト。だが——

「……は？」

遙か彼方、天狼島の中心に座する天狼樹が音を立てて倒壊すると同時に、広がっていた闇が綺麗に消え去る。そして、抗いようのない虚脱感にカイトを含め、ウエンデイ、シャルルも倒れてしまった。

(なに、が……………?)

カイトは知るよしもないが、天狼島はフェアリーテイルの紋章を持つものを守護する魔法がかけられており、天狼樹がその起点となっていたのだ。だが現在、七眷属の1人アズマの働きによって倒壊した天狼樹はその効果を反転。紋章を持つものの魔力を吸い上げるようになってしまったのだ。

「アズマ、か……………」

急死に一生を得たエリゴス。天狼樹の方に一瞥向けると、舌打ちをひとつ。助けてもらったことに間違いはないが、たかが人間の手によって救われるなど業腹だ。契約でなければ消しているものを、と口惜しく思いながらも視線はカイトへと。

「ぐふつ!!?」

「カ、イトさん……………!!?」

苛立ちを表すように動けないカイトを執拗に蹴り上げる。再生すらままならない状態で傷は増える一方。助けようと這ってでも進もうとするウエンデイだが、その力さえ魔力と共に消えてしまう。

蹴りの数が50を超えた頃、これでもなお足りぬと胸ぐらを掴み上げ近くの樹々へと放り投げる。胴より太い樹木を倒壊させ、残った株に縫い付けるように円錐形の槍がカイトの腹に突き刺さった。

「ガツ!!?」

「ふん……人にもなれず、吸血鬼にもなれず、依代にもなれない。粗悪品にしてはよくやったと褒めてやろう。だが、ここまでだ」

未だ腹の奥で怒りがぐつぐつと煮えてはいるが、目的の遂行のためにこれ以上は抑える。引き続きゼレフの搜索、そして魔王への贄の回収をと視線をウエンデイへと向けた。

「させ、ない、よっ……!!?」

動くことさえままならないというのに、腹部の槍を引き抜こうと足掻くカイト。深々と刺さった槍は微動だにせず、また破壊するほどの力はない。足掻けば足掻くだけ傷口が広がり、鮮血が雨に混じって広がる。

その姿を見て、これ見よがしに嘆息するエリゴス。半端者とはいえ、吸血鬼ならば自らの終わりを受け入れればいいものを。生に執着する様はなんとも醜い。

もはや一瞥する価値すらなく、ウエンデイへと近づくエリゴス。その度にカイトがやめると蹴くが、やはり興味を惹かない。身動きの取れないウエンデイに手を差し伸ばそうとした瞬間のことだった。

島の中心部、倒壊した天狼樹から放たれる不可視の波動。それはその場で戦っていたエルザがアズマに勝利した証左。魔力が元に戻る知らせ。

「天竜の——」

「混沌カオスノ——」

「ッ!!?」

「咆哮おっ!!?!!?」

「息吹!!?!!?」
ワツタス

魔力が回復したと同時に、ウエンディとカイトは口内に溜めた魔力を解放する。挟撃される形で襲われたエリゴスの身体は空中へと押し出され、突然の出来事に暫し呆然としていた。

しかし、その隙を付け入るような体力は2人には残っていないかった。魔力は回復したとはいえ、片や瀕死から復活してまだ時間が経っておらず、片や腹部から槍を生やしたまま。今の一撃でやつとなのだ。

「死に損ないめが……!!?」

宙に放られたエリゴスが静かな怒りを燃やす。右手をカイトへと掲げ変形させるのは禍々しい槍。かつて魔王が使ったとされる獲物。生命の様に穂先から柄までのたうつ装飾の合間からは赤い光が溢れ、冒流的なまでの闇を纏っていた。

「決戦大魔槍」
フォールカス

足場のない空中とはいえ、その身は純潔の吸血鬼。音速で放たれるはずの一撃。だが、槍が手から放たれようとした刹那、空中を飛ぶエリゴスに邪魔が入る。

「ハアアアア!!?」

飛び出してきたその姿に、一同が目を見開く。なにせ現れたのは他でもないミラジェーン。サタンソウルで身を覆つても隠しきれていない大怪我だというのに、それを感じさせない動きで初撃を槍で防いだエリゴスに追撃を計る。

悪魔の姿だというのに、いや悪魔だからこそだろう。自然とエリゴスの口からは「美しい」と称賛の声が漏れるのであった。

美しい、と言われたのは何度目だろうか。

空中で嵐のような攻撃を繰り返す最中、そんな場違いの事がミラジエーンの頭によぎる。

フェアリーテイルの看板娘にして、週刊誌などでもグラビアとして活躍するミラジエーンにとって、容姿の称賛など飽きるほど聞いてきた。可憐だとか、妖美だとか、それこそ週一で届くファンレターに目眩がするほど書かれている。

けれども、目の前の吸血鬼が放った美しいには何も込められていない。

羨望も、妬みも、称賛も込めず、ただ単に綺麗な造形のペットでも見たかのような、そんな空虚な言葉。

「ふむ、ふむ………良いな、良いぞ。喜ぶがいい、貴様は我が魔王の依代を作る母体になる榮譽を与えよう」

「悪いけど、お断りよ!!?」

拒絶の意思を込めた渾身の^{右ストレート}一撃。しかし、エリゴスの手に持つ槍がそれを防ぐと反撃の石突がミラジエーンの腹部を重く叩く。一瞬の呼吸困難、だが続く二撃目は後退して躲す。エリゴスは追撃してくる様子はなく、こちらの心を折ろうとしているのか悠々と槍を構えるだけ。

常ならば圧倒まではいかずとも、拮抗した戦いができるはずのミラジエーン。しかし、ただでさえ数日に一度の頻度でしか使えないサターン・ソウル。それを試験で一度目、アズマからリサーナを守るために二度目、そうして今回の三度目の使用。

大怪我も相待って身体の内側から引き裂かれそうな激痛の中、ミラジエーンは周囲に魔力の塊を生み出すとそれをエリゴスにぶつける。けれども、槍の一振りですれらが霧散したかと思えば、発生した暴

風に煽られて姿勢を崩す。思わず目を瞑ってしまったえば、次の瞬間には距離を詰めて槍を振り上げるエリゴスの姿。

「勘違いするでない。これは決定事項、貴様の意見など聞いておらぬ」
剛腕を持つてして行われた叩きつけ。上空から地面へと落とされ
たミラジエーンの口から血が溢れ、全身の苦痛が更に酷くなる。

「ッ、オオオオ!!?」

影で作られた手がカイトの腹に刺さる槍を引き抜くが、立ち上がるだけの体力も残っていない。うつ伏せで倒れエリゴスを睨むが、ミラジエーンを助ける為の策もない。けれども契約者の、何よりも家族のピンチに蹲っているわけにはいかなかった。

どうする、と頭を必死に働かせ視界に入ったのは同じく手を貸せない事に歯噛みするウエンデイの姿。

「ウエンデイちゃん、シャルル!!?力を、貸してくれ!!?」

一方、抵抗ができないと察したのかゆつくりと地面に降り立つエリゴス。それを落下の衝撃からか、どこか他人事のように眺めるミラジエーンの脳裏になぜここに来たのかと疑問が浮かぶ。

と言っても、何も尊大な理由があるわけではない。ただ、嫌な予感がしたのだ。それが契約によるものなのか、虫の知らせなのかはミラジエーンにもよくわからない。ただただ、臍げな意識の中地面を覆う闇を見て、カイトが追い詰められていると感じたのだ。

痛む身体に鞭打って、魔力の吸収に虚脱しながらもたどり着いた先には磔になったカイトと倒れ伏すウエンデイとシャルル。サタンソウルを使うことに抵抗はなかった。

(そう、だった……)

大切な家族を傷つけられて、頭に血が昇ったのだ。リサーナがアズマの爆弾に囚われた時とは違う怒りを、確かにミラジエーンは覚えていた。煮え滾る怒りが満身創痍の体を突き動かし、手足が悲鳴を上げても尚、ゆつくりと立ち上がった。

(ゆるせ、ない……………!!?)

「ふむ、まだ立つか。良いぞ、それでこそ母体に相応しい」

荒い呼吸と緩慢な手足。戦闘など続行することさえ不可能なのは誰が見ても明らか。それでも立ち上がったミラジエーンに吸血鬼なりの賞賛の声を与えると、エリゴスは槍を構え直す。

初めて欲しいと思えたミラジエーンを殺すつもりはない。できれば五体満足で捉えたいが、あまりにも抵抗が激しければ脚や腕の一本くらいは、と皮算用にふける。

「はあ、はあ……………悪いけど、心に決めた人がいるの」

「ふむ、構わぬ。貴様の感情に関わらず、奪うだけのこと」

槍を横薙ぎに振るおうと、大きく構えるエリゴス。隙の多い構えだが、それを躲す余裕も受け止める体力もミラジエーンには残っていない。

そして今まさに攻撃が繰り出されようとした瞬間の事だった。

「天竜の咆哮!!?’」

エリゴスの横合いから逆巻く暴風が襲いかかる。完全に度外視していたために忘れていたが、そういうえば贄^アは滅竜魔導士だったなど暴風の中思いつく。

少なからず竜の因子を持つせいか、吸血鬼に滅竜魔法は通じる。しかし、それを差し引いてもウエンディの咆哮はエリゴスに痛打を与え

ず、あまつさえ両脚を剣に変えて耐えられていた。

鬱陶しいと思いつつも、この程度であれば問題はないと判断。所詮は悪あがきだろうと嵐が過ぎるのを待っていた時だった。

「シャルル!!?」

「わかってるわよ!!?」

暴風の奥に見える一つの影。それを認識した瞬間、エリゴスの視界が大きくぶれた。影の正体は飛行をシャルルに任せたカイト。魔力を限界まで使い行こう、エクシードのフルスピードによる強襲。風の後押しもあり、限界以上のスピードに目を瞑るシャルルをカイトが補佐。エリゴスを右手で捉えるとそのまま暴風から飛び出して上空へと進路を向ける。

(なに、が……………?)

突然のことと、そして急激な重力の負荷に視界はブラックアウト。けれども頬に感じる風から自身が空を飛んでいるということとはわかった。

「も、もう、限界よ!!?」

「わかった!!?ありがとう、シャルル!!?」

2人分の体重を抱えての飛行は困難であり、魔力の消耗も相まってダウンするシャルル。背中からシャルルが離れたのを感じるとすぐさま自前の羽で更に上へと羽ばたいた。

高度はぐんぐんと上がり、天狼島が粒のようになっても尚上へ。そしてそこでカイトの狙いがエリゴスに理解される。

「貴様、まさか雲の上に!!?」

「カッカッカ、ご明察♪」

このままいけば雲を突き抜け、陽に晒される。そうなればなす術のない消滅だ。そうはさせてなるものかと襟首を掴む右腕を引きちぎろうとするが、空気抵抗が強く腕が持ち上がらない。

まずい、と思った時には既に雲の中。雲内部で起こる雷や氷の粒に邪魔されそうになるが、それでも最短距離を進むカイト。

本能がこのままではまずいと警鐘を鳴らす。ならばと足首から先をいくつもの鉄球へと変える。片足だけでも100kgを超える重量であり、鉄はそのまま避雷針の役割となりエリゴス諸共カイトを焼く。

だが、飛行に魔力を割いているのか、速度が変わることもなく精々が回復を鈍らせる程度。そも、昔は雷魔法を使うラクサスと何度も喧嘩していたのだ。激痛は感じるが、それで気を逸らす様なことはない。

やがてカイトが雲を突き抜け視界いっぱい広がる薄暗い青。ちらちらと星が瞬き、陽はゆつくりと沈む最中。それでも吸血鬼を焼くには十分な光でカイトの身体は燃え上がる。

だが、エリゴスはその限りではなく全身に魔力の膜を精々。身動きが取れず、魔法も使えないが短時間であれば焼かれる心配はない。

「残念だったな、半端者!!? 私の勝ちだ!!?」

魔力が切れるよりも陽が落ちる方が早い。そうならばあとは目の前のカイトを屠り贄と母体を手に入れるだけ。勝利を確信するエリゴスを、けれども嘲笑うかのようにカイトは手を離れた。

身動きの取れない今、当然エリゴスは重力に従い落下する。漸く諦めたかとほくそ笑むエリゴス。だが、その視線の先、カイトが展開した魔法陣から生み出した槍を見てその笑みが凍りついた。

柄から口金にかけて白と黒が絡みつき、それぞれの色で別れた顎のような穂先。それは間違いなくかつて文献で見た、魔王が使っていた槍と瓜二つの姿。

「カオス・フォルカス
混沌魔槍!!?」

「ぐつオオオオオオ!!?!!?」

燃え盛るカイトの手から放たれた槍は亜音速の速度でその穂先の間でエリゴスの捉え、魔力を推進力に飛翔していた時よりも速くエリゴスを地上へと墮とす。必死にその束縛から逃れようと穂先を掴むが破壊することは叶わず、またしつかりと食い込んで外れそうにもない。

そして数秒経たずして地面へと接触。勢い止まらずに地盤を砕き下へ下へと。

「くっ、どこまで……!!?」

続くのか、そんな疑問の答えはすぐに訪れた。

突如としてエリゴスを襲ったのは大量の海水。呼吸を必要としないう吸血鬼が溺れることはないが、身動きの取れなくなる弱点のひとつ。そのまま海底奥底に縫い付けられたエリゴス。槍は消えたが浮かび上がることもできず、ただこのままじつとするしかできないのだ。

（クソ、クソツ!!?半端者がッ、なり損ないの分際でツ!!?）

——負けたようだな、エリゴスよ

その時だった、エリゴスの脳内に声が響いたのは。

（ハ、デス……）

声の主は悪魔の心臓のマスターにして、自らの契約主であるハデス。これはチャンスである。契約主であるハデスがエリゴスを呼び

出せば地上へと復帰、そのまま報復に出ることさえできる。

だが、それはないとエリゴスはそう判断を下していた。エリゴスは契約を結んだ時、つまりはハデスがエリゴスを下した時の事を思い出す。

あれは断じて人の身ではなく、エリゴスの知る中で魔道の深淵に誰よりも近い化物。敗北による契約は圧倒的にエリゴスの不利であり、それでも尚魔王復活への道を諦めきれずに結んだ契約。

ここでエリゴスを見捨てようともハデスに何の弊害もなく、逆にエリゴスはハデスの命令に従わなければならない。

(ま、待て!!? 私はまだ負けていない、すぐに帰還の指示を!!?)

それでも一縷の望みを捨てられず、プライドを捨てての懇願。けれども、ハデスにそれが通じた様子もなく、声だけではあるが何かを噛み締める様にふむふむと頷いていた。

——七眷属も全員敗れ、ブルーノートも、お主も戦闘不能……。マカロフめ、中々に良いギルドを作ったものだ。

(ツ!!? ハデスツ!!?)

——ああ、エリゴス。お前の助けはいらん。久々に後輩を揉んでやるのも、先達の役目。

だから、お前はそこで眠っている。その言葉を最後に、ぷつりと念話が切れた。見限られ、助けはないのだとわかったエリゴスは水中でその怒りを爆発させるが、全て水の中に消えていく。

しばらく吠えた後、どうにかしなくてはと頭を必死に働かせるが解決策は見つからず。そして暗い水中で、無機質な瞳と目が合った。

鮫だ。通常よりも一回り大きな個体。悠々とエリゴスを中心に旋回する鮫は次の瞬間、エリゴスに喰らいつく。

(ガツ!!? キ、ヤマシ!!?)

下半身を噛まれ、振り回されて、水中に血が漂う。それに釣られて次から次へと集まる鮫の群れ。回復しても捕食されるエリゴスはそのうち魔力が切れ、その身が再び現れることはなくなった。



槍を投げたと同時に疲労から羽ばたくこともなく落下するカイト。雲を抜け、だんだんと近づく地表にため息をひとつ。穿たれた大地を見て上手くいったようだと思堵を溢したのだ。

このままいけば地表にぶつかると、それで死ぬことはない。いや、死にはするが回復するだけの魔力は残っている。受け入れるように身体を広げて衝突の瞬間を待つていけば、不意にぐいっと引つ張られる感覚と浮遊感。

見やればサタンソウルを見に纏うミラジエーンがそこにいた。けれども、限界だったのだろう。カイトを抱えて数秒後、力尽きた様に共に地面へと落下。咄嗟に自身の身を下げたことでミラジエーンは無事の様子。

落下するカイトたちを追ってきたのだろう、ウエンデイとシャルルも森の向こうから駆け寄って来た。全員の無事に安堵を溢すカイトを、ミラジエーンは腕の中でキツと睨むとその頬にビンタを喰らわせた。

「カッカッカ、ミラちゃん無事で何よぶへっ!?」

「ミラさーん、カイトさーんーええっ!?」

一発では収まらないのか、執拗にビンタを繰り返すミラジエーン。再会の喜びもなく突然の事で驚くウエンデイに残当だと静かに頷くシャルル。何が何だかわからず、困惑するカイトの頬が腫れ上がり解消されない疑問符に頭を埋め尽くされる中、ようやくビンタの嵐をやめたミラジエーンはその胸ぐらを掴んだ。

「つゝゝ!!?・心配、させないで!!?」

言いたい事はたくさんあるが、ミラジエーンが言いたいのはともかくこの一言。先ほどのカイトの行為は作戦というにはあまりにも無謀な賭けだった。万が一避けられた場合や、反撃された場合の対処は難しく、そして何より自身のことなどお構いなしの自殺行為。

折角助けに来たというのに、自ら死にいく様な真似をされたミラジエーンの心中を察したのか、何も言い返せずに黙り込むカイト。

「もつと私たちを頼ってちょうだい……………家族、でしよう」

ミラジエーンの瞳から溢れる大粒の涙を見て、ああそうか、と納得する。怖かったのだ。2年前のように家族を失うことが、怖くて怖くて仕方がなかったのだ。

ぽすんと、カイトの胸に頭を預けて泣くミラジエーンの背中を撫で、苦笑いを浮かべる。なんともまあ、格好のつかないことだと自嘲しながら謝罪を。

「ごめんよ、ミラちゃん」

「……………無事で、よかった」

こうやってミラジエーンの背中を撫でるのなんて、リサーナがいなくなつた時以来だと独り言ながら、割つて入れない、声をかけるのも憚れる空気に物怖じするウエンディに手招きを。

首を横に振って激しく拒否するウエンディだったが、カイトが折れないと悟つたのだろう。「お、お邪魔します……………」とひっそりと声をかけてゆつくりと近づく。そうしてカイトの隣に来た瞬間、その頭を抱き抱えられた。

「ふえっ!??・あ、あの、カイトさん!??」

「ああ、よかった。みんな、生きてる」

ミラジエーンを撫でていた手を回し、2人を抱き抱えるカイトが溢す心からの安堵の言葉。本音を言えば戦闘中、誰かが死ぬのではないのかと気が気でなかったのだ。ウエンデイは実際に死にかけていた上、参戦したミラジエーンも満身創痍。誰か1人でも欠けていたら勝てなかったが、危ない場面は何度もあった。

それを乗り越えて結果的に見れば全員無事だった。それが嬉しくてたまらないのだ。カイトらしからぬ感情表現に困惑していたウエンデイだが、その言葉を聞いてしまっただけは素直に抱きしめられる他ない。

ちらりと横を向けば同じく、目元を赤くしたミラジエーンも抵抗することなく受け入れており、自然と抱き返していた。

(わ、私も抱き返したほうが………!!?)

好意を自覚したウエンデイ。ライバル心を燃やしたわけではないが、羨ましいと思ったのは事実。いや、でも、けれど、と頭の中で天使と悪魔が論争を起こし、腕を出したり引つ込めたりと中空を彷徨う。

そして漸く決心がついたのか、さあいざ!と腕を伸ばした瞬間だった。

「こほん」

決して大きくない、雨に紛れる様なシャルルの咳払い。だが、生還から少し浮かれていたウエンデイを現実に戻すには十分だった。

「アンタ達、そういうのは全部終わってからにしなさいよ」

「カッカッカ、それもそうだねえ………ウエンデイちゃん、どうしたの？」

「ナンデモアリマセン……」

現実に戻ってみれば、自分は何をしようとしていたのか。10代前半、それもフェアリーテイルに加入するまで閑散な森の中で生活していた少女には刺激が強かったのか、顔を真っ赤にして蹲ってしまふ。身体に別状はないので心配もそこそこに、立ち上がったカイトに続く様にしてミラジエーンも立ちあがろうとするが、ここまでの無理が祟ったのだろう。バランスを崩してしまった。

「おっと。ミラちゃん、大丈夫かい？」

「無理しすぎちゃったみたい。抱えてくれるかしら？」

「喜んで♪」

尻餅をついて倒れたミラジエーンの手を取って、そのまま流れる様に俵担ぎにされるミラジエーン。確かにまだ島内に敵がいる以上実用的ではあるが、ムードもへつたくれもない、淡い乙女心を蔑ろにした抱え方に頬を膨らませて背中をぽかぽかと叩く姿はいつもとは違う、幼い少女の我儘のようで。仮にこの場にルーシイがいれば、驚きのあまり言葉も出ないことは間違いない。

「カツカツカ♪ミラちゃん、いたいいたい。ほら、ウエンデイちゃんも」

ミラジエーンを抱えるのとは反対側、未だ羞恥のあまり顔を覆うウエンデイを小脇に抱えて。

「あ、シャルルもどうだい？」

「結構よ。それよりも、早くいくわよ」

つん、とそっぽを向いたシャルルの後を、肩をすくめたカイトが続く。向かう先は仮説テント。兎にも角にも皆と合流せねばならない。

た。天狼島を舞台に巡る舞台の終わりは、着実に近づいているのであ

途中、ブルーノートという強敵との接触もあったがギルダーツに対応を任せ

、なんとか意識のないマカロフと共に仮説テントへと合流を果たしたナツ、ルーシー、ハッピー、リリーの4人。

闇から生まれる化物との戦闘に疲弊していた仮説テント組みだったが、大きな怪我もなく互いに無事を確認しあった。そしてその中で、満身創痍のミラジエーンが行方不明になっていることを知る。

探し出してやると地面に鼻を近づけるナツ。雷の鳴るような豪雨の中、流石に匂いを辿ることは難しい。だが暫くして近づいてくる匂いを感じ取ったナツは頭を上げた。

「なんだ、カイトといっしょじゃねーか」

「そうなんだ、よかったあ……………」

「ウエンデイたちは？」

「その匂いもする」

多少では効かないほどの血の匂いもするが、大事に至るほどでもない。ナツの向く方向に視線を向ければ少しして、シャルル先導の元カイトたちが姿を表した。

「よーやく合流できたわ……………」

「カツカツカ♪いやあ、まさか迷うとはねえ」

「アンタがついてこないからでしょ!!？」

シャルルとカイトのコントのような会話はまだいい。いつものことで済ませることはできる。だが、俵担ぎにされたミラジエーンと小脇に抱えられたウエンデイを無視することはできなかつた。

ミラジエーンは疲労と改善を諦めた故に寝ており、ウエンデイは未

だに羞恥から抜け出せないのか顔を覆っていた。あまりの情報量の多さにルーシイはついていけず、空いた口が塞がらない。そんな中、「遅かったじゃねえか」と声をかけられるナツは凄惨とは思わぬ。そうになりたいとは思わないが。

「カツカツカ♪やあ、ナツ。元気そうだなにより♪敵にやられてなくてホツとしたよ」

「ンだとオ!!?オレが負けるわけねエだろ!!?」

「ミラ姉!」

「うお!?!?」

ナツを押し除けてまで前に出たのはリサーナ。素早く肩のミラジェーンの安否を確かめ、ただ寝ているだけだとわかるとほっと一息。

「よかつたあゝ……………」

「…………どうやらそちらも、激戦だったようだな」

「カツカツカ♪フリードたちも戻って来てくれたようで嬉しいよ♪」

流石に突き飛ばされたナツも抗議の声を上げることにはできず、膝から崩れたりリサーナを慰めるかのようにぶつきらぼうに頭を撫でるのを背後に、ミラジェーンを寝かせながらフリードと会話するカイト。

ちなみにウエンデイも寝かせようとしたがようやく落ち着きを取り戻したのだろう、耳を赤くしたままだが自らの足で立っていた。ルーシイとレビイの生暖かい視線と、ハッピーの「できてるう」にまた蹲ってしまったがそれはさておき。

天気は良くなるどころか悪化の一途を辿り、雷が空を彩る。全員とは言えないが、主戦力となるメンバーは揃った。ナツを筆頭にルーシイ、ハッピー、カイト、ウエンデイ、ハッピー、シャルル、リリーが向かうのは悪魔の心臓のマスターハデスの元。

「まさか七眷属にブルーノート、エリゴスまでやられるとは。ここは素直にマカロフの兵を褒めておこうか」

悪魔の心臓が本拠地、飛行船の船首にてハデスは佇む。ギルドの主戦力は敗れ、残っているのは島に散らばる下っ端と船の防衛に当てた戦力のみ。だが、ハデスに焦りはなく、巻き返しは可能だと考えていた。

そも、七眷属もブルーノートもエリゴスも、ハデスの足元にさえ及ばないのだ。マカロフがいない今、どれだけ数を集めようと敵ではない。

「やれやれ、この私が兵隊の相手をする事になろうとはな。悪魔と妖精の戯れもこれにて終劇。どれどれ、少し遊んでやろうか………3代目フェアリーテイル」

ハデスの視線の先、飛行船の正面には道中エルザとグレイとの合流を果たした最凶チーム。怨敵もかくやとばかりに睨まれるが、それを鼻で笑うとハデスは踵を返し船内へと戻ってしまった。

「来るが良い、マカロフの子らよ」

「だーっ！っ!!?てめえが下りてこい!!?」

「偉そうに」

「奴がマスターを」

「カッカッカ、腕がなるねえ♪」

「あの人をこらしめてやれば、この島からみんな出てつてくれますよね」

「もちろん！全員追い出してやるんだから」

強敵と戦う前だというのに面々に過度の緊張はない。マカロフがやられる程の実力者だと言うことは理解している。一人一人の実力は足元に及ばないことも理解している。

だがこのチームなら、仲間と一緒になら乗り越えられない壁はないと信頼しているのだ。

「そろそろ始めようか」

「おう!!?!!?」

ハッピーたちエクシード組は万が一、飛行船による逃走を防ぐために動力源の破壊工作へ。そして残ったメンツはグレイが作り上げた氷の階段を駆け上がる。

作戦などなく、小細工もない、正面からの全力での戦闘。

「ハデス……!!?!!?」

開口一番、先頭に立つナツがハデスを捉えるや否や拳から噴出した炎を繰り出した。

「フェアリーテイルの力をくらいやがれえ!!?!!?」

「フェアリーテイルの……力?」

並の魔導士ならば一撃で倒せる威力の攻撃は、けれどハデスには通せず。手をかぎすだけでひとりでに炎はハデスを避けてしまった。だがそれは囷だ。

炎が晴れた先、すでに攻撃範囲へと接近していたエルザ、グレイ、カイトの3人。ここまで動けるとは思っておらず、動揺を隠せないハデスに三者三様の攻撃が襲った。

「黒羽・月閃!!?」

「氷 聖 剣!!?」

「混沌ノ爪痕!!?」

黒羽の鎧に換装したエルザの一撃が

大剣を造形したグレイの一撃が
混沌ノ爪を腕に纏うカイトの一撃が
それぞれが間違いないくハデスに直撃。そして間髪入れずにルー
シイの攻撃がハデスを捉える。

「開け、金牛宮の扉!!? タウロス!!?」

「んM_モOー!!?」

「全員の魔法に攻撃力、防御力、スピードを付^{エンチャント}加。アームズ×ア
マーズバーニア!!?」

フィジカルの高いタウロスの一撃。そしてウエンデイの支援魔法
が全員に届き、ハデスに反撃を許さぬと攻撃の手を緩めない。

「ちよこまかと……………」

それぞれの最初の一撃はもらったが、ハデスも相応の実力者。二撃
目以降は攻撃の軌道を見切り当たる素振りさえ見えない。そして魔
力で作り上げた鎖がエルザを掴むとそのままカイトへと直撃。
さあ反撃を、と構えた時だった。

「火竜の翼撃!!?」

破壊を司る炎を両腕に纏い、さながら翼のように奮って上空から奇
襲したナツ。攻撃をモロに喰らって吹き飛ぶハデスだが、宙に浮かん
だまま鎖を展開。ナツを捉えるとそのままエルザにしてやったよう
に振り回す。

そのまま仲間のうちの誰かへとぶつけようとするが、素早くエルザ
が鎖を断ち切る。

「ナツ!!?」

「おう!!?」

慣性の法則に従い投げ飛ばされた先にいたのはグレイ。言葉少なに声をかければ互いのやる事は通じ合う。空中で一回転したナツの足に向けて振るわれるのは氷の槌。

「行つ………けえ!!?!!?」

「天竜の咆哮!!?」

「スコープオン!!?」

そのまま弾かれたナツに合わせて風と砂の魔法がナツを包み込む。混ざり合う魔法をブーストに全身に炎を纏うナツを見て、これはマズイと回避の選択を。だが、それよりも早く足元から伸びた影の手がハデスの脚を掴んで固定した。

「火竜の劍角!!?」

迎撃しようにも間に合わず、渾身の一撃が間違いなくハデスを捉えた。船の奥へと吹き飛ばされるハデス。これで倒せたとは思っていないが、痛打は与えたはずだと確信する面々。

油断なくハデスが吹き飛んだ先を睨む中、砂塵の向こうからハデスは語る。

「人は己の過ちを経験などと語る。しかし、本当の過ちには経験など残らぬ」

ぞわりと、全員の皮膚が粟立つ。語られる声に疲労は感じられず、砂塵の向こうから感じる魔力に衰えもない。嫌な予感が全員の頭に思い浮かぶ中、ハデスは悠々と現れる。

「私と相對するという過ちを犯したうぬらに、未来などないのだからのう」

身に纏っていたマントは燃えたようだが、ハデス自身に傷は一切ない。魔力の質が変わり、ただでさえ強大な魔力が更に大きく、どす黒くなっていた。

（リジエネーター再生者……なんてレベルじゃない。それこそ吸血鬼並の回復力………っ!!?）

皆の空気が絶望に染まる中、カイトはハデスの様子を隈なく観察する。人の扱う回復魔法よりも群を抜いた回復力。それこそ吸血鬼並の復活を人の身で行うなどあり得ない。

しかし目の前の現実はその否定していた。厄介なのは吸血鬼のような目に見える弱点は存在せず、そして魔力が回復能力が落ちる枯れるまで攻撃しようにも相手の魔力は底知れないことだ。

「さて、準備運動はこのくらいでよいかな?」

「来るぞ!!?!!?!!?」

「喝!!?!!?!!?」

エルザの警告と同時に放たれたハデスの声。そして瞬く暇も無く、ウエンデイの身体が消失した。

「……………はっ…」

「ウエンデイ……!!?!!?!!?」

カイトが呆けた声を出すのも仕方がない。大それた魔法陣もなく、ただただ一声をあげるだけで人の身を消すなどありえないのだ。

けれどもその痕跡を示すかのように地面に落ちるウエンデイの衣服。それが嫌に目について、脳裏にウエンデイとの思い出が焼き回しのようにちらついた。

最初は礼儀正しくも面倒な子だと思っていた。道化としての自身

に憧れ、それに追いつこうと継る姿は見ていて危ういとさえ思っていた。けれども、吸血鬼としての自身を受け入れ、自分の身よりも他人を思いやることのできる優しい子だった。

「あ……ああ………」

指が震え、肩が震え、頭の中は様々な感情でぐちゃぐちゃに。

助けられなかった後悔が

家族が目の前で消えた喪失が

何もできなかった自身への怒りが

そうして、ちらりと視界の隅に捉えたハデスへの殺意が全てを塗りつぶした。

「カラミティ・シャドウ災厄影………ツ!!?」

封印を解放し、吸血鬼本来の姿へと。脳裏に浮かぶ彼女の笑顔を塗りつぶすかのように、足元の影が肥大化する。その奥から覗く魔力は普段の比ではなく、目の前のハデスにも勝るとも劣らない威圧感。

「オイ、カイト!!?やめろ!!?」

静止を呼びかけるグレイの声も、どこか遠くに。ただでさえ一人減った今、足並み乱して勝手な暴走など愚の骨頂。エルザが物理的に止めようとするが、湧き上がる影がそれを邪魔をする。

それを興味深そうに眺めるハデスは邪魔をする様子はない。魔に近い生き物だけあってか、深淵につま先だけでも踏み込んでいると寧ろ関心を示していた。

「ふむ………」

「くそっ!!?お前達はハデスから目を離すな!!?私がなんとしてでも止める!!?」

「けど、エルザ!!?」

「皆さん落ち着いてください。私は無事です」と申しております」

そんな時だった。緊迫した雰囲気の水をさすように、天井から声が聞こえたのは。暴走していたカイトでさえ声の先に視線を向ければ天井に張り付く柱時計の姿。

ルーシイの持つ鍵のうちの一つ、時計座の星霊ホロギウムだ。天井に腹を向けているので直接の確認はできないが、その中にウエンデイがいることは確からしい。

「自動危険察知モードが発動されました」

「あの……あたしもけっこう危険がいっぱいだったような気もするんですけど」

具体的には天狼島の生物に追われたり、七眷属の一人華院Ⅱヒカルに頭を握りつぶされそうになったり、ブルーノートと交戦したりとルーシイの脳裏に危機的状況が思い出されるが、今回は度合いが違ったとのこと。

「……………」

ウエンデイの無事が確認できたおかげか、次第に落ち着きを取り戻すカイト。けれどやらかした事がやらかした事なので恥ずかしさのあまり顔を覆っていた。

責める様なエルザの視線に耐えかねて辛うじて絞り出した「……ごめんなさい」。言いたい事は多々あるが、それは後回しに。星霊界の服に着替えたウエンデイも降り立ち、再びハデスと相対する。

「これがマカロフの子らか。やはり面白い」

「おまえ、じつちゃんとの知り合いなのか!?!?」

「何だ、知らされてないのか?今のギルドの書庫にすら私の記録は存

在せんのかね。私は、かつて二代目フェアリーテイルのマスター、プレヒトと名乗っていた」

「ウソつけ!!? ふざけた事言ってるじゃねえぞ!!?」

元とは言えフェアリーテイルの魔導士がこんな事をする筈がない。怒り心頭で走り出したナツだったが、瞬きの内に構築されて魔法陣。ナツを取り囲んだと思った瞬間、爆発する。

「ナツ!!?」

駆け寄ろうとするルーシイをハデスは鎖で捉え、すぐそばにいたエルザを巻き込むと爆発。ハデスを止めようとグレイが動くが、ハデスが指をそちらに向けた瞬間に床ごと爆発に巻き込まれた。

「魔鴉!!?」

瞬間、カイトの足元から溢れ出す鴉の群れ。視界一面を覆う群れを目眩しに攻撃を仕掛けようとするが、ハデスは指先から放つ魔力弾ひとつでそれらを破壊。続け様に放たれる魔力弾がフェアリーテイルの面々を傷つけていく。

その姿はまるで踊るようで、魔導士としての実力差が如実に表れていた。

「妖精に尻尾はあるのかなのか? 永遠の謎、故に永遠の冒険………ギルドの名の由来はそんな感じであったかな」

しばらくして、その場に立つのはハデスのみ。あれだけ整えられていた船内は破壊の限りを尽くされ、それらに巻き込まれる様に倒れるナツたちの姿。全員が全員今まで以上の満身創痍で立ち上がる体力も魔力もなく、悠々と歩くハデスに噛みつく気力すらない。

「しかし、うぬらの旅はもうすぐ終わる」
「むぐ」

倒れるナツの頭を踏みつけてハデスは語る。

「メイビスの意思が私に託されて、私の意思がマカロフに託された。しかし、それこそが間違いであった。マカロフはギルドを変えた」

「変えて何が悪い!!?」

「魔法に陽の光を当てすぎた」

「それがオレたちのフェアリーテイルだ!!? てめえみてえに死んだまま生きてんじやねえんだ!!? 命かけて生きてんだ、コノヤロウ!!?」

頭を踏み躪られようと、身体が動かなかろうと、ナツの怒りは止まらない。ハデスの言葉が例え真実であろうと、ナツたちのフェアリーテイルが歩んだ道のりは間違いなのではないのだから。

「変わる勇気がねえならそこで止まってやがれ!!?」

「やかましい小鬼よ」

煩わしいと、ナツの足に叩き込まれる魔力弾。そこから始まるのは一方的な蹂躪。敢えて威力の落とした攻撃を何発も何発も、執拗に打ち込まれ苦しむナツ。周りの静止など聞くはずもない。

「恨むならマカロフを恨め。マカロフのせいでうぬは苦しみながら死ぬのだ」

「おまえは………じつちゃんの………仇、だ………」

「もうよい、消えよ」

「やめてえー……!!?」

息も絶え絶えでも尚睨むナツ。それを確実に屠ろうとハデスの腕にはこれまでにない魔力が集う。もうホロロギウムの助けは得られ

ず、動ける仲間もない、確実な死の予感。

ルーシイの悲痛な叫びが船内に響きそして――

「こいつがじじいの仇か、ナツ」

「ラクサス……」

一瞬の閃光、そして轟音。落雷のようにして現れたのはかつてギルドを再建しようとし破門されたラクサス。不機嫌さを微塵も隠す気がないラクサスにかつてのマカロフの姿が重なってハデスは動けなかった。

「ぬぐっ!!??」

その代償はジャブ代わりの頭突き。微小とはいえ、ここに来て初めてダメージがハデスに与えられたのだった。

「情けねえな。揃いも揃ってボロ雑巾みてーな格好しやがって」
「だな」

普段通りの傲慢ともいえるラクサスの言葉だが、そこには間違いなくこちらを気にかける優しさが垣間見えていて、思わずナツの表情も綻ぶ。

「特にカイト。てめえまでやられてンじゃねえよ。てめえを負かしていいのはオレだけだ」

「カッカツカ、面目ないねえ。……けど、どうしてここに？」

瓦礫に下半身を潰されながら、カイトも安堵から笑顔を見せる。カイトへの返答は先代の墓参りに来たただけだと。

「オレは先代メイビスの墓参りに来たつもりだったんだけどなア。こいつア驚

いた、二代目さんがおられるとは」

かつて弱者は必要ないと切り捨て、排除しようとした間柄。けれども、それでもフェアリーテイルの仲間だったことには間違いない。もうギルドの一員とは言えないが、マカロフの築き上げたものを壊す様な真似をされて黙ってははいられない。

「せっかくだから墓を作って拜んでやるとするか」

「やれやれ、小僧にこんな思い上がった親族がいたとは」

ラクサスとハデス。静観し合う両者の戦いの火蓋は切って落とされた。

ぐさま回復できるかと問われれば、答えは否である。

それほどまでの一撃を受けても尚、魔力で編んだ悪魔の心臓の紋章の入ったマントを羽織る余裕を見せるハデスは間違いなく人外だ。

「悪魔の目、開眼。うぬらには特別に見せてしんぜよう」

眼帯で塞いでいたハデスの右目。それが開かれた刹那に溢れ出す、形容し難い魔力がハデスから湧き上がった。

「魔導の深淵。ここからはうぬらの想像を遥かに超える領域」

今までとは比べ物にならない程の質と量。あり得ないと、信じられないと周囲が絶望する中、カイトはどこか他人事のように絶望を覚えながらも納得した。

ハデスの身から溢れる魔力はハデス自身のもものではなく、それこそ魔導の深淵と呼ばれる場所から引き出されているのだと当たりをつける。他よりも絶望が薄いのは一重に、それを扱った経験があるからだろう。

暴走した時の記憶は鮮明には思い出せないが、確かに感じたのだ。自身とは別の、異質な魔力が己の内から湧き上がるのを。それを引き出すことは不可能ではあるが、冷静に物事を見れる事はありがたい。

(人の身でアレに耐え切れるもは思えない。何か裏があるはず……………)

少なくともこの場にはない何かを触媒にしており、間違いなくこの船の中にあるはずだとカイトは考えていた。距離が離れば離れる程、そう言った物は効力が弱くなる性質があるのだ。

(こうなってくると、動力源が怪しいねえ……………)

船の心臓ともいえる動力源。それを触媒に魔力を送り出しているとなんとも腑に落ちるものに。探し出すにしても時間も魔力もなく、ハッピーたちの破壊工作が間に合うのを祈る他ない。

「ゼレフ書第四章十二節より、裏魔法・天罰」ネメシス

左手を上、右手を下に、弧を描くようにハデスが動かせば足元の瓦礫から産声を上げる悪魔たち。形はそれぞれ違えど、黒い肌膚に青い幾何学模様が入った姿はどれも同じ。驚いたことに魔法で作り出した人形ではなく、生命を生み出したのだ。

「深淵の魔力をもってすれば、土塊から悪魔をも生成できる。悪魔の踊り子にして裁判官、これぞ裏魔法」

一体一体が聖十魔導士に匹敵するほどの魔力量。それが見渡す限りいるのだから手に負えない。それらを殲滅するほどの魔力も、防ぎ切る体力も残っておらず、さしものカイトの脳裏に諦めの文字が過ぎる。だが――

「なんだ……こんな近くに仲間がいるじゃねーか」

魔力を使い果たし、動くことさえできないナツ。それを支えるように抱き抱えていたルーシイの腕を握りながら言葉を溢した。

「恐怖は悪ではない。それは己の弱さを知るという事だ」

それはこの島に来てのこと。一次試験でナツたちが選んだルートの方にいたギルダーツに言われた言葉だった。初めは圧倒的な力の差に折れたナツへの慰めの言葉だと思っていた。けれど、ここに来てそれは違うのだと悟った。

「弱さを知れば人は強くも優しくもなれる。オレたちは弱さを知ったんだ。だったら次はどうする?」

魔力不足に加え満身創痍だというのに、それでも立ち上がるのはなぜか。けれども、その姿を、言葉を聞いて素直に諦めを享受するなど以ての外。

「強くなれ!!?・立ち向かうんだ!!?!!?・1人じゃ怖くてどうしようもないかもしれないけど、オレたちはこんなに近くにいる。すぐ近くに仲間がいるんだ!!?」

ナツに鼓舞されて、カイトは笑みを浮かべる。ああ、そうだ。自身は1人ではないのだと、頼れる仲間がすぐ近くにいるのだと、諦めと恐怖を打ち消すように笑う。

「今は恐る事はねえっ!!?・オレたちは1人じゃねえんだ!!?」
「見上げた虚栄心だ。だが、それもここまで」

ハデスの腕が動き、悪魔たちが臨戦体制を整えるように前のめりになる。けれども傷だらけながらも立ち上がったフェアリーテイルに、恐れのない心はない。

「行くぞオ!!?・!!?」

「うおおおおおおおっ!!?・!!?・!!?」

ナツの掛け声を合図に、一斉に走り出す一同。何度も転けそうになりながらも、目指す先はハデスの元。

「残らぬ魔力で何ができるものか。踊れ、土塊の悪魔」

ハデスの合図を待ち侘びていたかのように、悪魔たちが攻撃を開始

する。その身を捻り、管のように伸びての体当たり。単純ながらも、容易く地面を抉る攻撃は一撃でも受けてはならない。

無理が祟ったのだろう、その最中に転ぶナツ。両サイドを走っていたルーシィとウエンデイがその手を掴むと視線だけで会話を。そしてタイミングを合わせてナツを前へと放り投げた。

その先にいるのはエルザとグレイ。2人はナツの存在を把握すると、飛んでくるナツと足裏を合わせて、思い切り蹴り飛ばす。

直線で飛ぶナツは格好の的なのだろう。ナツの標準を合わせて群がる悪魔たち。今ここで止められては終わりだ。先行していたカイトが飛んでくるナツに合わせて走り、腕を掴むと一回転。そのすぐそばを悪魔たちが通り過ぎると遠心力そのままナツを送り出す。

「全てを闇の底へ。日が沈む時だ、フェアリーテイル」

背後に控える悪魔はもういない。けれど、そんなものに頼らずともハデスは戦える。両手に集まる深淵の魔力。確実にナツを仕留められるまで引き寄せると、光と共に弾けた。

船の上部を全て破壊するほどの爆発。暴風と砂煙で視界が塞がれる中、一同が目にしたのはハデスに拳を入れるナツの姿。

「バ、バカな……!!? 裏魔法が効かぬのか!!?»

「うおおおおお!!?»

「ありえん!!? 私の魔法は……!!?»

ここで手は緩められないと、続け様に放たれるナツのアツパー。混乱の境地に至りながらも、ハデスはひとつの可能性を思い浮かべた。

(まさか……私の心臓を……!!?!!?)

その予想通り、機関室にある船の動力源——即ち、ハデスの心臓はハッピーたちの手によって破壊されていた。心臓が無ければ血液

が送り出されられないように、ハデスへの魔力供給も潰える。それを証
拠に、二撃目の準備をしていた悪魔たちも消えてしまった。

鬼のような反撃を繰り返すナツ。それに抗う術を今のハデスは
持ち得ない。

「あれ？」

「どうしたの、ウエンディ？」

ふと、船外に視線を移したウエンディ。それに釣られてそちらを向
けば、夜の闇に紛れて見えづらいが、間違いなく七眷属のアスマに
よって倒された天狼樹が元通り荘厳に聳え立つ姿が。

その根本では同じく七眷属のひとり、ウルティアが時のアークを限
界まで用いていたのだが、重要なのはそこではない。天狼樹が元
戻った今、加護もまた復活し、失われた魔力がそれぞれの元へ。

(私が……………この私が……………!!? マカロフに負けるとい
うのか!!?!
?)

「否……………!!?!」

一瞬の隙を突いたハデスの反撃。魔力の供給はなくなったとはい
え、なくなったわけではない。勝機はまだあるのだ。

「魔導を進む者の頂にたどり着く日までは、悪魔は眠らないがっ!!?
!!?」

まずは小煩いナツを仕留めようと魔法を向けようとした瞬間、間に
割って入ったのはラクサス。

「行けエ!!? フェアリーテイル!!?」

「契約ただけ……………開け!!? 磨羯宮の扉!!? カプリコーン!!?」

仲間たちが生み出した勝機を無駄にはしない。ルーシイが呼び出したのは執事服を着た山羊とも言うべき姿の星霊、カプリコーン。かつてルーシイの母親に仕え、ルーシイに継承される前に使用人だったゾルデイオに身を乗っ取られていた過去がある。

だが、同じ星霊のレオの助けもあり、呪縛は解けて本来の持ち主の元へと戻ったのだ。

「うぬは……………!!?」

「ゾルデイオではありませんぞ。私はルーシイ様の星霊、カプリコーン!!?!?」

その長い手足を活かした徒手格闘でハデスに着実にダメージを与えるカプリコーン。止めとばかりに鞭のようにしなる蹴りをお見舞いすると、今度はウエンデイが躍り出る。

「見様見真似!!? 天竜の翼撃!!?」

両腕に風を纏ったウエンデイの一撃。風に巻き上げられ、回転しながら空中を飛ぶハデスに次なる攻撃が襲う。

「カツカツカ!!? 悪魔といえど、心臓潰されちゃ終わりだねえ!!?」

ハデスの吹き飛ぶ先で待ち構えていたカイト。その両腕に纏うのは黒と白の魔力ではなく、どこまでも深い漆黒。色も相まつてのたうつ姿はまるで炎のようで、カイトの心象を表しているように見える。

「死ぬ、偽・魔王ノ破爪!!?!?」

羽を畳んで急降下。すれ違いざまに10本の鋭利な爪がハデスの身体を引き裂く。血を吐くハデスに隙は与えないと、カイトと変わる

ように飛び上がるのはグレイ。

「アイスブリンガー氷魔剣!!?」

造形されたのは2本の剣。十字に切り裂く軌跡に合わせて氷の追加攻撃がハデスを襲った。再び地に堕ちようとするハデスに合わせて、天輪の鎧に換装したエルザが剣を振るう。

「ペンタグラムソード天輪・五芒星の剣!!?!!?」

目にも止まらぬ、五芒星を描くような斬撃。意識朦朧とするハデスに、炎と雷を纏うナツが引導を渡す。

「ぐれんばくらいじん滅竜奥義・改!!? 紅蓮爆雷刃!!?」

炎と雷の竜巻に飲まれたハデス。最後の声もあげること出来ず、白目を向いて倒れ伏す姿からは復活する様子はない。

「これがオレたちのギルドだあつ!!?!!?」

ナツの勝鬨の声が朝焼けに染まる空に響くのであった。

天狼島―⑩

ぐがー、くごおー、ぎゅがー、と。喧しい寝息を立てるナツ。寝ているのにうるさいとは何事か、と考えつつもいつものことかと笑い鍋をかき混ぜる。

それにハデス戦ではこの場の誰よりも戦ったのだ。異なる属性の雷を喰らい、傷だらけになりながらも勝利を収めたのだから何もいうまい。

あの後、悪魔の心臓の残党に襲われようとしたところ、天狼樹が復活したことにより回復したマカロフたち。さしもの残党も相手取る真似はできないと、すぐさま撤退準備を始めた。そう遅くない内にこの島から出ていくだろう。

朝日が出た瞬間に封印を施したために、吸血鬼としての姿を晒すことはなかったのは幸いだった。里芋や生姜、肉などを入れた疲労回復の鍋は中々の出来で、用意していた紙皿に装う。

「おーい、ラクサス。これみんなに運んで♪」

調理場の近くで雷神衆と戯れていたラクサス。ギルドから離脱したラクサスが帰ってきたと勘違いした雷神衆が勝手に盛り上がっているだけなのだが、それはさておき。

当然、ギルドに所属していない者が天狼島に立ち入るのだから、マカロフはそれはもう怒っていた。曰く、破門中の身でありながらこの地足を踏み入れるなど、と。

裏を返せば、ラクサスの働き次第でギルドへの帰還を認めると言っているようなもの。それがわかっているのか、嫌そうに顔を歪めつつもため息と共にトレイを受け取るラクサス。

「つたく、人使いが荒エ」

「カツカツカ♪たまにはいいだろう?」

「貴様……っ!!? オレたちとラクサスの再会の邪魔を……っ!!?」

「ねえ、ラクサス。彼、あんなに面倒くさかったっけ?」

「あ?元からだろ?」

怨敵とばかりにカイトを睨むフリード。普段は冷静沈着なフリードではあるが、ことラクサスが絡むとなると途端に面倒な性格に。ラクサスからすれば平常運転なのだが、睨まれている方はたまったものではない。

このままでは手を出されてもおかしくはないと判断したカイトはお盆を持ってラクサスとは反対方向へと。

「ふう………」

「わ、ありがとう、ウエンデイ!!?」

「いえ、このくらいしかお役に立てませんから」

「カッカツカ♪謙遜が過ぎるねえ」

「ひゃ!!?!!?」

カイトが向かう先にいたのはウエンデイ。天狼樹が戻ってからというもの、皆の傷の手当てをかって出た彼女の疲労もまた人一倍だろう。確かに天狼樹が元に戻り加護も復活、生命の危機に瀕するほどの魔力切れを起こすことはない。

だが、精神的な疲れはそう癒されるわけではない。そういう理由での1番に届けにきたのだが、当のウエンデイは声をかけた瞬間顔を赤くしたかと思うと治療していたレビイの後ろに隠れてしまった。

戦闘中は気持ちを切り替えていたとはいえ、カイトへの好意を自認したウエンデイは恥ずかしくて仕方がない。ただでさえボロボロなのにと、慌てて髪型を確認したり汚れを拭いたり、少しでも綺麗に見られたいと思うのは不思議ではないだろう。

「……カイト、ウエンデイになにしたの?」

「カッカツカ、検討もつかないよ♪……いや、ホントに。ホントだ

から。そんなに睨んでもホントに思いつかないよ」

同性として、ウエンデイがカイトにどのような気持ちを抱いているのかレビイは察している。けれど、相手はあのカイトだ。ギルド内でも胡散臭さNo.1の、問い詰めても煙に巻く、信用し難いカイトなのだ。

あまりの信用のなさに肩をすくめ、苦笑いを浮かべるしかないカイト。フェアリーテイルの一員だと認め、この島では自身のために戦ってくれたことは理解しているが、いかんせんウエンデイはまだ幼過ぎる。手を出すわけないだろうと内心愚痴を溢す。

「まあ、いいや。はい、これ。熱いから気をつけてね♪」

「ありがとう……でも、なんで鍋？」

「そりゃあ簡単だからね♪……あと、材料の調達のしやすさ」

ふーん、と空返事のレビイは知らない。仮説テントに用意していた食材は戦闘の影響で全てダメになっており、現地調達——即ち、天狼島固有の動物たちで作られた鍋だということ。

食べられないわけではないが、元となった動物たちの見た目はよろしくなく、忌避感が生まれるだろうというカイトの気遣いである。

「あ、おいしい」

「それは何より♪ウエンデイちゃんも、ほら」

「は、はい……」

おずおずと、レビイの後ろから顔を出すウエンデイ。差し出されたお椀を受け取ろうと手を伸ばし、そして軽く両者の指が触れ合う。それだけで彼女の脳は沸騰し、大袈裟なくらいにのけぞらうと脚を後ろへと。けれども慌てていたせいだろう、脚が絡まりそのまま転倒してしまうその時だった。

「おっと。大丈夫かい？」

ふわりと、持っていたお盆を影の腕に預けてカイトが抱き抱えるようにウエンディを受け止める。傷はないとはいえ、乾いた血の匂いとカイト自身の匂いに包まれ、少しの夢心地。だが、次の瞬間に現実を受け止めたウエンディはこれ以上なくらいに顔を真っ赤に染めるとそそくさとその場を去ってしまった。

「ご、ごめんなさいっ!!?!!?」

あまりにも一瞬の出来事にぽかんとするカイト。その背中をレビイが懷疑の視線を送っていた。

「…………カイト、ほんつとーに何もしてないの？」

「カッカツカカあ、うん。本当に何もしてないよ」

カイトは確かに何もしていない。それこそが問題なのだ。記憶が混濁していたとはいえ、ウエンディが発した大好きだという言葉がカイトは覚えている。だが、カイトはそれに応えるつもりはないし、切り出されない限り口にすることはない。

別にカイトがウエンディを嫌っているなどではない。ただ、未だウエンディの事を甘く見ているのだ。

ウエンディの好意は憧れからくる勘違いだと。きつと自身よりも良い人を見つける筈だとそう思っているのだ。もし仮にこれがエルザ辺りにバレた場合、今までの比ではないほどの罰をカイトは食うのだろう。それをわかっていない辺り、愛への理解への道はまだ長い。

「おーい、カイト」

「ん?なんだい、おじいちゃん♪」

そんな事は露知らず、声をかけたマカロフに意気揚々と近づくカイ

ないよ」

そう、ゼレフだ。

今回、悪魔の心臓が探していた黒魔道士の祖とも言われるゼレフ。途中まではジュービアが追いかけていたが、悪魔の心臓の妨害もあり見失ってしまった。その任をカイトが引き継いだのだ。

けれども、やはりというべきか。同じ場所に在住するような人物ではないのだろう。島内には影の形さえ見当たらない。

「洞穴や樹の虚はどうだ？」

「真っ先に探したけど、成果なし。もうこの島にはいないと判断していいだろうね」

これ以上の搜索は無駄だと、視界を共有していた魔法を止める。探し出して保護あるいは討伐という手を取るつもりであったが、見つからない以上放置するしかあるまい。

「師匠せんせえく!!?ラクサスがイジメるく!!?」

「おっと」

凝った身体を解そうと伸びをすれば、どこからか飛んできたリサーナがカイトの影に隠れる。視線を向ければ確かに、そこにはラクサスがいた。

「なんだい、ラクサス。そう言う趣味にでも目覚めたの、君？」

「そうじゃねえよ。マジで本物か確かめてたんだよ」

「その結果がこれかい?やれやれ、ラクサス。君はもう少し配慮を学んだ方がいい」

「てめえに言われたかねエ」

ただの言葉の応酬。けれども2人はまるで打ち合わせでもしてい

たかのように徐々に距離を詰め、鼻と鼻が触れ合いそうになるほど顔を突き合わせる。

「……………やんのか？」

「カッカッカ♪負け越してるの忘れてるの、君？」

「ふざけんな。オレの勝ち越した」

「君の中ではそうなんだろうねえ。君の中では」

バチリと、音を立ててラクサスの腕に雷が纏う。同じようにカイトも両腕に魔法を纏う。張り詰めた空気に誰も割って入ることができず、そして互いに腕を振るおうとした瞬間だった。

「止めないか!!？」

後頭部に衝撃が走ったかと思えば、次いで襲うデコへの激痛。殴られた衝撃で互いにぶつけたデコを抑えながら蹲る2人を、下手人のエルザが睨みつける。

「まったく……………お前達、すぐそうやって戯れ合うのは止める。時と場所を考えないか」

「てめっ、エルザ……………っ!!？」

「カッカッカ……………」

「なんだ、カイト。何か言いたいことでも？」

「何でもないよ♪」

盛大なブーメランだとは流石に言葉に出来ず、邪魔をされて目くじらを立てるラクサスを慰めるようにその肩を叩くカイト。それを見ながら原因とも言えるリサーナは嬉しそうに笑っていた。

「ラクサスも師匠も楽しそう♪」

「楽しんでるんですか!？」

ラクサスに挨拶とハデス戦でのお礼を言おうにも険悪な空気に押されて、木の影に隠れていたウエンデイが思わずツツコむ。ウエンデイの言いたい事はわかるが、けれどもトリサーナは2人の様子を眺めた。

エルザに殴られたのが効いたのか、ナツとグレイの喧嘩のように殴り合いはしないが言葉を使って喧嘩する2人。次第にまた顔が近づき今度は自らの意思で額をぶつけ合うが、暫くすると2人して笑い合った。

「カツカツカカ♪懐かしいねえ、ラクサス」

「ハハハ！テメエは変わらねエな」

「口車に乗る君に言われたくないよ♪」

「違エねエ!!?」

息のあつた笑い声はまるで兄弟のようで、喧嘩のできる相手がいるというのは幸せな事だ。久々の再会を喜び、話題はラクサスの土産話へと。ちらり、と隣のウエンデイを見ればなぜあの険悪な雰囲気から笑い合えるのか不思議なようで首を傾げていた。

わからないのも無理はない。どうせこれから散々見る羽目になるのだ。男同士の友情の深め方はリサーナにも理解できていないが、それを楽しむ事は嫌でもできるようになる。

「くっ………!!?カイトめ、オレたちを差し置いてラクサスとあんなに楽しそうに………ツ!!?!!?」

「フリード、2年いない間に変わった?」

「元からあんなだよ」

「絡まない方がいいわよ、面倒だから」

間に入れないことが悔しいのか、四つん這いで地面を叩くフリード。2年前とだいぶ印象が変わったと聞けば、ビックスローとエバー

グリーンからの擁護はなし。どうやら仲間内では触れないようにしているらしく、2人ともフリードから距離を置いている。

確かに流石のリサーナも今のフリードに絡みたくはない。ウエンデイの手を引いて一歩退いた時だった。

オオオオオオオオ、オ、オ、オ、オ、オ、

空から突如として聞こえる咆哮。野生の獣とは違う、巨大な生き物の声。島内部で反響するかのような声に全員が耳を塞ぐ中、ぽつりとウエンデイが溢す。

「ドラゴンの鳴き声……………」

「え？ドラゴン!?？」

「みんなー!!?？」

「おまえら!!?？」

傷を癒す薬湯に浸かっていたルーシイとカナ、釣りに出かけていたナツ、ハツピー、ギルダーツも合流し、何が何だか分からずに辺りを見渡す。

「あそこだ!!?？」

その声を上げたのは誰だっただろうか。しかし、その指し示されたモノを見た瞬間、そんなものはどうでもよくなる衝撃が全員を襲う。

「何だアレ!??？」

「でけえぞ!!?？」

「これは…………ドラゴン!??？」

空高く飛ぶ影は逆光でよく見えない。だがそのシルエットは間違いない巨大で、どんな生物にも該当しない架空の存在。それが今、目

の前を飛んでいる。

「やっぱりドラゴンは、まだ生きていたんだ」

信じがたい光景ではあるが、ドラゴンに育てられた経験があるからだろう。滅竜魔導士3人はシヨックを受けながらも立ち直りは早かった。

「おまえ!!? イグニールが今何処にいるか知ってるか!!? あとグラン
ディーネとメタカリーナも!!?」

「やめときな、ナツ」

育て親の所在を聞くナツだが、それに答えるはずもない。言葉は分
からずとも皆察している。あのドラゴンに友好的意思はないのだと。

「降りてくるぞ!!?」

ナツの声に寄せられたのか、上空を飛ぶドラゴンが翼を折りたたんで一気に地面へと着地。巨大だと思っていた巨体は近くで見るとさらに大きく、黒い鱗に浮かぶ紫色の模様は不気味さを煽り、その鳴き声は敵意に満ち溢れていた。

そのドラゴンの名はアクノロギア。黙示録に記される、時代の終わりを告げる者。

唾然とする一度を嘲笑うかのようにまた飛び立つアクノロギア。かつて対峙したことのあるギルダーツが何をする気なのかを察すると声を上げた。

「逃げろーーー!!?!!?!!?」

その言葉を合図に、勢いをつけて地面を叩くアクノロギア。それだ

けで岩盤は砕かれ、破壊の衝撃が見渡す限りに広がる。かつて戦ったマスターゼロをも凌駕する破壊力。立ち向かうことすら選択肢に浮かばない程の格差。

「船まで逃げエ!!?!?!?」

ギルダーツの言葉に見ながら一斉に船へと向かって走り出す。それを見逃すはずもなくアクノロギアの口や手が行手を阻む。その度に樹々は薙ぎ倒され、地面は抉られ、吹き上げる風圧に転びそうになる。

「ウエンデイ!!?!?アンタ、竜と話せるんじゃないかった?何とかならないの!!?!?」

「私が話せるんじゃないよ!!?!?竜は高い知性を持つてる!!?!?あの竜だって言葉を知ってるはず!!?!?」

確かに、アクノロギアに人の言葉を話す知性は有している。それでも言葉を使わないのは人を虫ケラ程にしか思っていないからだ。人が害虫に言葉をかけないように、そして害虫相手に本気を出さないように、アクノロギアからすれば本来の力は出していない。それでも尚抗う術を人は持たないのだ。

「クソツ、このままでは………つ!!?!?」

「エルザ、ここは俺が囿に」

「ダメに決まってるだろう!!?!?お前も帰るのだ、フェアリーテイルに!!?!?」

カイトの案を一蹴するが、しかしこのままでは追いつかれ全滅するのも事実。誰か一人、それも実力者が殿を受け持たないといけないことはエルザだってわかっている。

だからといって切り捨てられるはずがない。見捨てられるはずが

ないのだ。

(ああ、もう。歯痒いな)

皆の安全は最優先。しかし、ここで勝手に殿を務めよう者ならば間違ひなく止められる。そうすれば纏めてお陀仏だ。それがわかつているからこそカイトは動けない。どうにかこの窮地を脱する策はないかと考えている中、ふと後方を走るカイトとエルザの間を抜ける一つの影。

「おじいちゃん!!?」

「マスター!!?」

「船まで走れ」

アキノロギアの前に立ち塞がるマカロフは静かにそういうと身体を限界まで巨大化させる。突進してくるアキノロギアを受け止めるが誰もが不可能だと叫ぶ。現に塞がりかけていた傷が開き、巻いた包帯を赤く染めているが、それでもマカロフは「走れ」としか言わない。

「かくなる上はオレたちも!!?」

「当たって砕けてやるわー!!?」

「最後までいいマスターの言う事が聞けんのかあ!!?!!?クソガキが!!?!!?」

無理だということはマカロフ自身、よくわかっている。だが、それでも立ち塞がらなければならぬ。愛する家族を逃すため、命を賭けなければならぬのだ。

「オレは滅竜魔導士だ!!?そいつが敵っていうならオレが……!!?」

「走るぞ、ナツ!!?」

それでも立ち向かおうとするナツの襟首をラクサスが掴み、強引にその場を離れようとする。誰よりも駆けつけたいであろうラクサスがそれを呑み込み、マカロフの意思を尊重したのだ。

「マスター……………」

化物としての己を受け入れ、人と共に歩む事を教えてくれた恩人。その危機に駆け寄りたくなるが、ぐつと奥歯を噛み締めて堪えるカイト。ここでの手助けなどマカロフの覚悟に泥を塗るようなものだ。震える両手を握りしめて皆と同じ方向へと走り出す。

「何の目的か知らんがなア……………これ以上先には進ませんぞオ!!?この後ろにはワシのガキどもがいるんじゃああ!!?!!?」

言葉通り、アクノロギアの頭を押さえ込むマカロフはその歩みを止めた。一步も進めてなるものかと、離してなるものかと四肢に限界まで力を込める。けれども、わずわらしいとでも思ったのだろう。

押さえ込まれたアクノロギアはマカロフの腕の中で声を上げる。それを合図にこれまで以上の力を出されてはたまったものではない。衝撃によろけて仰向けに倒れるマカロフの上に腕を置くとそのまま体重をかけ始めるアクノロギア。肋骨が折れる音と同時にマカロフの絶叫が周囲に響くが、それでもマカロフの表情には笑みがあった。

初めて親らしいことができたという満足感。これだけ時間を稼げば逃げられただろうという達成感。これから死ぬ運命にあるというのに、マカロフの胸の中に後悔はない。

だが——

「じっちゃんを返せ……………!!?」

仰向けに倒れるマカロフの横を通り過ぎたのは逃げた筈のナツ。

マカロフの巨体をよじ登り、アクノロギアの腕にまわりつくナツを振り払おうと腕が振るわれるが、それでも離すことはない。

「ナツ……………」

「かかれー！ー！！？」

それだけではない。エルザの声を合図に、逃したはずの全員がアクノロギアへと攻撃を加える。ダメージは与えられていないがそれでもマカロフから引き離すことには成功した。

「デーモン・ハンド偽・魔王ノ巨腕オ！！？」

影から作り出した巨腕がアクノロギアの側面を叩く。しかし無傷であり、衝撃でよろめくこともない。自力が違いすぎるのだ。それでもここで退くことできない。

「ミラちゃん！！？」

「ええ！！？」

サタンソウルを身に纏うミラジエーンに投げ渡されるカオス・フォールカス混沌魔槍の魔法。それをミラジエーンの魔力をブーストにして投擲するがそれも効果なし。山さえ穿つ一撃だと言うのにと内心舌打ちをするカイト。まるで勝ち筋が見えてこそ、弱点さえ見当たらない。

「ぐっ！！？」

無造作に振るわれた腕の一振りで弾き飛ばされ、攻撃が止む。それでも立ち向かおうとする一同だったが、三度飛び上がったアクノロギアに収束する魔力に動きが止まった。滅竜魔導士の十八番、咆哮を使う気だ。それが人が使うものとは比較にならない破壊力を持つ事など嫌でも予想できる。

「防御魔法を使える者は全力展開!!？」

「あいよ!!？ とっておき見せてやるよ!!？」

「術式を書く時間はない!!？」

「文字魔法には他にもたくさん防御魔法があるよ!!？」

「みんな、師匠たちに魔力を集めて!!？」

「手を繋ごう!!？」

「オレたちはこんなところで終わらねエ!!？」

「うん!!？絶対諦めない!!？」

「みんなの力を一つにするんだ!!？」

「ギルドの絆見せてやるーじゃねーか!!？」

慌ただしくも的確に、そして逃げ出す者は遂に現れず。皆が手を繋いで円状に集い、魔力が集まる。

「…………カイト、最後かもしれないから言っておくわ」

「カッカッカ、縁起でもないねえ」

カイトの隣、手を繋ぐミラジェーンがその顔をじつと見つめる。魔法の展開準備に意識を注ぐカイトだが、言葉を返す余裕はあるらしく、飄々と返すがその柔らかな表情の中に真剣な瞳を見て、言葉を無くす。これから紡がれる言葉を聞き逃してはいけないのだと、本能的に理解した。

「貴方が好きよ、カイト。仲間としてじゃなく、異性として」

慌ただしい周囲の中、嫌に耳に響くミラジェーンの声。さしものミラジェーンも恥ずかしかったのか、耳まで赤くして顔を伏せてしまふ。

「返事は……………生き残ってからでいいわ」

「カツ、カツカ……………」

流石に誤魔化すことのできない、ストレートな愛の言葉。聞いているこちらまで恥ずかしくなる物言いにすぐに反応できず、掠れた笑いしか出てこない。それでも、最後にマカロフが輪の中に入り完全な円となったことで流れる魔力に我に帰ると、生き残るために自身最大の防御魔法を発動させる。

「さあ、いくよ!!? アジュール・サブマ 奇跡ノ神域!!?」

魔法の発動と共に放たれるアクノロギアの咆哮。予想を遥かに上回る魔力の奔流は島を呑み込み、絶望的な光が海域を照らす。光が収まり後に残るのは荒れる海のみ。天狼島など最初からなかったかのように跡形もない。

——X年784年12月16日天狼島、アクノロギアにより消滅
——アクノロギアは再び姿を消した

——その後、半年に渡り近海の調査が行われたが生存者は確認できず

以上が当時船上にて一部始終を確認した評議員による公式記録。ここからかつて盛り上がりを見せていたフェアリーテイルの名は廃り、その名は嘲笑の対象へと。

そうして7年の月日が流れるのであった。

大魔闘演武編

大魔闘演武―①

天狼島消失から7年。高々7年、されど7年。誰しも平等に刻まれる時の流れというのは残酷で、あらゆるものを風化させてしまう。

かつて世間を騒がせた大悪党の行方然り、天才と謳われた人々然り、別れた異性との思い出然り、全ては過去へと流されて忘れてゆく。

それはフェアリーテイルにもいえることで、かつてフィオーレ最強と謳われたギルドも今や見る影なし。街の中心に建っていたギルドは借金の形に差押えられ、今や町外れのボロ酒場を本拠地に。

それでも支払えない借金を返そうにも、小さなギルドに回ってくる仕事などたかが知れてる。結果として利子分しか払えず、その日暮らしの貧乏生活。耐えきれず離脱するメンバーも増え、騒がしきにあふれていた7年前の面影はどこにもない。

それもこれも7年前、天狼島消失のせいだ。

マカロフ含めた22名の行方不明。評議員の搜索も早々に打ち切られ、諦めきれずに独自に搜索。その費用、人件費などに目減りする資金。その調達もままならず、気づけばこの有様だ。

ギルド内でもどんよりとした空気が立ちこみ、現ギルドマスターのマカオも現状維持がやっと。そんなお先に真っ暗な時だ、天狼島はまだ残っていると連絡を受けたのは。

その知らせを持ってきたのは青い天馬。ヒビキの古文書の魔法で独自に調べ、解析したのだ。それは僥倖と一部のメンバーは船を出して出迎えに。より一層閑散としたギルドでは留守番組が皆の帰還を今か今かと待ち侘びている。そんな中1人、淡い期待に踊らされてなるものかと、膨れっ面で本を読む少年1人。

「ロメオ、ついていかなくてよかったのか？」

「もし、天狼島が見つかったらみんな、生きてるかかわかんねーだろ」

7年も経てば少年は青年に。マカオの息子ロメオは幼き頃の憧れを忘れずにギルドに加入。だが、もう7年なのだ。ロメオももう子供ではなく、下手な希望もこれ以上持ちたくない。それが覆された時の絶望はこの7年でよく学んでいた。

「おいおい、今日はまた一段と人が少ねえなア。ギルドってより何よ？ 同好会？」

「ぶひゃひゃー!!？」

乱暴に、乱雑に、扉を蹴って侵入してきたのはフェアリーテイルの代わりに台頭した黄昏の鬼のメンバー5人。借金の返済元であり、こうして集金混じりの嫌がらせもしばしば行うギルドである。

「ティーボ!!？ 支払いは来月のハズだろ!!？」

「うちのマスターがさあ……：……そうはいかねって。期日通り払ってくれねーと困るってマスターに言われちゃしようがねーんだわ」

仕方がないというが、その表情は弱いものイジメに大義名分を得たようで、いやらしく嘲笑を浮かべていた。もう我慢ならないと立ち上がったのは他でもないロメオだ。

「おまえらに払う金なんかねえよ」

「よせ、ロメオ!!？」

「こんな奴らにいいようにされて、父ちゃんもみんなも腰抜けだ!!？ オレは戦うぞ!!？ このままじゃフェアリーテイルの名折れだ!!？」

勇ましく立ち上がるロメオの右手に灯る炎。格好も相まってかつてのナツを幻視するが、その実力はまだ遠く及ばない。ティーボと呼ばれた男がフツと一息吹きかけるだけで炎は霧散、丸腰のロメオに向かって背中の中を金棒を手にかける。

「名前なんかとつくに折れてんだろ。てめえらは一生、オレたちの上にはいけねえんだ!!?」

「やめろオー……!!?」

マカオの静止間に合わず、振り下ろされた金棒。固まるロメオが来たる衝撃に目を瞑った瞬間だった。

「あ?」

振り上げた金棒を振り下ろす事なく、背後からの奇襲に蹴り飛ばされたティーボはそのまま反対側の壁へと。怒りに振り向いた残り4人もそれぞれ氷漬けにされたり、殴られたり、斬られたり、影に投げ飛ばされたりと瞬きの内に倒された。

「ただいま」

啞然とする中、一番先頭にいたナツが声をかける。続くように現れるのは天狼島と共に消えたはずのメンバーたち。あの日のまま、何も変わる事なく現れた面々に驚きつつも、涙を溢しながらロメオが返す。

「おかえり!!? ナツ兄!!? みんな!!?」



くつくつと、喉奥で笑いを噛み殺しながらカイトは鍋を振るう。アキノログアの襲撃からすでに7年経過していることには驚いたが、こうして再会できたのは喜ばしいことだ。確かにギルドも人も変わったが、その本質は変わらない。7年の空白を埋めるように騒ぐ面々を眩しく見つめる。

(しっかし、まあ……………まさか島づ)と封印するとはねえ)

脳裏に浮かべるのはフェアリーテイル初代マスター、メイビスのこと。天狼島で浮遊霊として存在していたメイビスは皆の結束を魔力へと変換し、妖精三大魔法のひとつ、妖精フェアリースファイアの球を発動。絶対防御に守られつつもその解除に7年の月日を費し、そして復活できたというわけだ。

さすがは初代マスター。やることのスケールが違いすぎると感心する反面、死人がここまでの魔法を行使したことに驚きを。

そうしている内に出来上がった炒飯を盛り付けテーブルへ。作れば作るだけ消えていく料理に満足しつつ、既に使える材料は使い切ってしまったために手持ち無沙汰となるカイト。さて、どうしたものかと辺りを見渡す。

右のテーブルを見やれば習得した炎の魔法をナツたちに披露するロメオ。左を見れば自らの実子ということが判明したカナを抱いて踊り狂うギルダーツ。なるほど、混沌として入り込む余地がない。まあ、それも仕方がないかと輪から外れて皆を肴にご飯でもと考えていた時だった。

「カイトさん……………」

ふと、横に現れたのはウエンディ。笑顔が溢れるこの空間で一人、なぜか涙を浮かべていた。

「どうしたんだい、ウエンディちゃん？誰かに虐められた、わけではないだろうし……………ご飯でも食べ損なつたかい？」

「これ……………」

ウエンディが恐る恐ると差し出したのは一枚の絵。絵描きのリィダスが7年の間に書いた、天狼島組の7年後の姿だ。そこには今の少

女然としたウエンデイとは違い、すっかりと成長したウエンデイの姿。可愛らしい、というよりは美しいという方がしつくりとくる一枚だ。

「?よく、書いてるね?」

「うわーん!!?」

感想を述べた瞬間、泣き出して人ごみの中に走り出すウエンデイ。何か不味いことでも言っただろうか?と首を傾げた。

「リーダー、何か不味いことでも言ったかな?」

「さあ?」

絵描きを楽しむリーダーも、人の心の機微に疎いカイトも女心はよくわかっていない。胸部の厚い人間が多い中、7年後も薄いままだと遠回しに言われるのは花もはじらう乙女には致命傷であった。

「……………ちなみに、俺の絵ある?」

「ウイ。でも、あんまり変わらないよ」

渡された紙に描かれたカイト。だが先ほどのウエンデイとは違い、あまり変わっていないように見える。少し貫禄が欲しいところだと苦笑いを溢し絵を返すと、その背中に突撃する影ひとつ。

「^{せんせい}師匠!!?何してるの?」

「カッカッカ♪リサーナ、ビックリするからやめておくれ」

カイトの忠告もなんのその。首に手を回し、顔の横から手元の絵を覗き込むリサーナ。身体は大きくなったが、こう言った甘える仕草は昔のまま。皆に愛される末っ子だからか、それとも生粋の性格なのかはさておき。変わってないと笑うリサーナにカイトは問う。

「それで、リサーナ。どうかしたのかい？」

「あ、そうだった。師匠も向こうで食べよ！」

リサーナの指差す先、カイトの後方の席。そこには案の定というべきか、エルフマンとミラジエーンの姿。天狼島以降、どうにも顔を合わせづらいカイト。帰還の船の最中話しかけようにも、顔も合わせようとせずに逃げられることもあり余計にだ。

「あー、リサーナ。せっかくだけれど、お腹はいっぱい……」

「ほら、早く早く!!？」

「カッカッカ♪聞いちゃくれないねえ」

くるりと身体を反転させられると、そのままカイトを押し出すリサーナ。影に潜って掻い潜れないかと考えたが、リサーナに掴まれた右腕を見て諦める。移動系の魔法の多くは使用者が拘束された状態では使用できず、カイトの影魔法もその例に漏れない。どころか他の魔法よりも制限はキツく、身体の一部でも掴まれた状態では使用不可。その分使用魔力はローコストなのだが。

「ミラ姉！エルフ兄ちゃん！」

そんな現実逃避も束の間、連れてこられたテーブルではミラジエーンに鼻の下を伸ばして近づいてくる野郎どもを牽制するエルフマン。それを知ってから、もしくは慣れているのか、呑気に料理を口に運んでいたミラジエーンはカイトの姿を確認した瞬間、そっぽを向く。

やはり目も合わせてくれないかと内心肩を落とせば、カイトに気がついたエルフマンが反応する。

「てめっ、カイト！姉ちゃんとリサーナに近づいてんじゃねえ!!？」

「カッカッカ♪悲しいね、エルフマン。昔はリサーナみたいに師匠っ

て呼んでくれていたのに」

「昔の話だろうが!!? リサーナ、こっち来い!!?」

「えー、昔は4人でテーブル囲んでたじゃん」

「昔は昔だ!!?」

エルフマンとしてはカイトを嫌っている訳ではない。それこそ自身に魔法を覚えてくれたこともあるし、下心ありきでミラジエーンやリサーナに優しくしているわけではないことも知っている。

だが、それはそれとして不安なのだ。将来的に義兄と呼ぶことになりそうなのが。姉を取られてしまいそうなのが。

「……………カイト、姉ちゃんに何かしたか?」

「カツカツカ、心当たりはないよ♪じゃあ、後は兄弟姉妹水入らずで♪」

ミラジエーンのいつもとは違う反応に訝しげに問い詰めれば、カイトは素知らぬ顔でその場から退散。その行動自体何かあったことは明白だ。人混みに紛れてしまうカイトの後ろ姿から問い詰めても煙に撒かれるだけだと察し、そして少し離れた隙にミラジエーンに群がる野郎どもに視線が移る。

「あ、てめえら!!? 姉ちゃんに近寄るんじゃねえ!!?」

「えー、いいだろー」

「7年振りの再会なんだぜ」

「その伸び切った鼻の下をどうにかしていいやがれ!!?」

エルフマンが男避けに励む傍らで、カイトの背中を見送ったりサーナは視線をミラジエーンへと移す。その視線は微笑ましいモノを見る様な温かいものではなく、どちらかといえば責めるような痛々しいもの。言いたいことはわかっているのか、ミラジエーンも突き刺さる視線を甘んじて受け入れていた。

「ミラ姉……………」

「わかってる、わかってるわ。わかってるからやめてちょうだい」

その先の言葉は聞きたくないと言わんばかりに耳を両手で覆うが、現実はどこまでも非情だ。否応なしにリサーナは告げる。

「へタレ」

「うぐっ」

可愛い妹の口から出た言葉は鋭い刃となり、ミラジェーンの胸に容赦なく突き刺さる。既に致命傷だということにも構わず、リサーナは畳み掛けるように続けた。

「もう皆んなにバレてるのに、まだ隠し通そうとしてるの?」

「……………冗談でしょう?」

「本当だよ?」

寧ろなぜバレてないかと思っていたのか。そう続ければ羞恥のあまりに耳に当てていた手は正面へと移り、椅子の上で蹲ってしまふ。姉の可愛らしい姿にほっこりする反面、このままではお互いなあなあで済ましてしまいそうなのでここは心を鬼にしてリサーナはまだまだ責め立てる。

「ミラ姉、天狼島で師匠に告白したんでしょ?その時の勇氣はどこに行っただの?」

「……………聞いてたの?」

「ミラ姉の隣にいたんだよ、私」

あの慌ただしい状況でどこまで聞こえていたかは定かではないが、少なくとも隣にいたりサーナは把握している。返事は戻ってからと

自ら言ったくせに本人がこの様では、と言った所でミラジエーンに口を塞がれた。見たこともないくらいに顔を真っ赤にして荒い息を繰り返すミラジエーンはいっぱいいっぱいである。

「……………ちゃんと向き合わないといけないってことくらい、わかるわ」

そのままぽつりぽつりと話し出すミラジエーン。思えばこの淡い恋心を抱いたのはいつからだっただろうか。気がつけば近くにいて、あのぎこちない笑顔に胡散臭いと思いつつも安堵を覚え始めたのはどのくらい前だったか。

気付かぬうちに惹かれて、けどそれを認めてしまったのは今の関係が壊れてしまいそうでずっと蓋をしてきた。それがずるずると続いている今のだから、余計に尻込みしてしまう。

フェアリーテイルの看板娘と言われる魅力も、種族も違い美醜の価値観も違うカイトの前には無力。その違い故か、皆よりも一線引いたカイトにアタックしづらいというのも要因のひとつだろう。

進みたいという思いと、現状維持の気持ちに苛まれるミラジエーン。だから、せめてもう少し気持ちの整理をつけさせて欲しいのだ。

「あと2日……………1週間……………1ヶ月……………1年……………とにかく、もう少し待ってちょうだい」

「……………」

「リサーナ……………?」

反応のないリサーナに違和感を覚えてそつと口を覆っていた手を離す。その途端「きゆう」と言葉にならない音を出して倒れてしまった。感情がいつぱいいつぱいだったミラジエーンは無意識のうちに、口どころか鼻まで抑えていたのだ。その先に待っているのは酸欠による気絶。

「リサーナ？リサーナ！！？」

「ちよ、姉ちゃん！！？どうしたんだよ！！？」

突然の気絶に慌てる周囲。騒がしい宴が更に騒がしくなったことは言うまでもない。かくして、若干のハプニングが起こりつつも7年の月日を埋める宴は過ぎてゆくのであった。

大魔闘演武―②

天狼島からの帰還を果たしたはいいが、喜んでばかりではいられない。7年と言う月日は容赦なく傷を残していた。ルーシイは身内の父親を亡くしていたり、魔力が馴染まないのか帰還メンバーの全員が魔法を上手く使えなかったりと問題は山積み。

その中でも特に問題なのは金銭面。

金を借りていた黄昏の鬼トライワイトオウガの法外な利息と強引な催促はマカロフとエルザ、ミラージェーンの3人による物理的な説得により無くなったとはいえ借金が消えたわけではない。未だ元金は残っているのだ。

返済しようにも名声の落ちたギルドに舞い込む依頼など下請けの更の下請け。せいぜいがペット探しや薬草探しくらいのもの。完済どころかその日の食費すら危ういギルドの台所事情にカイトは頭を抱えた。

次期マスターでカナの父親であることが判明したギルダーツが放蕩に出たのも気にならないくらいには頭を抱えた。放蕩に出る直前に残した手紙にはラクサスの復帰とマカロフのギルドマスター再指名がなされたのだが、それはさておき。

それぞれの貯蓄でさえギルドの経営に回され資金不足に喘ぐ中、一発逆転の案がロメオから出された。それは王国主催によるフィオーレ大陸一の魔導士ギルドを決める大会。その名も大魔闘演武。

優勝すれば3000万Jの賞金は勿論、大陸中にギルドの名が知れ渡るために名声も手に入る。逆に無様を晒せば名声は落ちるのだが、実力者の帰ってきたら今、出場する他ない。既存メンバーの反対を押し切り、優勝へ向けて各々が盛り上がる。

開催日は3ヶ月後。それまでに鍛え直すためにそれぞれが合宿をすることとなったのだ。さて、カイト含めた最凶メンバー十チームシヤドウギア、カナの一行が合宿先に選んだのは――

「「海だ―――!!?!!?」」

「カッカカカ♪呑気だねえ……」

海に来てはしゃぐ面々を他所に、日陰に座ってそれを眺めるカイト。元々ミラジエーンたちと山で合宿する予定だったのだが、それを脇から搔つ攫ったのはエルザ。ガイドブック片手に拉致した鬼は現在、例にも漏れず海ではしゃいでいた。

「カイトさん、あの、ここなんですけど……」

「ん、ああ……暗号化されてるねえ。うーん、ここは……」

唯一の例外はギルド薬剤師のポーリシユカーー本名グランディーネから貰った魔導書と睨めっこするウエンディくらいのもだろう。エドラスから迷い込んだグランディーネが、こちらの竜のグランディーネから授かった魔法が書かれた魔導書。

複雑怪奇な術式に加え、所々が暗号化された文章は並大抵では読み解くことさえ不可能。それを横からアドバイスするのはカイトの役目だ。魔導書の解読という点ではレヴィにも勝るとも劣らない知識量を持つカイトであればアドバイザーとして申し分ない。それに加え、特訓内容も魔力操作がメインのために融通が効きやすいのだ。

「おーい、カイト。腹減ったア!!?」

「焼きそばくれ!!?これから大食い勝負だ!!?」

「オイラはサカナー!!?」

「カッカカカ♪元気だねえ、君たち。水分補給忘れないようにね」

海の方から走ってきたナツとグレイ、ハッピーの3人。仕方がないとため息ひとつ溢すと影の中から取り出した紙幣を影の手に掴ませる。その影が隣の影へ、その影もまた隣の影へとバケツリレーさながらにお金を受け渡す。一切の乱れなく動く影は視界の端まで続き、そうして暫くして同じようにして運ばれてきたのは大皿に乗った特盛

り焼きそば2枚に焼き魚。

それを受け取った3人は掛け声合図に大食い勝負をスタート。食いは終わるなりまた海の方へと走り出すのだから、まだ修行をするつもりはないらしい。遊ぶだけ遊んだら満足してそちらにシフトするだろうと半ば諦めたように笑いながら皿を回収していれば、隣から視線が。

「どうしたんだい、ウエンデイちゃん？お腹すいた？」

「い、いえ！けど、カイトさんも忙しいのに手伝ってもらって申し訳ないというか……」

ウエンデイの言う通り、カイトも実のところ修行中だったりする。内容としては影の遠隔操作。それもここからほど近い海の家でアルバイトしながら金銭の会得をする一石二鳥の修行法。こうしている間にも体内の魔力が消費され、それを補うように大気中の魔力が自身に流れ込んでくるのを感じている。

そう言えばどこかの学者が魔力は年々変化していると論文を出していたことを思い出す。結果として証明方法が無いために空想だと一笑されていたが、あながち間違いではないのかもしれない。

そんな事を頭の隅で考えているのはさておき、今はしゅんと首を垂れるウエンデイのケアである。

「んー、気にしないでいいよ♪魔法の修行にもなるし、知識も深められる。それに俺、泳げないからねえ。他にやる事もないんだよ♪」

「そうなんですか？」

「ああ、そうだよ。種族的な弱点というやつだね」

肩を竦めてなんでもないとやる風にするが、実際海辺となると行動は制限される。泳げないのは勿論、強い日差しは容赦なく肌を焼く。炎上しないとはいえ、避けてしまうのは無理もない。

「それよりも、ウエンデイちゃんこそ遊ばなくていいのかい？」

「私は、その……この魔法を早く習得したくて」

「その割には進歩は著しくないようだけど？」

「うう……」

ウエンデイの手に持つページは先ほどから進んでおらず、行き詰まっているのは明白。大の大人でも根を上げる複雑さなのだ、無理もない。それでも挑もうとする姿勢はカイトとして美しいとは思うが、何事にも限度というのはある。

凶星を突かれて半泣きのウエンデイに何を思ったのか、突然小脇に抱えて立ち上がると木陰から出てビーチの方へと脚を進める。

「ひゃあ!??か、カイトさん!??」

「カッカッカ♪行き詰まった時には息抜きが必要だよ♪」

実際、ここで無理をし過ぎても余計にこんがらがるだけだ。ならば少し遊んで頭の中をリフレッシュするのは悪くない。遊び呆けるのは論外だが、詰め込み過ぎるのもまた論外である。

「さて、遊ぼうじゃないか。ルーシイたちのように水遊びかい？それともエルザのように日焼け？ナツたちのように泳ぎの対決？なんでもいい。話しかければ輪に入れてくれる筈さ♪」

砂浜に降りしてその背中を軽く押し出す。けれどもウエンデイの歩は進まず、カイトの顔色を窺ってばかり。はて、どうしたのだろうかと頭を悩ませれば「あ、あの！」と勇気を出したウエンデイの言葉が飛ぶ。

「わ、私はカイトさんと、その、遊びたい、です……」

言葉尻を窄ませながらも、そう伝えたウエンデイ。顔を真っ赤にし

て自身の指を絡ませる姿は、なるほど庇護欲をそそるものがある。フェアリーテイルの小さな天使とは誰の言葉だったか。

精一杯の勇気を出したのであろうウエンディを一蹴するのは容易い。しかし、その後待ち受けているのはエルザからのキツめのお仕置きだろう。新人の教育ぐらいしろと剣を構える姿が容易に目に浮かぶ。

「あの、勿論迷惑じゃなかったらですけど」

「ああ、ごめんね。うん、俺とでよければ♪」

返事が遅いことに不安を覚えたのか、落ち込む様子のウエンディにそう声をかければ途端に表情に光が増す。

「けれど、俺は泳げないけどいいのかい？」

「大丈夫です！私、砂でお城作ってみたかったです！」

「ああ、もしかしてウエンディちゃん。こういうったビーチは初めて？」

「はい！だから、どうやって楽しめばいいかわからなくて……………」

考えてみれば不思議ではない。ウエンディはミストガンに連れられ化猫の宿にずっといたのだ。山の麓にあるギルドから足を伸ばせば海はあるものの、あるのは観光目的のものではなく船などを停泊させる港しかない。遊び方を知らないのも無理はないだろう。

「そう。なら、砂遊びと洒落込もう。海辺の近くでいいかい？」

「はいー！」

元気な返事をするウエンディに手を引かれて歩き出すカイト。魔力の循環もまだ時間がかかるようだし、遊ぶのも悪くはない。

「ねえねえ、ルーちゃん。アレ」

「アレ？……………あー、アレって」

「うん、だよね……………」

「『事案にしか見えない』」

「カツカツカ、うるさいよ、そこ。ああ、その人、警備兵呼ぼうとしない。事案じゃないから、決してそういうったものじゃないから！」

軽薄そうな怪しげな男と可憐な少女が戯れる姿は、側から見れば確かに事案である。駆けつけた警備兵に事情を説明するという一悶着もありつつも日は沈み、空はすっかりと月と星が浮かぶ頃。

午後からはしつかりとそれぞれが修行に励み疲れ切った一行は宿泊先の宿へ。価格がリーズナブルでありながらもしつかりとした設備に温泉にまで備えたそこで、男たちは盛り上がる。

「見せてもらおうじゃないか」

「ま……………お約束だしな」

「ずりいぞナツ!!? 先行くな!!?」

「く、食い過ぎたあゝ」

どうやらナツ、グレイ、ジェット、ドロイの4人は隣の女風呂を覗くつもりらしく、ここそこそと仕切りの穴を探していた。

「何が楽しいのかねえ」

それを横目で眺めながら湯に浸かるカイト。泳ぐのは無理だが、こうして浸かることくらいは可能なのだ。

「んだよ、カイト。ノリ悪イぞ」

「オマエは気にならねえのかよ?」

「生憎と、興味ないねえ」

種族が違うために人の裸を見ようと欲情することはないカイト。しかし、世の男が女湯を覗きたがる気持ちというのはわかる。なるほ

ど、これが思春期というやつだ、と自己完結しながら意識は温泉へ。身体は他と比べて動かしていないが、温泉に浸かれれば溶けていくものがある。こういったものがあるから、人の世も捨てたものではないのだと改めて再認識していた。

「ケツ、むつつり野郎が」

「見つけても教えねえからな」

「レビイたちには黙つとけよ!!？」

「うう、腹がく」

「カツカツカ♪好き勝手言うねえ♪」

ドロイは早くトイレに行きなくと軽く返して、疑問を覚える。はて、ならば自身は誰にならば欲情するのだろうか。同じ吸血鬼になれば欲情するかもしれないが、いかんせん生き残りは最早半端な吸血鬼である己だけ。ならば個体を増やそうとした際に誰にならば欲情するのか？

真つ先に思いついたのはミラジエーン。体内の悪魔を抑えるために悪魔因子を持ったためか、他と比べて魅力的に映るのは間違いない。サタンソウルを見に纏う時など最たる例だ。なるほど、それならば覗きの気持ちはわからなくもない。

次いで思い浮かべたのはウエンディ。滅竜魔導士が持つ魔力のせいか、只人よりも好感度は高い。だが、感覚としては親戚の子供くらいの遠い感覚であり、何より彼女は幼い。そう言った対象には映らず、精々が友愛くらいだろうと自嘲する。

まあ、何にせよたらればの話であり、無意味な妄想だ。愛を知らない化物には過ぎたものである。

「何やつ!!？」

その時だった。ようやく覗きスポットを発見し、いざと挑もうとした4人に向けてクナイが放たれたのは。下手人は間違いなくエルザ

であり、器用にも全員クナイの先端だけ頭に刺さっただけで軽傷である。

「ナツたちか？ならば構わんな、一緒に入るか？だが、カイト、貴様はダメだ」

「カツカツカ♪誘われても行かないよ♪」

ナツたちの患部を治療しながら仕切り越しに聞こえたエルザの声。それにそう返せば飛んでくるクナイ。覗かれるのは嫌だが、そう返されるのも頭に来たのだろう。仕切りをぶち抜き深々と頭に突き刺されたカイトは倒れ、ならどう返せば正解なのだとさめざめと泣く。

沈黙は金だと、知らない男なのであった。



修行2日目。

各々鍛えたかいあつてか早くも強くなっているという実感が湧いてきていた。馬鹿にされているメンバーの分までフェアリーテイルの力を見せつけてやるといふ気概も大きいだろう。

かく言うカイトも魔力の循環が上手く回っているのを感じて満悦。3ヶ月後には予想よりも遥かに良い仕上がりになることは想像に容易い。

そんな時だった。

「姫、大変です」

そんな言葉と共に現れたのはルーシイの星霊バルゴ。なぜか座っていたルーシイの尻の下からの登場である。

「どこから出てきてんのよー！！？」

「お仕置きですね」

無表情ながらも頬を朱色に染めたバルゴはさておき。

バルゴのいう緊急事態の内容とは即ち、星霊界の滅亡の危機。どうか力添えをと懇願するバルゴを見捨ててはおけないと盛り上がるナツたち。本来なら星霊界に人間は入らない筈だが、今回は特例。空気のない空間ではあるが、星霊の服を着用すれば問題ないとのこと。

「行きます」

返事を聞くや否や一同の下に現れる魔法陣。心の準備も待たずにそれが光ったかと思えばその場から消えるナツたち。残されたのは――

「何でオレたちだけ」

「置いてけぼり？」

「カッカッカ……いや、ほんとに、なんで??」

ジェット、ドロイ、カイトの3人。やっぱり星霊は苦手だと笑い、残されたカイトは仕方がないと修行を続ける。追いつく手段もなく、攫った星霊界を襲う手段もない。相手の出方を待つしかないのだ。そんな中ふと、思い出したことがひとつ。

「星霊界と人間界、流れる時間が違うらしいけど………大丈夫、だよね？」

その不安は約3ヶ月後、実現するのであった。

大魔闘演武―③

さて、ハッピー、シャルルまで含めた9人が星霊界に拉致されて暫く。数日内であれば巻き返しも効くだろうと樂觀視していたのも遠い昔。ひと月も音沙汰無しともなれば焦りが生まれてくる。

いや、まだ大丈夫だと自身に言い聞かせながら2月目。しかし同様はしっかりと現れているようで焼きそばのソースが濃ゆ過ぎたり薄すぎたりというミスが連発。

そうしてとうとう3ヶ月。大魔闘演武まで残り6日。繁忙期も過ぎてアルバイトも終わり、仕方なしに個人で焼きそばや焼きとうもろこしの屋台で修行兼資金稼ぎに勤しみながらカイトの苛立ちは最高潮にまで達しようとしていた。

「お、おい、カイト。落ち着けよ、な？」

「そうだって。全員無事だって！」

「カッカッカ、面白いことを言うねえ、2人とも。俺は至極落ち着いてるよ♪」

手元の焼きそばを混ぜながらそう言い放つカイトだが、いかんせん瞳が全く笑っていない。絶対にウソだろうとツツコミが入るが、カイトの苛立ちにブーストをかけているものがひとつ。それは空腹だ。

手元の焼きそばや焼きとうもろこしを食べても癒されない、空腹。吸血鬼本来の食事、血液が圧倒的に足りていないのだ。元々、身がバテているメンバーから少しずつ血液を貰うことで補う予定だったのだが、それがいなくなつて仕舞えば補給することはできない。

無闇矢鱈に襲うことはマカロフから禁止されており、例外があるとすれば明確な敵対を見せられた時のみ。それもこのビーチでは望み薄。精々が悪質なナンパかクレーマーくらいものだ。純粋な吸血鬼よりも燃費が良いとはいえ、それでも最低でも3ヶ月に一度は吸血が必要なのである。

まな板ごと切り伏せるとばかりに影の腕がキャベツを刻み、食材をかき混ぜる腕もいつもより乱雑だ。何より、陽に照らされた人々の健康そうな首筋が何より目に毒。肉を前にした獣のように飛びつこうとする意思を必死に抑えているのである。

「まあ、気持ちはわからないでもないけどよ。流石に大魔闘演武まで1週間で仕上げるとなるとな」

「また離れ離れは寂しいぜ、レベィ!!?」

おいおいと泣くドロイを尻目に、さて本当にどうしたものかと思える。と言っても取れる手段など皆無に等しい。人間界こちら側から星霊界あちら側に介入する手段などなく、救出は不可。ジェットとドロイに正体を明かし血を貰う案も却下。これ以上口を増やして秘密が漏れたら只事では済まないからだ。

どこかに敵対したことのある犯罪者でも現れないものかと願望込めたため息をひとつ。そんな時だった。淡い髪色の女性が現れたのは。

「ねえ、焼きそばちょうだい。3人前ね」

可愛らしいと美しい、そのちょうど中間辺りに位置するような顔立ち。ポニーテールから滴る海水が珠の肌を伝わり、その深い谷間に消えていく。綺麗どころの多いフェアリーテイルのギルドでも目を惹く容姿らしく、周囲の男共と同じように背後のジェットとドロイも感嘆のため息を溢していた。

女性の背後では彼女そっちのけで見惚れていた男共の頬に紅葉が刻まれているのだが、それはさておき。軽い返事と調理を済ませ差し出す商品。

「ありがとう、はい」

「はいよ、ちょうど……んっ」

受け取った代金と共に渡された一枚の紙。はて、これは？と疑問を問いかける前に女性はすたころとビーチの方へと消えてしまった。

「おいおい、何もらったんだよ!!?」

「ま、まさか連絡先か!!?」

「カッカッカ♪無粋だねえ」

紙を覗き込もうとする2人を擦り抜けて、その紙を上空へと放る。それを影から出てきた鴉が掴み広げると、視界を共有したもう一羽の目を通して読む。

「ふむ……ジエツト、ドロイ。店番をお願いしてもいいかな?」

「ホントに連絡先だったのか!!?」

「オ、オレたちも一緒に!!?」

「ダメだよ♪」

着いてこようとする2人を撒くために一同の影へと潜るとビーチからほど近い森の中で姿を表す。さて、目的地はと空を飛んでいた鴉と再び視界を繋げようとして、その動きが止まった。

「おやおや、これはこれは……神様に感謝でも捧げたい幸運だねえ」

「神を信じていたのか、君?」

「まさか。でも、今この瞬間くらいなら信じてやってもいいかもねえ」

軽口を叩くカイトの視線の先。そこにはかつて評議院に潜入し楽園の塔を築こうとした人物。記憶を失い牢に捉えられたはずのジエラールがそこにいた。

「まさかこんなに早く合流できるとはな」

「まあ、こんな熱烈なラブレターをもらったらねえ」

手に持つ紙をひらひらと仰ぐカイト。西の森で待つの一文しか記されていないが、その隅には魔女の横顔のようなギルド紋章が刻印されている。最近巷で噂の魔女の罪クリムソルシエルのものだ。闇ギルドを狩る非公認の闇ギルドと噂されてはいるが、正規ギルドに手を出す確証はない。偵察がてらと気楽に来てみれば思わぬ再会だと自嘲する。

「さて、後ろにいるのはウルティアかな？まさか元悪魔の心臓までいるとはねえ。そうになると、メツセンジャーの彼女も脛に傷でもあるのかな？」

「私と同じ元悪魔の心臓よ。あの子には、外の世界を見て欲しかったから……………」

「それで闇ギルド狩を？カツカツカ、そいつはまた酔狂だねえ」

軽口が気に障ったのかキツと鋭い視線をぶつけるウルティア。けれどもカイトは薄ら笑いを浮かべて肩を竦めるだけで堪えた様子は無し。ウルティアの視線がますます強くなる。

「やっぱり反対よ！信用できないわ!!？」

「カツカツカ、随分と手厳しい♪」

「落ち着いてくれ、ウルティア。彼の能力の有用性は君も知っているはずだ。カイトも、あまり煽るのはやめてくれないか？」

我慢の限界なのか、堪らずカイトを指差して詰め寄るウルティア。それを窘めるジェラールを愉快とばかりに笑うカイト。中々の力オスである。

一頻り笑ったカイトは満足したのか目尻の涙を拭いながらジェラールに問いかける。

「まあ、談笑はこのくらいに。それで？7年ぶりの再会を喜ぶために呼んだんじゃないだろう？」

「ああ。本当はエルザたちが揃ってからにしたいのだが……背に腹は変えられない」

「カッカッカ♪さらっと毒を吐くねえ」

実際、この少しの問答で本当に依頼しても大丈夫なのかと不安を覚えたジェラルル。間違いなく自業自得なのであるのだが、それはさておき。「実は……」とジェラルルが口を開いた瞬間、グルグルと獣が喉を鳴らすような音がなった。

はて、この辺りに獣はいないはずだがと辺りを見渡すジェラルルとウルティア。しかし、その疑問は目の前で喉を隠すカイトを見て解消された。言葉を待つようにじっと見つめられる視線に耐えかねたカイト。諦めたように喉から手を離すと両手を挙げる。

「はいはい、そうだよ。喉が渴き過ぎて鳴ったんだよ」

「どんな生態よ!?」

「鳴るだろう、普通。特に、元悪魔の心臓なら知ってるだろう？俺の同族いたんだし」

「やめて、あいつの事思い出させないで」

ウルティアがカイトを信用していないのは本人の軽薄さもあるが、間違いなく悪魔の心臓……というよりも、ハデス自身の手駒としていたエリゴスにも責任があった。

新たな依代を作るために母体として選ばれたウルティア。それから始まる母体になれと言うストレートなセクハラ発言。顔を合わせると度にそれなのだから吸血鬼に対して好感など持てるはずもない。ハデスが仲裁しなければ間違いなく殺し合いに発展していただろう。

それはさておき
閑話休題

堰を切ったように鳴るカイトの喉。話が進まないジェラルルが苦笑いを溢すと右の袖を捲る。

「吸うか？」

「おや、いいのかい？」

「構わないさ」

「そりゃ願ったり叶ったり。本当は異性の方が吸収がいいんだけど……」

「絶、対、嫌ツ!!？」

「だろうねえ♪」

両手を抱いて全力で拒否をするウルティア。予想はしていたらしく、肩を竦めるとジェラルルの手を取り森の奥へ。吸血の瞬間を他人に見られるなど恥ずかしいからだ。それこそ全裸で街中を歩くのと変わらないほどに。

捲られた袖からではなく襟を少し乱すと、そこから頸になる首筋に牙を突き立てるのであった。



「ウルティア〜！」

「あら、メルデイ。遅かったじゃない」

「ごめん、なんだかいっぱい声かけられちゃって」

暫くして、ビーチの方から戻ってきたのは元悪魔の心臓のメルデイ。天狼島を脱出した後からずっとウルティアと共に行動し、現在は魔女の罪として贖罪の日々を送る女性。

本来ならばもう少し早めに到着する予定だったのだが、その容姿に惹かれてか多数のナンパに絡まれて遅くなってしまった。手に持つ焼きそばはすっかり冷めてしまっている。

「あれ？ジェラルルは？」

「あいつと一緒に森の奥よ」

「え、もう着いちゃったの？」

「迷った先がここだったみたいよ」

棘を隠さないウルティアの言い方に仕方がないと苦笑い。それほどまでにエリゴスとの関係は悪かったのだ。それと同族のカイトであるならば好感度などマイナスである。

余談ではあるが、カイトが吸血鬼だと言う情報はジエラール経由であり、あまり他言しないように言われている。初め聞いた時は驚いたが、少なくとも屋台で見たカイトはエリゴスの様に人を家畜の用には見ていない。少し愛想笑いがぎこちないただのお兄さんだ。

そうしていれば不意に、近くの茂みが揺れる。そこから出てきたのは案の定ジエラールとカイト。しかし、様子がいつもと違っていた。

「はあ、はあ……………」

赤く上記した頬に額から薄く流れる汗、そして潤んだ瞳は色気を含んでおり、口から溢れる荒い息がそれに拍車をかけている。同性であろうと見惚れてしまうような色香を振り撒くジエラールの隣には軽薄な笑みを浮かべるカイト。心なしか肌に艶が出ており、満足そうにも見える。

「カッカッカいいやあ、久しぶりだから搾りすぎた気もするけど……………大丈夫かい？」

「大、丈夫だ」

ジエラールは勿論、カイトも見目が悪いわけではない。そんな2人が事後のような雰囲気醸し出していれば目を奪われてしまうわけ。特に幼い頃からずっと悪魔の心臓に所属し、今もなおウルティアと行動を共にするメルデイ。圧倒的に色恋経験のない彼女には目の毒であった。

知識はあれど初めて見た光景に目を手で覆ってしまうが、ぼつちりのその隙間から覗いている。いつもは頼りになるジエラールからは考えられない弱りっぷり、そしてそれを肩で支えるカイト。メルデイ

の中の扉が開きかけていた。

「こほん」

「ひうつ!!?..!!?..」

ウルティアの咳払いに我を取り戻したメルデイ。開きかけていた扉は閉じたものの、名残惜しいような勿体無いような、そんな悶々とした気持ちで胸中で渦巻きまた赤面する。

それを見てないふりをしながらウルティアが睨むのはカイト。片手を上げて降参のポーズを取るも、軽薄な笑みは止めない。

「やりすぎよ!!?..」

「カツカツカカ♪歯止めが効かなくてねえ。そんなに怒らないでよ。皺が増えるよ?..」

「誰のせいよ!!?..」

ジェラールを奪い返しながらカイトを殴るといふ器用な事をして見せたウルティア。腕の中で大丈夫だと繰り返すジェラールだが、どう見ても大丈夫ではない。今日は休ませた方がいいだろう。

「はあ.....話は明日ね。昼にまたここに来てもらえる?..できればエルザたちを連れて」

「あいよ。まあ、^{吸血}食事もできた事だし、大人しく従うよ♪」

言外にお前では話にならないと言われても堪えた様子なく、いつそいつも通りのカイト。そう言ったところでヘイトを稼いでいることに気がつかないのである。

頭に血が昇るがここはぐつと我慢。メルデイにビーチまでの道案内を頼むとジェラールを休ませるために仮の寝ぐらへと。どうか明日までに話の通じる相手が帰って来ますようにと祈る他なかった。

「ヒゲー!!??時間かえせー!!??」
「えー……………」

ビーチに戻ってみれば空に向かって叫ぶルーシイと倒れ伏す面々。帰ってきたらことに安堵すればいいやら、なぜ絶望の淵に立たされたように沈んでいるのやら、状況が読めずに思わず声を漏らすカイトであった。



星霊界から帰還を果たした翌日。太陽も真上に昇っているというのに帰還メンバーの顔色は優れない。何せ星霊界と人間界の流れる時の速さに飲まれ、この3ヶ月を無意味に過ごしてしまったのだから。

星霊たちからの歓待を受け1日だけならと気の緩みが招いた結果とも言ふべきか、はたまた喜びを優先してほぼ拉致の様な強行に出た星霊を責めるべきか。そんな葛藤さえ湧かないほどに絶望している。

「はあ……………いや、君たちに非はないのだけれど……………はあ」
「これ見よがしにため息ついてンじゃねエ!!??」

そう言い返すグレイだが、カイトの言いたいこともわかるのかそれ以上は追求しない。わかっているのだ。決意を決めた大魔闘演武への出場、その期限は移動を排しても残り5日。そんな短い間にどれだけ修行を重ねようとも追いつけないことを。

「むうう!!??今からでも遅くない!!??残り5日間で地獄の特訓だ!!??おまえら全員覚悟を決めろ!!??寝るひまはないぞ!!??」

「ひええ〜!!??」

「あー、意気込んでいるところ悪いんだけどさ、エルザ。実はちよつと

野暮用があるんだよねえ」

「ん？なんだ、行けばいいだろう？」

「そうなんだけど……うーん、まあ、みんなついて来ておくれよ」

「オイ、行き先だけ教えろ。絶対にお前は先にいくな」

そう言つて向かった先は先日と同じ西の森。そうして再会を果たすジェラールとエルザ。ようやく話の通じる相手が来たと、ウルティアは内心ガッツポーズを決めていた。

「つて言うか、先に教えりやよかつたじゃねえか」

「カッカッカ♪サプライズだよ、サプライズ♪」

吸血という対価をもらった以上無碍にはできず、こうして案内したカイト。その頬には遠回しな事をした制裁なのか、くつきりと拳がめり込んだ痕があった。

それはさておき。

ジェラールたちがエルザたちを集めたのは再会を喜び合うわけではない。依頼があるからだ。それは大魔闘演武開催中に感じる妙な魔力、その正体を突き止めて欲しいと言うもの。

ゼレフにも似た妙な魔力は毎年開催中に感じられており、その不信感に煽られての依頼。本来であればジェラールたち魔女の罪が独自に動きたいところではあるが、当然警備は厳しく、そうでなくともお尋ね者の彼らがそう気安く街を歩けるわけがない。

雲を掴むような話だがエルザはこれを承諾。報酬として用意されたのは能力の底上げ。魔導士の中に眠る普段使いの魔力の器とは違う第二魔法源セカンドオリジンをウルティアの時のアークで強制的に解放されるというもの。

渡りに船とはこの事で早速一番檣に名乗り出たのはナツ。身体に魔法陣を描かれ、そして――

「か………は………がっ!!？」

白目を剥いていつそこから死んでしまうのではないのかと思うほど苦しみの最中にいた。潜在能力を引き出すというのは簡単ではなく、その身に掛かる負担と苦痛は想像を絶する。

「私たちも、アレ……やるの？」

「泣きそうです」

「カッカッカ♪まあ、頑張って」

魔法を2つに分けて扱っているカイト。誰に言われずとも既に第二魔法源は会得済みであり、心の中で安堵を溢す。声援を送ることしかできないのが苦しいが、そう言ったところで何の励ましにならないことは知っている。

そうして全員に魔法陣が描き終わり、悲鳴と苦痛の声が何重にも重なる頃には陽は沈み月が顔を出す時刻へと。一箇所にも長居することできないジエラルたちとはここで別れることに。

「お陰様でみんな動けそうにない」

「何でアンタは平気なの？」

「カッカッカ♪エルザだからねえ」

間違いなくエルザにも描かれていたはずの魔法陣。それが1時間も経たずに消えてしまったのだ。第二魔法源の会得は問題なく、流石はエルザだと賞賛と皮肉をひとつ。

「大魔闘演武の謎の魔力の件、何かわかったら鳩で報告して」

「了解した」

「競技の方も陰ながら応援してるから頑張ってちょうだい」

「本当は観に行きたいんだけどね」

「おや、なら変装でもするかい？」

「やめておくよ。……それじゃあ、また会おう」

「バイバイ」

「みんなによろしくね」

そうやって森の奥へと去ってしまおうジェラルルたち。名残惜しそうに見つめるエルザの視線を振り切るかのように歩みを進めるジェラルルに迷いはないらしい。

(婚約者、か………相変わらずウソが下手な奴だ)

それはジェラルル本人から聞いた言葉。だが、それをウソだとエルザは見抜いていた。そうまでして共に歩む事を拒まれた、とは思っていない。だが、本人が数々の罪を背負いそう決断したのであればエルザが口を挟む事ではないのだ。

今はただ記憶を取り戻し、贖罪に励んでいる。それだけでいいのだと、薄く笑う。

「おや、エルザ。やっぱり久しぶりの再会は嬉しかったようだねえ」

「当たり前だ。………ところで、何を書いている？」

「ああ、これ？」

なにやらゴソゴソと書いていると思っていれば、カイトが取り出したのは一冊のノート。見出しには「エルザ、涙の失恋!?!」と描かれており、ゴシツプのような話と涙するエルザとジェラルルの後ろ姿の簡易的な絵が描かれていた。

何の事はない、カイト自身が人の心を学ぶために書いた自作のノートだ。これまで体験した中でわからない事などをまとめ、読み返したり意見を聞いたりしているのだ。

しかし、この場では悪手。最大のほかである。見出しを読んだ瞬間にノータイムで繰り出される拳。そのまま仰向けに倒れるカイトのマウントを取ると、休む間もなく殴り続けた。

「ちよ、まつ!!? エル、ぶっ!!? ベっ、にぎっ!!? あおっ、てば!!? なぶ!!?。」

そのまま薄れゆく意識の中、理不尽だと嘆くカイト。1番泣きたいのはジェラールとの会話を盗み聞きされ、それを記録に残されたエルザなのだ。

人の恋、悪魔は知らず。そんな言葉が生まれそうなくらいには疎いカイトなのであった。

大魔闘演武―④

フィオーレ王国首都、クロツカス。

花咲く都とも謳われるこの街はいつも以上の盛り上がりを見せていた。何せ大陸一の魔導士ギルドを決めるのだから、出場するギルドはもちろん、それを目当てにする観光客も多い。

そんな周囲からの視線を集める街中のカイト。注がれる視線に好意的なものはなく、嘲笑や侮蔑が含まれたものばかり。

無理もない。大魔闘演武が開催されてから現在、フェアリーテイルは良い戦績を上げれていないのだから。一頻り笑った後は今年は蛇姫の鱗だ、いや剣咬セイバートウリスの虎だと優勝予想に励む民衆に一瞥もくれないカイト。

自身だけでなくギルド全体が笑われてるとなると腹が立つが、ここで手を出しては大魔闘演武に参加どころか名声が更に損なわれてしまう。どうにもできないもどかしさをため息に変えて溢していた。

「やっぱり剣咬の虎だろ!!? なんとたってあのステイングとローグが………うをつ!!?」

「いやいや、今年は蛇姫の鱗からはジュラが………いいつ!!?」

民衆の中でも一際声の大きかった2人組の男たち。そのどちらもが突然転んでしまい顔から地面にダイブを決め込んでしまった。

無論、犯人はカイトである。足元の影を操って犯行に及んだカイト。あからさまに手を出せば怒られるが、大人しく静観するほどお人よしではない。素知らぬ顔で現場を離れるカイトだが、限界を感じたのだろう。気持ちとは裏腹に透き通る空を見上げ、忌々しくも呟く。

「……………さてさて、ここはどこだろうねえ」

人通りの激しい大通り、沢山の視線を浴びながら絶賛迷子中のカイ

トであった。

なんとか開催前日までに到着することのできた海修行のメンバーたち。ひとチーム5人＋リザーブ1人の計6人での出場となっており、フェアリーテイルからはナツ、グレイ、エルザ、ルーシィ、ウエインディの5人がメイン、カイトはリザーブ枠として参加することとなっている。他にもないジェラルドからの依頼のためだ。

メインの5人は本日の日付が変わる前に指定された宿に待機していなければならず、それまでに集合していなければ失格。なので制限のないカイトは早速調査にあたったのだが、ものの見事に迷ってしまったのだ。

戻れば確実にエルザからの大目玉なので気後れするが、制限がないとはいえこのまま戻らない選択肢が取れるはずもない。

「あら、カイト。どうしたの、こんなところで？」

さて、どうしたものかと考えていれば背後からかけられた声。振り返れば他にもない、ミラジェーンがそこにいた。フェアリーテイル所属と言えどその美貌は周囲の視線を釘付けにしているが、慣れているとばかりに動揺している様子はない。

自分の時とは大違いだと内心嘲笑しながら、カイトはいつも通りの胡散臭い笑みの仮面を被った。

「おや、ミラちゃん。君の方こそどうしたんだい？おじいちゃんからまだ到着してないって聞いていたけど？」

「ついさつき着いたのよ。久々の王都だから散歩中なの」
「そうなんだ♪」

交わす言葉は少なく、互いに笑みを浮かべるだけ。けれどそこから動こうともしない。3ヶ月前、もつと言えば7年前の天狼島の方が尾を引いているのだ。

カイトとしてはあそこまで好意を向けられた経験がなく、また返事

も保留中なのでどうしていいかわからず、頭の中で解決策を模索。そのどれもが上手くいかず、最悪地面のシミとなる結末になってしまうために余計に動けない。

ミラジエーンとしては恋心を自覚して告白したのはいいものの、是にしろ否にしろ受け止める覚悟ができていない。それも、期間が空いたのだから余計に。この3ヶ月どれだけリサーナに発破をかけたことか。その度に顔を赤くしたり、聞こえないふりをしていたのだが、今回ばかりは違う。いい加減に進むべきなのだ。

「んんっ！カイト、この後暇かしら？」

「あー……………そうだねえ。やる事もないし、後は応援の準備だけだよ」

「ならよかった。それなら、デートしましょ」

そう言っただけで差し出された手に一瞬、カイトの身体が硬直する。デートというものは知識としては知っているし、街中や依頼の道中で見かけたこともある。しかし当然ながら自身にそのような経験はなく、故に作戦を立てづらい。

どこに案内すればいいのか、何をすればいいのか、どうすればいいのかかわからないのだ。

返答に困るカイト。受けるにしろ拒否するにしろ行き先は地獄。最悪は今日が命日になるかもと恐れていた。女性が男性に気に入らないとビンタを喰らうシーンを半端に見たことがあるからこそのぶっ飛んだ発想なのだが、さておき。

だが、そんな逡巡も一瞬のこと。手を取らないことに不安を覚えたミラジエーンの悲しげな瞳を見た刹那、一も二もなくその手を掴んでいた。

「俺で良ければ、喜んでだよ♪」

途端に営業用ではなく、本心からの笑みを浮かべるミラジエーン。

対照的にカイトの内心は大荒れだ。何の考えもなく、反射的にしてしまっただから後には引けない。王都の地理にも店にも詳しくないが、とにかく考える時間が欲しいと取り敢えずは近場のレストランへ。

王都の通りを眺める事のできる2階建てのレストラン。そのテラス席に座り、その隣で兄弟子のリオンに絡むグレイと、そんなものは無視して意中のジュビアに絡むリオン、そして私にも絡んで欲しいとグレイに絡むジュビアという面白い席があるというのに、緊張のあまりそちらに気づきもしない。

この3ヶ月に何があったのか、どんなことをしたのか。そんな談笑と共に昼食に舌鼓を打つも、カイトの背中には冷や汗が伝っていた。

(もうすぐランチも終わり。さて、この後はどうする？ミラちゃんも散歩していたと言ってたけど……………取り敢えずは散策するとして、買い物か？いつそ、このまま解散は……………ダメだ、殴られる未来しか見えない。と言うより隣が煩くて纏まらない!!?)

どこのどいつだ、と心の中で悪態を吐きながらも笑顔の仮面を外すことはない。身に染みた癖であり、カイトなりの処方術である。だが、長年付き添っているミラジェーンには見え透いていた。

(やっぱり突然デートに誘うのは不味かったかしら……………。でも、いい加減に前に進まない。これ以上リサーナに弄られるのは嫌だもの。これからどうしようかしら……………お買い物はカイトは興味ないだろうし、演劇やサーカスは今の時間どこもやってない。このまま散歩が無難かもしれないけど……………ああ、ダメ。隣がうるさくて考えが纏まらないわ)

こちらもちちらで隣に悪態を吐きつつも、笑顔は崩さない。頭の中は反比例するように大荒れのだが、そんなものは曖にも出さない。看板娘の称号は伊達ではないのだ。

そんな愉快とも物々しいとも取れる雰囲気の中、ちらりと視界の端で捉えた人物にカイトは好機を見出す。

「ミラちゃん、悪いけどお手洗いに行ってくるね」

「ええ、いつてらっしゃい」

席を立つと同時に足早に目的の人物に近づく。都合のいいことに1人だった彼の襟首を掴むと「メエン!?」という声と共にトイレへと。

「ゴホッ!!?ひ、久しぶりの再会には激しすぎやしないか、友よ」

「ごめんよ、一夜。けど、緊急事態なんだ」

連れ込んだのは一夜。カイトにとってギルド外の信頼できる人間の1人であり、友と呼べる1人だ。7年の時を経て更にイケメンに磨きがかかったと内心思いながらも、真剣な眼差しのカイトを見て一夜も襟を正す。

「む?何かあったのかね?」

「うん、実はね……………その……………」

「……………いや、友よ。言葉など不要だ。ズバリ、君は今デートプランに迷っているのだろうか?」

カイトの内心を言い当てた一夜に言葉なく驚く。その表情に満足いったのか得意げな一夜。青い天馬のエースであり、外はともかくギルド内では誰しもが尊敬する兄貴分。数々のおすすめスポットを知り、数多の恋に敗れてきた男は伊達ではない。

前髪を掻き上げながら渾身のポーズを決める一夜。関心と尊敬の拍手がカイトから送られるが、側から見れば異様である。

「ふっふっふっ。私ほどになればそれくらい造作もないさ」

「すごい、流石は一夜だね。じゃあ、どうすればいいかな？」

「残念だが、友よ。恋にマニュアルなんてものはない。よって、君に送るアドバイスはひとつしかない」

ビシツと刺された指と真剣な眼差しがカイトを貫く。姿勢を直し生唾を飲みながら言葉を待つカイト。そうしてゆっくりと一夜が口を開いた。

「まずはデートを楽しむことだ!!？」

「……………はい!？」

「わかるとも。相手を喜ばすにはどうすれば良いか、楽しませるにはどするか悩むものだろう。しかーし!!？その焦りや緊張は相手に伝わってしまう!!？それでは本末転倒、楽しいデートになるはずもない!!？」

「なる、ほど……………」

「よって!!？君がすべきことはひとつ!!？今このデートを楽しむことだ!!？デートプランを練るなどその後!!？今の君には100年早い!!？」

力説する一夜だが、カイトは完全に置いてけぼりだ。理解ができていないどころか、脳が処理しきれていない。そんなカイトの肩にポンと手を置いた一夜は満足げに頷くと親指を立てる。

「応援しているぞ、友よ。さあ、行ってくるのだ!!？」

「ちよ、一夜!？」

そのままぐいぐいとトイレから押し出されたかと思えばドアは閉められ退路を絶たれる。アドバイスにもならないアドバイスを貰い、

少しだけ一夜の事が嫌いだと愚痴るカイト。第一、デートを楽しむなどどうすればいいと言うのだ。

(楽しむ、ねえ……………)

納得はしていないが、確かに一理あるとため息を溢す。相手を楽しませるために、まず自身が笑顔でなくてはならない。それが道化として名を売る身としての矜持だ。

「あら、遅かったのね」

「ごめんよ、ミラちゃん。それじゃあ、行こうか」

「どこどこ？」

「なに、簡単な食後の散歩さ♪」

カイトにとつての楽しみなど、こうして身内と会話するくらいのものしかない。演劇やサーカスも好きではあるが、どちらが好きかと言われれば比べるまでもない。

迷いが吹っ切れたように笑うカイトに釣られて、ミラジエーンも笑う。差し出された手を掴み、大通りへと向かうのであった。



それから散歩へと繰り出した2人。先導するのがカイトなものだから時折王国の外へと足を伸ばそうとするがそこはミラジエーンが静止する事でうまいこと回っていた。

大魔闘演武の舞台となるドムス・フラウ。フィオーレ王の居城である華灯宮メルクリアス。その他街中の大道芸や繁華街を見て回ったりと王国の散策に楽しんでいる様子。

だが、時間は有限であり陽をすっかり沈むころ。それでも明かりが灯る街中で、噴水の淵に座って2人は一息入っていた。

「ふう、流石に疲れたわね」

「カツカツカ、楽しめたかい？」

「ええ、もちろんよ」

手荷物は特になく、本当にただ散歩のみで過ごした今日一日。すれ違う人々に羨望と嫉妬の視線を向けられているが、世界に2人しかないと言っても言うかのごとく2人の視界には入っていない。

微笑み合い、けれど肩が触れそうで触れない距離を維持するのは見るものを安堵させ、同時に焦ったいとも思わせる。けれど、その均衡を打ち破る様に先に動いたのはミラジエーンの方だ。

「ね、ねえ、カイト。天狼島の件、なんだけど……」

ドキリ、とカイトの作り物の心臓が跳ねた。

「その、返事をそろそろ、聞きたいわ」

恥ずかしげに、けれども視線を逸らす事なくミラジエーンの双眸がカイトを貫く。愛に疎いと言うカイトでも、今日一日が楽しかったことは間違いない。他の誰とも違う、彼女と共にあったからこそその感情も認めざるを得ない。

街明かりに照らされる薄紅色の頬が、涙を薄く溜める双眸が、弱々しく重ねられた手が、その全てがカイトを惹きつける。

これが愛と呼ばれるものなのか、それとも契約者故への感情なのか、区別はつかない。しかし、異様に乾く喉を自らの唾液で潤しながら、カイトは素直な返事を告げる。

「……………ミラちゃん、おれっ……………俺は……っ」

「こんなトコにいたのか」

ふっと、カイトの言葉を遮って現れたのはラクサス。人混みを掻き

分けての登場に2人は思わず飛び退き、最初よりも距離を広げてしまった。カイトに至っては噴水に落ちる始末である。

そんな2人の行動に疑問符を浮かべ、そしてラクサスは答えを導き出した。

「……………スマネエ、邪魔したな」

「待って!!?この状況で帰らないで!!?」

気を利かせて踵を返すラクサスをミラジエーンが必死に繋ぎ止める。ここでラクサスがなくなつた所で恥ずかしさが増すだけであり、同じ雰囲気になる保証はない。

襟首を掴まれて顔を青くするラクサスの後ろ姿を、冷えた事で過去を振り返ってしまったのだろう。羞恥で顔を両手で覆うカイトが噴水から起き上がった。

「あー……………んんっ!ラクサス、どうかしたのかい?何か用事でも?」

「ゲホツゲホツ!!?いや、まだ時間はあるんだ。10分そこらなら大丈夫なんだが……………」

「うん、その気遣いはいらぬよ。頼むから行かないでくれ」

ラクサスとしては幼い頃からの仲である2人がいい雰囲気なのは応援したいと思っているし、軽率に邪魔してしまったことは後悔している。だが、当の本人たちからそうまで言われてしまつては仕方がない。

ミラジエーンに絞められた襟元を戻しつつ、伝言を告げる。

「オレとミラ、あと他に3人。大魔闘演武に出ることになった」

「あれ?出場はナツたちに任せるはずじゃなかったの?」

「ああ。だからうちからは2チーム出場するんだよ」

確かに、大会のルールにはひとつのギルドにつきひとつのチームとは記

載されていない。だが、それはそれでありなのかと考えてしまう。最悪同ギルドでの潰し合いもあるのではないかと考えるが、ことフェアリーテイルに至ってはそれはないかと考察する。むしろ、ナツ辺りなら闘志を燃やしそうだ。

「カイト、お前はお前でやることがあるみてエだが、試合は見逃すんじゃないぞ」

「無論だとも♪それならそろそろ指定の宿に戻らないとだね♪ほら、ミラちゃん。恥ずかしがってないで立って」

ラクサスを放した後、恥ずかしさのあまり両手で顔を覆って地面に伏していたミラジェーン。それを強制的に立ち上がらせるとそのままラクサスへと。

怪訝な顔をするラクサスにひらひらと手を振って噴水の向こうの広場を指差す。それだけで調査を再開するのだろうかと察したラクサスは「迷ったら必ず誰かに案内してもらえよ」とだけ告げると、ミラジェーンの手を引いて人混みの方へと姿を消す。

見えなくなるまでそれを見送ると、安堵のため息をひとつ。そして同時に後悔の念が込み上げる。

「何をやってるんだらうねえ……」

街の灯りで見えない星空を仰ぎながら溢す独り言。

ミラジェーンが自身に好意を抱いていることは、言われずとも知っている。だが、それに応えるわけにはいかないのだ。

何せ自身は人でなし。どれだけ願おうと覆すことのできない人外。この先待ち受けているであろう彼女の輝かしい人生に、影を刺すわけにはいかないのだ。化物は、1人寂しく朽ちていくのがお似合いだ。

だと言うのに、自身は今その思いに反して気持ちに応えようとしてしまった。それが情けなくて、今一度自身に言い聞かせる。己は化物なのだ、人と分かり合えて隣に立つことはできても、共に生きるこ

とはできない日陰者なのだ。

奇しくもジエラルがエルザを振ったことをきつかけとした、カイトなりの答え。それでもまだ結論を出して日が浅く、未だ胸に燻るものはある。

「はあ………調査再開といきますか」

これ以上考えても坩堝に嵌るだけだと悟り、意識はジエラルの依頼へと。しかし、こうも街中に魔導師が多くては魔力の流れも何も掴めたものではない。

足元から鴉を飛ばし、カイト自身は噴水の淵へと再び座る。怪しい人でも見つかれば僥倖だと視界を共有する。

暫くして、王城近くを飛ぶ鴉の視界に何かが映った。一瞬のことで見逃しそうになるが、拭えぬ違和感に鴉を急接近させれば2つの倒れ伏す影が。

「ツ!!?ウエンデイちゃん!?!」

『大魔闘演武にお集まりのギルドのみなさん、おはようございます。これより、参加チーム113を8つに絞るため予選を開始します』

思わず叫ぶカイトに合わせて12時を告げる鐘が鳴る。それと同じに街の中心に現れたカボチャを被った道化のようなマスコットの巨大立体えいぞうが現れ、大魔闘演武の開始が宣言されるのであった。

大魔闘演武―⑤

大魔闘演武予選から一夜明け。

巨大迷路を攻略した上位8チームが出揃い、いよいよ本戦となった。フェアリーテイルから出場した2チームも無事出場が決まりお祝いムードかと思いきや、そうもいかない。

何せ出場予定であったウエンデイが何者かに襲われたのだから。

外傷は特にないが一度に大量の魔力を奪われた為に体力が落ちる魔力欠乏症へと陥ったウエンデイ。フェアリーテイル顧問薬剤師のポーリシユカの助けもあり、安静にしておけば問題はない。

(さて、どうしたものかねえ)

件の下手人を許すつもりはない。フェアリーテイルを狙ったものはわからないが、この妨害工作の犯人は魔導師であることは容易く推察がつく。だが、この広い王都、それも数多のギルドが集まる中探し出すことは不可能に近い。

それにジェラールからの依頼もある。圧倒的に手が足りないのだ。

「それにしても、まさかねえ」

観客席から出場チームを眺める中、一位通過のチームが入場する。フェアリーテイルBチーム。メンバーはミラジエーン、ラクサス、ガジル、ジュビアに加え、なんとミストガンに扮したジェラール。

なんでも外からの捜査には限界があり、内部からの捜査に踏み切る為だとか。バレた場合間違いなく出場停止を喰らう明確なルール違反。よくマカロフが許したものだど横目で流し見る。そして、その隣にいる人物を見て思わず二度見した。

「フレーフレー、フェアリーテイル♪」

観客席の淵に腰掛けて無邪気に腕と脚を振る金髪の少女。頭の両脇に羽のようなモノが生えた彼女の名はメイビス。他でもないフェアリーテイルの創始者のひとりである。

ギルドの紋章を持つ者以外見えないとはいえ、突然の登場に驚きを隠せない。

「…………カイト、粗相のないようにな」

「カッカッカ♪なんて名指しなのは聞かないでおくよ♪」

観客席にいるメンバーの中で最も動きの読めない相手に釘を刺すマカロフはさておき。

1日に各チーム1名を選出しそれぞれの種目に当たる競技パートと各チーム一対一で戦うバトルパートに別れそれが7日間続く今大会。順位により得られるポイントが代わり、最終的に最多ポイントを獲得していたチームの勝利である。

出場チームを順位順に紹介すれば

8位フェアリーテイルAチーム

7位四つ首の猟犬クワトロケルベロス

6位人魚の踵マインドヒール

5位青い天馬

4位蛇姫の鱗

3位大鴉の尻尾レイザンテイル

2位フェアリーテイルBチーム

そして1位はここ数年で頭角を表し、大魔闘演武開催から今まで優勝続きの剣咬セイバートゥースの虎

その人気は底知れず、登場しただけで歓声が鳴り止まない。5人の戦闘を歩くのはギルドの双竜の片割れステイニング、そしてその後ろをローグが歩く。名声に違わぬ実力派ギルドの中でも五本指に入る実力者。その2人ともが滅竜魔道士と言うのだから嫌でも注目を浴びてしまう。

だが、カイトの視線はそちらにはなく大鴉の尻尾へと。7年前までは闇ギルドと認定されていた、マカロフの実子であるイワンがマスターのギルド。今年に入り認可を貰い、厳しい審査を通過して正規ギルドへとなったようだが何か裏があると考えていた。

現に仮面を被る大柄な人物の肩に乗る猿のような小動物。それが魔法でウエンディの顔に化けたかと思えば倒れた演技をするのだから。下手人は間違いなく彼らであり、そして意図は見えないがフェアリーテイルを狙った妨害を目的としているのは明らか。

思わず拳に力が入るが、今この場で暴れては皆の努力が無駄になると無理やり気持ちに蓋をする。この怒りは時期がくれば過不足なくお見舞いするのだと、心を落ち着けるカイト。

そうして始まる大会1日目。結果は――

「惨敗、だねえ」

「まだ初日だ。巻き返しは効く」

結果としてフェアリーテイルは2チーム並んで8位と7位。競技内での大鴉の尻尾の妨害もありこの順位になってしまった。現在は酒場の2階を貸切にしての反省会。

といっても、そこに落ち込んだ雰囲気はない。むしろやる気に満ち溢れて騒ぎ出すほどだ。カイトの隣に座るラクサスにも焦りはなく、既に明日の試合に目を向けていた。

それにしても、とカイトは考える。

大鴉の尻尾のフェアリーテイルを狙った妨害は確かに厄介。マカロフはフェアリーテイルの名声を更に貶めるためだと言っていたが、既に嘲笑の対象になっているギルドへの攻撃としては弱い。何か別の目的があるはずだ。

そして、更に厄介なのは剣咬の虎。初日に参加したのはルーファスとオルガという2人。数あるデコイから本物を探し当てる隠密ヒドゥンで出場者の全てを記憶し、寸分の狂いもなく攻撃したルーファス。四つ首の猟犬との戦いで相手を黒い雷で秒殺したオルガ。実力派ギルドの

名に恥じない、純粋な戦闘能力は間違いなく障害になる。

「…………ラクサス、同じ雷魔法を使う者として、あのオルガっていうのはどう見る？」

「オレが負けるわけねエ。…………が、面倒な勝負になるだろうな」

「だよねえ……………」

ラクサスが負けるとはカイトも微塵も思っていない。だが、黒い雷……即ち、神を屠る魔法、滅神魔法の使い手。普通の魔法は勿論、紛い物とはいえ雷の滅竜魔法を操るラクサスの雷でさえ吸収してしまう相性の悪さ。間違いなく面倒だ。

事前にナツが戦ったという炎の滅神魔道士との話を聞いていなければ対策すら立てられない所である。

どんどんと考えなければいけないことが増えていくとぼやくカイト。その背中をラクサスが叩く。

「別に勝利だけが目的じゃねエ。オレたちの意地を見せてやるのも、また目的のひとつだ」

それに、とラクサスは付け加える。

「明日からはてめえも出るんだ。負ける筈がねえよ」

「……………」期待に添えるよう、頑張るよ」

苦笑いをこぼしてそう答えるカイト。そう、明日からはジェラールに代わりカイトが出場することになっているのだ。何を隠そう件のジェラール、なんとバトルパートにて蛇姫の鱗のジュラに敗北したのだ。

実力で負けた、ならまだ納得がいくのだがミストガンとして参加している以上自身の天体魔法は使えない。だというのに勝負熱の入ったジェラールは天体魔法を行使しようとしたのだ。寸前のところで

外部から見ていたウルティアとメルデイに止められて事なきを得たが、続けていたら確実に影武者だとバレていた。

その咎もあるのか、これ以上の参加は危険だと判断し本来の魔力の捜査へ。カイトはその穴埋めである。

「あー、でも、ステイングとローグには当たりたくないなあ……」

「なんだ、自信ねエのか？」

「カツカツカ、いや、策はあるんだけどねえ。どちらも相性としては最悪。面倒すぎるんだよ」

「あれ？でもカイトの魔法ならいけるんじゃないの？」

近くで耳に入ったのだろう。会話に入ってきたルーシイに苦笑いを返すカイト。ルーシイの言う魔法とは十中八九混沌魔法のことだ。

「まあ、それが一番なんだけどねえ。少なくとも、今大会では使えないよ」

「え、なんで？」

「道化の身バレに繋がるからねえ」

カイトが闇ギルドに絡まれた際に使用する道化としての仮面。巷では義賊と謳われているが、やっていることは間違いなく犯罪行為。フェアリーテイルの一員ということは割れているが、個人を特定するような証拠はなく評議院も見逃している状態。ギルド一人一人全て容疑者に挙げるほど評議院も暇ではなく、愚かでもない。

そんな中、巷の道化がよく使う混沌魔法を披露したとしよう。間違いなく評議院の横槍が入り、良くて牢獄行きは確定である。

それを伝えられたルーシイは納得したような声をあげて虚空を見つめる。夢を壊された虚しさはまだ癒えていないらしい。

「まあ、そんな訳だから大会中は影魔法メインで使うしかないね。それじゃあ2人とも、俺は行くよ」

「どこにだ?」

「決まっているだろう? ウエンディちゃんのお見舞いさ♪」

「待て待て待て」

そのままふらりと何処かへと消えそうなカイトを引き止めるラクサス。そこから首が締まっただけの、迷子になるだけの、他愛もない喧嘩戯れ合を繰り広げる2人。呆れたルーシイがどこかに移動しようとしたその時だった。

「わははははは!!? ヒック!!?」

高笑いとなんか倒れたような音、そして動揺の声。振り返ればそこにはガタイの良い中華風の服を着た男が酒を呷る姿。その隣で倒れているのはフェアリーテイルでも三本指に入る酒豪、カナだ。どうやら飲み比べをして負けたようである。

「あれ? バツカスだ」

「知り合い?」

「顔見知りだよ。四つ首の猟犬の酔いのバツカス。近接戦闘ならエルザにだって負けない実力者さ」

「エルザと互角!?」

それよりもカナの介抱しないとねえ、とラクサスとの喧嘩は一旦中断。互いに引つ張っていた耳を離してカナの元へと。幸いな事にブラジャーを取られただけで他に被害はなく、影から毛布を取り出すと水を飲ませて横向きに寝かせる。件の下手人を見やればエルザに絡んだ後、早々に立ち去ってしまったようだ。

嵐のように去るバツカスを見送り、本当どうなることやらと言葉を溢し2日目へ。

競技パートは「チャリオット戦車」。街を旋回するように並べられた戦車の上を走り抜けるレース勝負だ。戦車は常に動いており、足を滑らせて

落ちてしまえばタイムロスは免れない。

そんな競技に出場したナツ。戦車と戦うとでも思ったのか、意地でも出場を決定。そして火龍サラマンダーが出るのならとガジルが、そして同じく剣咬の虎からステイングが出場。

案の定ナツは乗り物酔いでグロッキーに。そして残る2人も乗り物に酔っていた。どうやら滅竜魔道士は乗り物酔いするものらしい。

「……………もしかしてラクサス、君も弱かったりする？」

「方向音痴に言われたかねエ」

「どっちもどっちね」

ミラジエーンの言葉が刺さる2人だが、それはさておき。

1位はバツカス出場の四つ首の猟犬、続くように大鴉の尻尾、人魚の踵、蛇姫の鱗、青い天馬と続き残るは滅竜魔道士3人。力が出ない中、必死に前に進むナツとガジルにステイングは問いかける。なぜ大会に参加したのだと。

昔のフェアリーテイルならば世間体など気にしない、他の誰がなんと言おうとも我が道を行くギルドではなかったのかと。

「仲間のためだ」

ステイングの問いにそう答えるナツ。

「7年もずっと、オレたちを待っていた……………どんなに苦しくても、悲しくても、バカにされても耐えて耐えて、ギルドを守ってきた」

既に疲労がピークに達したのか四つん這いでも尚前に進むナツ。その執念に嘲笑していた民衆も思わず口を閉じた。

「仲間の為に、オレたちは見せてやるんだ。フェアリーテイルが歩き続けた証を!!? だから前に進むんだ!!?!!?」

そうして漸く得たポイント。2ポイントと1ポイントと上位と比べれば微々たるものだが確実に前に進んだのだ。

続くバトルパートでもエルフマンがバツカス相手に大金星。同じくミラジェーンも青い天馬のリザーブ枠からジェニーに勝利し2日目は無事に終わった。

余談であるが、ジェニーから持ちかけた賭けにより負けた方は週間ソーサリーでヌードを撮ることが決まり、その号は飛ぶように売れたのだという。しかし、ジェニーだけに恥はかせないと一夜が文字通り肌を脱ぎ、購入者を阿鼻叫喚に叩き落としていた。

そうして2日目の夜。本来であればウエンデイの復帰を祝いに外食する予定であったのだが、カイトに急用が入る。下手な内容なら断るところだが、他でもない初代マスターメイビスからの誘い。マカロフからの厳命もあり、誘われたのは街を一望できる高台。器用に落下防止の柵の上を歩くメイビスの隣を、カイトは言葉もなく歩く。

初代マスターという事もあり、それなりの礼節は持っているカイト。だが、言ってしまうえばそれだけだ。敬うことはなく、謙るつもりもない。呼び出された内容はなんだろうかと疑問を持ちながら、メイビスの言葉を待つ。

そして不意に立ち止まるメイビスがようやく口を開いた。

「……………貴方は吸血鬼だと、マカロフから聞きました」

応援席で天真爛漫にはしゃぐなりは潜め、重々しく口を開くメイビス。その表情は幼い見た目からは想像もつかない、冷たく威厳のあるもの。上に立つ者特有のプレッシャーを浴びながらも、お飾りのマスターではないようだと言頭の隅でそんな事を考えてしまう。

そして、質問の内容があまりにも単純過ぎて肩透かしを食らったカイトは肩をすくめながら答えた。

「そうだよ？なんだい、初代マスター様は人外に偏見がおありかな？」
「いいえ、それはありません。ですが……」

言葉を濁すメイビスに興味が失せたのか、ため息を溢して再び進み出すカイト。これ以上共に過ごしても時間の無駄だと判断したのだ。さて、帰り道はどちらだろうかと溢すカイトの背に、メイビスが声をかける。

「……………貴方は、魔王をご存知ですか？」

「魔王？御伽噺に出てくるものだろうか？数多の魔法を操り、幾多の魔物を総べ、許多の財宝を有し、最後には人間に滅ぼされる存在。それがどうしたの？」

「それがもし、実在していたとしたら？」

「カッカッカ♪ジョークにしては下手だねえ。そんなものがいたとしたら、人の世はこれほど繁栄してなかったさ」

過去の出来事を警告などを込めて御伽噺にすることはままある事だ。しかし、魔王が存在していたなど荒唐無稽すぎる話である。それだけに物語の中の魔王は絶大な力を持っているのだ。話に尾緒がついていたのだとしても、である。

「どうせ誰かの妄想の産物に過ぎないものさ。君くらいのお年頃なら空想と現実を混ぜ込んでしまうのかもしれないけど、あまり口に出すのはオススメしないよ」

「むう。私はちゃんと大人です！」

「カッカッカ♪そうだねえ、立派なレディだねえ、うん」

「その子供をあやすような言い方やめてください!!？」

真剣な表情から一転。我慢ならなかったのか柵から飛んだメイビスはカイトの肩に乗るとその頭を両手で叩き始める。けれども幽体である彼女の攻撃は通用せず、無駄だとわかりながらも尚を続ける様

が微笑ましくてカイトはまた笑う。

周りから見ればカイトが1人高笑いするものだからドン引きされ、ただでさえ少なかった人が周囲から完全に消えたのだがそれはさておき。

ようやく落ち着いたのかメイビスはカイトの頭に両手を置くと、その上に自身の顎を乗せる。

「……………もし。もしですよ？魔王の力を手にしたとしたら、貴方はどうしますか？人の世を、滅しますか？」

「例え話にしても突拍子もないねえ」

「真剣にお願いします」

笑って誤魔化そうとするカイトを、メイビスが釘を刺す。その真剣な声に気押されてか、少し言葉を詰まらせたカイトは暫く考えると肩をすくめた。

「別に、何もしないよ。俺にはフェアリーテイルのみんながいれば、それでいいよ。それ以上は望まないよ」

復讐心がないのか、と問われればないとは言い切れない。だが、それよりも優先すべきはフェアリーテイルなのだ。それを聞いたメイビスは「そうですか」とどこか安心したような笑みを浮かべカイトの肩から降りると、そのままカイトとは反対方向、来た道に戻っていく。結局なんだったのだろうかと疑問を浮かべるカイト。帰り道を案内して貰えばよかったのではないかと思いついたのはメイビスが完全に見えなくなった後のことである。

さて、このまま歩いて迷うことは確実。どうやって帰ったものかと物思いにふけながら眼下の景色を眺めているとふと、その背中に声がかけられる。

「ん？カイトか？」

「おや、エルザ。食事は終わったのかい？」

「いや、私は少し用事があったな。お前は？」

「俺は初代様とのお話があったね」

「そうか」

何の用事かはわからない。だが、その表情に漂う後ろめたさを見るに何かあったのだろうと当たりをつけるカイト。それを聞き出すような真似をせず、2人並んで言葉なく街を眺める。

エルザにとっても考えを纏める間があるのはありがたいことだ。何せ、久しぶりに再開したミリアーナ。人魚の踵に所属した彼女は自分たちを騙していたジェラールを憎み、その死を願っているなど。どうすれば良いのかわからず、こうして気晴らしに夜景を観に来ただ。

「……………何も聞かないのだな」

「聞いて欲しいなら聞くよ」

「いや……………今はよそう。お前の方は？」

「別に、取り留めもないたらればの話をしただけさ」

そうして夜景を眺めること暫く、再びその背中に声がかけられる。

「エルザにカイト。どうした、こんなトコで」

「グレイ」

「おや、グレイ。君も宴会に参加しなかったのかな？」

「お前らもか？オレはジュビアとリオンの意味わかんねーやりとりに付き合わされてよ」

「意味がわからん、だと？その場にいなかった私ですら何となく話の内容はわかるぞ」

隣に立つグレイに意味深な視線を送ると、口をへの字に曲げてしま。それが微笑ましくついで、エルザは顔を綻ばせておせっかいを焼

いてしまった。

「良い加減ジュビアの気持ちに気づいているだろう?」

「う……」

「ハッキリしてやらんか」

凶星を突かれたグレイが耳まで真っ赤にしてそっぽを向く。2人の生暖かい視線に気恥ずかしさが増したのか、話題の転換を。

「そ、そーゆーカイトはどうなんだよ?」

「俺かい?」

「そうだな。お前もミラとウエンデイの気持ちは知ってるだろうに」

「カッカッカ♪うん、そうだね。知ってるよ。でも、応えられるわけがないだろう?彼女たちと俺では、あまりにも違いすぎる」

その言葉は散々悩み抜いた末で出した結論なのだろう。その重みが、隠しきれない悲痛が感じられる声であった。「あっ………」と言葉を溢したのはエルザかグレイか。気にしてないよ、と笑顔を貼り付けるカイトはどこか痛々しくも見えた。

「……………夜も遅い。そろそろ宿に戻ろう」

「あ、ああ……………」

「うん、そうだね♪」

重くなった空気に耐えきれないとばかりに切り出したエルザ。それに便乗するようにグレイとカイトも続く。その時だった。眼下の景色の一部、剣咬の虎が宿泊する宿が爆発したのは。

「なんだア!?!?」

「わからん……………だが、行くぞ!」

「あいよ、エルザ」

すわ緊急事態か、もしくはゼレフに似た魔力の持ち主か。現場へと急行する3人だったが、途中でハッピーを抱えたナツと遭遇。話を聞けば件の下手人が本人であることが判明した。

「だーっ!!? あいつら許せねエ!!? ギルドってのは仲間を大事にするモンだろオが!!?」

そうなのである。本日のバトルパート、人魚の踵vs剣咬の虎で敗北した星霊魔導師のユキノ。彼女はその責任を負われギルドを脱退させられたのだ。それを庇う仲間をおらず、数多さえ大衆の前で全裸にされての土下座まで。それがナツは許せなかったらしい。

「はあ………。ナツ、君のその直情的なところは好きだけどさあ。今回ばかりはねえ」

一歩間違えればルール違反の末、出場は取り消し。最悪、参加権すら奪われることになっていたのかもしれないのだ。今回はあちらが不問にすると言うことで事なきを得たがこの幸運が続くとは思えない。

「まあ、気持ちちはわかるけどよ。やり過ぎなんだよ、オメエは」

「じゃあ無視しとけてことかよ!!?」

「そうは言ってねエだろ。試合で見せつけりやいいだけだ」

グレイの説得に納得がいつてないのか、それでもこれ以上暴れたらその機会さえ逃してしまうことはわかったらしく不承不承頷いてはくれた。

これ以上の厄介ごとは勘弁願いたいところだと、空を見上げて愚痴をこぼすカイトであった。

大魔闘演武―⑥

大会3日目

ゲストに評議院の強行検束部隊のラホールを迎えられた競技パート。種目名は伏魔殿^{バンデモニウム}。用意されたステージ内で魔法により具現化したモンスターと戦う競技だ。

100体の魔物にはそれぞれポイントが振られており、参加者は対峙する頭数を宣言。中に入ればその頭数を討伐。その強さに応じたポイントが入る仕組みだ。これをモンスターが全て討伐、もしくは参加者全員がリタイアするまで続けられるこの競技。

そんな競技に参加するのはエルザ、ミリアーナ、ノバーリ、ヒビキ、オーブラ、オルガ、ジユラ、そしてカイトの8人。くじ引きではエルザが1番を引き競技はスタートとなった。

「さて、エルザ。あまり狩り過ぎないでくれよ。俺の分がなくなってしまう」

「いや、悪いが期待には応えられそうにない」

前日の憂鬱そうな面影は一旦捨て、用意された教会ステージへと向かうエルザ。その後ろ姿にまさかと予感を立てて、彼女なら言いかねないと笑う。

「100体全て私が相手する。挑戦権は100だ」

その言葉に参加者は勿論、会場全体が言葉を失う。流石だと笑っているのはカイトを含めたらナツとグレイくらいのものである。

「む、無理ですよ！1人で全滅できるようには設定されていません！」「構わん」

マスコット兼進行役のマトーくんの静止も一蹴。そのままステージへと進んだエルザを待ち受けていたのは宣言通りの100体の魔物の群れ。その中には聖十大魔導士でさえ容易に倒せないとされるSクラスの魔物の姿も。

途中で倒れればAチームのポイントは0。普通ならばプレッシャーに押しつぶされるはずだ。

しかし、流石とも言うべきか。ボロボロになりながらも凜と咲き誇る緋色の花は宣言通り全ての魔物を討伐せしめたのだ。

「し……し……信じられません!!?なんと、たった1人で100体のモンスターを全滅させてしまった……!!?!!?これが7年前最強と言われていたギルドの真の力なのか???」

フェアリーテイルここにあり。そう言わんばかりのエルザの姿に会場が湧く。思わずAチームの面々が駆け寄り称賛を送る中、ふと気づいたエルザがカイトに視線を向けて口を開く。歓声に紛れて音は届かずとも伝わった、「次はお前の番だ」という言葉。

元より手を抜くつもりはないが、ここまで激昂されてしまったのはより一層力を入れねばなるまい。笑みをこぼしながら肩を回すカイトを含め、残る7チームにも順位をつけることに。

といっても、同じ内容をもう一度というわけにもいかず、内容は簡単なゲームだ。マジックパワーファインダー 魔力測定器、通称MPFを使いぶつけた魔力を数値化、その高い順に順位をつけるというわけだ。

「挑戦する順番は先ほどの順番を引き継ぎます、カポ」

「じゃあ私からだね!!?いつくよー、キトウンブラスト!!?」

ミリアーナの腕に巻き付いたチューブ。それを操り螺旋を描きながらMPFにぶつかった。そうして表示されるのは365と言う数字。

これは平均よりも上であり、評議院の部隊であれば部隊長を任せら

れる数値だ。しかし、彼女の強みは拘束した相手の魔法を封じる事であり、やはり純粋な力勝負では分が悪いのだろう。

「やっぱりそこらは反映されないのか。うーん、不利だねえ」

「何を謙遜する、カイト殿」

「おや、ジユラ。久しぶりだねえ、元気だったかい？」

カイトの呟きに反応したのはジユラ。この7年で髭を生やし、貫禄の出た彼を聖十の末席など誰も言えないだろう。

「ああ。遅くなったが、貴殿らの復帰、心より嬉しく思う」

「ありがとう♪にしてもこの競技、君みたいなタイプに有利過ぎやしないかい？」

「そうかもしれん。だが、それで諦める貴殿ではないだろう？」

ジユラの言葉に返答はなく、肩をすくめて笑みをこぼすのみ。不利だと言いつつも自信はあるのだろう。負けてはられないな、とジユラの方にも熱が入った。

そうしているうちに競技は進み、ノバーリ124、ヒビキ95、オーブラ4、そして剣咬の虎のオルガは――

「120mm黒雷砲!!？」

歓声の中オルガの両腕から放たれた黒い雷。叩き出された数値は3825。まさかのミリアーナの10倍である。確かに純粋なパワーでは驚嘆に値するが、既にカイトの眼中にはない。視線は迷いなく次のジユラへと。

「鳴動富嶽!!？」

ジユラの繰り出した、大地からの衝撃波。まるで火山が噴火したか

のような魔力の奔流はMPFを包み、8544という過去最高値を叩き出した。誰もがオルガの勝利を確信した中でのこの数値。盛り上げられないわけがない。

そんな状況の中、トリを飾るのはカイト。周囲からも同情と憐れみの声ばかりが溢れる。それはフェアリーテイルの応援席も例外ではない。

「うーん、カイト兄大丈夫かなあ」

「どーした、ロメオ。何が心配なんだ？」

「だつてさ、父ちゃん。カイト兄だよ？ いつつもエルザ姉に怒られたり、殴られたりしてるカイト兄だよ？ 強いかもしれないけど、厳しくない？」

ロメオの不安に隣のマカオとワカバはあー、と声を漏らす。確かに、普段のギルドの姿しか知らなければカイトは強そうには見えな。戦う時でさえ手数を重視して一撃の重さを二の次にしているカイトには荷が重そうにも見える。

しかし、2人は知っている。カイトの強さを。敵に回す厄介さを。そして、この競技においてジュラにも引けを取らないことを。

「まあ、見てろつて。アイツならやるはずさ」

「でも」

「ロメオ、オメエは知らねエかもしれねエけどな。アイツも間違いなくS級魔導士のひとりだよ」

父親とその友人が言うのなら、と不安を胸にしまつて競技を眺める。舞台の中央で軽薄な笑みを浮かべるカイトは両手を叩くと注目を集めた。

「さて、注目。これなるはフェアリーテイルの復活劇、その一幕。7年間、孤軍奮闘してきた仲間へと送る感謝の一撃」

身振り手振りを大袈裟に、さながら舞台に立つ役者のように堂々と宣言するカイト。思わずそちらに視線を向けた観衆がふと、違和感に気がつく。カイトの足元、その影が広がっているのだ。そこから覗くは紅い瞳。ひとつやふたつでは効かない瞳が影の広がりに合わせて増えていく。

それはかつて魔力を暴走させて発動させる魔法。しかし3ヶ月の特訓、そして7年越しの魔力は一部ではあるが操作を可能としたのだ。

舞台の半分まで広がった影はそこで一度動きを止めると、次の瞬間には再び凝縮しカイトの背後はと盛り上がって形を成す。作り上げられたのはアトラスと名付けられた巨人。山のような大きさはないが、それでも会場と変わらぬ背丈。それがゆっくりとではあるが拳を振り上げ狙いを定める。

「カッカッカ!!? さあて、ご笑覧あれ!!?」

アトラス・インヴェイジョン
巨人の侵攻

カイトの声に合わせて振り下ろされる巨腕。その巨大に見合った呂力はMPFを確実に捉えて、拳が触れるや否やその巨大が全て拳へと収束。地面を陥没させても尚収まらない攻撃はそのまま大地を穿ち、MPFごと地面の底へと消えてしまう。

後に残るは地面に開いた大穴と、その中心に浮かぶ9999という馬鹿げた数字。静寂に包まれる会場はしばらくして状況を飲み込んだのだろう。恭しく礼をするカイトへと爆発的な歓声が浴びせられた。

「な、なんだこのギルドは!!? 競技パート1、2フィニッシュ!!? もう

誰もフェアリーテイルを止められないのか!?!?」

くつくつと、喉奥で声を嚙み殺しながら控室へと戻るカイト。出迎えてくれたラクサスと鉢合うとそのまま2人はハイタッチ。小気味のいい音を響かせると互いの胸に拳を突きつけ合った。

「よくやった」

「カッカッカ♪君に褒めてもらえるとほねえ。頑張ったかいがあったよ♪」

確かに破壊力はある先ほどの魔法。しかし、実戦ではその展開の遅さと攻撃までのインターバルを考えると使えないものである。今回は派手さを重視した為に使ったが目の前のラクサスやエルザ、ミラジエーンなどの実力者の前には発動した瞬間術者本人を叩きに来ると当たりをつけている。

それはともかく、絡みがないためか喋りかけようとはせずに賞賛の手を叩くジュビアと、いつか絶対に倒してやると密かに闘志を燃やすガジルは面白くなさそうにそっぽを向いて、ミラジエーンは賛辞も拍手もなく会場の方へと目を向けていた。

それが気になり声をかけようとするがラクサスから「そつとしておいてやれ」と嗜められてはそうもいかず。

カイトは知るよしもないが、ミラジエーンは控室でカイトの活躍をそれは喜んでいた。思わずはしゃいでしまうくらいには。周りが少し引いてしまう程には。

興奮が少し冷めて周りを見てみればハッキリとわかる温度差。そして人前ではしやぎまくってしまった端なさで恥ずかしくなってしまうのだ。そんな状態でカイトが話しかければどうなるか?まず間違いなく顔を見られたくないから逸らすだろう。それでも尚しつこく迫るカイトに鉄拳が飛ぶのは間違いない。

控室が惨劇の場にならないで済んだ、ラクサスのファインプレーである。

迎えるバトルパート。

蛇姫 vs フェアリーテイル A チームでは戦いを通じて相手方のシエリアと仲を深めたウエンディなど見どころはあったが、何より印象深いのは大鴉の尻尾のアレクセイ vs ラクサスの試合。

アレクセイの正体はギルドマスターであり、ラクサスの実の父であるイワン。幻術を使い 1 対 1 の試合を演出しつつも、裏では参加メンバー全員で行われたラクサスへのリンチ。しかし、ラクサスはそれを返り討ちにし不正の発覚した大鴉の尻尾は大会への出場権を 3 年間剥奪の上失格となったのだ。

終わった後、ラクサスが何かを考え込んでいるようではあったがカイトはそれは気にしないでいた。相談事であるなら伝えてくれるだろうという信頼の元だ。問題は全く別のところである。

「ハア……………」

「……………すまない」

人通りのない路地裏にて。

カイトの目の前で正座して反省の意を示すのはミストガンに扮したジェラル。ラハールという、かつてフェアリーテイルに潜り込んだ評議院にその正体を明かされそうになったのだ。

もしバレた場合犯罪者を匿っていたフェアリーテイルは間違いなく大鴉の尻尾よりも重い罰が下される。それはジェラルにもわかっていだろうに、なぜ評議院も顔を出していた日に会場に近づいたのか。元評議院で今大会の審査員の 1 人、フェアリーテイルと懇意にしているヤジマさんのフォローがなければと思うと背筋が凍る。

お手洗いから戻る途中、迷っていたカイトが現場を目撃し感謝を述べた後、ここへと連れてきたのだ。

「……………それで？今日は評議院が顔を出すことは知っていただろう？それでも尚、顔を出した理由はなにかな？」

「……………本当にすまないと思っっている。だが、あの魔力を、ゼレフの

魔力を感じたのだ」

「それでいてもたってもいられずに登場したと？ハア……君の存在は爆弾だと理解しているのかい？」

カイトの言葉が突き刺さり、覆面の奥でジェラルルがぐももった声を上げる。

「君を匿うことによって犯人隠匿罪。それも個人ではなくギルド全体で行うとなると、社会的信用の回復なんてこの先見込めない。そうならばフェアリーテイルは解散に追い込まれる。例え解散したとしても、元ギルドメンバーだとわかれば世間の目は冷たいだろうねえ」

カイトの言葉ひとつひとつがジェラルルの胸に突き刺さり、遂には倒れ込むジェラルル。想像してしまったのだ。もしあのまま自身の正体がバレた場合を。そしてその後エルザがどうなってしまうのかを。

物乞いか野盗か、それともまさか身体を売ることか。それを幻視してしまったジェラルルの傷は深い。

その姿を見て少しは溜飲が下がったのか鼻を鳴らすと、しゃがみ込んでジェラルルの顔を覗くカイト。

「いいかい？君の依頼には協力する。けれど、もし君の存在がバレた場合は俺は迷いなく君たちを切り捨てる。知らぬ存ぜぬを通して、すべての罪を君たちに被せて事なきを得る。そのくらいの危機感を持つてもらえる？」

確かにジェラルルたちのお陰でナツたちは魔法を取り戻す事ができた。しかし、それはギルドの存続と天秤にかけるほどでもない。カイトの言は本気であるし、迷いなく行こう。その結果ギルドから不審を買おうとも辞さない覚悟だ。

それがわかったのだろう。「……………わかった。今後は、より一層注

意する」と言葉にしたジェラールに満足したのだろう。胡散臭い笑みの仮面を被ったカイトは立ち上がる。

「さて、俺は戻るとしよう。早く戻らないとエルザから大目玉だ♪」
「待ってくれ。その、例の魔力は……………」

「ああ、それかい？残念だけど、見当たらないよ」

その言葉に続くよう、上空からカイトの肩に降り立つ一匹の鴉。大会中に街中を搜索する内の一羽だ。ジェラールの言葉通りならばと方向に目星をつけて探してみたはいいが空振り、その他大勢の魔力に紛れてしまい追う事は不可能だ。

故に気にせず、熱心に搜索することもない。依頼ではあるが、手を抜くことに罪悪感も忌避感もないカイト。そのままジェラールと別れると思いの外話し込んでいたのだろう、夜の帷の落ちた街は昼とはまた別の活気に溢れ、あちらこちらから様々な話題が飛び交う。

中でも耳を引くのは勿論、大魔闘演武の内容。今日はすごかった、明日はどうなる、という話の中でも飛び切り聞こえるのはフェアリーテイルを賞賛する声だ。

見直したや俺は信じていたなどから始まり、ナツやエルザ、ミラジェーンなど個々人に向けた話題まで。張り切ったかいがあるものだと気をよくしたカイト。鼻歌混じりに歩き出したのは宿とは逆方向。無論、意図したものではなくいつもの迷子である。

魔法を使うなり、人に案内してもらおうなりすればいいものを、結局翌朝まで会場周辺をぐるぐると歩き回る羽目になるのであった。

大魔闘演武―⑦

――大会4日目、競技パート海戦。ナバルバトル

舞台中央に設置された宙に浮かぶ球状の水の中。内容は単純に最後まで水中に残っていた者が勝者というもの。

フィールドが水中ということもあり、参加者の9割が女性。となれば身に纏うのは水着しかない。そんな二重の意味で大衆の目を集める競技にて、それは起こった。

【競技終了!!?勝者、ミネルバ!!?剣咬の虎、やはり強し!!?ルーシイ選手……さつきから動いていませんが、大丈夫でしょうか!!?!?】

水中の中で賞賛せよとばかりに腕を広げるのはミネルバ。そしてその手の先、水中から出された腕にはボロボロとなったルーシイの姿。

水中に残された者が2人になった場合に発動した特別ルール。五分以内の決着が着いた場合、負けた方は最下位となるもの。最終的に残ったルーシイを、ミネルバは時間ギリギリまで痛めつけたのだ。

場外に飛ばされようになると魔法で自身の目の前に転移させての殴る蹴るの暴行。さしもの観客も歓声よりも心配の声が強い。そしてそれを観客席で眺めるしかできなかつたカイトは固まっていた。怒るでもなく、心配するでもなく、感情を全て削ぎ落とした虚無の表情。しかし、視線はミネルバに注がれており微動だにしない。戦うのであれば怪我はする。それはカイトも承知の上であるし、そも心配することなど相手に失礼だ。

だが、今回の必要以上の、ただ自身の実力を誇示するためだけの暴力。それにギルドの誰かが巻き込まれたとなると話は別。星霊を呼ぶ鍵も奪われ、為す術のないルーシイに行つて良いことではない。手摺を握っていた手に力が入り、音を立てて変形する。今にでも飛

び出して報復でもしかねないカイトを止めたのは、他でもないミラジエーンだった。

「カイト。他のみんなは行ったわよ。私たちもルーシイのところへ行きましょう」

「ミラ、ちゃん……………」

「気持ちわかるわ。けど、今はルーシイの無事よ」

カイトの肩に置かれたミラジエーンの手。微かに震えるそれから怒りが伝わってくる。しかし、このまま感情任せに報復に出ることは不可能。現状出来ることと言えばルーシイの治療に参加することくらいだ。

「……………うん、そうだね。ありがとう」

手摺から手を離してミラジエーンの手にそつと乗せる。胡散臭いと言われる笑みの仮面を被り、怒りは感情の奥底へ。そうして向かった先は会場に備えてある医務室。カイトたちが到着した時には既に粗方の治療はウエンデイとシエリアの力により終わっており、今は奪われた鍵を大事に抱き抱えて眠っている。

「剣咬の虎……………」

「気に入らねえな」

大会だから仕方がない。

そんな楽観的な思考は誰も持っていない。復讐とまでは行かないが、それでもやり返さないと気が済まないと皆が闘志を燃やす中、扉から現れたのはマカロフ。

「AチームBチーム全員集まっとったか。丁度よかった」

「マスター」

現れたマカロフは少し不安を交えながら言葉を発する。両チームの合併、再編成を行うと。

曰く、大会運営委員会より大鴉の尻尾が抜け奇数となった今大会。それでは競技が上手く回らずその為の措置らしい。ポイントはAチームの35ポイントが引き継がれるとのこと。Bチームよりも低い点数なのは気になるが、この後の競技や試合で全勝すれば逆転の目はあるのだ。

そうして選出されたのはナツ、グレイ、エルザ、ラクサス、ガジルの5人。鼻肩目なしに優勝を狙えるメンバーである。そうしてカイトとは言うのと。

「さてさて、どうなることやら」

医務室にて、ルーシイの眠るベットの近くの椅子に腰掛けていた。試合は魔法で作り出した鴉の視界共有で観戦できるとはいえ、本音は生でみたい。しかし、それができない理由はある。

大会2日目、人攫いが発生したためである。下手人である傭兵はナツの手により即逮捕。攫われかけたウエンデイ、シャルル、ボーリシユカにも別状はない。下手人の言によれば狙いは医務室にいた少女。

初日以降、医務室を利用した少女といえはウエンデイとルーシイ。即ち、また狙われる可能性があるのだ。その対策としての待機。仮に再び人攫いがあるものなら捕えるだけではすまさない腹づもりである。

「しつつかし、マカロフのやつも物好きだね。アンタみたいな厄種まだ手元に置いてとくなんて」

「カッカカッカ♪心外だねえ、ボーリシユカさん。どちらかと言えば俺はストッパー役だよ♪」

「他と比べればってだけで、十分暴れてるだろうに」

医務室の奥で鍋を掻き回すポーリシユカ。独特な薬草の匂いが充満するが特に気にすることなく、カラカラと笑うばかりのカイトに眉を顰める。

元より他人が嫌いなポーリシユカにとつて、胡散臭いカイトも当然その対象に入っている。今も片目を瞑り笑みを深めるカイトへの苛立ちを薬草を混ぜるボウルにぶつけていた。荒々しい手つきながらもその実中身は一滴たりとも溢れていないのは流石の一言である。

(ウエンデイも、なんでこんなのに惚れたのかね)

育て親のグランディーネと同じ名前のせいなのか、それとも他の人間よりも可愛げがあるせいなのか、認めようとはしないがポーリシユカはウエンデイを気にかけている。

そのウエンデイが事カイトを思っていることなど火を見るよりも明らか。やめておくと遠回しに言っても聞かない頑固さは誰に似たのやら。聞く耳を持たないウエンデイにいくら言葉を重ねても最早意味はないと悟り、せめて良い終わりを迎えられたらと常々思う。

「……………アンタ、ウエンデイを泣かせたら承知しないからね」

「ん？どうしたんだい、突然？まあ、彼女を泣かせるような事はしないさ。女の子の涙には弱いからねえ♪」

どこで学んだ台詞やら。絶対に思っていないだろうと苦虫を噛み潰したような顔をしてポーリシユカは薬草を練る。それを尻目にカイトは視界を共有した先を見てほくそ笑む。

本日のバトルパートはタッグマッチ。各チーム2人を選出して戦う試合だ。青い天馬の秘密兵器、大会初日からいたウサギのぬいぐるみの中身が一夜そっくりのエクシードニチャであったり、人魚の踵と蛇姫の鱗が激戦の末にドロ―試合だったり見どころはあるが、何より目を引くのはやはりフェアリーテイル対剣咬の虎。それもナツ、ガ

ジルvsステイング、ローグという全員が滅竜魔導士という試合だ。会場の床を打ち抜く程の激しい試合を制したのはフェアリーテイル。それも途中ガジルを彼方へと追いやったナツの勝利である。くつくつと喉奥で笑い喜びを隠しきれないカイト。その声が耳障りなのか、少しうなされながらルーシイが覚醒する。

「う、うーん……………なに?どうしたの?」

「おや、ルーシイ。お目覚めかい?丁度いいタイミングだね。今、剣咬の虎と決着がついたところだよ♪」

「ホント!??いたっ!!?!?」

「怪我人が騒ぐんじゃないよ!!?!?」

ベッドから飛び起きようとしたルーシイ。しかし傷は消したとはいえまだダメージは残っていたのだろう、肩を抑えて蹲る。ポーリシユカの怒りが飛ぶが早く結果をとルーシイの視線が告げている。

「安心しなよ。ナツたちの勝ちだよ♪お陰でフェアリーテイルが現在1位だ♪」

「はあ……………よかつたあ」

安堵からまたベッドへと身体を沈めるルーシイに笑いかけ、カイトは再度片目を瞑る。ゼレフに似た魔力を持つ者の搜索だ。大会も残り1日。今日を逃せば後はない。

けれどその姿はどこにもなし。魔力の痕跡すらも見当たらない。

(……………いや、見当たらないんじゃない。どこかに流れている)

会場の運営に使われた魔力、そして魔導士たちが使用した魔法の残滓。通常霧散するはずのそれらが僅かではあるが指向性を持ってどこかへと流れている。

ゼレフの魔力はそれに紛れてしまっているのだ。これでは近づか

ない限り気づけない。まずはその流れの原因をと確かめようとした時だった。

「ルーちゃん!!?」

「レビィちゃん!!?」

扉が壊れるかと思うほどに開かれた。その先にいたのはレビィ含めたチームシャドウギアだ。どうやら勝利の喜びを分かち合いに来たらしい。すぐさまルーシィに駆け寄り話出すレビィたちを微笑ましく思いつつも嘆息を。

すわ襲撃かと思い視覚共有を切ってしまったのだ。再度視界を繋いでも魔力の流れは捉えられない。これは諦めるべきだろうと搜索を切り上げるカイト。

「それで、どうしたのかな?まさかお話だけしに来たわけじゃないだろう?」

「あ、そうだった!これから今日の祝賀会があるんだけど……」

「はあ………いいよ、行きな」

不安気にポーリシユカを見つめるルーシィとレビィ。それに許可を出せば途端にぱあつと花が咲くような笑みを浮かべる。そも、ウエンデイとシエリアの働きにより傷は殆ど塞がっているのだ。

「言っておくけど、あんまりはしやぎすぎるんじゃないよ。あと、食後に薬を飲むこと。わかつたらさっさと出ていきな」

「はい!ありがとうございます!」

失った血を補充するための薬を渡すと手を払って出ていくように促すポーリシユカ。冷たい態度ではあるが彼女の人間嫌いは周知の事実。それにさして気にすることなく礼を言うと言務室を後にするルーシィたち。

しかし医務室で後片付けをするポーリシユカを扉近くのカイトが見つめる。

「……………」

「なんだい、アンタもさっさと出ていきな」

「いやあ、なんだかんだで優しいねえと思つてね」

「出てけエ!!?」

ポーリシユカの怒声にカラカラと笑い扉の向こうへと姿を消すカイト。一頻り笑った後はルーシイたちの案内の元宿へ。すっかり陽も落ちて始められた宴に参加して騒ぐ皆を眺める。

さて、毎夜のことながら騒がしいこの宴。最初は楽しんでいたカイトだったがしかし、途中からどこか物足りなさを感じ首を捻るカイト。

「どーしたの、師匠?」

「ああ、リサーナ。いやねえ、なんだか物足りないような、いつもより少しだけおとなしめな宴会のような……………」

座っていたカイトの肩から覗き込むようにして現れたりリサーナ。カイトの言う通り全体を見渡すが、むしろ暫定一位の宴会というだけあって普段より大騒ぎしている気がする。

「そう?向こうでマスターやマカオたちが次々酒瓶開けてるけど?」

「いつものことだろう?」

「カナは酒樽20個目に突入したよ?」

「それもいつものことだねえ」

「お酒の入ったフリードがエバーやビックスロウにラクサスを熱弁してるよ?」

「素面でもやってるだろう?」

「改めて聞くと頭が痛くなる現状だな」

「おや、エルザ」

近くで聞いていたのだろう。現れたエルザは言葉通り頭を抑えているが、反対側の手にはしっかりとワンホールのケーキが乗せられている。はしゃいでいるのは君もだろうか？と茶々を入れれば必ず拳が来るので黙ってはいるが。

さしものエルザもこの雰囲気には水を差すような真似はしないのか、それよりもと告げカイトに問いかける。

「カイト、ナツたちは見なかったか？」

「……………あー、そうだ。ナツたちがいないんだ」

漸く合点がいったとばかりに手を叩くカイト。よく見れば確かにナツを初めとしたハツピー、ルーシイ、グレイ、ウエンデイ、シャルル、ガジル、リリーがこの場にいない。

攫われたなどという線はこのメンツの場合除外してもいいだろう。宴そつちのけでどこかに遊びに行ったとも考えづらい。さて、ではどこに姿を消したのか。

「うーん、見てないねえ。探すかい？」

「頼めるか？またどこぞで暴れられてはたまらん」

「つい昨日もプール壊したばかりだもんね」

リサーナの言葉にカイトは肩を落とす。

何せ自身が迷っている間にギルドの殆どのメンバーはフィオーレ有数のサマーレジャースポットに遊びに出かけていたのだ。誘われなかったシヨックと勢いのあまり破壊した施設の修繕費。それらを思い出してカイトは落ち込んだ。

ただでさえ借金の多いギルドだ。また被害額を増やされては溜まったものではないと魔法を発動。しかし、目的の人物はすぐに見つかった。

「大変だアアアア!!?」

慌てた様子のグレイとハッピーに始まり、簀巻きにされて運ばれるナツ。そしてナツを運ぶガジル。続くウエンデイも心配そうにしており、シャルルとリリーもどこか心あらず。

なんだなんだと視線が集まる中、息を整えたグレイが言葉を発する。

「ルーシイが、王国に捕らわれた!!?!!?」

「……………はい?」

かくして祭りをカモフラージュに進められていた計画は、こうして日の目を見ることとなったのだった。

大魔闘演武―⑧

大魔闘演武5日目。一日の休憩を挟んだ後に行われる最終決戦。それを目前としたフェアリーテイルだが、その心中は穏やかではない。なにせルーシイが囚われてしまったのだから。

相手は他でもない王国。気安く喧嘩を売れる相手ではないのだ。大会参加のメンバーに加え、ルーシイたちと行動を共にしていたグレイたち。そしてメイビスやマカロフなど主要メンバーを加えた作戦会議は困窮していた。

「さて、まずは状況を整理しよう」

宿から借りたホワイトボードに情報を書き込み、皆の前で司会を務めるのはカイト。いつになく真剣な様子のカイトというのは違和感を覚えるが、それだけ怒りを溜め込んでいることは周知の事実。暴走しないための監視として皆の目の届く場所に置かせているのだ。

余談ではあるが、ルーシイを助かるためにひとり王城へと強行突破しようとしたナツは柱に括り付けられた上猿轡をされ、会議には実質不参加である。

「まず、ガジルの案内の元ナツ、ウエンディちゃんに加え、グレイ、ルーシイ、そしてハッピーたちで会場の地下深く、大量のドラゴンの遺骨が埋まっている場所に行った。それは間違いないね？」

「ああ。そこでチビ助の魔法、ミルキーウェイでジルコニスつードラゴンと対話した」

「本人じゃなくて魂とか思念の類ですけど」

カイトの言葉に頷くのはガジル、そして補足するのはウエンディ。4日目の昨日、ナツの手によりトロロッコに乗って何処かへと消えていたガジル。その先にあったのは何体ものドラゴンの遺骨が眠る墓所だった。何か関係があるやもと滅竜魔導士であるナツとウエンディ、

そして野次馬としてグレイとルーシイ、ハッピー、シャルル、リリーも連れてその場へと赴いたのだ。

ここまでは間違いはないのだろうとホワイトボードに書かれたデフォルメされた墓場とナツたちに丸をつける。

「そしてそのドラゴンから大魔闘演武の元となった竜王祭、そしてその祭りの主役であり、開催のきっかけとなったアキノロギアの正体を知ったと」

ウエンデイの魔法ミルキーウェイ。それは死んだ魂と会話する魔法。それによってジルコニスから聞いた話ではかつて大陸を支配していたドラゴンたち。人間などエサ程度の扱いしかなかった時代。しかし、人間とも手を結ぶべきだというドラゴンたちと戦いになり、その末に人間に与えられたのが滅竜魔法。

それによって融和派の勝ちは見えてきたが、ここで誤算がひとつ。ドラゴンは人間の残虐性を見逃していたのだ。

敵のドラゴンを滅ぼし、味方のドラゴンさえも手にかけ、その力に酔いしれて数多のドラゴンの血を浴びた末に生まれたアキノロギア。

人の身を脱ぎ捨てドラゴンとなった今も暴虐を尽くしているのだから、その精神にはある意味感服してしまう。

「滅竜魔法を使い過ぎればドラゴンとなってしまふ。これはかなり有用であり厳しい情報だけど、今は横に置いておこう。ジルコニスとの会話が終わった後に現れたのはクロツカス駐屯部隊桜花騎士団の团长アルカデオス、そして元剣咬の虎の星霊魔導士のユキノ。そして王城に案内した彼等からエクリプス計画の話聞いたと」

「そのエクリプス計画ってのはなんだ？」

「過去と現在を行き来する魔法、つーか魔導具だな。それを使って400年前に渡って不死になる前のゼレフを殺すつもりだったらしい」

ラクサスの問いにグレイがそう答えればカイトがホワイトボード

に描かれた門のような絵の横に注釈を継ぎ足していく。

「付け加えれば、大魔闘演武はそのエクリプスを起動させる為に開催されていたそうよ。使われた魔力を吸収して備蓄してるわ」

「ナツがそこで魔法を使おうとしたら身体の魔力ごと吸収されちゃったんだ!」

「王城から会場までの距離があっても吸収していたんだ。その近場で魔法を使えば、ということらしい」

シャルル、ハッピー、リリーの言葉も付け加え、そしてその下に矢印を付け加える。

「このエクリプスには魔力の他に黄道十二門の鍵、そして日蝕という条件が必要。そのためにルーシイの力を借りたかったけど、大臣を含めた過去改編反対派によってユキノとルーシイは投獄。返して欲しければ優勝して王に直訴しろって話だけど……ここまでで質問あるかな?」

「ひとついいか?」

「なんだい、エルザ」

「絵が可愛いすぎやしないか?」

エルザの指摘した通り、ホワイトボードに描かれた絵はどれもファンシーにデフォルメされており、幼児向けの絵本ならまだしもこの場では悪ふざけしているようにしか見えない。

「少しは和むだろう?」と本人なりの配慮であり、至って真剣である。そこがわかっていいるからこそ深くツツコむことはできず続けて質問を投げかける。

「私たちが優勝したとして、ルーシイを釈放する確率はどのくらいだ?」

「五分五分………つていいいたところだけど、こればかりはわからない

いねえ。何せ国が絡む一大プロジェクト。一度成功したら二度三度がないとは限らない。そうなるならルーシイはギルドよりも国に所属させた方が都合がいいよ」

「でも、国防大臣さんは反対してましたよ？」

「確かに発言は無視できないだろうけど、最終的な決定権は国王さま。野心に囚われて、なんてこともあるさ」

「いや、それはないじやろう」

ウエンディからの質問にそう返したカイトの言葉を、マカロフが否定する。

「国王様の民を憂う気持ちは本物じゃ。いままでの政策がそれを示しておる」

「なら、ルーシイはこのままでいいってことかよ？」

「そうは言つとらんよ、ラクサス。優勝して直談判すれば聞き入れては貰えるという話じゃ。じゃが、保険は打つべきじやろう」

そうして決まる、大会組と王城侵入組に別れる二正面作戦。大会に優勝すればよしではあるが万が一それを逃した場合、ルーシイを救出するメンバーを選定するが中々上手くいかない。

「オイ、オメエなら王城内を探れるンじゃねーか？」

「無理だねえ。国の中枢部ともなると魔法用の結界が貼つてある。無理に侵入すれば一発でアウトだよ」

「それに警備の兵士の数も強化されてるわ。夜ならまだしも昼に侵入するとなると……………」

「メンツはどうする？大会メンバーは出れねエとして、他となると……………」

「隠密に徹した者はいないな」

「カイトさん本人なら侵入できるんじゃないですか？」

「いや、迷って出て来れなくなるのがオチだ」

「「あー」」

「カツカツカ。誰もフォローしてくれないのね」

「むー！？？むがー！？？」

「あんまり暴れたらまた怒られるよ、ナツ」

あーでもない、こーでもないと案を出し合うが立ち塞がる数々の壁。頭を悩ませる一同だったが、そこに一つの声が響き渡る。

「ー！ー決まりました」

喧騒の中、透き通る様な声に視線が集まる。その先にいたのはメイビス。普段の緩い雰囲気は形を顰め、数々の視線をもともせず言葉が続ける。

「今回の二正面作戦。そのメンバーと作戦、それを今から伝えます」

そうして告げられたメイビスの作戦。反対意見も出ず、今まで出ている案の中でも勝率が高いということで採用されたのだった。



大魔闘演武5日目。最終日となる本日に競技パートはなく、出場ギルド全メンバーでの総当たり戦。舞台はクロツカスの街全域。

街を搜索し鉢合わせてしまえばバトル開始。倒せば1ポイント、各チームの決められたリーダーならば5ポイントが換算され、最終的にポイントが1番高いチームが優勝だ。

さて、と指定されたスタート位置に到着したカイトが身体をほぐしながら後ろを振り返る。そこにいるのはラクサス、エルザ、グレイ、ガジルの4人。それぞれ気合いは充分らしく、目には闘志が燃えている。

それを尻目にちらりと王城の方に視線を向ける。今頃はルーシイ

救出舞台としてナツ、ウエンデイ、ミラージェーン、ハッピー、リリー、シャルルたちが潜入を開始する頃合いだ。

これは負けてはられないと笑みを浮かべるとラクサスに肩を叩かれる。

「カイト、わかってんな？」

「カツカツカト♪勿論だよ、ラクサス。君の方こそ、作戦は頭に入っているんだらうね？」

「たりめエだ」

互いに笑みを返すと拳の甲をぶつける。

「皆、準備はいいな？行くぞ!!？」

「!!おお!!?!!」

エルザの号令を合図に、開始のドラが街全体に響き渡る。そうして動き出す各ギルドの面々。単独行動を行う者もいれば、ツーマンセル、スリーマンセルで動く組も。誰もが動き出し、ポイントを狙う中フェアリーテイルの面々は――

『あーっつと、これは……?!!?ど、どうしたのでしょうか!!?フェアリーテイル、全員目を閉じたまま動かないぞーっつ!!?!!?』

実況のチャパティの言葉通り、フェアリーテイルは動き出さずその場で待機しているだけ。一位の座に甘んじての行動かと野次が飛ぶが、そんなものお構いなしに状況は進む。

既に蛇姫の面々は四つ首の仔犬を潰しにかかり順位を上げ、天馬も人魚を倒して順位を上げる。そして仔犬のバツカスもステイングに倒され剣咬の虎が一位の座を取り戻したのだ。

目まぐるしく動く点数と順位、そしてようやくフェアリーテイルが

動き出す。

「妖精の星作戦、発動!!?」

「了解!!?」

観客席のメイビスの声を合図に、散開して動き出すフェアリーティル。だが、それを邪魔するのが1人。

「私の索敵能力を侮ってもらっては困るね。まとめて片付けて差し上げよう」

その場から動かずとも全ての状況を把握していた剣咬の虎のルーファス。

「メモリーメイク記憶造形、星降ル夜ニ」

造られたのは星のような瞬きを煌めかせる魔法。一度上空へと飛んだ魔法は分裂し標的へと降り注ぐ。しかし、ルーファスの行動は既に読まれていた。

「上空の光を目視してから2秒以内に緊急回避で躲せます」

メイビスの言葉通り、ルーファスの攻撃を躲す面々。しかし、その中で1人ラクサスだけは攻撃を受けきる。何を隠そうこの魔法、属性は雷。雷の滅竜魔導士であるラクサスには効果がないのだ。

「何!??受け止めた!??」

「敵は動揺し思考を乱します。この思考の乱れによりルーファスは68%の確率で我々への接近を試みます。32%の確率で現位置にて待機……しかし、その場合も私たちの作戦にさほどの影響はありません」

メイビスの読み通りルーファスはそこから動き出し、その後も作戦通りに接敵、順調にポイントを稼いでいた。その天才的な戦略眼をもって数々の戦を勝利にもたらした妖精軍師の異名を持つメイビスの真骨頂。

同じく作戦を練る事を得意とするカイトではあるが、メイビスと違い自身を軸とした作戦を得意としており、このように全体を見渡して仲間を使う様な戦闘には向いていない。

そして、通常であれば方向音痴を発揮して作戦を乱すカイトではあるが、それさえもメイビスは作戦に組み込み利用する。

「お、おい、あれ……………」

観客の1人が違和感に気がつく。街の各所が映し出されている中、大通りを悠々と歩くカイトの姿。しかし、その姿は同時に離れた建物の上にも。路地裏に、広場に、時計塔に。気がつけば幾人ものカイトが王都を練り歩いていた。

『おおーっと、これはどう言うことだ!!?カイト選手が沢山いるぞ!!』

『?』

『ヒドウン隠密みたいカポ!!?』

『実際、そのつもりなんじゃろうて』

実況のチャパテイ、ゲストのマトーくん、解説のヤジマの言う通り、そこかしこに出現した複数のカイト。その正体は影で作り出した偽物だ。

「ケツ、こんなモン!!?」

目障りだとばかりに剣咬の虎のオルガが近くにいたカイトへと攻撃を仕掛ける。しかしそれを認識した瞬間、カイトは無数の蝶へと姿

を帰るとオルガを取り囲み爆発を起こす。

「グオツ!??ヤロウ……ッ!!?」

大量の分散のためか威力は虚仮威し程度。それでも音と光にやられて怒りを顕にするオルガ。絶対に本体を叩いてやると息巻いて更なる突撃を。

「彼の役割は探索と攪乱。極度の方向音痴故に作戦には向きませんが、こと工作をはじめとした手数ของ多きは強みです。彼には他のチームの注意を集めて頂き、そして――」

「ちよつとちよつとちよつと!!?なによアレエ!??」

「初代の言った通りだな。恐ろしい方だ」

「げーっ!!?エルザ!!?」

カイトの爆破に巻き込まれてはたまらないと逃げ出したジェニーの前に現れたエルザ。呆気なく撃破したエルザは作戦通り次のエリアへ。カイトの嫌がらせの攻撃とメイビスの作戦、それによってフェアリーテイルは再び一位へと輝くのであった。



多数の偽物に紛れ込むように、カイトは街を練り歩く。その方向音痴は健在であり、やはりというべきか迷子である。しかし、今回はいくら迷おうとも問題はない。

街に繰り出す偽物はマーカーであり、予定通りの相手を見つければ即強襲が可能なのだ。流星は初代様と言うべきか、今のところは作戦は順調。偽物を追いかけて回すオルガも順調に誘導できている。鼻歌でも歌い出したい気持ちで足取り軽く歩くカイト。その背後を背後から強襲する影ひとつ。

「天神てんじんの北風ホラス!!？」

両手に黒い風を纏って現れたのはシエリア。それを視認することなく横に躲すと入れ替わるようにシエリアの背後に立つ。

「おや？おやおや？君はシエリアだね。そうそう、ウエンディちゃんと友達になったんだって？同じくらいの子の友達なんていなかったからありがたいよ♪」

「天神との怒号ごう!!？」

会話をする気がないのか、立て続けに放たれるシエリアの滅神魔法。なるほど、神を殺す為の魔法というだけありその威力は並の魔導士の比ではない。しかし、当たらなければどうということもなく、ふわりと跳躍したカイトは王都を流れる川の橋の手すりの上に着地すると頭を捻る。

試合だからこそ意気込んでいるのならわかる。だが、今の魔法にこめられていたのは嫌悪感にも似た否定の感情。はて、彼女に何かした覚えはないのだがと頭を悩ませる。

そんなふざけた様子のカイトにシエリアの怒りは膨れ上がる。

「っ!!？なんでそんなにふざけてるの!!？」

「おいおい、いきなりだねえ。ふざけてなんかいないよ。俺は俺なりに精一杯やらせてもらっているさ」

尚もおどける様な口調のカイトに、シエリアはキレた。別にカイトに何かされたわけではない。けれど、そんな調子のカイトだからこそ頭に来るものがある。

「そんなので、ウエンディに愛される資格があると思ってるの!!？」

シエリアの怒りはそこだ。従姉妹のシエリーの影響もあるのか、人

一倍愛というものを尊く思う彼女。初めてできた同世代の友達、ウエンデイがカイトを愛していることは知っている。本人に直接言わなくとも雰囲気でわかるものだ。

けれど、目の前の男はどうだ。愛を向けられているというのに応える気もなく、飄々と立ち会い、のらりくらりと躲しているだけだ。それがシエリアには許せない。愛される資格がないときえ思ってしまう。

「ウエンデイの愛を汚すのなら、私はあなたを許さない!!? あなたはウエンデイを愛してるの!?!? 答えて!!?」

両手に纏う黒い風を推進力に突っ込むシエリア。勢いそのまま繰り出した攻撃はカイトのいた手すりを破壊するが、カイトはまたしても跳躍して躲す。

「こんな大観衆の中、愛の告白しろだなんて中々の羞恥プレイだねえ」

そんな軽口を叩きながら偽物たちの視界から状況を確認。作戦通り本体を探り当てるルーファスはグレイが撃破。オルガも誘導通りラクサスの元へ。ガジルもローグと相対していた。

しかし相方のステイングの姿はどこにも見えず、エルザが相手するはずだったミネルバは人魚のカグラも加わり乱戦へ。その他にもラクサスとオルガの前に現れたジュラなど作戦が崩れ始めている。ここまで崩れてしまつては作戦もクソもない。立て直しも不可能だ。

最早残っているのは実力者ばかり。嫌がらせ目的の偽物は意味をなさないだろうと観察のための一部を残してその姿を消す。さて、このまま予定通りシエリアを撃破しても良いのだが相手はウエンデイの初めての友達。攻撃するのは気が引けると完全にシエリアを舐め切っていた。

「ツ!!? はああああ!!?!!?」

暴風が渦巻き、嵐のような連続攻撃。それさえも魔法を繰り返すどころか躲されてしまうだけ。それが頭に来て尚更攻撃を繰り返すシエリア。

さて、一見無傷のようなカイトではあるが、実のところ躲し切れていない攻撃はあり喰らってはいる。しかし、そのダメージは微々たるもの。回復するまでもない。

竜が竜を殺す為に授けられたのが滅竜魔法。ならば滅神魔法は神が神を殺すための魔法なのか？いや、違う。神の敵は悪魔であり、滅神魔法は悪魔の魔法だ。故に悪魔であるカイトには効果は薄いらしい。

「こんのおおおお!!？」

(さてさて、どう動くべきかねえ)

シエリアの猛攻をいなしながら、カイトは思考を深めるのであった。